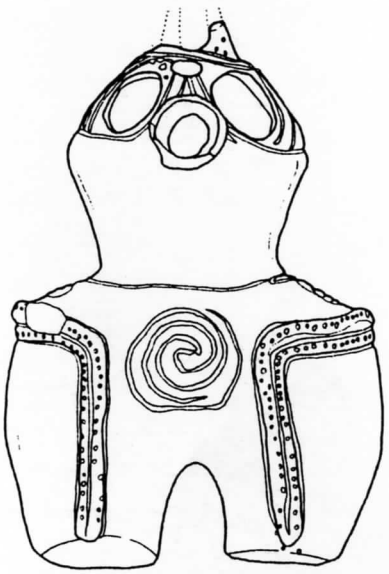
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第41集

金生遺跡II（縄文時代編）

県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書



1989. 3

山梨県教育委員会

金生遺跡II（縄文時代編）

1989. 3

金生遺跡II（縄文時代編）

1989. 3

『金生遺跡Ⅱ』　正誤表

訂正箇所		誤	正
ページ	行		
18	7	土偶1	土偶8
18	37	5点	4点
28	3	歯状文	羊歯状文
29	6	土製耳飾り2	3
29	28	耳飾り6個	5個
34	19	土製耳飾り2点	4点
50	5	11は浅鉢形土器で	12
50	7	12も浅鉢形土器の	11
51	28	土製耳飾り3点、土偶1点	8点、2点
68		20A02	30A02
72	22	出土土器（第49図））	（第49図）（第53図）
78	30	耳飾り7個	18個
92	10	23・24には	27・28には
104	4	第4号配石の	第5号配石
107	9	25は	13
113	5	土製耳飾り2個	3個
116	32	第8号土壙（第87図）	（第48図）
116	34	第28号住居址	第29号住居址
119	1	（第89図～第86図）	第96図
247	6	このb種から	c種
257	33	29は	49は
268	15	住居数も5軒	4軒
268	17	5軒の住居	4軒
図版3の5		第5号住居址	第3号住居址

序

本報告書は、県営圃場整備事業に先立ち発掘調査のおこなわれた、山梨県北巨摩郡大泉村谷戸地内の金生遺跡のうち、縄文時代の遺構・遺物についての成果をまとめたものであります。

金生遺跡は縄文時代と中世との主に二つの時期を中心とした遺跡でありますが、中世遺構に関しましては昨年度に金生遺跡Ⅰ(中世編)として刊行したところであり、今回の縄文時代編はそれに続くものであります。

金生遺跡の縄文地区につきましては、大規模な配石遺構をともなった後・晩期の集落遺跡として調査中からも注目の的となり、関係機関の努力のもとに遺跡の一部3,400㎡は工事から除外され保存措置が図られて来たものであります。その後1983年2月、国史跡に指定されましたが、さらに翌1983年度には大泉村によりこの区域の公有地化が行われ、現在整備事業が始まっているところであります。

発掘調査では後・晩期を中心に40軒を越える住居を始めとして、石棺墓や各種の石組から構成された大規模な配石遺構が発見されました。この配石については、焼けた人骨が出土するとともに立石や石棒といった特徴的な遺物が多いことから、特定の墓を中心としたきわめて祭祀性の強い遺構とも考えております。さらに他の箇所からは、石棺墓や土壙群が発見されており、全体としては居住区・墓域・祭祀域・広場といった各種の場からなる縄文時代晩期集落の姿を窺うことができます。また200点を越える土偶や多くの土製耳飾り、さらには石剣・石棒類を含めた豊富な出土品も認められました。特に土壙出土の115個体ものイノシシ幼獣の下顎骨からは、動物飼育や祭祀の在り方にまで波及する重要な問題が提起されております。

これまで山梨県において縄文時代後期から晩期の遺跡はあまり知られておりませんでしたが、今回の金生遺跡の発見以後、八ケ岳山麓を中心に貴重な発見が相次ぎ、この地域にあっても途切れることなく縄文集落が営まれてきたことが確認されております。今後縄文文化の研究にこれら金生遺跡の成果がご活用戴けるならば、これにまさる喜びはありません。

なお、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで、多くの皆様方のご協力を戴いてきたところであります。特に調査にあたっては遺跡の保存問題も含め、地元大泉村を始めとして多くの機関・諸氏からご指導・ご協力を賜りました。末筆ながら厚く御礼申し上げる次第であります。

1989年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯貝正義

例　　言

1　本書は、県営圃場整備事業に先立ち山梨県教育委員会文化課が実施した、北巨摩郡大泉村谷戸字金生に所在する金生遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、1980年（昭和55年）５月８日から同年12月３日にわたり実施された。整理・報告書作成については、山梨県埋蔵文化財センターが行った。

3　金生遺跡は、縄文時代後・晩期を中心とした集落址であるＡ区と、その南に位置する中世遺構の発見されたＢ区とに区別されるが、本書はＡ区の調査成果についてまとめた「縄文時代編」の報告書である。

Ｂ区については、金生遺跡Ⅰ（中世編）として、1987年度に刊行されている。

4　本書の執筆は新津　健が行なったが、Ⅳ章～Ⅵ章については分析を依頼した次の方々に執筆いただいた。

Ⅳ章　梶原　洋氏　（石器使用痕）

Ⅴ章　西宮克彦氏　（石材と産地）

Ⅵ章　金子浩昌氏　（獣骨）

編集は新津　健・八巻與志夫が行なった。

5　本遺跡から出土した遺物および写真・図面等は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してあるが、遺物の一部については山梨県立考古博物館と大泉村歴史民俗資料館に展示されている。

6　石器・石製品については、帝京大学山梨文化財研究所河西学氏に石質鑑定をお願いした。

7　写真撮影について、図版32の土偶は日本写真家協会会員塚原明生氏によるものである。

8　発掘調査および報告書作成にあたっては、関係諸機関・地元・多くの研究者の方々から御指導・御協力を賜った。厚く感謝申し上げる。

凡　　例

1　遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。

［遺構］全体図1/200、住居址1/60、配石遺構1/60・1/100、石組遺構1/60、集石遺構1/60、土壙1/60

［遺物］土器実測図1/4、土器拓本1/3、土製品1/2・1/3、石器1/1.5・1/2・1/3・1/6、石製品1/1.5・1/3・1/5

2　遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は、標高を表す。

3　遺構平面図中の特殊遺物については次のとおり表現した。

●土製耳飾、■土偶、◎土製品（勾玉・土版・土錘・ミニチュア土器）、★硬玉製垂飾品、▲石剣

4　住居址内の柱穴等の深度については、第Ⅲ章第１節の最後に一覧表として、まとめてある。

5　遺構内より出土した土器のうち実測図で表わしたものについては、各遺構ごとの通し番号を付した。例えば、0101は１号住居の１号土器、H0502は５号配石の２号土器を意味する。

目　　次

序
例　言

第Ⅰ章　調査の経過と概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の方法と概要…… 1
　　(1)　発掘調査の経過…… 1
　　(2)　発掘調査の概要…… 2
　　(3)　発掘調査後の経過…… 2
　　(4)　調査組織および協力者…… 3

第Ⅱ章　地理的環境…… 4
　第１節　遺跡の立地…… 4
　第２節　周辺の遺跡…… 4

第Ⅲ章　発見された遺構・遺物…… 7
　第１節　住居址（第１号～第39号）…… 7
　第２節　配石遺構（第１号～第５号）…… 83
　第３節　集石遺構（第１号）……109
　第４節　石組遺構（第１号～第16号）……109
　第５節　土壙（第１号～第８号）……116
　第６節　遺構外出土の土器……119
　第７節　土製品（土偶、土版、土製円盤、耳飾、その他の土製品、ミニチュア土器）……130
　第８節　石器（打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿、石錘、軽石・他、砥石、石鏃、石錐、
　　石匙・スクレーパー、横歯形石器、その他の石器）……153
　第９節　石製品（垂飾品、石剣・石棒、独鈷石・他）……175

第Ⅳ章　金生遺跡出土石器の使用痕分析……208

第Ⅴ章　金生遺跡石材の岩質とその産地の推定……217

第Ⅵ章　金生遺跡出土の獣骨……222

第Ⅶ章　遺物・遺構の検討……243
　第１節　土器の検討……243
　第２節　遺構の検討……260
　　(1)　住居について……260
　　(2)　配石遺構の性格……262
　　(3)　石組遺構……264
　　(4)　集落の変遷……267
　　(5)　金生遺跡の位置付け……268

挿　図　目　次

第１図　発掘区設定図(1/3,000)
第２図　層序(1/40)
第３図　金生遺跡の位置と周辺の遺跡
第４図　第１号住居址(1/60)
第５図　土器実測図(第１号・３号住居址)(1/4)
第６図　第２号住居址(1/60)
第７図　第３号住居址(1/60)
第８図　第４号住居址(1/60)
第９図　土器実測図(第４号・６号・７号住居址)(1/4)
第10図　土器拓本(第２号・４号・５号住居址)(1/3)
第11図　第５号住居址(1/60)
第12図　第６号住居址(1/60)
第13図　土器拓本(第６号・７号住居址)(1/3)
第14図　第７号住居址(1/60)
第15図　第８号・９号住居址(1/60)
第16図　土器実測図(第８号・11号～14号住居址)(1/4)
第17図　土器拓本(第８号～10号住居址)(1/3)
第18図　第10号住居址(1/60)
第19図　第11号住居址(1/60)
第20図　土器拓本(第11号～13号住居址)(1/3)
第21図　第12号住居址(1/60)
第22図　第13号住居址(1/60)
第23図　第14号住居址(1/60)
第24図　土器拓本(第14号～16号住居址)(1/3)
第25図　第15号住居址(1/60)
第26図　第16号住居址(1/60)
第27図　第17号住居址(1/60)
第28図　土器実測図(第16号・17号住居址)(1/4)
第29図　第18号・39号住居址(1/60)
第30図　土器実測図(第18号・20号・21号住居址)(1/4)
第31図　土器拓本(第17号・18号住居址)(1/3)
第32図　土器拓本(第18号・19号住居址)(1/3)
第33図　第19号住居址(1/60)
第34図　第20号住居址炉(1/60)
第35図　第21号・22号住居址(1/60)
第36図　土器実測図(第22号～24号・26号住居址)(1/4)
第37図　土器拓本(第20号・21号住居址)(1/3)
第38図　土器拓本(第22号～24号住居址)(1/3)
第39図　第23号住居址(1/60)
第40図　第24号住居址(1/60)
第41図　第25号住居址(1/60)
第42図　土器実測図(第25号・27号住居址)(1/4)
第43図　土器拓本(第25号住居址)(1/3)
第44図　第26号住居址(1/60)
第45図　第27号住居址(1/60)
第46図　土器拓本(第26号・第27号住居址)(1/3)
第47図　第28号住居址(1/60)
第48図　第29号住居址(1/60)
第49図　土器実測図(第28号・29号・31号住居址)(1/4)
第50図　土器実測図(第28号住居址)(1/4)
第51図　土器拓本(第28号・第29号住居址)(1/3)
第52図　第30号住居址(1/60)
第53図　土器実測図(第30号Ａ・31号住居址)(1/4)
第54図　土器実測図(第30号Ｂ住居址)(1/4)
第55図　土器拓本(第30号・31号住居址)(1/3)
第56図　第31号住居址(1/60)
第57図　第32号住居址(1/60)
第58図　第33号・34号・35号住居址(1/60)
第59図　第36号住居址(1/60)
第60図　第37号住居址(1/60)
第61図　土器実測図(第32号・36号～38号住居址)(1/4)
第62図　土器拓本(第32号・37号・38号住居址)(1/3)
第63図　第38号住居址(1/60)
第64図　土器実測図(第39号住居址)(1/4)
第65図　第１号配石(1/100)
第66図　土器実測図(第1号配石)(1/4)
第67図　土器拓本(第39号住居址・第１号配石①②ブロック)(1/3)
第68図　土器拓本(第１号配石③ブロック)(1/3)
第69図　土器拓本(第１号配石③ブロック)(1/3)
第70図　土器拓本(第１号配石④ブロック)(1/3)
第71図　第２号配石(1/60)
第72図　土偶実測図(第２号配石)(1/4)
第73図　土器実測図(第２号配石)(1/4)
第74図　土器実測図(第２号～第４号配石)(1/4)
第75図　土器拓本(第２号～第４号配石)(1/3)
第76図　第３号配石(1/60)
第77図　第４号配石(1/60)
第78図　第５号配石(1/60)
第79図　第５号配石下部(1/60)
第80図　第５号配石と出土遺物(1/50、1/100)
第81図　土器実測図(第５号配石)(1/4)
第82図　土器拓本(第５号配石)(1/3)
第83図　石組遺構(第１号～７号・９号)(1/60)

第84図　石組遺構(第10号～16号)・集石遺構(第1号)(1/60)
第85図　土器実測図(第1号集石・第2号・第16号石組)(1/4)
第86図　土器拓本(第1号～第7号・第9号～第12号・第14号～第16号石組)(1/3)
第87図　土壙(1/60)
第88図　土器拓本(第2号・第5号～第7号土壙)(1/3)
第89図　土器実測図(遺構外①)(1/4)
第90図　土器実測図(遺構外②)(1/4)
第91図　土器実測図(遺構外③)(1/4)
第92図　土器実測図(遺構外④)(1/4)
第93図　土器実測図(遺構外⑤)(1/4)
第94図　土器実測図(遺構外⑥)(1/4)
第95図　土器実測図(遺構外⑦)(1/4)
第96図　土器実測図(遺構外⑧)(1/4)
第97図　土器底部拓本(1/4)
第98図　土偶の部位
第99図　土偶実測図①(1/3)
第100図　土偶実測図②(1/3)
第101図　土偶実測図③(1/3)
第102図　土偶実測図④(1/3)
第103図　土偶実測図⑤(1/3)
第104図　土偶実測図⑥(1/3)
第105図　土偶実測図⑦(1/3)
第106図　土偶実測図⑧(1/3)
第107図　土版実測図(1/3)
第108図　土製円盤実測図①(1/3)
第109図　土製円盤実測図②(1/3)
第110図　土製耳飾実測図①(1/2)
第111図　土製耳飾実測図②(1/2)
第112図　土製耳飾実測図③(1/2)
第113図　土製耳飾実測図④(1/2)
第114図　土製耳飾実測図⑤(1/2)
第115図　土製耳飾実測図⑥(1/2)
第116図　土製耳飾実測図⑦(1/2)
第117図　土製品実測図(1/2)
第118図　ミニチュア土器実測図(1/3)
第119図　打製石斧実測図①(1/3)
第120図　打製石斧実測図②(1/3)
第121図　打製石斧実測図③(1/3)
第122図　打製石斧実測図④(1/3)
第123図　打製石斧実測図⑤(1/3)
第124図　磨製石斧実測図①(1/3)
第125図　磨製石斧実測図②(1/3)
第126図　磨製石斧実測図③(1/3)
第127図　磨石実測図①(1/3)
第128図　磨石実測図②(1/3)
第129図　磨石実測図③(1/3)
第130図　磨石実測図④(1/3)
第131図　磨石実測図⑤(1/3)
第132図　石皿実測図①(1/6)
第133図　石皿実測図②(1/6)
第134図　石皿・多孔石等実測図(1/6)
第135図　石錘・軽石製品等実測図(1/2)
第136図　砥石実測図(1/3)
第137図　石鏃実測図(1/1.5)
第138図　石錐・石匙・他実測図(1/2)
第139図　垂飾品・他実測図(1/1.5)
第140図　石剣・石棒実測図①(1/3)
第141図　石剣・石棒実測図②(1/3)
第142図　石剣・石棒実測図③(1/5)
第143図　石剣・石棒実測図④(1/5)
第144図　石剣・石棒実測図⑤(1/5)
第145図　石製品実測図(1/3)
第146図　石器使用痕(1)
第147図　石器使用痕(2)
第148図　石器使用痕(3)
第149図　石器使用痕(4)
第150図　石器使用痕(5)
第151図　石器使用痕(6)
第152図　岩石名観察地点図
第153図　イノシシ下顎骨歯槽による歯の位置と名称
第154図　第4群土器
第155図　第5群土器
第156図　第6群1類土器
第157図　第7群2類土器
第158図　時期別住居分布図(1/500)
第159図　第1号配石の構成(1/100)
付　図　　金生遺跡遺構配置図(1/200)

図　版　目　次

図版１　遺跡上空写真
図版２　１　遺跡遠景
　　２　発掘前の遺跡
　　３　発掘中の遺跡
図版３　１　第１号～第４号住居址
　　２　第１号住居址
　　３　第１号住居址埋設土器
　　４　第２号住居址
　　５　第５号住居址
図版４　１　第４号住居址
　　２　第５号～第７号住居址
　　３　第６号住居址
図版５　１　第５号住居址
　　２　第７号住居址
図版６　１　第８号・９号住居址
　　２　第10号住居址
図版７　１　第11号住居址
　　２　第12号住居址
図版８　１　第13号住居址
　　２　第14号住居址
図版９　１　第15号住居址
　　２　第16号住居址
図版10　１　第17号住居址
　　２　第18号・20号・39号住居址
図版11　１　第19号住居址
　　２　第21号・22号住居址
　　３　第21号住居址
　　４　第22号住居址
図版12　１　第23号住居址
　　２　第25号住居址
　　３　第25号住居址上層
図版13　１　第26号住居址
　　２　第27号住居址
図版14　１　第28号住居址
　　２　第29号住居址
図版15　１　第30号住居址
　　２　第31号住居址
図版16　１　第32号住居址
　　２　第33号住居址
　　３　第34号住居址
　　４　第35号住居址
　　５　第36号住居址
図版17　１　第37号住居址
　　２　第37号住居址炉
　　３　第37号住居址土器出土状態
　　４　第38号住居址下部
　　５　第38号住居址炉
図版18　１　第１号配石全景
　　２　第１号配石①ブロック
　　３　第１号配石②ブロック
図版19　１　第１号配石②ブロック（石棺状遺構）
　　２　石棺状遺構内の人骨と耳飾り
　　３　第１号配石②ブロック（部分）
　　４　第１号配石②ブロック（部分）
　　５　第１号配石③ブロック全景
　　６　第１号配石③ブロック（部分）
　　７　第１号配石③ブロック（部分）
図版20　１　第１号配石③ブロック
　　２　第１号配石③ブロック（円形石組と石棒）
　　３　第１号配石③ブロック（円形石組）
　　４　第１号配石③ブロック（石棺状遺構）
　　５　第１号配石③ブロック（石棺状遺構）
図版21　１　第１号配石③ブロック（部分）
　　２　第１号配石③ブロック（石棺状遺構）
　　３　第１号配石③ブロック（丸石・他）
　　４　第１号配石③ブロック前面の土器
　　５　第１号配石③④ブロック
図版22　１　第２号配石全景
　　２　第２号配石遺物出土状態
図版23　１　第３号配石
　　２　第４号配石
　　３　第５号配石全景
　　４　第５号配石の土器・石剣等
　　５　第５号配石（部分）
図版24　１　第１号集石
　　２　第１号・２号石組
　　３　第３号石組
　　４　第４号石組
　　５　第５号石組
　　６　第６号石組
　　７　第７号石組
　　８　第９号石組
図版25　１　第10号～第13号石組
　　２　第10号石組

3　第11号石組
4　第12号石組
5　第13号石組
6　第14号石組
7　第15号石組
8　第16号石組
図版26　1　第16号石組・第５号配石付近
2　第１号土壙
3　第２号土壙
4　第８号土壙
5　第８号土壙遺物出土状況
図版27　1　発掘中の第１号配石
2　実測風景
3　埋戻し中の遺跡
4　埋戻し終了
図版28　住居址出土土器(1)
図版29　住居址出土土器(2)
図版30　住居址・グリッド出土土器
図版31　第１号配石出土土器
図版32　第２号配石出土遺物
図版33　第２号配石出土土器
図版34　第３号配石・第５号配石・第15号石組・第16号石組・第１号集石
図版35　グリッド出土土器(1)
図版36　グリッド出土土器(2)
図版37　グリッド出土土器(3)
図版38　土偶(1)
図版39　土偶(2)
図版40　土偶(3)
図版41　土偶(4)
図版42　土製耳飾(1)
図版43　土製耳飾(2)、土製品
図版44　石製品(1)
図版45　石製品(2)

表　目　次

表１　住居址内柱穴等深度一覧表
表２　土偶・土版一覧表
表３　土製円盤一覧表
表４　土製耳飾一覧表
表５　土製品一覧表
表６　ミニチュア土器一覧表
表７　打製石斧一覧表
表８　磨製石斧一覧表
表９　磨石一覧表
表10　石皿・他一覧表
表11　石錘・軽石製品一覧表
表12　砥石一覧表
表13　石鏃一覧表
表14　石錐・石匙・他一覧表
表15　垂飾品等一覧表
表16　石剣・石棒等一覧表
表17　石製品一覧表
表18　遺物出土地点一覧表
表19　石器分類表①
表20　石器分類表②
表21　石器一覧表
表22　イノシシ下顎骨の数量表１（dm_4M_1の萌出段階）
〃　２（M_3の萌出段階）
表23　グリッド・住居址などから出土した焼骨の重量表

第Ⅰ章　調査の経過と概要

第1節　調査に至る経緯

金生遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字金生に位置している。昭和54年10月、山梨県農務部耕地課から県教育委員会文化課に、この地域一帯の県営圃場整備事業計画についての事前協議がなされた。そこで文化課で、計画予定地内の分布調査を実施したところ、土器の分布が確認できたことから、同年11月から12月にかけてさらに詳細な試掘調査を実施し、遺跡の範囲や時代の把握に努めた。その結果、標高760～780mを測る尾根上に位置する、およそ2haの範囲に広がる、縄文時代後・晩期と中世の遺跡であることが判明した。

このうち中世の遺構については、本遺跡の南西に隣接している「深草館跡」と称される長坂町指定史跡の外郭部に当たり、その重要性は極めて高いと判断されたことから、現状保存にむけての協議が、県文化課・県耕地課および峡北土地改良事務所・大泉村教育委員会および土地改良区により繰り返された。その結果、中世遺構部分については、やむを得ず工事で削平される北側の最小部分について発掘調査を行ない、他の箇所は工事や、後の耕作により遺構に影響をおよぼさない厚さで盛土保存を図ることで調整が行なわれた。一方、縄文時代の遺構部分については、その箇所の土を中世の保存部分に用いることから、全面的に発掘調査を実施することとなった。

この協議結果に基づき、山梨県教育委員会文化課により昭和55年5月8日から同年12月3日まで発掘調査が実施された。

文化財保護法に基づく手続き

昭和55年4月19日	山梨県知事　工事計画書を文化庁長官宛に提出
〃	山梨県教育委員会教育長　発掘通知を文化庁長官宛に提出
昭和55年8月11日	文化庁より発掘通知の受理通知が入る
昭和55年12月12日	山梨県教育委員会教育長　遺物発見通知を長坂警察署長宛に提出

第2節　調査の方法と概要

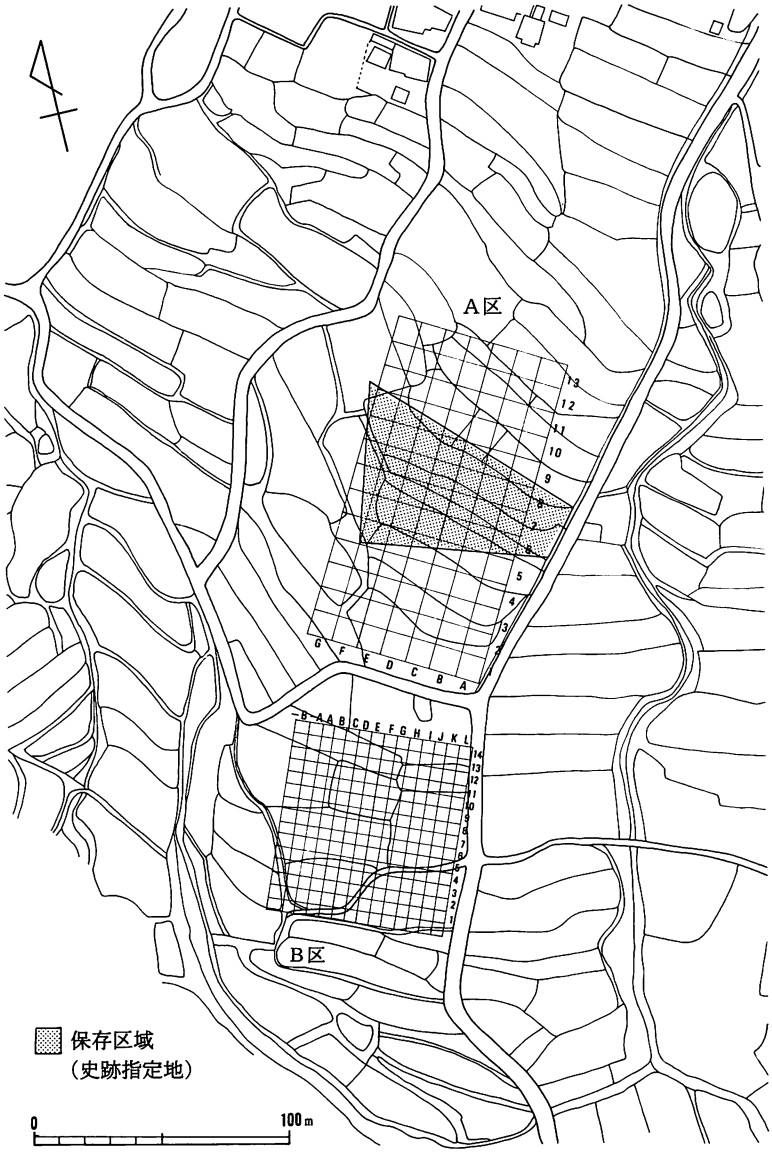
(1)　発掘調査の経過

本調査対象地区は、全体で約10,000㎡であるが、このうち北側の6,000㎡が縄文時代の遺跡、南側の4,000㎡が中世の遺跡である。縄文時代の遺跡がある地区をA区、中世の地区をB区として調査を進め、以後の略報でもこの区分を用いて金生遺跡の紹介を行なってきたが、B区については、昭和63年度に報告書が刊行されている（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第39集『金生遺跡Ⅰ』（中世編）1988）。したがって、ここではA区についての報告を行なう。

試掘調査の成果をもとに、遺物包含層ないし遺構確認面直上までは重機により排土を行ない、以下は人力により掘り下げることとした。遺跡の標準層序は、第2図のとおりである。

重機による排土後、一辺を10mとする方眼を設定し調査を進めた。グリッド番号は、東西方向をアルファベット、南北方向を数字で表現したが、実際は地区の関係から、アルファベットはBからG、数字は3から13までの間の組み合わせで表示することにした。例えば、C～7、E～12といったものであるが、必要に応じてその方眼をさらに四等分し、左下から時計回りに1～4までの区画を設定した。C－7－1、E－12－4というようにである。

調査の方法については、後述するように1号配石遺構を中心とした3,400㎡の範囲については現状保存をすることとなったため、遺構下部の調査は行なわなかった。配石遺構については、その形状や組み合わせが分かる程度で、また住居址については床面ないし炉址を認めた段階で調査を止めてある。今後の遺跡整備な



第１図　発掘区設定図（1/3,000）

どに伴う調査で、それ以上の検討を行なえば良いと考えたからである。そのほかの地区については工事対象となることから、住居では配石部や床面を剝ぎ、柱穴の検出に努め、配石遺構については全て石をはずす等、遺構下部の状況を確認した。

遺構の発掘後は、個々の写真撮影・図面作成・航空写真撮影などの記録作業を経て、調査を終了した。なお、Ａ区、Ｂ区をあわせた金生遺跡全体の調査経過は以下のとおりである。

Ａ区の調査

昭和55年７月１日～11月30日

Ｂ区の調査

昭和55年５月８日～８月12日

10月11日～12月３日

(2)　発掘調査の概要

調査により発見された遺構は全て縄文時代のものである。それらは以下のとおりである。

［住居址］合計41基が発見された。内訳は前期１（花積下層式期）、中期２（曽利Ⅰ式期１、曽利Ⅱ式期１）、後期11（堀之内式期３、加曽利Ｂ式期４、後半期４）、晩期16（前半期12、後半期４）、後期後半から晩期前半７、晩期前半から後半１、不明（後期ないし晩期）３である。

［配石遺構］５基。１号は後期後半から晩期前半にかけてのもの。２号・３号は晩期後半、４号・５号は晩期前半に、それぞれ属すものであろう。

［石組遺構］１５基。後期から晩期。

［土壙］８基（中期終末２、他は後期から晩期）

なお、発掘調査終了後現在まで、金生遺跡に関する成果について整理途中ではあるが、いくつか発表されている。遺構の数や時期について、統一を欠いている場合もあるが、今回の報告書の記述をもって正式な成果としたい。以下、これまでの文献を記しておく。

①大泉村教育委員会『金生遺跡』1981

②座談会「八ヶ岳南麓・金生遺跡と縄文晩期の地域的諸問題」『どるめん』29号　1981

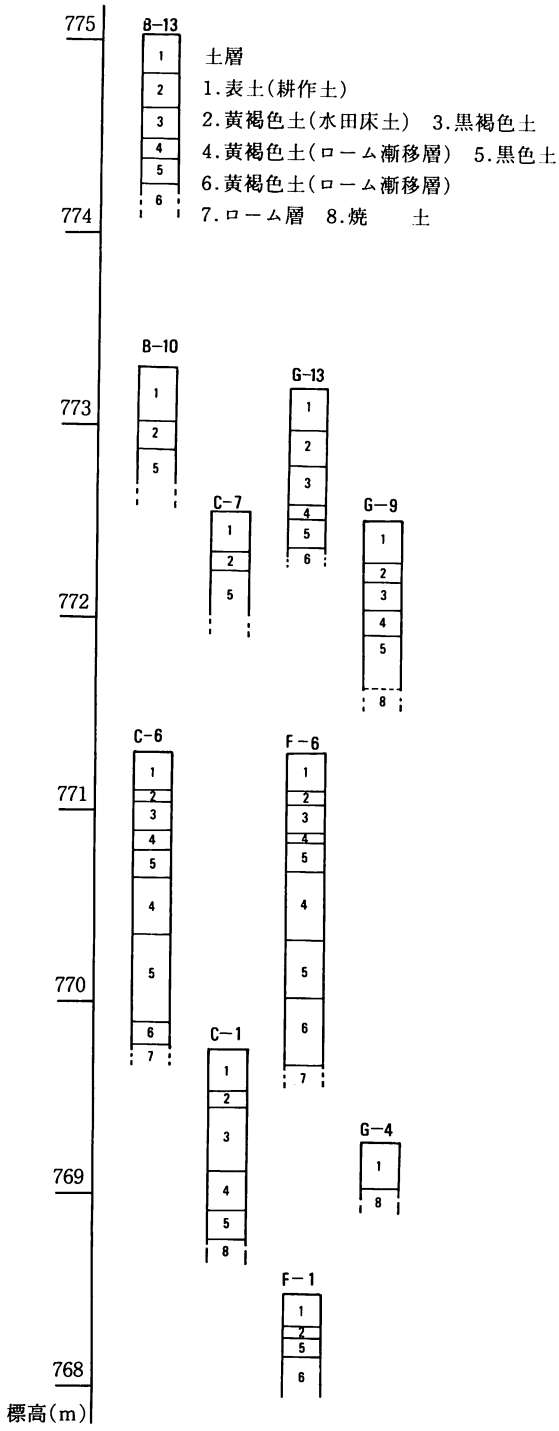
③新津　健・八巻与志夫・山下孝司「山梨県金生遺跡」『日本考古学年報』33　1983

④新津　健「金生遺跡発見の中空土偶と２号配石」『研究紀要』１　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1983

⑤日本考古学協会昭和59年度大会資料シンポジウム『縄文時代集落の変遷』1984

(3)　発掘調査後の経過

発掘調査が進むにつれ、縄文時代後期・晩期を中心とした大規模な集落址であることが分かってきた。山梨県教育委員会では、文化庁の指導や研究者・研究団体の助言を受け、全国的にみても極めて貴重な遺跡で



第2図 層序 (1/40)

あるとの認識にたち、その保存に向けての協議を調査途上から開始した。県農務部および、大泉村等との度重なる会議を経て、最終的には遺構の中心部ともいうべき地区3,400㎡が、圃場整備事業工事から除外されることとなった（第1図）。地元城下地区の地権者をはじめとした大泉村のご理解と英断のたまものとも言えるものである。

調査終了後、保存地区はただちに埋め戻しが行なわれた。その後、大泉村により保存地区の地権者の承諾等の手続きがとられ、国に対して史跡指定の申請が提出された。その結果、昭和58年2月、史跡指定の告示に至った。さらに昭和58年度には、国および県の補助を受け大泉村により、指定地域の公有地化が図られ、昭和63年度からは史跡整備が開始されている。

(4) 調査組織および協力者

調査主体　山梨県教育委員会

調査担当者　新津　　健（山梨県教育委員会文化課文化財主事）

八巻與志夫（　　〃　　）

調　査　員　山下孝司・小林義典・岩山真理子・牛沢百合子・Rolf Fux

調査補助員　畑　大介・小栗信一郎・伊藤正幸・白井満・箕輪伸・加藤光子・谷美雪・日向千恵・星野徳一・漢那早見・中山直治・土屋文子・田中和彦・清水伊万里・新井麻美・岡田典子・代永美代子・宮崎知典・酒井哲嗣・小野寺裕子・流石三夫・吉田哲志・島本弥生

作　業　員　平井仁志・藤原芳郎・浅川晃暉・浅川英三・進藤久・浅川洋子・浅川美代・中島ねのえ・浅川もとじ・山口淑江・浅川つた子・浅川満江・浅川けさ子・三井春子・浅川とくえ・浅川日出子・浅川照子・細田茂登枝・細田みぎわ・浅川輝江・浅川久代・浅川宏・大柴とし江・田中真理江・川名隆宏・石原泰一・細田絹代・細田和哉・小池ともえ・藤森房子・浅川喜子・平井一仁・宮沢康司・浅川広夫・浅川直司・谷戸武人・平井由美子・清水ちさと・三井静樹・浅川米子・清水信章・中島秀人・三井はまじ・三井澄子・浅川きよ美・由井峰雄・藤原満

整理作業員　斉木千枝子・渡辺かほる・宮川菊江・斎藤寿子・宮川さとる・弦間千鶴・武川ます美・山崎梅子・五味芳子・柏木まつ江・遠藤映子

指導・助言　文化庁（河原純之主任文化財調査官・西弘海文化財調査官）
八幡一郎・斎藤忠・江坂輝弥・戸沢充則・金子浩昌・小林達雄

協力機関　山梨県農務部（耕地課・峡北土地改良事務所）・大泉村役場・大泉村教育委員会・大泉村土地改良区・大泉村城南地区

第II章　地理的環境

第1節　遺跡の立地

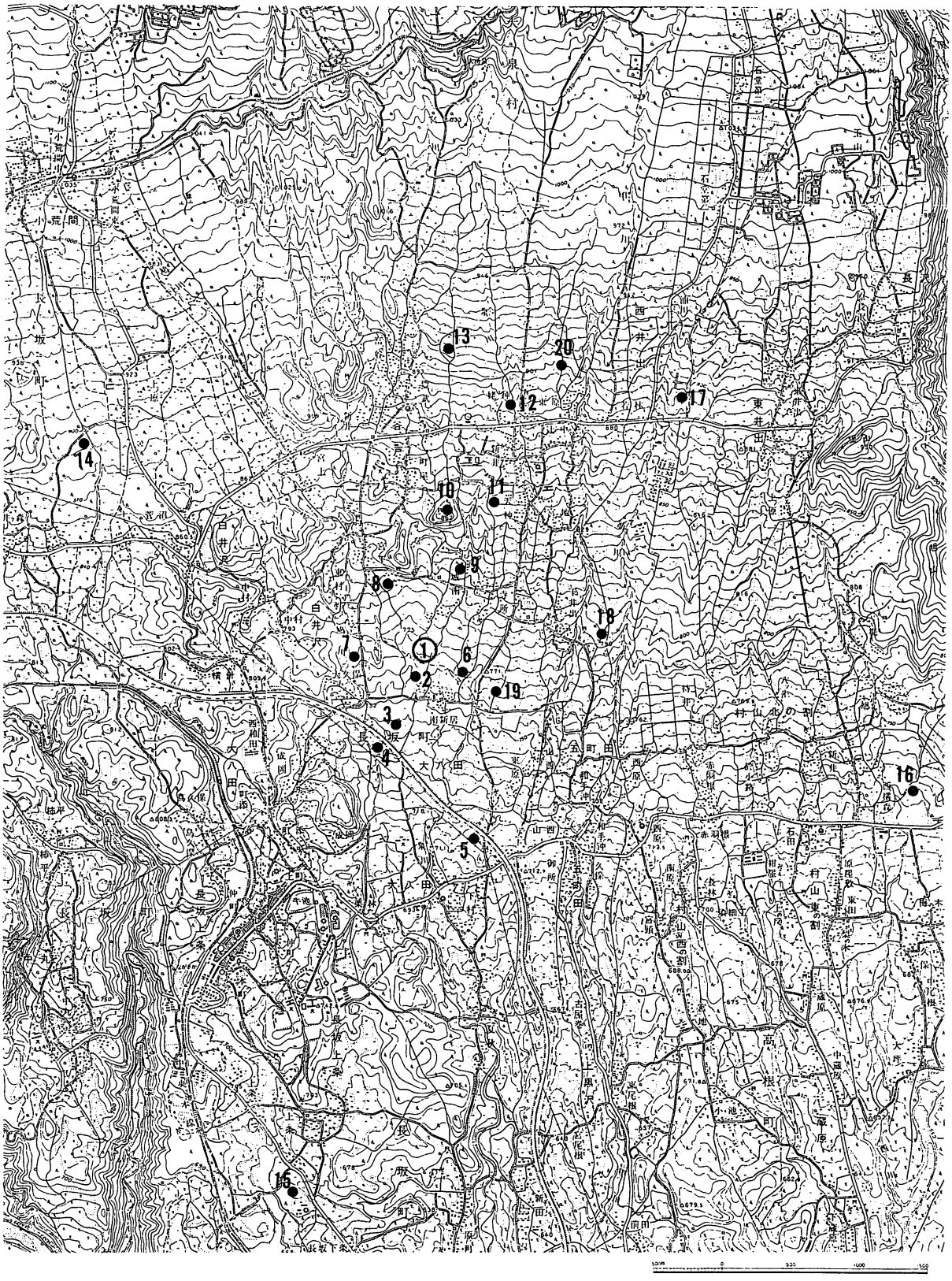
山梨県の北部から長野県にかけて、広大な裾野が発達する複式火山「八ヶ岳」が峰を並べている。この裾野一帯は、山梨長野を含め、近年リゾート地として注目され始め、一部には開発がさかんに進められている地域であるが、遺跡が密集する地域としてもよく知られている。ことに山梨県側である南麓には旧石器時代から縄文時代を経て、平安時代さらには戦国時代にいたるまでの遺跡が数多く残されている。大泉村は、この南麓のほぼ中央部に位置しているが、標高1,000m前後に自然湧水地帯があり、幾つかの河川の源となっている。ちなみに「大泉村」という名称も、村内にある大湧水に起因している。このような湧水より流れ出す大小の河川により開析された谷と交互に、北から南に傾斜する細長い尾根が発達している。金生遺跡も、両側を谷に挟まれた標高760m～780mを測る幅120m程の尾根上に立地している。西側の谷面には水田が発達しているが、冬場でも水がしみだしており「湿田」の様相を呈していた。この谷と尾根との比高差は3～5mで、尾根から谷に向かい緩やかな傾斜で落ち込んでいる。縄文時代の金生集落にとって、この谷が水場であるとともに、生産にかかわる場としても重要な役割を果たしていたことが推測される。

なお、この西側の谷には西衣川、東側には東衣川が流れており、その流域には水田が形成されている。また、遺跡のある尾根上についても、一部桑畑として利用されている他は水田である。

第2節　周辺の遺跡

1989年時点で大泉村には72箇所の遺跡が知られている（注1）。これらの遺跡の大部分は幾つかの時代の重なる複合遺跡である。これらを時代別にみると、縄文時代61、弥生時代5、古墳時代1、平安時代35、中世39である。縄文時代が突出し、平安から中世がこれに続くことが分かる。このような傾向は、隣接する高根町や小淵沢町にも共通することから、八ヶ岳南麓地域に共通する傾向と言えよう。弥生時代後期から古墳時代の遺跡は大泉村では非常に少ないが、同じ南麓地域でも、標高が下がるにつれ、遺跡数が増える傾向がある。いまのところ、弥生後期の住居址が発見された遺跡のうち最も高い位置にある遺跡は、標高720mの長坂町柳坪遺跡（注2）である。現在この八ヶ岳山麓地域は稲作が盛んであるが、標高750mを越える所では、夏場の気候によっては冷害をこうむることもある。稲作を受容し、それに生活の糧を求めようとした当初の時代にあっては、やはり米作りには適さない地域であったようである。その結果が、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が非常に少ないと言う、遺跡分布の特徴として表れてくるのであろう（注3）。ところが、平安時代になると、遺跡数が急激に増加する。新たな耕地や牧地を求めて、この山麓に開墾の鍬が下ろされ、たくさんの集落が形成されるのである。この歴史的な背景については今後の課題でもあるが、次の中世における遺跡数の多さも、この時代の開発が基盤となっているとも言えよう。

さて、周辺の主な遺跡について概観してみよう（第3図）。まず、金生遺跡と同じ後期・晩期の大きな遺跡としては、約4㎞南西に長坂上条遺跡がある（15）。これは学史的にも著名な、後期初頭から晩期終末・弥生中期の土器を出す、配石遺構を伴った遺跡である（注4）。また、北東およそ3㎞には後期初頭から晩期前半の、石棺墓を伴う大規模な配石遺構の発見された高根町石堂遺跡（17）（注5）がある。その他、後期中葉の石棺墓群で有名になった高根町青木遺跡（16）（注6）、発掘はまだ実施されていないが、後期初頭から晩期までの土器が見られる長坂町夫婦石遺跡（14）などは大規模な集落址とみられる遺跡である。このような遺跡が3～5㎞の単位でみられるのに対して、金生遺跡に近い周囲には、より規模の小さい遺跡がいくつか認められている。金生の北西500mには、後期前半と中頃の住居が1軒ずつ発見された豆生田第三遺跡（8）（注7）、これからさらに西500mには、後期住居8軒の長坂町別当遺跡（7）がある。また、金生



1 金生遺跡（縄文・中世）
2 深草館跡（中世）
3 小和田遺跡（中世）
4 小和田館跡（中世）
5 柳坪遺跡（縄文・平安）
6 寺所遺跡（平安）
7 別当遺跡（縄文）
8 豆生田第三遺跡（縄文）
9 城下遺跡（平安）
10 谷戸城（中世）
11 天神遺跡（縄文）
12 姥神遺跡（縄文）
13 方城第一遺跡（縄文）
14 夫婦石遺跡（縄文）
15 長坂上条遺跡（縄文）
16 青木遺跡（縄文）
17 石堂遺跡（縄文）
18 甲ッ原遺跡（縄文）
19 木下・大坪遺跡（平安）
20 東原遺跡（平安）

第3図　金生遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡の北約２kmには、後期前半の住居３軒、中葉の住居５軒と配石遺構の発見された姥神遺跡（12）（注８）がある。その他、分布調査の成果をも加えると、村内には後期の遺跡20数カ所が知られている。しかし、晩期の遺跡は２カ所程度で、後期から晩期まで継続している遺跡は金生遺跡を除きほとんど見られない。こうしてみると、大規模な配石遺構を伴い、たくさんの土偶を出土した金生遺跡の性格は、周辺の遺跡との関わりの中から考えていくことが必要であろう。

一方、大泉村には注目すべき発掘成果のある遺跡が多い。まず、金生遺跡の北方約１kmには、前期諸磯式期の住居49軒、土壙400基以上が調査された天神遺跡（11）（注９）、東１kmには未調査ながら中期の大集落とみられる甲ツ原遺跡（18）、北1.7kmには中期後半の住居12軒が後期の住居や配石遺構とともに発見された姥神遺跡（12）、同じく北約２kmには中期後半の住居７軒が、まばらながら環状に並ぶ方城第一遺跡（13）（注10）などがある。縄文時代の集落の構成や変遷、さらには集落間の関係を考える上で実に良好な資料の多い地域でもある。現状における縄文時代の遺跡数については、早期５、前期26、中期41、後期22、晩期３という調査結果がある（注11）。中期が突出し、前期と後期とが類似する傾向は山梨県全体にも共通している（注12）。

平安時代の遺跡発掘例も多い。金生遺跡Ｂ地区からも６軒が発見されているが、谷を隔てた東側の尾根上には、住居址30軒、建物跡３棟などから成る、集落のほぼ全体が調査された寺所遺跡（６）（注13）がある。また、金生遺跡と同じ尾根上で、北400ｍには20軒余りの住居と10数棟の建物跡の城下遺跡がある（６）。これらを含め、八ヶ岳南麓では多くの平安時代の遺跡が調査されているが、これらの大半は９世紀末から10世紀初めにかけて出現したものという見方がある。この頃、この地域が一躍注目され始め、再び歴史の表舞台に立ってくるのである。

さらに、中世後半・戦国期の遺跡も顕著に残されている。詳細は『金生遺跡Ⅰ』（中世編）に述べられているが、金生遺跡自体も長坂町指定史跡となっている「深草館」（２）の一部であるし、甲斐源氏の祖・逸見清光の居館と伝えられている谷戸城（10）や、長坂町小和田館跡（４）小和田遺跡（３）などの館跡や中世村落址などがよく知られている。

以上のように、歴史的環境に恵まれた地域であるが、まだ調査は始まったばかりである。今後の調査・研究に期待される点は大きい。

注

1　『大泉村誌』上巻　1989
2　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集『柳坪遺跡』1986
3　新津　健「八ヶ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21－２　1984
4　大山柏・他「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13－３　1941
5　雨宮正樹『西ノ原遺跡・石堂遺跡』高根町教育委員会・他　1986
6　雨宮正樹・他「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』第２号　1988
7　櫛原功一『豆生田第三遺跡』大泉村教育委員会　1986
8　櫛原功一『姥神遺跡』大泉村教育委員会　1987
9　山梨県埋蔵文化財センター『年報』１　1984
10　伊藤公明『方城第一遺跡』大泉村教育委員会　1988
11　注１に同じ
12　日本考古学協会昭和59年度大会資料『シンポジウム縄文時代集落の変遷』1984
13　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第27集『寺所遺跡』1987

第Ⅲ章　発見された遺構・遺物

本遺跡からは、住居址41軒・配石遺構５基・石組遺構15基・土壙８基などの遺構が発見された。また、それらの遺構内や包含層中から多くの土器・石器を含む土製品・石製品、それに獣骨等の自然遺物が出土した。以下これらについて順次報告する。なお、土器については次のように分類した。

第１群土器　前期の土器
第２群土器　中期の土器
第３群土器　後期前葉の土器
　１類　称名寺式土器
　２類　堀之内式土器
第４群土器　後期中葉の土器
　１類　加曽利Ｂ１式土器
　２類　加曽利Ｂ２式土器
　３類　加曽利Ｂ２～３式土器
第５群土器　後期後葉の土器
　１類　羽状沈線の土器
　２類　弧状沈線の土器
　３類　縄文の施された土器
　４類　安行系土器
　５類　東北系土器
　６類　東海・近畿系土器
　７類　沈線を持つ波状口縁深鉢形土器
　８類　磨消し縄文のつけられた壺形土器
　９類　有刻隆帯の土器
第６群土器　晩期前半の土器
　１類　清水天王山式土器
　２類　安行３ａ・大洞Ｂ式系土器
　３類　大洞ＢＣ式系土器
　４類　大洞Ｃ１式系土器
　５類　安行３ｂ・３ｃ式系土器
　６類　「鍵の手」文土器（佐野Ⅰ式系土器）
　７類　北陸系土器
　８類　東海系土器
　９類　条痕文土器
　10類　その他
第７群土器　晩期後半の土器
　１類　大洞Ｃ２式系土器
　２類　浮線網状文系土器
　３類　東海・西日本系土器
　４類　条痕文土器
　５類　無文土器
第８群土器　台付土器
第９群土器　紐線文土器
第10群土器　無文土器

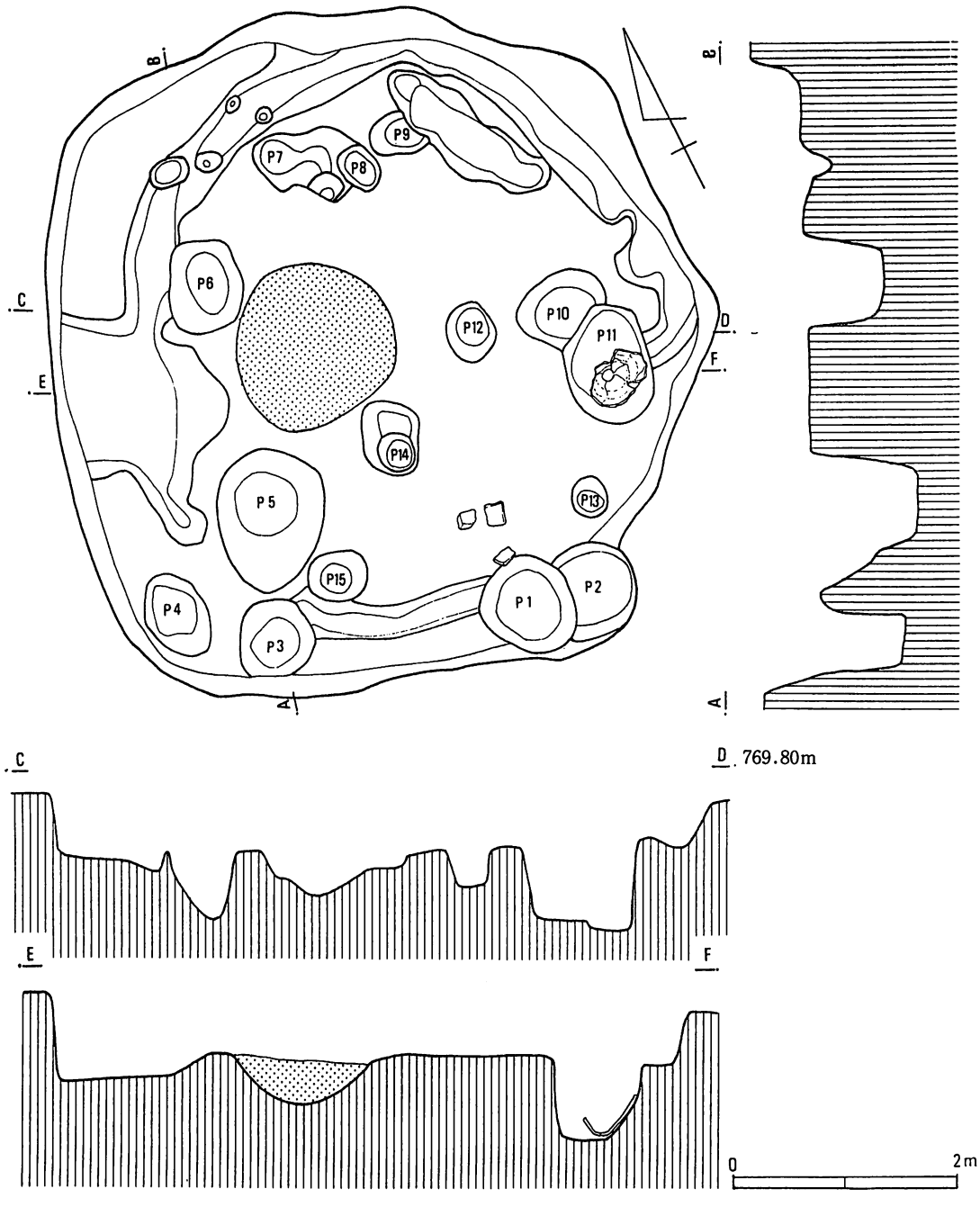
第１節　住居址

第１号住居址（第４図）

発掘区の南西端、Ｅ－３区に位置する。5.9m×6.0mを測る、胴の強く張った五角形を呈する住居である。入り口から炉を通る主軸方向は、Ｎ－62°－Ｗであることから、住居の向きは東南東である。遺構検出面はローム直上の褐色土中であり、ここから床面までの深さは45cm～75cmである。床はロームで堅いが、凹凸がある。炉は、主軸上のやや奥壁よりにある。直径1.4m、深さ40cmの大きな掘り込み中に焼土が堆積している。本来、石囲みであったと思われるが、石は残っていない。小穴は15個以上あるが、４本主柱であったと思われる。周溝は、東壁側では壁直下にあるが、他では壁より離れ、巡っている。小穴の多いことと合わせると、拡張などにより重複して使われた住居と見られる。南東隅の小穴中に埋設土器（第５図0101）が認められた。深鉢形土器の胴下半部である。このあたりが入り口であろう。他に炉の周辺を中心に土器が出土した。埋設土器や床面直上から出土した土器からみて、中期後半の住居とみなされる。

出土土器（第５図0101～0104）

0101は埋設土器である。胴上半部を欠くが、底部はある。上半には隆帯による渦巻き文があり、以下は細い波状隆帯が垂下する。0102は、埋設土器のある小穴際にて、床面から浮いた状態で出土した、小型の深鉢

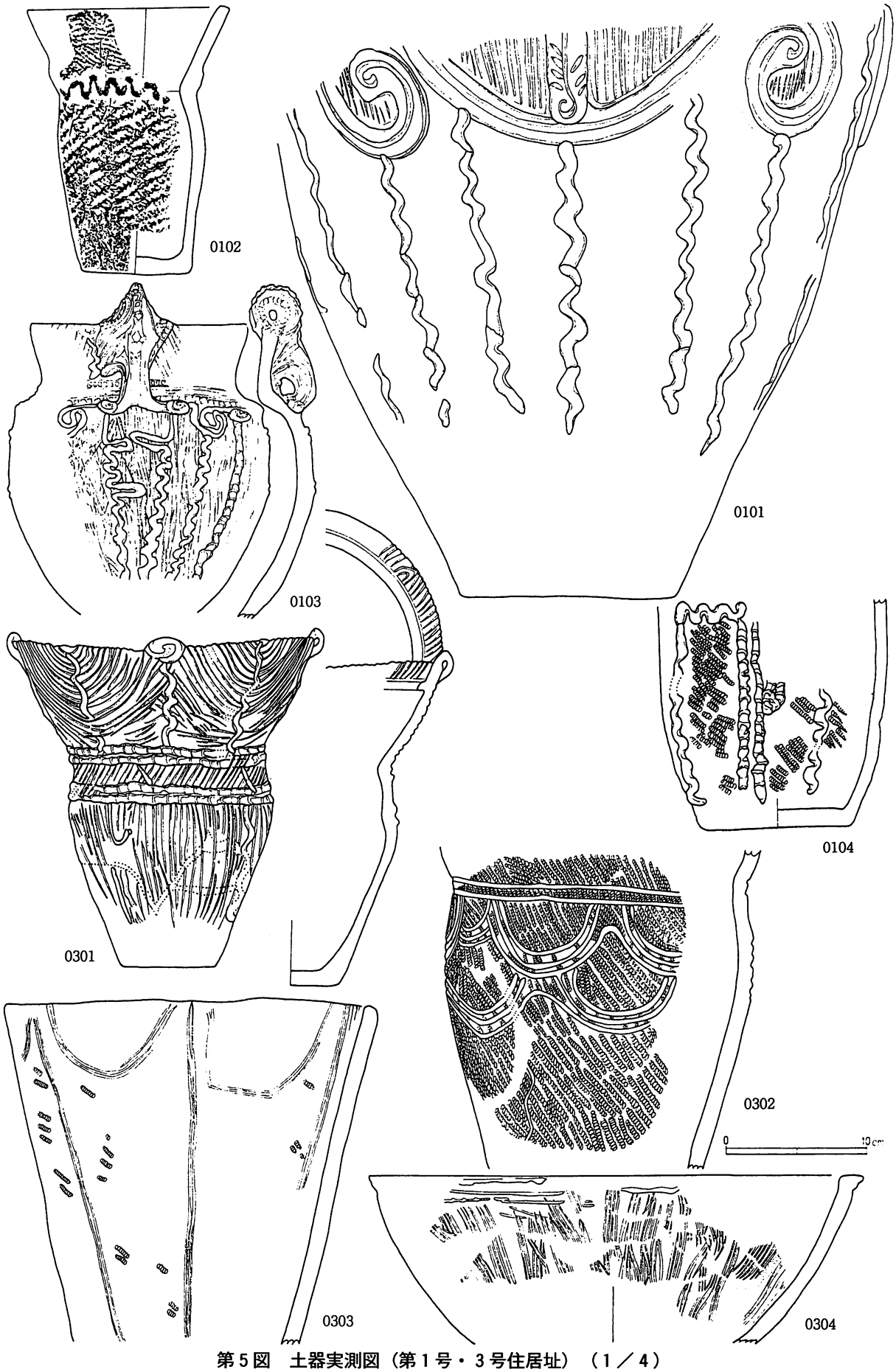


第4図　第1号住居址（1／60）

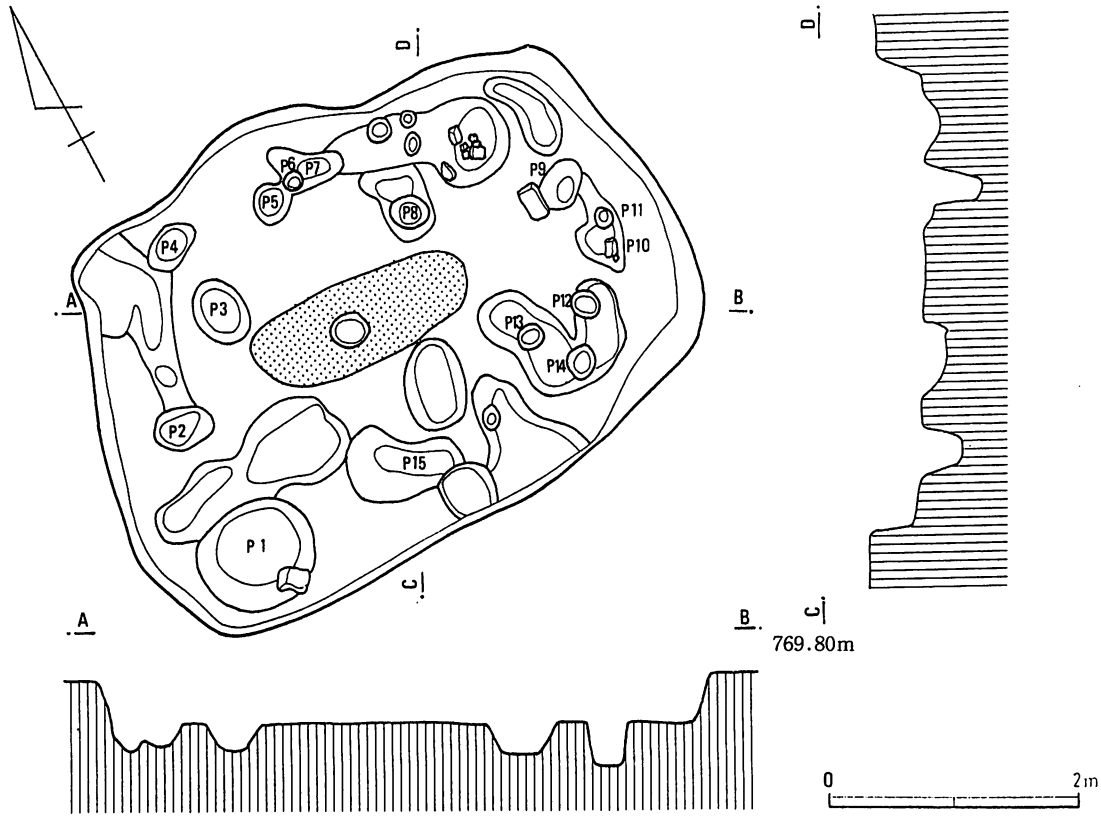
形土器である。口縁部は一部しか残っていない。全面縄文が施され、頸部に波状隆帯が横走する。0103・0104は、炉の上部から出土した深鉢形土器の一部であるが、0103は把手のついた壺状の器形である。くびれ部以上には半截竹管による沈線や連続結節文、胴部には細沈線が付けられている。四分の1程の破片である。これらは金生第2群土器で曽利Ⅰ式に比定できるものである。

第2号住居址（第6図）

発掘区の南西端Ｅ－3区、第1号住居址の南に近接して発見された。隅円の不整長方形の住居で、炉を通る長軸は5.0m、短軸は3.6m、壁高は40～50cmである。主軸(長軸)は、Ｎ－89°－Ｅとほぼ東西方向である。床はローム面にあり、特に炉の周囲は堅い。180×70cmと細長い範囲に焼土が広がっており、その部分の床面はよく焼けていた。全体に浅く、ほとんど掘り込まれていない。この焼土の広がった範囲が炉であろう。



第5図　土器実測図（第1号・3号住居址）（1／4）



第6図　第2号住居址（1/60）

床面には、直径10cm以下から50cm近いものまで、20個以上の小穴が認められたが、これらの配列は、住居のプランに準じて並ぶ傾向があり、壁柱穴のような状況であった。また、細長く浅い落ち込みも小穴とともに壁際を巡っており、周溝の一部かもしれない。床面近くや小穴中から破片ながら土器が出土した。これらからみて、本址は前期初頭の住居とみられる。

出土土器（第10図1～16）

1・2・6は口唇と平行に隆帯がめぐる、口縁部の破片である。胎土中に繊維を多く混入する。1・6はゆるい波状口縁をなしている。2の外面には僅かながら条痕が認められる。3～5は、条痕ないし沈線の土器である。3・4は同一個体とみられるもので、内湾する器形である。細かい条痕が見られる。繊維は混入しておらず胎土は緻密である。7～9は縄文の施された土器である。7・9は羽状、8には結節縄文が認められる。いずれも繊維を多量に混入している。10～16は薄手で焼成良好な土器である。11・13は細い隆線が、12は幅広い張り付け隆帯文があり、それらの上に細線が走る。10、14～16は細線文のみられる破片であるが、14は格子目状をなす。いずれも指頭状の圧痕が顕著である。以上は、金生第1群土器で、前期初頭に位置ずけておきたい。特に10～16は木島式土器の一群である。

第3号住居址（第7図）

第1号住居址の北約3mのE－4区に位置する。平面形は、五角形に近い不整な形状である。掘り込みが10～30cmと浅く、プランのとらえにくい遺構であった。5.2m×4.5mの規模である。長軸はN－56°－Wと東西に偏っている。床は褐色土であまり堅くはない。床面中央より南東に寄ったところに、95cm×65cmの範囲に焼土が堆積していた。掘り込みはほとんど認められないが、底面が火熱をうけていたことから、炉址とみなした。小穴は7個ほど見られたが、不規則な配置である。周溝は全周するが、北側部分には幅80cm近くも測る広い箇所があり、通常の周溝とは異なっている。この幅の広い落ち込み箇所から炉にかけて、一括土器がまとまって出土している。住居の時期は、中期後半である。

第7図　第3号住居址（1/60）

出土土器（第5図0301～0304）

図示した4点はいずれも住居内の浅い溝状部分の底部直上からまとまって出土した大形の破片である。0301は、深鉢形土器の二分の一ほどのもので、胴上半には半截竹管による円弧状の沈線が同心円状に付けられ、細い波状隆帯が垂下する。頚部には隆帯が張り付けられ、その上には半截竹管による結節が連続する。器壁は1㎝以下の丁寧な作りの土器である。0302は口縁部を欠く三分の一程の破片である。縄文地文で胴部には連弧状の沈線が二段見られる。0303も地文に僅かながら縄文が残り、その上に半截竹管による雑な連弧状の沈線が付けられている。胎土の粗い土器である。0304は、浅鉢形土器の破片である。櫛歯状工具による沈線が細かく付けられている。

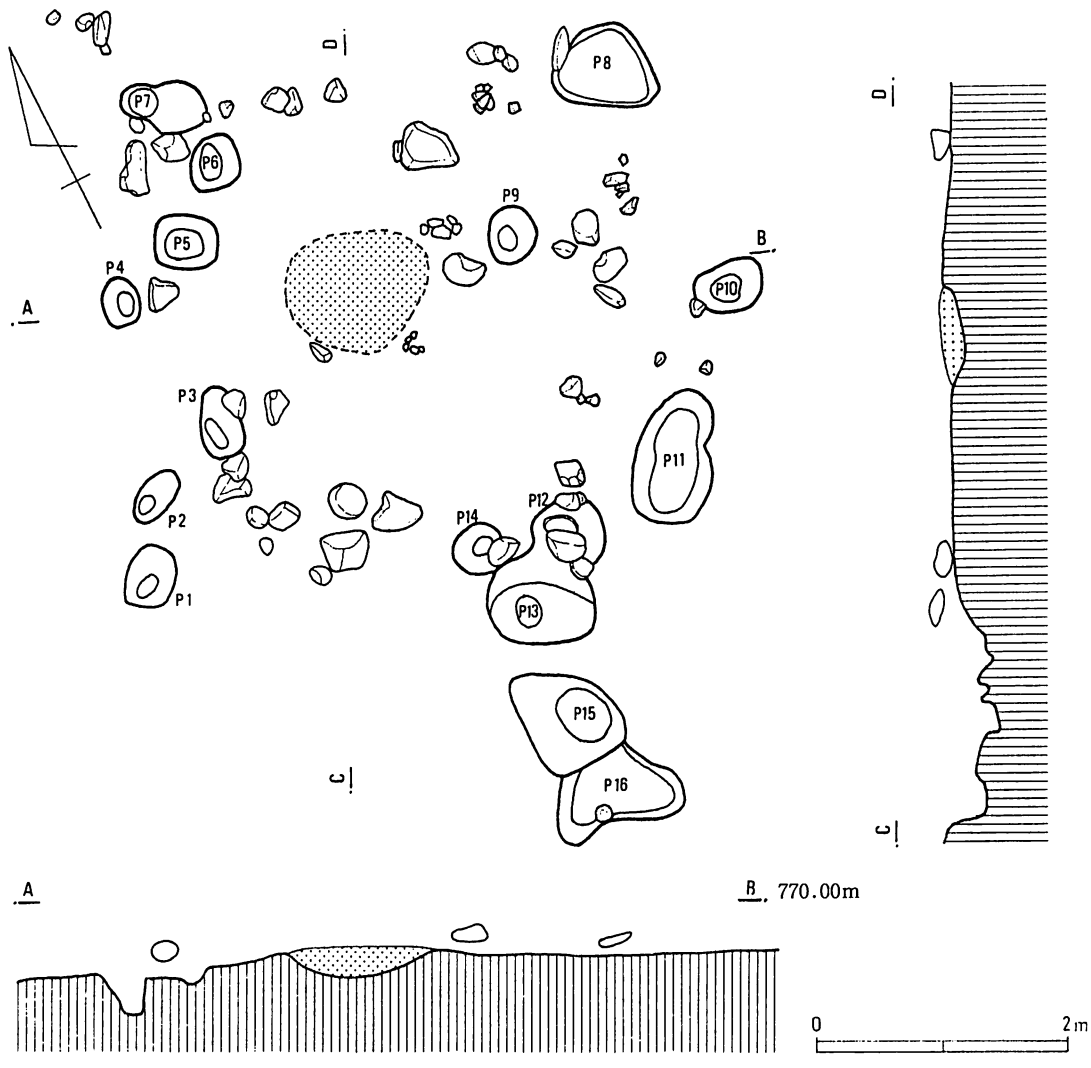
第4号住居址（第8図）

E・D－4区に位置し、西2mには第3号住居址がある。褐色土中から、土器が多く出土し始めたため、精査したが遺構のプランの把握にはいたらなかった。そこで、注意深く掘り下げていったところ、部分的に石が認められるとともに、ローム層上面で柱穴らしい落ち込みや、焼土が検出されたため、住居と判断した。

竪穴の形状は不明であるが、柱穴とみられる小穴が方形状に配列しており、同時に30㎝以上の石が並ぶ箇所もある。小穴と小穴とを結んだ各辺の長さは、東辺が約5m、北辺が約4mである。東辺側に突出する2個、あるいは南隅に張り出した2個の小穴等は、入り口に関した施設かもしれない。床は堅くなくあまり平坦ではない。炉は、柱穴に囲まれたほぼ中央部に位置する。112㎝×98㎝、、深さ20㎝の規模である。

以上から、本址は、いくぶん竪穴状に掘り窪められ、壁際に石が並べられた構造の、方形を基調とした住居であると推定できる。床面直上を中心に、土器・石器等、出土遺物は多い。

出土した土器からみて、本址は後期中葉の第4群3類土器の時期に属するものであろう。

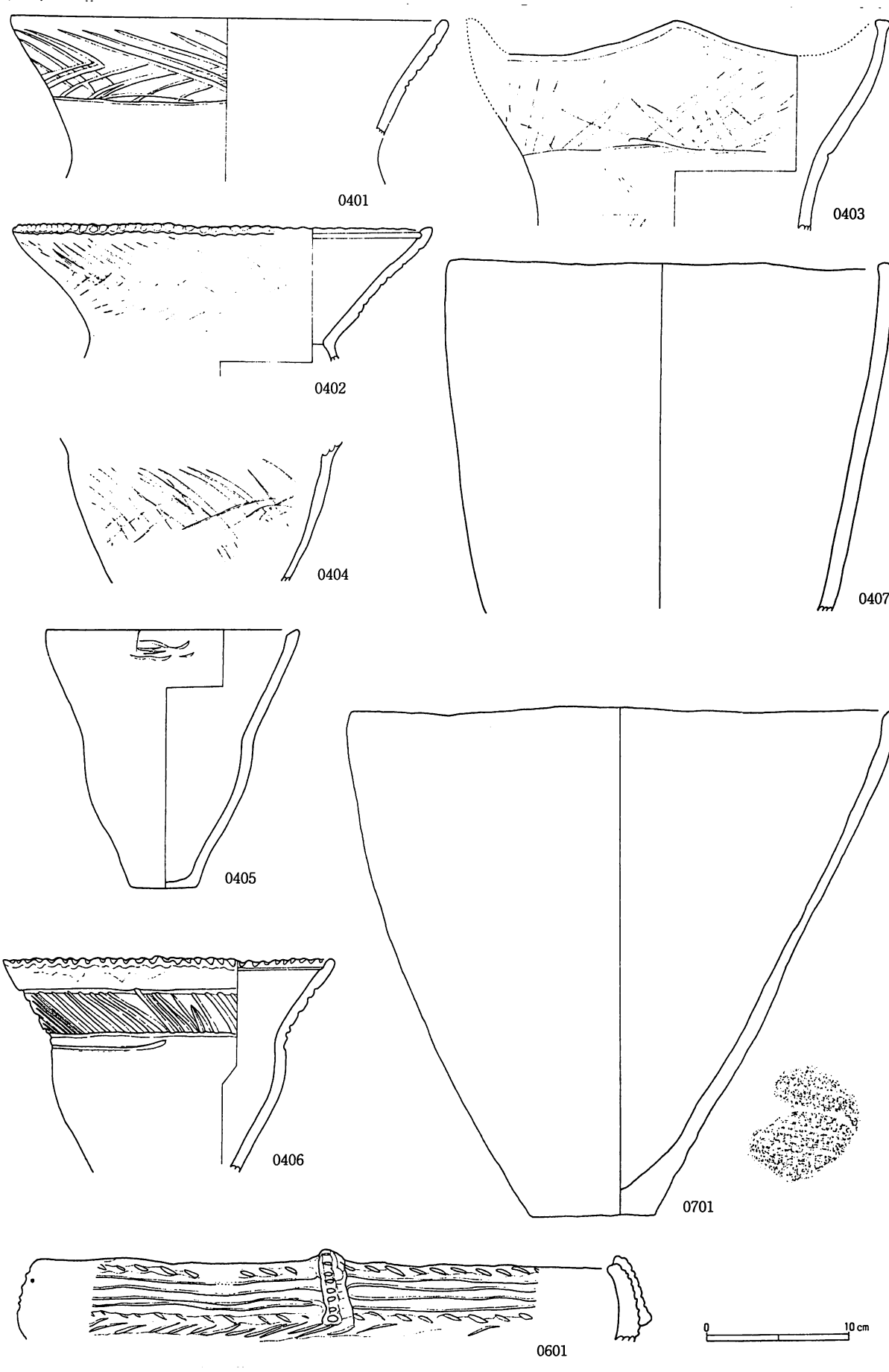


第8図　第4号住居址（1/60）

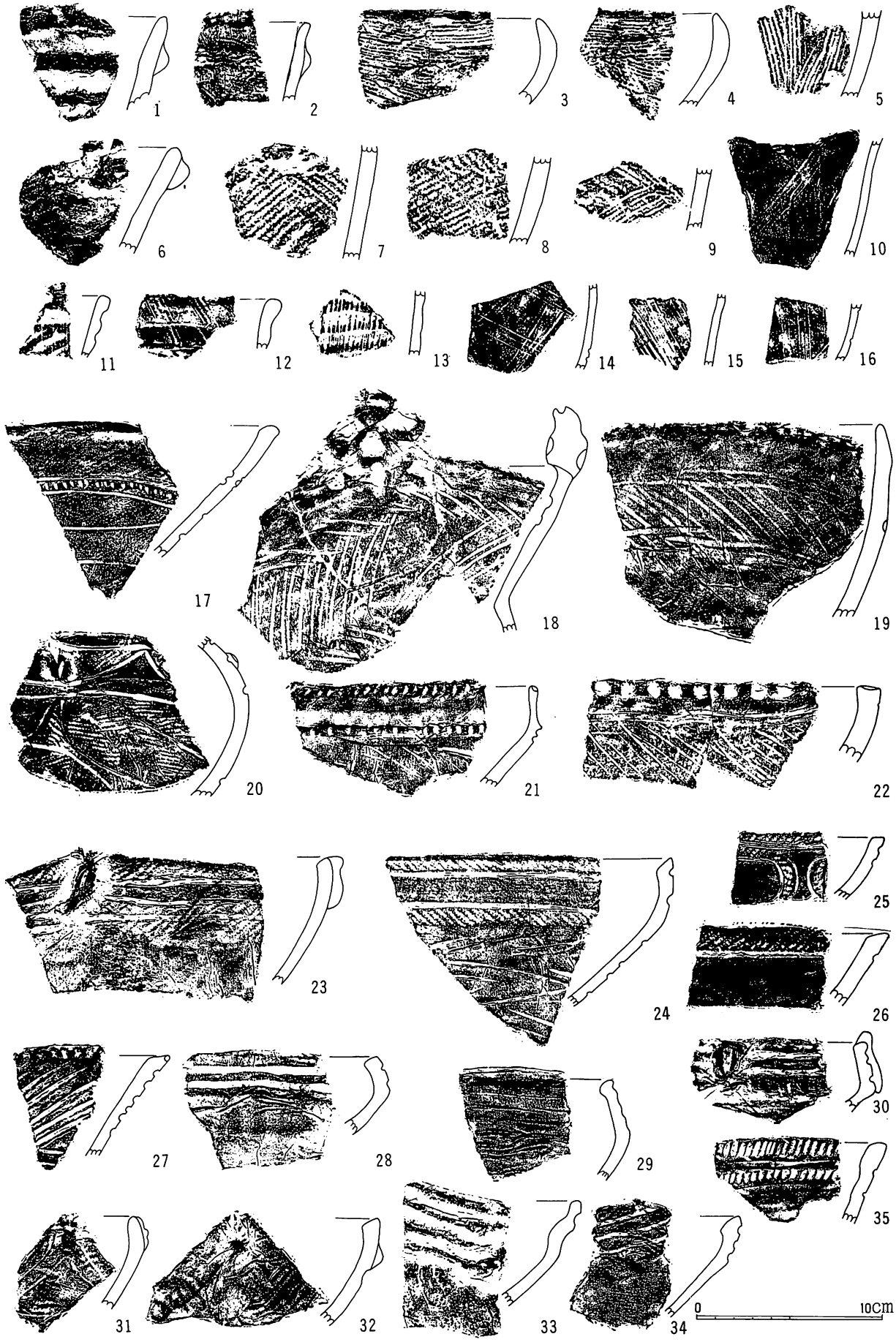
出土土器（第9図0401～0407）（第10図17～22）

0401　深鉢形土器口縁部の二分の一程の破片である。平口縁で、上半分に斜行沈線が施され、部分的に格子目になる。斜沈線は、下方が後から施文されている。口縁部内側に沈線が横走する。0402は、北東壁際から出土した口縁部破片である。平口縁で、器形および大きさは0401に類似するが、沈線は細く綾杉状である。口唇には刻目が連続する。0403は、波状口縁の深鉢形土器破片である。横走する沈線により区画され、頸部は無文となっているが、上半部には粗い斜行沈線が付けられている。0404は北壁の外側から出土した胴部破片である。鋭い斜行沈線が付けられている。くびれ部は無文であろう。内面はよく磨かれている。0405は、口縁部の大半を欠する平口縁の深鉢形土器である。器高18cmと小形で、口縁の下に粗雑な沈線がある他は、無文である。0406は北東コーナー付近の覆土中から出土した三分の一程の破片である。連続刻目のある平口縁、ゆるくくびれた頸部のある深鉢形土器である。平行沈線に区画された中に、太い斜沈線が充填されている。0407は、無文の粗製土器の破片である。0402とともに出土した。

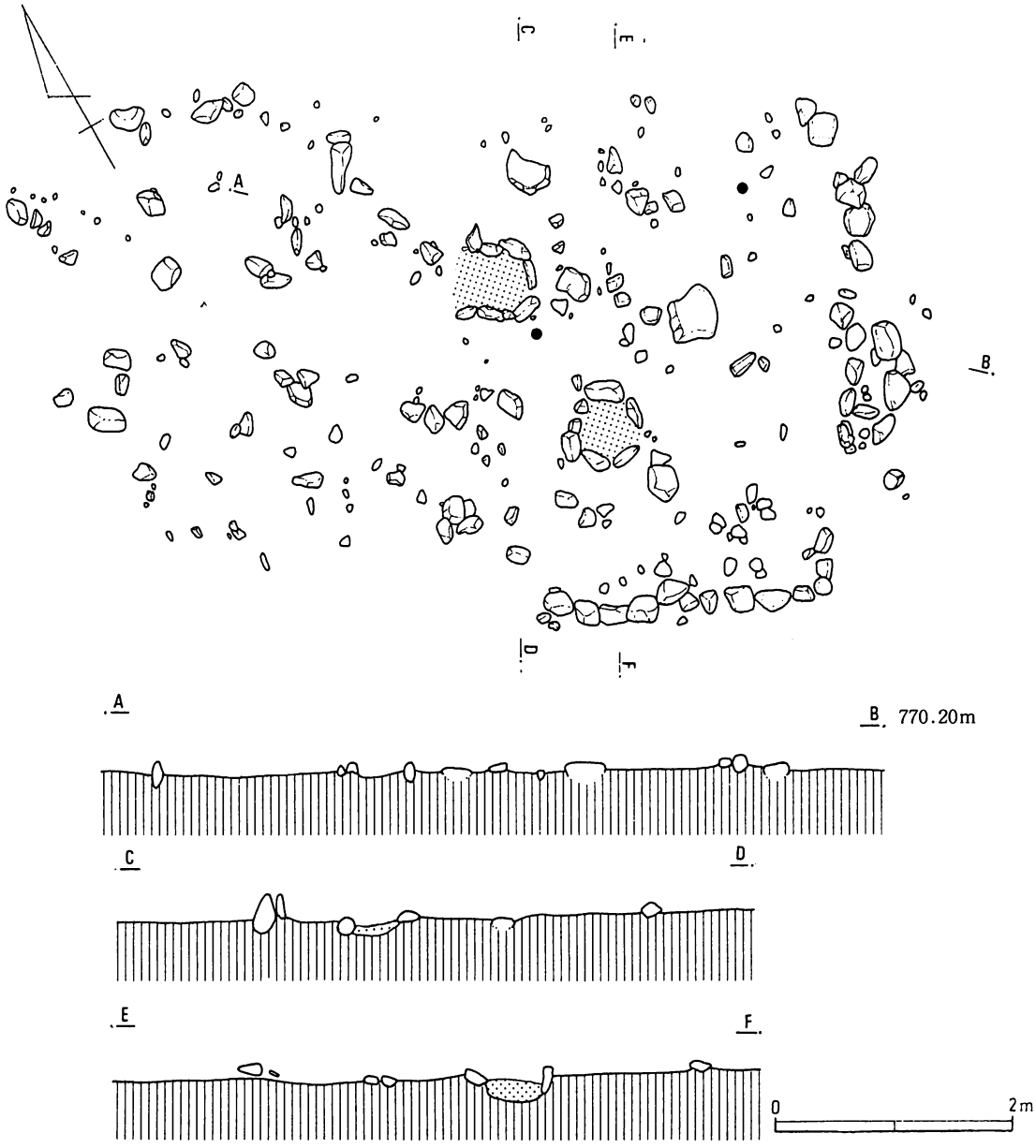
第10図17は口縁部破片である。口縁が非常に開き、頸部が強くくびれる器形の深鉢形土器であろう。18は、平口縁に突起がみられ、体部には綾杉状の沈線がある。19も深鉢形土器の破片であるが、斜沈線は区画されている。20は、本址では数少ない縄文の施されたもので埦形であろうか。21は台付の浅鉢形土器の破片であろうか。よく磨かれた土器である。22は粗製の深鉢形土器破片である。口唇部に圧痕が連続し、体部には斜



第9図　土器実測図（第4号・6号・7号住居址）（1／4）



第10図　土器拓本(１～16　第２号住居址、17～22　第４号住居址、23～34　第５号住居址)(1/3)



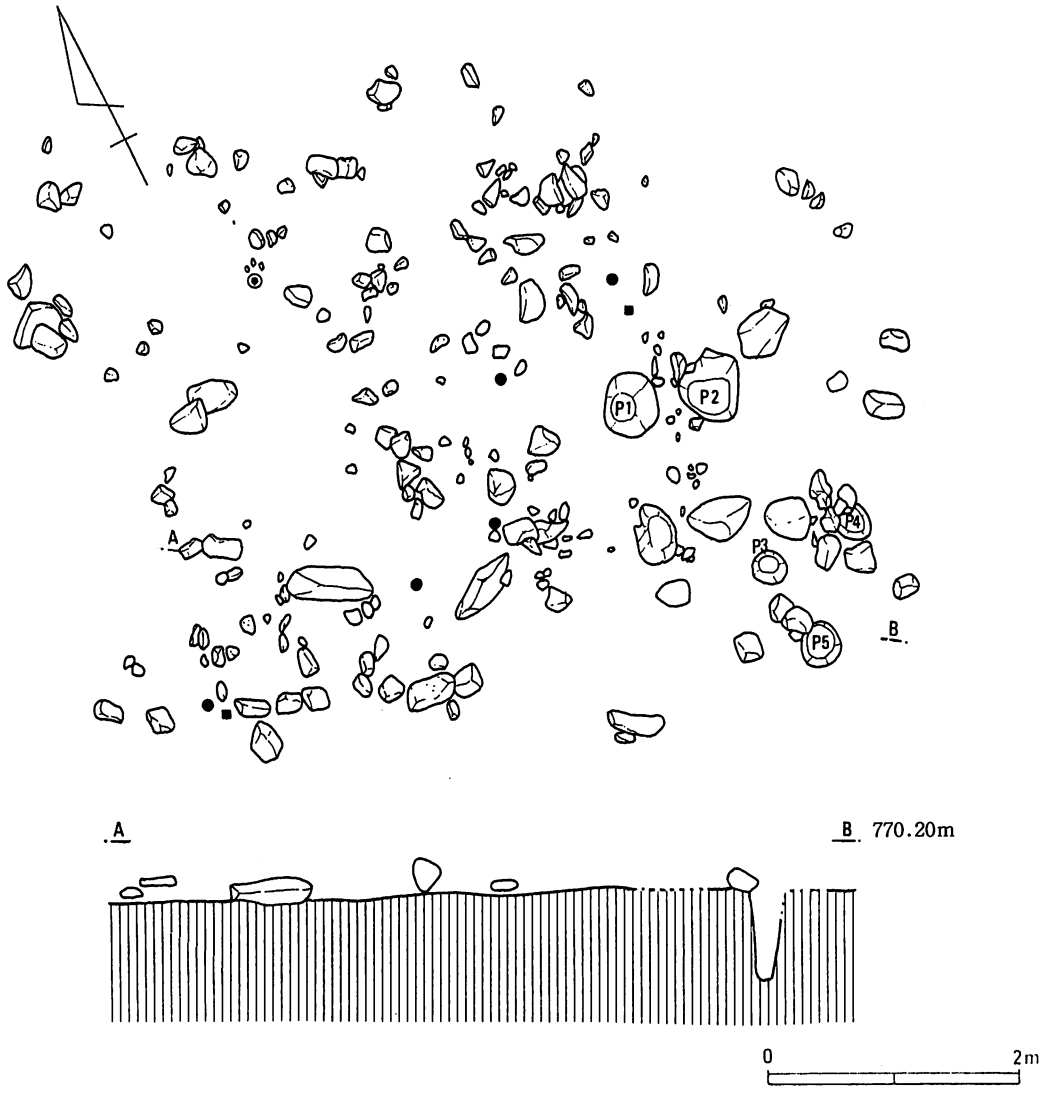
第11図　第５号住居址(1/60)

沈線が施されている。

第５住居址（第11図）

第４号住居の北東５ｍのＤ－５区に位置する。この５列には、５号から７号までの３軒の住居が東西に並んで位置している。後述するように３軒とも、後期後半の住居である。

Ｄ－５区を中心に、黒褐色土中から後期後半の土器片が出土し始めたので、注意して掘り下げたところ、直線的に並ぶ石列が確認できた。この石列は、東辺で2.48m、南辺で3.76mと「Ｌ」字状にみられたが、西および北辺では認められなかった。本来は、住居の壁際に石が並べられた、方形の「石囲み住居」であったと推測されるものである。その規模は、一辺が４ｍ前後とみられる。床面は黒褐色土中にあることから、ほとんど堅くはない。石囲み炉が２箇所にあるが、直接本址に所属するものは南側のものであろう。長さ20～35㎝の石で囲まれた、直径70㎝ほどの炉である。深さは18㎝ほどあるが、焼土の堆積は少ない。北側の炉は、一部石が抜かれた大きめの炉である。柱穴は不明。東辺の石列に若干の張り出し部と思しき箇所があるが、入り口部の可能性もある。仮に入り口とすると、主軸はＮ－64°－Ｗ前後である。

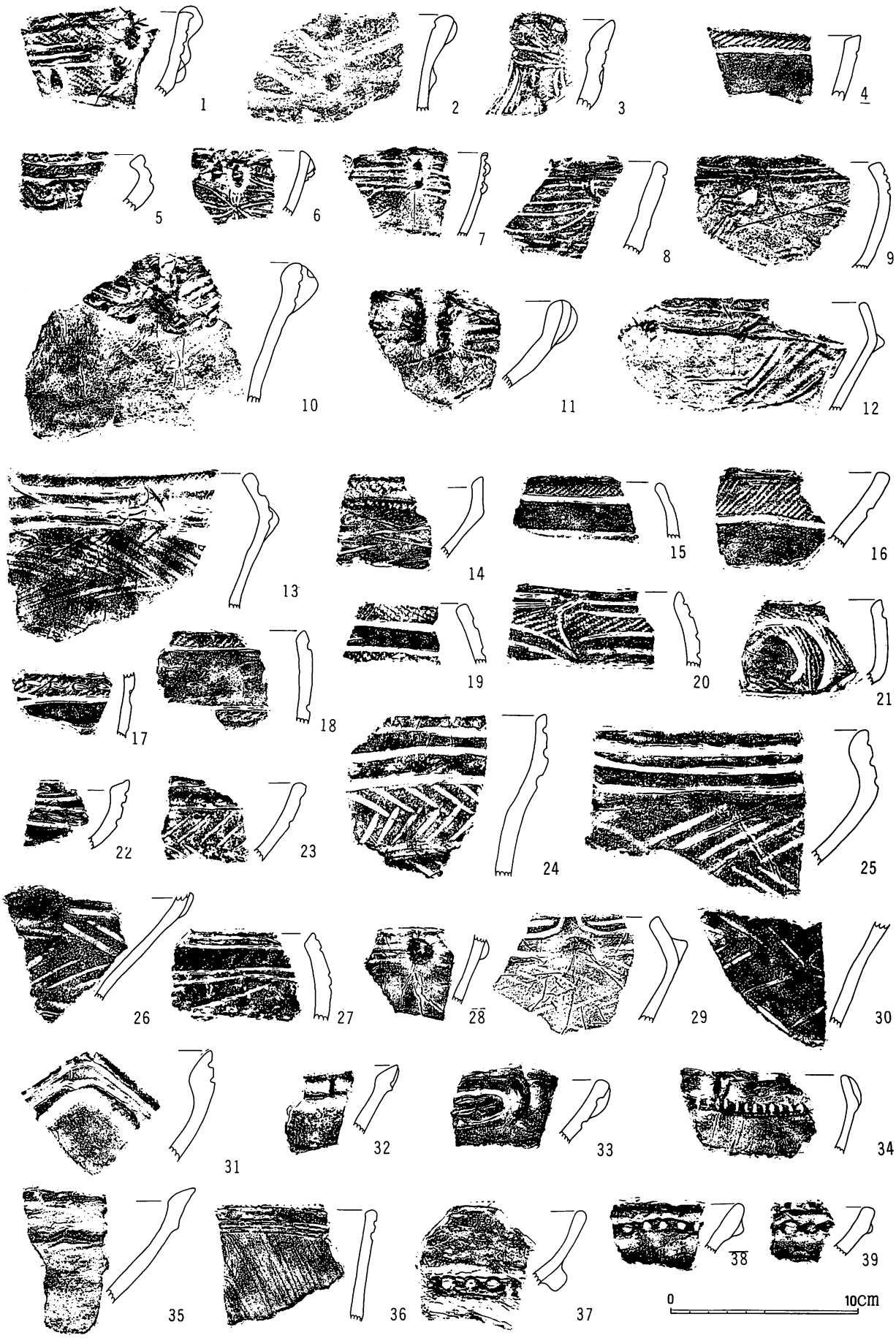


第12図　第6号住居址(1/60)

出土遺物は、ほとんど土器片であるが、覆土中から土偶1点が出土している。後期後葉の住居である。

出土土器（第10図23～35）

23から26は、平口縁で縄文の施された土器である。23は3本の沈線が走り、その部分に縄文がみられる。口縁直下に三日月状の突起がある深鉢形土器である。24は、「く」の字形の口縁で、二本の沈線とそれに平行する縄文帯がある。胴部には沈線が羽状に付けられている。浅鉢形土器の破片であろうか。26も24に類したもので、25も口縁直下は同様であるが、下部は沈線と縄文帯とが弧状になっている。27は、しっかりした斜行沈線の付けられた、深鉢形土器の破片である。口唇に押圧文が連続する。28～30、33・34は沈線を中心とした土器である。28は、強く「く」字形に屈折する器形の浅鉢形土器と思われるものである。29は凹線状沈線の土器である。内外面に浅い条痕様の整形痕がみられる。胎土中に金雲母が混入する。33も凹線文の土器であるが、29よりも線は太くしっかりとしている。内面には条痕が残る。黄褐色を呈する波状口縁部の深鉢形土器である。30は平行沈線の土器であるが、縦に張り付けがあり、屈折部には刻目が連続する。34も波状口縁の土器であるが、口唇は内外面とも肥厚し、外面には3本の沈線が走る。31・32も波状口縁の深鉢形土器である。31は口唇とその直下の二箇所がやや肥厚し、その部分に縄文が施され、帯縄文のような効果が認められる。32は波頂部に円形の突起が付けられている。35は平口縁の深鉢形土器で、口縁部に二条の刻目文帯がめぐる。黒褐色を呈する。



第13図　土器拓本(１～12　第６号住居址、13～39　第７号住居址)(1/3)

第６号住居址（第12図）

Ｅ－５区、第５号住居址の西に隣接している。南西辺に石が並んでいる程度で、他の箇所は石が乱雑であるが、本来は第５号同様に石囲み住居であったと推測される。一辺４～５ｍ程であろう。明確に炉と断定できる施設は認められなかった。破片ながら土器が多く出土したこと、僅かではあるが石が並んでおり、この並ぶ傾向が、５号や７号と共通すること、乱雑ながら石が多いこと等から、住居址と見なしたものである。床面は黒褐色土で、堅くはない。小穴は東辺に５口みられるが、柱穴のような配置ではない。入口に関するものであろうか。土器片とともに土偶１、土製耳飾り７などが出土した。後期後葉の住居である。

出土土器（第９図0601）（第13図１～12）

0601は、平口縁深鉢形土器の口縁部を中心とした三分の一程の破片である。口径40㎝を越す大きな個体で、口縁部から頚部にかけてゆるい「く」字形をしている。口縁部文様は、三条の浅い凹線状の沈線を中心とし、上端と屈折部とに斜行刻目が連続する。また、縦方向に棒状の張り付け文があり、これにも刻目が連続している。頚部には斜行沈線がみられるが、おそらく羽状に施されたものであろう。内面にはヘラ状の粗い整形痕がみられる。黄褐色を呈し、器面はザラついている。東海系の土器である。

第13図１・２は帯縄文の土器で、瘤状の張り付けがみられる。帯縄文の部分はいくらか肥厚している。２は波状口縁の波谷部の破片である。安行１式土器である。３は、山形を呈する波状口縁の土器で、頂部はいくぶん開き気味に立ち上がり、上端は平坦である。この頂部と口唇に沿った部分に縄文が施されている。沈線や刺突も付けられている。４・５は平行沈線とそれにそって縄文の付けられた「く」字形口縁部である。６・７は瘤付き土器の一群である。６はいわゆる弧線連結文の土器で、口縁部に刻みのある縦長の瘤が２個一対みられる。弧線の連結部には瘤のかわりに、円形の刺突が付けられている。７は平行沈線の連結部に丸瘤が２個一対認められる。８は細い平行沈線と弧状沈線とで飾られる平口縁の土器で、沈線間に短沈線が連続する。９・12は「く」字形口縁部破片で、屈折部より上に三条の沈線が横走する。12の屈折部には横長の瘤状の張り付けがある。９の胴部には短い斜沈線がまばらながら付けられている。やや丸みのある器形であり、埦形かもしれない。10・11は波状口縁の深鉢形土器で、いずれも波谷部付近の破片である。口唇部は肥厚し、隆帯が付けられ、波谷部には突起状の盛り上がりがある。10の隆帯上には連続刺突がみられる。いずれも黒褐色を呈する。

第７号住居址（第14図）

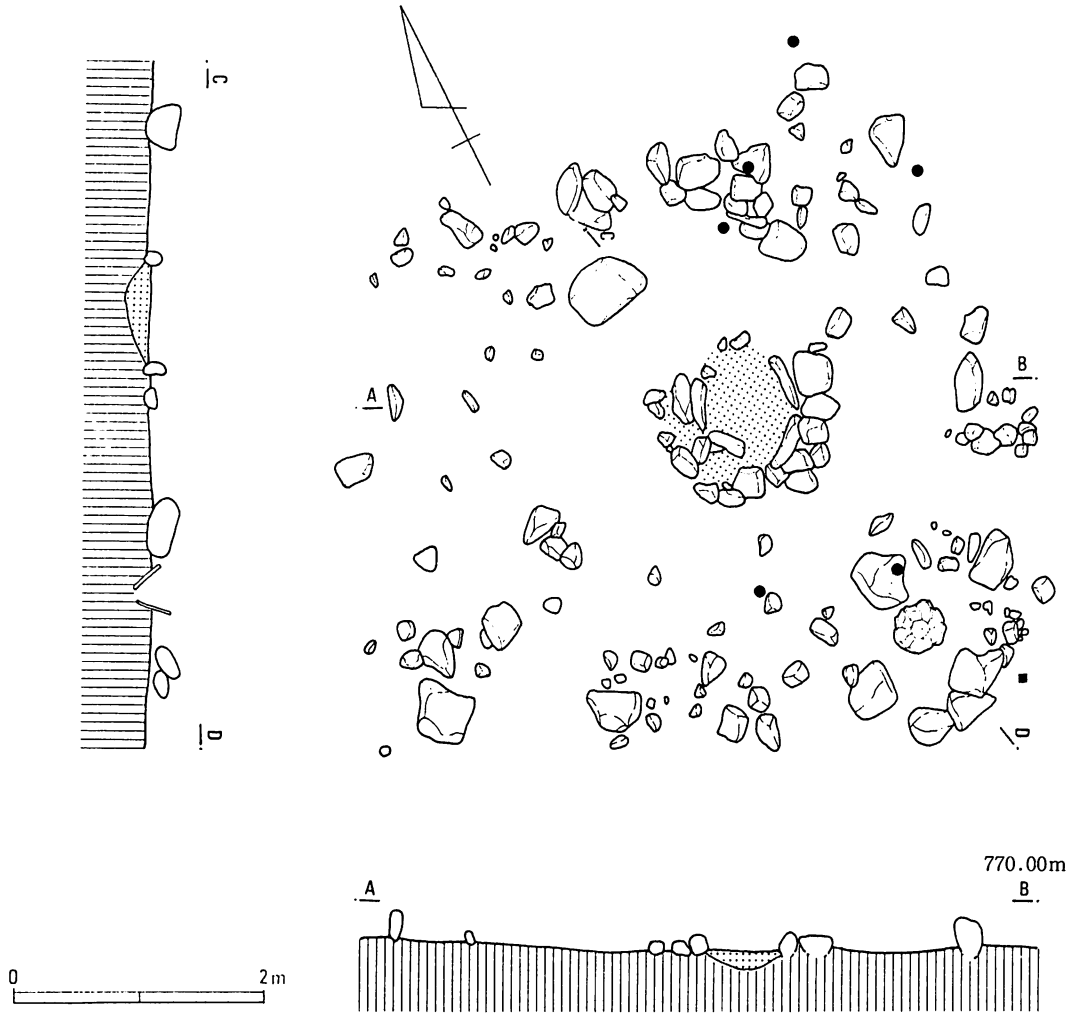
Ｅ・Ｆ－４・５区で石列が検出されたことから精査したところ、一定のまとまりで石がめぐっており、中央部で石囲み炉が確認できた。６号住居址の西に接していることから、この５列のグリッドには５号から７号までの３軒の住居が一列に並んで発見されたことになる。時期はいずれも後期後半と思われる。

本址は竪穴であるかどうかは確認できなかったが、本来は石で囲まれていたとみられるもので、乱れてはいるが、石の広がる範囲から5.0ｍ×4.8ｍ程の方形プランの住居と推測される。床は、褐色土中にあることから堅くはない。柱穴は確認できなかった。炉は二重に石で囲まれている。内側の石は４個ほどであるが立ち気味であるのに対し、外側はやや平らに敷かれたかのようである。北側は抜かれてしまったのか、石が見当たらない。規模は、内側で70㎝×65㎝、外側で150㎝×140㎝、深さ17㎝を測る。南隅に埋設土器（第９図0701）がある。無文の深鉢形土器で、正位の状態であったが、あたかも石で囲まれた空間部に埋設されたかのようである。この土器の位置と炉の中心とを結んだ線は、南北に近い。遺物は、土器破片が主体であるが、他に土製耳飾りが覆土中から５点出土している。後期後葉の住居である。

出土土器（第９図0701）（第13図13～37）

0701　埋設土器である。無文の粗製土器で、外面上半分は黒褐色で部分的に煤付着。下半分は熱を受けたらしく赤褐色を呈する。内面には炭化物の付着が著しい。口縁部を三分の一程欠損する。底部網代痕。

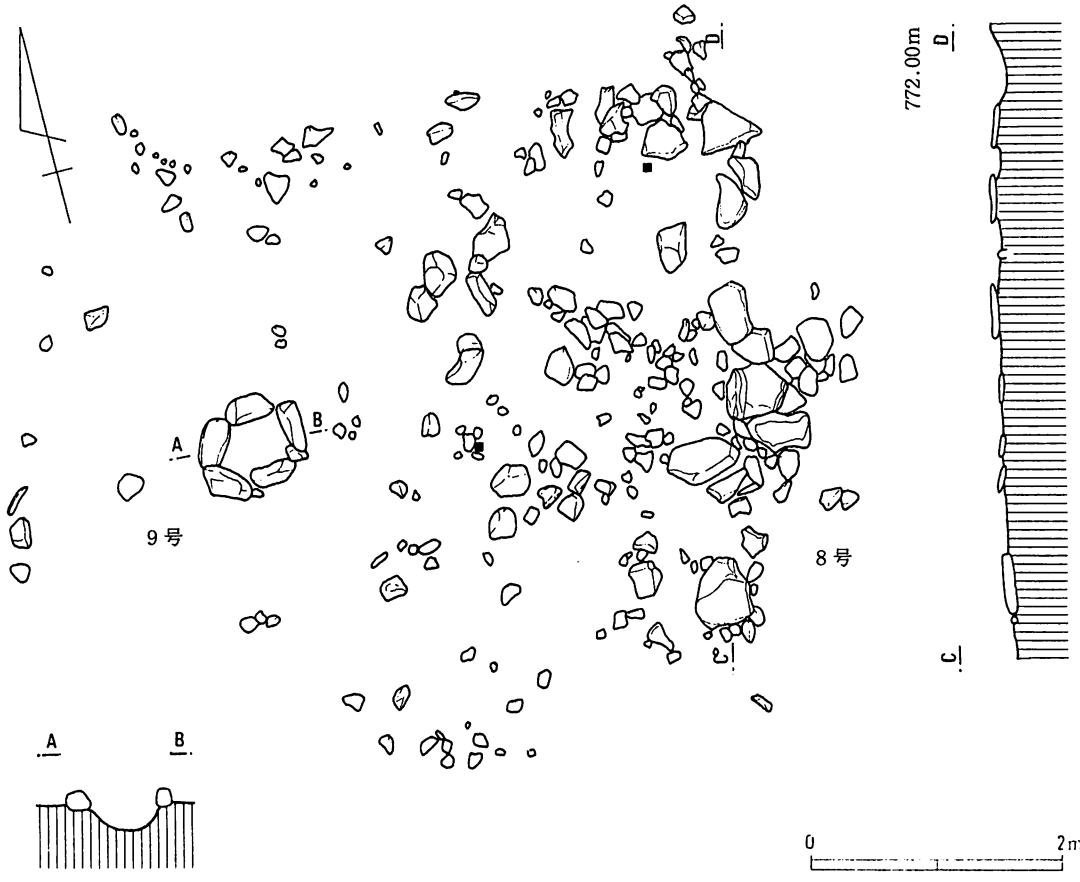
第13図13～21、26は平口縁で縄文の施された深鉢形土器である。13は「く」字形に屈折する口縁部の土器で、口縁と平行に二条の沈線が走り、その上下に縄文帯がある。屈折部には横長楕円のコブ状の張付けがあ



第14図　第７号住居址(1/60)

る。頸部以下には羽状沈線が付けられている。14・15・18・19・26も同類であろう。しかし14は平行沈線はなく口唇から屈折部までの幅が短く、頚部以下の羽状沈線は細い。また、18は縄文帯の間にある無文帯の幅が非常に広い。以上の口縁部断面形状には、丸みを帯びたもの（13、15)、内側がそがれ尖ったもの（14、18)、中間のもの（19）等がある。色調は概ね茶褐色を呈する。16は幅広い縄文帯がみられる。17は頚部付近の破片と思われるが、縄文帯に刺突文が連続する。20、21も「く」の字形口縁の土器である。20は、平行沈線と、それに直行する三日月状沈線とから構成されるもので、沈線間に縄文が充填されている。21には三日月状の沈線とそれを取り巻く円弧状の沈線とがみられる。赤彩が残っている。24・25・27・29・20は、「く」の字形に屈折する平口縁の深鉢形土器で、縄文のない一群である。前述した13等と比較して、縄文を除けば文様構成や器形の類似した土器である。24は屈折部がゆるくやや丸みを帯びている。口縁と平行に三条の沈線が走る。以下羽状沈線が施され、さらに頚部に横走する浅い沈線を境に、胴部以下にも羽状沈線が認められる。25は屈折の強い器種で、三条の沈線と太い羽状沈線とが施される。屈折部に張付け文の痕跡がある。27では、２本１単位の平行沈線２単位と羽状沈線とが、同じ口縁部文様帯に施されている。29は屈折部に横長楕円形の張付け文があり、以下羽状沈線が付けられている。30は、羽状沈線の施された胴部破片である。

22は沈線と連続刻目のある口縁破片。23は文様構成からは27に類似し、羽状沈線と平行沈線とがみられるものである。28は屈折部に平行沈線と円形コブ状の張付けのある胴部破片である。33は三日月状の張り付けがあり、沈線で区画された中に刺突状の短い沈線が付けられている。34は、刻目の連続する隆線が口縁と平行に走り、さらにその隆線から口唇にかけて、縦長のコブが付けられている。31、32は波状口縁の深鉢形土



第15図　第８号・９号住居址(1/60)

器である。31は波頂部の破片、32は波谷部付近の破片である。いずれも、口縁部内側が肥厚する。35は無文の浅鉢形土器であろうか。36～39は粗製の深鉢形土器である。36は２本の沈線が平行し、以下に条痕がみられる。37～39は押圧のついた紐線文土器で、39は口唇にも刻目が連続する。

第８・９号住居址（第15図）

発掘区中央部の東端、Ｃ－８区に位置し、第１号配石と第17号住居址との間にある。この一帯は、遺物包含層まで比較的浅く、石が散乱する場所であった。まず、安山岩の偏平な石が並んで発見され、次いで石囲い炉が見つかった。ただ、それらの位置が離れ過ぎているとともに、炉址のほうがレベルが低いことから、両者は別の遺構であると判断し、偏平な石の敷かれたものを８号住居、炉を９号住居とした。

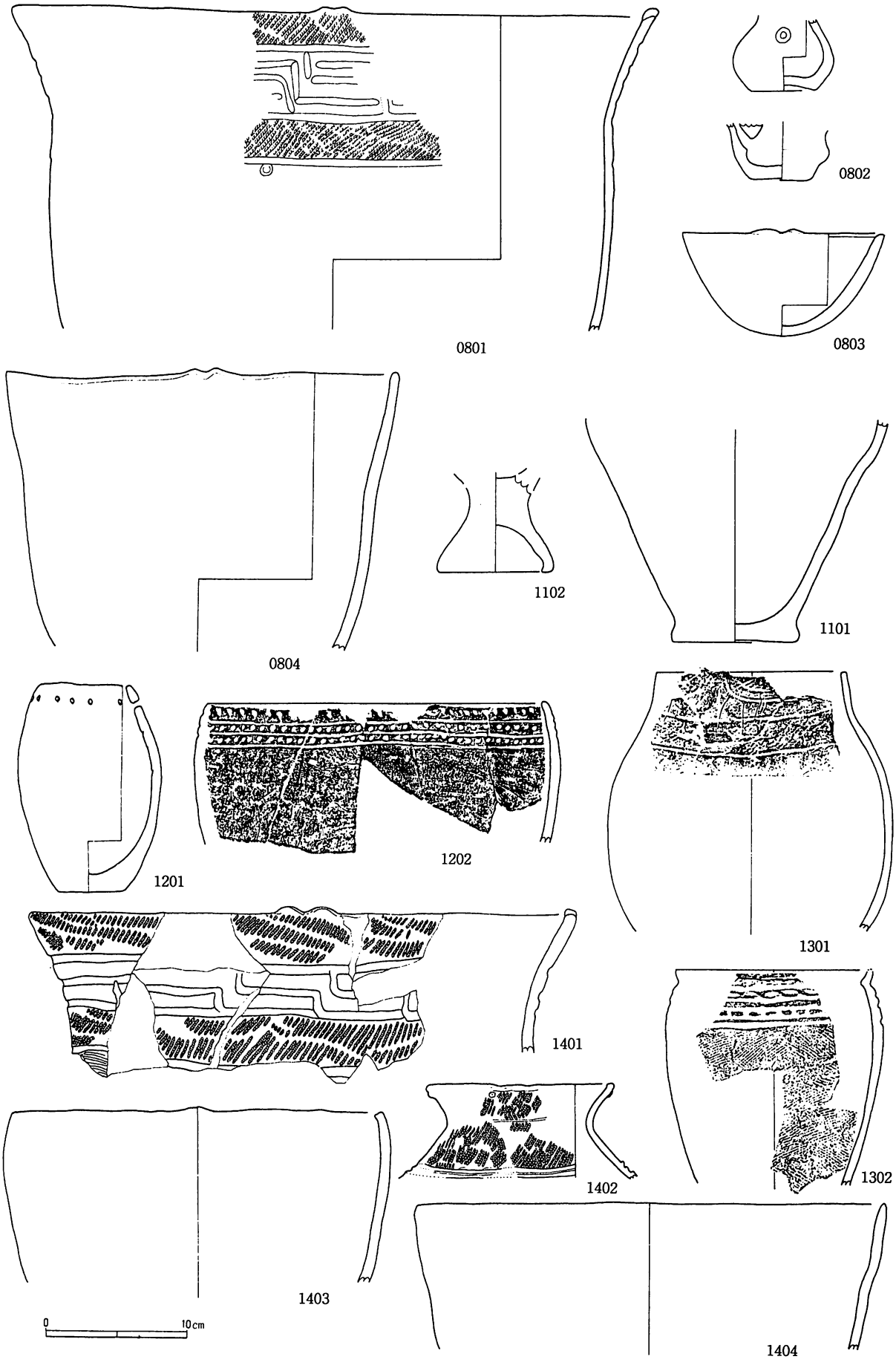
まず８号住居址は、長さ40～60㎝、幅20～40㎝の偏平な石が複数配されている。本来は床面に広く敷かれていた可能性があるが、大半は撹乱され僅かに東側だけにのこったものと考えられる。付近の石の散布状況からみて、一辺５ｍ前後の規模であったと推測される。炉は残っていない。

９号住居址は、炉跡しか分からないが、長さ40㎝程の細長い石５個から成る、80㎝×75㎝の規模のものである。炉の状況からすると、後期前半の時期の可能性がある。

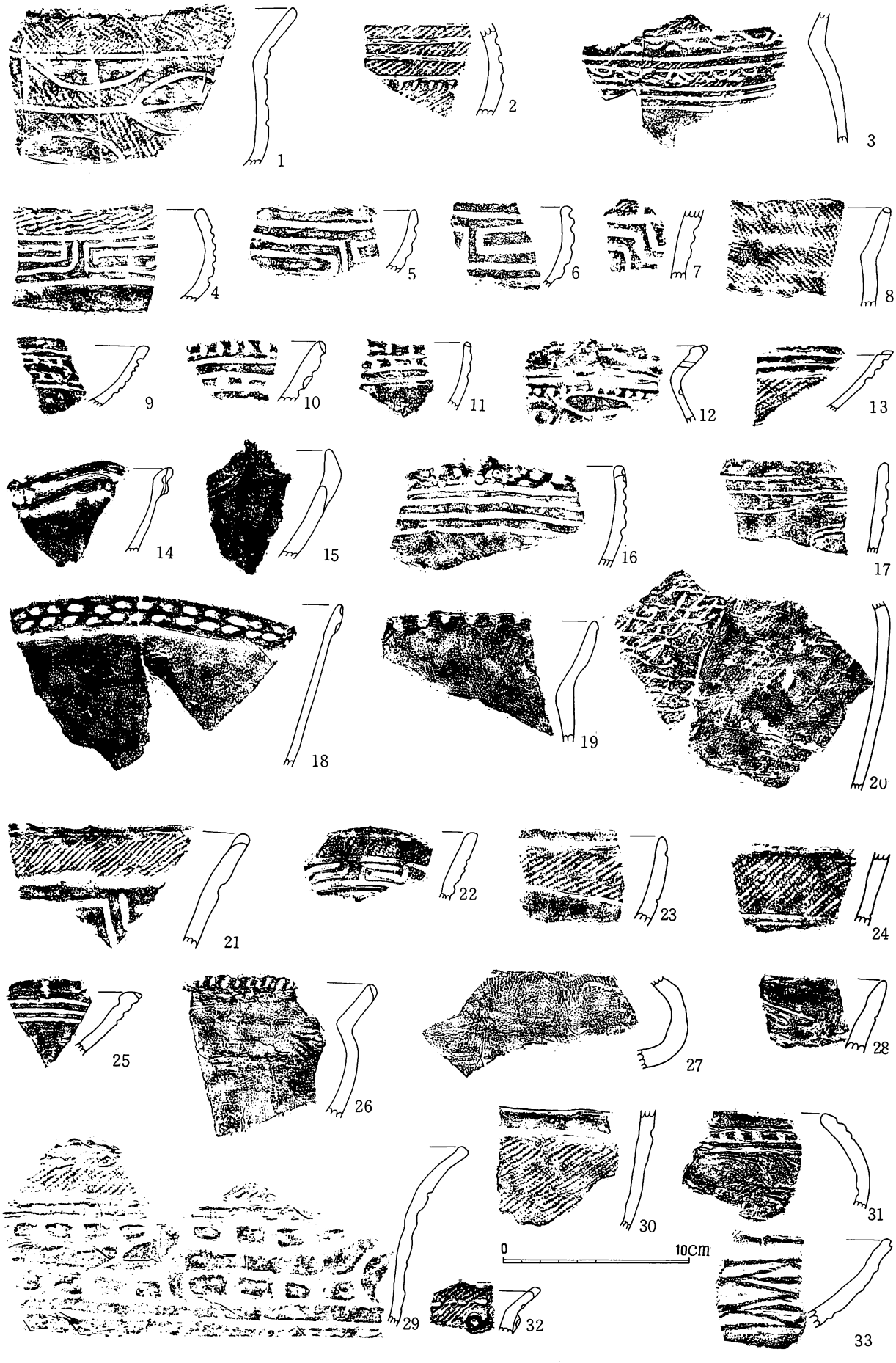
なお、この区域については現地保存が決まったため遺構下部の調査を行っていないことから、８・９号とも柱穴の確認はしなかった。

出土土器（第16図）（第17図１～20）

0801は深鉢形土器の口縁部破片である。平口縁であるが、小突起がある。頸部はゆるくくびれ、その部分に「鍵の手文」状の沈線が連続する。上下には縄文帯がある。石英、長石などの粒子を混入する茶褐色の土器である。0802は床面から出土したミニチュア風の注口土器である。上半分を欠くが、よく磨かれた黒色を



第16図　土器実測図(第８号・11号～14号住居址)(1/4)



第17図　土器拓本（1～20　第8号住居址、21～28　第9号住居址、29～33　第10号住居址）（1/3）

呈する。底部網代痕あり。0803は小型の浅鉢形土器である。胎土には砂粒が多い。0804は無文の深鉢形土器の破片である。平口縁部であるが、小突起２個１単位がみられる。胎土中には石英・長石などの粒子が非常に多い。内面下部には炭化物付着。

第17図１～20は覆土を中心に出土した破片である。１は壷形土器で、弧線が連続するが、沈線をはさみ上下の弧線が連結する部分もある。弧の内部以外は縄文が施されている。２は口縁部付近の破片である。横走する平行沈線と縄文帯とから施文され、頚部は羽状沈線になると思われるものである。屈折部には刻目が連続する。１・２は後期後半の土器である。３は胴下半部の膨らむ深鉢形土器の、頚部から胴上半にかけての破片であろう。頚部には、まず縄文が施され、次いで小さい弧文が連続し、その上で平行の沈線が付けられている。内外面ともよく磨かれている。４～７は「鍵の手文」の土器である。４の口縁部には無節の縄文が走る。浅鉢形土器であろう。７は深鉢形土器の頚部破片である。９～13は羊歯状文を中心とした東北地方晩期前葉の土器である。12は壷形土器の口縁部破片で、小口２孔が貫通する。13は浅鉢形土器と思われる。14～17は中部地方に特徴的な一群の土器である。14は波状口縁で、隆帯二条が口縁上端に走り、波谷部にはその二条を別の隆帯がコブ状に結んでいる。器壁は磨かれ、黒褐色を呈する。15は小型の深鉢形土器破片で、小さな突起があり、口唇に連続刻目、口縁上端に平行沈線と連続刺突とがみられる。17は平口縁の深鉢形土器で、沈線による入り組み文であろうか。清水天王山式土器である。18は口縁が帯状に肥厚しており、竹管状の工具により浅い刺突が二段連続する。肥厚部直下には僅かながら条痕様の整形痕が残る。他は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒や雲母片が混入し、赤みを帯びた褐色を呈する。東海地方晩期前半の土器であろう。20は網目状撚糸の施文された深鉢形土器の胴部破片である。

第17図21から28は第９号住居址出土土器である。21・22は雷文の土器で、口縁部には縄文帯がある。24もその一群の可能性がある。25は浅鉢形土器破片で、よく磨かれており、口唇には三叉状ないしＴ字状の沈線がみられる。27は浅い沈線と細かい連続刻目が充塡されており、屈折部には張り付け文がついていた痕がある。28は平行する２本の斜行沈線間に細長い刺突が連続している。安行系の晩期前半の土器であろう。26は無文の深鉢形土器で、口唇に刻目が連続する。

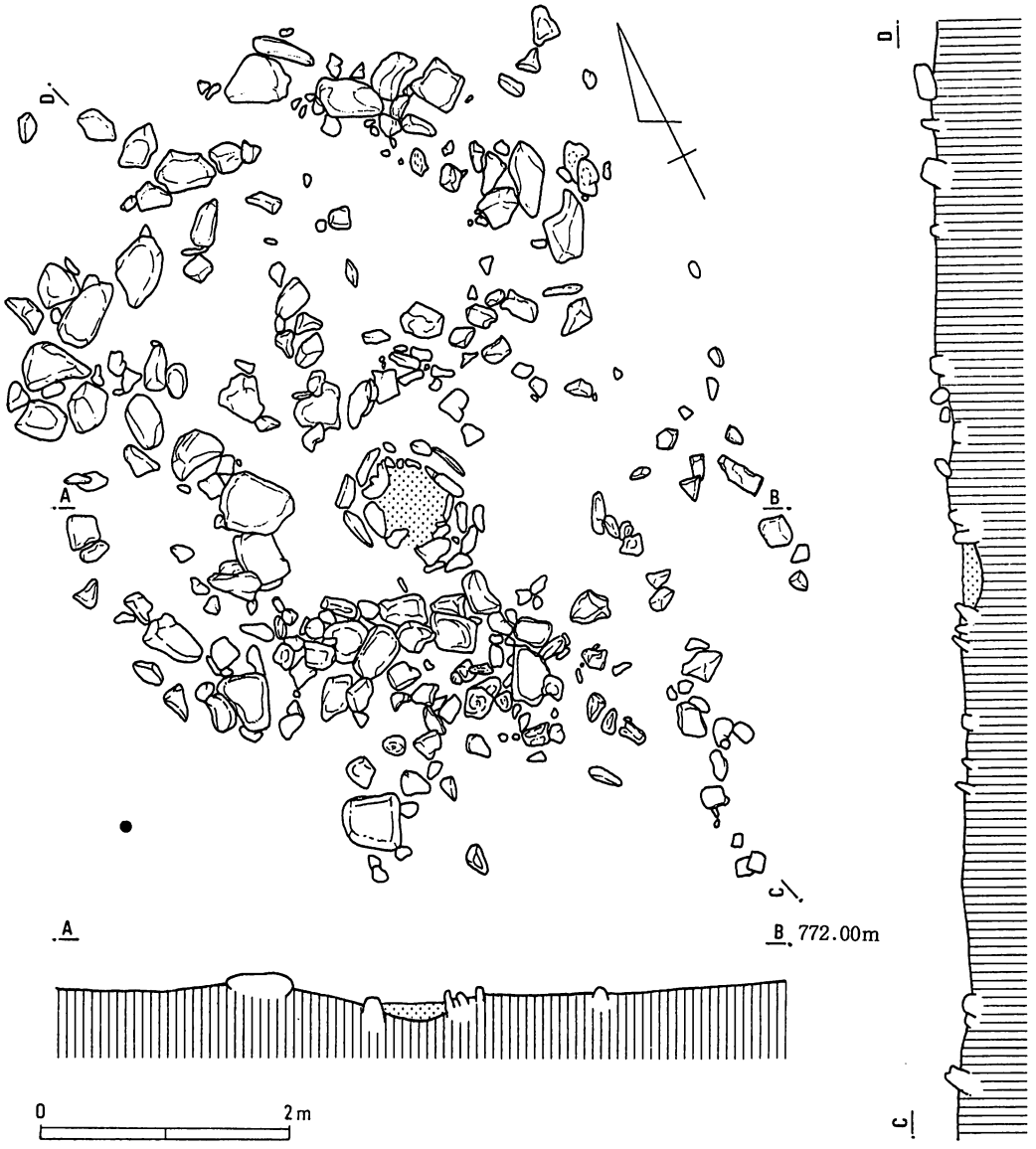
第10号住居址（第18図）

発掘区のほぼ中央部にあたるＤ－８区に位置する。この８列からは、第８～14、17・18・20号等の住居が発見されている。特に、第10～14号は類似した形態の住居で、１号配石と平行して等間隔に並ぶ傾向がある。第18号も含め、これら５軒の住居は時期的にも近いものとみられる。

本址は、石で囲まれた住居であるが、石が著しく散乱していることから、そのプランや形状は不明瞭であった。平面図を確認すると、石の並び方から、五角形ないし六角形のプランが推測される。五角形の場合、長軸（南北）６ｍ、短軸５ｍ（東西）程度の規模である。六角形では、主軸（南北）5.6m程であるが、この場合、南端に少量ながら石が延びて散布する箇所があり、後で述べる13号や18号住居址に見られる「張出し」部の可能性がある。床面は褐色土であり、あまり堅緻ではない。覆土および周辺の土は黒褐色土であり、上面からの精査にもかかわらず、遺構の落込みは確認できなかった。従って、土器の出土量や石の配列、炉の所在等から住居と確認できたものである。炉は二重に石をめぐらしているが部分的には三重の箇所もある。外側の直径110×100㎝、内側径50㎝、深さ18㎝の炉である。柱穴の確認は行なっていない。住居内からは多くの土器が出土している。晩期前半の住居である。

出土土器（第17図29～33）

29は、深鉢形土器の口縁部破片である。非常に粗い羊歯状文の土器で、外反する口縁には縄文が施されている。口唇には小突起がみられる。外面炭化物付着。31には三条の沈線が横走、上二本の沈線間に刺突が連続する。浅鉢の破片であろうか。32は山形の小突起を持つ深鉢形土器口縁部破片で、縄文帯に刺突とコブ状の張り付けがみられる。コブ付近の刺突は小さな円形である。33は晩期後葉、浮線網状文の浅鉢形土器である。

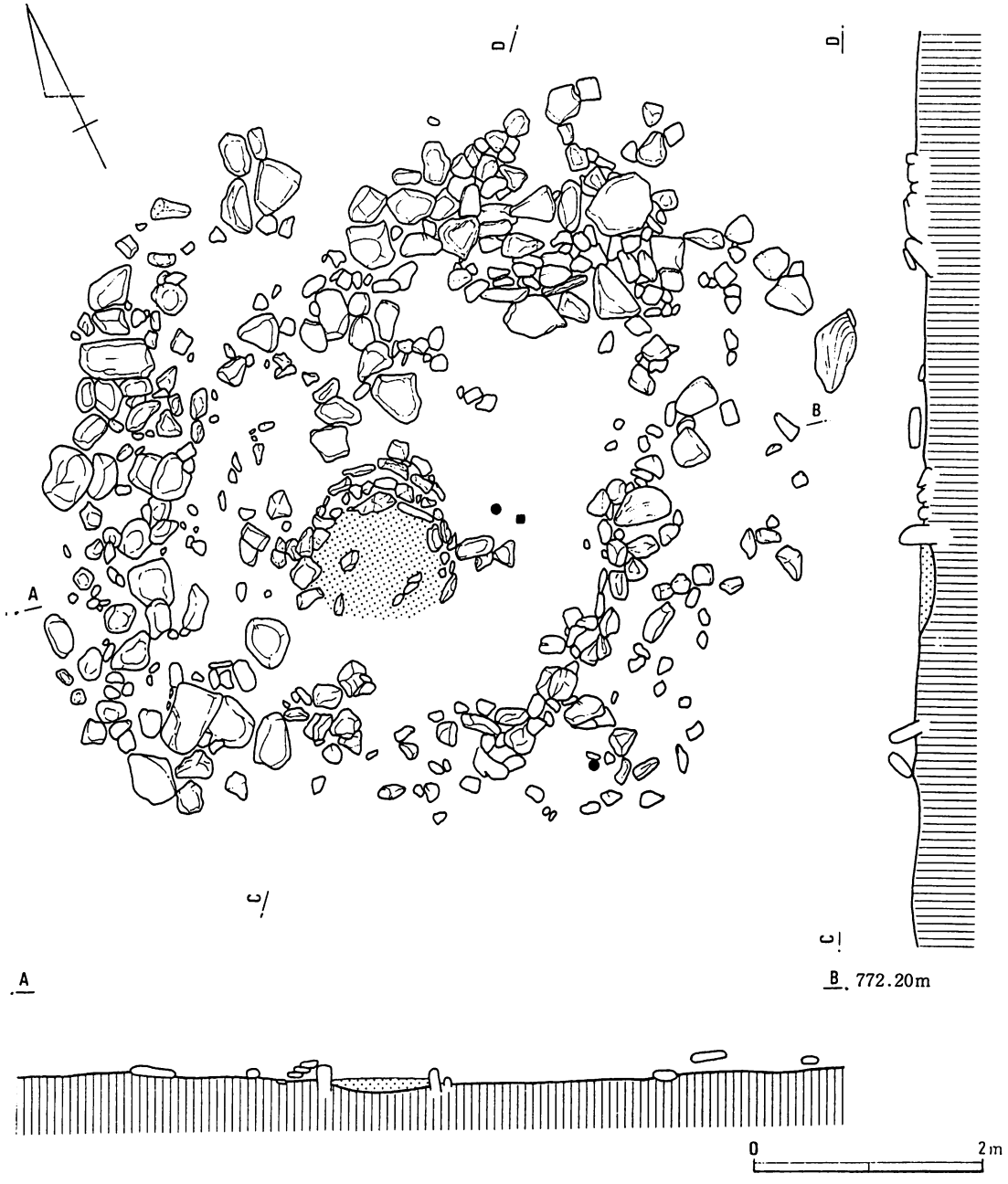


第18図　第10号住居址（1／60）

第11号住居址（第19図）

発掘区の中央部、E・D－8区に位置する。東3mに10号住居、西2mに13号住居がある。黒褐色土を掘下げていると土器が多く出土し始めたので、一帯を精査したところ、まとまりのある石列を検出した。全形は方形を基調としており、その規模は北西－南東の軸5.5m・北東－南西の軸5.5mを測る。東壁から南にかけての石列が乱れているが、本来は正方形に近い整った形状の住居であったと思われる。西壁および北の壁とみられる石列は、外側から内側に向け傾斜している。本来、浅い掘り込みの壁面に、数段の石をはりつけ並べた『石壁』ともでも言うような状況ではなかったろうか。なお、この浅い掘り込みは竪穴といった構造のものではなく、平地式に近いものであったと考えられる。それは、本址の南3mに隣接する第1号配石が当時の地表面に構築されていたとすれば、第1号配石を構成する石と本址を取り巻く石のレベル差があまりないことから判断できる。こうしてみると、本址のような石囲み住居に共通する構造が推測されよう。

炉は、直径140cmもある大型の石囲みのもので、住居中央部よりやや南西壁に寄った位置にある。炉の南西側は石がめぐっていないのに対して、反対側である北東部では三重にもなっている。この三重部分の構造は、最も内側に大きい石をしっかりと埋め込み、最も外側に薄めの石を立たせ、両者の間に小振りの石を据



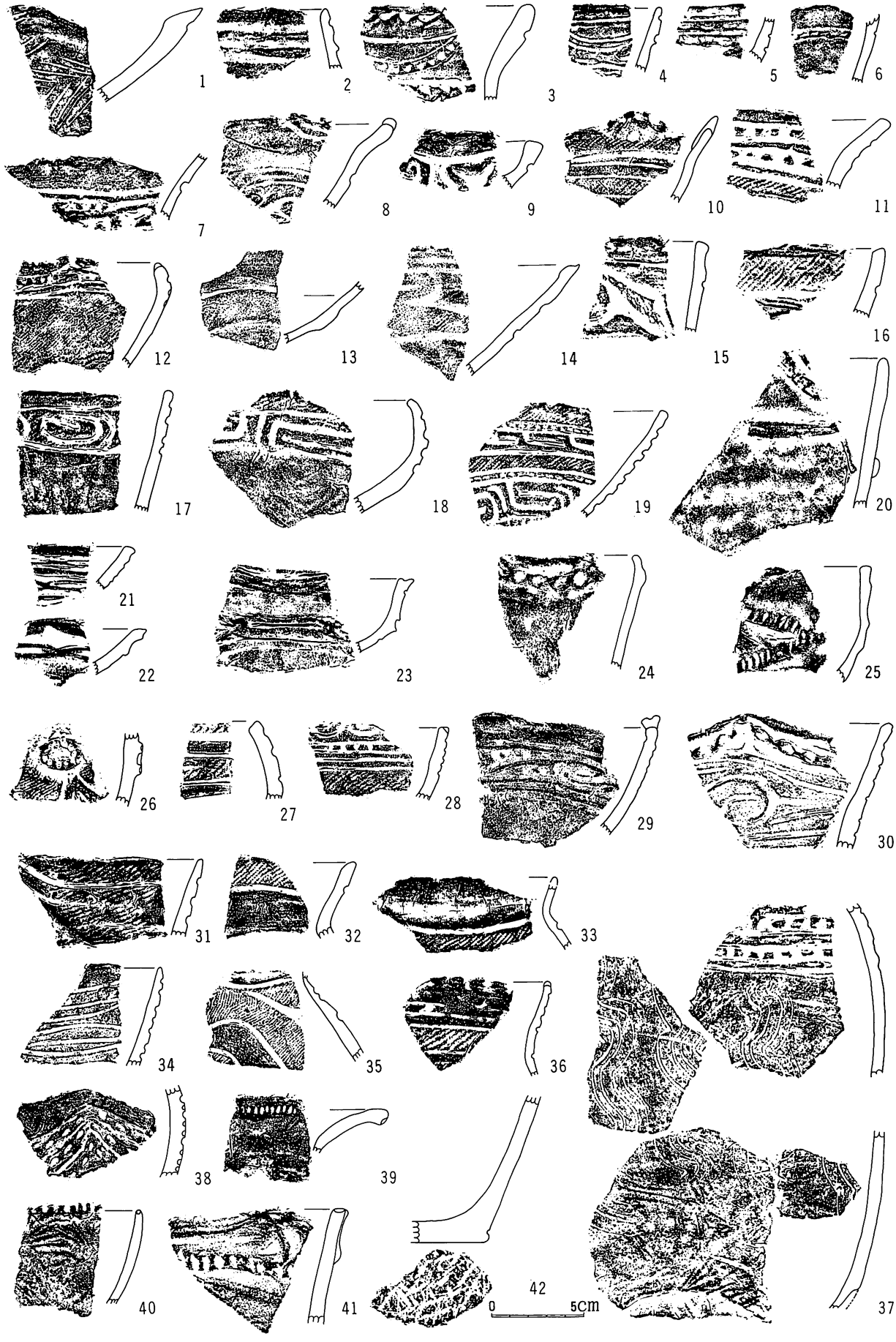
第19図　第11号住居址（１／60）

えつけてあるという状況である。この炉石のない箇所と、その反対側の三重になった部分とを通る線を主軸とすると、住居の方向はＮ－26°－Ｅとなり、南北より東に偏っていることになる。現状保存された住居であり、石列や床面下の調査は行なっていない。土器の出土量は多い。他に耳飾り２、土偶１、それに少量ながら焼けた獣骨片なども出土した。晩期前半の住居である。

出土土器（第16図）（第20図１～25）

1101は炉の中より出土した深鉢形土器の胴下半部である。1102も炉付近から出土した台付土器の台部で、無文であるが二次焼成を受けたらしく赤褐色を呈し、器面は磨滅している。

第20図１から25は住居覆土から出土した破片である。１から８は沈線および刺突文の土器で、１は波状口縁の深鉢形土器であろう。羽状沈線がみられる。第４群加曽利Ｂ２式土器である。２は第５群の凹線文土器の一群と思われる破片である。３は半截竹管状の工具によると思われる沈線と刺突が連続している。４は清水天王山式土器であろう。５の沈線は細いが、刺突文とともに彫りは深い。６の列点状の刺突文は19のそれ



第20図　土器拓本（1～25　第11号住居址、26～30　第12号住居址、31～42　第13号住居址）（1/3）

に類似している。７～９は縄文と三叉文とが施される土器で、10もその可能性がある。９は深鉢形土器の頚部と思われ、羊歯状文の中に三叉文がみられる。８および10は鉢形土器であろう。いずれも小突起があり、その張り付け部分は口縁内面にまで及んでいる。内面はよく磨かれている。11、12は地文縄文で平行沈線と刻目が連続する羊歯状文の一群であろう。いずれも深鉢形土器だが、11は外反、12は内湾する器形である。７～12は晩期前半の大洞Ｂ・ＢＣ式併行であろう。13は皿形に近い器形で、縄文帯が浮彫りされている。14も皿形の土器で、磨消縄文が雲形状にうねっている。15は列点文と三叉文が半肉彫り状に施されている。晩期中葉の土器で、14は大洞Ｃ１式に、15は安行３ｃ式に比定できようか。16～19は縄文と沈線とで飾られる土器である。特に17～19は雷文土器である。17の雷文はくずれて丸みを帯びている。18はいわゆる「入組み鍵の手」文で、鍵の手間に短線が入るものである。19には、一条の「鍵の手」と二条の「鍵の手入組み」とが二段に付けられている。鉢形の土器であろう。21・22は晩期後葉の浮線網状文で、23も屈折部に細い眼鏡状の浮文が付けられている。20、24，25は隆帯のある無文の土器である。いずれも深鉢形土器の口縁部で、24は楕円状の押圧、25は爪形の刻目が付けられている。

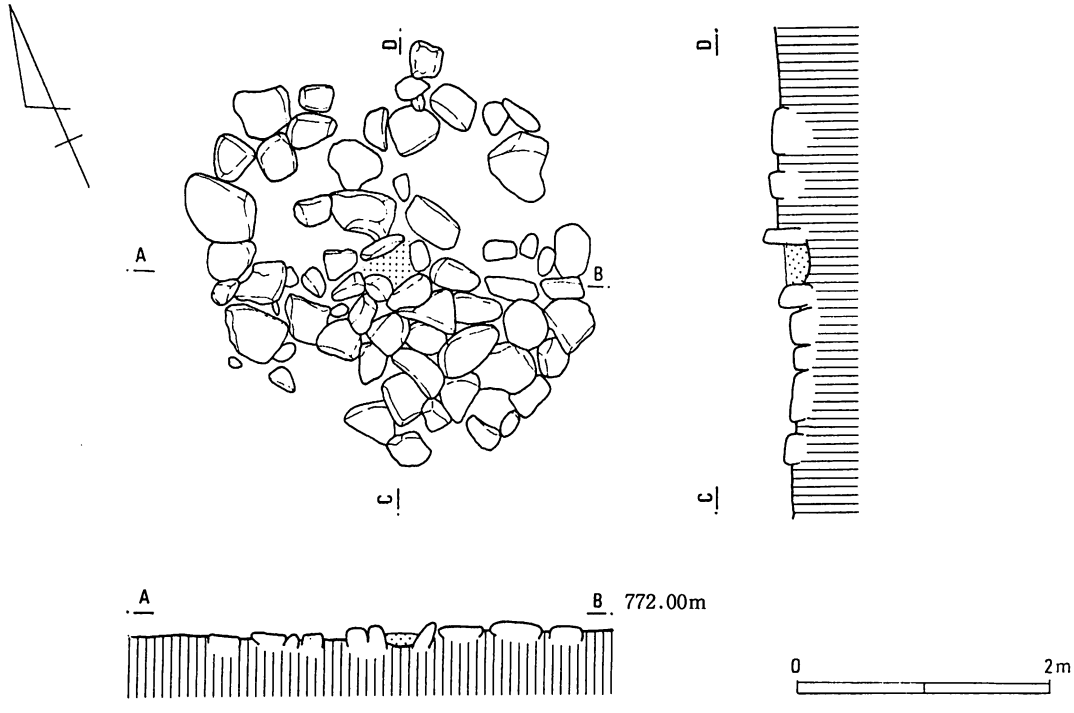
第12号住居址（第21図）

Ｅ－７・８区の、第１号配石に接するような位置に発見された。また、本址の北東部の床上には、第13号住居址の張り出し部と思われる一部が重なっている。長軸3.5m、短軸3.0mの五ないし六角形に近い形状を呈する敷石住居である。床全面に偏平な石が敷かれていたと思われるが、抜き取られている部分もある。中央に炉が設けられているが、焼土の量は少ない。炉はほぼ正方形で、４個の石がこれを取り巻いている。この炉石は西側のものを除き、敷いてある石より高い。南東側の床面には石棒が利用されている。あるいはこの付近が入り口方向かもしれない。

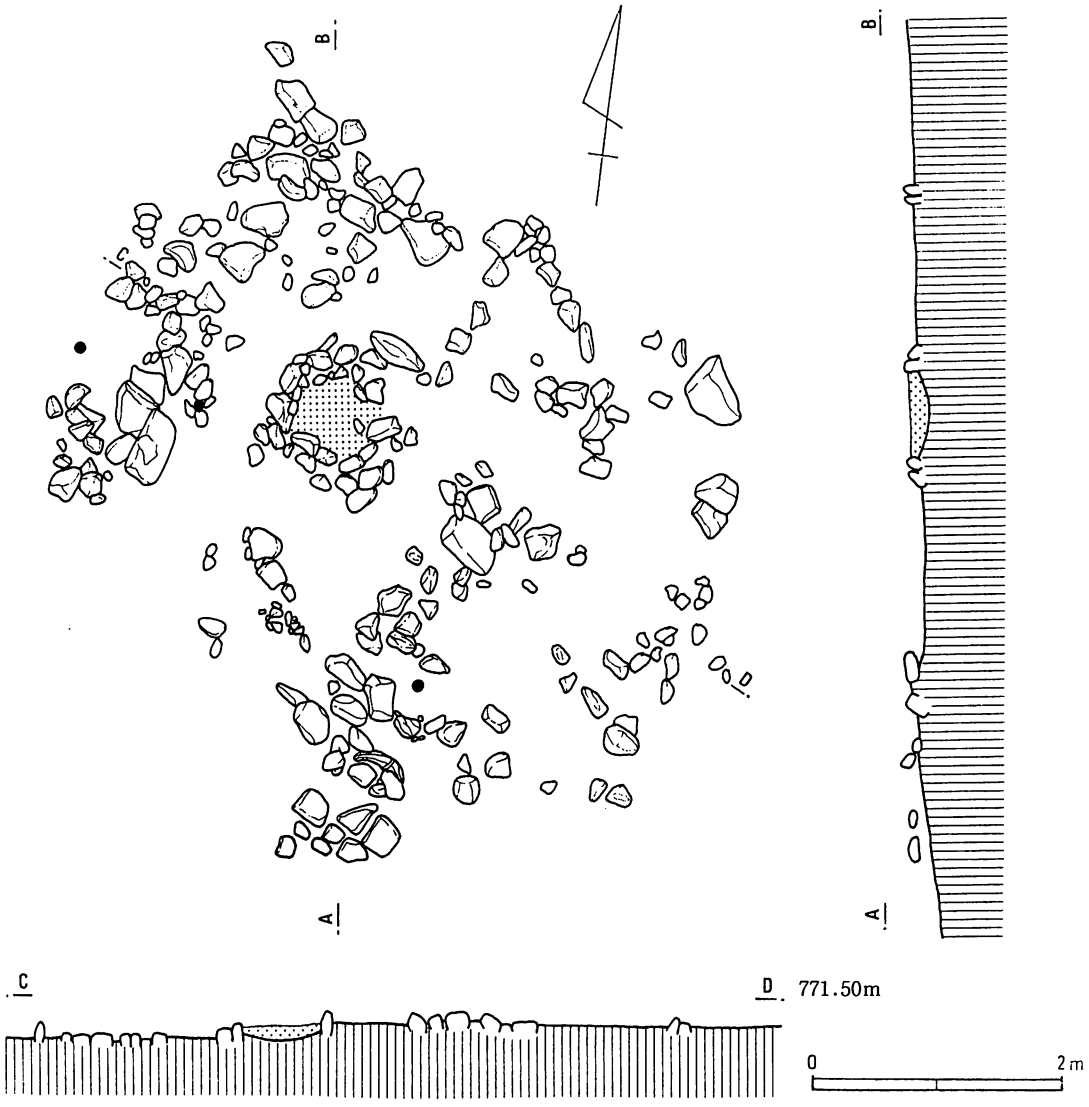
黒褐色土中に構築されており、壁の立ち上がりを確認することができなかったことから、竪穴かどうかは不明である。床面の石の上にのった状態で、小型の土器1201が出土した。後期前半の住居であろう。

出土土器（第16図）（第20図26～30）

1201は有孔の壺形土器である。無文だが口縁部に小穴が14個貫通している。1202および第20図26～30は覆



第21図　第12号住居址（１／60）



第22図　第13号住居址（1／60）

土から出土した破片である。1202は平行沈線と列点文が連続する。26は磨消し縄文で、刺突文がついたドーナツ状の張り付けがある。後期前半の土器である。27は「く」の字口縁を呈する深鉢形土器の破片であろう。後期後葉に位置付けられる第5群土器と思われる。29は歯状文がみられ28とともに大洞BC式に比定される。30は入組みの三叉文や、ゆるく流れる沈線が施されている。口縁部には小さい山形の突起が付けられ、その部分を頂点に押圧の連続する隆帯が走る。清水天王山式土器である。

第13号住居址（第22図）

E－8区にて黒褐色土中に石の列が発見され、調査の結果住居と確認されたものである。ほぼ同時期の住居である第11号の西2m、14号の東1.5mにある。一辺が3.5m程の方形を呈する石囲み住居である。さらに、南隅から長さ1m、幅90cmの範囲に石が集中している。この石のレベルは、住居の床と見なした面よりも10cm程度高いが、炉石の上端とほぼ同じ高さにあることから、本址の張り出し部と考えても良さそうである。そうした場合、住居のコーナーに張り出しが作られていたことになる。同様の例は第18号住居址にもあり、入り口に関する施設と考えられるものである。このように考えると、対角線上に住居の主軸があり、その方向はN－14°－Wである。入り口はやや東寄りの南を向くことになる。床は褐色土中にあり、堅くはないこ

とから、検出が難しく、炉の面を基準に確認した。炉は石囲みの、直径約１ｍの円形で、概ね石が二重に取り巻いている。この炉石は、内側が立てられているのに対して、外側の石はそれらを支えるかのように低く平に据えられている。焼土が堆積している炉石の内側の径は60㎝程である。柱穴は不明である。入り口部とみられる張り出し部は、本来もっと石が敷かれていたと思われるが、現状はまばらに石が残っている程度である。なお、この部分が、12号住居の床上に延びていたことから、新旧関係は明らかである。本址の時期は、晩期前半である。多くの土器とともに、土製耳飾り２、土偶１なども出土している。

出土土器（第16図）（第20図31～37）

1301　最大径が胴部中位にある壷形に近い形状の深鉢形土器である。全体の三分の一ほどの破片で、口縁部には小突起がある。その突起下部の頚部には、浅いが三叉文がみられ、さらにその下方には入組み風の向き合った三叉文がある。全体には沈線で区画された、磨消し縄文である。砂粒を多く混入し、ザラつきがある。

1302　小型の深鉢形土器である。最大径は胴上半にあり、口縁は短く、外反する。頸部から胴上半にかけて、沈線が平行し、沈線間に刻目が連続する箇所もある。胴部には細かい縄文が羽状に施されている。赤褐色を呈する、よく磨かれた薄手の土器である。

第20図31～33、35、36は縄文の付けられた土器である。31は小突起の下方に、三叉文と思われる彫り込みがみられる。35は彫りの深い三叉文のある壷形土器である。32、33は広い口縁の壷形土器であろう。これらは大洞Ｂ式ないし安行３ａ式平行に位置付けられよう。34は沈線が緩やかにうねる清水天王山式である。36は羊歯状文の土器、37は胴上部に沈線と刻目が連続し、以下櫛歯状工具による波状沈線（４本単位）が縦方向に付けられている。器面は粗れている。38は列点状の刺突文がある。39・40の口唇部には刻目が連続する。41は山形突起のある深鉢形土器で、口縁と平行に、刻目のある凸帯が走り、突起部ではその頂上部と凸帯とを結ぶ高まりがある。42は網代文のある底部破片である。

第14号住居址（第23図）

Ｆ－８区にて発見された。東1.5ｍに第13号住居、西３ｍに第18号住居がある。第10、11、13号と同様に石囲み住居であるが、残存状況はあまりよくなく、プランは不明瞭である。北西壁および南東側の一部に石列がよく残っており、これらから推測すると、一辺4.5～ 5.0ｍ程度の方形を基調とした住居と思われる。床は褐色土で、不明瞭である。住居内には石が散乱しているが、炉は良く残っている。石囲み炉で、直径１ｍほどの円形のものである。側石がめぐっているが、南西側にはみられない。柱穴は不明。多くの土器に加え、耳飾り６個が出土している。晩期前半の住居である。

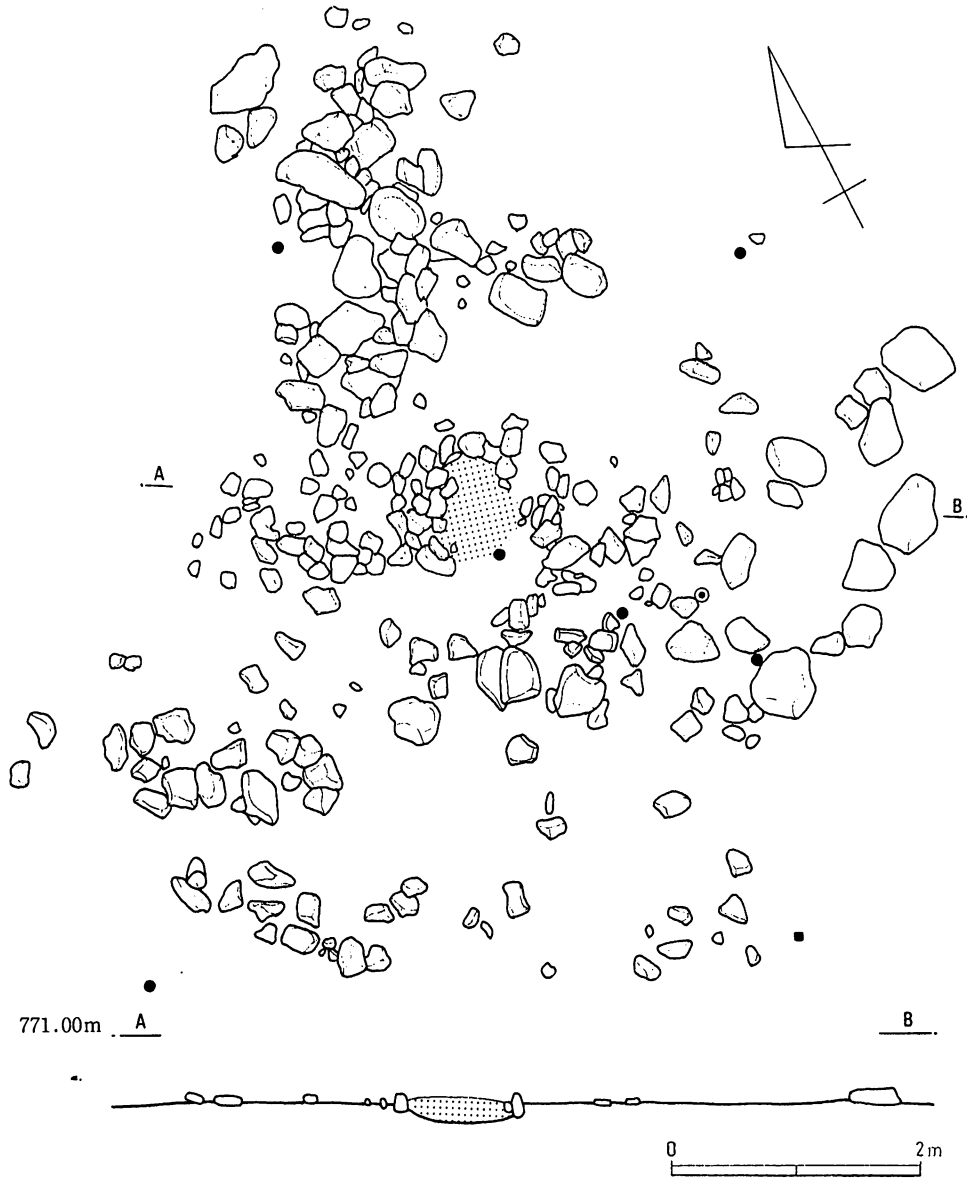
出土土器（第16図）（第24図１～24）

1401　口径39㎝程と推測される深鉢形土器の口縁部破片である。ゆるく括れる頸部に、一条の「鍵の手」文が連続する。その上下は縄文帯であるが、胴部には条痕が施されている。口縁部には小突起がある。茶褐色を呈する焼成良好な土器である。

1402　壷形土器の上部破片である。全面無節の縄文が施されているが、頸部と肩部とには沈線がみられる。肩部のものは、篦を押し付けた程度の沈線である。口縁部上端に小さい瘤状の張り付けがある。

1403、1404は無文深鉢形土器の口縁部破片である。

第24図１～24は覆土を中心に出土した破片である。１は平口縁の隆起帯縄文の土器である。２はゆるい波状口縁の土器で、細い沈線の上に縄文が付けられている。口縁部は若干肥厚しており、「ブタ鼻」状隆起がみられる。それぞれ安行１式、安行２式併行の土器であろう。３は入組みの帯縄文の施されたもので、壷ないし注口土器の破片であろう。東北系の土器である。４は凹線状の沈線が走る土器で、口唇には押圧が連続する。５～８は羊歯状文およびそれから派生したと思われる文様の土器である。６は壷形土器であろうか。口唇が細かい波状をなしている。５～７が黒ないし茶褐色を呈しているのに対して、８は白味のある色調である。口唇に刻目が連続し、以下羊歯状文から変化したとみられる、沈線と刻みによる文様が付けられてい



第23図　第14号住居址（１／60）

る。北陸方面の晩期前半の土器に共通する。10は壷の肩部付近の破片と思われ、縄文帯の下方に羊歯状文とみられる文様が付けられている。12も壷形土器で、雲形文と思われる磨消縄文で飾られている。大洞Ｃ１式に併行するものであろう。縄文は施されていないが、17および18もこの一群と思われる。17は皿ないし浅鉢形土器であろう。11は、外反する深鉢形土器で、縄文を地文とし太い沈線および列点状の押し引き文が連続する。口唇には小突起がある。沈線は横走するが、状況からして「鍵の手」に近い。15、16は「鍵の手」文の土器で、15は二条の入組み、16は一条である。12は沈線による入組み三叉と思われ、沈線間に刺突文が連続する。清水天王山式土器の一群であろう。14は口縁部破片であるが、沈線により矢印のような文様が描かれている。19～24は無文の土器である。19は浅鉢形土器あるいは皿形土器の底部であり、中央が円形に削り窪まれている。20は押圧の連続する隆帯文の土器、21は折り返し口縁部の土器である。22は頸部に段のある深鉢形土器で、口縁に押圧が連続するため、小さな波状をなしている。23の外面には輪積み痕が著しい。26には条痕が認められるが、器面が磨滅している。

第24図　土器拓本（１～24　第14号住居址、25～36　第15号住居址、37～40　第16号住居址）（１／３）

第25図　第15号住居址（1／60）

第15号住居址（第25図）

発掘区の南端、D－3区で発見された。黒褐色土を掘り下げている内、土器や石の量が多くなってきた。調査を進めると、中央部から焼土が見つかったため住居と見なした。竪穴状の落ち込みや石列などは確認できなかったため、プランや規模は不明瞭である。遺物や石の分布状況から4～4.5mの規模と推測される。床面には堅い場所は見られない。径80cmの範囲に焼土がみられ、20cm程の掘り込みがあることから、これを炉と見なした。また、床とした面に石が少量散乱しているが、南側にややまとまっており、偏平なものもいくつか認められた。土器片および石器が出土したが、特に炉の南側の床面から出土した打製石斧（第122図8）は長さ23.7cmもある大型のものである。本址は、後期中葉加曽利B2式期の住居である。出土土器（第24図25～36）

25は帯状の磨消し縄文のみられる深鉢形土器破片である。26は深鉢ないし鉢形土器と思われるが、口縁部に楕円状の張り付けがあり、小突起をなしている。ゆるい屈折部の外面には押圧文が連続し、内面には2条の沈線がめぐる。27は、浅鉢形土器とみられる口縁部破片で、「く」の字形に強く屈折する。口縁部には、「の」字状の張り付けがあり、屈折部に連なっている。屈折部には刻目が連続する。28には弧状の磨消し縄文がみられる。椀形土器と思われる。29は口縁と平行に磨消し縄文がみられる。器壁の厚い土器である。30～32は斜沈線の施された土器である。30・31は波状口縁の深鉢形土器で、30は格子目状、31は羽状の沈線で、口縁に刻目が付けられている。32は浅鉢ないし台付きの土器と思われる、口縁部破片である。外反する口縁部に羽状沈線が施されている。33・34は「く」の字形に屈折する口縁部の深鉢形土器であろう。33は縄文を地文とし、平行沈線や斜行沈線が付けられている。35は、台付き土器の台部の破片と思われるものである。

台部に窓が付くようで、器体部との接合部には刻目の連続する隆帯がめぐっている。36には、「掘り起こしコブ」の付けられた入り組み帯縄文と、大豆状のコブが張り付けられた連続刺突文帯とが見られる。深鉢形土器の胴部破片である。

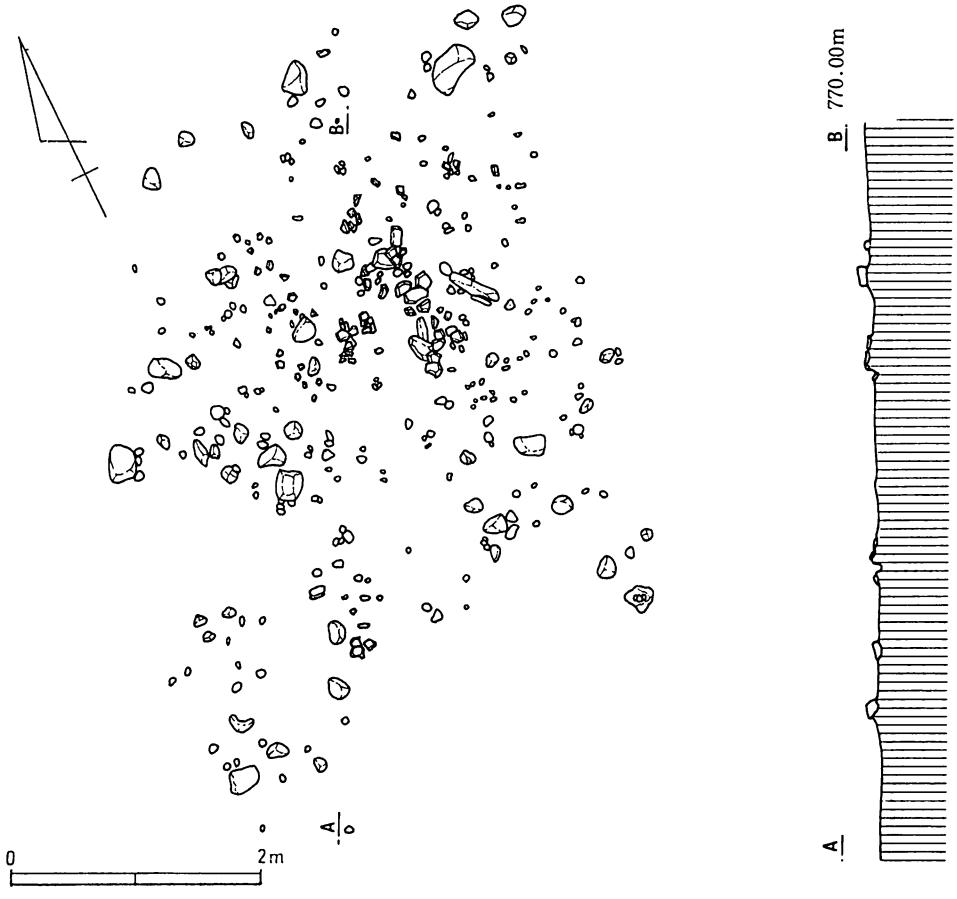
以上について、25は加曽利Ｂ１式、26～32、35は加曽利Ｂ２式、33・34・36は後期後半の土器であろう。特に36は東北地方と脈絡のある土器である。

第16号住居址（第26図）

第15号住居址の南東４ｍに位置する。Ｃ－３区にて、土器が集中して発見された。この箇所を中心に精査したが、炉や柱穴などの施設は確認できなかった。しかし、土器や石が同一のレベルにあること、土器集中箇所を中心に、土器破片や礫が一定の範囲にまとまっていること等から、住居とした遺構である。遺物の拡がりから、５×４ｍ程度の規模であろう。出土土器から、晩期前半の遺構とみられるが、この時期の他の住居が、第１号配石の北側に集中しているとともに、住居の形態も『石囲み』であるのに対して、本址は様相が異なっている。別の機能を考えるべきであろうか。焼けた鹿角片やイノシシの骨片が少量出土している。

出土土器（第28図）（第24図37～40）

1601　住居中央の床面から1602とともに出土したものである。鉢形土器の２分の一弱の破片である。台が付くかどうかは不明である。口縁部上端に、羊歯状文風の三叉文状沈線があり、Ｂ突起に連なっている。以下、沈線が四条めぐり、刻目が連続する。沈線は頸部にもめぐっている。胴部には縄文が施されている。外面は赤褐色を呈する。

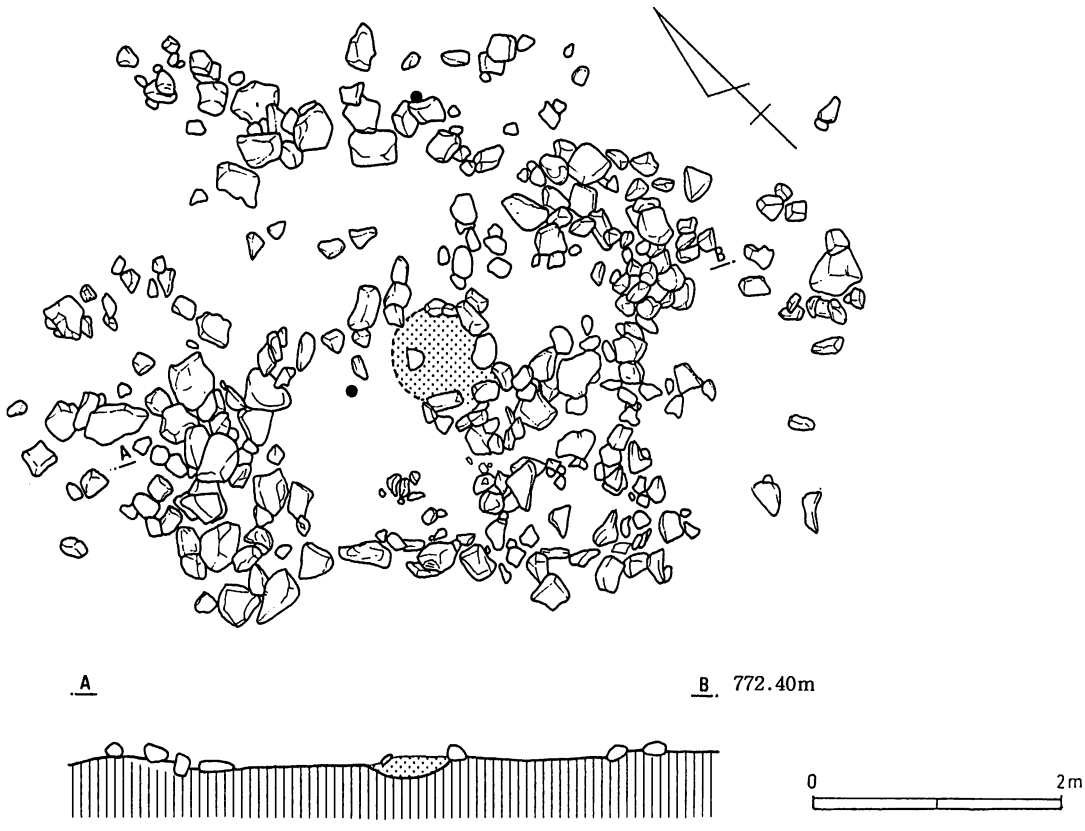


第26図　第16号住居址（１／60）

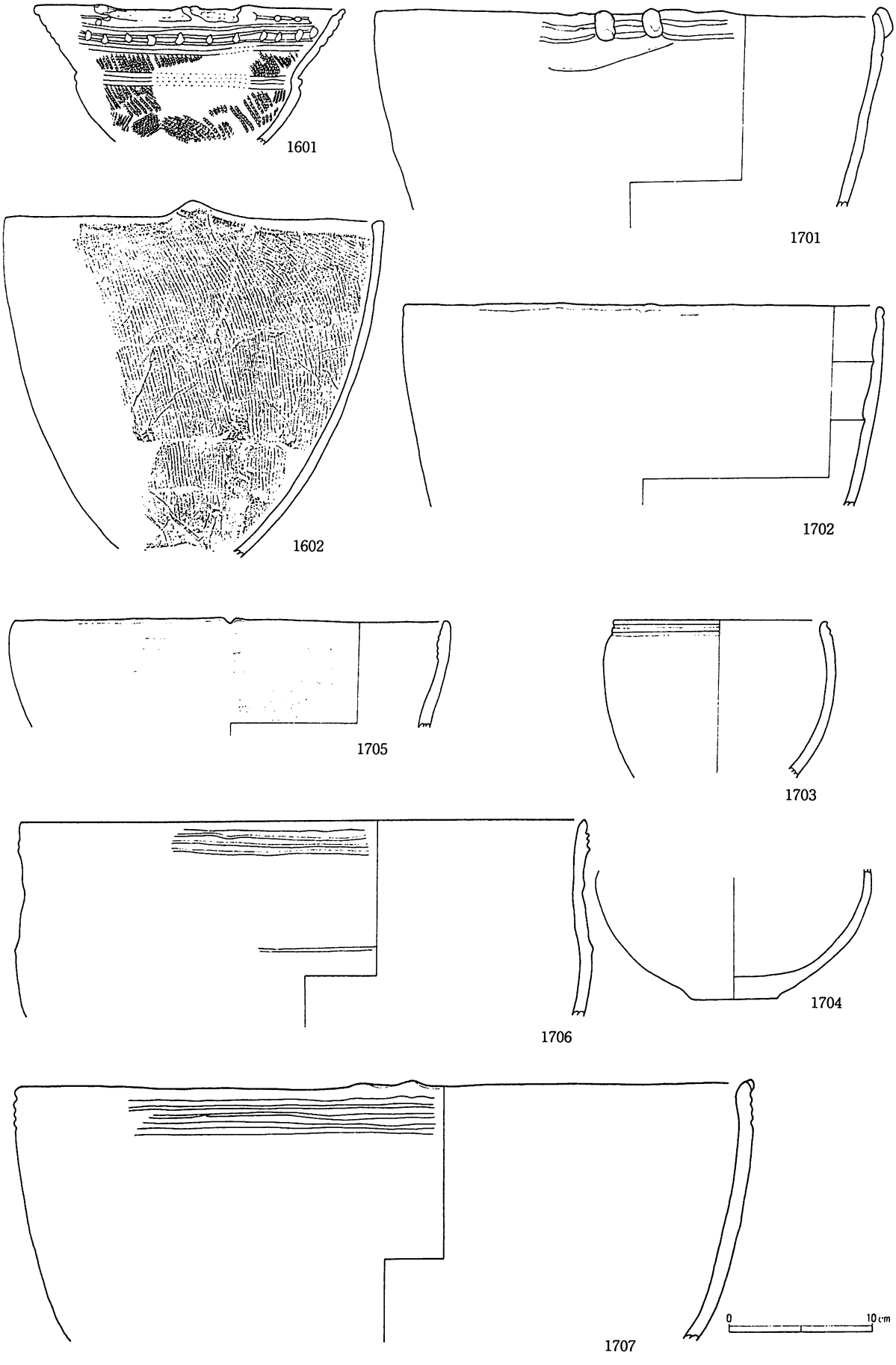
1602　全面条痕の施された深鉢形土器である。床面から出土したもので、全体の２分の一以上残っているが、二次焼成をうけたらしく、非常に脆い。白味を帯びた褐色を呈する。卵を横切りしたような整った器形で口縁部に小突起が付く。条痕は細く、縦および斜め方向に走る。櫛歯状工具による条痕と思われる。第24図37～40は覆土から出土した破片である。37は磨消縄文の付けられた深鉢形土器で加曽利Ｂ１式土器である。38は波状口縁部の深鉢形土器の、波頂部破片である。地文縄文で、その上に沈線で施文されている。口唇には押圧による刻みが連続する。また、口縁部内側は肥厚しており、波頂部付近に丸瘤が付けられている。後期後半に位置付けられよう。39・40は無文であるが、紐線文あるいは凸帯文と称される隆帯が付けられている土器である。39はゆるい波状口縁の深鉢形土器で、口縁のうねりに応じて有刻の隆帯がみられる。この隆帯と口縁とを結ぶ縦方向の張り付けも認められる。40は口縁の下に粘土紐が張り付けられており、その上には楕円状の押圧が連続している。39は晩期前半に位置付けられようか。40は後期の粗製深鉢形土器であろう。

第17号住居址（第27図）

Ｃ－８・９区に位置する。付近には第８～10号住居がある。非常に石が散乱しているが、南西辺と南東辺では石列が整っており、石で囲まれた住居であることが分かる。西角付近と東角付近とに、石が密集している。一辺が４ｍ程の正方形に近い整った形状の住居と思われる。ほぼ中央部に石囲み炉が設けられている。直径80㎝程の円形の炉であるが、北から西にかけての部分には石が見られない。床は褐色土中にあることからあまり堅くはなかったが、炉のレベルを参考にして断定した。壁となる石列部分より若干掘り窪めて床としているようである。この面では柱穴は検出できなかった。現状保存のため、下部の調査は行なっておらず、柱穴や入り口施設等の所在は不明である。入り口方向については、南西ないし南東辺の一部に推定することができよう。住居内から出土した土器は多い。土製耳飾りも２点出土している。晩期後半とみられる住居で



第27図　第17号住居址（１／60）



第28図　土器実測図（第16号・17号住居址）（１／４）

ある。

出土土器（第28図）（第31図１～23）

1701　炉周辺から出土した、粗製深鉢形土器の口縁部破片である。上部に２本の沈線が横走し、２個１対で縦長の瘤状張り付けがある。器面は粗い整形である。焼成は良く、やや赤味がかった褐色を呈する。

1702　これも炉周辺から出土した無文の深鉢形土器の破片である。内面には輪積み痕が僅かながら認められる。焼成良好で、明るい褐色を呈する。

1703　深い椀形の土器の３分の一程の破片である。内外面ともよく磨かれており、光沢がある。赤褐色を呈する。炉際から出土したものである。口縁部に沈線２条が丁寧につけられ、口唇の断面は丸味を帯びている。なお、この土器や後述する1707は沈線と表現したが、1706や第31図１・７等では、沈線と表現する部分が、沈線間を浮きだだせるために、削り出されている。このような場合、沈線という表現より、隆線とするのが適切であろう。

1704　壷形土器の下半部と思われる。突出した底部から丸味を帯びながら立ち上がる。底には網代痕がある。胴部器壁は３㎜と薄い。これも炉際から出土したものである。

1706　やや外反する口縁、ゆるくくびれる頸部、やや張った肩部の深鉢形土器である。口縁部には、削り出しによる沈線により、隆線３条が表現されている。沈線の縁は丁寧に削り取られている。黒褐色を呈する焼成良好な土器である。

1707　直径50㎝を越える大型の深鉢形土器と思われる破片である。口縁部には、非常に低いが２個１単位の小突起がある。この突起は、粘土を張り付けたというよりも、突起間の口縁を押し広げ、左右に分けたというような感じである。沈線は４本めぐるが、丁寧に削り取られており、粘土のはみ出しはきれいに除去されている。内外面ともよく磨かれている。赤ないし茶褐色を呈する。

第31図１～10は沈線や削り出し隆線、それに工字文の系統にある土器である。まず、２、３、５、７は深鉢形土器とみられる破片で、２、６は凹線状の沈線、３、５、７は削り出し隆線により施文されている。３は、剝落してはいるが隆線間を繋ぐ痕跡が認められ、工字文が意識されている。３、５は1706に共通する器形であろう。１、４、６、８、10は浅鉢ないし鉢形土器の可能性があるもので、１と４が削り出しによる隆線、６と10が沈線である。１および６は内面に沈線がめぐっている。４は胴部破片で、工字文様の隆線である。８は強く外反する口縁部破片で、口縁と肩部とに沈線がめぐり、それにより隆線の効果を表現した変形の工字文とも考えられる。９は浅鉢と思われるが、深い器形を呈する可能性もある。「く」の字形にくびれる頸部、強く張った肩部である。この肩部には粘土の張り付けによると思われる隆線が付けられている。この隆線の頂部には細い沈線が付けられており、あたかも２条の細隆線が走っているような効果が有る。この２条の「細隆線」は部分的に一つに収束し、その箇所は高く盛り上がっている。胴部には粗く浅い縄文が施されている。11～14は刺突文のつけられた土器である。11はくびれ部の平行沈線間に大きめの刺突が連続する。12は曲線的な２本の細い沈線間に、小さく丸い刺突が２段につけられている。13は細長い刺突文が同心円状につけられている。14は外反する短い口縁の深鉢形土器で、頸部に２本の沈線が走り、その中に列点状に刺突文が付けられ、一部に瘤状の張り付けも認められる。その瘤の部分から口縁部まで、同様の沈線と刺突文が延びている。また、瘤の下方には、下向きの半月状に沈線が付けられている。器面には凹凸が残る、整形の雑な土器である。15～19は条痕文の土器である。15は小形の深鉢形土器で、縦方向に条痕が付けられ、その上に沈線が蛇行する。口唇には刻目が連続する。16は広口壷の口縁部破片で、太い凸帯がめぐっている。この凸帯上と口唇部とには指頭圧痕が付けられている。凸帯以下には横方向の条痕が施されている。17は底部を中心とした破片で、縦方向に条痕がみられる。18は胴部破片で、横ないし斜めの条痕である。16と同一個体の可能性がある。以上の条痕文土器は、明るい黄褐色の色調である。19は斜方向に条痕が走るが浅い。色調は灰色である。20～23は無文の土器である。20は壷形土器と思われ、頸部に段がつく。21は折り返し口縁の深鉢形土器である。22は口唇に円形の刻目が連続する。23は小突起２個がつき、「く」の字形に強く屈折する口縁部の土器である。

以上、1701～1707、1～10については、晩期後葉の氷Ⅰ式に併行するものとみられる。12～14は晩期中葉の安行3c式併行、11も安行3bから3cにかけてのものと見なされる。条痕文土器については、概ね晩期後葉のものであるが、特に16は東海地方西部の樫王式に併行するものと思われる。

第18号住居址（第29図）

F・G－8・9区で発見された。第14号の西3m、第21・22号の南3mに位置しており、付近には他に、炉だけが検出された第20号や第39号がある。石列により取り囲まれた住居で残存状況は良好である。西辺および東辺が4.3m、北辺および南辺が3.5mを測る長方形の本体と、その南西コーナーから延びる敷石の張り出し部とから構成される住居である。この張り出し部については、敷石のレベルと、住居本体を取り巻く石列および炉石のレベルとはほぼ一致し、両者の接合がスムーズであること、付近にこの敷石と関わりのある遺構がないこと等から、これを第18号住居の張り出し部と見なしたものである。住居本体の長軸は、ほぼ南北方向であるが、張り出し部－炉－北東コーナーを通る線を主軸とすると、N－29°－Eである。石囲み炉が住居のほぼ中央部に設けられている。規模は、石の外側までの直径が1m、内側で60～70cm程である。取り巻く石は一段であるが、その外側に偏平な石が敷かれている箇所もある。炉内の焼土中から僅かながら焼けた鹿角片が出土している。床は褐色土であり、あまり堅くはない。北西隅付近および炉と張り出し部とを結ぶ位置には、部分的にではあるが、石が敷かれている。張り出し部は、長さ4m、幅1.2～1.5mを測り、ほぼ全面に石が敷かれている。両側の石は細長いもので、中には立ったものもあり「側石」という観がある。両側以外は、偏平な石が用いられている。入り口部とみられる施設である。本址は、現状保存区域内に位置しており、床下や石下など下部の調査は行なわなかった。

土器を始めとして、土製耳飾りや石器が出土した。晩期前半の住居である。

出土土器（第30図）（第31図24～35）（第32図1～13）

1801　壺ないし鉢形土器の口縁部を中心とした破片である。皿状に開いた口縁部で、削り取りによる三叉文や磨消し縄文がつけられている。口唇には横長の楕円状に押圧が連続し、小突起が付けられている。この突起は5個と見られる。口縁の上端および頸部には平行沈線が走り、その間に刻目が連続する。頸部以下胴部はゆるく湾曲しながら下部に移行していくものと思われる。器壁は非常に薄いが、器面はザラつきがあり、内面は剝落が激しい。

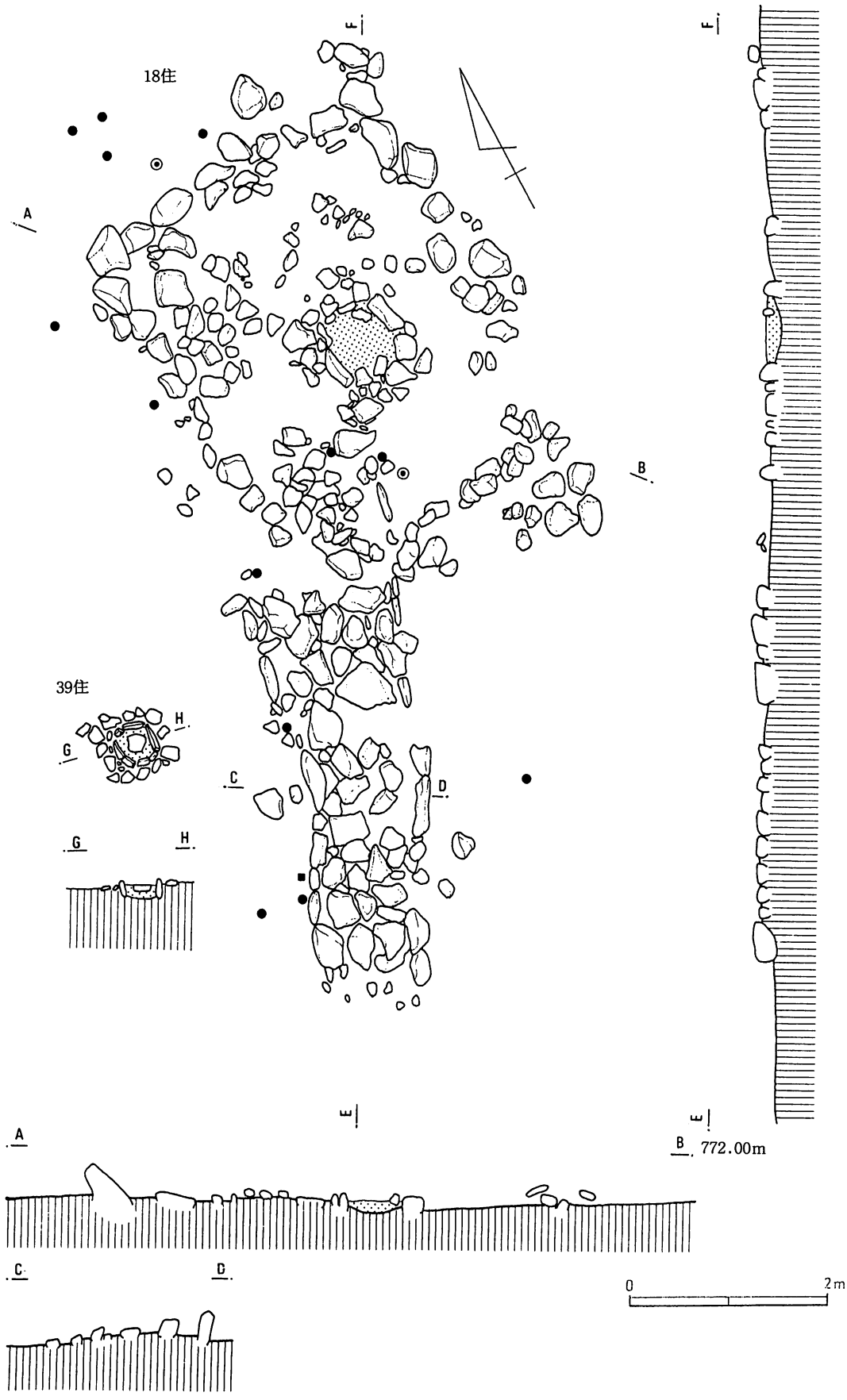
1802　台付土器の台下半部と思われる。炉の北側縁石にのった状態で出土した。三叉文につながるような三角形の透かしが見られる。器面はあまり磨かれてはおらず、ザラつきがある。色調は明るい褐色を呈する。

1803　炉の上面から出土した頸の短い壺形の土器である。頸部以下に沈線と磨消し縄文帯が施されるが、文様構成は、入り組み「鍵の手」文に共通している。また、「鍵の手」文間には三叉文がみられる。外面はよく磨かれており、特に無文部は光沢がある。明るい茶褐色を呈する。

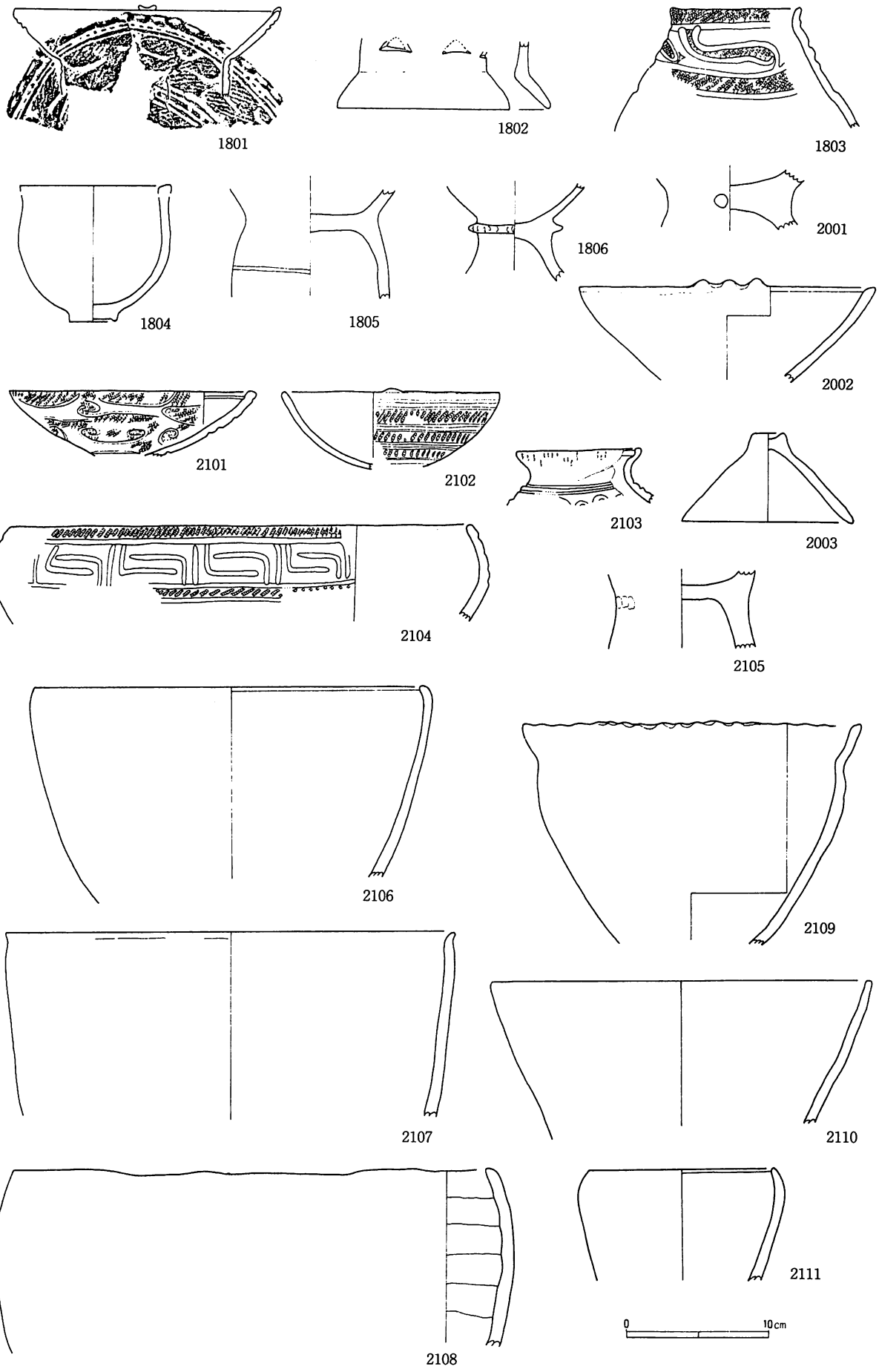
1804　小形の鉢形土器である。全体の二分の一程の破片であるが、口縁部を欠く。突出した小さい底部から丸みをもって立ち上がり、いくぶん外反して口縁部にいたる器形である。内外面ともに指頭状の圧痕が残っているが、よく磨かれている。色調赤褐色。

1805は台付鉢形土器と思われる破片で、台に沈線が1条横走する。明るい褐色でザラつきがある。1806も台付きの土器であるが、1805に比べて器壁は薄く、整形も丁寧で、よく磨かれている。括れ部に有刻のある隆帯がめぐっている。黒褐色を呈する。

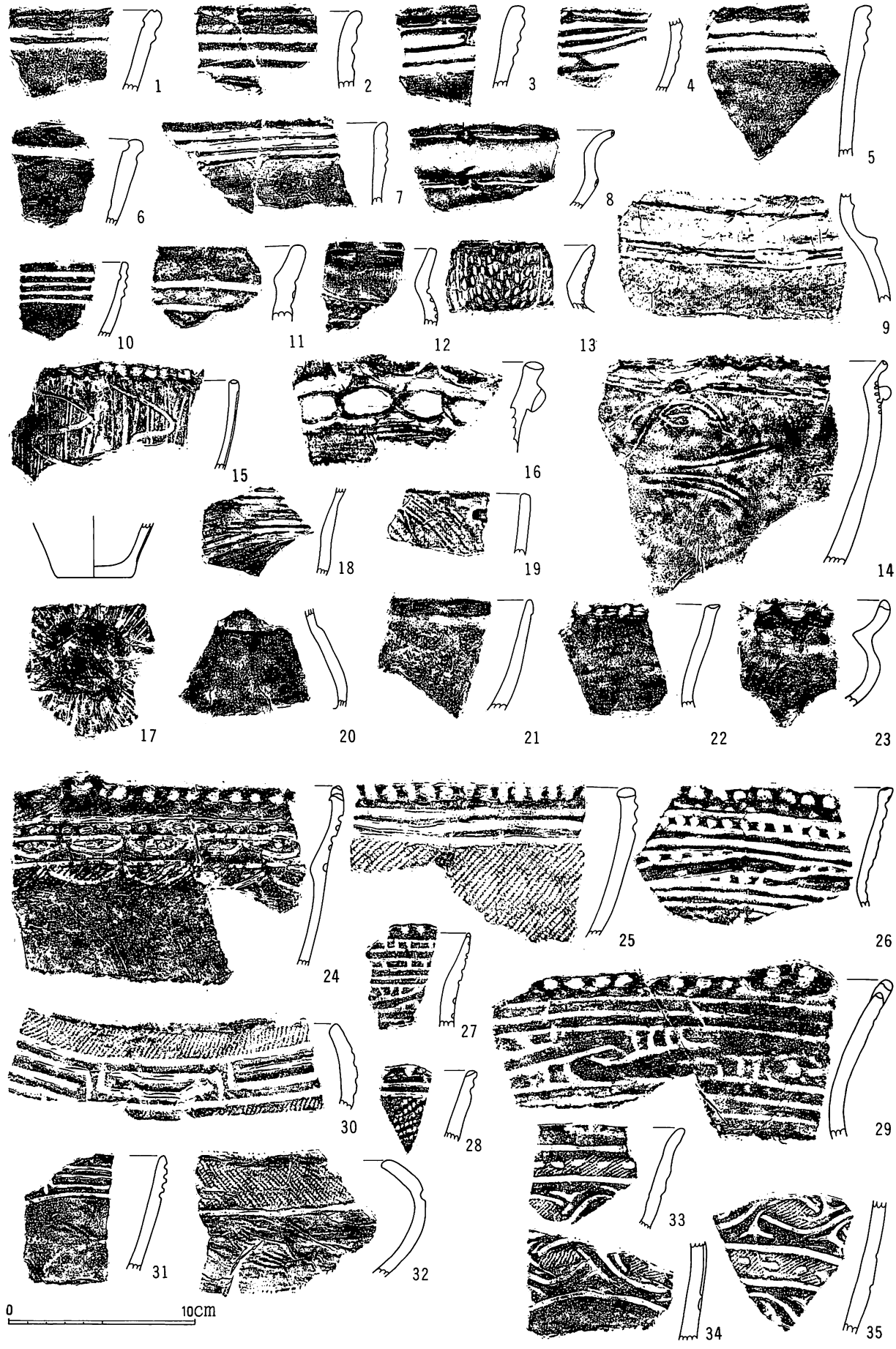
第31図、第32図は覆土を中心に出土した破片である。24は単純な器形だが、内面に稜のつく深鉢形土器である。口唇には小突起がつき、刻目が連続する。平行沈線と刻目、連続弧線により施文されている。口縁部上部および下部の弧線内には縄文がみられる。25も深鉢形土器の口縁部破片である。口唇に深い刻み目が連続する。以下、凹線状の沈線が3条めぐり、胴部には縄文が施されている。26、27、29は羊歯状文のみられる深鉢形土器口縁部破片である。29の文様は大柄で、口唇部に三瘤状の小突起が張り付けられている。30、31は入り組み鍵の手文土器である。30には縄文が施されている。埦形土器である。31は浅鉢ないし鉢形土器



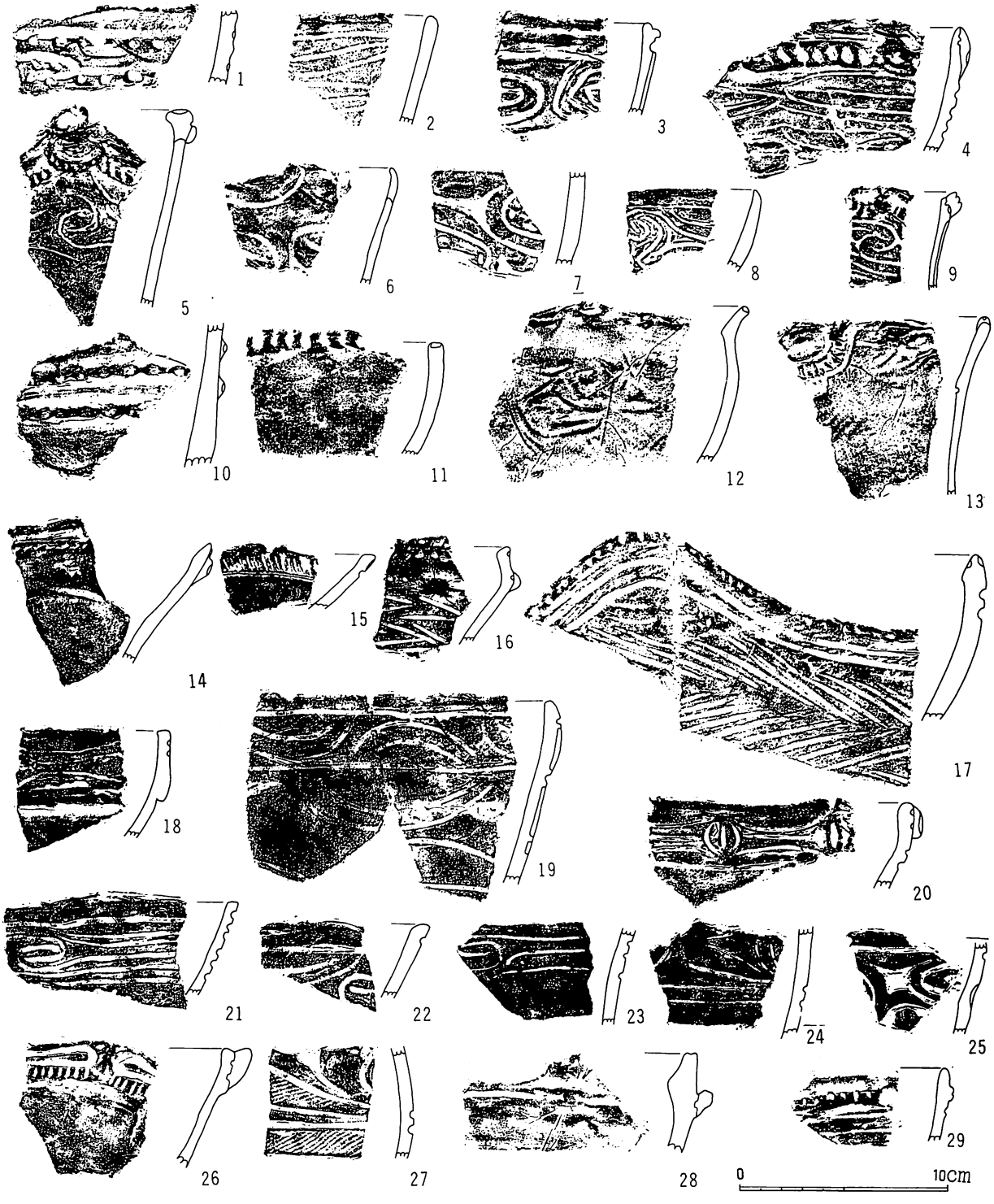
第29図　第18号・39号住居址（1／60）



第30図　土器実測図（第18号・20号・21号住居址）（１／４）

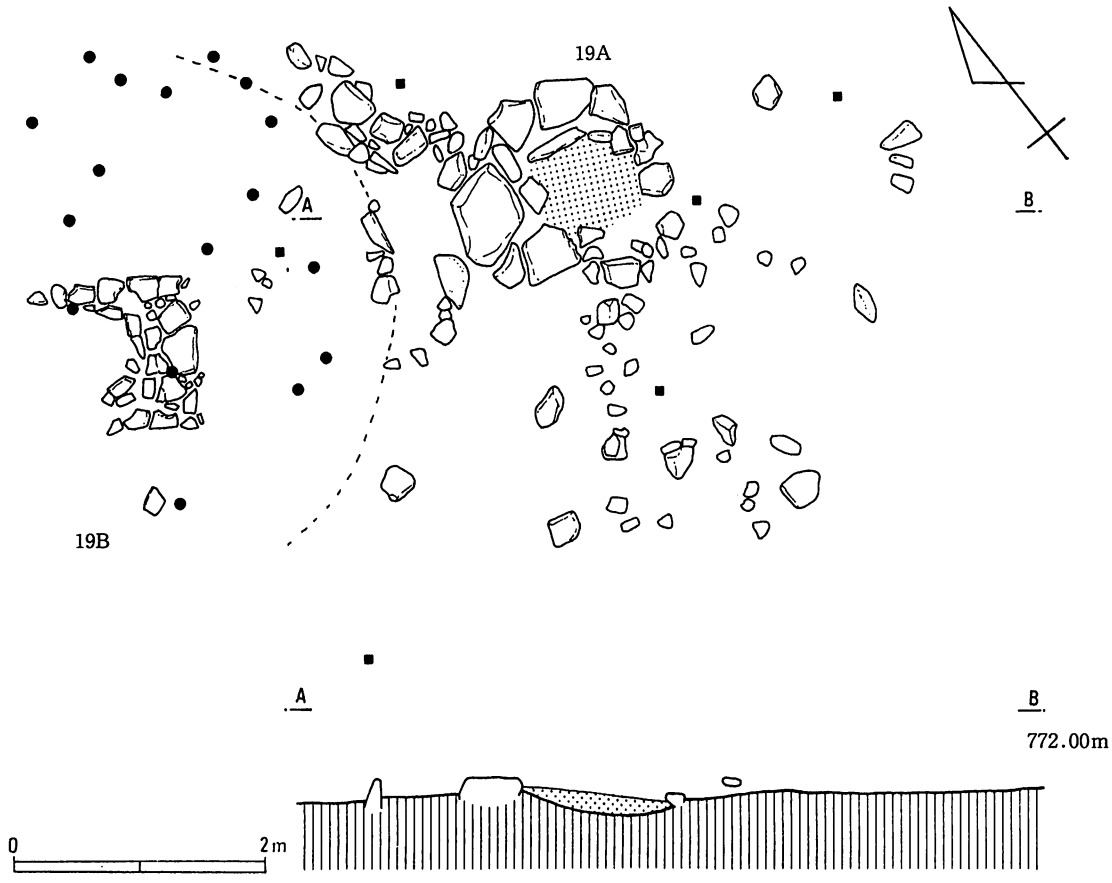


第31図　土器拓本（１～23　第17号住居址、24～35　第18号住居址）（１／３）



第32図　土器拓本（１～13　第18号住居址、14～29　第19号住居址）（１／３）

である。32は椀形土器とみられ、強く内弯する口縁部に縄文が施されている。33～35は同一個体とみられるもので、33が口縁部、35が胴中位、34が胴下方の破片である。深鉢ないし鉢形土器と思われ、タスキ掛け状に弧線文が入り組んでいる。また弧線間には三叉文があり、平行沈線間には縄文が充填され、その中に列点が続く。赤彩が残っている。第32図１～９は沈線を主体とした土器である。特に２・４・５・８・９は典型的な清水天王山式土器で、３・６・７もその一群に含まれるものである。まず、１は凹線状の沈線が入り組んでおり、刺突による列点が連続する。一部に縄文がみられる。２・８は平口縁の深鉢形土器で、入り組み乃至入り組み三叉文の施されるものであろう。４・５・９は口縁部に有刻凸帯のある土器で、特に５は波状



第33図　第19号住居址（１／60）

口縁で頂部は突出する。４の凸帯は幅広い。４・９は入り組み三叉文、５は入り組み文である。６は器壁の非常に薄い土器で、浅い沈線により入り組み文と思われる構成である。７の三叉文は幅広く、また区画内には列点がみられる。10～13はその他の土器で、10には押圧の連続する隆帯が２条横走する。13は２本の弧状沈線間に刻目が連続する。口唇には小突起がある。11・12は無文の土器である、11は口唇に刻目が連続する深鉢形土器。12は鉢形土器であろう。

以上、本址出土の土器には東北地方大洞系（1801、第31図25～29等）、中部地方から一部北陸方面と脈絡のうかがえるもの（第31図30～35）、中部から東海方面の土器（第32図１～９等）などの特徴をみることができる。

第19号住居址（第33図）

Ｆ・Ｇ－７区にて炉址が２カ所発見された。撹乱が激しく、いずれも炉石の一部が確認されただけである。本来２軒の住居であるが、調査段階で第19号Ａ・Ｂとしたことから、この番号に従うこととする。

第19号Ａは東側の炉で、一辺が80～90㎝程の方形をしたものと推測される。炉の周辺には偏平な石が敷かれており、大きいものは60×50㎝もある。敷石住居であったと思われる。

第19号Ｂは、発掘区の西際から発見された炉址で、東側半分が残っているだけである。側石の外側に炉を囲んで、一辺1.2mの方形に石が敷かれている。本址の範囲については、第19号Ａの敷石に近い箇所に幾つかの石が並んでおり、これを東側の壁とすると直径5m程度の住居とすることができる。そうした場合、２軒の新旧関係については、Ａが旧いことになろう。遺物については、まとまった土器は出土しておらず、破片に限られる。またB付近からは土製耳飾りが15、土偶１、Ａ付近から耳飾り１、土偶３などが出土している。

出土土器（第32図14～29）

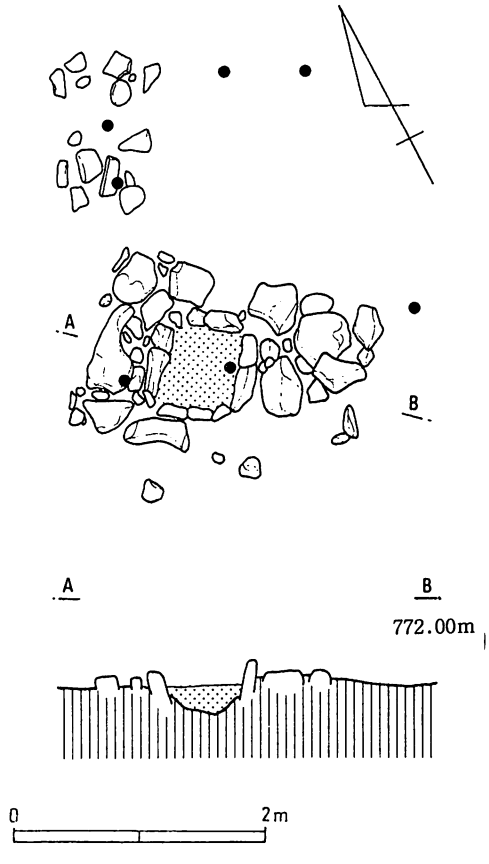
いずれも炉の周囲の覆土から出土したものである。1は浅鉢形土器とみられる破片で、口縁部上端に低い隆起帯縄文が走り、口唇にも縄文が付けられている。15も浅鉢形土器の破片で、沈線が横走し、刻目が連続する。16は「く」の字形口縁部の深鉢形土器破片で、屈折部に横長の瘤が付けられ、その屈折部と口縁上端に、円形の刺突文が連続する。胴部には、羽状沈線が施されている。17は波状口縁部の深鉢形土器で、口縁部と平行に2条の沈線がうねっている。この沈線より上の部分には地文として縄文が施されている。胴部には羽状沈線がみられる。口縁は内側に肥厚し、波頂部内側には、円形瘤が張り付けられている。明るい褐色を呈する。18～20は弧状沈線の土器である。11は折り返し口縁で、その部分に背中合わせの弧文が2条みられる。19は折り返し口縁部ではないが、沈線により区画された口縁部は幾分肥厚している。その口縁部に、2条1単位の弧文が、上向き、下向きと交互に連続している。胴部には、より大きい弧文が、口縁と同様に連続している。砂粒を多く含み赤褐色を呈する土器である。20も文様構成は、18・19に類似するが、縦方向の向き合った対弧文がみられる。また、口縁部には長円状の張り付け瘤があり、この瘤と対弧文とを結ぶ沈線に、三叉文が認められる。21～24は清水天王山式土器である。24が三叉文状であるが、他は入り組み文である。25は彫刻手法で施文されている。26、28、29は隆帯の付けられた深鉢形土器である。29には有刻凸帯と、その下に浅い沈線が認められる。清水天王山式の一群とみられる。26は有刻凸帯と肥厚した口唇部とを結び、縦方向の隆帯が付けられている。28には突起が突出し、その下に隆線がめぐる。27は縄文帯と、三叉文とがみられる土器である。

以上については、14～17は後期後半、18～20が後期末から晩期初頭、21～25・27が晩期前葉に位置付けられるものと思われる。

第20号住居址（第34図）

G－8区、第18号住居址の西1.5mに位置する。炉およびそれを取巻く石敷きの一部が発見されただけである。炉は一辺が80cm程の正方形に近い形状である。側石は長方形の石4個をしっかりと埋め込んである。これらの石は火熱を受け、ひび割れしている。側石の外側には、偏平な石が敷かれている。本来、220×150cmの範囲に整然と敷かれていたと思われるが、部分的に抜かれている。このような、炉と敷石の構造は、第19号B住居址に類似している。東1.5mに第18号住居、南1.5mに第39号住居がある。これらの新旧関係については、20号→39号→18号という順序が考えられる。その理由は、まず炉および敷石部の大きさからみて第20号は一辺が3m以上はあると思われ、東1.5mに第18号があることは、第18号により第20号が切られていることを意味しよう。同様に第39号の炉と第18号とは1mしか離れておらず、第39号は第18号に切られていることになる。一方、第20号と第39号については、両者の距離は約2mである。この距離からみても、第20号が新しいとは考えにくい。むしろ、第20号の敷石のうち南側の石が抜かれていることは、第39号住居の壁により撹乱をうけた結果と考えられないだろうか。このように検討してみると、先のような関係が導き出されよう。ちなみに、第20号のような炉の構造は、第19号Bのように後期の所産の可能性が強い。

本址付近からは、土製耳飾り16点が出土しているが、炉中



第34図　第20号住居址炉（1／60）

からも１点が出土した。また、付近から焼獣骨の細片が少量検出された。出土土器からみて本址の時期は後期後半から、晩期前半と思われる。

出土土器（第30図）（第37図１～22）

炉の周辺の黒褐色土中から多くの土器が出土した。2001は台付き土器の頸部破片である。円形の貫通穴がみられる。2002は皿形土器の三分の一程の破片。小突起３個が１単位で付けられている。2003は蓋と思われる破片である。全体の八分の一程の小さい破片であるが、つまみ部は完全で、頂部は窪んでいる。整形は丁寧ではなく、特に内面には輪積痕や指頭圧痕が残っている。色調は黒褐色。

第37図１、２は波状口縁の深鉢形土器である。１は平行沈線間に縄文が充塡されている。波頂部を欠くが、その下方には瘤状の張り付けが見られる。口縁は内側に若干肥厚する。２は波谷部の破片で、隆起帯縄文がみられ、口唇は外側に肥厚する。３は三日月状の隆帯が背中合わせに２個１単位、あたかも「X」字状に付けられている。深鉢形土器の頸部破片であろう。４は凹線状の太い沈線３条が横走し、頸部は羽状沈線であろう。なお、口縁部上端と屈折部には刻目が連続する。５は平口縁部の深鉢形土器で、いわゆる「掘起しコブ」状の刺突文が連続する。口縁は内側にやや肥厚する。黒褐色を呈する土器である。６には横走する平行沈線と弧状に連続する沈線があり、沈線間には刻目が付けられている。７にも２本１単位の弧状沈線がみられるが、ここでは上下に背中合わせの弧線である。口縁部には、２本の隆帯が付けられるが、それらが収束し、瘤状の突起になる箇所も認められる。灰褐色を呈する、器壁の薄い土器である。

以上、１・２は安行系、３・５は東北地方の「コブ」付土器系、４は凹線文系の土器で、それぞれ後期後半に位置付けられるものである。

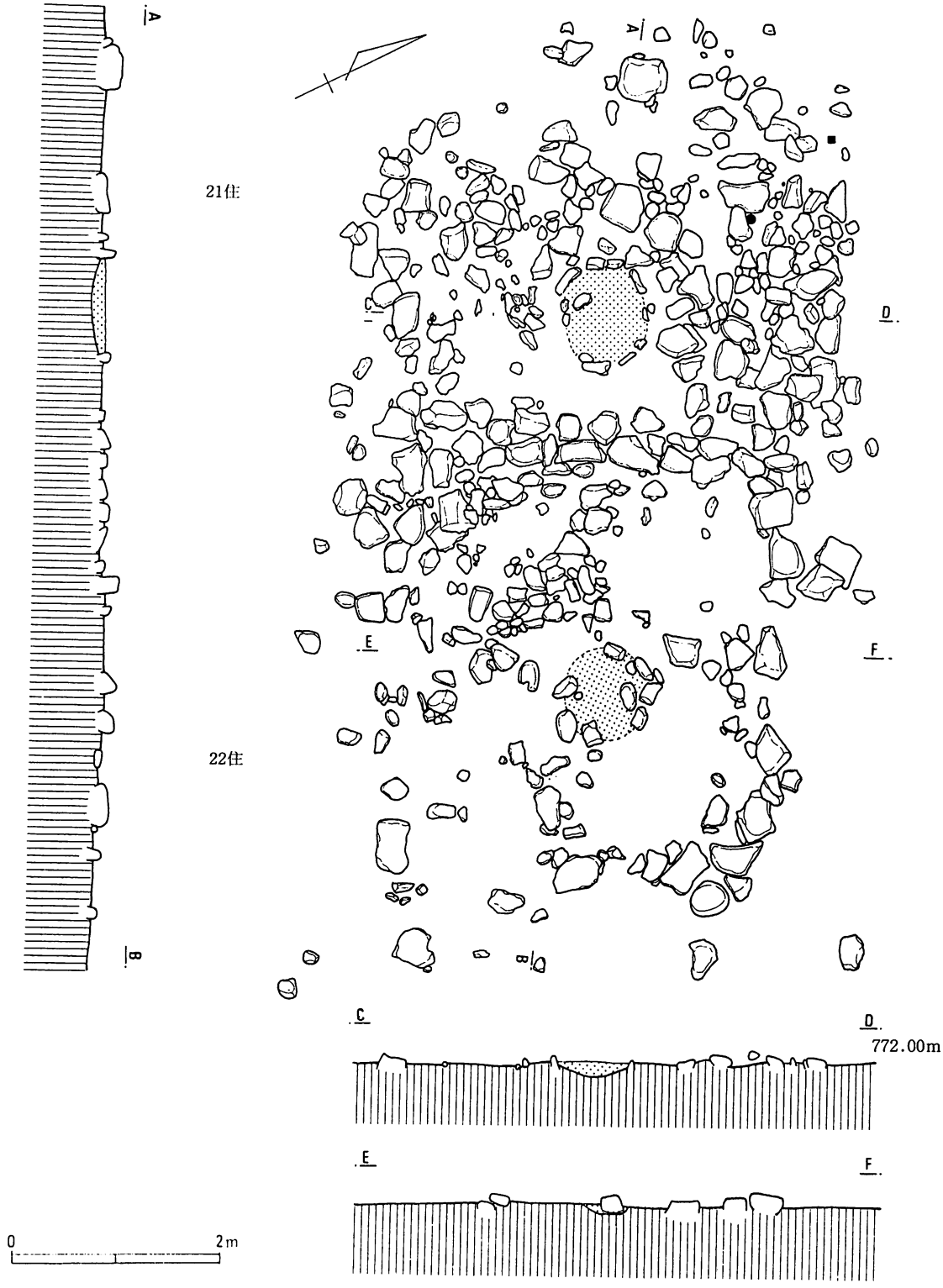
８～12は清水天王山式土器である。８・９は平口縁の深鉢形土器で、入り組み弧線がみられる。10・11は胴部破片で、入り組み三叉文がつけられる。11の器壁は薄く、３～４㎜である。12は山形の突起がある、波状口縁深鉢形土器で、彫刻的な三叉文がみられる。口縁部には有刻隆帯が走っている。13は、沈線による三叉文が施され、口縁にコブが張り付けられている。14～16、18は大洞系の土器で、14は注口土器と思われものので、良く磨かれており、黒褐色を呈する。胴部は羊歯状文で飾られる。15・16も羊歯状文の土器であるが、15は深鉢形土器、16は鉢形土器であろう。18は浅鉢ないし皿形の土器と思われ、雲形文的な縄文帯が削り出しにより付けられている。17は台付土器の台部破片である。透し文や、鋭い刻みによる沈線で飾られ、地文には縄文が施されている。赤彩の痕跡がある。19は雷文土器で、「入り組み鍵の手文」がみられる。鉢形土器であろう。20～21は無文の土器である。20は口唇に押圧が連続する。21は、外反する器形の深鉢形土器で、くびれ部直上に押圧文が粗く付けられた隆帯がめぐる。平口縁であるが、小突起がある。

第21号住居址（第35図）

Ｇ－９区にて、第22号と重なり合って発見された。第18号の北３ｍに位置する。本址はすでに試掘調査の際に炉址が発見されており、その所在が知られていたものである。第21・22号共に石で囲まれた住居であるが、石の配列状況からみて、第22号のほうが新しいと思われる。従って、本址の規模については、詳細不明であるが、南北の軸および炉の位置からみると、一辺4.5m程の住居とみなされる。住居を取巻く石列は本来整然としていたと思われるが、相当撹乱されており、住居の床面にまで広い範囲に散乱している。但し、炉の西から北にかけての床上には偏平な石が密着しており、床面に敷かれていたものもあったと推測される。北西壁の石列はやや残りがよい。床面は褐色土面にあることから、堅くはなく、また柱穴等の検出もできなかった。炉は石囲み炉で、110㎝×80㎝の楕円形を呈する。石は、偏平で長いものを一列に埋込んである。遺物は土器を中心とするが、土偶と土製耳飾りが１点ずつ出土している。また、少量ながら焼けた鹿角片が出土した。晩期前半の住居で、現状保存されている。

出土土器（第30図）（第37図23～40）

2101　皿形土器の二分の一程の破片である。地文として縄文が施され、口縁直下に弧文が連続し、その下に尾を長く引く「入り組み弧文」や「蕨手」状の曲線がみられる。入り組み部や蕨手の部分には、細い刺突

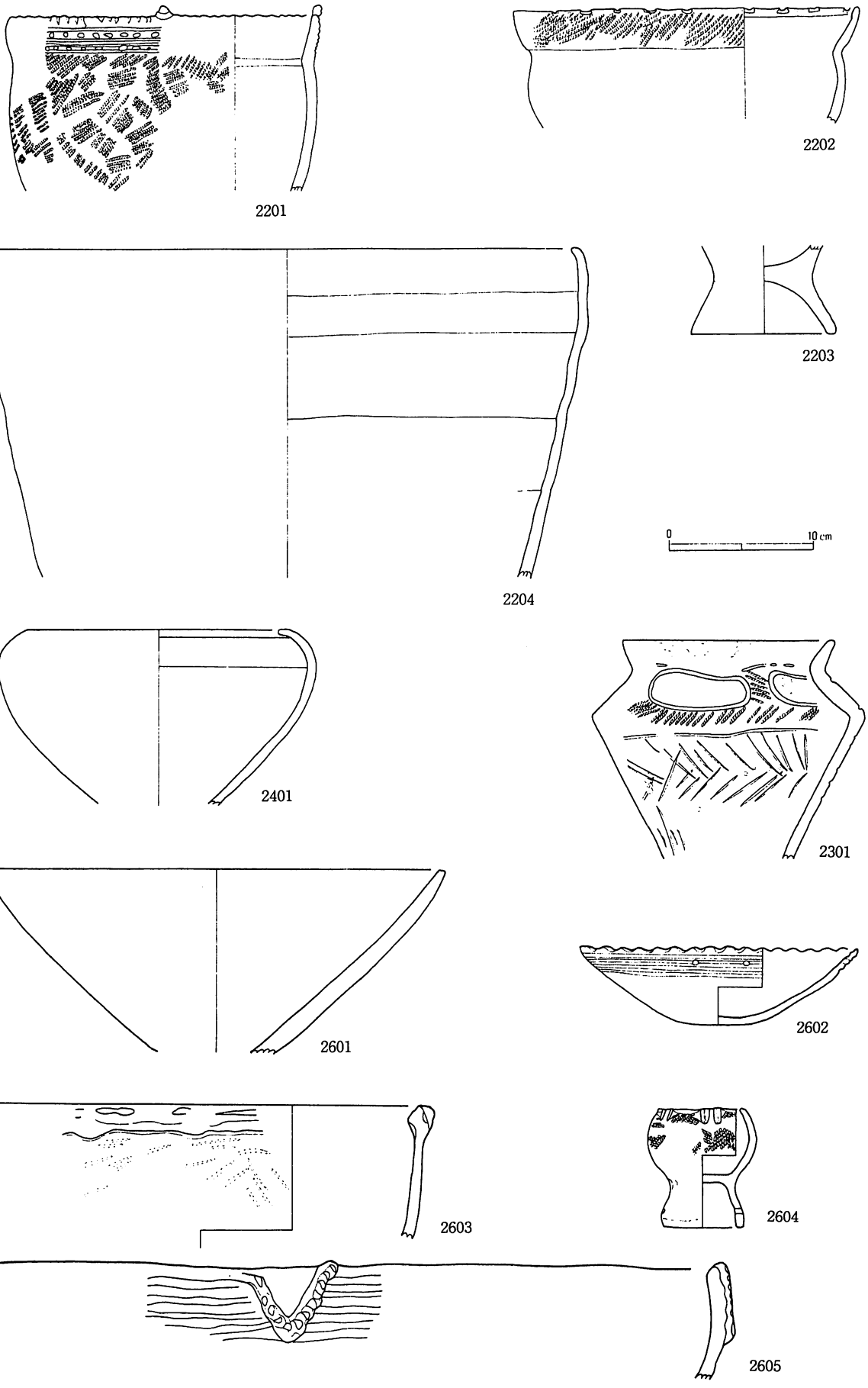


第35図　第21号・22号住居址（1／60）

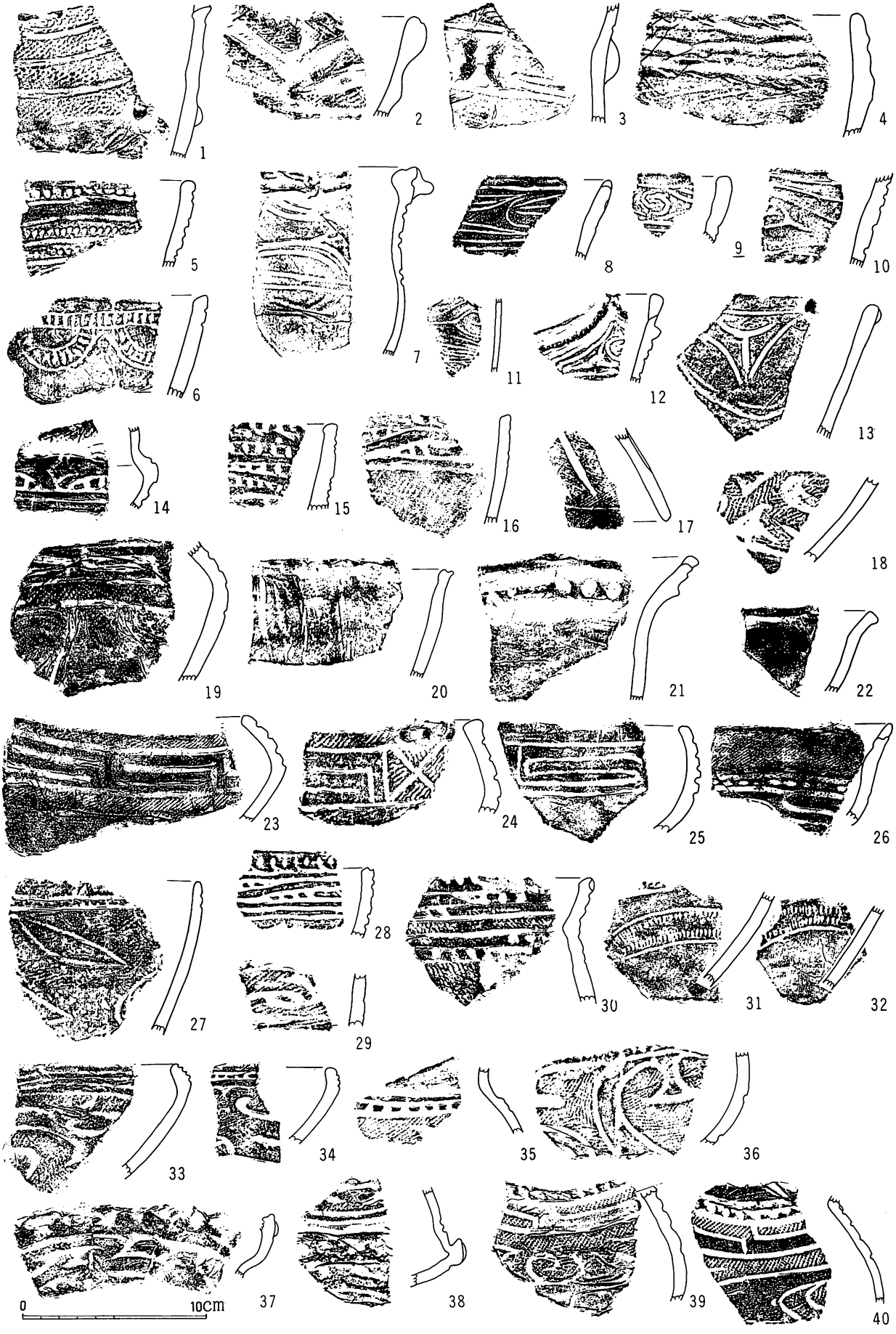
文が付けられている。底部は円形に窪んでいる。口縁部内側には、沈線が一条横走する。明るい褐色を呈する。内面は剝落が激しい。

2102　皿形土器の3分の一程の破片である。沈線に区画された縄文帯が口縁と平行にめぐる。口縁部には小突起が付けられている。赤褐色を呈する。

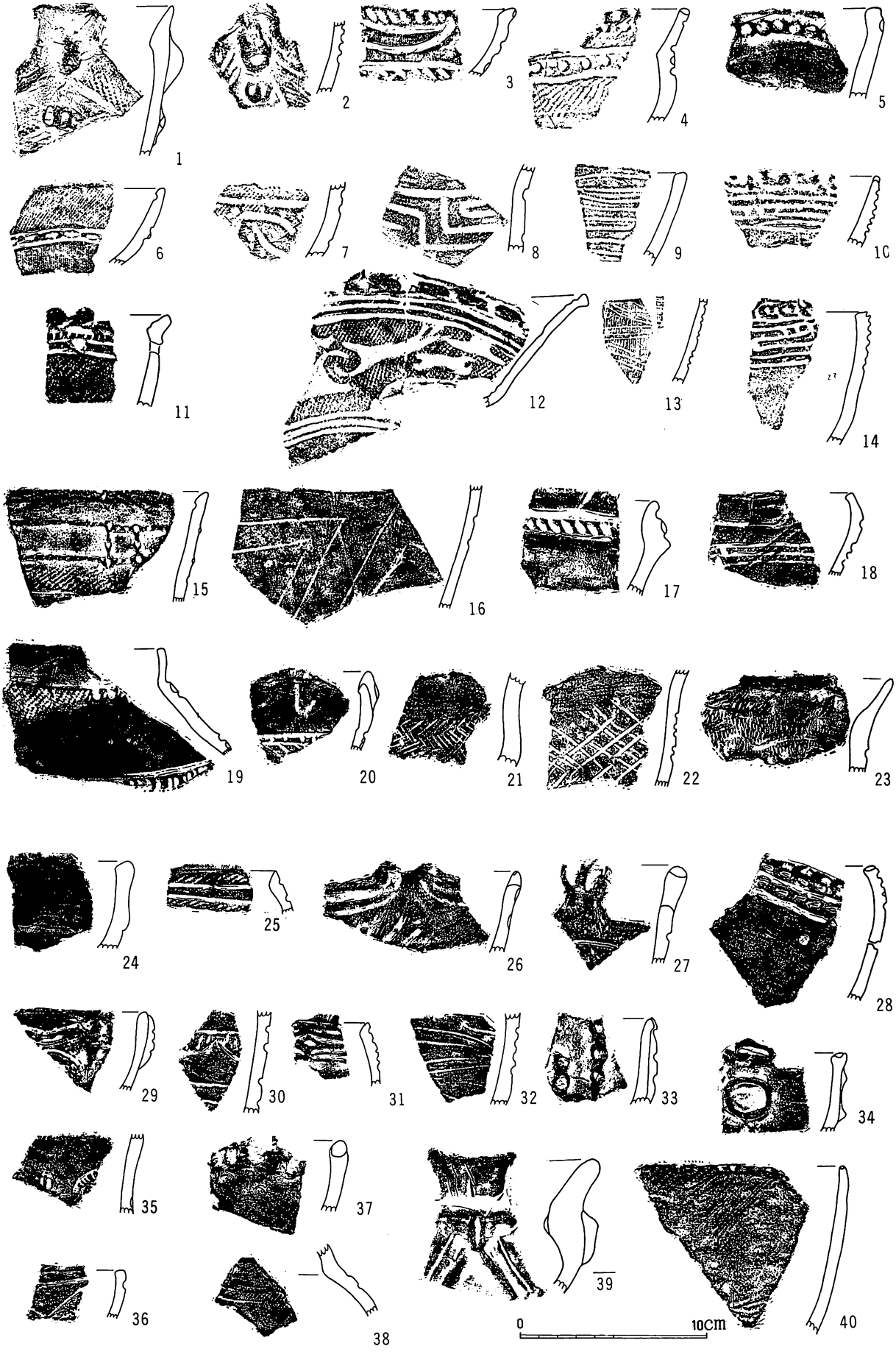
2103　壷形土器の口縁部破片である。頸部に削り出しによる隆帯がめぐり、肩部にも同様の手法による文



第36図　土器実測図（第22号～24号・26号住居址）（１／４）



第37図　土器拓本（１～22　第20号住居址、23～40　第21号住居址）（１／３）



第38図　土器拓本（１～14　第22号住居址、15～23　第23号住居址、24～40　第24号住居址）（１／３）

様がみられるが、以下、欠損しているため詳細は不明。

2104　鉢形土器の口縁部破片である。「入り組み鍵の手」文が付けられているが、それぞれの入り組み文は、縦方向の短線により区画されてる。

2105　台付き土器の破片である。明るい褐色を呈するが、器面はザラつきがある。

2106～2111は無文の深鉢形土器である。2106は3分の一程の破片で、内湾する口縁。外面の一部に炭化物が付着している。2107はは4分の一ほどの破片で、口唇部が外反する。2108は6分の一ほどの破片。口縁部内湾し、内面に輪積み痕が残る。2109は3分の一程の破片である。頸部が屈折し、口唇には押圧が連続する。2110も4分の一程の破片である。以上の土器は、内外面とも整形は粗い。2111は小型の深鉢形土器で、胴下半部を欠く。外面はザラつくが、内面の整形はやや丁寧である。

第37図23～40は覆土から出土した破片である。このうち23～26は「鍵の手」文の一群である。26を除き縄文が施されている。23・24は入り組み鍵であり、24にはさらにX状の沈線がみられる。26は曲線的な、一条の鍵の手と思われる。25には縄文がなく、特種な鍵の手文がみられる。27は鉢形土器で、地文に縄文があり、柳葉形状の沈線が認められる。28～30は羊歯状文ないしその系統の土器である。29は特に彫刻的である31・32は同一個体と思われる破片で、沈線に区画された中に、細かい刻目が付けられている。皿形の土器であろう。33・34も皿ないし浅鉢形土器と思われる。いずれも、削り出しにより、磨消し縄文の雲形文が施されている。35は壷形土器の頸部破片で、雲形文と思われる文様がみられる。39・40も壷形土器と思われる同一個体で、磨消し縄文で装飾される土器である。頸部に押圧が連続し、胴部には横位および逆「の」字形の縄文帯が付けられている37・38は注口土器であろう。同一個体の可能性があり、半肉彫り的な磨消し縄文による、雲形文が施されている。36は浅鉢形土器であろうか。沈線により区画され、磨消し縄文がうねっている。

以上、晩期前葉から中葉の土器を中心としている。特に東北系の土器では、28～30が大洞ＢＣ式、33～38が大洞Ｃ１式に比定できよう。

第22号住居址（第35図）

第21号を切って作られている。主軸の方向は、第21号とほとんど同じであり、発掘当初は一軒の長い住居とも考えたほどである。しかし、重なる部分の石列の並び具合が、本址の他の辺と整合しており、炉も検出されたことから、時期の異なる2軒の住居と断定することができた。4.5m×4.0mと、北西－南東軸がやや長い、長方形をした石囲み住居である。第21号と重なる北西辺の状況が良好で、基本的には石が2列に並べられており、西コーナーに近ずくにつれ、多く用いられている様子がうかがわれる。炉も本来石で囲まれていたと思われるが、残存状況は良くない。また、床や炉の周囲にも敷石は認められない。床面は褐色土であり堅くはなく、柱穴等も検出できなかった。21号同様に現状保存するため、下部の調査は行わなかった。晩期前半の住居である。

出土土器（第36図）（第38図１～14）

2201　深鉢形土器の4分の一程の破片である。頸部はゆるくくびれる。そのくびれ部以上に沈線と刺突文とが連続している。口唇部には刻目がつけられている。胴部には縄文が施されている。灰褐色を呈する、やや脆い土器である。

2202　深鉢形土器の3分の一程の破片である。頸部は「く」字形にくびれている。口縁部には縄文が施されるが、胴部は無文である。口唇には、刻み状に削り取られた箇所が、間隔をおいて連続する。明るい褐色を呈する。

2203　台付き土器の台部破片である。

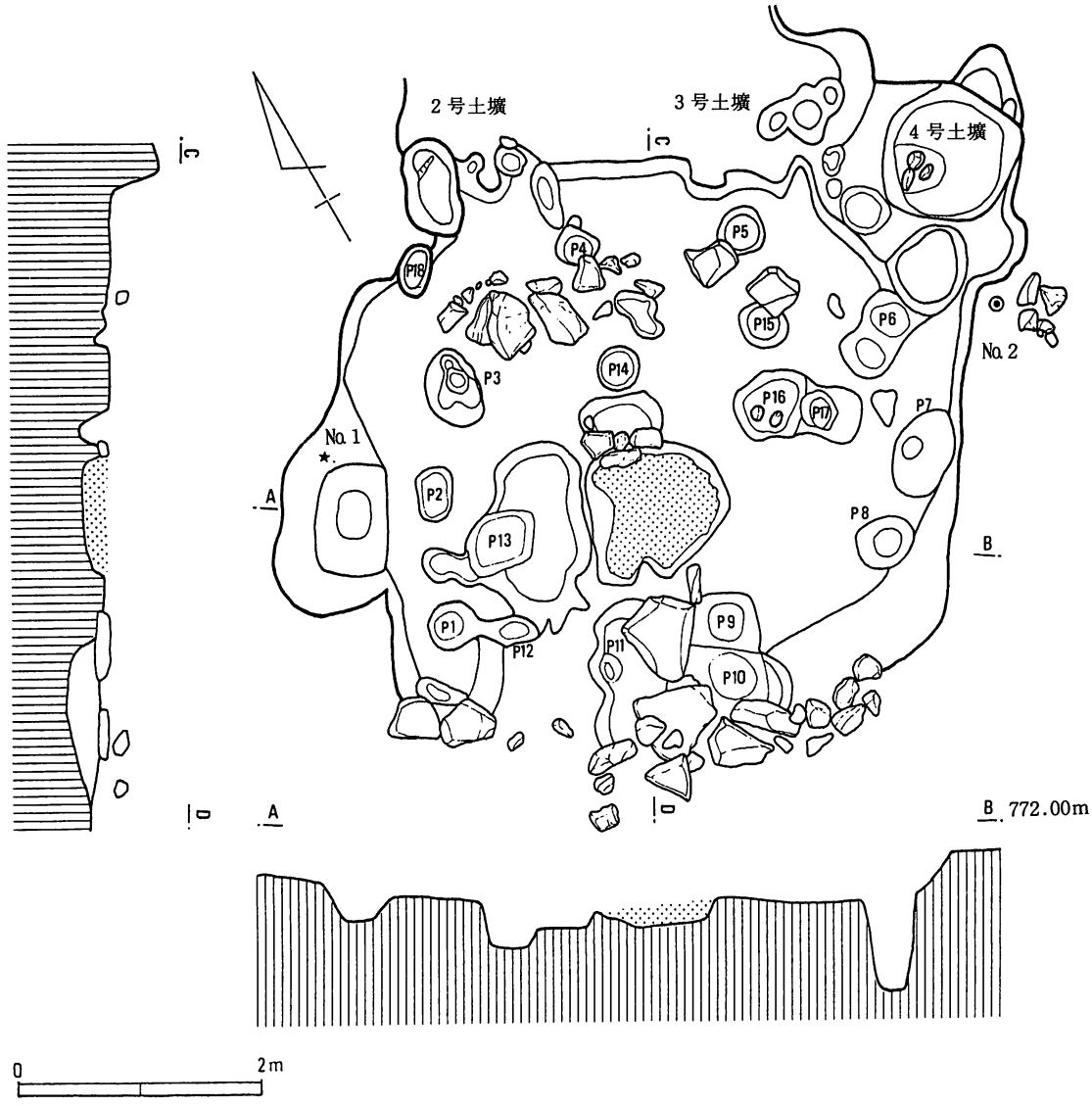
2204　無文の深鉢形土器の4分の一程の破片である。内外面に輪積痕が残る箇所もあるが、それを調整してある部分についても、指頭痕や盛上がった整形痕が顕著である。明るい褐色ないし褐色を呈する。

（第38図）１～14は覆土を中心に出土した破片である。１・２は隆起帯縄文を持つ波状口縁部の深鉢形土器である。瘤状の隆帯やブタ鼻状の張り付け文がみられる。３・４・６は沈線および刺突文・刻目などがみ

れる土器である。6は鉢形土器と思われ、口縁部には細かい縄文が施され、沈線間に横長の刻目がていねいに付けられている。5は押圧の連続する凸帯がめぐる。7は入り組み弧文が付く胴部破片、8は雷文土器で入り組み「鍵の手」文がみられる。7には縄文が施されるが、8には認められない。9は細い沈線が数条みられる。清水天王山式土器であろう。10～12・14は大洞系の土器。10・14は鉢形土器と思われる破片で、14は羊歯状文の一群の土器である。11は浅鉢形土器で、磨消し縄文による雲形文が、彫刻的に施文されている。胴下半部が丸味をもって膨らむ器形の土器である。口唇部に刻み状に削り出されている。器壁は薄いが、ザラつきがある。大洞C1式に比定できよう。12も浅鉢形土器の口縁部破片で、小突起が付けられている。その突起の内側から口唇にかけて彫刻的な沈線等がみられる。外面は沈線と刻目とで飾られる。13は深鉢形土器の胴部破片で、細沈線を地文に「稲妻」状の沈線が走る。内面はよく磨かれている。晩期後半の土器であろう。

第23号住居址（第39図）

B－7区にて、1号配石の拡がりを確認中に発見された住居である。このB列の箇所は尾根の高い部分に当り表土が浅いことから、耕作などによる撹乱が激しい場所である。従って、第1号配石を始めとして遺構



第39図　第23号住居址（1／60）

の残存状況はよくない。本址はローム中に掘り込まれているが、撹乱のため壁上部は相当削平されており、特に西壁から南壁にかけての立上がりはほとんどない。長軸５ｍ程の、やや胴の張った隅円方形の住居である。南壁よりやや西に寄って大きな平石２個が並んでいるが、付近のいくつかの偏平な石とあわせて、入口部に連なる施設の敷石とみなされるものである。入口部は幾分張出すのかもしれない。この石と炉の中心とを結んだ線が、本址の主軸であり、Ｎ－25°－Ｅを測る。床面はロームで堅い。炉は住居の中央よりも若干入口方向に偏っている。110×110㎝の範囲で掘り窪められており、焼土が堆積していた。北側に石が数個残っているが、本来は石囲み炉であったろう。小穴が20個程検出されたが、壁際に規則的に配列する８個（Ｐ１～Ｐ８）は柱穴であろう。また、南壁の平石際の数個（Ｐ９～11）も柱穴ないし入口に関する施設であろう。遺物は土器がほとんどであるが、西壁外側の傾斜部分（平面図中№１）から硬玉製品（第139図）が、東壁外（平面図中№２）から石錘（第135図）が出土した。但し、これらの遺物は本址に伴うものではなく、本址の上面に延びていたであろう１号配石に伴うものと考えたほうが良さそうである。後期中葉、加曽利Ｂ２式期の住居とみられる。

出土土器（第36図）（第38図15～23）

2301　算盤玉状胴部の浅鉢形土器で、全体の３分の一程の破片である。肩部には縄文を地文に、沈線による長円の区画文、胴部に雑な羽状沈線が施されている。

第38図15・16は同一個体と思われる深鉢形土器の破片である。口縁部と平行に、紐状の細隆線が２条めぐる、以下に磨消し縄文帯が区画されている。内外面ともに非常に磨滅している。17は粗製の深鉢形土器の口縁部破片である。以上は堀之内１および２式土器である。18は口縁部破片で、平行な磨消し縄文帯がある。黒褐色を呈し、内外ともに磨かれている。加曽利Ｂ１式土器である。19は算盤玉形胴部の浅鉢形土器口縁部破片で、肩部に弧状の磨消し縄文帯が施される。20～22は沈線により羽状・格子目などが描かれる一群である。20は鉢形土器、22は波状口縁部の深鉢形土器であろう。これらは、加曽利Ｂ２式土器である。23は非常に細かい刺突文が充填されており、蛇行した沈線も付けられている。

第24号住居址（第40図）

Ｆ－10区の黒褐色土層を調査中、炉址が発見された。付近には小さいながらも偏平な石が散布しており、僅かに住居の残存をうかがわせる。住居の規模や形状を知る由もないが、これまでの住居例から、炉の北側と南側とにある平らな石を本址の対角線とすると、一辺が４～4.5ｍの方形の住居とみることができる。炉は石囲みで、直径80㎝の円形である。中央部は深さ14㎝ほど掘り窪められている。石は一列がめぐるだけである。住居の範囲とみなされる場所から土製耳飾り３点、土偶１点が出土した。現状保存された住居である。後期後半の住居と思われる。

出土土器（第36図）（第38図24～40）

2401　鉢形土器の二分の一程の破片である。口縁部が内湾する、無文の土器である。器壁は５㎜前後と薄く、部分的に輪積み痕や指頭圧痕が残るが、よく磨かれている箇所もある。明るい褐色を呈する。

第38図24は隆起帯縄文の土器であるが、口唇部の肥厚や、隆帯の盛り上がりは顕著ではない。平口縁の鉢形土器であろうか。25～32は沈線を主体とした土器である。25は「く」の字形口縁の深鉢形土器破片であろう。横走する平行沈線と、縄文帯とが施されている。26は、小突起をもつ深鉢形土器で、突起部に向かって収束するかのように、沈線がめぐっている。地文は縄文である。27は深鉢形土器の突起部破片である。突起の上端には２条の刻目が付けられている。28は波状口縁の深鉢形土器と思われる破片で、口縁と平行に沈線が走り、その間に刺突文が連続する。29は口縁部破片で、背中合わせの弧文が施されるとともに、刻目のある棒状の隆帯が付けられている。30は深鉢形土器の胴部破片で、刻目の充填される弧状の区画文がみられる。31も弧状の沈線が付けられた口縁部破片。「く」字形口縁の深鉢形土器と思われる。32は胴部破片で、上部に曲線状の沈線、下半に羽状沈線が施されている。清水天王山式土器である。

33は縦方向に棒状の隆帯が付けられた口縁部破片である。隆帯上には押圧文が連続する。34には円形の張

第40図　第24号住居址（1／60）

り付け文があり、上部が楕円状をなす小突起が付けられている。35には刺突文や刻目がみられる。

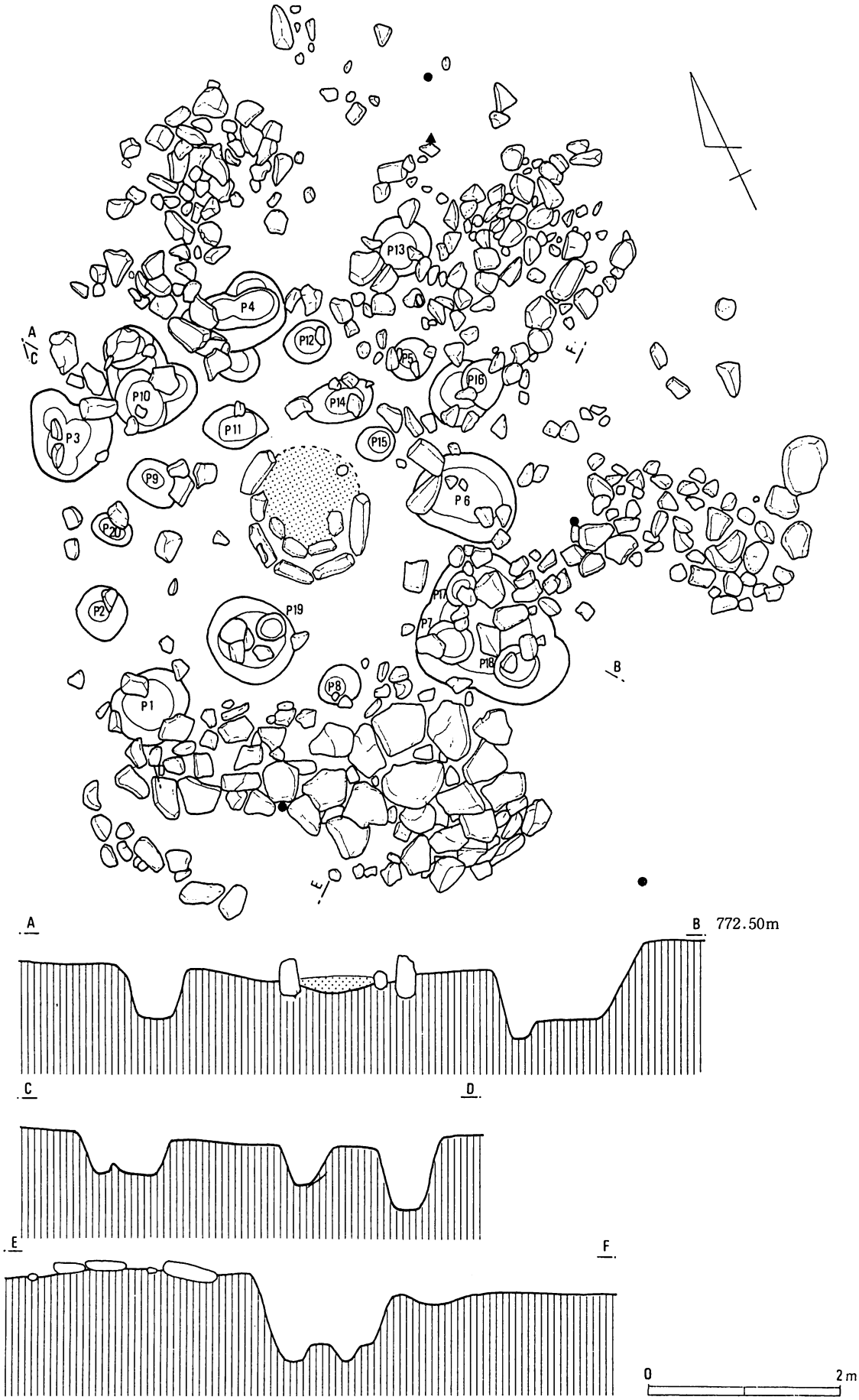
37・40は無文の土器である。いずれも口唇部に押圧や刻目が連続する。39は波状口縁深鉢形土器の破片である。波頂部は上端が広がり、強く外反する。口縁には隆帯が2条走り、その間には沈線が2条付けられている。36は小型の椀形とみられる土器で、沈線間に細かい刺突文が充填されている。38は壺形土器の頸部破片で、磨消し縄文帯が施されている。外面黒色を呈し、良く磨かれている。

以上の土器について、32・36・38が晩期前半、それ以外は後期後半に位置付けられると思われる。

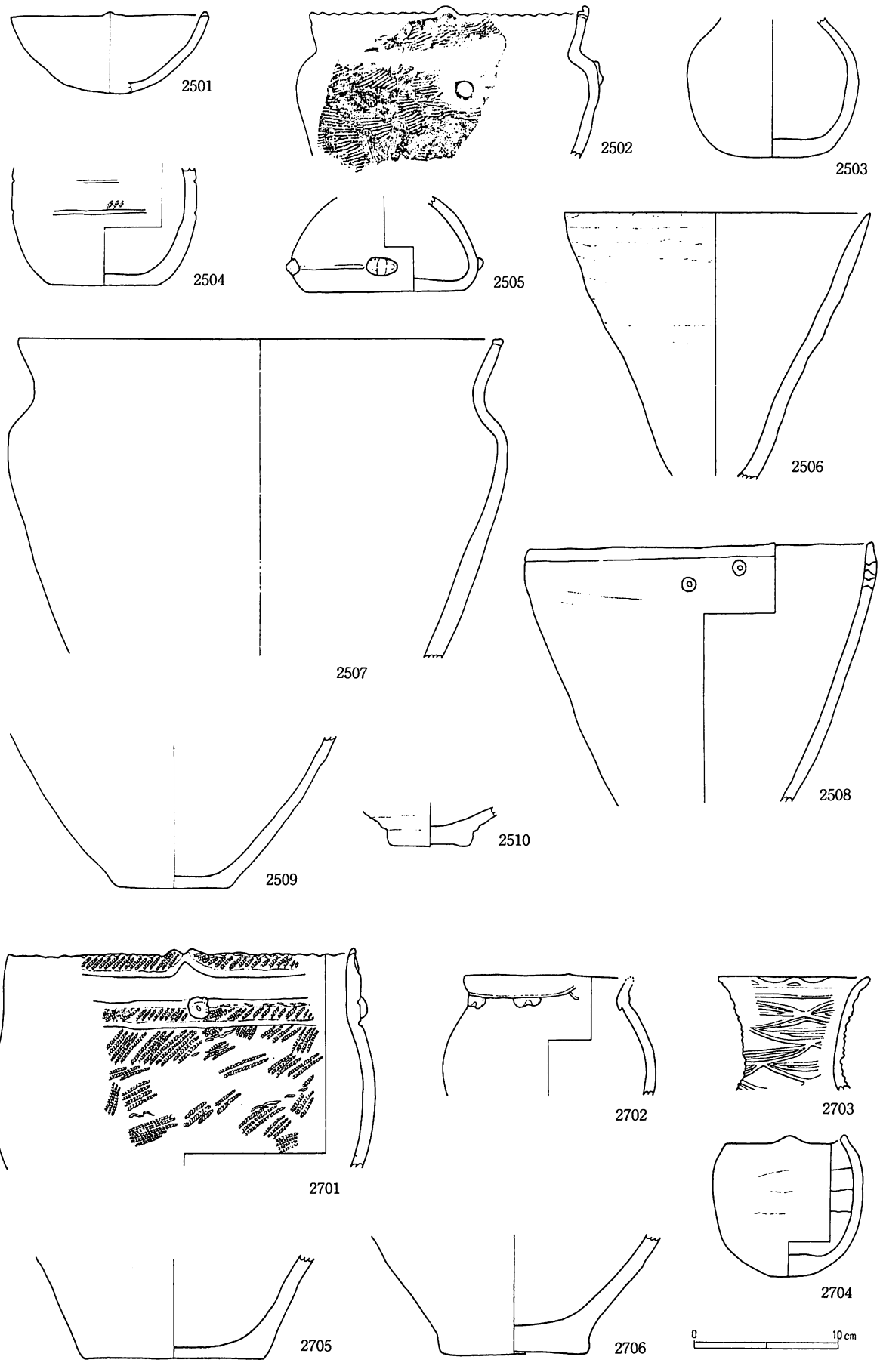
第25号住居址（第41図）

E・F－10・11区に位置する。付近には第28号や第30号住居がある。黒褐色土中から石が多く出土し始め、特に南西側に偏平な石が密集し列をなすのが確認できた。当初この部分を配石遺構と考えたが、調査が進むと、この石列の北2m程から石囲み炉が確認されたため、住居とみなした。北側から東側にかけて、小振りの石が集中する箇所が3か所みられるが、平らに敷きつめられた状況ではなく、本址の覆土上層でしかも壁外にあること等から、本址とは直接かかわりのないものとみられる。当初確認された南西側の石列は本址の壁をなすものであろう。ここには偏平な石が2列から3列に敷かれており、最も内側の石は住居内に傾斜している。他の辺（壁）については石列の残りは良くない。炉は、二重に石がめぐるものであるが、北東側には残っていない。この炉石は、内側が小さく外側が大きい。規模は、外側の炉石で計測すると、150×120cm以上となる大型のものである。床は黒褐色土で堅くはなく、柱穴等は検出されなかったため、床や石を剝がして下部の調査を行なった。その結果いくつかの穴を見出だしたが、このうちP1からP8が柱穴の可能性がある。これらの穴と石列の配置から推定すると、本址は一辺5m程度の方形の住居とみなされる。柱穴は石列の内側に並ぶことが確認できる。なお、P13の北東側から石剣（第140図5）が出土したが、これは住居外とみられる地点である。本址の時期は晩期中葉から後葉であろう。

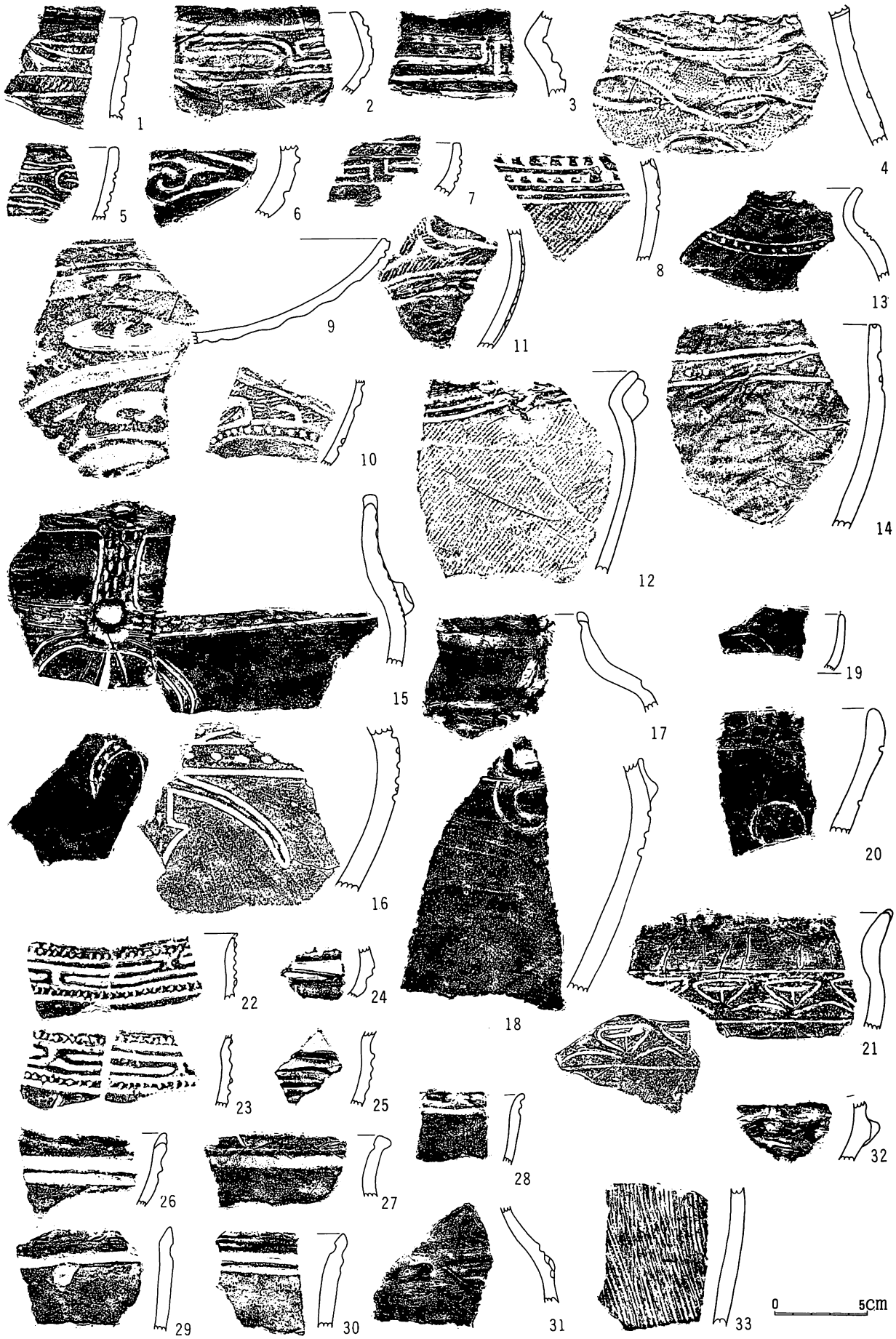
出土土器（第42図）（第43図1～33）



第41図　第25号住居址（1／60）



第42図　土器実測図（第25号・27号住居址）（１／４）



第43図　土器拓本（第25号住居址）（１／３）

2501　覆土の褐色土から出土した浅鉢形土器の4分の一程の破片である。無文であるが、内外面ともに磨かれている。口唇部に小突起が付く。

2502　覆土下層から出土した鉢形土器の3分の一ほどの破片である。頸部は強く括れ、短い口縁部へと至る。全面に地文として、無節の縄文が施されている。肩部に円形の張り付けがある。口唇には刻目が連続し、小突起もみられる。

2503　壷形土器であるが、頸部以上を欠損する。底部はやや丸底気味である。器面の剝落が激しい。

2504　鉢形土器の胴下半部である。沈線で区画された磨消し縄文帯が横走する。内外面や割れ口部分の磨滅が激しい。灰褐色を呈する。覆土上層からの出土である。

2505　底部が大きく、偏平な器形の壷形土器とみられるものである。内面には、輪積み痕や指頭圧痕が、底部外面には指頭圧痕が残っているが、胴部は比較的よく磨かれている。また、胴下部に張り付け文があるが、これは全体で4個付けられていると思われる。灰ないし黒褐色を呈する。

2506～2509は無文の深鉢形土器である。2506は口径に比較して底部が小さい形状の土器である。2分の一ほどの破片である。輪積み痕が著しい。2507は頸部の強く括れる、大型の深鉢形土器で、全体の3分の一程の破片である。2508は胴下半部を欠している。補修孔がみられる。以上は、覆土下層からの出土である。2509は胴下半部の破片である。底部周辺は火熱を受けたらしく、赤褐色を呈する。

2510　鉢形土器ないし皿形土器の底部破片である。突出した小さい底部の土器。内外面ともに磨滅が激しく、ザラつきがある。

第43図1は口縁部破片で、平行沈線と縄文帯との間に三叉文がみられる。2・7は雷文土器の一群であろう。2は鉢形土器の破片と思われるが、連続した「鍵の手」文である。7も鉢ないし椀形土器の口縁部破片で、入り組み鍵の手文がみられる。地文に縄文が施されている。3は深鉢形土器の頸部破片であるが、括れ部に連続する鍵の手状の沈線が付けられている。4は壷形土器の肩部付近の破片である。括れ部に径5㎜程度の貫通孔が等間隔で並んでいる。文様は、沈線による入り組み文が主体である。地文として縄文が施されている。黄土色を呈する。5は入り組み弧文の土器で、清水天王山式土器である。6は入り組み三叉文が付けられている。8～12は東北系の土器である。8は深鉢形土器の口縁部に近い破片で、沈線と刻目が連続する。大洞BC式に比定できよう。9は皿形土器で、彫刻的な雲形文により飾られている。器面は磨滅しているが、僅かながら縄文も残っている。赤褐色を呈する。大洞C1式に比定できる。10、11も皿ないし浅鉢形土器であろう。いずれも磨消し縄文帯がみられるが、9ほど彫刻的ではない。12は頸部が括れ、短かく外傾する口縁部を有する深鉢形土器である。肩部に2条の沈線が走り、張り付けによる突起が見られる。胴部には縄文が施される。黒褐色を呈し、良く磨かれている。

13～18は列点文のある土器である。13は壷形土器で、肩部に2条の沈線がめぐり、その間に刺突文が連続する。外面茶褐色を呈し、良く磨かれており光沢がある。14は深鉢形土器で、僅かに括れる頸部を中心に、半截竹管様の工具による平行沈線と刺突文とが付けられている。口唇にも同様の刺突文が連続する。15～18は同一個体ではないが、同種の器形・文様の土器とみられるもので、広口壷に類する器形と思われる。15は口縁部破片で、張った肩部に、刺突文の充塡された平行沈線がめぐる。また、一部には円形の張り付けがあり、それを中心として下方に弧文が延び、上方には刺突文が充塡された幅広の平行沈線帯が、口縁部まで続いている。口唇には小突起がみられる。灰褐色を呈する、堅い焼成の土器である。16は、胴上半部の破片である。別個体ではあるが、文様構成上からは15の下部に連続するようなものであろう。刺突文の付けられた平行沈線帯がめぐり、その下に刺突文と沈線から成る弧状文が施されている。さらに、弧状文の中央から、下方に向いた矢印状の沈線がみられる。器壁は厚く、1.3㎝を測る部分もある。17は外反の強い口縁部破片である。やはり肩部に刺突文の付けられた平行沈線帯が走る。肩部に円形の張付けもみられ、口唇には小突起がある。18は肩部以下の破片である。円形の張付け文、沈線による弧状文がみられる。19、20には沈線により図形状の文様が描かれている。19は椀形土器、20は深鉢形土器であろう。21は鉢形土器と思われる。やや膨らんだ肩、短く外反する口縁部をもつ。文様は肩部にあり、「T」字形の沈線を中に持つ逆三角形状の

図形が、横並びで連続する。内外面ともに黒褐色を呈し、光沢がある。外面には、赤彩が残っている。

22～31は工字文・浮線網状文・およびその一群の土器である。まず、22・23は同一個体とみられる土器で、細い隆線による工字状の文様が走る。その上下には、細かい円形の押圧文が一条ずつ連続する。灰褐色を呈する。内面は良く磨かれ光沢がある。24・25は浅鉢形土器の破片であろう。浮線網状文が付けられている。26～30は口縁部に一条ないし二条、凹線状の沈線がめぐる深鉢形土器である。27・30は口縁部が外反する。また、口唇の断面形状には、丸味みを帯びるもの（26・28）、平坦なもの（27）、尖り気味のもの（29・30）などがある。28は小型で、沈線以下に細い条痕がみられる。31は壺形土器の頸から肩部にかけての破片で、肩部に三条の平行沈線が走る。

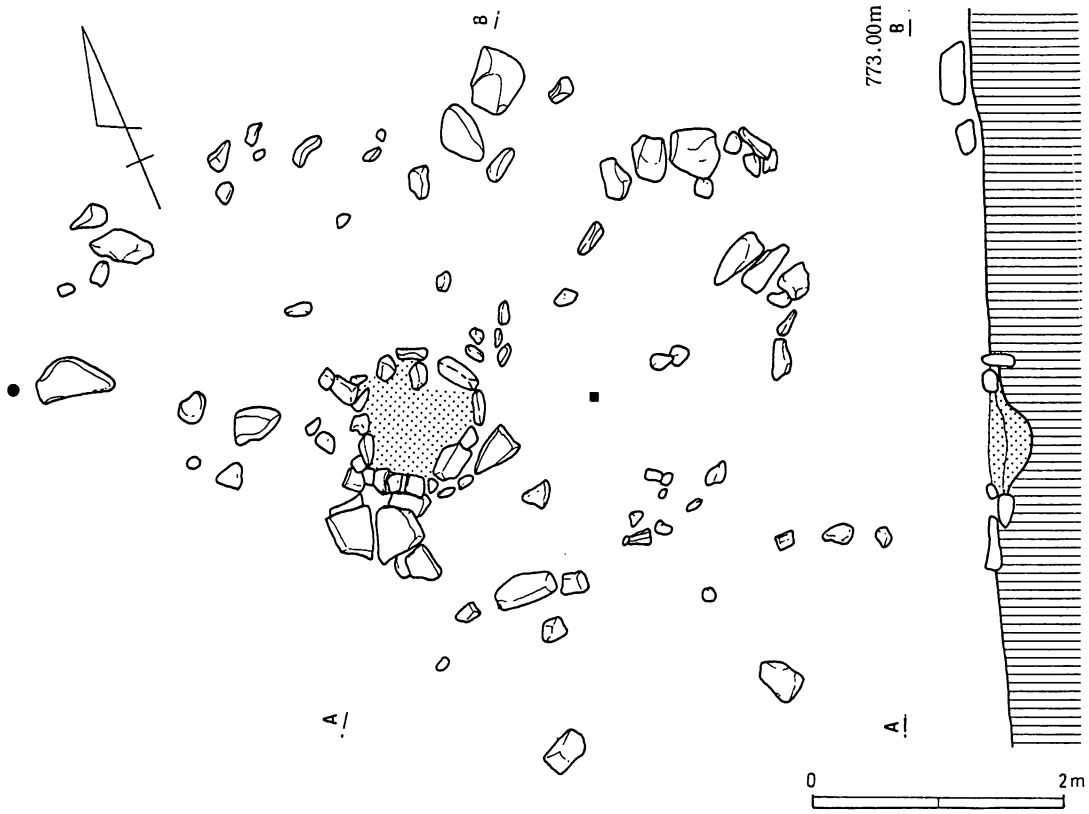
32、33は条痕文系の土器。32は刻みのある凸帯部の破片である。33は全面条痕が施される。いずれも黄褐色を呈する。

以上のように、晩期前半から後半までの土器がみられる。

第26号住居址（第44図）

D－10区に位置する。炉しか残っておらず、その周辺に僅かに石が散乱するだけである。南4mには第3号配石が、北2mに第29号住居がある。炉の北東側にある大きめの石は第29号住居のものかもしれない。炉は石囲み炉で、直径1.1m程の円形を呈する。石は一列にめぐるが、その外側に平石が残っている箇所もあり、本来は炉の周辺に敷石されていたことがうかがわれる。床面下を調査したところ、いくつか小穴が発見された。なお、床剝ぎ作業中に焼けた獣骨片が出土したが、この中には鹿角も含まれている。また、炉石付近から土偶1、土製耳飾り1が出土した。炉周辺から出土した土器からみて、本址は晩期後半の住居であろう。

出土土器（第36図）（第46図1～30）



第44図　第26号住居址（1／60）

2601　無文の浅鉢形土器である。4分の一程の破片。

2602　皿形土器である。底部から口縁部にかけての一部を欠損する。口縁部は刻み目状に、小さな波状を呈している。口縁部に近い部分に、平行沈線が施される。また、焼成前につけられた孔2個がある。赤褐色を呈し、光沢のある土器である。

2603～2605は住居の床面を剝がし、柱穴等を確認する作業中に出土したものである。2603は無文の深鉢形土器口縁部破片である。隆帯状に粘土紐が張付けられ、口縁を取り巻いている。その隆帯上には一定の間隔で、突起状の盛り上がりがある。黒褐色を呈する。2604は台付きの小型土器である。ほぼ完全。地文縄文で、口縁に2本1単位の棒状の張付瘤が6箇所認められる。この瘤の間には沈線による弧状文が付けられている。2605は、ゆるい「く」字形口縁部の深鉢形土器破片である。凹線状の浅い沈線が4条めぐっており、口縁部から屈折部にかけて、「V」字状の隆帯が張付けられている。

第46図1～5、8は後期後半に位置付けられる土器である。1は平行沈線、2は平行沈線の末端が口縁に向かい弧状に上がっている。3は「く」の字形口縁の深鉢形土器で、屈折部に横長の瘤が張付けられている。凹線状の沈線も施されている。4は波状口縁部の深鉢形土器で、口唇がやや肥厚し刻目および刺突が連続する。頸部には曲線状の磨消し縄文がみられる。黒色を呈する、光沢のある土器である。5は隆起帯縄文の土器である。8は連続刻目文と、縦長の有刻瘤の付けられた破片で、東北系の「コブ」付き土器である。6・7は無文の土器であるが、6は波状口縁の深鉢形土器。口縁に隆帯がつけられ肥厚する。隆帯の中央には沈線が一条走り、波谷部では隆帯が突起状に盛り上がる。7は有刻凸帯文の土器である。

10～16は晩期前半の土器であろう。特に10・11は清水天王山式で、横長有刻瘤の付けられた口縁部破片、11は入り組み沈線の土器である。12には矢羽状の沈線が見られる。13・14は列点文の土器。特に14は壷形土器で、肩部の凹線に区画された中に、爪形状の刺突文が連続している。15は口縁部に沈線、胴部には縄文の施された深鉢形土器。16は太い入り組み三叉文がみられる壷形土器である。

17～30は晩期後半の土器である。但し、24は後期後半から晩期初頭の「コブ」付き土器である。17、18は深鉢形土器の破片と思われ、17は削り出しにより、1条の隆帯が表現されている。内面には浅い沈線が走る。18の外面には3条の沈線により、2本の隆線が、内面には2条の沈線により1本の隆線が、それぞれ表現されている。19～23は浅鉢形土器と思われる。20は丸底の底部破片である。21～23は削り出しにより、浮線網状文や隆線が彫刻的に表出されている。21は内面にも文様がある。25は壷形土器の口縁部破片で、細い沈線が5条めぐり、部分的に短沈線により、それらが結ばれている。色調は、17が赤褐色、18・23が茶褐色、25が灰褐色、他が黒褐色を呈する。26～29は条痕文土器である。26には稲妻状沈線が走り、27には曲線状の沈線、29には直線的な沈線が付けられている。30は無文の壷形土器で、頸部と肩部との境は削り出しにより段が付く。

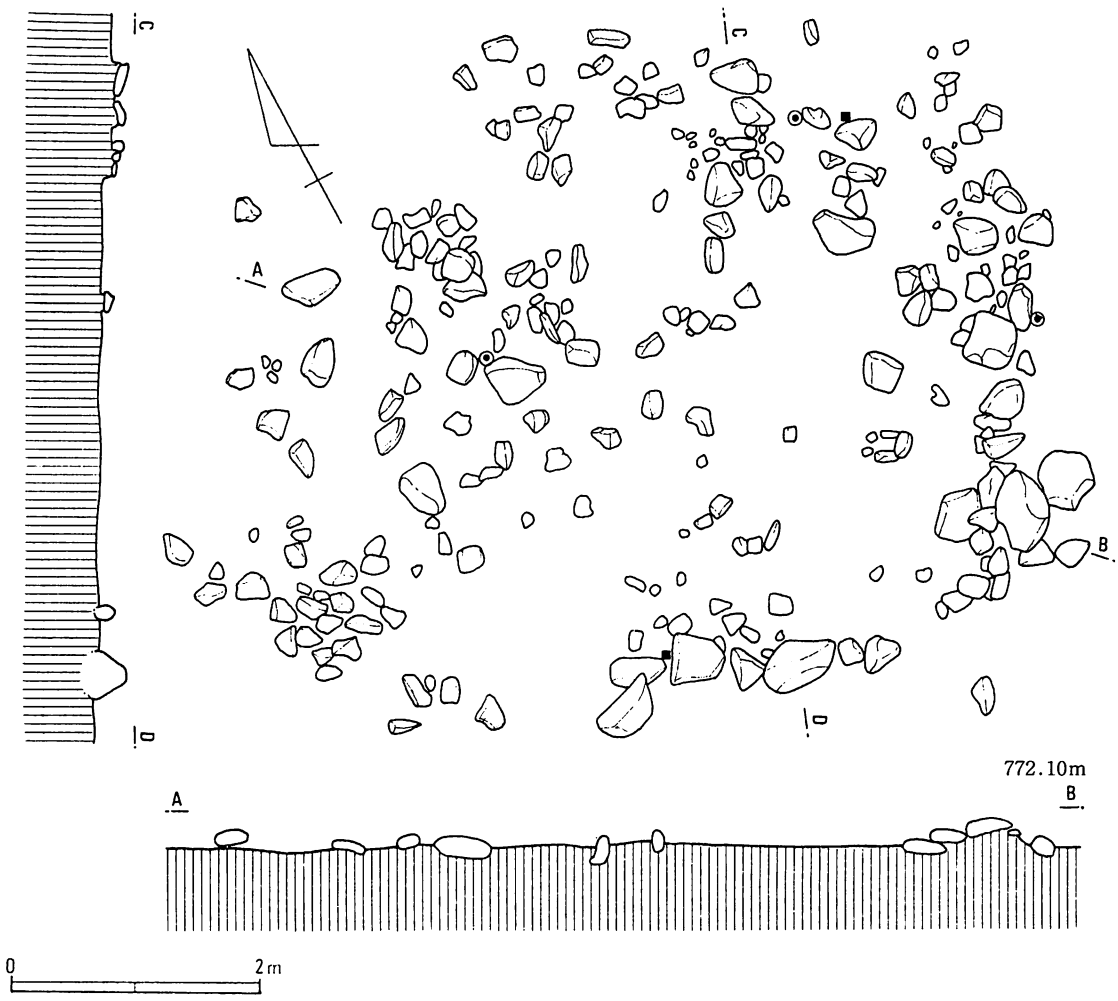
第27号住居址（第45図）

F・G－10区にて発見された。第21・22号の北2mに位置する。炉は見られないが、南東辺に4m、南西辺に2.5mほどの石列が認められ、全体として5×4.5mほどの広がりと考えられたため、住居とみなしたものである。北から西にかけての辺は石が散乱し、残存状況不良である。南東コーナー付近に小さな石囲みが認められた。床は黒褐色土で堅くはない。現状保存された住居である。土偶、土版、小型土器等が出土したが、全て壁際の石列付近からである。後期後半から晩期にかけての住居である。

出土土器（第42図）（第46図31～42）

2701　深鉢形土器の3分の一程の破片である。ゆるく括れた頸部に2本の沈線が走り、円形の瘤状の突起が張付けられている。口縁部直下にも沈線がめぐり、その末端が口縁部に上がっていく。その部分の口唇は山形の小突起になっている。口唇には刻目が連続する。沈線に区画された内部や、胴部には縄文が施されている。色調は明るい褐色をしている。

2702　壷形土器の破片である。無文であるが、括れ部直下に張付け文が見られる。全部で6個あろうか。



第45図　第27号住居址（1／60）

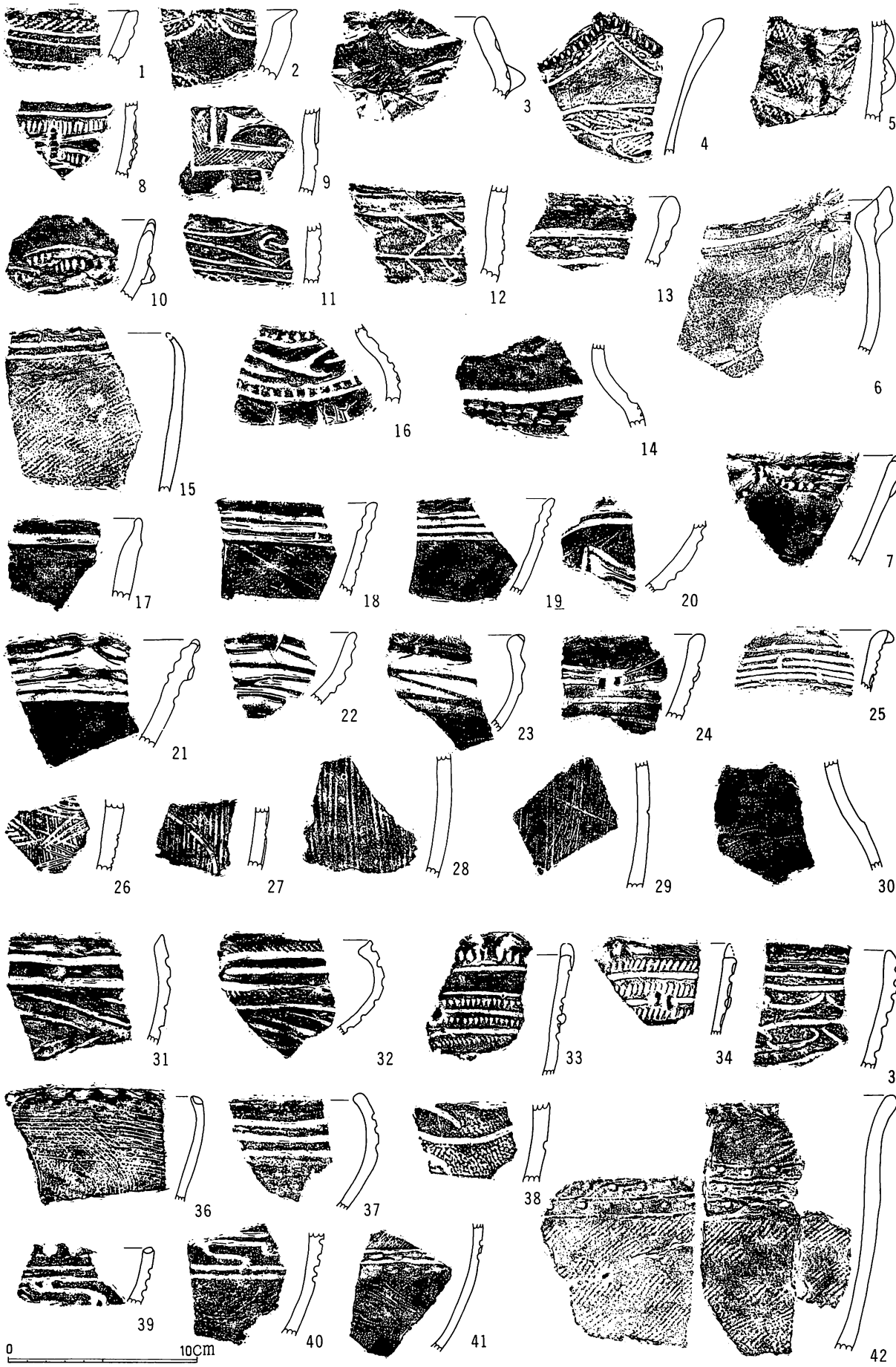
内面には輪積み痕が残っている。2703は壷形土器の口縁部破片で、細長い頸部を中心に、削り出しの細隆線による浮線網状文が施されている。2704は小型の椀形土器の二分の一程の破片である。底部は丸底で、口唇部には山形の小突起がある。整形は雑で、内面には輪積み痕が顕著に残る。

2705・2706は深鉢形土器の底部破片である。いずれも粗い網代痕が認められる。

第46図31・32は深鉢形土器の破片で、口縁部に横走する平行沈線、頸部以下に羽状沈線が付けられている。32には縄文が施されている。後期後半の土器であろう。33・34は東北地方系の「コブ」付き土器である。33は三角形状の刺突文が連続し、34では縦長の刻目が続いている。口唇部には小突起がある。35は平行沈線や弧状沈線の付けられた土器で、清水天王山式に通ずる可能性がある。36は粗製の深鉢形土器で、櫛歯状工具による細かい沈線が走る。口唇には押圧がみられ、細かい波状口縁をなしている。37は椀形の土器であろうか。平行沈線が横走する。38は入り組み弧状文の土器で、縄文が施されている。39・40は羊歯状文の一群である。41は椀形ないし浅鉢形土器で沈線間に列点文が走る。42は深鉢形土器で、頸部に細く鋭い沈線が4条めぐり、その中に刺突文が連続する。胴部には縄文がつけられる。口唇にも刻みが見られる。赤褐色を呈する。

第28号住居址（第47図）

E－11区にて炉が発見されたため周囲を精査したが、残存状況が悪く、プランは確認できなかった。炉についても、80×60cmの範囲に焼土が見られ、炉石は北側に3個、東側に1個が残っていた程度である。また、床の範囲とみられる中に、平石がいくつか散布している。第25号と第29号との間に位置している。炉を中心



第46図　土器拓本（１～30　第26号住居址、31～42　第27号住居址）（１／３）

とした付近から出土した土器から、本址の時期は晩期前半と考えられる。

出土土器（第49・50図）（第51図１～12）

2801　皿形土器の３分の一程の破片である。口縁部直下に玉抱き三叉文が施され、以下縄文帯が見られる。赤褐色を呈する。

2802　壷形土器の３分の一程の破片。外面は磨かれているが、磨滅しザラつきがある。

2803～2805は無文の深鉢形土器である。2803と2805とは床面を剝がし、下部を調査中に出土した土器で、2803の口唇には小山状の小突起が連続し、波状をなしている。黒褐色を呈する。2805はやや内湾した口縁部の土器である。2804は上層出土の土器で、内面は丁寧に磨かれている。ともに明るい褐色を呈する。

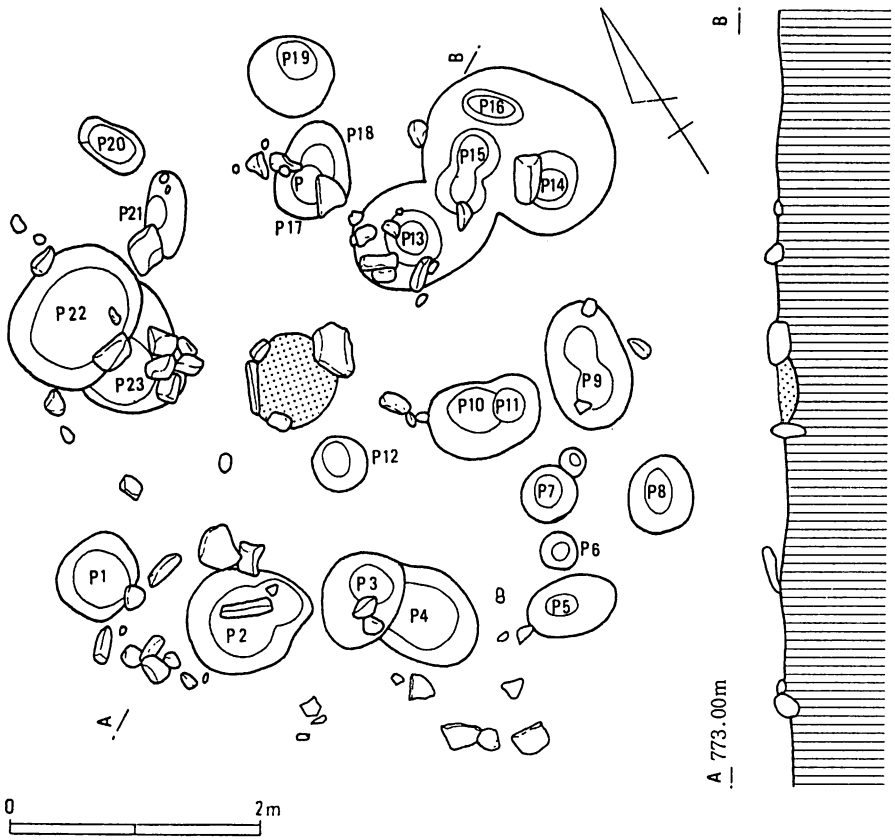
2806　丸底気味の椀形土器。無文であるが内外面ともに良く磨かれている。明褐色の土器である。

2807・2808は無文の深鉢形土器である。2807は上層からの出土。３分の一程の破片で、口径45㎝を越える大型土器である。2808は床剝がしの際に出土したものである。口径50㎝程と推測できる４分の一程度の破片である。

第51図１は波状口縁の深鉢形土器で、口唇には刻目が連続し、内面に肥厚する。波状口縁下には羽状的な沈線が施されている。２～４は列点文の土器。２は頸の短い深鉢形土器で、口縁部に２列、肩部に１列、列点文が連なっている。頸部には縄文が走る。色調は薄い茶褐色である。３は椀形の土器で、口縁部に列点がめぐり、更にそこから曲線状に列点が走る。４は皿形土器で、平行沈線間に細かく整った列点が連続する。列点内には赤彩が残る。内外面ともに良く磨かれている。

５・６は「鍵の手」文の土器。いずれも浅鉢形土器であろう。５には横長の入り組み鍵の手がつけられている。口縁部と屈折部には縄文がみられる。黒色を呈する土器である。６も入り組み鍵であるが、いずれの鍵の手も上位の横沈線に連結している。

７～10は三叉文のある土器。７は口縁に有刻凸帯、体部に三叉文や沈線がつけられている。清水天王山式土器である。８は浅鉢形土器であろうか、口縁部直下に沈線と三叉文とが付けられ、体部には入り組み弧状文があり、周囲には縄文が施されている。９は頸部の強く括れる深鉢形土器で、口縁部文様帯には浅い沈線と細かい刻目により、同心円や弧状文が施されている。残存箇所では、三叉文は認められない。10は小型の深鉢形土器である。山形の突起を持つ波状口縁の土器で、突起の下部に、縦短線を挟んで三叉文が向合っているようである。沈線



第47図　第28号住居址（１／60）

間には刺突文がつけられている。7・9・10は黒褐色を呈する。

11は浅鉢形土器である。口縁部に比較的太い工字文がうねっている。この文様は削り出しにより、隆帯状に浮き出されている。器面が剝落しており、明確ではないが、口唇部に縄文が施された痕跡が認められる。晩期後半でも前葉の土器であろうか。12が浅鉢形土器の底部破片である。丸底で、円形押圧の連続する低い隆帯がめぐり、その外側に縄文帯がみられる。

以上の土器は、1・2・4・7が下層の出土である。

第29号住居址（第48図）

D－11区に位置する。第28号炉の東約5m、第26号炉の北約2mにある。この付近の遺構は残存状況が悪く、炉しか残っていない例が多いが、本址を取巻く石列については、南東辺の石列がやや直線的にならんで検出された。他の3辺については、まばらであるが、概ね、炉を中心にめぐっている。これら石の範囲は一辺6mを測る。炉の規模に比較して、大きすぎる観もある。炉は小振りの石9個で囲まれた、70×58cmの楕円形を呈する石囲み炉である。床を剝がして下部を調査してみたところ、石列の外側とみられる箇所から、いくつかの小穴が検出された。これらが全て本址にともなう柱穴とは思われない。なお、下部を調査中に8号土壙が発見された。後述するように、焼けたイノシシ下顎骨が大量に出土した土壙である。本址の南東辺の外側にあたり、この箇所については石列の幅が細くなっている。あるいは、石列の一部が切られて構築されたのかもしれない。しかし、本址を検出した面は黒褐色土であり、この面では8号土壙の所在は確認できなかった。本址の内外から、土偶・土製耳飾り・石剣などが出土した。本址は晩期中葉から後半にかけての時期であろう。

出土土器（第49図）（第51図13～29）

2901　床面を剝がす作業中に、下層から出土した無文の浅鉢形土器である。全体の二分の一強の破片である。器面は荒れているが、本来は丁寧に整形されていたと思われる。灰褐色ないし明褐色を呈する。

2902　上層出土の小型の鉢形土器である。3分の一を欠く。口縁部に三日月状の張り付けがある。明るい褐色を呈する。2903、2904は底部破片である。2903には網代痕がみられる。

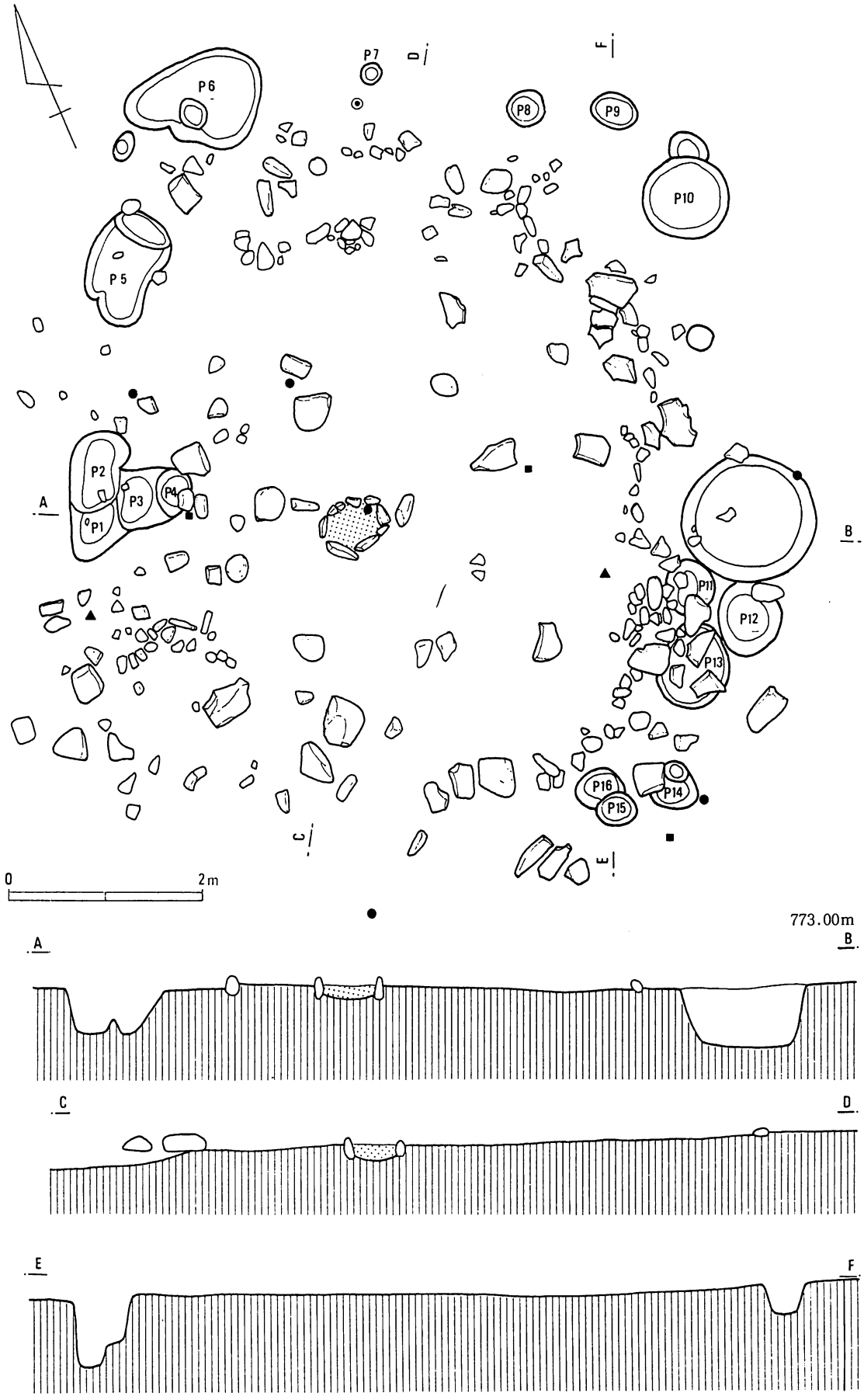
2905　覆土から出土した深鉢形土器の破片である。肩部に大きな工字状文が付けられている。この工字文は、周囲の沈線により削り残されているものであるが、彫刻的な感じではない。頸部には刺突文が連続している。口唇は小さな波状をなす。黒褐色を呈する。口縁部は内外面とも良く磨かれている。

第51図13～15、17～19は後期後半の土器である。13は「く」字形口縁の土器で、屈折部に横長の瘤が付けられ、胴部には羽状文がみられる。口唇部および屈折部には縄文があり、赤彩が残る。浅鉢であろうか。14は「く」字形口縁の深鉢形土器で、平行沈線と縄文帯とで飾られている。15は凹線状沈線の土器で、押圧のある棒状隆帯がつけられている。17は口縁部文様帯に平行沈線と列点文がつけられ、屈折部以下に斜行沈線（あるいは羽状沈線）が認められる。18は沈線の連結部に瘤がつけられている。19は平行沈線間に刺突文が連続し、沈線の収束部に小さい丸コブがつけられる。東北方面の「コブ」付き土器に関連するものである。

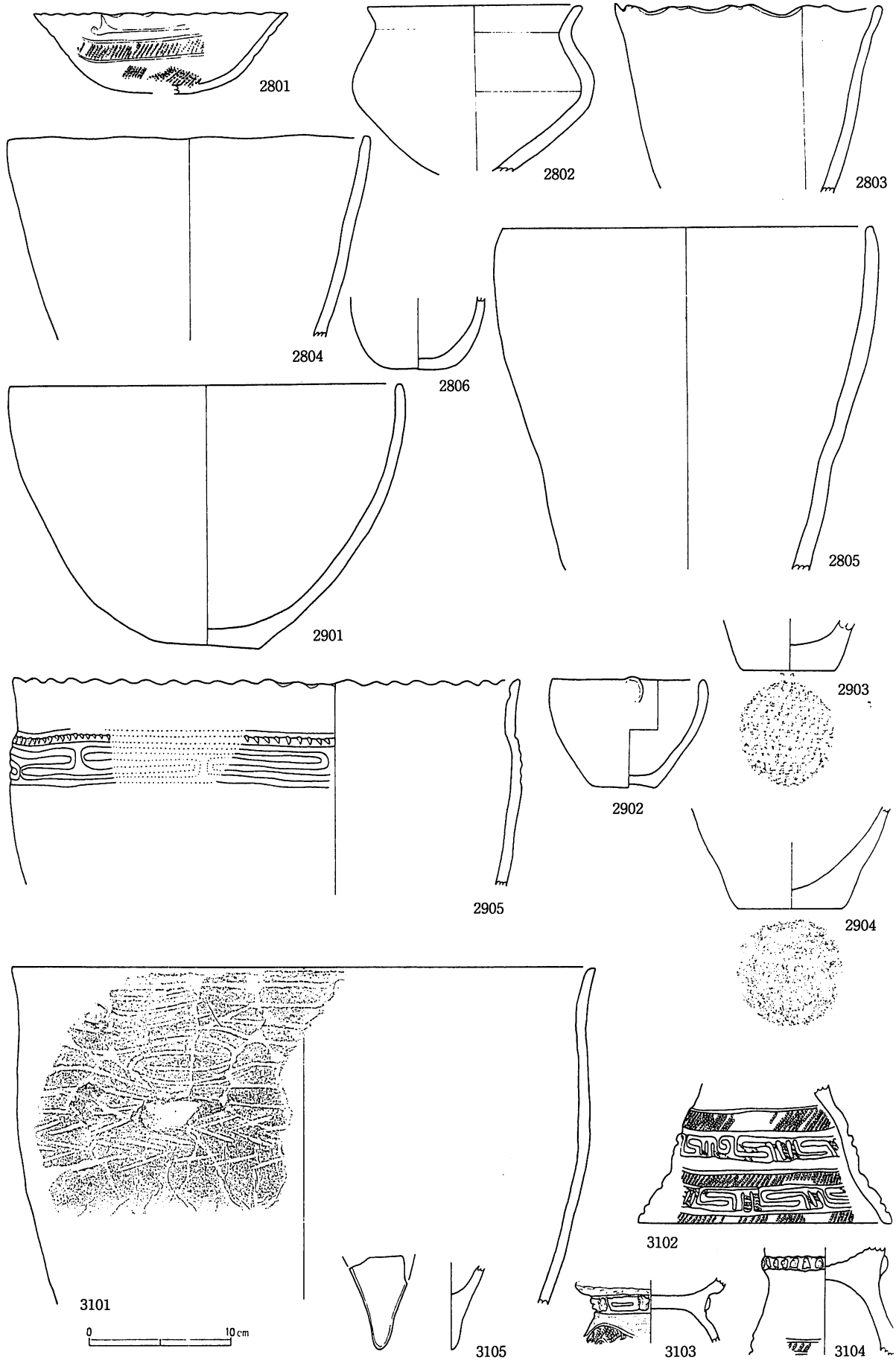
16は広口壷と思われ、肩部に削り出しによる縄文帯が認められる。縄文帯に続き、眼鏡状の弧文が施されている。20は山形の突起をもつ波状口縁部の深鉢形土器。突起部直下に大きめの瘤、それ以下に小さめの瘤2個1対がつけられている。また、突起部下の瘤間には三叉文があるが、これは向合ったものであろう。内外とも良く磨かれている。21は波状口縁の深鉢形土器で、口縁部に刻目のある隆帯がめぐる。体部には入り組み沈線が走り、その間に短線が多くつけられている。22は浅鉢形土器であろう。三叉文を伴うと思われる縄文帯がみられる。以上は、晩期前半の土器である。

23は工字文のつけられた土器で、2905に類似する。工字文は23の方が小さい。晩期中葉に位置付けられよう。

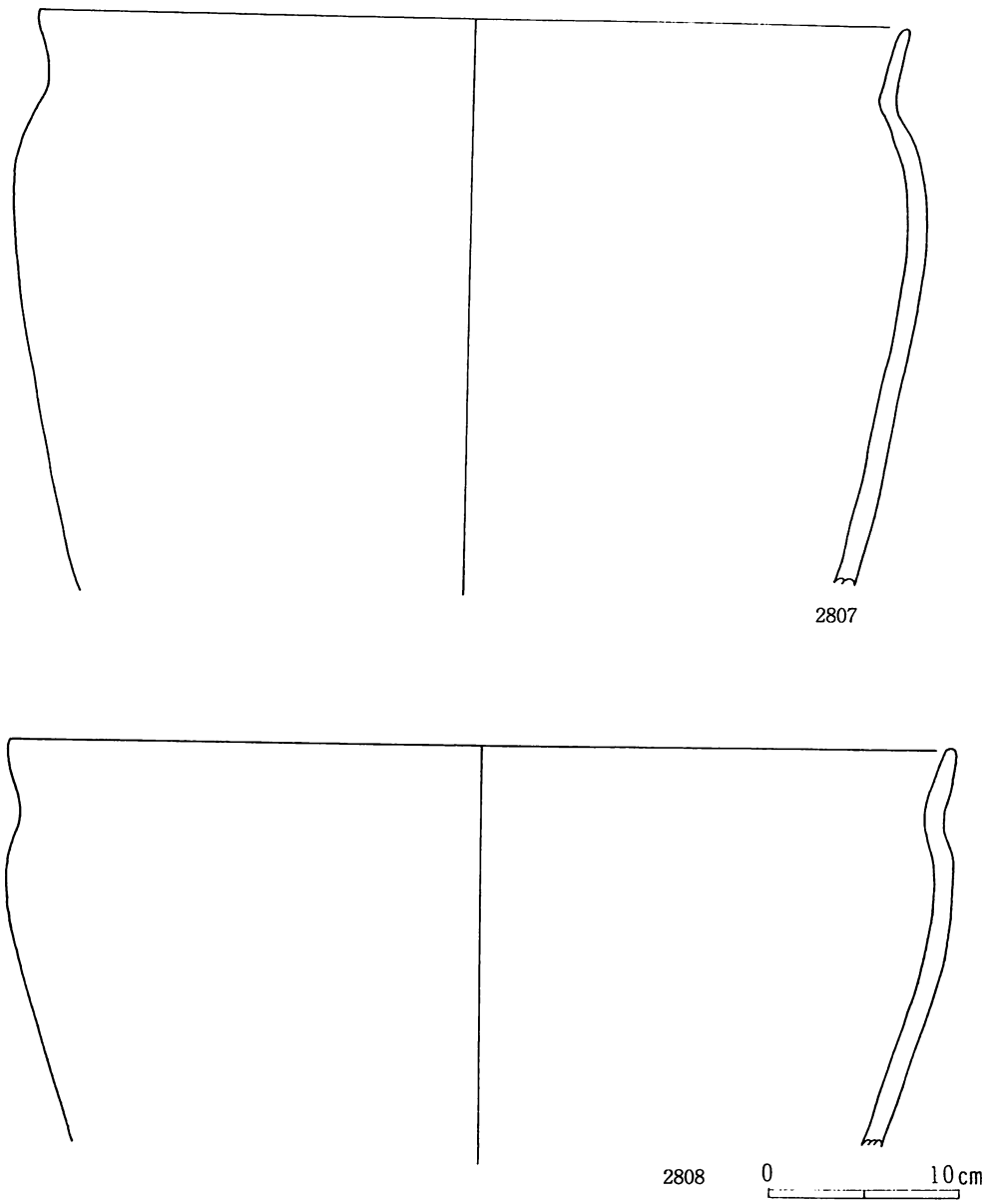
24～29は浮線網状文およびその一群の土器である。いずれも浅鉢形土器と思われ、29を除き、削り出し手法により、沈線部が除去されている。特に、24・27・28は顕著で、隆線部が彫刻的である。29には太い隆帯



第48図　第29号住居址（1／60）



第49図　土器実測図（第28号・29号・31号住居址）（１／４）

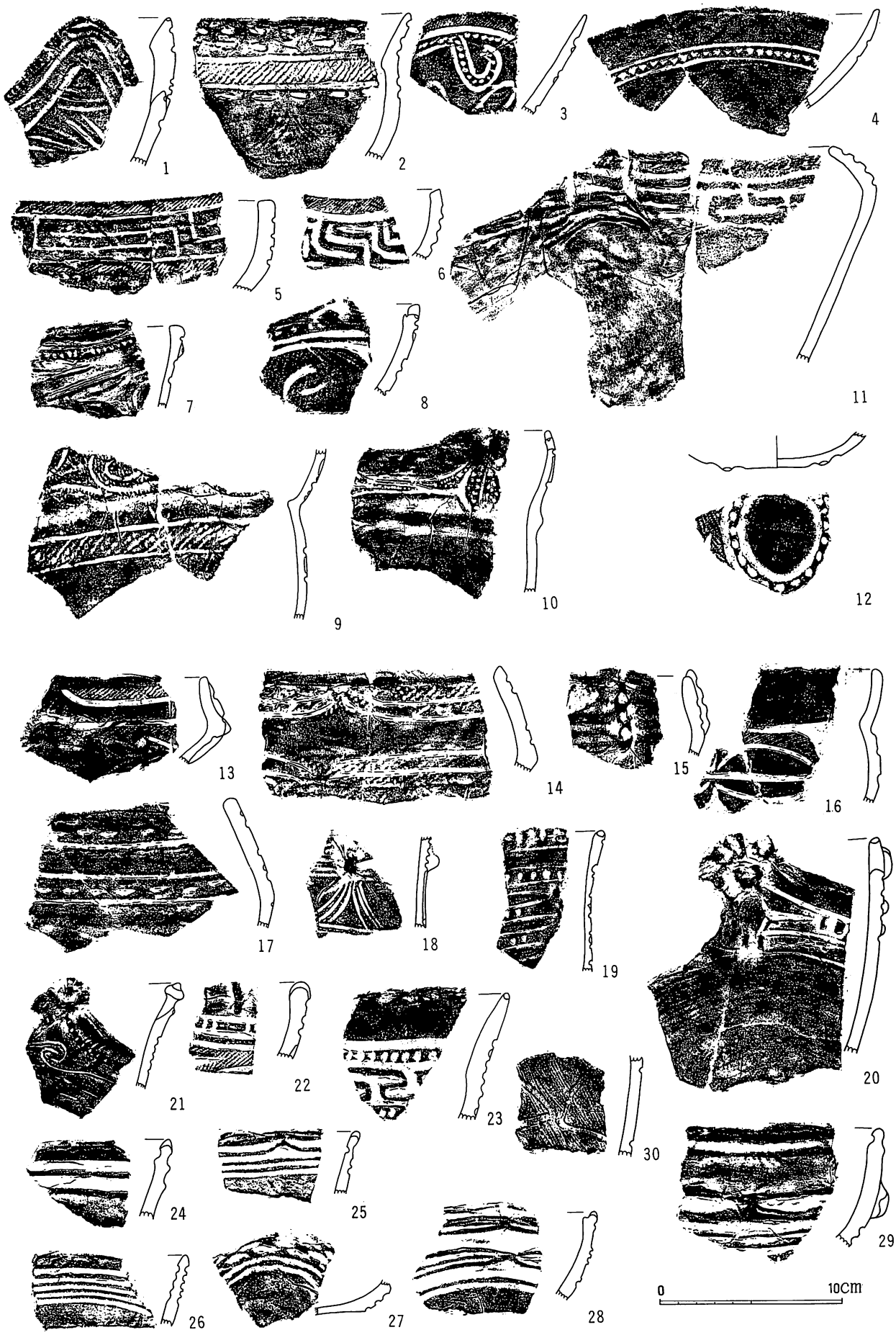


第50図　土器実測図（第28号住居址）（１／４）

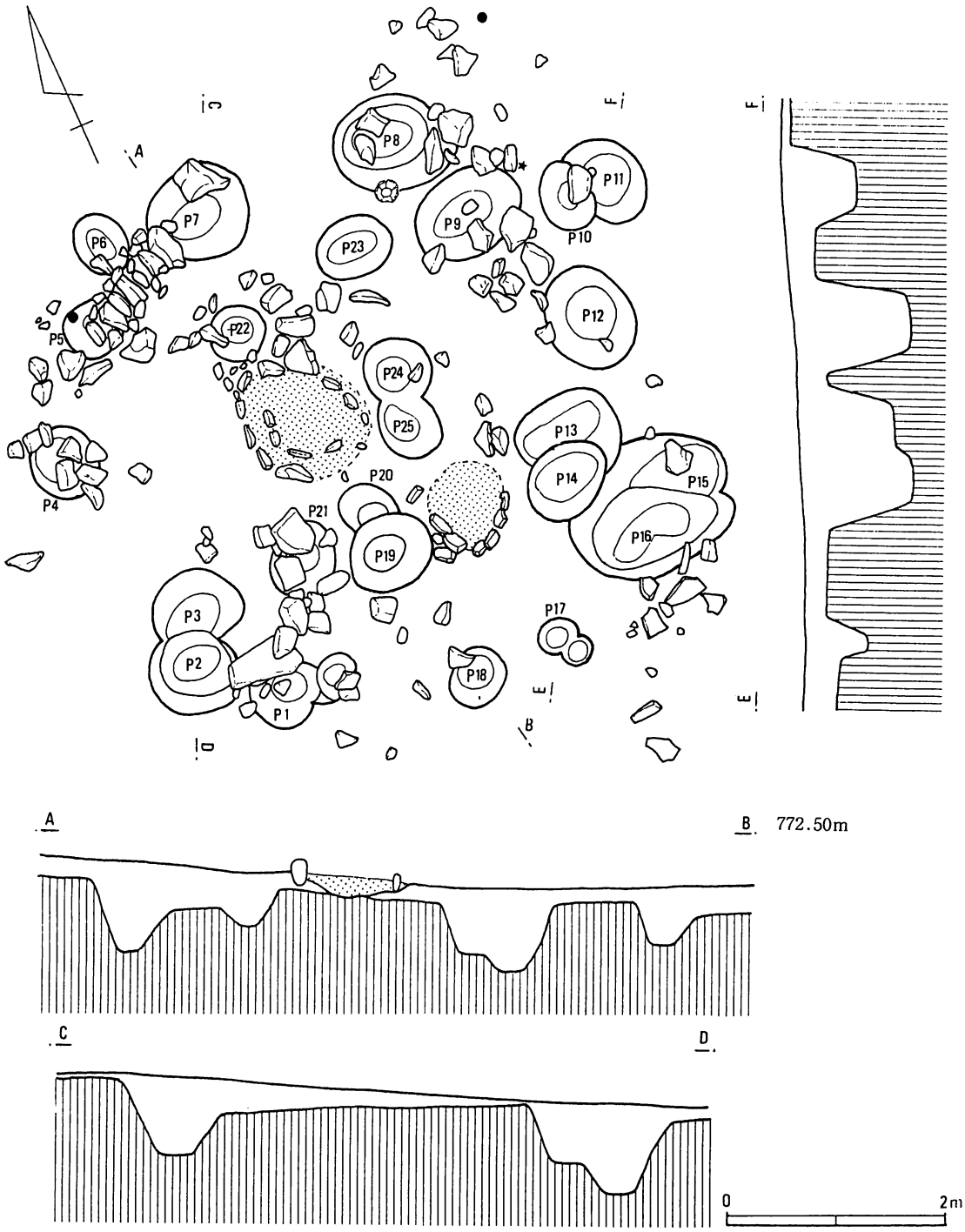
が張り付けられている。30は細かい条痕の土器で、稲妻状の沈線が走るものであろう。以上は晩期後半の土器である。

第30号住居址（第52図）

Ｆ－10・11区にて発見された。第27号住居址の北東３ｍに位置する。石囲い炉が発見されて、本址の所在が確認されたものである。当初は住居１軒とみなしていたが、床面を剝がしたところ、最初の炉の南東80㎝にもうひとつの炉が発見された。最初の炉を第30号Ａ、下部の炉を第30号Ｂとする。また、床面を剝がしたところ、小穴が25個ほど検出された。これらの中には、二つの炉にそれぞれともなう柱穴があると思われる。まず、第30号Ａの炉は、石が二重に取巻く、120×100㎝の楕円形のものである。住居のプランはよくわからないが、石が散乱していることから、本来は石で囲まれた住居であったと思われる。床は黒褐色土であったことから、下部のローム面まで下げたところ、いくつかの小穴が見付かった。このうち、Ｐ３～Ｐ５、Ｐ７～Ｐ９、Ｐ12、Ｐ14、Ｐ17、Ｐ18の10個は本址に伴う柱穴の可能性がある。これらの配列は円形に近いが、散乱する石の位置も考慮すると、隅円方形の可能性もある。そうした場合住居の規模は、長軸5.5から6.0m



第51図　土器拓本（1～12　第28号住居址、13～30　第29号住居址）（1／3）

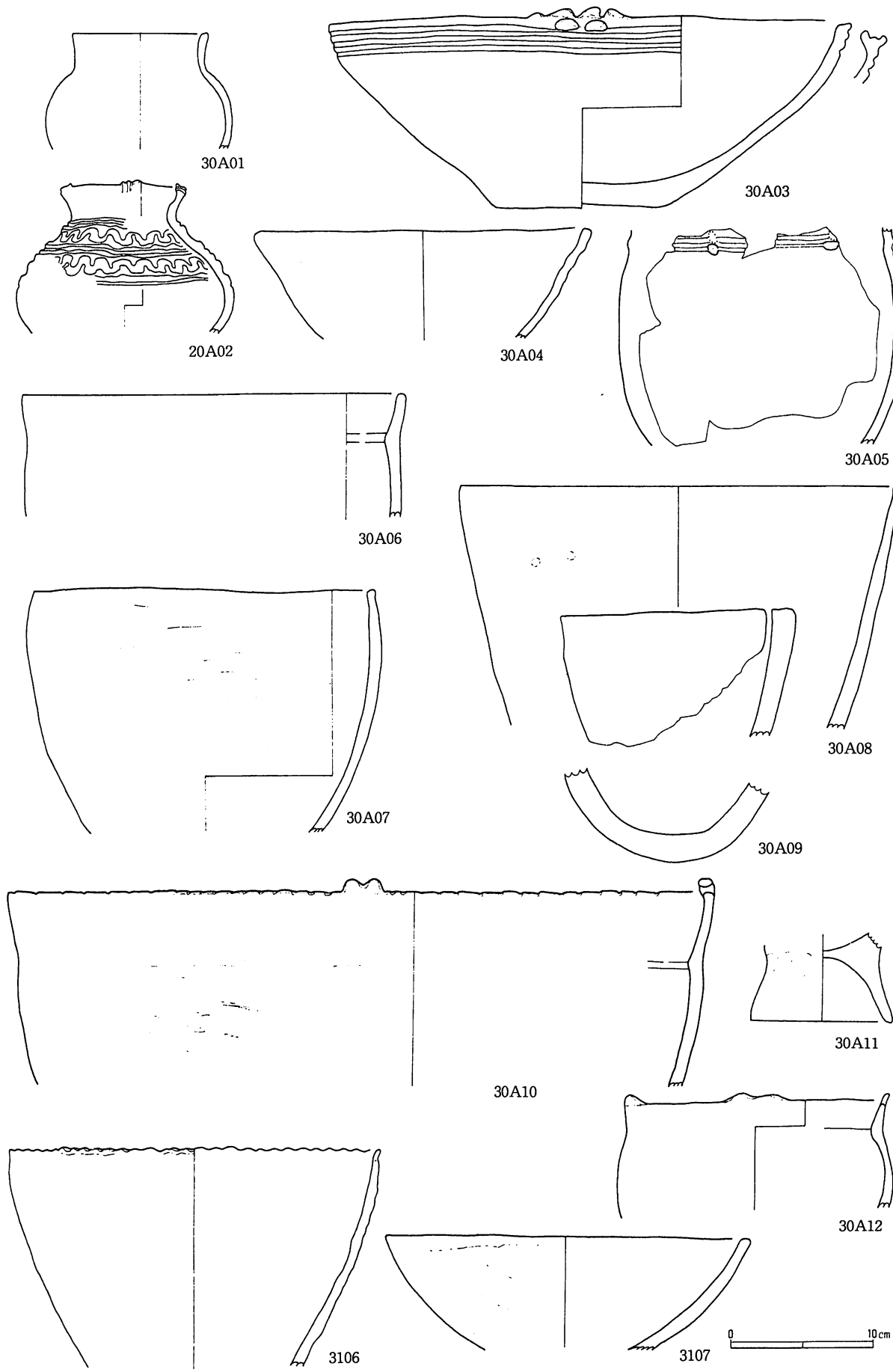


第52図　第30号住居址（1／60）

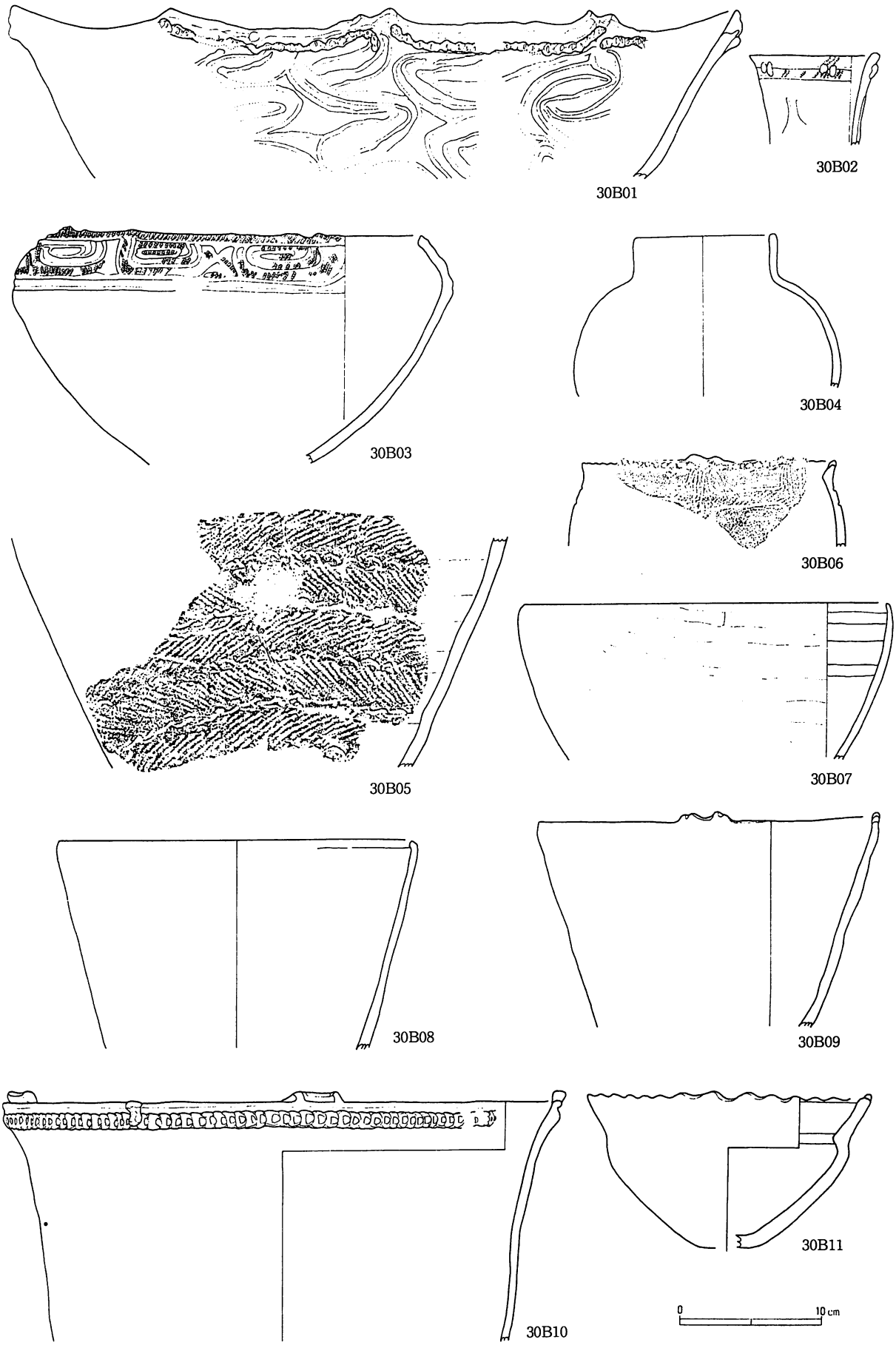
と考えられる。第30号Bの炉は、90×70cmの楕円形を呈する石囲み炉である。石は一列であるが、南側半分しか残っていない。P1・22・23・10・15等が本址に伴う柱穴の可能性がある。遺物は、第30号A・Bともに土器が主体であるが、P9・10間から硬玉製錘飾品（第30号A）が出土した。また、第30号Aの床剝がしの際に、焼けた鹿角片が多量に出土した。これらは第30号Bに伴うものであろう。時期は、第30号Aが晩期中葉から後葉、第30号Bが晩期前半と思われる。

出土土器（第53・54図）（第55図1～22）

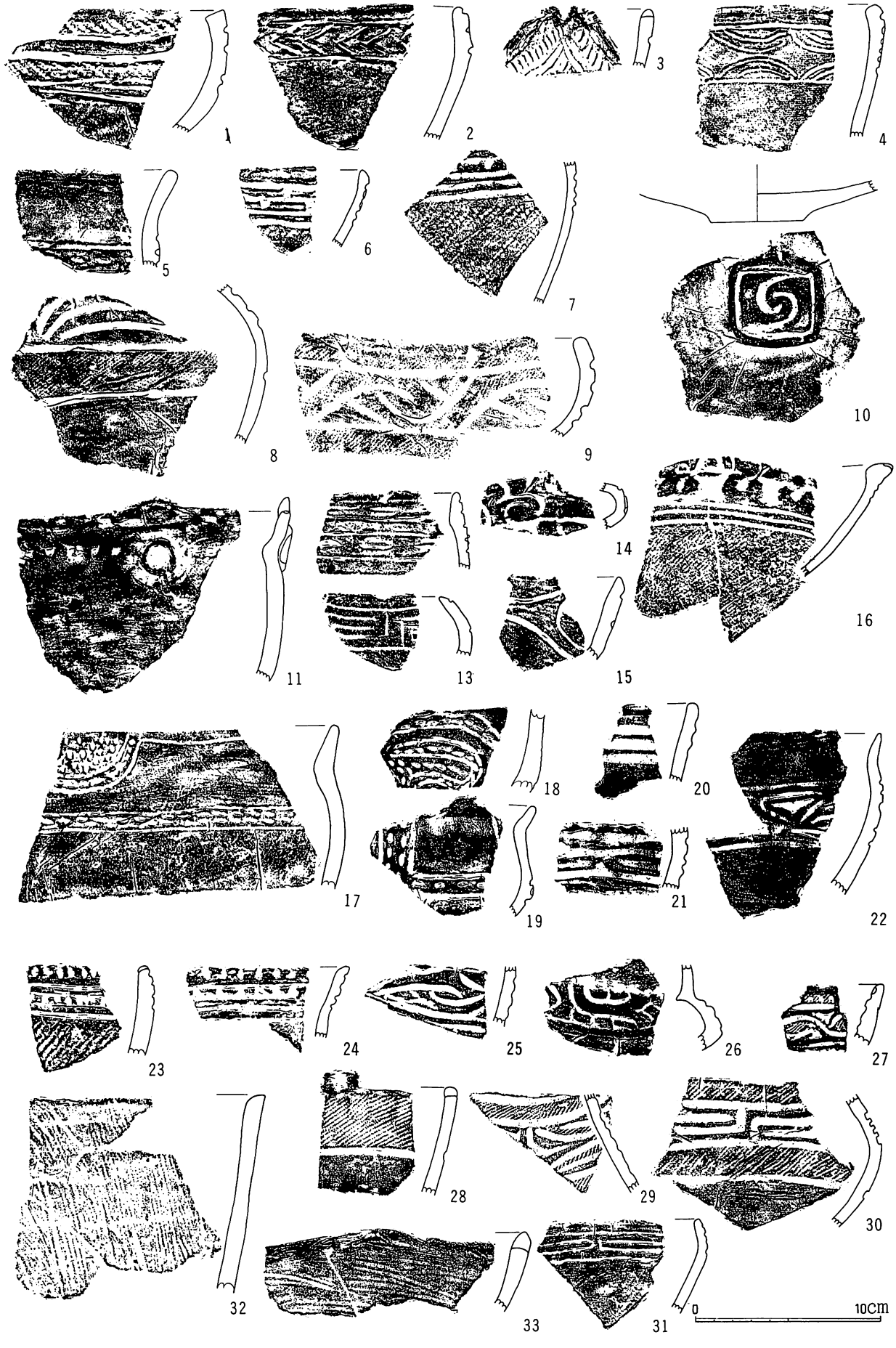
30A01　小型壺の3分の一程の破片である。無文で器面が荒れているが、整形は丁寧である。灰褐色を呈する。最大径は胴中位にある、球形の胴部である。



第53図　土器実測図（第30号A・31号住居址）（1／4）



第54図　土器実測図（第30号Ｂ住居址）（１／４）



第55図　土器拓本（１～22　第30号住居址、23～33　第31号住居址）（１／３）

30A02　壷形土器の2分の一程の破片である。肩部から胴部中位にかけて、彫刻的な波状文が2段、浮き出たされている。最大径は胴下半部にあり、やや扁球的な胴部である。口唇部は内側にやや突出しており、一部ながら粘土紐の張り付けによる、小突起が見られる。黒褐色を呈し、器面はやや荒れているが、光沢も残る。

30A03・30A04は浅鉢形土器である。03には口縁部直下に沈線が平行してめぐり、口唇には1箇所ながら、突起が付けられている。黒褐色を呈する。04は無文の小型浅鉢。3分の一程度の破片である。30A05は深鉢形土器で、接合はできないが、全体の2分の一程は残存している。やや括れた頸部に隆帯がめぐり、一部に瘤状の張り付けがみられる。器面はザラついている。

30A06～30A08、30A10・30A12は無文の深鉢形土器である。まず、06は口縁部としては2分の一近い破片で、頸のゆるく括れた器形の土器である。明るい褐色を呈する。07も2分の一近い破片である。器面の整形は粗い。08は4分の一程の破片。直線的に立ち上がる器形である。脆い土器である。10は大型深鉢形土器の4分の一程度の破片で、器形や色調は06に似る。口縁部内側に段がつく。口唇には刻目が連続し、B突起がつく。12は小型の深鉢形土器。2分の一近い破片で、ゆるく括れた頸部、短く外反する口縁等が特徴である。低い小突起があるが、これは4単位であろう。

30A11　台付き土器の台部の破片である。二次焼成を受けている。

30A09　分厚く、湾曲した土製品。容器の可能性は薄い。

第55図11は深鉢形土器の破片で、口唇部と頸部とに刺突文が連続する。小突起があり、その下方の頸部にドーナツ状の張り付け文がある。12は沈線間に刺突による短線が連続している。13は入り組み鍵の手のつけられた小型の鉢形土器である。14、16は東北系の土器。14は注口土器の破片であろう。16は皿形土器で、口縁部に彫刻的な突起が連続する。15には入り組みと思われる沈線が走っている。

17～19は沈線と刺突文とから飾られる土器。17は短頸の広口壷様の器形である。灰褐色を呈し、胎土は緻密で、良く整形された土器である。18は口縁部近くの破片と思われ、蛇行する沈線間に列点が走る。19も短い口縁部の破片である。これらは晩期中葉に位置付けられる土器であろう。

20は削り取りによる沈線の平行する土器。21は工字状の文様のつけられた土器である。22は浅鉢形土器であろうか。肩部の2本の沈線に挟まれた中に、逆三角状の文様が連続すると思われる。この文様帯には赤彩が施されている。第25号住居址出土の土器（第43図21）に類似する。

30B01　深鉢形土器の口縁部を中心とした、3分の一程の破片である。口径50cmを越える大型の土器である。山形の小突起のつく、波状口縁部で、直下に有刻の凸帯がめぐるが、これは1本が全周するのではなく、小突起の箇所でとぎれている。体部には沈線による曲線が施されているが、ぎこちない感がある。曲線どうし接続し、三叉文状をなしている部分も見られる。明るい茶褐色を呈する。清水天王山式土器である。

30B02　小型の壷形土器の破片である。台付き土器の台部の可能性もあるが、口唇部断面が丸味を持っていること、内面が良く整形されていること等から、口縁部とみなしたものである。口唇部直下に沈線2本がめぐり、その部分に2個1単位の瘤が付けられている。二次焼成を受けたらしい。

30B03　浅鉢形土器の4分の一程の破片である。いわゆる「雷文」土器である。入り組まない、変則的な鍵の手文である。口唇部には、2個1単位の小突起が付けられている。これは6単位であろう。灰褐色を呈する。

30B04　小型の壷形土器である。4分の一の破片で、胴部は球形を呈する。胎土は緻密で、内外面ともに良く磨かれており、黒褐色を呈する。

30B05、30B06　深鉢形土器である。05は胴部破片で、結節羽状縄文が施されている。胎土中に長石や石英等の粒子が多い。06は小型の深鉢形土器で、口唇部には押圧が連続し、小突起が付けられている。頸部から肩部にかけて沈線による区画文があり、内部には縄文が充填されている。

30B07～30B09は無文の深鉢形土器である。07は湾曲の強い器形で、輪積み痕が顕著である。08は4分の

1程の破片。09も破片であるが、口唇部に小突起がある。これらは、いずれも黒から灰褐色を呈している。

30B10　深鉢形土器の二分の一程の破片である。口径40㎝程を測る大型の土器である。体部は無文であるが、口縁部直下に刻みの有る隆帯がめぐる。口唇には小突起がみられる。大型の土器の割りには器壁が薄く、胴部で5㎜程である。明るい褐色を呈する。

30B11　無文の浅鉢形土器である。底部は小さく丸底気味である。口唇部には小さい波状が連続する。第55図1～10は本址出土の破片である。1～4はいずれも深鉢形土器の口縁部破片で、1は平行沈線と縄文帯、2は矢羽状沈線の土器である。3は波状口縁の波頂部破片で、刻目が連続する「コブ」付き土器である。4は2本一単位の弧状文が、上下背中合わせに連続している。これらは、後期後半の土器であろう。5は広口壷の破片であろうか。頸部に列点文が連続する平行沈線が走る。6・7は東北地方晩期前半の土器であろう。8・9は浅鉢形土器で、9は入り組みの三叉文が連続する「タスキ掛け」状沈線の土器で、縄文が施されている。北陸地方に共通する文様構成の土器である。8も技法的には9に類した沈線で施文されている。但し、弧状の沈線がどのように組み合わさっているかは不明である。10は浅鉢形ないし皿形土器の底部破片であろう。方形の突出した底部で、沈線に区画された中に、入り組み文がつけられている。砂粒が多く、黒褐色を呈している。以上は、晩期前半の土器であろう。

第31号住居址（第56図）

発掘区の北東端に近いC－13区に位置する。後期の住居第32号を切り、第7号石組に切られている。黒褐色土中で炉が発見されたが、壁の立上りや柱穴はみつからなかったため、床を剝がし、下部の確認を行なった。この作業により小穴10数個が検出された。P2・5・7・10等が柱穴とみられ、一辺4m程度の住居と思われる。炉は90×70㎝のやや小型の石囲み炉である。6個の石が用いられ、六角形に近い形状である。部分的に、炉石の外側にも石が認められる。また、炉底に平石が敷かれていた。住居の時期は晩期前半であろう。

出土土器（第49図））（第55図23～33）

3101　炉の中から出土した深鉢形土器。4分の一程の破片である。ゆるく括れた器形で、沈線主体の文様がつけられている。頸部から口縁部にかけては入り組みの沈線、肩から胴部には羽状沈線がみられる。明るい褐色から赤褐色を呈する。清水天王山式土器である。

3102　台付き土器の台部の2分の一近い破片である。入り組みの「鍵の手文」が2段めぐっており、縄文が充填されている。白っぽい褐色を呈するが、赤彩が施されている。

3103・3104も台付き土器の台部である。3103は台部には透しや縄文がつけられているが詳細は不明。頸部に彫刻状の隆帯がめぐる。色調は灰褐色である。3104の頸部にも刻目のある隆帯が付けられている。下部に縄文帯が認められる。赤褐色を呈する。

3105は底部破片である。鋭い尖底をなし、良く磨かれている。

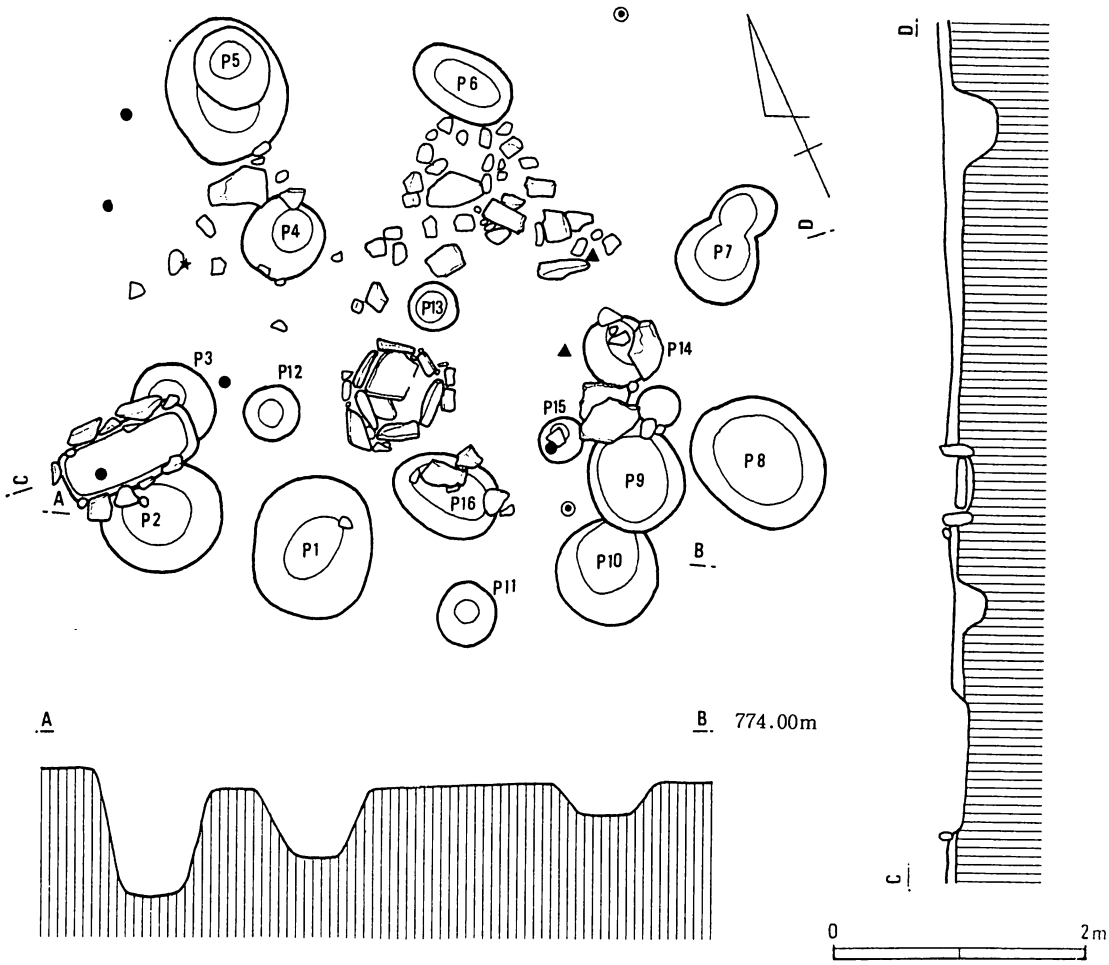
3106　無文の深鉢形土器である。4分の一程の破片で、口唇部に押圧が連続している。黒褐色を呈する。

3107　無文の浅鉢形土器の3分の一程の破片。長石等の粒子を多く含み、整形は粗い。明るい褐色の土器である。

第55図23～26は大洞系の土器。26は注口土器で、黒褐色を呈し光沢がある。27は入り組み弧状文と三叉文がみられる。28は口唇部に小突起がつけられている。29は壷形土器の肩部破片である。

30・31は「鍵の手文」の浅鉢形土器で、いずれも入り組み鍵の手である。30には縄文が施されている。

32・33は条痕文の土器である。32の口唇はやや肥厚気味である。条痕は縦方向。3101とともに炉中から出土したものである。33には小突起があり、横方向に近い条痕がつけられている。いずれも砂粒が多く、ザラつきがある。



第56図　第31号住居址（1/60）

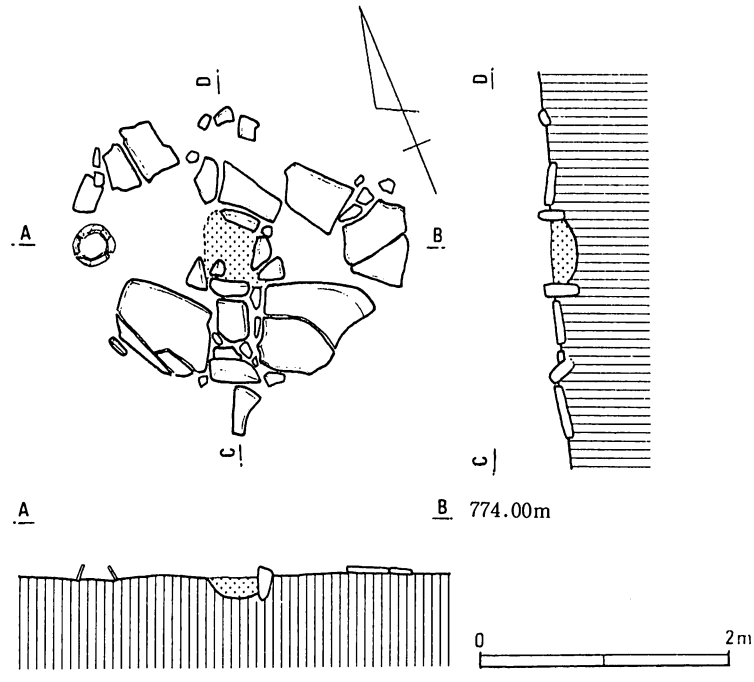
第32号住居址（第57図）

C・D－12・13区に位置する。敷石住居であるが、北東側を第31号住居に切られている。東西2.8mの規模である。炉は70×60cmの長方形を呈するが、西側の石は抜かれている。この炉の長軸上南西側の敷石は、他の箇所が大きい平石であるのに対して、小さい石が用いられている。この部分を入口と考えることができ、この入口と炉の中央とを通る線を主軸とすると、住居の方向はN－22°－Eとなる。西側端の石の無い部分から、胴下半部を欠く深鉢形土器（3201）が倒立した状態で出土した。これによると、住居の時期は、後期前葉堀之内2式期であろう。

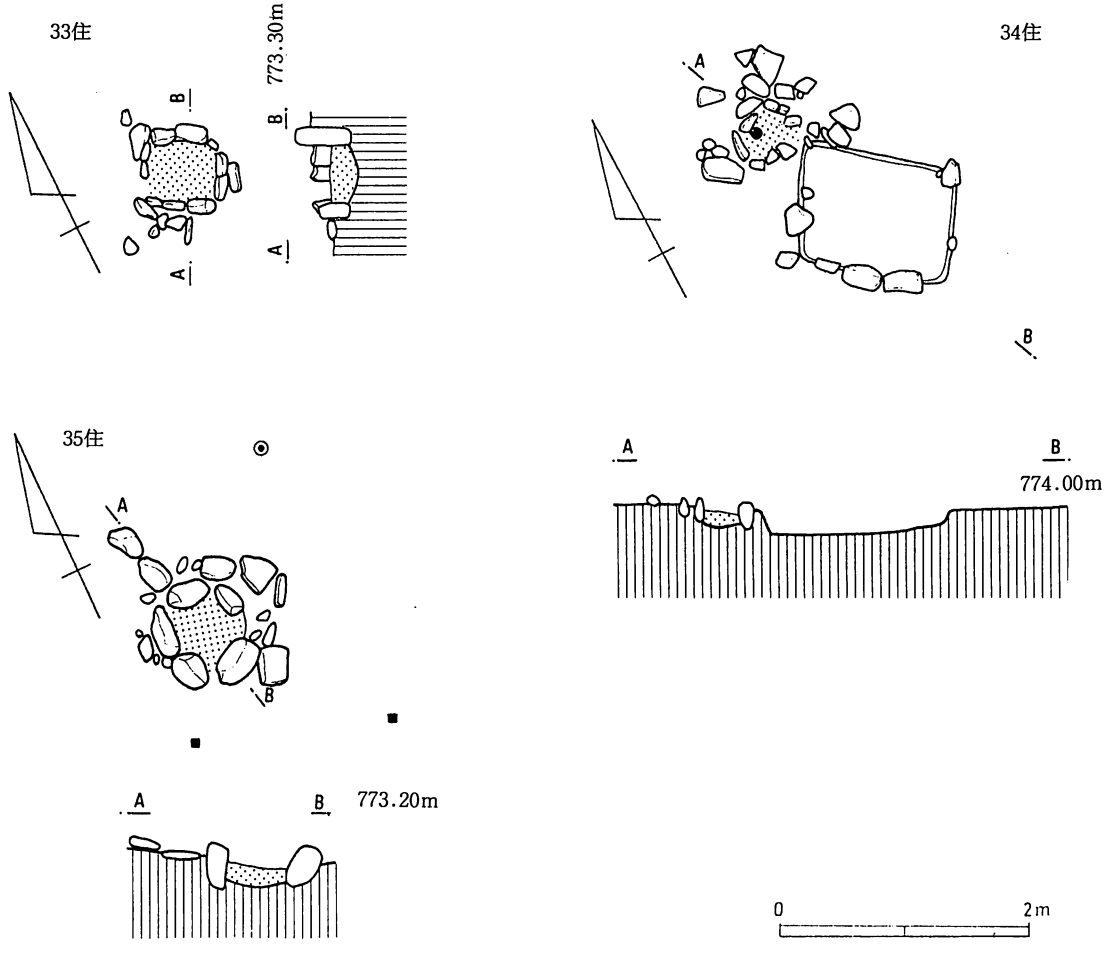
出土土器（第61図）（第62図1～4）

3201　胴下半部を欠く深鉢形土器である。平口縁だが部分的に小突起があり、口唇内面に沈線の走る箇所がある。外面の口縁直下には、細い有刻隆線が2条めぐり、部分的にそれを結ぶ縦の隆線がある。体部には磨消し縄文が施されている。黄褐色を呈し、良く磨かれているが、磨滅の激しい部分もある。

第62図1は波状口縁深鉢形土器の波頂部把手部分の破片である。磨消し縄文や沈線による渦巻き文が施される。なお、磨消し縄文帯を区画する沈線の内側に、半截竹管による爪形文が連続している。2は深鉢形土器の口縁部破片。沈線と有刻の低い隆帯がめぐる。3も深鉢形土器であろう。丁寧に磨かれていることから、磨消し縄文のつけられた精製土器の破片と思われる。4は深鉢形土器の胴部破片である。沈線と刺突文とで飾られる。



第57図　第32号住居址（1／60）



第58図　第33号・34号・35号住居址（1／60）

第33号住居址（第58図）

Ｄ－12にて、炉だけが発見されたものである。撹乱が激しく、また第４号石組や第４号配石に隣接することから、プランや規模は不明である。一辺70㎝程の方形を呈する石囲み炉で、炉石の外側には部分的に石が添えられている。時期については詳細不明であるが、このようなタイプの炉は後期に多い。

第34号住居址（第58図）

発掘区の北東端のＣ－12区にて発見された。第10号・11号石組等により切られており、残存状況は悪く、炉しか確認できなかった。炉は55×45㎝程の小型の石囲み炉で、側石は小さめのものが用いられている。周囲に僅かながら偏平な石が残っている。第29号や第31号に類似した炉のタイプである。付近から土器や土偶１点が出土したが、本址への帰属は不明である。

第35号住居址（第58図）

発掘区の北端に近いＦ－12区に位置する。第４号配石および第15号・16号石組等により切られており、僅かに石囲み炉が確認されただけである。この炉は、側石５個よりなる直径80㎝の円形のものである。付近に石が散乱するが、住居の形状や規模は不明である。時期については、第５号配石が晩期前葉であることから、これより古いことは明らかである。

第36号住居址（第59図）

発掘区の北端、Ｅ－13区にて発見された。第５号配石の北５ｍに位置する。また、南西壁付近にて第14号石組と接している。黒褐色土を調査中、石の散乱している箇所がみつかった。精査したところ、焼土が発見されたことから、住居と見なしたものである。壁の立ち上がりは不明である。4.0×3.5ｍほどの範囲に石が散乱していることから、住居の規模はこの程度のものと思われる。炉には石は用いられておらず、60×45㎝の範囲に、焼土が堆積していた。黒褐色土であることから、床は堅くなく、柱穴も不明であった。覆土中を中心に土器が出土している。住居の時期は堀之内２式期である。

出土土器（第61図）

3601　深鉢形土器の胴部から底部にかけての破片である。磨消し縄文の施された土器で、底部には網代文がみられる。黒褐色を呈し、内面は良く磨かれている。

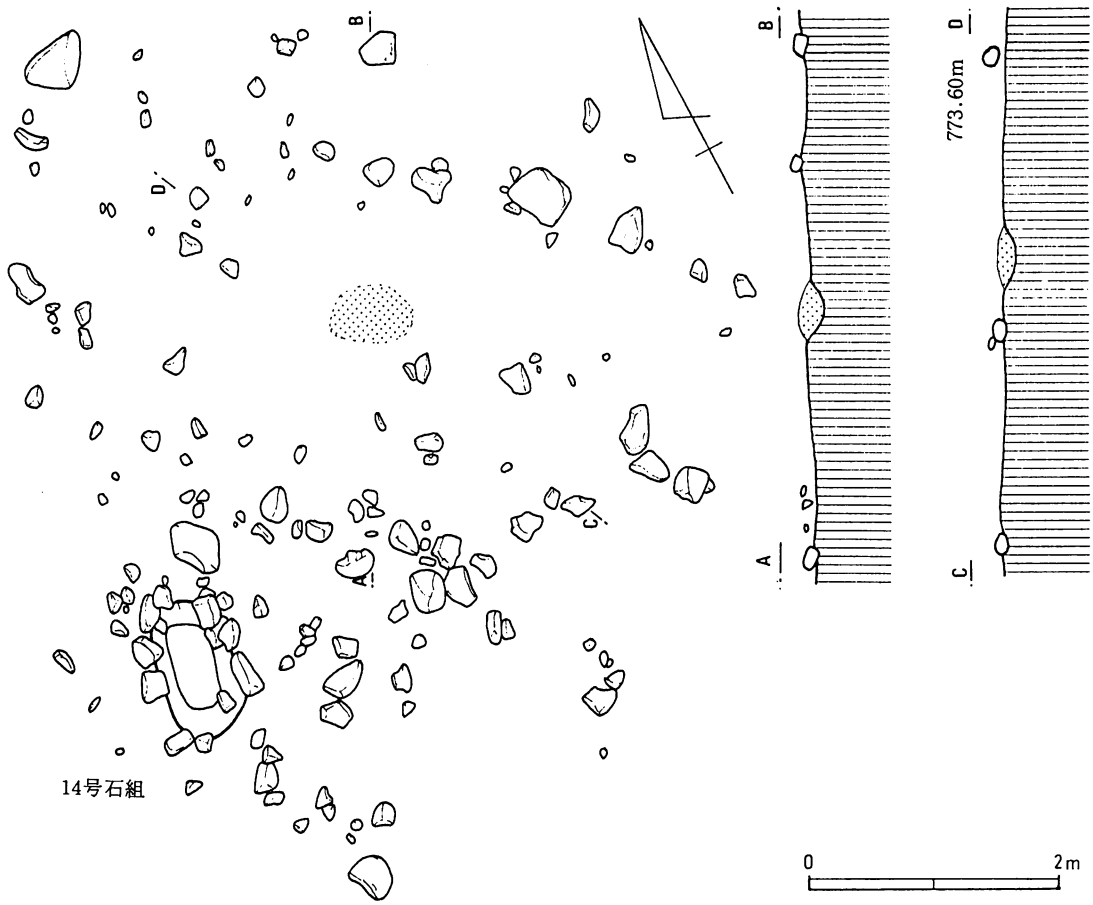
第37号住居址（第60図）

発掘区の北端、Ｄ－13区にて黒色土の落込みが確認されたため、掘下げたところ、炉が検出され、住居としたものである。第32号住居址の北西２ｍに位置し、第４号配石とは北で接し、その一部と見られる石が本址の上に延びていた。長軸3.5ｍ・短軸3.3ｍの胴の張った隅円方形の住居である。炉は住居内の中央部やや南寄りに位置する。側石５個からなる五角形状の炉で、周囲に偏平な石が敷かれた部分もある。床はロームで堅い箇所があるが、平石が敷かれている部分も残る。本来、床面のより広い範囲に石が敷かれていたと思われる。壁の立上がりは、東壁で60㎝、西壁で30㎝を測る。小穴は１１個検出されたが、主柱穴と思われるものはなく、全て壁柱穴とみられるものであろう。出土土器は多く、炉の南側石の上部から鉢形土器（3705）、Ｐ７際の床面から深鉢形土器（3703）、東壁外側から注口土器（3706）が出土している。住居の時期は、加曽利Ｂ１式期である。

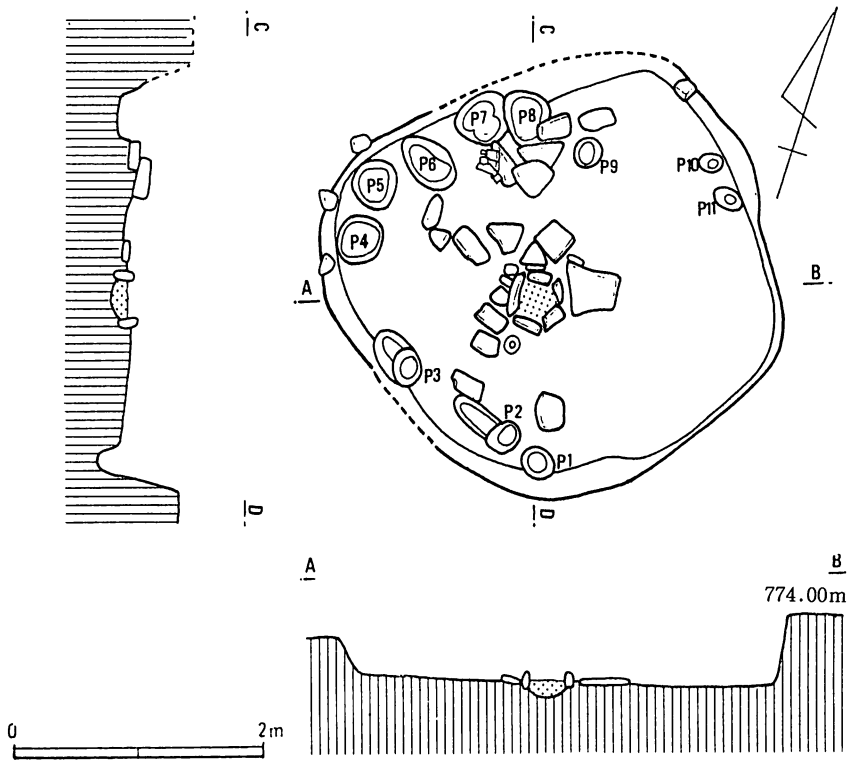
出土土器（第61図）（第62図９～15）

3701　深鉢形土器の口縁部破片で、やや内湾気味の口縁に突起がつく。ゆるい波状口縁の土器である。胴上部に磨消し縄文帯がみられる。内面にも平行沈線が施されている。黒褐色を呈し、光沢がある。

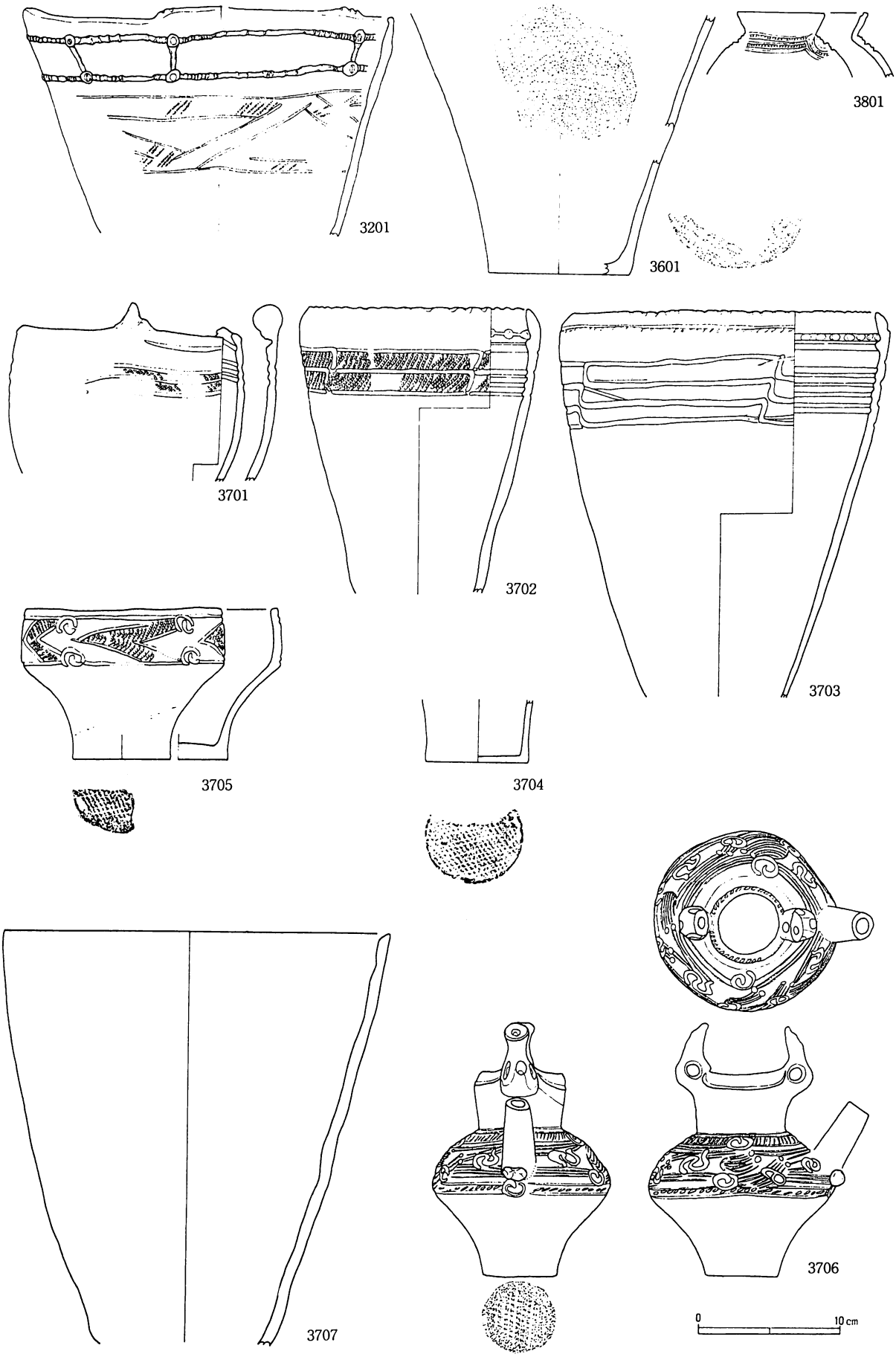
3702　底部を欠く深鉢形土器である。やや内湾気味に立ち上がる口縁部には、刻み目が連続している。磨消し縄文帯２段がみられ、縦方向にも直線的に短線が延びる。口縁部内面にも段がつき、その下方に平行沈



第59図　第36号住居址（1／60）



第60図　第37号住居址（1／60）



第61図　土器実測図（第32号・36号～38号住居址）（１／４）

線が走る。黒褐色を呈し、良く磨かれている。

3703　床面から出土した深鉢形土器である。底部を欠く。胴下部から丸味を帯びながら立ち上がる器形で、口縁はやや内湾する。4条の沈線により、横方向の区画がつけられているが、縄文はみられない。口縁部内面に段が付き、その上方には刺突文が連続し、下方には平行沈線が走る。茶褐色から黒褐色を呈し、器面はやや粗れている。

3704　深鉢形土器の底部破片である。器壁は3㎜程度と薄い。底面には細かい網代痕がみられる。灰褐色を呈し、良く磨かれている。

3705　炉脇の上部から倒立した状態で出土した浅鉢形土器。底部の一部を欠く以外、ほぼ完形である。小さい底部から外反しながら立ち上がり、直立気味の口縁部にいたる器形である。口縁部文様帯には磨消し縄文がみられ、逆「の」の字形の沈線がつけられている。赤褐色を呈し、よく磨かれている。

3706　東壁の外側から出土した注口土器。注口部と把手の一部を欠く。扁球形の体部、直線的に立ち上がる小さめの口縁部、角状の把手などが特徴である。胴上半部は細かい沈線により施文されている。丁寧に磨かれており、黒褐色の光沢がある。

3707　粗製の深鉢形土器。無文で、器面はザラつきがある。赤褐色を呈する。

第62図5～15は覆土を中心に出土した破片である。5は深鉢形土器の胴部破片で、縦方向の磨消し縄文帯がある。二次焼成を受け、磨滅している。6も胴部破片で渦巻き状の磨消し縄文がみられる。頸部には刻目のある隆帯がめぐる。7は深鉢形土器の口縁部破片。口縁部直下に隆帯がめぐり、以下に磨消し縄文がつけられる。8も深鉢形土器の無文部の破片であろう。以上は、堀之内1および2式土器である。

9は埦形土器であろう。平行沈線により区画された磨消し縄文帯が走る。10・13は浅鉢形土器の破片と思われ、「く」の字形に強く屈折する口縁部である。いずれにも口唇には刻目が連続する。10では内外面に磨消し縄文がつけられている。11・12は深鉢形土器の口縁部破片。12は沈線が丁寧につけられている。14は格子目状沈線のつけられた深鉢形土器である。15は注口土器の胴部破片。

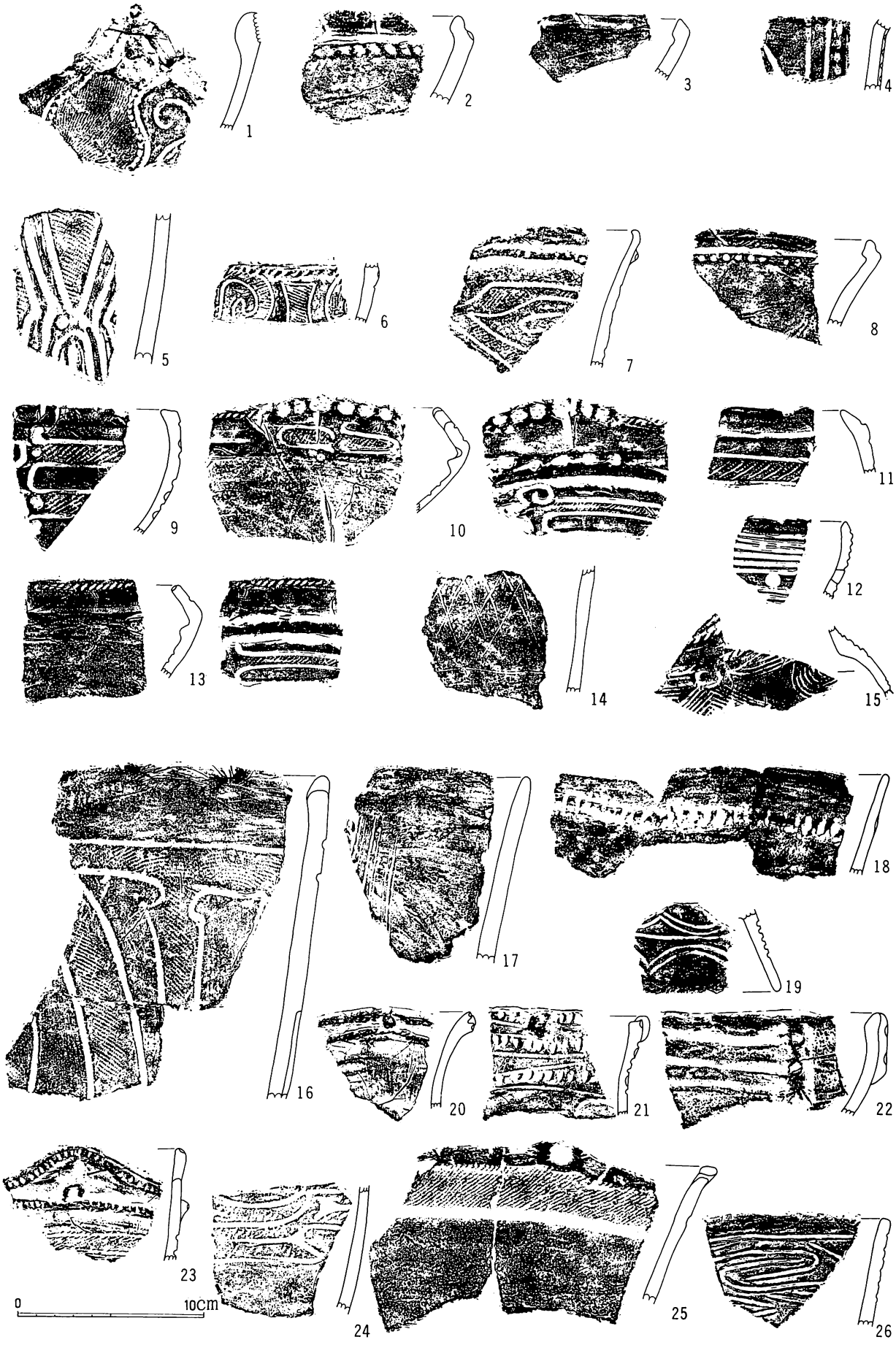
第38号住居址（第63図）

Ｆ－11区に位置する。第25号住居の北3ｍにて石囲み炉が発見され、住居の所在が確認されたものである。炉の北2ｍたらずには第16号石組があり、位置関係から、本址はこの石組遺構よりは古いものと見なされる。炉は6個の石に囲まれているが、更にその外側には平石が丁寧に敷かれている。このような構造は第39号住居の炉に共通する。東隅の敷石は表面が浅く擦り窪んでおり、石皿のように用いられていたのかもしれない。覆土、床面ともに黒褐色土であり住居の広がりは把握できなかった。床下を調査したところ、小穴15個が検出された。このうちＰ1～Ｐ6は本址にともなう柱穴の可能性がある。これらの小穴の配置と散乱する石列から判断すると、本址は長軸4.0～4.5mの規模であったと推測される。出土遺物は土器以外にも耳飾り7個、石剣片2点などがある。また、北側石列の外側から土偶1点、南西隅のＰ8外側から石剣1が発見されていが、本址に伴うものではなかろう。なお住居覆土から焼けた鹿角片が少量出土している。本址の時期は後期後半から晩期前半であろう。

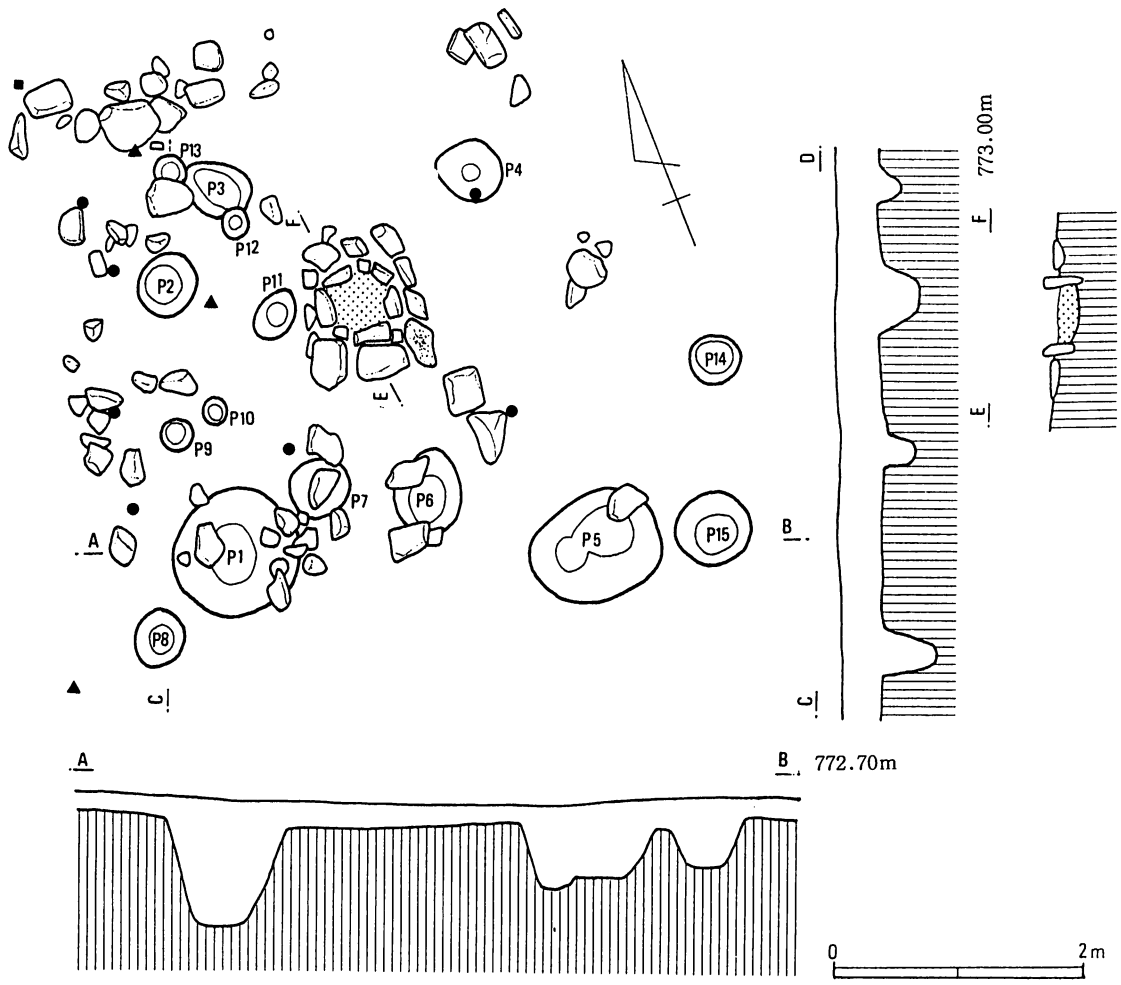
出土土器（第61図）（第62図16～26）

3801　壷形土器ないし注口土器の破片である。沈線と刺突文とで装飾される。全体が磨滅し、灰褐色を呈する。

第62図16～19、22、24、26は床面を剝がし、下部の柱穴等の施設を確認中に出土したものである。16・17は大型の深鉢形土器で、16には縦分割の磨消し縄文、17には櫛歯状沈線が施されている。後期初頭の土器である。18は口縁直下に刻目がめぐっている。19は台付土器の台部破片。連続弧線により飾られる。黒色を呈するが、沈線内に赤彩が残る。22は凹線状の沈線と、それに直交する隆帯とから施文される土器である。明るい茶褐色を呈する。19および22は後期後半の土器である。24は深鉢形土器の胴部破片で、入り組みの三叉文がつけられ、縄文が充塡される。26も深鉢形土器の口縁部破片で、入り組み弧線や羽状沈線が施される。



第62図　土器拓本（１～４　第32号住居址、５～15　第37号住居址、16～26　第38号住居址）（１／３）



第63図　第38号住居址（1／60）

清水天王山式土器である。

20、21、23、25は住居の覆土から出土した破片である。20は壷形土器の口縁部破片である。細い隆帯が2条めぐり、それを繋ぐかのように、円形の瘤が張り付けられている。21はゆるい波状口縁の深鉢形土器と思われ、いわゆる「掘起こしコブ」状の刻目が連続する。また、口縁には円形の瘤がつけられている。黒褐色を呈する、東北系の後期後半の土器である。23も深鉢形土器の口縁部破片。山形の突起があり、ゆるい波状口縁をなす。この波状部中央に、三叉状の「窓」があき、その直下にコブ状の張り付けや、隆帯がめぐる。体部には磨消し縄文がみられる。25は鉢形の土器であろう。凹線状の太い沈線に画され、縄文帯がめぐる。口唇には2個1単位の小突起がみられる。黒褐色を呈する。

第39号住居址（第29図）

発掘区西端のG－8区で炉が発見されたものである。第18号住居張出し部の西1.5m、第20号住居炉の南1.5mに位置する。第20号の炉を取巻く敷石の一部が本址に壊されていること、第18号との位置関係などから、第20号→第39号→第18号という新旧関係が考えられている。炉は42×45cmで側石6個で方形に囲まれている。更に側石の周囲には石が敷かれており、これも方形を呈している。第38号住居の炉の構造に類似するものである。床面は黒褐色土中にあり堅くはなく、柱穴などの施設は検出できなかった。住居の範囲についても不明であるが、第20号住居の炉との位置関係から、一辺4m程度の規模と考えられる。炉の内外から土器が出

土している。特に炉中から深鉢形土器の大きな破片（3901）が出土した。住居の時期は晩期前葉である。

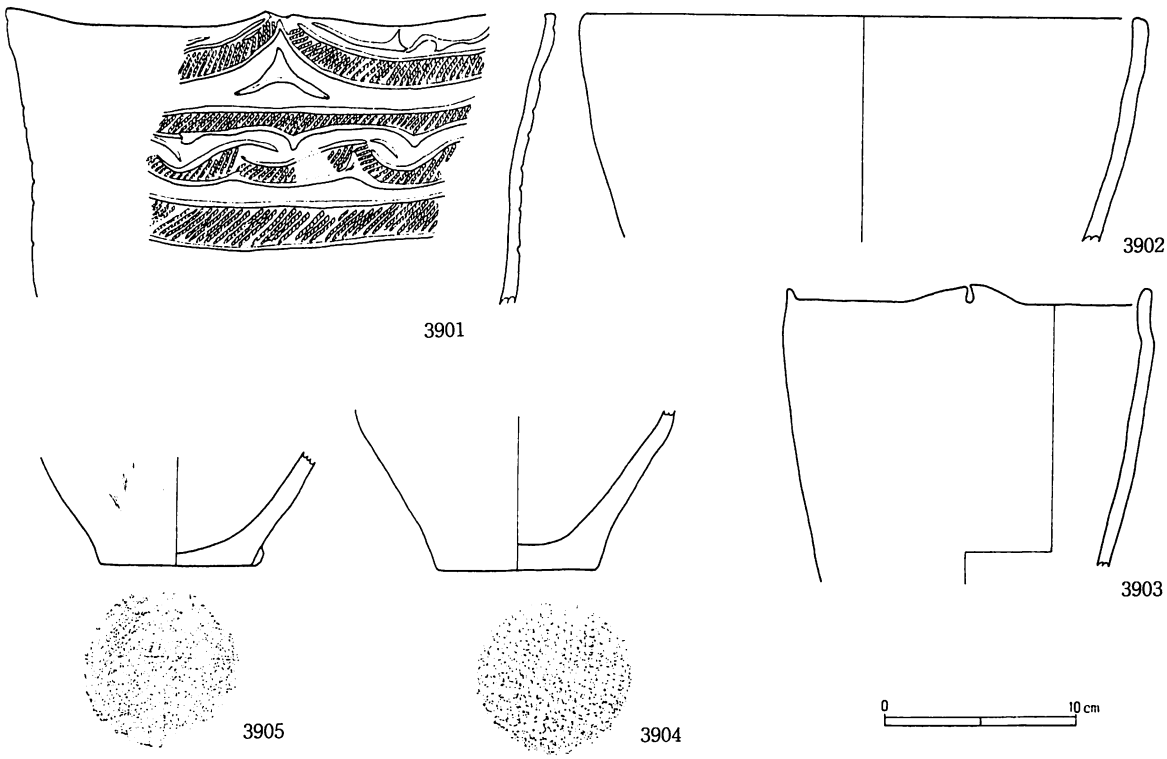
出土土器（第64図）（第67図１～７）

3901　炉の中から出土した深鉢形土器の口縁部を中心とした破片である。ゆるやかな波状口縁を有し、頸部の余り括れない器形の土器である。口縁部では波頂部に向かい磨消し縄文帯が収束し、その下方に三叉文が施される。頸部には沈線による入り組み弧文や三叉文に区画された、磨消し縄文帯がめぐる。黒褐色ないし茶褐色を呈する。安行３ａ式に併行するものであろう。

3902・3903は無文の深鉢形土器。3902は３分の一程の口縁部破片で、僅かに輪積み痕が残る。器面はザラつきがある。3903は筒状の土器で、山形の小突起４個が付けられている。突起には孔が貫通している。体部は比較的丁寧に整形されている。

3904・3905は深鉢形土器の底部破片である。いずれも網代痕が残るが、3905では調整されている。また、3905の内面には、炭化物が多く付着している。

第67図１は小型の浅鉢形土器と思われる、口縁部破片。羊歯状文に類する文様が２段めぐっている。口唇には小突起がある。よく磨かれ光沢がある。２・３は壷形土器で、２の肩部には羊歯状文がつけられている。黒色を呈し、外面は光沢がある。３は口縁直下に沈線がめぐり、口唇には小突起が２個１単位で付けられている。黒褐色を呈し、良く磨かれている。４～６は縄文の施された土器。４は壷形土器と思われる口縁部破片である。磨消し縄文がみられ、口唇にも縄文がつけられている。５は浅鉢ないし皿形土器の破片。外面に赤彩が残る。６は壷形土器の肩部破片であろう。太い沈線で長円状に区画されている。この沈線には三叉状に広がる箇所や、丸味のある「鍵の手」状ともみられる部分がある。７は深鉢ないし、鉢形土器の口縁部破片。入り組み状の三叉文や列点文が認められる。口唇部には小さな山形が連続する。黒褐色を呈し、やや光沢がある。



第64図　土器実測図（第39号住居址）（１／４）

表1　住居址内柱穴等深度一覧表

住居番号	番　号	深さ(cm)	番　号	深さ(cm)	番　号	深さ(cm)	番　号	深さ(cm)	番　号	深さ(cm)	番　号	深さ(cm)
1　号	P 1	9.0	P 2	79.5	P 3	71.0	P 4	28.5	P 5	91.4	P 6	68.3
	P 7	23.0	P 8	49.0	P 9	20.5	P10	71.5	P11	71.5	P12	29.0
	P13	—	P14	33.0	P15	22.0						
2　号	P 1	91.5	P 2	20.0	P 3	26.0	P 4	11.5	P 5	34.0	P 6	23.5
	P 7	38.5	P 8	45.5	P 9	43.8	P10	9.5	P11	32.0	P12	33.0
	P13	47.5	P14	37.5	P15	37.5						
3　号	P 1	73.0	P 2	25.0	P 3	9.5	P 4	31.5	P 5	23.5	P 6	105.5
	P 7	59.5	P 8	21.3								
4　号	P 1	88.5	P 2	25.5	P 3	39.0	P 4	22.0	P 5	69.0	P 6	34.5
	P 7	41.0	P 8	24.5	P 9	19.5	P10	45.0	P11	45.5	P12	15.2
	P13	38.5	P14	23.0	P15	43.5	P16	24.0				
6　号	P 1	64.5	P 2	67.5	P 3	—	P 4	43.0	P 5	72.0		
15号	P 1	11.0										
23号	P 1	63.0	P 2	44.0	P 3	46.0	P 4	65.0	P 5	74.0	P 6	42.0
	P 7	38.0	P 8	71.0	P 9	73.0	P10	74.0	P11	86.0	P12	12.0
	P13	40.0	P14	49.0	P15	32.0	P16	15.0	P17	37.0	P18	10.5
25号	P 1	57.0	P 2	35.0	P 3	47.0	P 4	55.0	P 5	35.5	P 6	83.5
	P 7	76.0	P 8	68.0	P 9	52.0	P10	43.0	P11	34.0	P12	21.0
	P13	63.0	P14	28.0	P15	29.0	P16	57.0	P17	74.0	P18	86.0
	P19	55.0	P20	19.5								
28号	P 1	51.0	P 2	41.0	P 3	47.0	P 4	45.0	P 5	44.0	P 6	24.0
	P 7	37.0	P 8	46.0	P 9	75.0	P10	46.0	P11	45.0	P12	26.0
	P13	58.0	P14	48.0	P15	55.0	P16	54.0	P17	47.0	P18	44.0
	P19	75.0	P20	27.0	P21	43.0	P22	98.0	P23	64.0		
29号	P 1	26.0	P 2	37.0	P 3	26.0	P 4	65.0	P 5	46.5	P 6	60.0
	P 7	26.0	P 8	56.0	P 9	11.0	P10	93.0	P11	71.0	P12	58.0
	P13	39.0	P14	49.5	P15	56.0	P16	24.0				
30号	P 1	55.0	P 2	64.0	P 3	47.0	P 4	59.0	P 5	35.0	P 6	18.0
	P 7	47.0	P 8	42.0	P 9	58.0	P10	48.0	P11	38.0	P12	83.0
	P13	59.8	P14	78.0	P15	47.0	P16	64.0	P17	22.0	P18	24.0
	P19	58.0	P20	45.0	P21	63.0	P22	29.0	P23	20.0	P24	13.0
	P25	66.0										
31号	P 1	53.0	P 2	84.0	P 3	68.0	P 4	66.0	P 5	62.0	P 6	38.0
	P 7	35.0	P 8	25.0	P 9	35.0	P10	24.5	P11	30.0	P12	19.0
	P13	27.0	P14	43.0	P15	58.0	P16	28.0				
37号	P 1	15.0	P 2	104.0	P 3	59.0	P 4	21.0	P 5	18.0	P 6	24.0
	P 7	37.0	P 8	32.0	P 9	18.0	P10	11.0	P11	11.0		
38号	P 1	80.0	P 2	29.0	P 3	23.0	P 4	22.0	P 5	53.0	P 6	43.0
	P 7	44.0	P 8	44.0	P 9	21.0	P10	27.0	P11	23.0	P12	34.0
	P13	24.0	P14	15.0	P15	30.0						

第２節　配石遺構

第１号配石（第65図）（第159図）

発掘区を東西に横断するかのように、Ｂ～Ｇの７区に位置している。発掘調査前、この箇所は東西に細長く延びる水田であった（第１図）。地下にこのような石を豊富に用いた配石遺構があったため、後世の開墾や水田としての土地利用が規制されたためであろう。まずＥ・Ｄ－７区の黒色土中から夥しい量の石群が発見されたことから、この石群の広がりを把握するべく、調査を進めていった。最終的には南北の幅約10m、東西の長さ約60mにも達する大規模な配石遺構であることが確認された。規模については、本来はＢ列よりさらに東に延びていたと思われるが、この部分は尾根の最も高い箇所に当たっており、開墾や長い間の耕作により撹乱され、残存状況は悪い。実際、Ｂ－７区では、配石の最下端と思われる石列が、僅かに認められる程度であった。調査途中、第１号配石を中心にこの付近が、工事対象地から除外され、現地保存される見通しとなったことから、配石を構成する主な要素が分る程度で調査をとどめ、それ以上の石の除去や、下部の調査は行なわなかった。特に、Ｇ・Ｆ区のブロックについては、石の上面を検出した段階で埋戻した。配石の詳細な構造については、遺跡整備の段階での調査、あるいは後世の調査で解明すればよいと考えたからである。本遺構は、一つの配石として取扱ったが、実際にはいくつかのブロックに別れるようである。少なくとも、Ｇ・Ｆ区（第１ブロック）、Ｆ・Ｅ区（第２ブロック）、Ｅ～Ｃ区（第３ブロック）の三つについては、繋がってはいない。また、Ｂ区については本来第３ブロックと連続していたと見られるが、一応第４ブロックとした。以下、ブロックごとに説明する。なお、配石遺構を構成する石については、第Ⅴ章に述べられているが、大部分が八ヶ岳にて産出する安山岩系で、ほかに花崗岩や片麻岩等の搬入品も見られる。配石の時期については、出土土器からみて、後期後半から晩期前半とすることができよう。

①第１ブロック

最も西端に位置し、いくぶん南に振れている。東西８ｍ・南北４ｍの規模である。石は乱雑に積まれているが、検出された上部のままであり、下部の様子は不明である。配石を覆う黒色土および石の間から土器片が出土した。

出土土器（第67図８～20）

８～10は後期中葉の深鉢形土器。10は羽状沈線のつけられた波状口縁の土器である。11～13は瘤の付く土器である。特に11は第90図16の深鉢形土器に共通する土器である。連続刻目や、大きなブタ鼻状の瘤が付けられている。12には刺突文が曲線的に連続し、その上に大豆大の瘤がつく。13は入り組み沈線の土器で、２個１単位の瘤がある。いずれも黒褐色を呈する。14は「く」の字形口縁の深鉢形土器と思われ、口縁部に凹線状の沈線が走る。沈線の上下には刺突文が連続している。以上は後期後半の土器である。15は深鉢形土器の口縁部破片。屈折部に有刻の凸帯がめぐり、口唇との間に沈線が施される。凸帯と口唇とを結び、瘤状の隆帯が張り付けられ、小突起となっている。16は平行沈線と縄文とで飾られる土器であり、口唇に押圧が連続する。17は沈線により、玉抱き三叉文と思われる文様がつけられている。18は浅鉢形土器で、口唇部に隆帯による背中合わせの弧状文が連続する。この部分には赤彩が施されている。18は埦形の土器であろう。鍵の手が連続するような沈線がめぐっている。20は口縁に有刻の凸帯がめぐり、以下入り組み沈線がつけられている。以上は、晩期前半の土器である。特に20は清水天王山式土器で、15もその一群であろう。

②第２ブロック

第１ブロックとは約２ｍ離れている。東西８ｍ・南北10mの規模で、北から南に傾斜しており、北端と南端との比高差は80㎝である。南－北の中間に、大きめの石列が東西に走っているが、これについては、第３・４ブロックのＣ・Ｄ区にも東西に走る石列が認められ、これと共通した「第１号配石の基礎」的なものかもしれない。

本ブロックの北端には、石棺状の石組がある。まず平石を立てて組合わせ、内側の規模180×100㎝程の長方形の空間が作られている。組合わせ式石棺を彷彿させる。さらにその外側には大きめの石が並べられ、全体としては直径4ｍ程の円形状に石が取巻いているような感がある。石組内部からは、焼けた人骨片（頭骨・四肢骨等の小片）が出土した。これらの骨片は石棺状石組の南西壁ぎわの南壁に偏った部分から纏まって出土した（図版19－２）。これについては第Ⅵ章に詳しい。他に土製耳飾り２点（第111図）が出土している。

この石組の東側には２×1.5ｍの範囲の空間部をもった箇所がある。この空間部を取巻くかのように石群がめぐっている。一方、本ブロックの南側部分にも、石が落込みかかった箇所がいくつかあり、石組状の施設の所在が確認されている。平面図中の大形の石棒がある箇所も、石組かもしれない。

石の間には黒色土が落込んでおり、多くの土器を始めとして、土偶や耳飾りが出土した。

出土土器（第67図21～31）

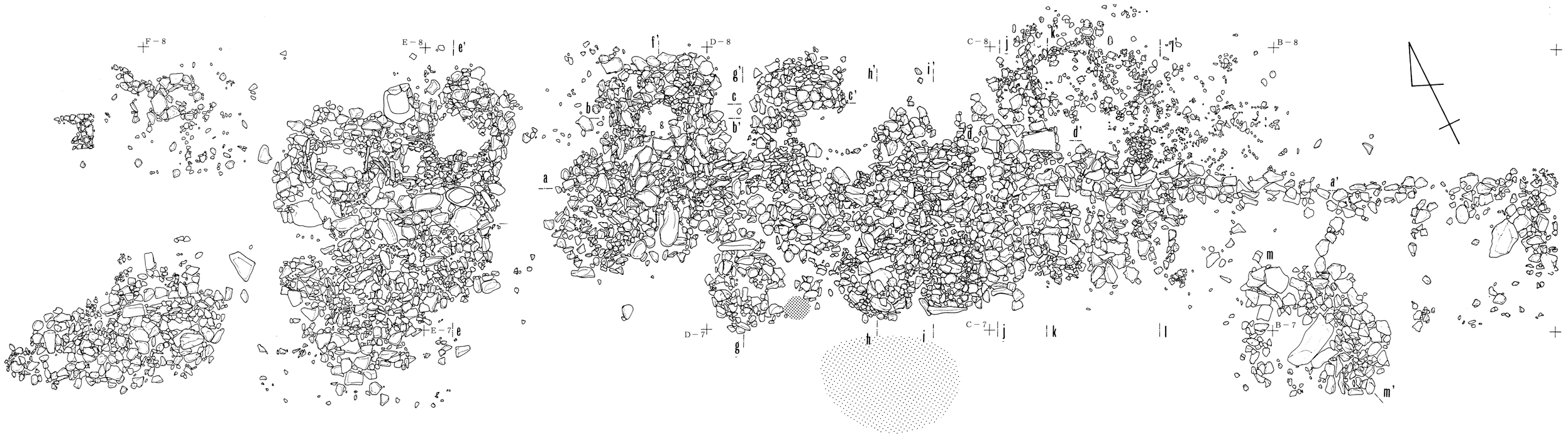
21は深鉢形土器の口縁部破片である。外反気味に立ち上がる器形。平口縁であるが、刻みのある小突起が付けられている。弧状および長円状の磨消し縄文が施されている。無文帯には縦方向に波状沈線が走る。22は平口縁で「く」字形口縁部の深鉢形土器である。口縁部には凹線状の沈線３条が走り、その間には縄文が施されている。屈折部には瘤状の突起が張り付けられている。頸部以下には羽状沈線がみられる。23も平口縁の深鉢形土器であろう。上部に刺突文が連続し、以下沈線がめぐる。これらは後期後半の土器であろう。24は縦方向に弧状沈線がつけられ、その間に縄文が充填された土器。25は入り組み三叉文で飾られた口縁部破片。沈線間には刺突文がつけられている。26は有刻凸帯がめぐる深鉢形土器である。体部は無文。これら25・26は清水天王山式に含まれるものであろう。27、28、30、31は大洞系の土器。27、28は羊歯状文のつけられた深鉢形土器で、大洞ＢＣ式に比定出来よう。30、31は浅鉢形土器で、削り出し手法により雲形文が彫刻され、その部分に縄文が充填されている。31は口唇部にも小突起状の彫刻が連続している。大洞Ｃ１式に比定される土器であろう。

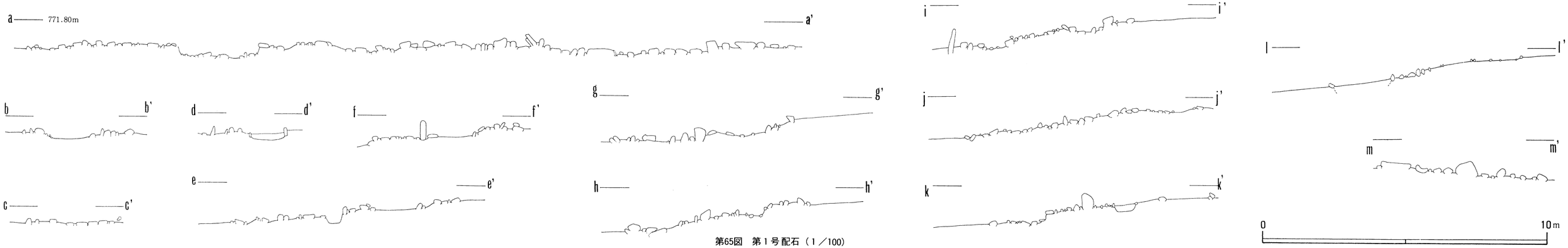
③第３ブロック

第２ブロックとは２ｍ離れ、Ｅ－７区からＣ－７区まで25ｍの長さに及んでいる。本来はＢ－７区にまで一連であったと思われる。第２ブロック同様幅10ｍで、北端と南端とでは1.2ｍ程の高低差がある。特に中央部分での傾斜が強い。この中央部を境に、北側と南側とでは配石の構成が異なっている。まず、Ｅ－７区内の、本ブロック北端には４ｍ×３ｍの方形に石群が取巻いている部分がある（図版19－６）。この、取巻かれた内側は石も無く空間部になっており、多くの土器片が出土している。このような方形を基調とした配石の単位は、Ｄ－７区・Ｃ－７区にも認められる。このような単位から見ると、第３ブロックはさらに三つの小ブロックから構成されているのかも知れない。また、第２ブロックに見られた石棺状石組に類似したものが、ここでも２基認められた。１つはＤ－７区の北端にある方形石列の内側に位置している。縁石は大部分失われているが、ここでは底面に石が敷きつめられている（図版20－５）。もう１基はＣ－７区にあり、1.3ｍ×0.8ｍのものである。

一方南側部分は、北側のような構成ではなく、円形の石組が中心となっている。例えばＤ－７区の南西隅には、直径2.5ｍの円形石組がある。この中央からは、長さ48㎝余りの大形石棒（第143図６）が横倒しの状態で出土した（図版20－２）。本来は直立していたものであろうか（図版20－１）。この石組の２ｍ東側にも、同様な円形石組がある。この石組は、これまでのものと異なり、石で囲まれた内部にも、平石が敷かれている。この平石に乗った状態で、小形の石棒（第143図２）が出土した。さらに、この石組の東に接するかのように、円形石組が見られた。これら三つの石組に共通して、すぐ近くに大きな平石が立てられている。前二者は北側、他は南側にである。このように、本ブロックの南端には円形の石組が配置する傾向がうかがわれる。また、Ｄ－７区東端の石組に接して、Ｃ－７区西端に長方形の平石５枚程を傾斜に沿って階段状に並べた施設がある。これについては、高根町石堂遺跡の例から石棺状の石組と見られる。

Ｅ－７区の中央部から、長さ70㎝を測る細長い「貫入片麻岩」が横倒しの状態で出土した。付近に石のと





第65図　第１号配石（１／100）

ぎれた箇所があり、この部分に「貫入片麻岩」を立てると都合よく納まった。このことから、これは本来立石であった可能性が考えられた（図版19－７）。本配石を構成する石群には、大形の石棒やその破片、丸石等が多く含まれている。土器破片や土偶などの出土量も多い。また、本ブロック中央部の前面（南側）に当たるD－６区内において、特に配石の南端から１m～３m離れた地帯に、多くの土器が出土する場所があった（第159図）。大半は土器破片であったが、硬玉製垂飾品や石棒もみられた。また、大形石棒を伴った円形石組とその東側の円形石組との間の空間地には、黒耀石のチップが密集していた。その他、配石全体から焼けた獣骨片・鹿角片も少量ながら出土した（表23）。

出土土器（第66図）（第68図）（第69図）

H0101　深鉢形土器の２分の一強の口縁部破片で、口径30㎝程度である。平口縁で、ゆるい「く」字形の器形を呈する。横方向の沈線と単線とが口縁と平行にめぐる。屈折部以下には、斜行単線が連続して施されている。赤褐色を呈し、胎土には金雲母や長石粒が混入している。後期後半の土器であろう。

H0102　浅鉢形土器の２分の一程の破片である。丸底でゆるく傾斜しながら立ち上がり、外反して口縁にいたる器形である。外面は帯状の磨消し縄文帯や列点文、それに三叉文等で飾られる。貫通孔のある山形突起が付けられているが、その内面には貫通孔を中心とした、玉抱き三叉文がみられる。赤褐色を呈し、内外面ともよく磨かれ、光沢がある。晩期初頭の土器である。

H0103・H0104　小型の深鉢形土器。0103は３分の一ほどの破片である。口縁部直下に刺突文のある凸帯がめぐるが、これは突起部分では上方に曲がっている。体部は無文で黒色を呈する。

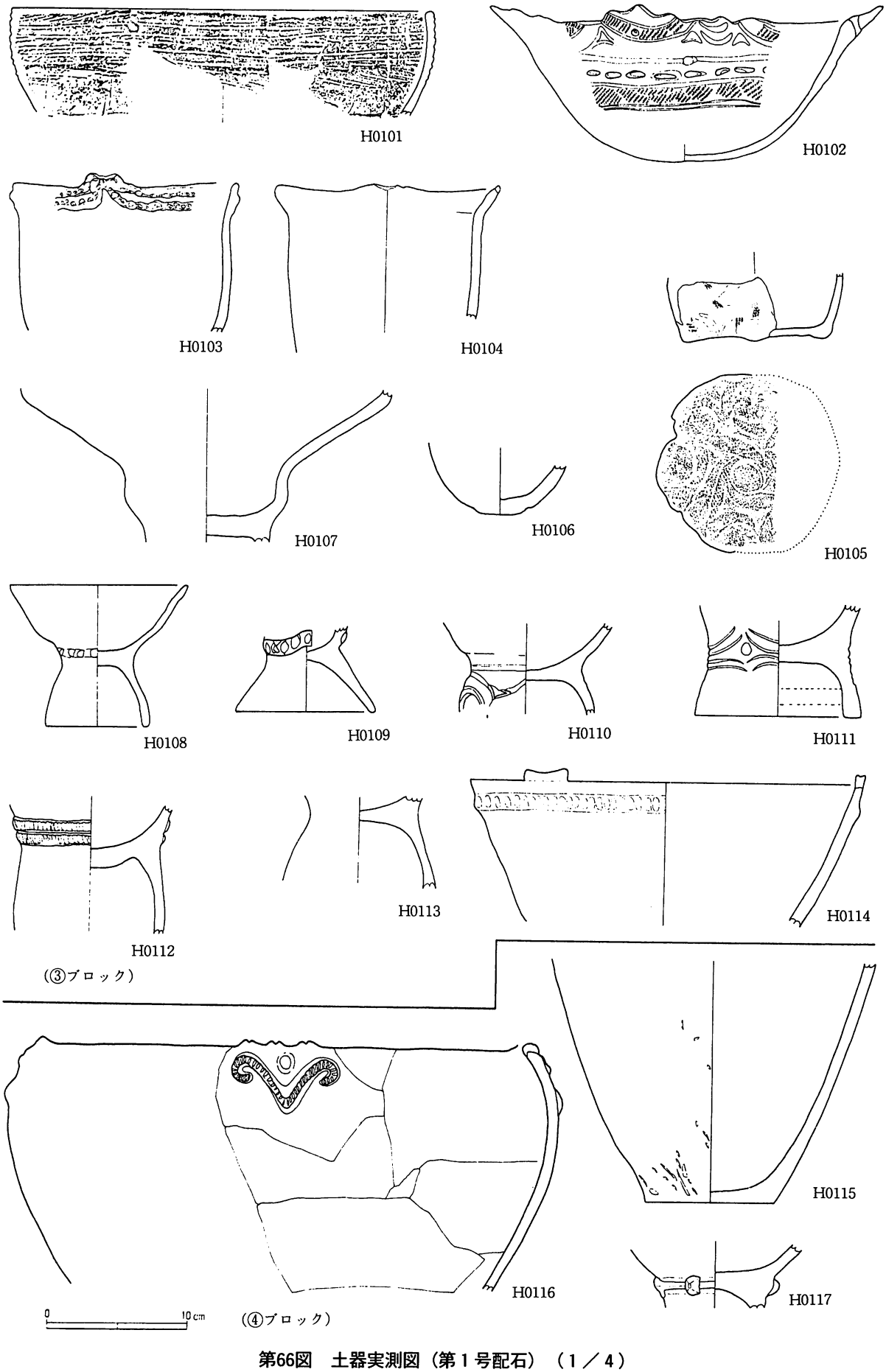
H0105　小型の鉢ないし皿形の土器であるが、胴中位から上部を欠損する。丸味を帯びた底部であるが、四隅に小さな円錐状の「足」が付く。籠状の器形とも見受けられる。底部にまで施文されており、磨消し縄文帯が入り組み、その間の無文部は三叉状や円形をなしている。長石等の白色粒子を多く混入し、外面は一部黒褐色を呈する。内面は茶褐色を呈し、磨かれている。

H0106　椀形土器の下半部の破片である。底部は小さく、突出している。無文で黒褐色を呈する。外面は剝落が激しく、内面には太い刷毛目状の整形痕が残る。

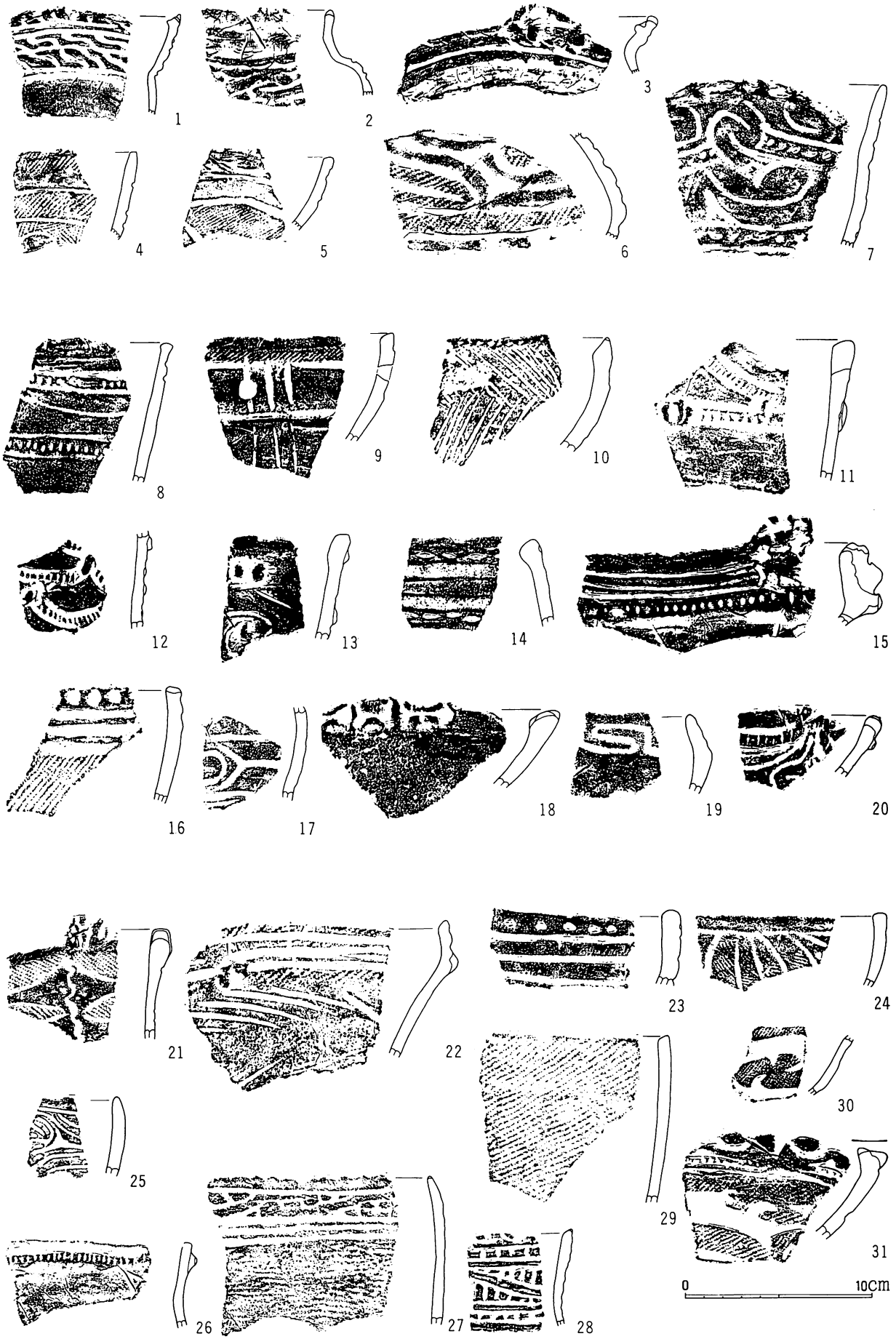
H0107～0113は、台付き土器である。0107は台付きの浅鉢形土器であろう。台部を欠損する。外面には指頭圧痕が残る。0108は台付き浅鉢である。口縁部の大半および台部の半分程度を欠く。無文であるが、比較的よく磨かれている。頸部に刻目のつけられた凸帯がめぐる。0109は脚部だけで、上部を欠損する。頸部に刻目のある隆帯がめぐる。外面の調整は雑で、指頭痕が残る。0110は台部に円形や三叉状の透しがある。おそらく玉抱き三叉状の透し文であろう。器体部の内面は良く磨かれており、黒褐色を呈する。0111は台部のみの残欠品である。２本１単位の弧状沈線が施されるが、この沈線の末端の箇所に円文が掘られている。台部内面には１㎝前後の幅で煤状の炭化帯が認められる。さらにその上方全体に赤彩が残っている。この台部が容器として用いられたのであろうか。0112・0113も台部の破片である。0112では頸部に２条の有刻凸帯がめぐる。赤褐色の土器である。

H0114は鉢形土器の３分の一程の破片である。口縁部直下に有刻の凸帯がめぐる。口唇には小突起が付けられている。明るい褐色を呈する。

第68図１は鉢ないし椀形土器であろう。口縁部に磨消し縄文、以下に沈線および連続刻目文が付けられている。加曽利Ｂ２式土器であろう。２は「く」字形口縁の深鉢形土器である。口縁部には平行沈線、屈折部以下には羽状沈線が走っている。３も同様な土器であるが、口縁部に半月状の隆帯が、背中合わせに張り付けられている。４・５は凹線状の太い沈線の土器である。４の口縁部文様帯には３条の沈線が走り、その上下および沈線間に、列点文が連続する。また縦方向に、押圧文のある隆帯が付けられている。屈折部以下に斜沈線が施されているが、おそらく羽状沈線であろう。赤褐色を呈し、胎土中に金雲母や長石などの粒子が混入している。５も４に酷似するが、色調は灰褐色である。６・７は平行沈線間に単線のみられる土器。７は細かく小さい波状口縁の土器で、平行沈線間に、縄文と単線が交互につけられている。これらは後期後半の土器で、特に４・５は東海地方と脈絡のあるものであろう。８～10は波状口縁の深鉢形土器である。８は



第66図　土器実測図（第１号配石）（１／４）



第67図　土器拓本(1～7　第39号住居址、8～20　第1号配石①ブロック、21～31　第1号配石②ブロック)(1/3)

波頂部を欠くが、口縁に沈線と有刻の凸帯が走り、その下に羽状沈線が施されるが、これは「稲妻状沈線」に近いものである。9は内湾気味に立ち上がる波状口縁の深鉢形土器。口縁部はやや肥厚し、頸部と若干段がつく。刻目のある隆線が、波頂部から垂直に下がっている。波谷部にも短い張り付け文が認められる。また、口縁と平行に3条の沈線が走るが、上の2条は波谷部でつながっている。黒褐色を呈する。8・9ともに胎土中に、金雲母や長石などの粒子が混入する。10も波頂部の破片である。ドーナツ状の突起が3個付けられており、その箇所から両方向に凹線状の太い沈線が走っている。口縁部には刺突文が連続している。8・9は後期末から晩期初頭にかけての土器、10は後期後葉の土器と思われる。

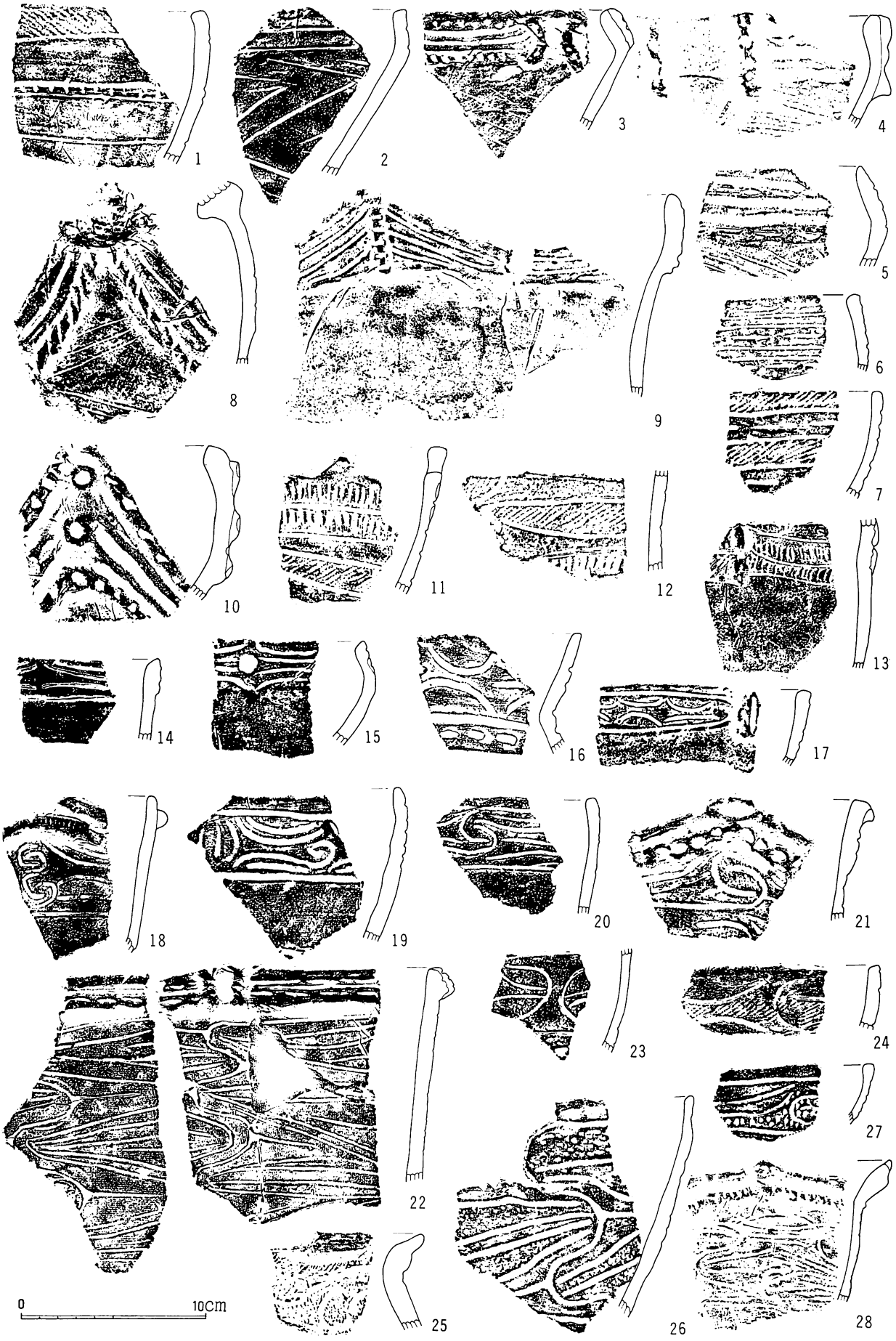
11～13は東北地方の「コブ」付き土器に共通する一群である。11・12は同一個体の可能性がある土器で、刻目と入り組み縄文帯とが施されている。口唇部には小突起がある。

14～17は弧線状の沈線がつけられた土器。14は折り返し状の口縁部で、ゆるく弧を描いた沈線が背中合わせにつけられている。15は「く」の字形口縁の深鉢形土器で、屈折部と口縁部との間に円文を挟んで、直線が2条、さらにその上下に弧状沈線が走っている。16は頸部の強くくびれる深鉢形土器破片。頸部より上に、背中合わせの弧線文がつけられている。頸部には列点が連続し、口唇部には刻目がつけられている。17には棒状の張り付け文があり、長円状に区画された中に、背中合わせの短い弧状沈線が連続している。色調は14が黒褐色の他は、明るい褐色を呈する。

18～27は入り組み沈線や三叉文の施された土器で、清水天王山式を中心としたものである。25を除き深鉢形土器であるが、波状口縁（18・21）と平口縁（19～22・24・26～28）とがある。文様構成上からは、①14～17に見られた背中合わせの弧状沈線に、縦方向の弧文が加わったもの（23・24）、②弧状沈線とゼンマイ状沈線（19）、③入り組み弧線（18・20・27）、④入り組み三叉文（21・22・26・28）等がみられる。また、18・21・28には口縁部に有刻の凸帯がめぐり、28では小突起にまで延びている。22では口縁部が肥厚し、沈線と列点状の単線がつけられ、同時に2個1単位で縦長のコブが張り付けられている。赤褐色を呈する硬い焼きの土器。

沈線間に縄文の施されたもの（24）、刺突文のつけられたもの（21・26・27）がある。25は壷形土器と思われ、頸部に爪形文が連続し、以下曲線と刺突文で装飾される。

第69図1～13・18は三叉文の施された土器である。1は小型の深鉢形土器で、ゆるい波状口縁をなしている。波頂部は押圧されており、下方に三叉文がつけられている。口縁に弧状の、頸部に平行沈線により区画された、磨消し縄文がみられる。2は皿形の土器である。文様構成は1に類似し、ゆるやかな波状口縁の波頂部を中心に、弧状の磨消し縄文帯と三叉文が施されている。三叉文の下端は、そのまま磨消し縄文帯の沈線へとつながっている。内外面ともよく磨かれている。3は平口縁の深鉢形土器で、入り組み弧線文が連続し、弧線の谷部に三叉文がつけられている。また、口縁部直下に2条の沈線が走り、その箇所に縦長の「コブ」が張り付く。口縁と三叉文の周囲には縄文が施されている。4は皿ないし浅鉢形土器で、弧線文と三叉文とが交互に連続してつけられている。5～13は玉抱き三叉文が描かれる土器。5は深鉢形土器で、2個1単位の小突起があり、その直下に円形刺突文を中心にした、渦巻き状の沈線がつけられている。この両側に三叉文がつけられていると思われ、玉抱き三叉文の様相がうかがわれる。6は壷形土器の肩部破片であろうか。6は皿あるいは浅鉢形土器であろう。三叉文や円文の周囲には、細かい刺突文が連続する。8は波状口縁の深鉢形土器。縄文が施され、胎土中に金雲母が目立つ。10は浅鉢形土器であろう。2個1単位の小突起がつけられ、玉抱き三叉文帯には縄文がみられる。黒褐色を呈し、よく磨かれている。11は浅鉢形土器であろうか。強くくびれた頸部から外傾して立ち上がり口縁にいたる器形である。口縁は波状をなす。肩部に、縦線のある「コブ」がつけられ、その両側に三叉文が描かれているようである。この三叉文は尾が延び、縄文帯を区画する沈線となっている。なお、頸部にも三叉文がみられる。12は深鉢形土器で、口縁直下に玉抱き三叉文とみられる文様がつけられている。口縁はゆるい波状をなす。13・14は同一個体とみられるもので、波状口縁の深鉢形土器である。胴部に玉抱き三叉文がつけられているが、左右の三叉文はずれている。尾は長く延び、平行沈線の一部をなしている。縄文はつけられていない。18には、入り組みの三叉状沈線がつけ



第68図　土器拓本（第１号配石③ブロック）（１／３）

られている。よく磨かれた深鉢形土器の口縁部破片である。

15～17は。羊歯状文の土器。16・17は深鉢形土器。口唇部には刻目や押圧が連続するが、15では小突起状で、内面にも隆線が認められることから、浅鉢形土器と思われる。

19は入り組み鍵の手文のつけられた土器。壷形土器の肩部破片と思われる。鍵の手文帯は少なくとも２段が認められる。20も鍵の手文の一種であろう。口唇部には刻目が連続する。21・22は弧線ないし曲線で飾られる土器である。いずれも壷形土器の肩部破片であろう。23は縄文を地文に、入り組みの波状文や平行沈線が施される。無頸壷の口縁部破片。

24～26は刺突文の土器である。沈線により横方向に区画された中に、刺突が連続する。24には赤彩が施されている。26は波状口縁の深鉢形土器であろう。

23・24には削り出しにより、雲形文ないし大腿骨文が浮き彫りにされている。この部分には縄文が充填されている。大洞Ｃ１式に比定される土器であろう。28は皿形土器と思われる。29は工字文のみられる口縁部破片。口縁直下に円形の刺突文がつけられ、内面にも浅い沈線がめぐる。

30・31は削り出し手法により平行沈線や浮線網状文が描き出されたものである。30は深鉢形土器、31は浅鉢形土器である。特に31は内外面ともよく磨かれており、茶褐色を呈する。氷１式に比定できよう。32～34は体部無文の深鉢形土器である。32は口唇部に刻目が連続し、頸部に沈線が２条めぐる。体部には縦方向に条痕が走る。33・34は口縁部直下に有刻の凸帯がめぐっている。いずれも外反する口縁部である。

④第４ブロック

第３ブロックから伸びる部分と、その南にあるブロック状の配石から構成されている。まず、第３ブロックから伸びる部分は、本来多くの石があったはずであるが、尾根の高い箇所にあたることから、耕作等による撹乱により、大半の石が除去されてしまい、僅かに配石を構成する最下部の石列だけが残ったものと考えられる。この石列には、大きめの石が用いられており、しかも長軸を東西方向にそろえ、並べられている傾向がうかがえる。第２・３ブロックにあっても、最下部にはこのような石列が「基礎」として設けられているものと見られる。

石列の南2.5mにあるブロックは、5.5m×4.5mの規模で、長さ２mの大石を中心にして、多くの石が積まれているものである。中心の大石は安山岩で、元来この場所にあった自然石を利用したものと考えられる。土器片を中心に、土偶・耳飾り等が出土た。

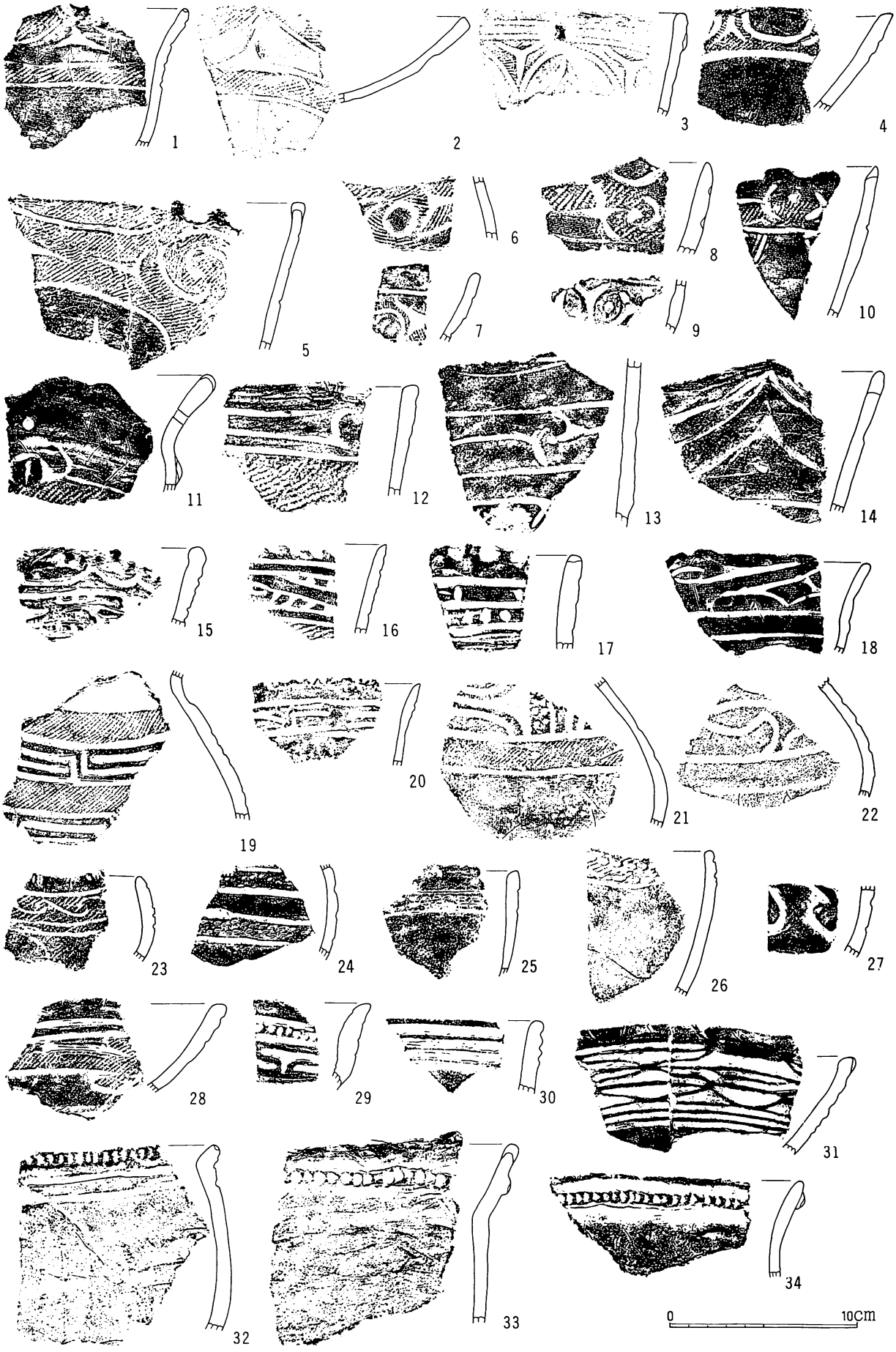
出土土器（第66図）（第70図１～30）

H0115　深鉢形土器の胴下半部である。無文で色調は明るい褐色を呈する。

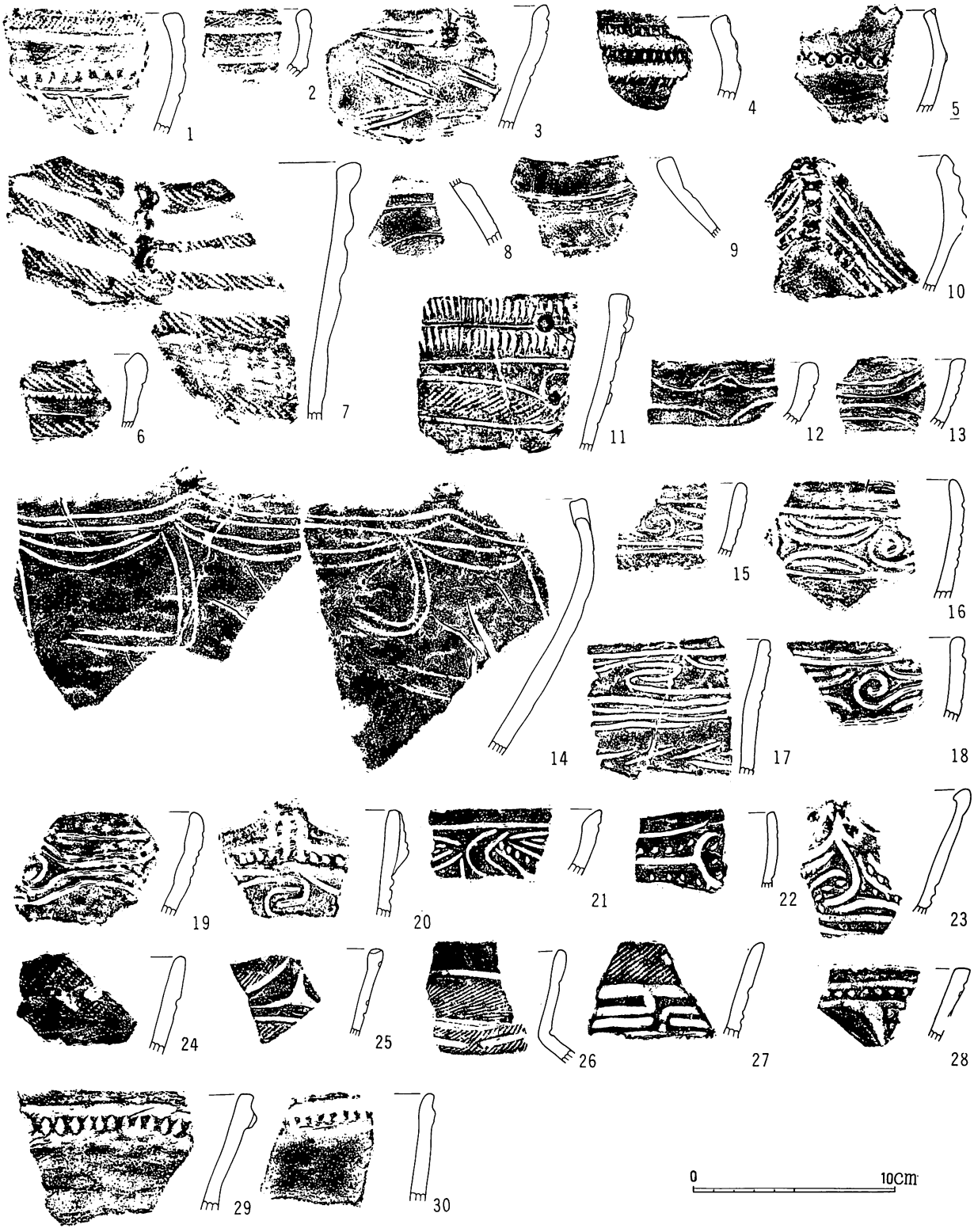
H0116　鉢形土器の３分の一程の破片である。３個１単位の小突起が付けられているが、これは４単位であると思われる。小突起の下方に、「Ｖ」字状の隆帯とドーナツ形の張り付け文がある。この文様も小突起同様、４単位が付けられていたと思われる。明るい褐色を呈するが、外面には部分的に煤が付着している。

H0117　台付き土器の頸部破片である。くびれ部に隆帯がめぐり、瘤状の小突起も付けられている。茶褐色を呈し、器面は粗れている。

第70図１は口縁部に縄文帯がめぐり、以下に連続刻目文、斜沈線等が施されている。口唇は内側にやや肥厚している。２は「く」の字口縁の深鉢形土器破片で、平行沈線と縄文帯とが横走している。これらは後期後葉に位置付けられる。３は波状口縁の深鉢形土器。口縁部には２条の沈線が走り、部分的に瘤状の突起が付けられている。以下、羽状沈線が施されている。後期後葉終末の土器であろう。４は凹線状の沈線２条が横走しており、その間や口唇には細長い刺突文が連続している。東海方面と脈絡のある後期後葉の土器である。５は浅鉢形土器であろうか。最大径の部分に隆帯があり、その上に竹管状の工具による円形刺突文が連続している。６・７は安行１式土器。７は波状口縁深鉢形土器の波谷部破片であろう。口縁以下に４条の隆起帯縄文が走り、幾分無文帯をおいて、さらに２条の隆起帯縄文が確認できる。口縁部から３本目の縄文帯まで、縦方向に瘤状の隆帯がつけられている。色調黒褐色。８・９は東海西部から近畿方面の後期中葉の土



第69図　土器拓本（第１号配石③ブロック）（１／３）



第70図　土器拓本（第１号配石④ブロック）（１／３）

器と関係のあるもので、いずれも壷ないし注口土器とみられる破片である。８は磨消し縄文風の土器であるが、施文具は縄ではなく、貝殻であろう。外面は丁寧に磨かれており、赤味がかった褐色を呈する。９は口縁部破片で、頸部には列点文、肩部に磨消し縄文が施されている。よく磨かれ光沢がある。

10は波状口縁の深鉢形土器。口縁と平行に沈線や刻目が連続し、押圧文のある隆帯が波頂部から垂下する。

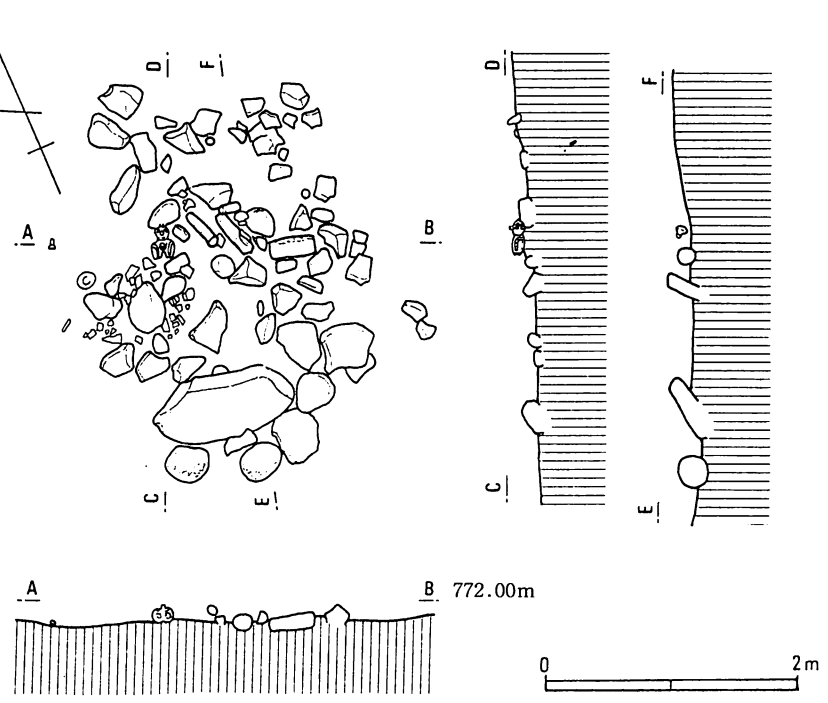
11は深鉢形土器の口縁部破片。口縁直下に刻目文帯が2段めぐり、その下に入り組み縄文帯がつけられている。刻目文帯および縄文帯に円形「コブ」が張り付けられている。東北系の土器である。

12～23は沈線による弧文や入り組み文・三叉文等が施される土器。12・13には背中合わせの弧文がみられる。14は口縁が内側に湾曲する器形の深鉢形土器である。口縁と平行に2条の沈線がめぐり、その沈線から下方に弧状沈線がつけられている。さらにこの弧状沈線の接合部から下に、釣針ないし鍵状に平行沈線が垂下している。また、頂部に窪みのある小突起が付けられている。15・17には入り組み弧線文、16・17には弧状文や渦巻き文がつけられている。いずれも平口縁の深鉢形土器であろう。19では背中合わせの弧状沈線の末端が延び、入り組みの弧文になっている。20には有刻の凸帯がめぐり、以下に入り組み文がみられる。小突起にも凸帯が延びている。21～23には列点がつけられている。22は三叉状の沈線、23には有刻凸帯とともに、入り組み沈線が施されている。21・22は平口縁、23は波状口縁である。以上について、15～23は清水天王山式土器であろう。24～27は縄文の施された土器。24には玉抱き三叉文、25には三叉文が描かれている。26は壷形土器で、口縁直下に沈線、肩部に短線がつけられている。27には鍵の手文がみられる。28には三叉文とともに刺突文が連続している。

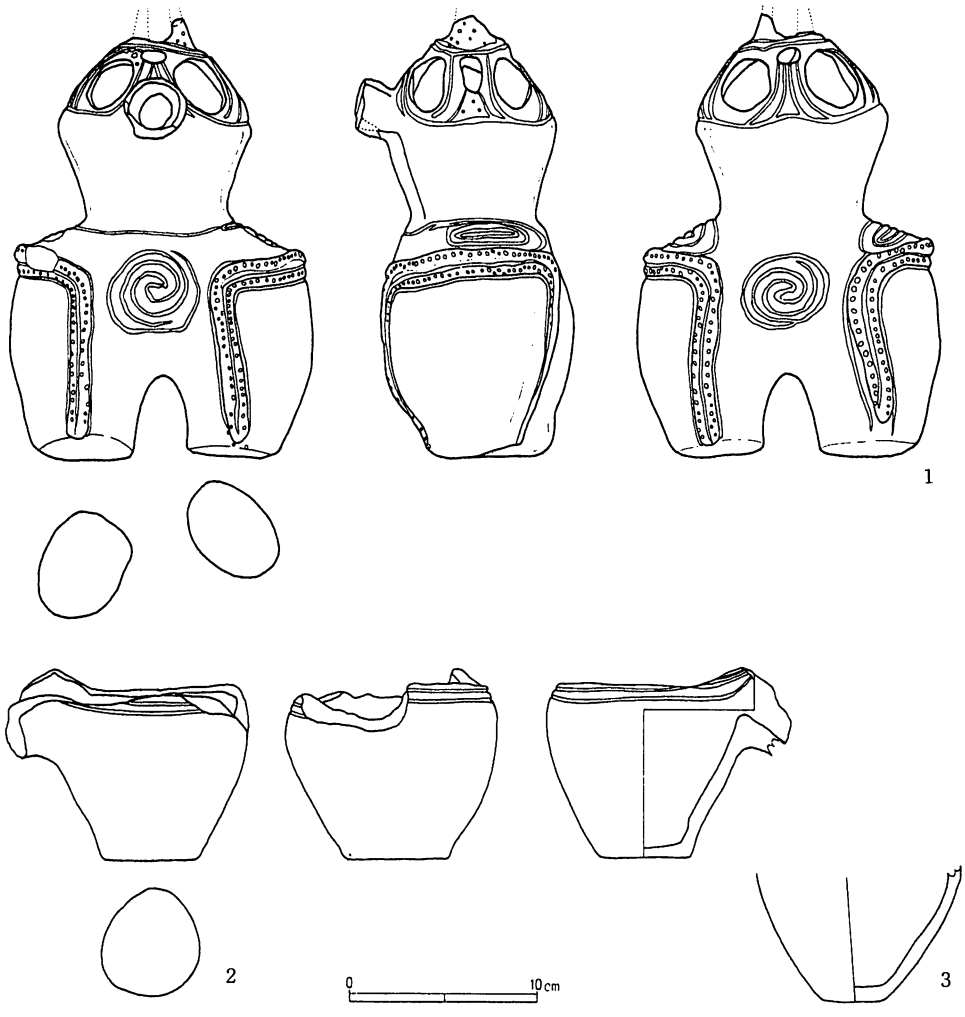
29・30は無文の深鉢形土器であるが、いずれも有刻の凸帯がめぐっている。29の外面には炭化物が付着している。

第2号配石（第71図）

E－10区に位置する。東4mには第3号配石がある。本配石は、黒色土中に構築されているとともに、石が散乱することから、正確な規模については不明であるが、長軸2.4mないし3.0m、短軸2.3mの不整円形もしくは長方形に近い形状に配石されている。この構造については、まず南面に直径30cm程の丸石2個が相対峙して配され、続いて長さ1.2mの偏平な石が置かれている。この平石の両端から、内側の空間部を囲むかのように、20～30cmの大きさの石が並べられ、全体として先に述べたような円形ないし長方形に近い形状を呈している。丸石の置かれている南側に対して、北側部分からは石棒4本と磨石1個とが、横に倒れた状態で出土した。石棒については、1本が完全に近く長さ33cm（第144図3）、頭部が割れて出土した1本は長さ50cmの大形（第144図5）、他に頭部を欠する長さ40cm（第144図4）と、18cm（第144図2）の2本がある。これらの石棒が出土した部分の外側にも、石列が半月状に認められ、これが本配石の北端をなすのかもしれない。こうした場合、配石の形態は長軸3mの長方形にちかいものとなろう。



第71図　第2号配石（1／60）



第72図　土偶実測図（第２号配石）（１／４）

本遺構からは土器を中心に非常に多くの遺物が出土した。特徴的なものとしては、２本の石棒の間から出土した独鈷石の半欠品（第145図３）、北西側の石列付近から出土した中空土偶、その外側から出土した石棒状土製品（第117図23）等がある。時期は、晩期中葉後半から後葉前半にかけての頃と推測される。なお、本址は現状保存されている。

出土遺物

①土　　偶

［中空土偶１］（第72図１）

配石の北西端から仰臥の状態で出土した。頭部の突起部および突出した口の下部を欠損する以外、ほぼ完形である。しっかりと踏張った両足に直接顔面がのった、あるいは、胸部と腹部とが同時に表現されたかのような形状、透かしで表わされた大きな目、突出した口など、いくつかの特徴のみられる土偶である。土器と同じように輪積みで作られ、内部は空洞となっているが、整形は雑である。外面は、内側よりも丁寧に整形されているが、部分的に剝落や、細かいひびも認められることから、二次的に火熱を受けた可能性もある。文様は、胸部の全面（あるいは胴部）および背面に渦巻文、肩部に同心状の楕円文がみられる。脚部全面の先端から肩部を経て脚部裏面の下端まで、円形刺突文２列が連続する隆帯が走っている。顔面には、大きな円形の透かしが４個対称的にあり、このうちの前面の２個が目を表現している。色調は淡い茶褐色を呈する。

現存部の高さ23.2㎝、計測可能な部分の器壁厚さ８㎜～10㎜を測る。

［中空土偶２］（第72図２）

１と類似した土偶の脚部破片である。１よりも一回り大きいものと思われる。上部に２本の平行沈線が巡っている。内面には、輪積み成形を指頭や篦により調整した跡が顕著に残っている。色調も１と同様に淡い茶褐色を呈している。

［中空土偶３］（第72図３）

土器の下半部の可能性もあるが、内面の整形が雑であることから、１・２同様の土偶の脚部破片と見なしたもの。内面にくらべ外面の整形は丁寧である。淡い褐色を呈する。

②土器（第73～75図）

大別して浅鉢形土器、壷形土器、深鉢形土器が出土している。

［浅鉢形土器］　H0201　口縁部を欠く３分の２程の破片。やや深めで椀形に近い器形である。上半部に陽刻の浮線網状文がみられる。色調は淡い褐色で、黒色斑が多い。

H0202　１よりも深く、口縁部が内湾する器形の土器である。３分の１程の破片。胴上部に工字文が施されている。淡い褐色で、内外面ともに良く磨かれており、外面の一部には赤彩が残っている。

H0203～H0206は皿状に近い器形の土器である。H0203は３分の１程の、底部を欠する破片。口縁部の外面に３条、内面に１条の沈線が巡る。２個１対の孔がみられる。褐色を呈し、器面はザラつきが激しい。H0204は深めの器形。口縁部内外面にそれぞれ１条の沈線が走る。焼成前から付けられた孔が見られる。器面は磨かれているが一部磨滅している。黒褐色を呈する３分の１程の破片である。H0205は４分の一の破片。口縁部の内外面にそれぞれ１条の沈線が付けられている。淡い褐色を呈する。H0206は２分の一を欠く、椀状の器形の土器。山形の突起があり、中央に小孔が貫通している。口唇がやや肥厚し、直下が沈線状になっている。外面黒褐色、内面淡い褐色を呈し、整形はあまり丁寧ではない。

H0207は「く」の字形に屈折する器形で、２分の一弱の破片である。山形の小突起が認められる。淡い褐色を呈するが、器面は磨滅している。

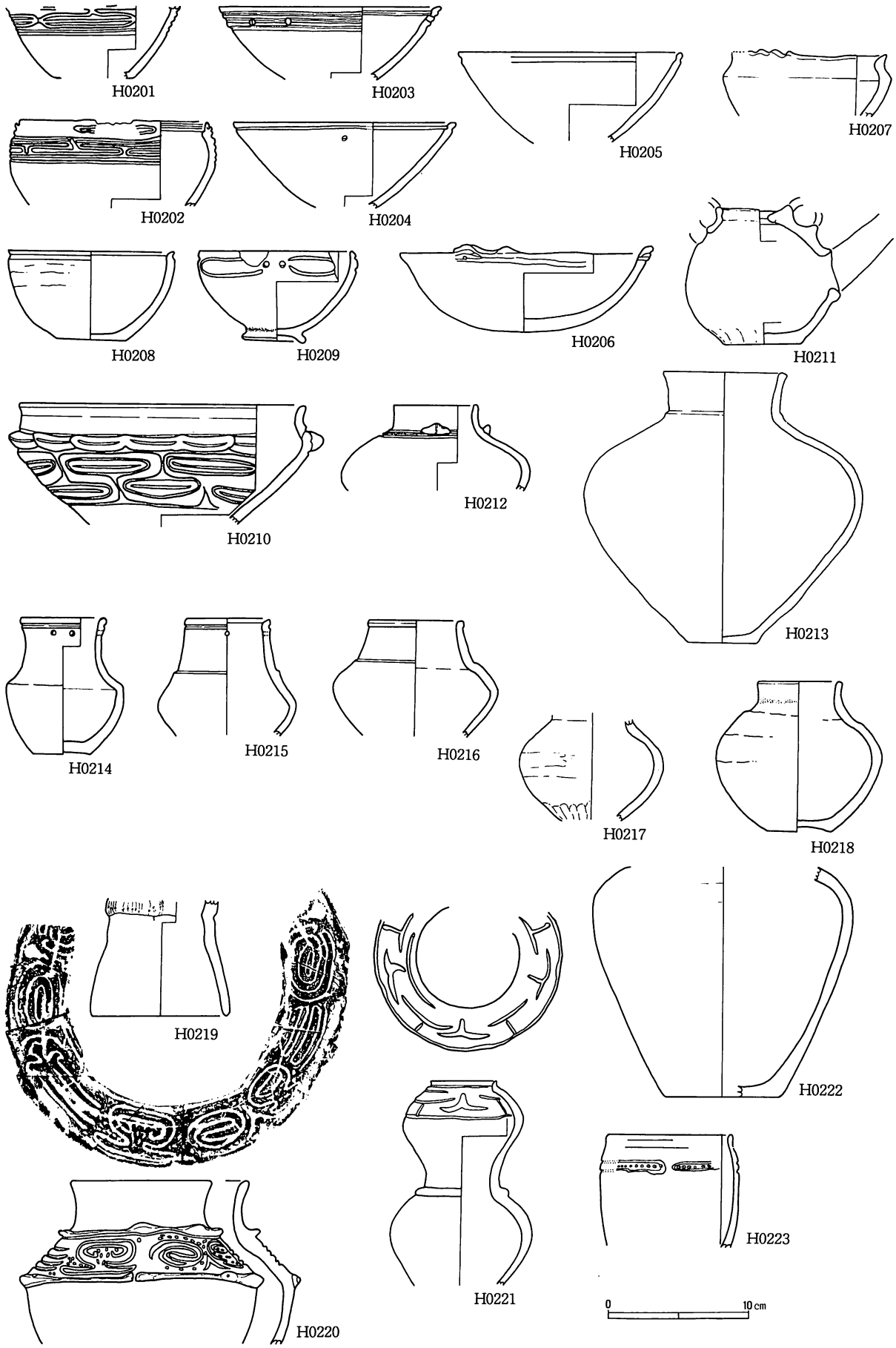
H0208は椀形とでもいうべき器形の土器で、４分の一程度を欠損する。口唇直下に浅い１条の沈線が認められる。部分的に黒色斑の残る、淡い褐色を呈する土器である。H0209は、小さな台のついた浅鉢形土器としたが、蓋としても使用できる土器である。部分的に赤彩が残っており、本来は外面全体に塗彩されていたものであろう。口唇直下に長円形状の沈線が施され、径４㎜程度の小孔が１対ある。反対側は欠損しているため、小孔の有無は不明。淡い褐色を呈する。全体の３分の一を欠いている。

H0210　底部を欠く３分の一程の破片。やや外反気味に立ち上がる口縁部、楕円状の付帯文を思わせる隆帯がめぐる肩部が特徴的で、体部には入り組み状の「工字文」が施されている。色調黒褐色を呈し、器面はやや荒れている。

H0227　突出気味の小さい底部から、やや湾曲しながら立ち上がる深めの器形である。器面の調整はあまり丁寧ではない。外面下部に煤が付着している。胎土中には、長石等の白色粒子が多い。黒褐色を呈する２分の一の破片である。H0228は深めの土器で、「鉢形」とも称すべき器形である。「く」の字形に屈折する口縁部で、体部の立上がりの傾斜はやや急である。黒褐色を呈する。

［壷形土器］　H0212は扁球形の胴部を有する小型の壷である。頸部に１条ないし２条一組の細い隆帯がめぐり、部分的に円形刺突文が連続する。この隆帯上には１個だけ突起がつけられている。茶色味の強い褐色を呈する。内面には輪積み痕が顕著。胴下半部を欠く土器である。H0213、最大径が胴上半部にあり肩の強く張る器形で頸部に浅い沈線状の段がつく。淡い褐色を呈する。

H0214～0216は、類似した器形の特徴的な小型壷である。H0214、器面の一部が剝落しているが、完形品である。肩部が強く張り、稜をなしている。口唇直下に１条の沈線が巡り、さらにその下に直径３㎜程の孔２つが貫通する。内外面とも丁寧に整形されているが、器面はやや粗れており光沢はない。灰黒色を呈する。



第73図　土器実測図（第２号配石）（１／４）

H0215は「く」の字形に張った胴部、有段の肩部、内傾しながら立ち上がる口縁部などが特徴である。口唇直下の沈線、およびその下の貫通孔などはH0214と同様であるが、破損しているため孔の個数は不明である。内外面ともよく磨かれており、黒褐色を呈する。焼成良好。H0216はH0215に似ているが、全体に横に張る器形である。口唇は外側にやや肥厚し、沈線はみられない。内外面ともに整形は丁寧で、とくに外面は篦等によりよく磨かれている。黒褐色ないし灰褐色を呈する、全体の3分の一程の破片である。

H0217　壺の胴部破片。やや扁球形をなす、淡い褐色の土器である。H0218は球形に近い胴部の小型壺。肩部に僅かながら段がつく。底部の一部および胴部が部分的に剝落する以外は、ほぼ完形である。黒色斑のある黄色味の強い褐色を呈する。

H0220　胴下半部を欠損する壺形土器である。胴の最大径部分と頸部とに、それぞれ6個の突起のある隆帯がめぐる。この突起は、それぞれの隆帯の同じ位置にあるが、胴部帯の突起にのみ縦に貫通した小孔がみられる。文様は、この2本の隆帯間に限られている。全て沈線および刺突により飾られており、中空土偶の肩部と同様の、同心状の楕円文や渦巻文、それに工字文風の文様などがみられる。淡い褐色を呈する。

H0221　口唇部、底部、胴部の一部を欠く瓢形の土器。文様は上部に限られ、工字状の沈線文と三叉文とが配されている。くびれ部直下には1本の隆帯がめぐる。淡い褐色を呈する。

H0222は口縁部を欠く、3分の一程の破片である。頸部の欠損部分は削られ、丸味を帯びている。内外面とも丁寧に整形されているが、器面はやや磨滅している。淡い褐色を呈する。

［注口土器］H0211　注口部および把手を欠損している。全体に磨滅しており、細かいひびも認められることから、二次焼成を受けた可能性がある。底部に網代痕あり。淡い褐色を呈する。

［台付土器］H0219　脚部破片である。くびれ部に隆帯がめぐり、その上に小さい円形の刺突文が連続している。内外ともよく磨かれている。

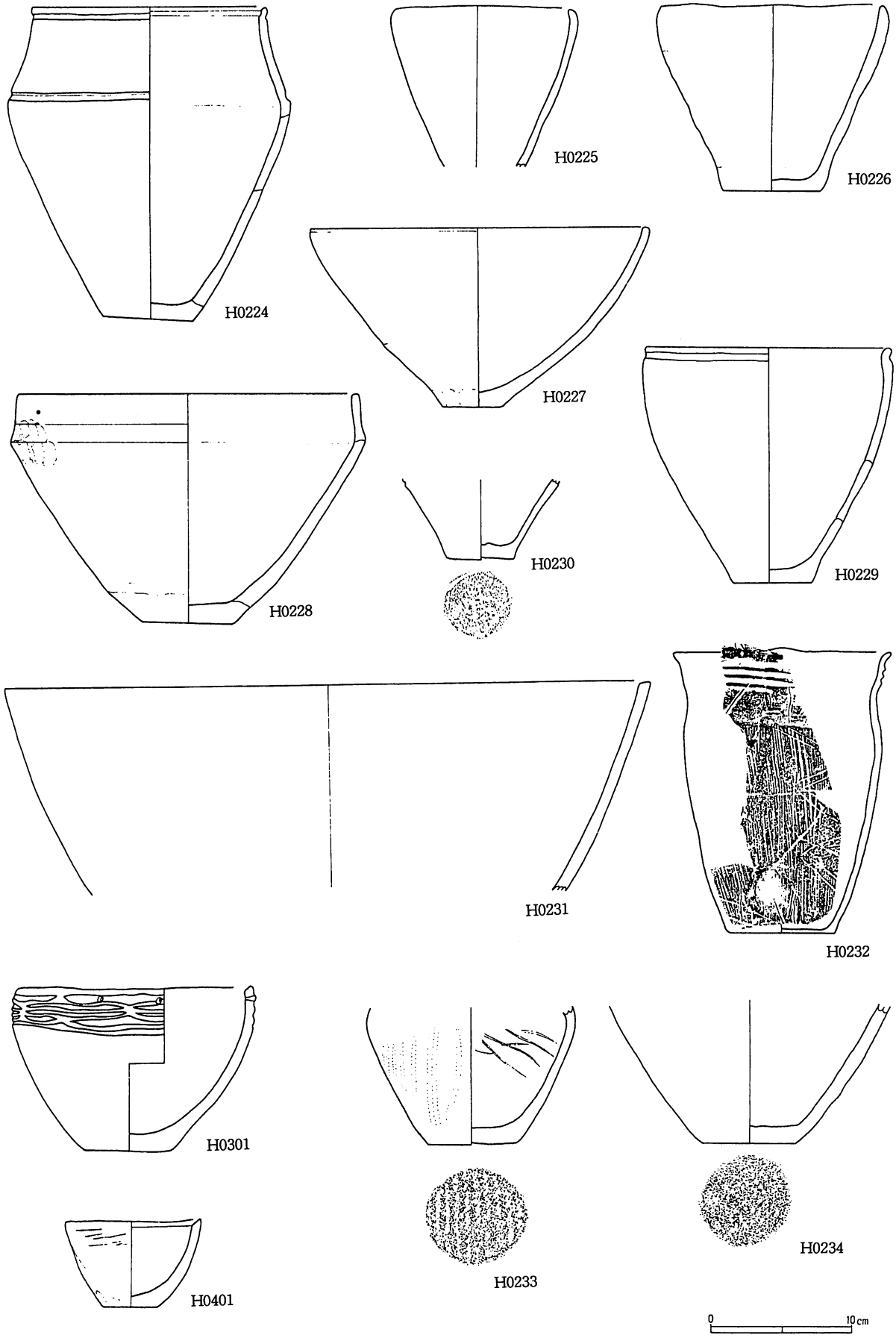
［深鉢形土器］H0223は小型深鉢形土器の破片である。口縁部の下に沈線による帯状の区画文があり、小さい円形の刺突文が連続している。黒褐色を呈し、器面は荒くザラつきがある。

H0224　胴上半が「く」字に屈折する器形。屈折部に最大径があり、この部分と口縁直下の内外面とに沈線が施される。器面は内外面ともに丁寧に調整されているが、外面下半はザラつきが激しく、且つ赤化していることから、二次的に火熱を受けたらしい。茶褐色ないし灰褐色を呈する。H0225の底部を欠く小型の土器。内外面ともに器面調整は丁寧で、灰褐色を呈する。H0226も小型の深鉢形土器で、2分の一を欠損している。器面は部分的に磨かれているが、輪積み痕も確認できる。色調茶褐色。H0229は小さな底部から湾曲して立ち上がる器形。口縁部外面に凹線状の沈線が1条めぐる。整形は丁寧であるが、器面は荒れ、赤化部分もあることから、火熱を受けたものかも知れない。色調は茶褐色。H0231は大型深鉢形土器の口縁部破片。器壁の立ち上がりが緩やかなことから、あまり深い器形ではないかもしれない。黒褐色を呈する。

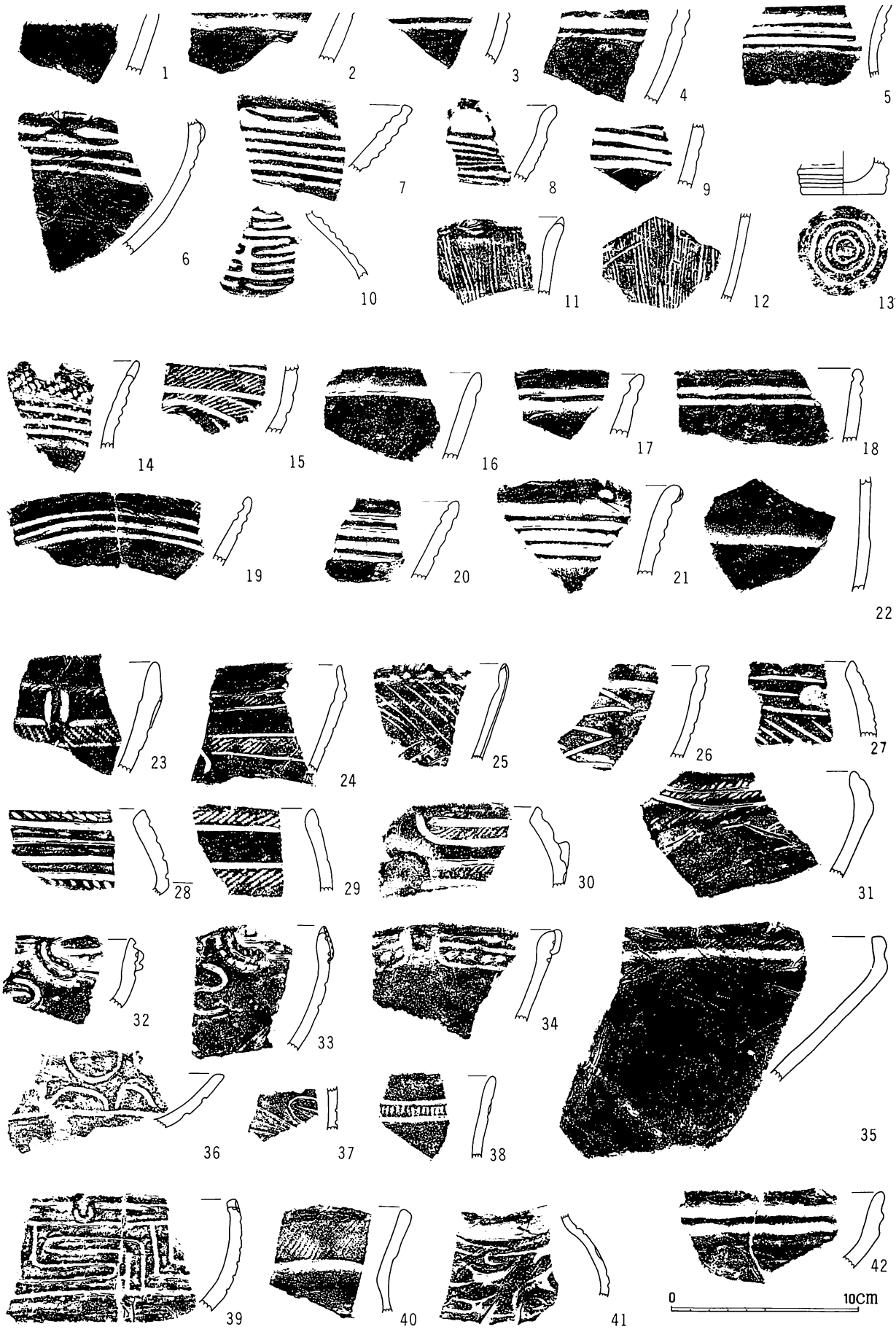
H0232　底部は全部残っているが、体部は5分の一程の破片である。底部から外傾しながら立ち上がり、肩部で一旦内傾し、その部分にゆるい稜がつく。頸部はほぼ直立する無文帯で、ゆるやかに外反しながら口縁にいたる。口縁部はゆるい山形をなすが、残存部が僅かであるため単位は不明である。口縁直下には、削り出しによる隆線が3条めぐっている。胴部全体には縦方向に条線が走り、その上に2本一組の稲妻状沈線が施されている。これは3単位であろう。外面の肩部以上の部位、および内面はよく整形されており、光沢がある。条線部や口縁部に赤彩が残っていることから、本来は全面に塗彩されていたものと思われる。胴下半は、剝落部分が多く、特に底部周辺は赤化が著しいことから、二次焼成を受けたものとみられる。色調褐色。

H0230・H0233・H0234は胴下半部の破片。いずれも網代痕が認められる。

第75図1～13は破片の拓本である。1・2は深鉢形土器の破片と思われ、口縁直下に凹線状の浅い沈線がめぐる。3～10は削り出しによる隆線の走る土器である。5は深鉢形土器、10は壺形土器、他は浅鉢形土器の破片と思われる。8は浮線網状文、10は流水状の工字文が施されている。11、12は条痕文の深鉢形土器破片。11は小突起がみられる。13は底部破片と思われるもので、同心円状の沈線がめぐっている。赤彩が残っ



第74図　土器実測図（第２号～４号配石）（１／４）



第75図　土器拓本（1～13　第2号住居址、14～22　第3号配石、23～42　第4号配石）（1／3）

ている。

③土製品

石棒状土製品（第117図23）　配石遺構の西壁外側から出土したもの。直径３㎝前後の棒状の製品で、端部が広がり、その部分に沈線による刻みがつけられている。破片であるため、長さは不明。篦等で磨かれており、やや光沢がある。黒褐色を呈する。

④石製品

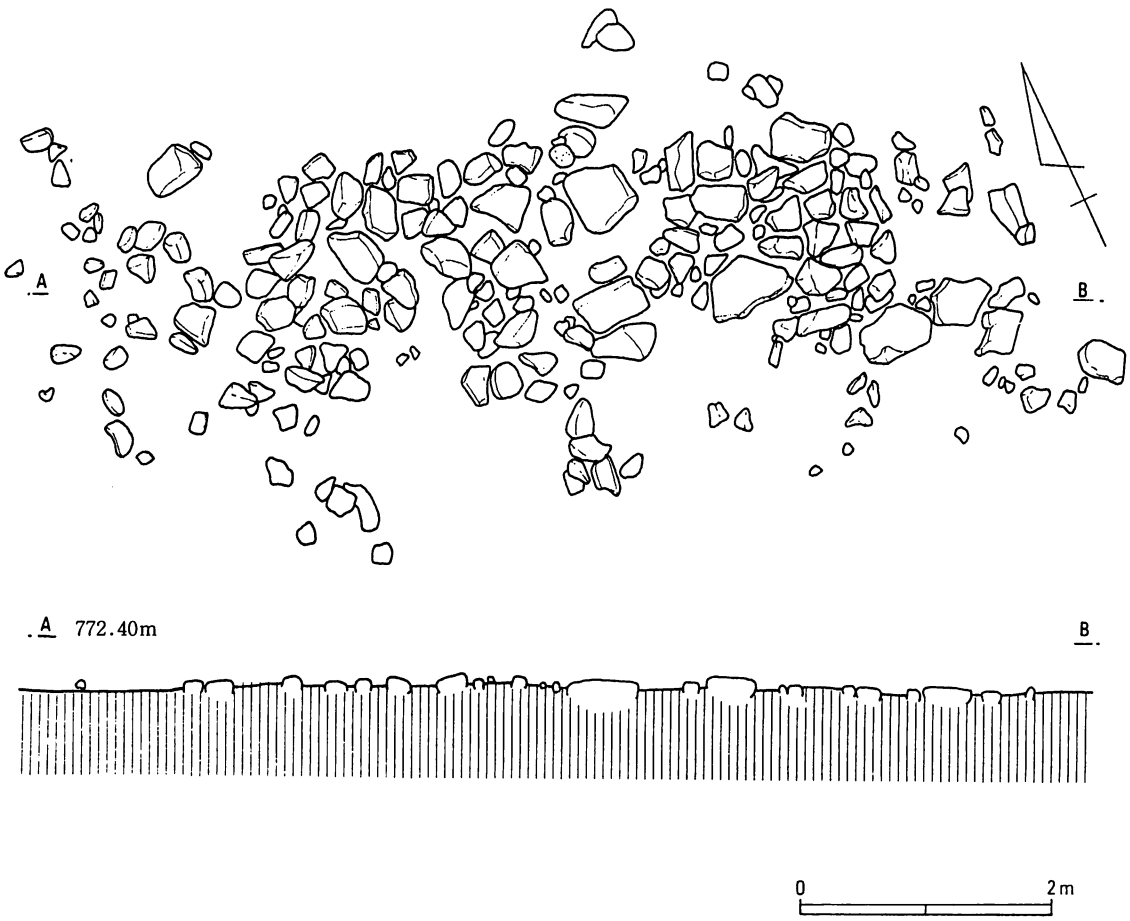
(1) 石棒（第144図２～５）　２は基部の破片。側面および端部に小さい窪みが認められる。石質はデイサイト。３は完形品。４・５とともに配石の北隅に近い箇所から横倒しの状態で出土。頭部に小さい窪みがある。石質は輝石安山岩。４は頭部および基部の両端を欠いている。しかし欠損部は磨かれており、角張ってはいない。石質は輝石安山岩。５は長さ51㎝近い大型の石棒である。３と並んで、横倒しの状態で出土したもので、出土時は頭部が割れていたが接合したものである。石質は輝石安山岩。

なお、１は５の基部付近に重なって出土した磨石である。隅円の長方体をした長さ17㎝程の大型品である。石質は輝石安山岩。

(2) 独鈷石（第145図３）　二つの石棒（第144図３・４）の間から出土した。片方の先端を欠く。石質は輝石安山岩。

第３号配石（第76図）

発掘区のほぼ中央部、Ｄ・Ｅ－10区に位置する。西４ｍには第２号配石がある。東西約7.5m南北約2.5m



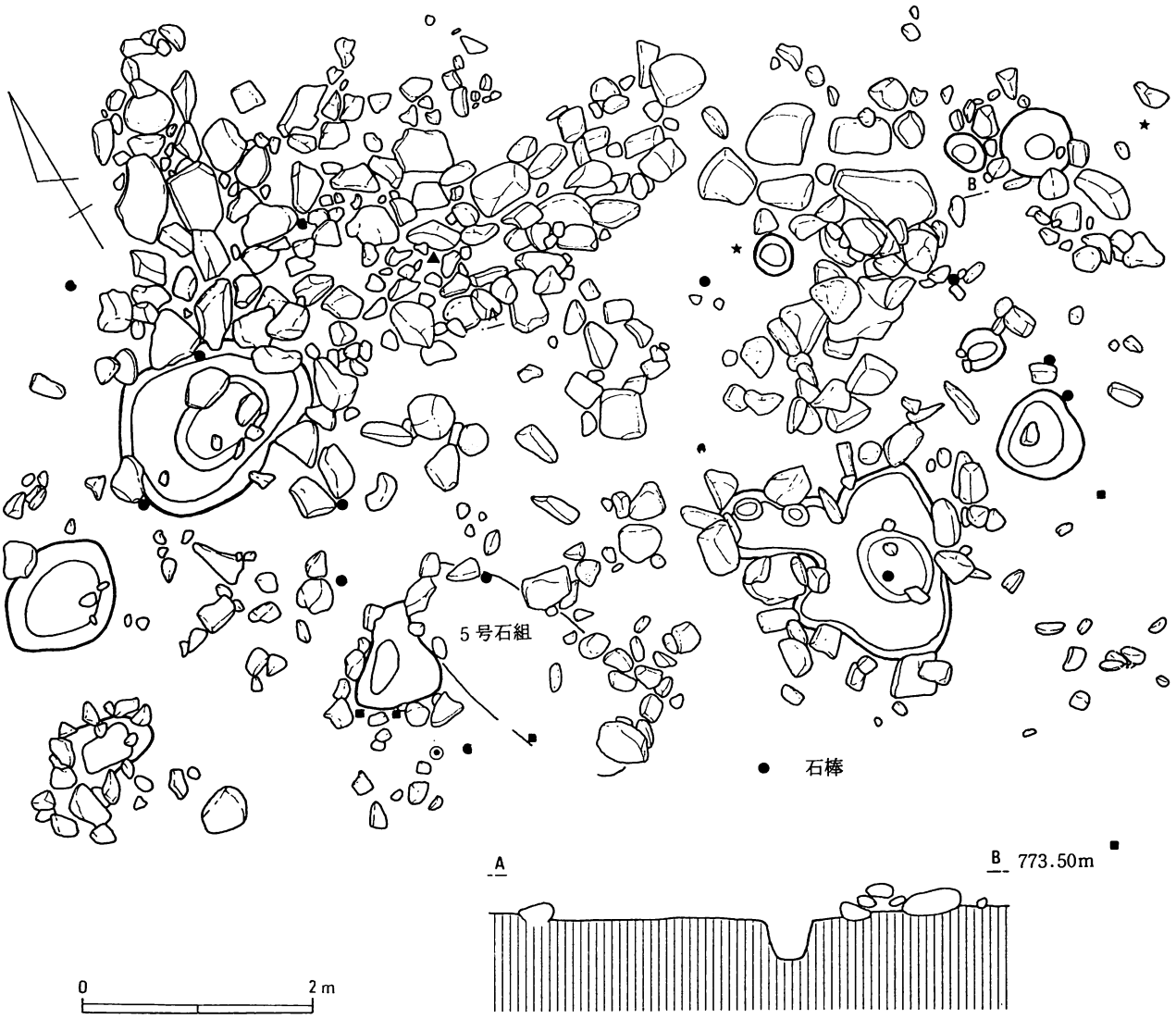
第76図　第３号配石（１／60）

の細長い配石である。偏平な石が敷かれているが、周辺にいくと配列がやや乱れている。中央部には大きめの石が用いられており、その中には70㎝×50㎝を測る平石も含まれている。全体に配石上面はほぼ平坦である。

出土土器（第74図H0301）（第75図14～22）

H0301　椀状の浅鉢形土器である。部分的に口縁部を欠損する。体部上部に浮線文が施される。この浮線文は楕円状の連続文を基調としており、部分的に網状をなしている。赤褐色を呈し、器面は磨滅したようにザラつきがある。

第75図14は波状口縁の深鉢形土器破片。地文縄文で平行沈線が走る。15も深鉢形土器の胴部破片であろう。磨消し縄文がみられる。この2点は晩期前葉の土器であろう。16には太い沈線1条が横走する。17～21は口縁部破片で、削り取りにより平行隆線が表現されている。19・20は浅鉢形土器と思われ、特に19は皿状の器



第77図　第4号配石（1／60）

形である。他は深鉢形土器。22は深鉢形土器の頸部から肩部にかけての破片。肩部に稜がつく。以上は晩期後半の土器である。

第４号配石（第77図）

発掘区の北東端に近い、Ｄ・Ｃ－12区に位置する。第４号配石の東約12ｍにあるが、この付近からは石組遺構が多く発見されている。配石としてのまとまりは不明瞭であるが、およそ９ｍ×６ｍの範囲に石が散乱している。特に、北側から東側にかけて半月形に石が密集している。大形の石棒（第144図６）や丸石等がみられた。南側には第５号石組があり、本来本址の中にもいくつかの石組状の遺構があった可能性もあるが、乱れており定かではない。多くの土器を始めとして、土偶・耳飾り等の土製品、石剣・石棒等の石製品が出土した。

出土土器（第74図H0401）（第75図23～42）

H0401　椀状をした小型の浅鉢形土器。指頭痕が顕著である。口縁の一部を欠く以外、ほぼ完形。色調は明るい褐色。

第75図23・24は磨消し縄文の施された深鉢形土器。加曽利Ｂ１式である。25は羽状沈線の土器で、口唇部には刻目が連続する。加曽利Ｂ２式土器。26も羽状沈線の土器であるが、沈線は太く短い。27～30は「く」の字形に屈折する深鉢形土器の口縁部破片と思われるものである。いずれも口縁と平行に沈線が走っているが、29・30には地文として縄文が施されている。27では斜沈線、28には浅い刻目が連続している。30では屈折部に楕円状の「コブ」が張り付けられている。31は波状口縁の深鉢形土器であろう。口縁は「く」字形に屈折しており、縄文と沈線がつけられている。34は口縁部に円形の「コブ」がつけられ、その両側には沈線で区画された刺突文帯がある。35は浅鉢形土器であろう。「く」字形に短く屈折する口縁部には、凹線状の沈線が走り、その上下には縄文が施される。36は対弧文の連続する土器。浅鉢形土器であろうか。42には凹線状の浅い沈線が２本横走している。以上の土器は後期後半に位置づけられるものであろう。

32・33・37～40は晩期前半の土器である。32・33は同一個体であろう。口縁部に、刺突文が２列連続する半月状の隆帯が張り付けられ、以下に逆「Ｓ」字状の沈線や、入り組み弧線などが施されている。37は入り組み弧線文のみられる土器で、清水天王山式である。39は浅鉢形土器であろう。入り組み「鍵の手」文がみられるが、２条１単位の鍵の手である。口唇に小突起がみられる。40は折り返し口縁の深鉢形土器で、口縁部には縄文が施される。

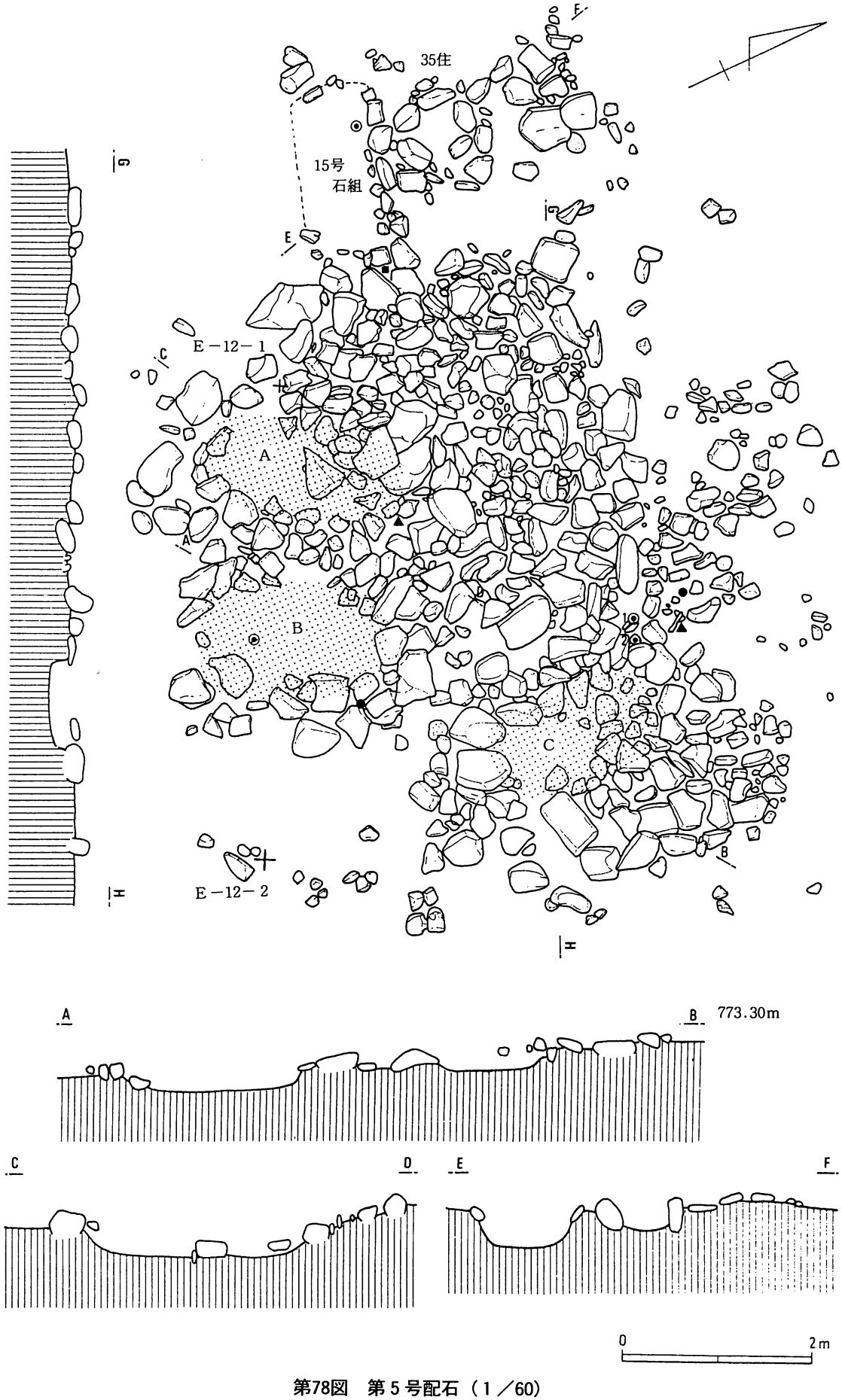
41は晩期中葉、大洞Ｃ１式併行とみられる壷形土器である。

第５号配石（第78図～第80図）

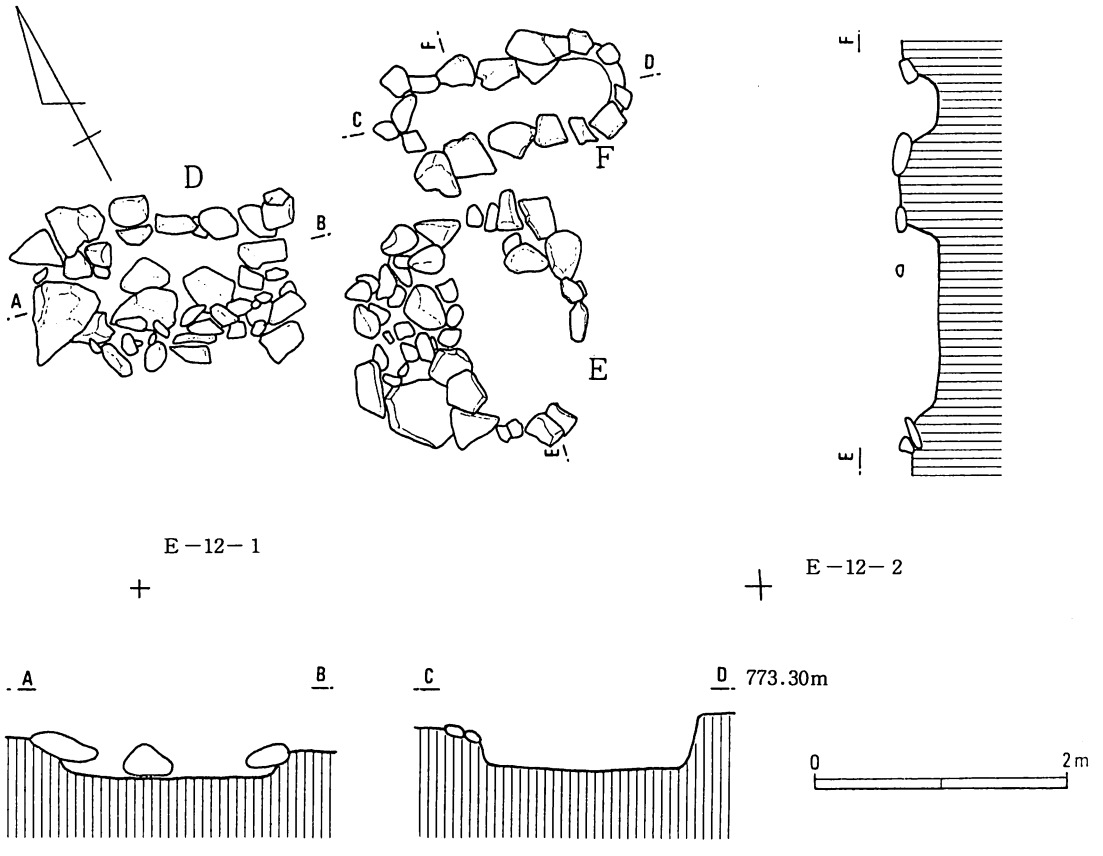
発掘区の北端、Ｅ－12区にて発見された。第35号住居址を切っており、第15号石組に接している。東西８ｍ、南北６ｍの範囲に石が密集している。配石は石が積重なっており、黒色土を取除いた段階で、第78図に見るように、Ａ・Ｂ・Ｃの三箇所に石のない、空間が認められた。Ａは約180×80㎝の長円形で、長軸上の北端の石群中から、完全な形状の石剣（第140図２）が出土した。Ｂは約190×100㎝の規模である。Ｃは約170×70㎝を測り、北側の石群中から完形の壷（第81図H0501）および皿形土器（第81図H0503）が出土した。さらに、これらの土器から約40㎝離れた北側から、小形の磨製石斧（第124図22）を枕にした状態で、石剣（第140図３）が発見された。これ等のことから、Ａ～Ｃのような空間部は、石棺状の埋葬施設の可能性がある。また、これら上部の石群を除去したところ、下部にもＤ・Ｅ・Ｆの石組状の落込みが確認できた。ここからは特に遺物は見られなかった。以上から本配石遺構は、埋葬施設の集合したものと考えられる。出土土器からみて、本址の時期は晩期前葉である。なお、Ａの内部からは焼けた鹿角片が少量出土した。

出土土器（第81図、第82図）

［壷形土器］　H0501　小型の壷である。丸底で、肩部に末端のかみ合う羊歯状文が施されている。底部付近の器壁が僅かに剝落している他は、ほぼ完形である。色調は、淡い褐色から黒褐色を呈する。H0504



第78図　第５号配石（１／60）



第79図　第５号配石下部（１／60）

小型の壷形土器。配石の西側から出土しているが、この箇所は第15号石組の上部に当たることから、石組に伴うものかもしれない。口縁部と肩部に縄文が施される。肩部にはさらに、たすき状の沈線が入り組んでいる。頸部と、胴部の屈折部には浅い沈線が横走する。完形品で、色調は淡い褐色。H0506は壷形土器と見られる胴下半部の破片。内外面とも丁寧に調整されている。色調赤褐色。

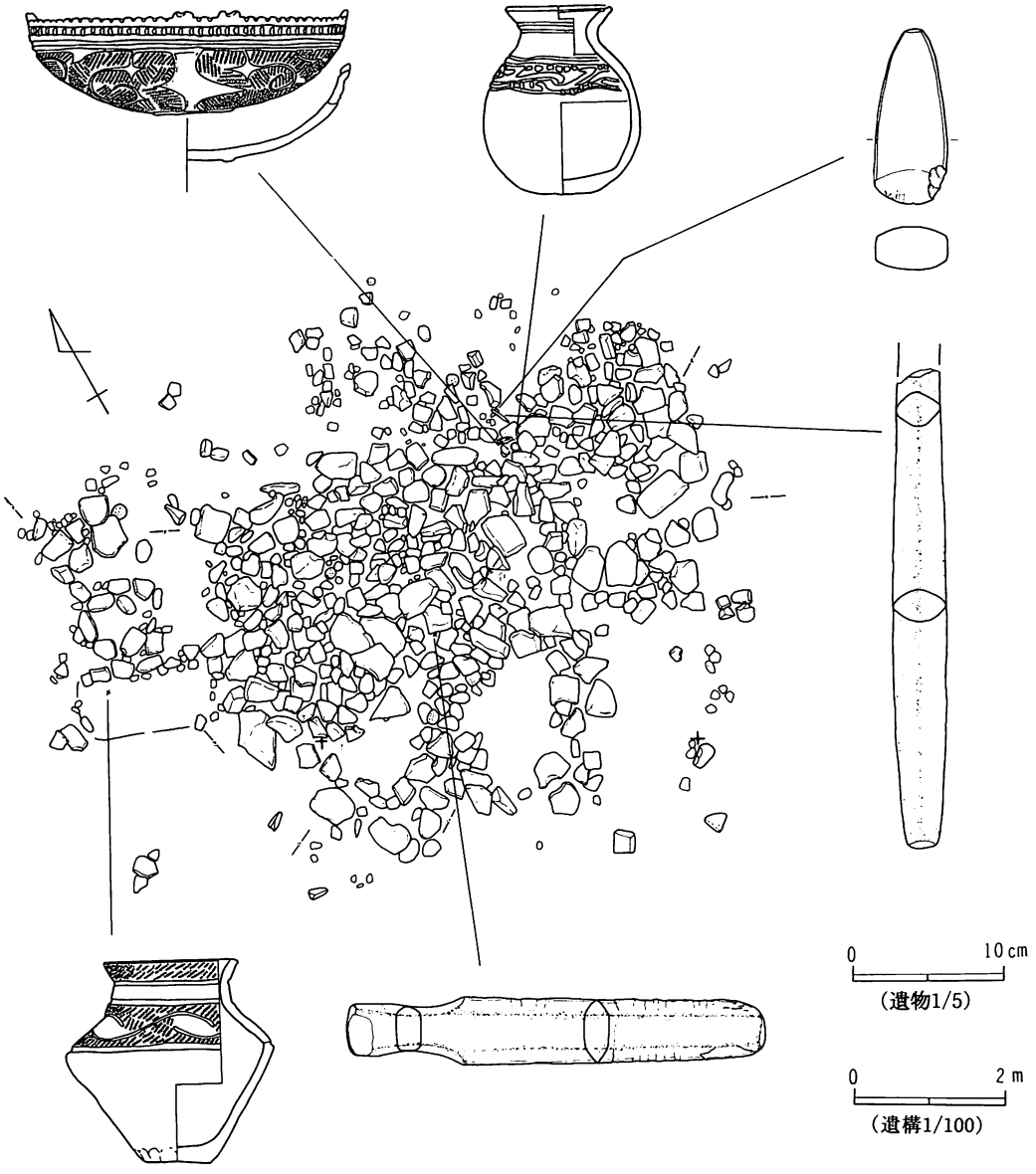
［浅鉢形土器・皿形土器］　H0502は皿状の土器。口縁の一部を欠く。口縁直下に沈線が２条めぐる。底部は円形に窪んでいる。器面はザラつきがあり、淡い褐色をベースに黒色斑が多い。H0503も皿状の土器である。口縁の一部を欠損する以外はほぼ完形。口縁部には２個１対の小突起が４単位つけられ、その直下には刻目が連続する。体部には、削り出し手法による磨消縄文帯が展開している。縄文帯の間には、三叉文が削り出されている。底部は楕円状に窪んでいる。色調茶褐色。H0505は浅鉢形土器である。頸から口縁部にかけて「く」字形に屈折する。口縁部に縄文が施されている。底は丸底。H0511は４分の一程の破片。浅く、皿状の器形。小突起と貫通孔がみられ、内面には沈線１条がめぐる。色調赤褐色で、よく磨かれている。

［注口土器］　H0508は３分の一程の破片。やや扁球気味の胴部で、最大径の部位に瘤状の突起がみられる。口縁は短く、肩部との境に円形刺突文の連続する、低い隆帯がめぐる。内面上部には輪積み痕が著しい。灰褐色を呈し、ザラつきがある。0509は小型の注口土器。上半分を欠く。淡い褐色で、器面がザラついている。

［台付土器］　H0510は台付の浅鉢形土器。脚部の一部および鉢部の３分の一程を欠く。器面は荒れている。内面黒色、外面淡い褐色を呈する。

［深鉢形土器］　H0507は深鉢形土器の底部である。分厚く、やや丸味のある底部で、内面には炭化物の付着が著しい。

H0512～0514は配石の下層から出土したものである。H0512は「く」の字形口縁の深鉢形土器。頸部以下

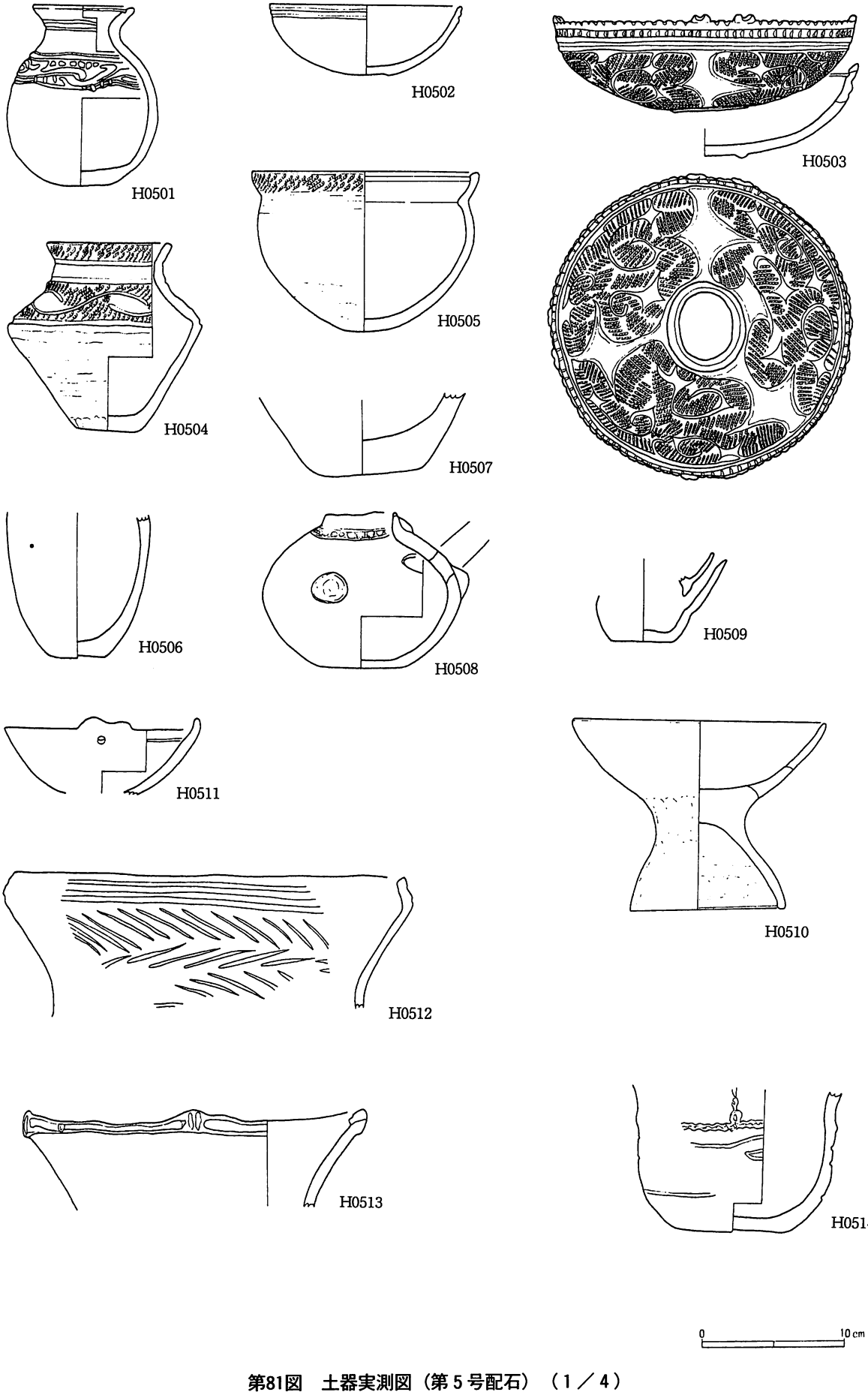


第80図　第５配石と出土遺物（１／５、１／100）

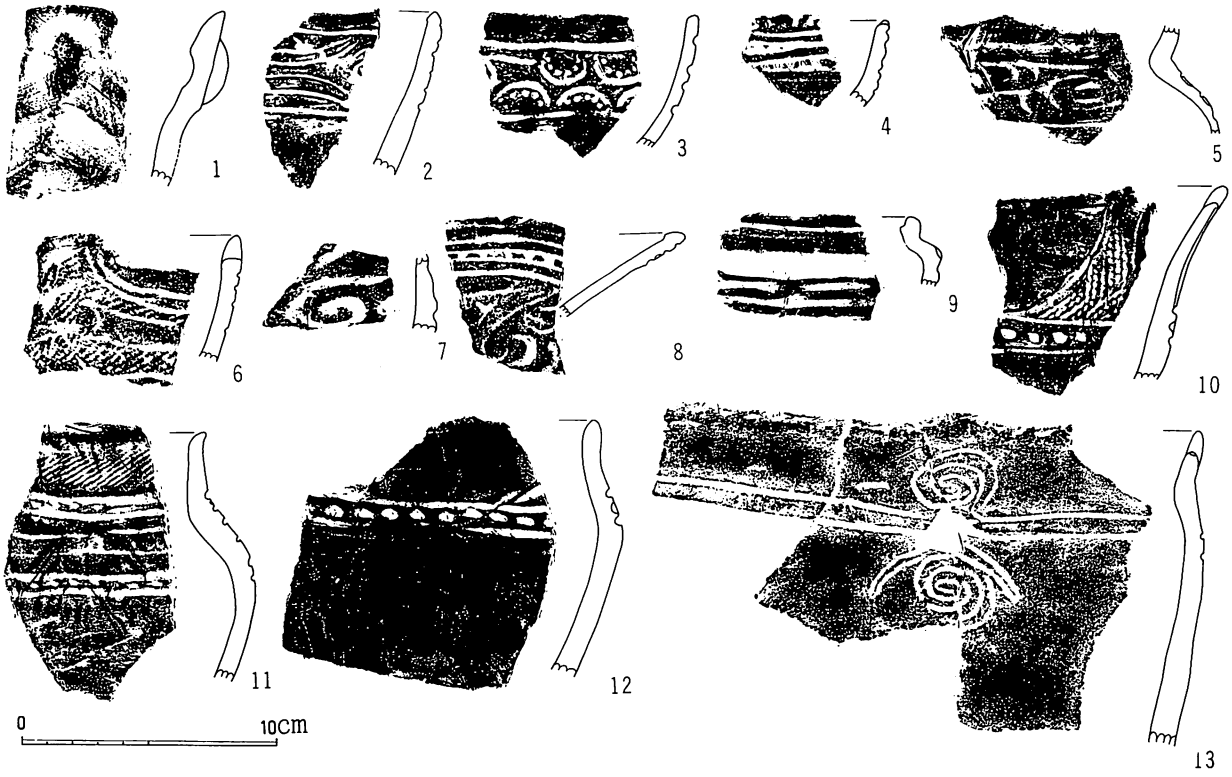
に羽状沈線がつけられている。後期後葉の土器である。H0513、H0514は後期前葉の土器。

第82図１～13は破片である。１は波状口縁深鉢形土器の波頂部破片で、隆起帯縄文のみられる安行１式土器。２・３は背中合わせの弧文が連続する、後期後葉から晩期初頭の土器である。４・５は羊歯状文の施された土器、３は鉢形土器、４は赤彩の残る壷である。６～８は磨消縄文がみられる土器で、６は深鉢形土器、８は浅鉢ないし皿形の土器である。６は晩期前葉、７・８は中葉に位置づけられよう。９は浅鉢形土器であろうか。屈折部に削り出しによる楕円状連続文がめぐっている。晩期後半であろう。10～12は肩部に刺突文の連続する土器。10は深鉢形土器の口縁部破片。小突起があり、その部分から下に縄文帯がつけられる。肩部には刺突文が連続する。11は壷で口縁部に縄文があり、以下に沈線や刺突文がみられる。12は広口壷とみられる器形の土器で、肩部に平行沈線と刺突文がつけられている。25はゆるい「く」の字形口縁の深鉢形土器。ゆるやかな山形状の突起があり、口唇には刻目が連続する。肩部に沈線が２条走り、その上下に渦巻文が連なっている。色調は黄土色を呈し、器面はザラつきがある。

以上は配石の石の間から出土したものであるが、特に３・10・12は石組Ｂから、８は石組Ｃから出土したものである。



第81図　土器実測図（第５号配石）（１／４）



第82図　土器拓本（第５号配石）（１／３）

第３節　集石遺構

第１号集石（第84図）

Ｄ－８区、１号配石の北約１ｍに位置する。黒褐色土中、南北3.2m、東西2.0mの範囲に石が集中して発見された。大きめの石により構成される北側部分と、小さめの石から成る南側部分とから構成されている。石群中には、石皿・石皿状に磨滅した平石・蜂の巣石・石棒（第142図２）・独鈷石（第145図２）が含まれていた。土器は、中期の土器の把手ばかり４個が出土した。これらの遺物の大半は、南側部分から出土している。

出土土器（第85図）１・３は藤内式ないし井戸尻式期、２は曽利式期、４は井戸尻式期ないし曽利式期の把手と思われるものである。

第４節　石組遺構

第１号石組（第83図）

Ｂ・Ｃ－８区、第８号住居址の東２ｍに位置し、第２号石組とともに発見された。Ｃ区からＢ区にかけては、尾根の高い部分にあたり、撹乱の激しい箇所である。従って、本遺構も残存状況は余り良くなく、南辺と北辺の石列の一部から、確認できたものである。東西2.0m、南北1.4m程の長方形を呈し、黄褐色土への掘り込みは22㎝である。覆土上部から土器片が少量出土した。第86図１・２は堀之内１式土器。３・４は晩期前葉の土器である。

第２号石組（第83図）

Ｃ－８区、第１号石組の北に隣接して発見された。これも撹乱が激しく、僅かに東辺と北辺の一部が確認

されたにすぎない。1.9×1.3mの長方形である。深さは30㎝。検出面上部から深鉢形土器の大破片をはじめ土器片が出土した。第85図５～７は無文の深鉢形土器で、いずれも４～５分の一程の破片。６・７は輪積痕が顕著である。第86図５～８は晩期前半の土器である。特に７・８は「鍵の手」文の土器。

第３号石組（第83図）

発掘区のほぼ中央部、Ｄ－10区にて黒褐色土面を調査中、石列が検出され、本遺構の所在が確認された。第３号配石の北２ｍに位置する。主軸がほぼ南北を向く長円形プランで、塊状の石がめぐっている。規模は1.6×0.75m。深さ38㎝で、黒褐色土を掘り込んでいる。覆土上部から土器片が少量出土した。第86図９は後期、10は晩期の土器であろう。

第４号石組（第83図）

Ｄ－12区に位置する。この12・13区には第４号から第16号までの12基（第８号は欠番）が発見されており、石組遺構が集中する傾向が認められる。特に第４号は北で第５号と接し、西２ｍに第６号がある。また、第33号住居址を切って作られており、南西側で住居の炉と接している。多少乱れてはいるが、長方形ないし楕円状に石がめぐっており、その規模は1.7×0.9mである。深さ38㎝と、黒褐色土を掘り込んで構築されている。主軸の方向はＮ－63°－Ｅ。覆土上面から少量の土器片が出土した。図示した４点（第86図11～14）はいずれも晩期前半の土器と思われる。11～13は浅鉢形土器、14は細かい波状口縁の深鉢形土器である。

第５号石組（第83図）

Ｄ－12区の第４号石組北側に位置する。塊状の石が散乱するが、まばらながら長円形状に並ぶ傾向が認められる。その規模は長軸2.5m、短軸1.1m程である。石の上面からの深さは約30㎝を測る。西辺の南よりから土製耳飾りが１点出土した。覆土中から土器破片少量が出土した。第86図15は堀之内２式土器、16・17は晩期前半の土器。特に16は「鍵の手」文が施されている。17には縄文帯がみられるが、「鍵の手」文土器の一群と思われる。

第６号石組（第83図）

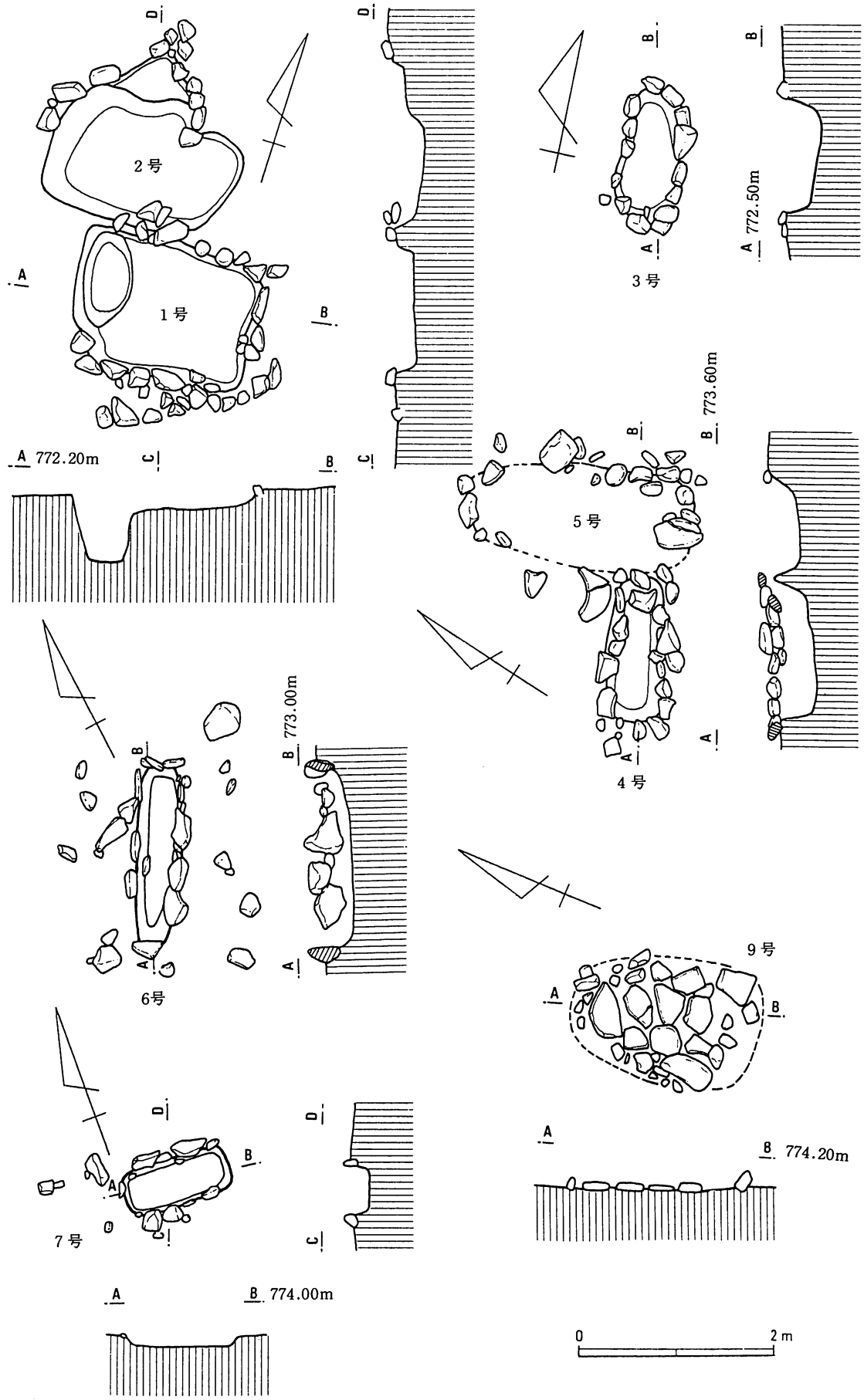
Ｄ－12区の南端で発見された。東約２ｍには第４号石組がある。長円形状に黒褐色土を掘り込んで作られており、上面に石がめぐる。石は連続して並んではおらず、部分的に抜かれている。2.0×0.7m、深さ34㎝の規模である。主軸の方向は、Ｎ－31°－Ｅ。覆土上面から土器片が少量出土した。第86図18は加曽利Ｂ２式、19は堀之内１式土器である。

第７号石組（第83図）

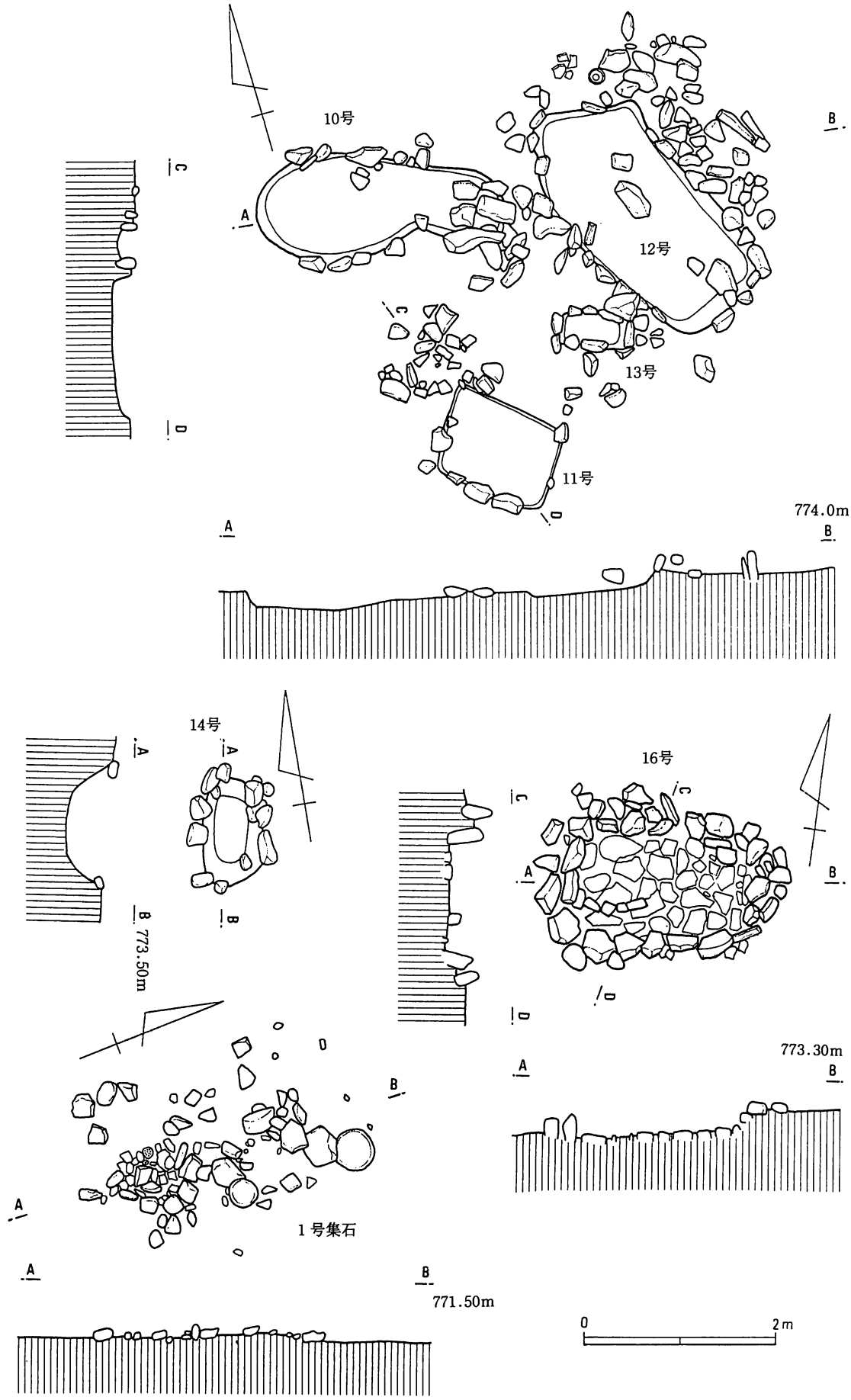
Ｃ－13区に位置する。付近には第31，32，37号住居址があるが、特に第31号住居址とは重なり合っている。黒褐色土を長方形に掘り込み、上面に石をめぐらしている。但し、部分的に石が抜かれた箇所もある。1.15×0.7m、深さ18㎝の規模で、主軸の方向はＮ－93°－Ｅとほぼ東西方向である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、第31号住居址よりも新しい。覆土上層から土器片が若干出土。第86図20は堀之内１式土器。21は磨消縄文帯と小さい瘤状の張り付けのみられる土器。後期後半に位置づけられよう。

第９号石組（第83図）

Ｄ－12区で発見された。第４号配石の西２ｍに位置し、北側には第５～６号土壙がある。撹乱等が激しく、特に側石は原形をとどめていない。しかし、本址は底面に石が敷かれており、この部分はよく残っていた。この底石には、長さ40～60㎝、幅30㎝程の大きめな平石が用いられている。1.95×1.3m程の規模であろう。検出面上から土器片が僅かに出土した。第86図26は後期初頭の土器、27・28は加曽利Ｂ式土器である。



第83図　石組遺構（第1号～7号、9号）（1／60）



第84図　石組遺構（第10号～16号）・集石遺構（第１号）（１／60）

第10号石組（第84図）

Ｃ－13区に位置する。この区域からは、第10～13号石組が近接して発見されている。また近くには第34号住居址があり、位置関係からこれら石組は第34号住居址よりも新しい時期のものとみられる。本石組の残存状況は悪く、長円形の掘り込みと、それを取巻くいくつかの石が確認された程度である。最大箇所で計測すると、2.5×1.2m。深さ22㎝の規模である。土製耳飾り２個が出土した。

覆土上面を中心に土器片が少量出土。第86図29～33に図示したとおり、29は堀之内１式、30は加曽利Ｂ１式土器、31・32は後期後半の土器であろう。33は浅鉢形土器で、尾の長い三叉文がみられる晩期前半の土器。

第11号石組（第84図）

第34号住居の炉に接して発見された。残存状況は悪く、長方形の掘り込みと南辺の石列とが確認された程度である。1.24×1.1m、深さ20㎝を測る。主軸の方向はＮ－47°－Ｗである。出土遺物は、覆土中から土器片が少量出土した程度。第86図34は中期後半、35～37は後期前半の土器であろう。38は浅鉢形土器と思われ、三叉文がみられるとともに赤彩も残っている。

第12号石組（第84図）

第10号石組の東50㎝に位置する。付近には石が多く散乱している。これらの石の配列には、際立った規則性は認められないが、長方形の掘り込みが発見されたことから、石組遺構とみなしたものである。この掘り込みは、2.7×1.2m、深さ16㎝を測る。覆土中から土器片が出土している。第86図39～41はいずれも後期の土器であるが、特に39は東海地方と脈絡のある後期中葉の深鉢形土器であろう。

第13号石組（第84図）

第11号石組と第12号石組との間に位置する。88×46㎝と小型ながら縁石が四周する、残存状況良好な石組である。深さ50㎝余り、主軸の方向、Ｎ－69°－Ｗ。出土遺物なし。

第14号石組（第84図）

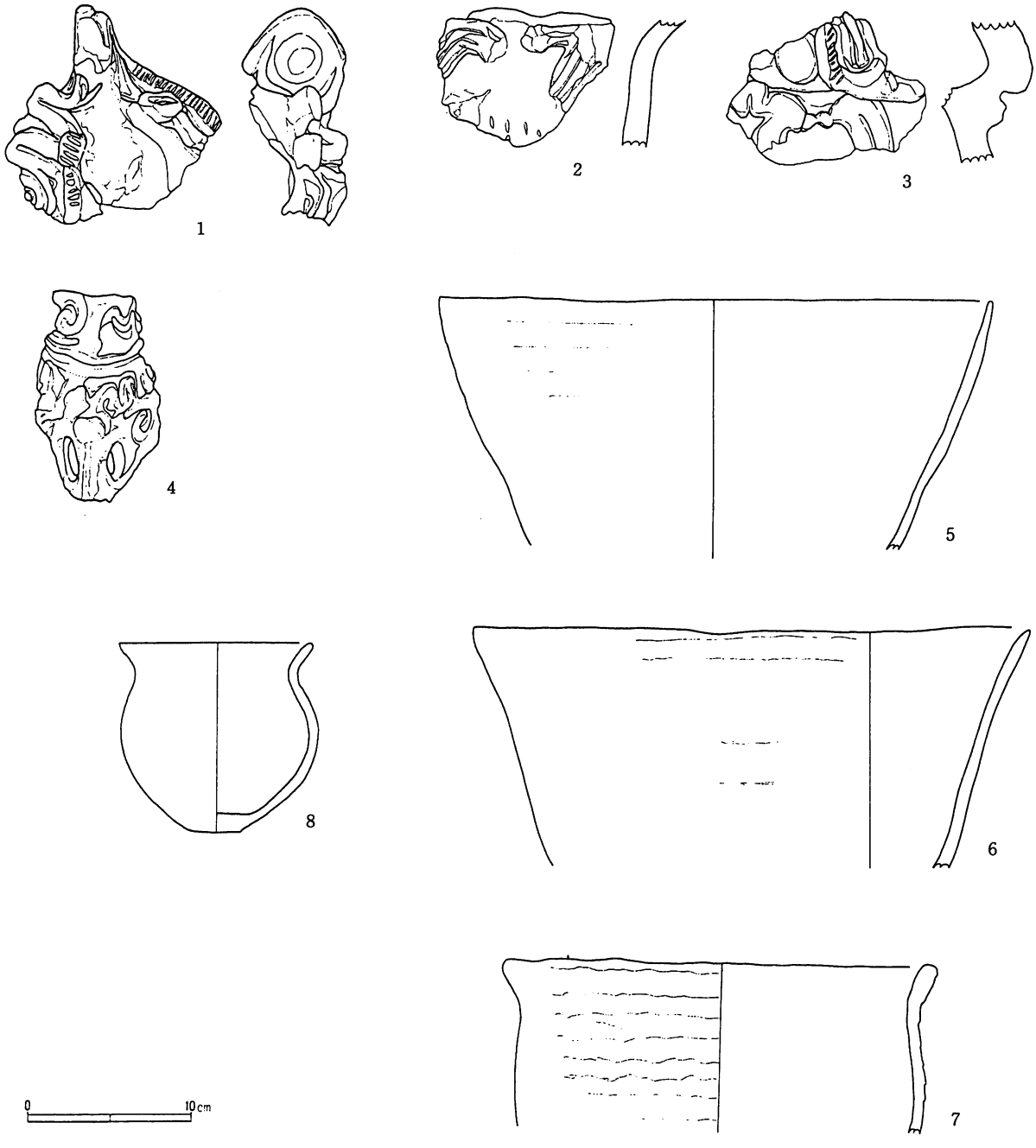
Ｅ－12区にて、第36号住居址の南西に接する位置に発見された。1.12×0.6m、深さ42㎝の掘り込みがあり、石がめぐっている。但し、南辺側の縁石は抜かれている。主軸の方向は、Ｎ－９°－Ｅとほぼ南北である。出土遺物は土器片である。第86図42～44は堀之内式の深鉢形土器、45は加曽利Ｂ１式の注口土器、46は加曽利Ｂ２式の深鉢形土器であろう。

第15号石組（第84図）

第５号配石の西、第35号住居址の南にそれぞれ接する、Ｆ－12区にて発見された。1.8×1.0mの長方形を呈し、南辺を除き石がめぐっている。深さは約50㎝を測る。主軸の方向は、Ｎ－71°－Ｗで、ほぼ東西方向にある。石組内部の北西側の覆土上部から、完形の壷形土器（第80図）（第81図H0504）が出土した。これについては、第５号配石の項で記述した。また遺構検出面上部からも土器片が少量出土している（第86図47～49）。

第16号石組（第84図）

発掘区の北隅、Ｆ－12区にて発見された。第15号石組の北西1.5mに位置する。長軸2.6m、短軸1.5mのやや胴の張った長方形を呈する。基本的には、側石を一列立てて並べ、その外側にも側石を支えるかのように、石が添えられている。底面には、平らな石が敷かれている。また、底面の中央やや南壁寄りに、長軸と平行に、石が一列、間仕切りのように並べられている。側石の上面から底石までの深さは32㎝程である。主軸の方向は、Ｎ－82°－Ｅとほぼ東西である。覆土中から小型の壷形土器が出土した。また、焼けた獣骨の



第85図　土器実測図（１～４　第１号集石、５～７　第２号石組、８　第16号石組）（１／４）

小片も出土している（表23）。

出土土器（第85図８）　小型の壷形土器。口縁部の大半を欠く。小さくやや突出気味の底部から、球形に立ち上がる器形。内外面とも磨かれているが、器面は荒れてザラつきがある。色調は淡い褐色。

他に覆土中から土器片が出土。第86図50～52は後期、53・54は晩期前葉の土器である。53は浅鉢形土器であろう。

［その他の出土土器］第86図22～25は当初第８号石組とした遺構の覆土から出土したものである。調査の結果、この遺構は第４号配石の一部であることが確認されたものである。23は加曽利Ｂ１式土器、22は胴部

第86図　土器拓本（1～4　第1号石組、5～8　第2号石組、9・10　第3号石組、11～14　第4号石組、15～17　第5号石組、18・19　第6号石組、20・21　第7号石組、26～28　第9号石組、29～33　第10号石組、34～38　第11号石組、39～41　第12号石組、42～46　第14号石組、47～49　第15号石組、50～54　第16号石組）（1／3）

に羽状沈線の施される後期後半の土器であろう。24は晩期前葉の浅鉢形土器であろう。25は三叉文と列点文のみられる深鉢形土器の口縁部破片。安行３ｃ式に比定されるものである。

第５節　土　　壙

第１号土壙（第87図）

Ｄ－３区に位置する。南西５ｍには第15号住居址がある。1.2×1.1mの円形を呈する。深さは最深部で1.26mを測る。西側の壁はややオーバーハングしている。底には石が積まれていた。

第２号土壙（第87図）

Ｂ－８区、第23号住居址の北側から、第２号から第４号の３基の土壙が発見された。第２号は第３号に隣接している。直径1.3m、深さ1.1mの円形で、ローム層に掘り込んである。覆土中から中期終末～後期初頭の土器片が多く出土した。図示した第88図１・２は微隆起線文のつけられた中期終末に位置付けられる深鉢形土器。３・４は後期初頭の土器である。

第３号土壙（第87図）

第２号土壙の南東に接している。1.6×1.0m、深さ32cmを測る長円形の土壙である。長軸上や周囲に小穴があるが、土壙との関係は不明。東壁際に石が４個ほど見られた。ローム層に掘り込まれている。

第４号土壙（第87図）

第３号土壙の南東約1.5mに位置する。1.2×1.05m、深さ55cmの円形土壙である。ローム層に掘り込まれている。

第５号土壙（第87図）

Ｄ・Ｅ－12区に第５～７号土壙がある。第５号土壙は第６号と第７号の中間に位置している。1.60×1.48mの略円形をした土壙である。内部は２段になっており、深さは70cm程である。覆土中に石が多かった。黒褐色土を掘り込んでつくられているが、底部はローム層に達している。覆土中から土器片が少量出土した。第88図５～８は加曽利Ｂ１式土器である。７は浅鉢形土器と思われ、口縁内面に刻目と沈線がめぐる。

第６号土壙（第87図）

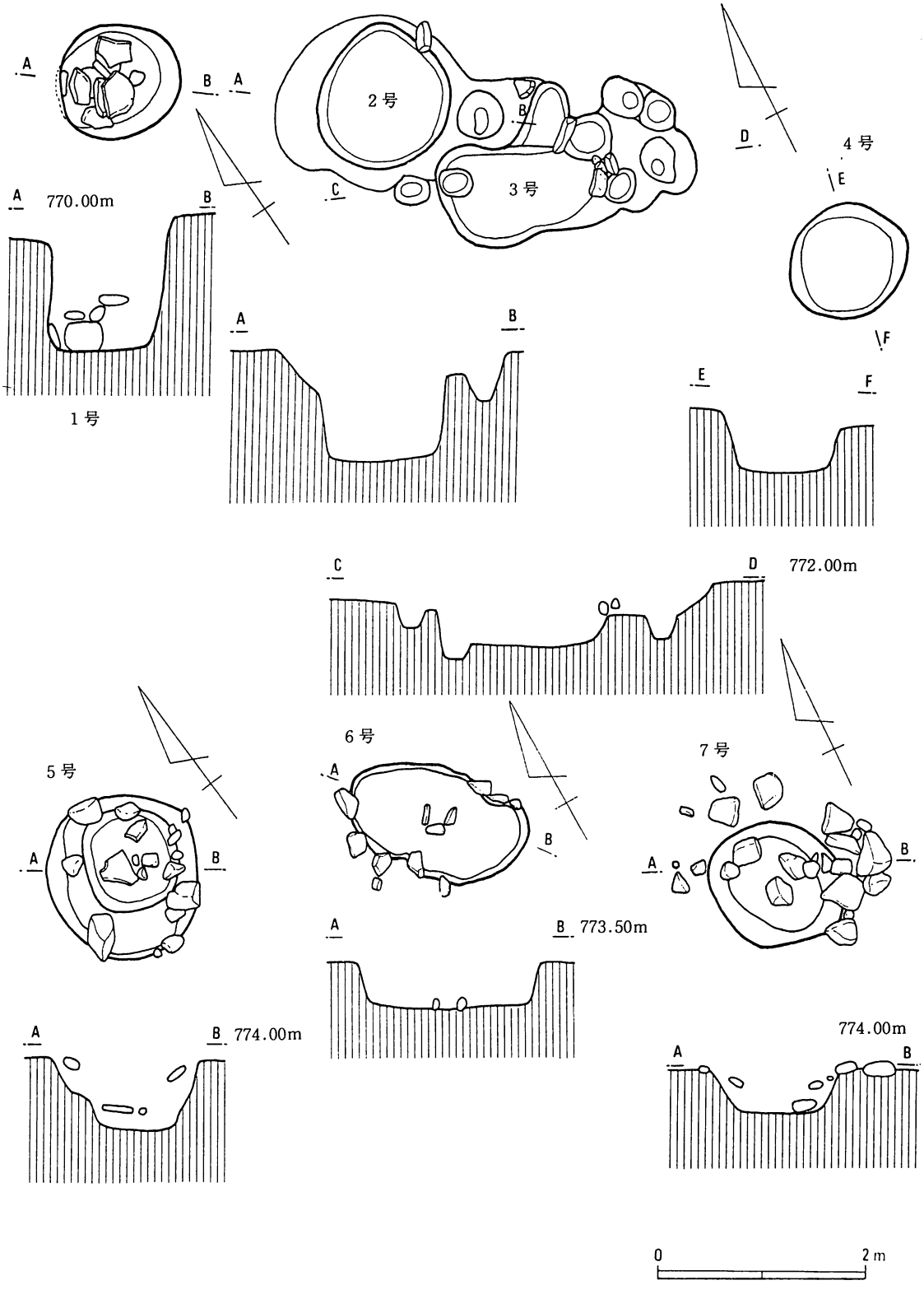
第５号土壙の西１ｍに位置する。1.78×1.00m、深さ45cmの長円形を呈した土壙である。黒褐色土に掘り込まれているが、底はローム層上面にあり平坦である。また、底部中央には小さな石が、「コ」の字形に置かれている。覆土中から土器片が少量出土。第88図９～11は堀之内式土器。特に11は丁寧に調整されており、よく磨かれている。

第７号土壙（第87図）

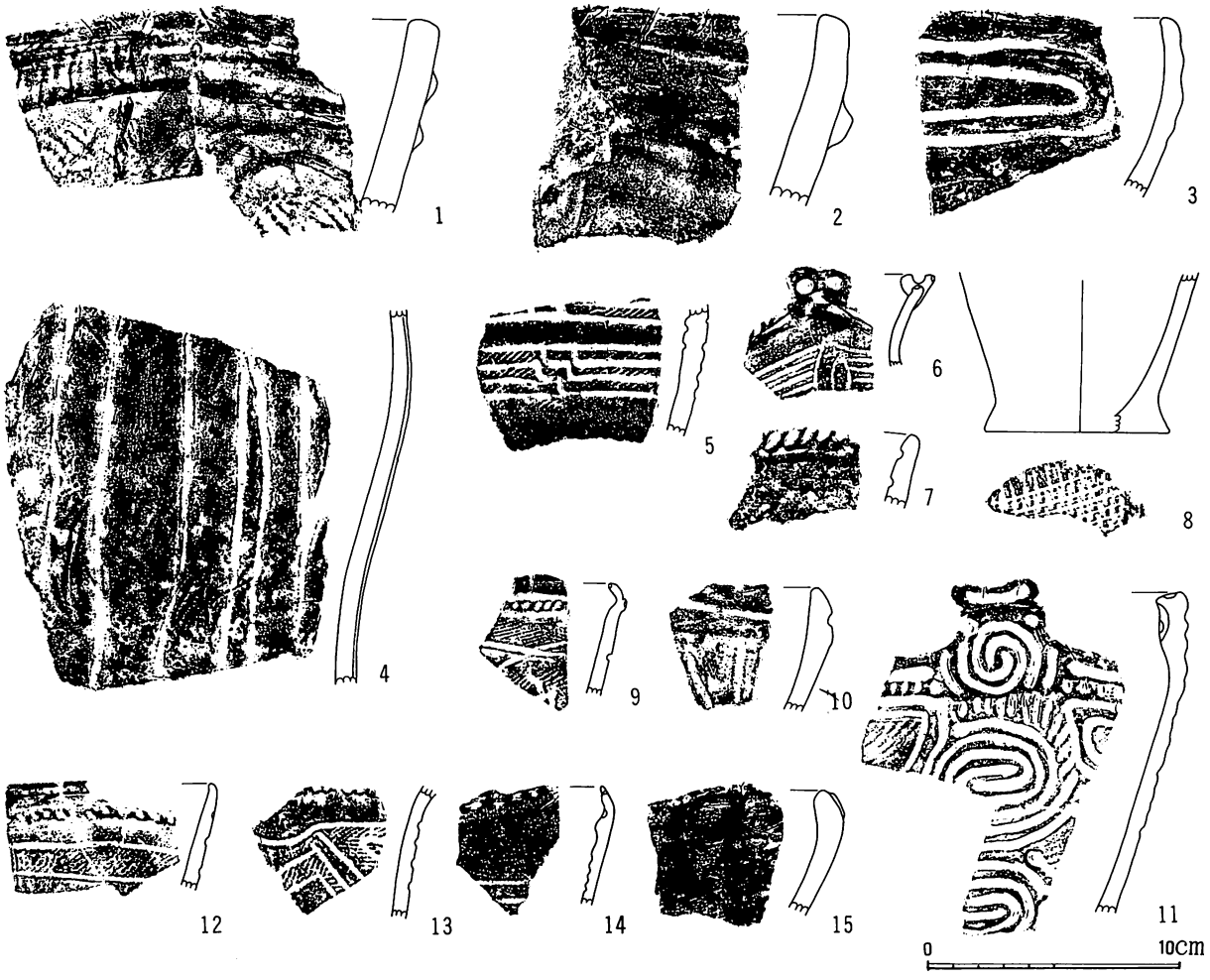
第５号土壙の東約1.5mに位置する。1.35×1.20m、深さ42cmのほぼ円形を呈している。付近および覆土中に石が多い。黒褐色土に掘り込まれている。覆土中から土器片が少量出土。第88図に図示した12・13は堀之内２式の深鉢形土器、14・15は加曽利Ｂ１式の深鉢形土器である。

第８号土壙（第87図）

Ｄ－11区に位置する。第29号住居址の床面を剝がし、柱穴等下部の施設を確認中に発見されたものである。第28号住居址の南東辺中央部の外側に位置している。住居南東辺の石列は、中央部にてやや内側に入り込ん


A
B
A
2号
B
3号
C
D
4号
E
A
770.00m
B
1号
A
B
E
F
F
C
D
772.00m
6号
A
B
7号
5号
A
B
A
B
A
B
773.50m
A
B
774.00m
774.00m
A
B
0
2m

第87図　土壙（1／60）



第88図　土器拓本(1～4　第２号土壙、5～8　第5号土壙、9～11　第6号土壙、12～15　第7号土壙)(1/3)

でいるが、ちょうどこの部分の外側の褐色土中に、土壙が掘り込まれていた。底部はローム層に達しており、しっかりしていた。1.38×1.30m、深さ60cmのほぼ円形をした土壙である。内部からは、イノシシの下顎骨を中心に、焼けた獣骨が大量に出土した。これらは、覆土上面から20cm程下がった箇所から、底部直上にいたるまで、焼土とともに出土したものである。量的に覆土中位以下に多い。但し、獣骨と焼土とが隙間なく純粋に詰まっていたのではなく、黒褐色土を含みながら堆積していたもので、これらが一度に焼かれ、埋設された可能性は少ないと思われる。壁の一部および底部付近が焼けていたことから、この場で焼かれたことも考えられる。

獣骨については、第Ⅵ章に詳しく述べられているが、イノシシの下顎骨138個体があり、年齢構成からは、１歳未満の幼獣骨が115個体（オス54、メス61）、３歳以上の成獣骨が23個体（オス14、メス９）とのことである。

本土壙の時期については、伴出土器がないため断定できない。また、掘り込み面についても、黒褐色土中にあることから、正確な面をとらえることができなかった。一方、第29号住居址は晩期後半前葉頃のものと考えられる。この住居の床を剝がしている段階で、土壙が確認されたことからすると、上限を晩期中葉に置くことも可能であろう。しかし、第29号住居址の南東辺中央部の石列が、内側に入り込んでいるように見えるのは、もう少し幅広くあった石列が、土壙により切られてしまった結果と考えた方が良さそうである。そうした場合、晩期後半の時期とすることができよう。この付近のグリッド出土の土器については晩期後半頃のものが多く、参考としたい。

第６節　遺構外出土の土器　（第89図～第86図）

遺構外から出土した土器は非常に多く、30㎝×46㎝×25㎝の収納箱で150箱余りに達している。これらの時期については、第１群土器（前期初頭）、第２群土器（中期中葉～中期後葉）も少量認められるものの、主体をなすのは第３群から第８群に分類した後期・晩期の土器である。これらの資料については、本来拓本として報告すべきものであるが、紙面の都合上、第３群以降の実測可能なものに限り今回の報告書に掲載した。出土資料の大部分を占める破片については、機会を改めて報告することにしたい。

以下の説明について、土器番号に続く（　）内は、出土グリッド名を表す。

後期の土器

第３群土器（後期前葉の土器）

第89図１（Ｆ－12－４）は深鉢形土器の４分の一程の破片。口縁部直下に刻目の連続する隆帯がめぐり、胴部に磨消し縄文帯のような、沈線がつけられている。堀之内２式土器であろう。２（Ｂ－３－１）は大型の深鉢形土器であるが、３分の一程の破片である。口縁や胴部に直線的な隆帯がつけられている。口縁部や隆帯の接続部には円形刺突文がみられる。３（Ｅ－３－１）は鉢形土器３分の一破片。口縁部に「逆Ｓ」字状の隆帯がつけられ、最大径のある屈折部には縄文が押し付けられている。茶褐色を呈する。４（Ｅ－12－１）も鉢形土器とみられる、上半部を欠く土器。屈折部に刻目の連続する隆帯がめぐる。この隆帯はさらに弧を描いて上部にのびている。２～４は堀之内１式に比定できよう。

第４群土器（後期中葉の土器）

第89図５（Ｅ－３－３）および７（Ｅ－４－１）は浅鉢形土器の破片。５は椀状で磨消し縄文が施されるが、７では縄文ではなく羽状沈線がつけられている。６（Ｅ－10－１）は注口土器の破片。８（Ｄ－４－１）・９（Ｅ－４）・10（Ｅ－４－１）は深鉢形土器破片。８は格子目状沈線、９は羽状沈線の土器。10は口縁部に縄文帯がめぐり、以下に弧状沈線が連続する。胴部には縦方向に沈線が走る。

６は加曽利Ｂ１式、５・８は加曽利Ｂ２式、10は加曽利Ｂ２新～３式であろう。

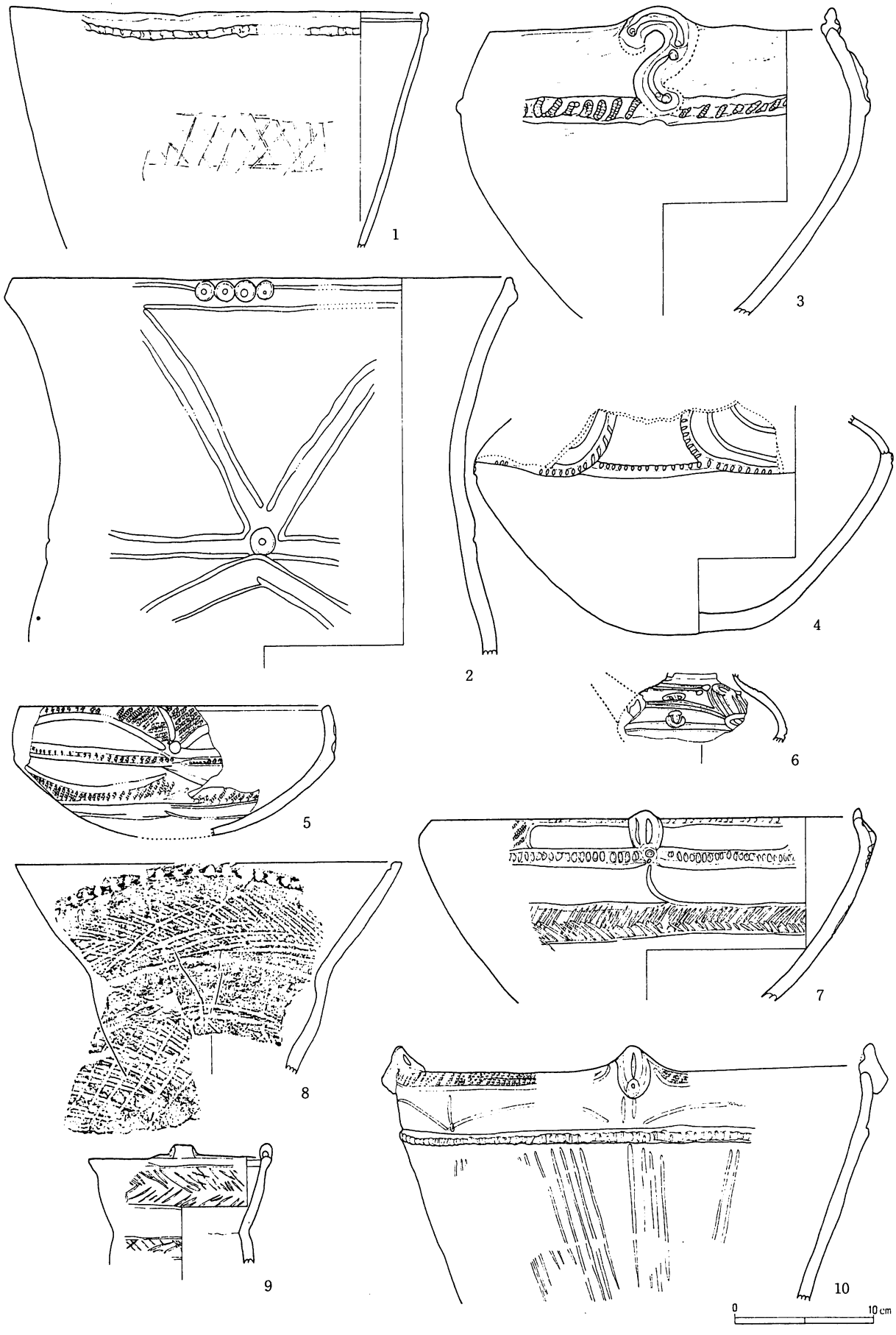
第５群土器（後期後葉の土器）

第90図11～13は羽状沈線の施される土器。11（Ｅ－４）は深鉢形土器の口縁部破片。口縁部には半月状の張り付け文が背中合わせにつけられる。胴部に羽状沈線。12（Ｅ－10－３）も平口縁深鉢形土器破片。「く」の字形口縁で、縄文が施される。胴部には羽状沈線が連続する。13（Ｅ－４－１）は波状口縁の深鉢形土器。稲妻状沈線にちかい状況の羽状沈線がみられる。波谷部には瘤状の張り付けがある。

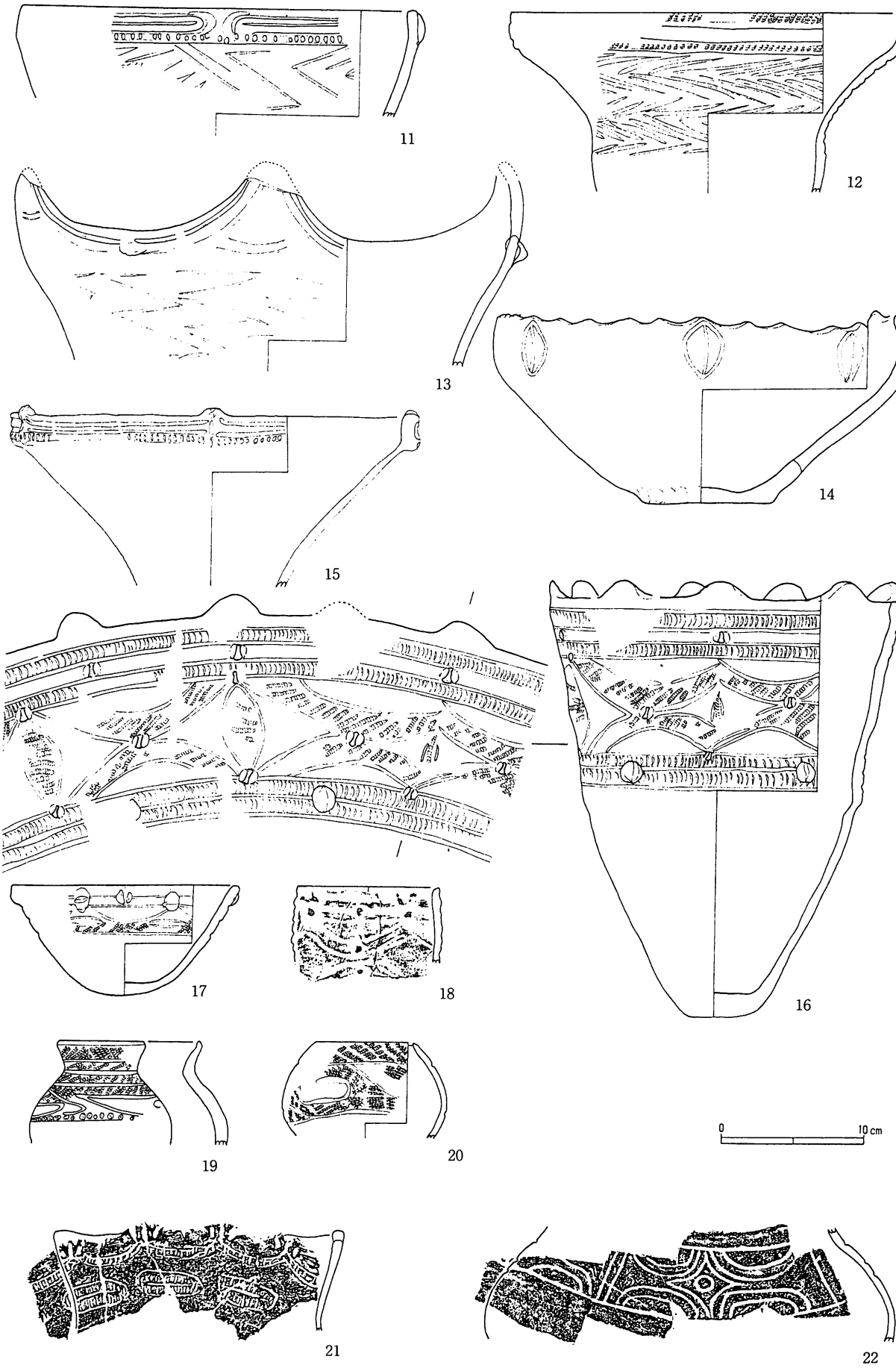
14（Ｅ－４－１）は浅鉢形土器。細かい波状口縁の土器で、体部には沈線により楕円状の文様が描かれている。15（Ｃ－６－３）も浅鉢形土器と思われ、小突起が４単位つけられている。文様は口縁部に限られ、平行沈線と刻目とで装飾されている。

16～18は「コブ」が張り付けられる土器である。16（Ｄ－６－２）は深鉢形土器で、口縁部には８個の突起がみられ、以下連続刻目文帯・対弧文帯・連続刻目文帯と続いている。下位の刻目文帯には、縦にスリットの入った大きめの円形瘤が張り付けられている。上位の刻目文帯および対弧文帯の「コブ」は「つまみコブ」である。これらのコブは一見「ブタ鼻」状である。色調は茶褐色を呈する。17（Ｆ－11－２）は小型の浅鉢形土器破片。口縁部直下に「コブ」がある。コブには縦にスリットが入ったものと、横に入ったものとがある。胴部には磨消し縄文帯があるが、これは弧状に区画されている。18は沈線により対弧文が描かれ、円形のコブがつけられている。

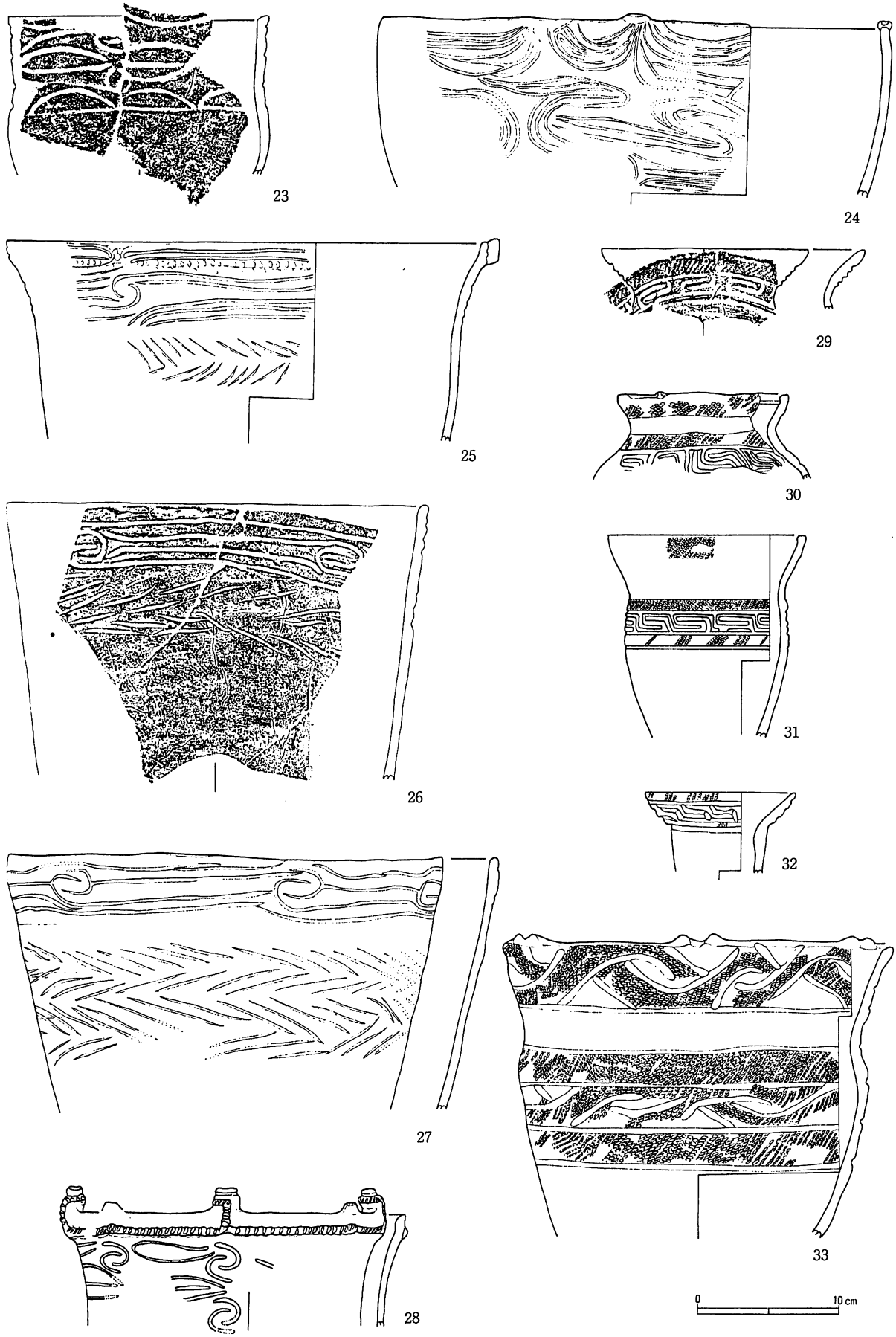
21（Ｆ－11－３）は小型の深鉢形土器であるが、小さい波状口縁で、縁に沿って刻目文が弧状に連続して



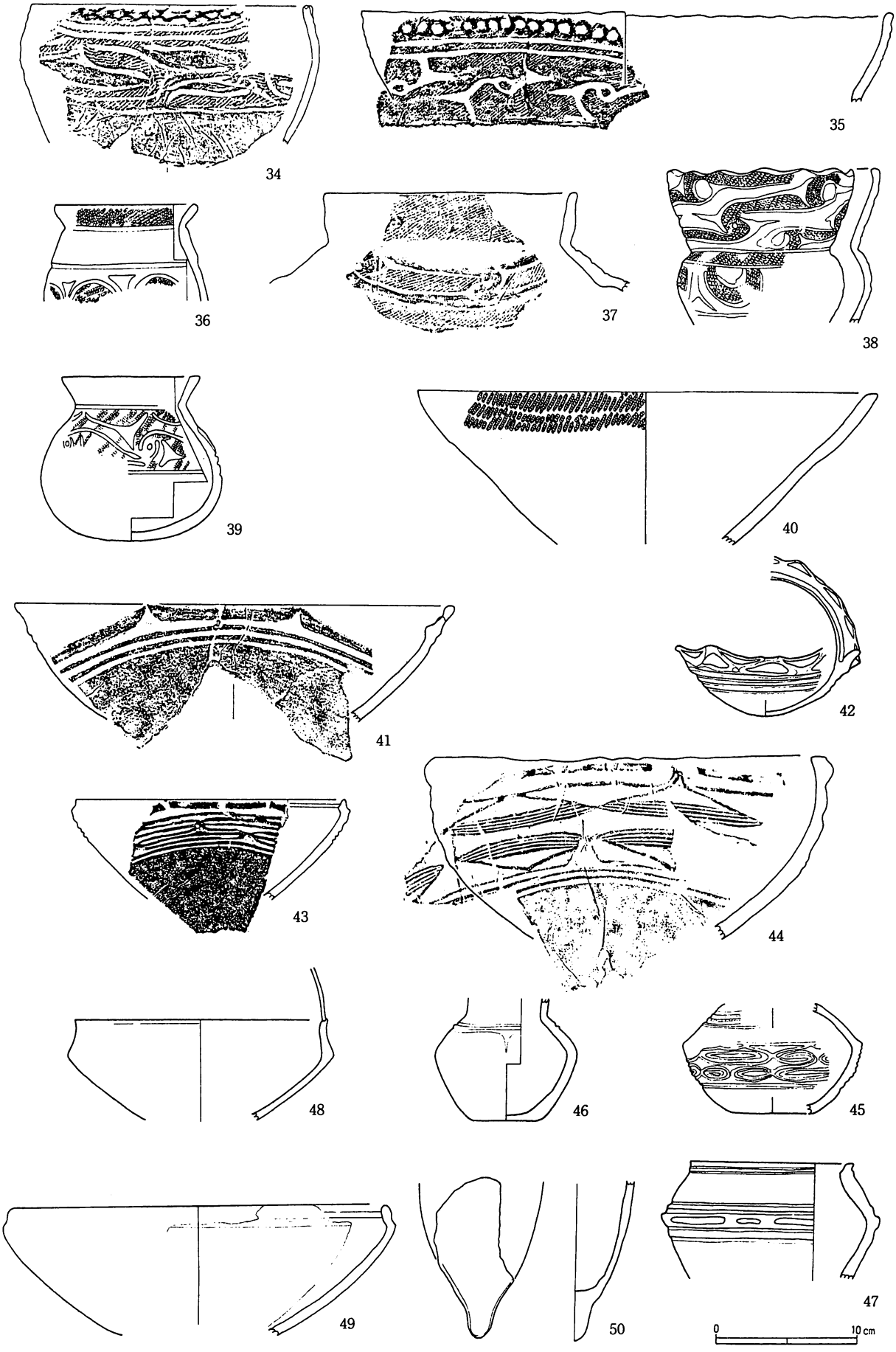
第89図　土器実測図（遺構外①）（1／4）



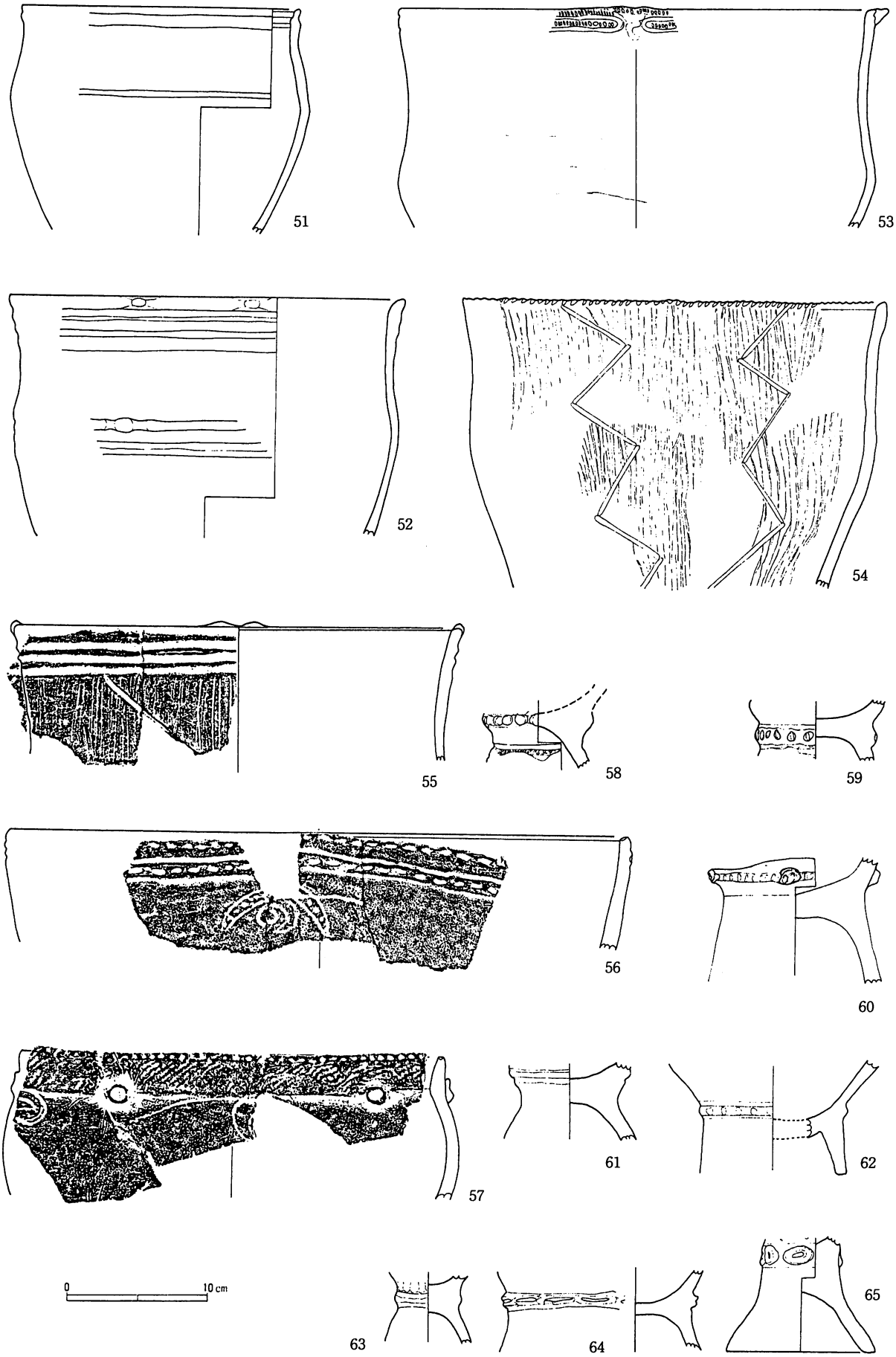
第90図　土器実測図（遺構外②）（１／４）



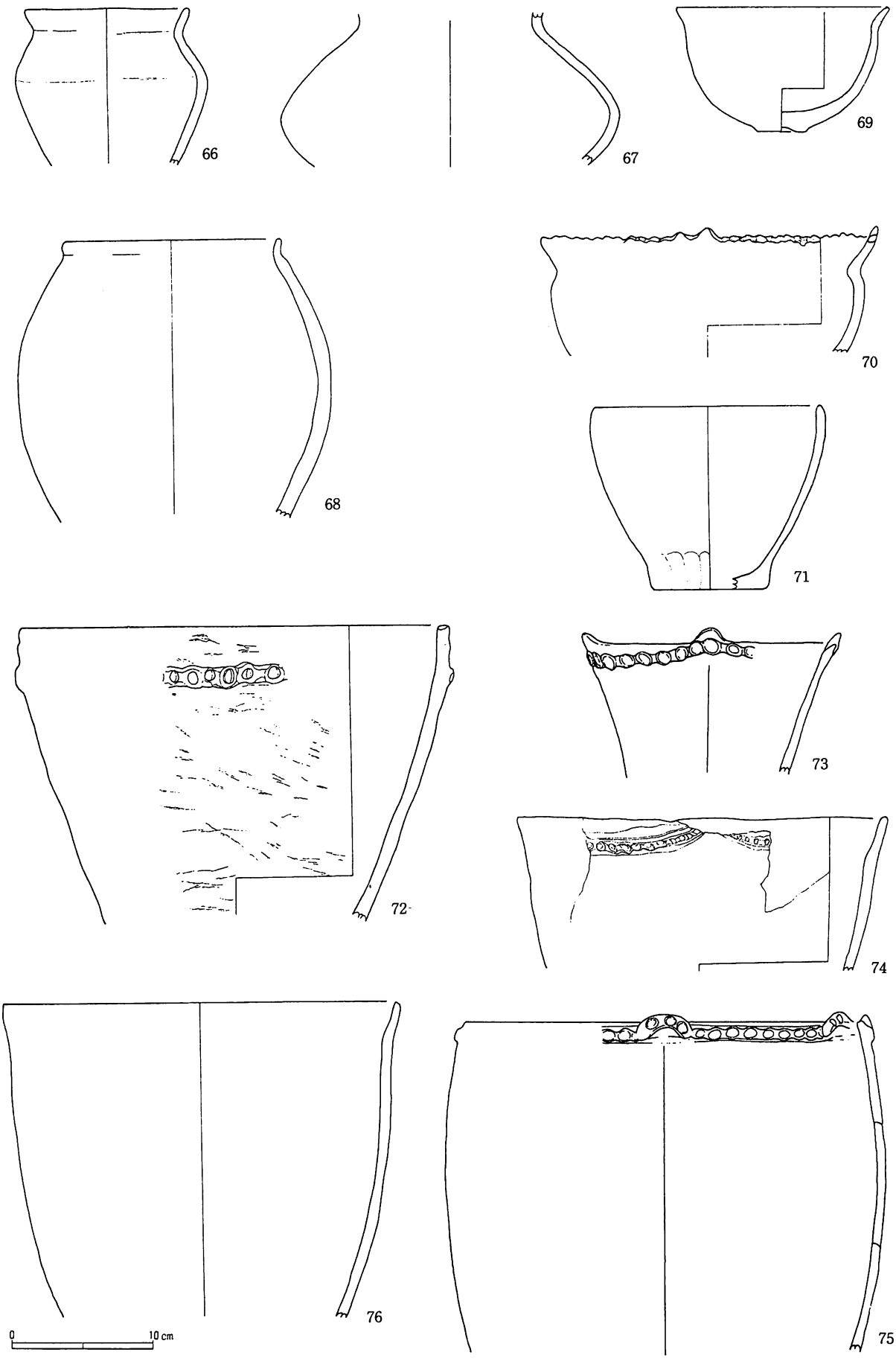
第91図　土器実測図（遺構外③）（１／４）



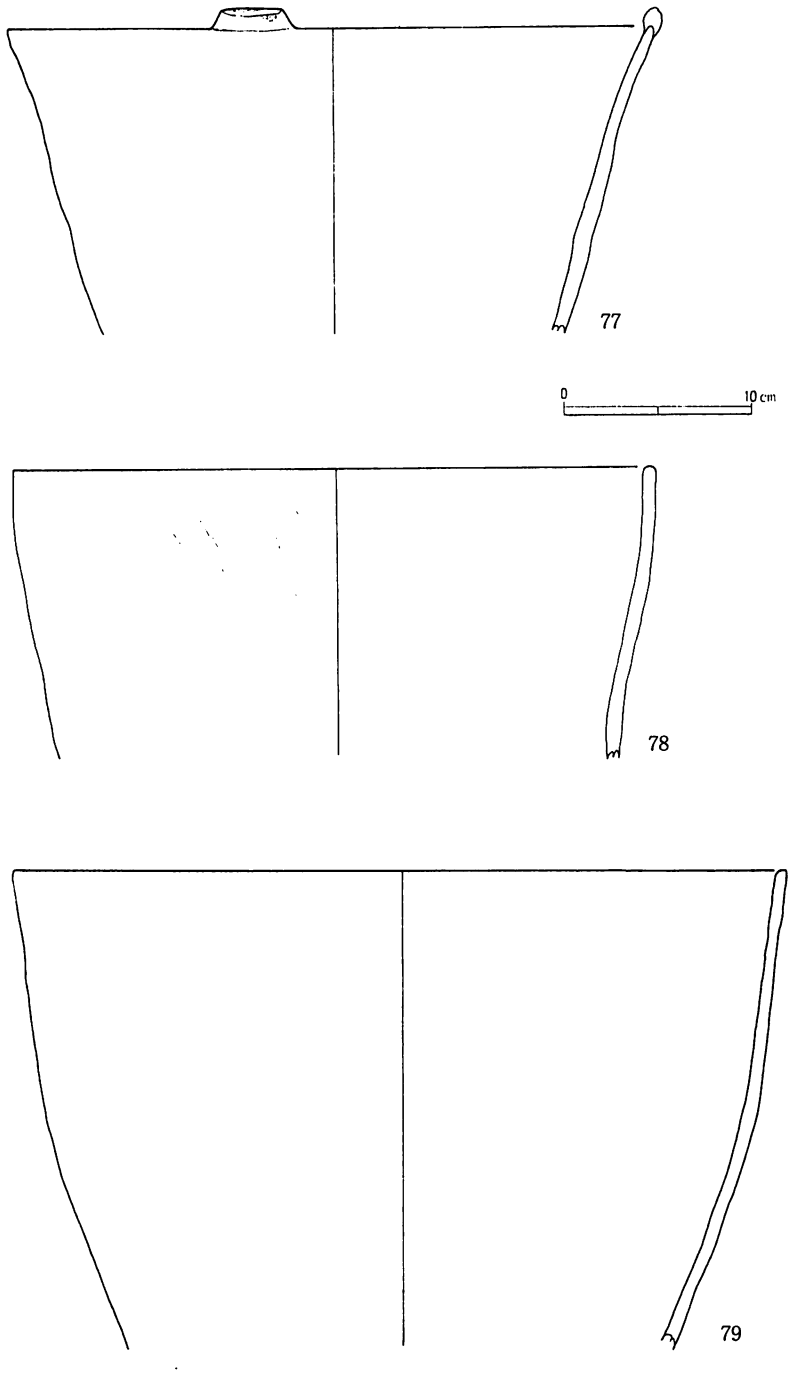
第92図　土器実測図（遺構外④）（1／4）



第93図　土器実測図（遺構外⑤）（1／4）



第94図　土器実測図（遺構外⑥）（１／４）



第95図　土器実測図（遺構外⑦）（1／4）

いる。波頂は16個と思われる。胴部には楕円文が並び、内部には刻目が連続している。

19・20・22は磨消し縄文の土器。19（E－13－3）は壷の破片。入り組みの縄文帯で飾られる。最大径部には刺突文がめぐる。内外ともよく磨かれている。20（E－11－2）は埦状をした浅鉢形土器である。無節の縄文が充填されている。22（F－11－3）は壷形土器であろう。沈線による対弧文が連続し、縄文が施されている。

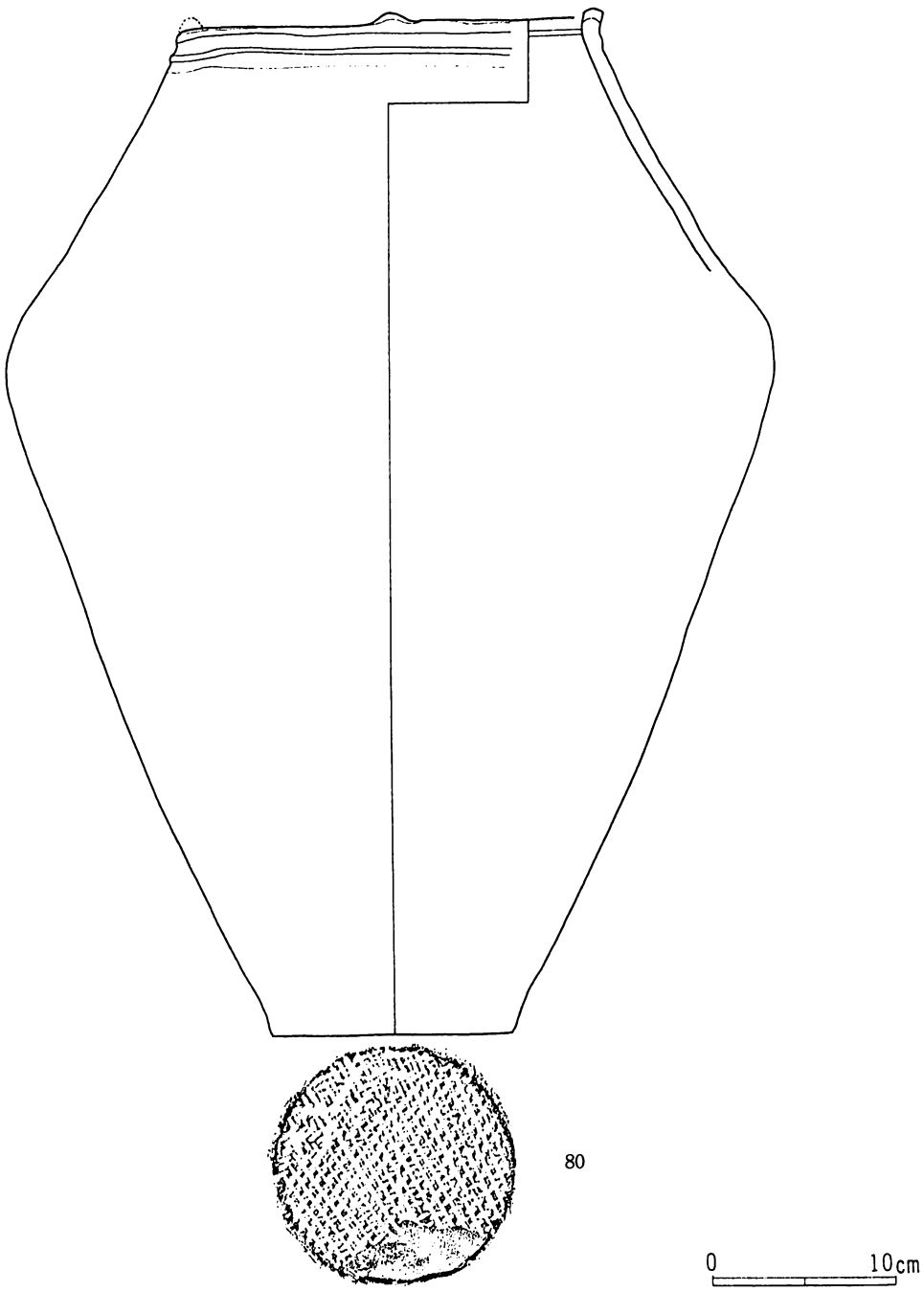
晩期の土器

6群土器（晩期前半の土器）

第91図23～27は弧状・入り組み・羽状等の沈線により装飾される土器である。23（G－9－1）は波状口縁の深鉢形土器。波状は8単位であろう。波頂部の下方に横長の張り付けがある。くびれ部には末端が入り組む弧状沈線が施されている。胴部の膨らんだ部分には、弧文が連続している。黒褐色を呈する土器。

24（G－8－4）はやや湾曲する深鉢形土器の口縁部破片。平口縁であるが、小突起が付く。全体に入り組み沈線がみられる。淡い褐色。25（G－13－4）は外反気味に立ち上がる深鉢形土器の口縁部破片。口縁部がやや肥厚し、沈線と刻目が連続する。くびれ部には入り組み沈線が横走し、以下に羽状沈線が施される。淡い褐色。26（D－6－2）と27（D－6－3）は直線的に外傾して立ち上がる器形の深鉢形土器。文様構成も類似するが、26が入り組み沈線であるのに対して、27では入り組み三叉文となっている。胴部には羽状沈線がめぐる。色調は淡い褐色を呈し、焼成良好。28（C－13－4）は平口縁ながら突起が4個、さらにその突起間に小突起が4個付く、深鉢形土器の破片。口縁部直下に有刻の凸帯がめぐり、さらに突起部にまでものびている。体部には、入り組み沈線や弧状沈線がつけられている。淡い褐色で、焼成良好。以上23～28は清水天王山式土器である。

29～32は「雷文」あるいは「鍵の手文」と称される一群の土器である。いずれも壷形土器と思われ、29（C－6－3）は口縁部直下に「入り組み鍵の手」がみられるが、これは左傾する例である。上部には縄文



第96図　土器実測図（遺構外⑧）（1／4）

が施される。30（C－10－1）は口縁部と頸部とに縄文、肩部に「入り組み鍵」が連続する。鍵と鍵との間には短線が入り、さらに左側の鍵は二重である。31（D－6－4）も文様構成は30と同様であるが、入り組み鍵の手は単純である。32（G－8－3）は「入り組まない鍵の手」が連続する。壷としたが、台付土器の台部かもしれない。29についてもその可能性があろう。

33（F－11－3）は胴下半部を欠く深鉢形土器。平口縁であるが2個1単位の小突起が6単位つけられている。ゆるくくびれる頸部は無文であるが、口縁部と胴部とには「タスキ掛け」状の入り組み文がみられ、縄文が充填されている。色調は黒褐色ないし赤褐色。北陸地方の中屋式に共通する土器である。

第92図34～39は三叉文の施された土器。34（D－6－3）は鉢形土器破片。35（F－11－2）は浅鉢形土器であろうか。口唇に刻目、体部には端が僅かに入り組む三叉文が陰刻されている。地文縄文。36～39は壷形土器。36（F－12）では弧線と三叉文とが連続している。37（C－6－3）・38（E－13－1）・39（D－6－3）には「玉抱き三叉文」が施文されている。38は黒色を呈し、丁寧に磨かれており光沢がある。胴部には弧文が連続する。39は丸底の小型壷で、入り組み文の中央に円文があり、それらを両側から挟むように三叉文が施されている。淡い褐色ないし灰褐色を呈する。これらの土器は、大洞B式ないしは安行3a式に比定できよう。

40（E－5－3）は浅鉢形土器の破片。外面の口縁付近に縄文帯がめぐる。

56（F－8－4）平口縁部で口唇部と口縁直下に刺突文が連続する。その下には三日月状の文様や「の」の字状の沈線がみられる。57（F－9）は鉢形土器と思われ、口縁部には縄文、くびれ部には円形の張り付け文がみられる。肩部には渦巻き状の沈線が施されている。特に56は安行3c式に併行としておく。

第7群土器（晩期後半の土器）

第92図41～44は浅鉢形土器。41（D－11－3）は波状口縁をなす。波頂部は8単位であろう。削り出し様の沈線がめぐる。口縁部内面に段がつく。42（E－13－2）も波状口縁の小型浅鉢。波頂部から波頂部へと、楕円状の区画文が連続する。体部には削り出し様の沈線がめぐる。二次焼成を受けたらしく、器面が荒れている。43・44は浮線網状文の浅鉢形土器。43（E－12）は浅い器形で、体部上半に浮線文がつけられている。44（D－11－4）はやや深めの器形で、丁寧な削り出しにより細隆線が彫刻されている。45（D－5）も浮線文で飾られた小型壷。浮線は入り組んだ「変形工字文」である。46（E－11－4）も小型壷。肩部に沈線がめぐる。47（D－10－2）は鉢形土器の破片。胴部が「く」の字形に膨らみ、その箇所に隆線がめぐる。以上は氷I式を中心とした一群に比定されよう。

48・49は無文の浅鉢形土器。48（E－12－3）は「く」の字形に屈折する器形で、屈折部は稜をなす。口唇には沈線がめぐる。黒褐色を呈し、器面はややザラついている。49（E－10－2）は、短くやや内湾する口縁の浅鉢形である。黒褐色を呈し、外面はザラついているが、内面は磨かれている。東海西部地方と脈絡のある土器であろう。

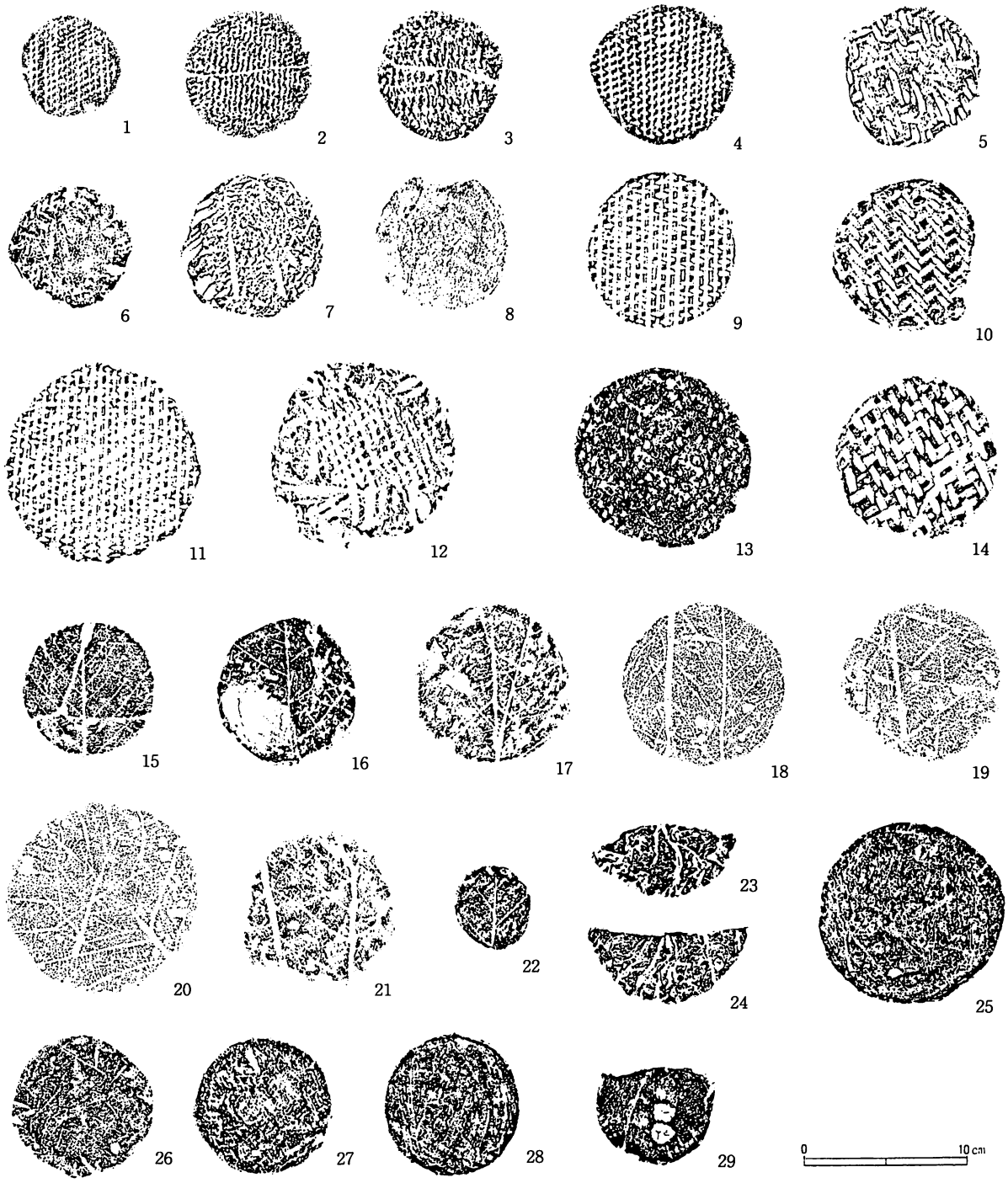
第93図51～53は胴部が「く」の字形に屈折する深鉢形土器。51（C－10－1）は丸味のある口縁で、外面には削り取りにより形成された隆帯がめぐる。内面にも隆線があるが、これは張り付けられたものである。胴の屈折部には凹線状の沈線がめぐる。内外面ともよく磨かれている。52（F－13－2）は屈折のややゆるやかな器形。口縁部と胴部とに削り出しによる隆線がみられる。53（F－11－3）は口縁部に沈線と刺突文が施されている。胴の張りの強い土器である。整形は荒い。第96図80はE－9区から出土した深鉢形土器である。高さ55cmを越す大形の土器で、本来は埋設土器として用いられていたものと思われる。強く張った胴部から、内傾し口縁にいたる器形である。口縁の3分の二程を欠くが、小突起が4単位つけられていたようである。口縁部直下には削り出しによる隆線がめぐる。色調淡い褐色。51は48・49等に伴うものと思われる

54・55は条痕のつけられた深鉢形土器。54（E－12－2）には稲妻状沈線が走り、口唇に刻目が連続する。淡い褐色の土器。55（F－11－1）は平口縁ながら、2個1単位の小突起がつけられており、削り出しによる隆線がめぐっている。体部には条痕は走るが、稲妻状と思われる沈線がつけられている。

その他の土器

第8群土器

台付土器を一括した。58（F－11－4）は僅かに縄文が認められる。いずれもくびれ部には隆帯がめぐるが、59（G－8－3）・60（D－6－3）・62（D－6－2）・64（C－8）には刻目や押圧が付けられている。60の隆帯上には「ブタ鼻」に近い瘤が張り付けられている。61（G－8－3）・63（E－11－1）は隆帯のみである。65（E－10－3）楕円状の瘤が張り付けられている。



第97図　土器底部拓本（1／4）

第9群土器

隆線をもつ深鉢形土器。第94図72（E－4－1）は太い隆帯に押圧が連続する。73は（D－6－3）は小突起が4個ついており、口縁部直下に押圧のある隆帯がめぐっている。黒色を呈する。74（E－6－4）は隆帯ではなく、沈線により区画され盛り上がった部分に刺突文が連続するものである。黒色を呈する。75（D－6－3）は内湾しながら立ち上がる器形の深鉢形土器。口縁部に押圧のある隆帯がめぐる。この隆帯は部分的に口縁より上に突出し、小突起状になっている。これは6単位であろう。内外面とも整形は丁寧。茶褐色を呈する。72は第4群、73～75は第5群に伴うものと思われる。

第10群土器

無文の土器を一括した。66（C－10－2）は小型の壷。淡い褐色を呈し、器面はやや磨滅している。第6群土器の可能性がある。67（E－11－2）は算盤形の胴部をした壷形土器。黒褐色を呈する。第7群土器であろうか。68（D－11－1）は頸のきわめて短い壷形土器である。内面は輪積み痕が観察できる。

69（E－5）は小型の浅鉢形土器。突出した小さな底部が特徴的である。70（C－8－2）も浅鉢形土器。口唇に刻目が連続し、小突起がつけられている。内外面ともに炭化物が付着している。71（E－8－2）は鉢形土器の破片。色調茶褐色。

76～79は深鉢形土器。76（C－8－3）は口縁部がやや外反する器形である。3分の一程の破片。器面はザラつきがあり、内面には縦方向の整形痕が顕著に残る。77（E－11）は口縁部を中心とした4分の一程の破片。上面が窪む小突起がみられる。78（D－6－3）も4分の一の破片。79（D－12－1）は大型の深鉢形土器の半欠品。整形は非常に雑。内面に炭化物がすじ状にめぐって付着している。

第92図50は底部破片。乳房状をなす。黒褐色を呈する。

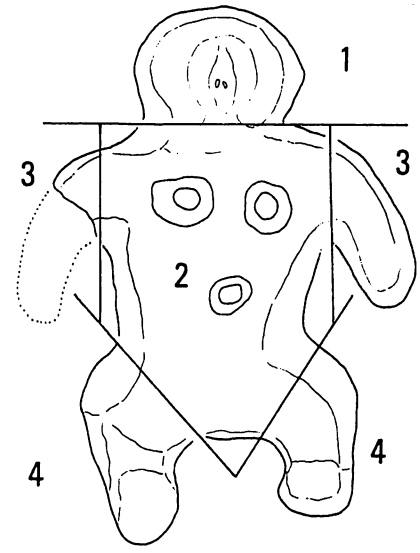
底部（第97図）

多くの底部が出土した。底部の状況については、無文のものが多いが、網代痕や木葉痕等を残すものも認められた。これらのいくつかについて図示する。6・8・13では網代痕上を磨き、調整してある。木葉痕では、1枚（15・16・22）、2枚（17～19・21）、3枚(20)等がみられる。複数のものからは、葉を取換えたことがわかる。23・24は繊維状の圧痕である。26・29には「実」のような痕跡がある。25・27・28では調整痕が確認できる。

第7節　土　製　品

(1)　土偶（第99図～第106図）（表2）

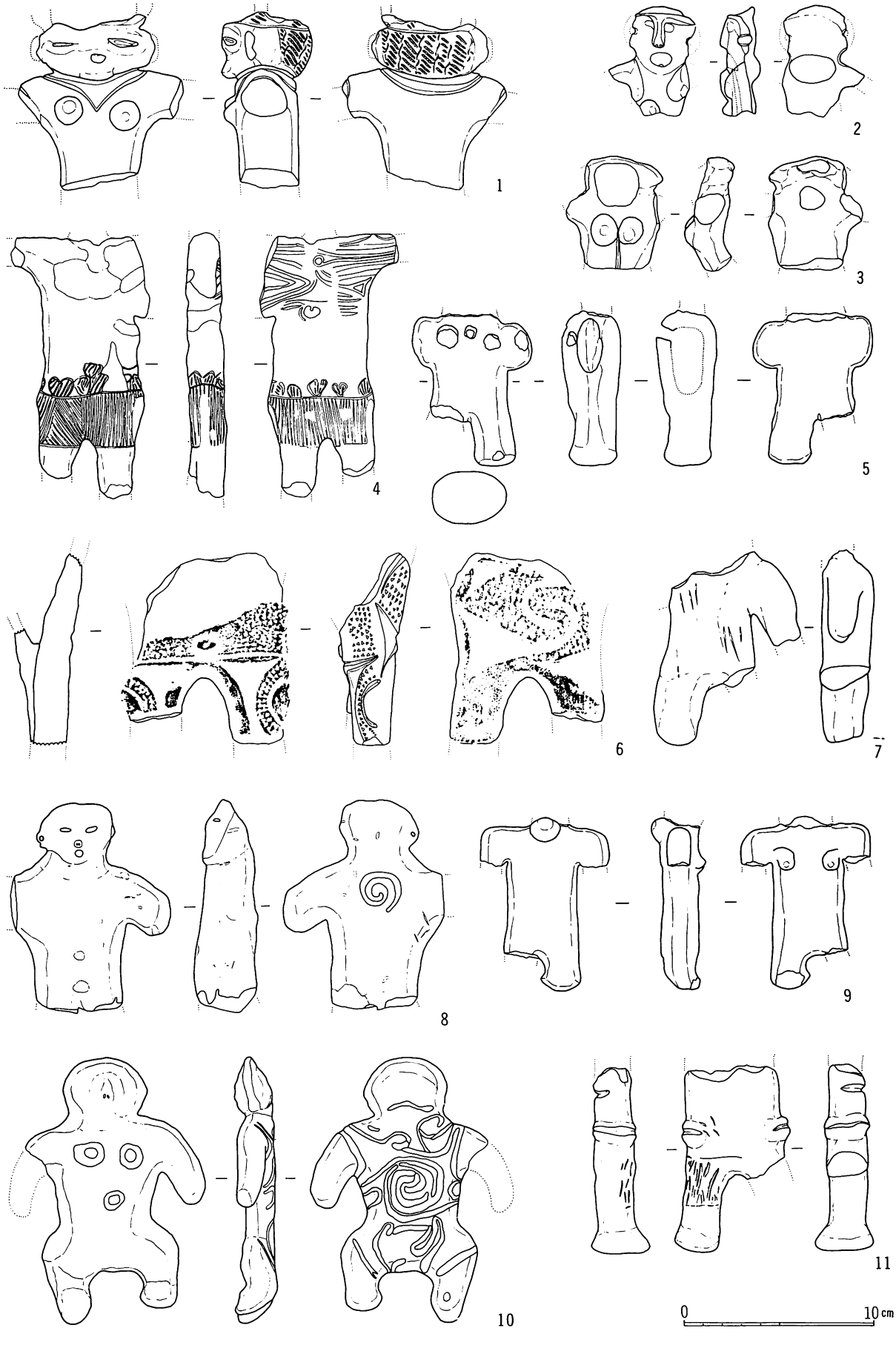
遺跡全体から233点が出土した。各遺構およびグリッドごとの出土点数は表18のとおりである。なお、グリッドのうち7列は第1号配石に該当することから、配石の項に点数を記載してある。出土した土偶は完形に近いものから小破片まであるが、ほとんどが破損品である。部位の判明するものの大部分を第99図～第106図に図示した。同時にこれら図示したものについては、表2に纏めてあるが、出土部位についての分類は、第98図のように区分したものである。ここに図示した土偶は153点を数えるが、図示しなかったものは、脚部あるいは腕の一部、ないし部位不明の小破片がほとんどである。



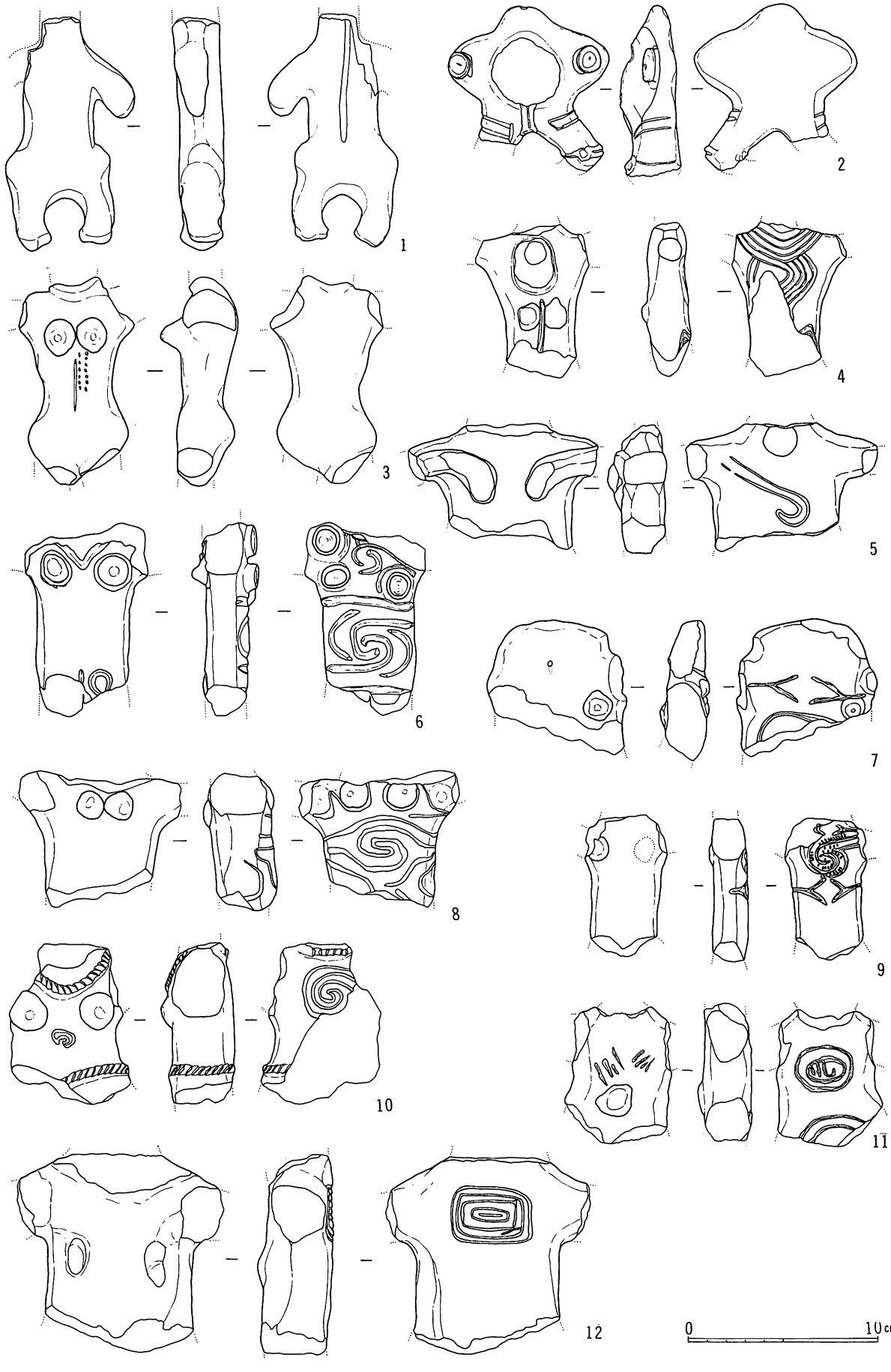
1頭部　2体部　3腕部　4脚部

第98図　土偶の部位

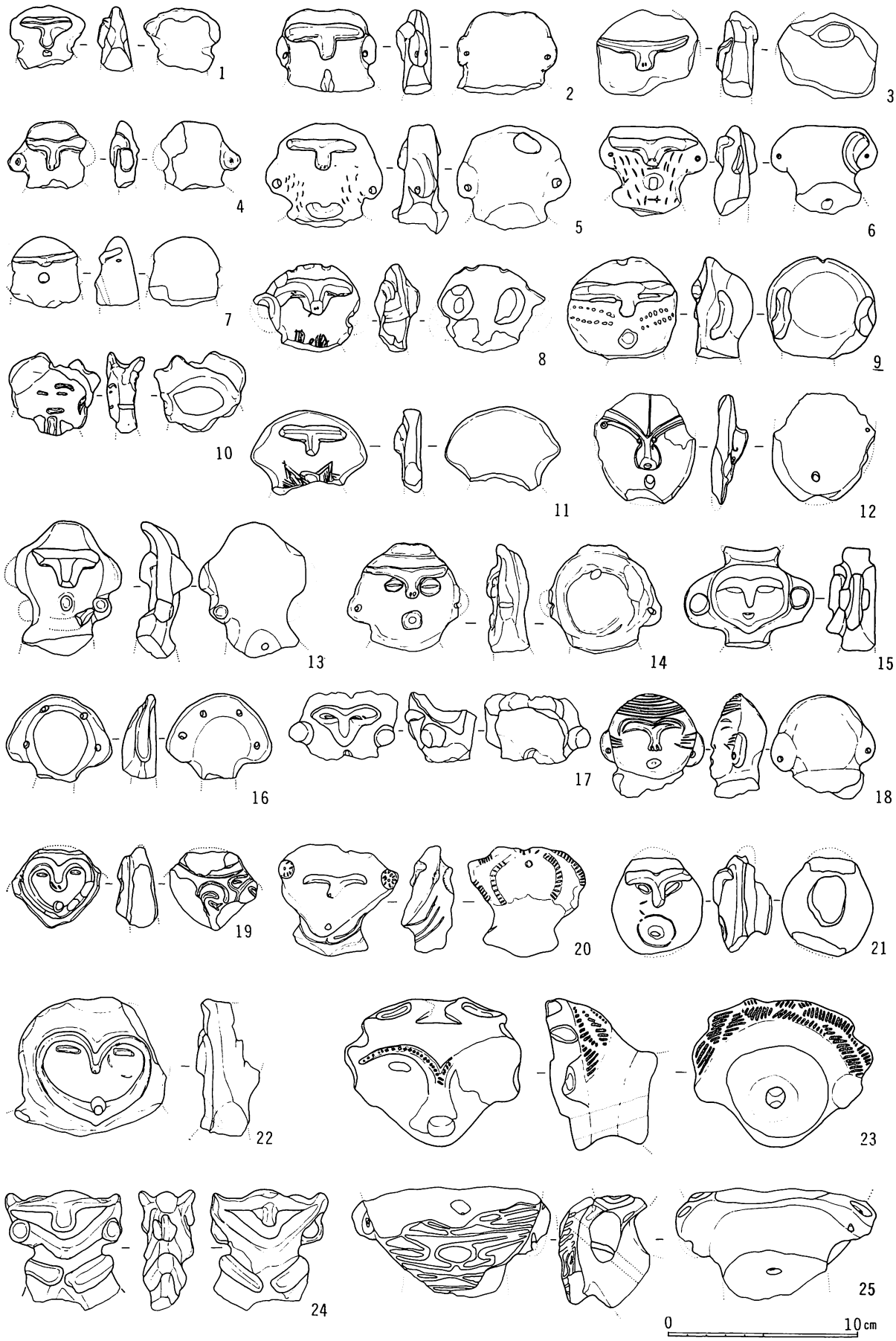
完形に近いものには第2号配石出土の中空土偶（第72図1）がある。この第2号配石出土以外は、全て中実であり、大部分が板状土偶である。但し、第101図23・25は大型の立体的な土偶の顔面と思われるものである。土偶の時期については、全て後期・晩期と思われるが、細かい時期は不明。第99図1・4・6・8・10、第100図6～12、第101図23・25等は晩期のものであろう。特に第99図1は遮光器土偶の特徴がみられる晩期前半のもの、第101図25は浮線文のつけられた晩期後半の土偶である。一方、第101図に示した顔面のうち、12は後期前半の仮面を付けた土偶の一部である。また、13を始めと



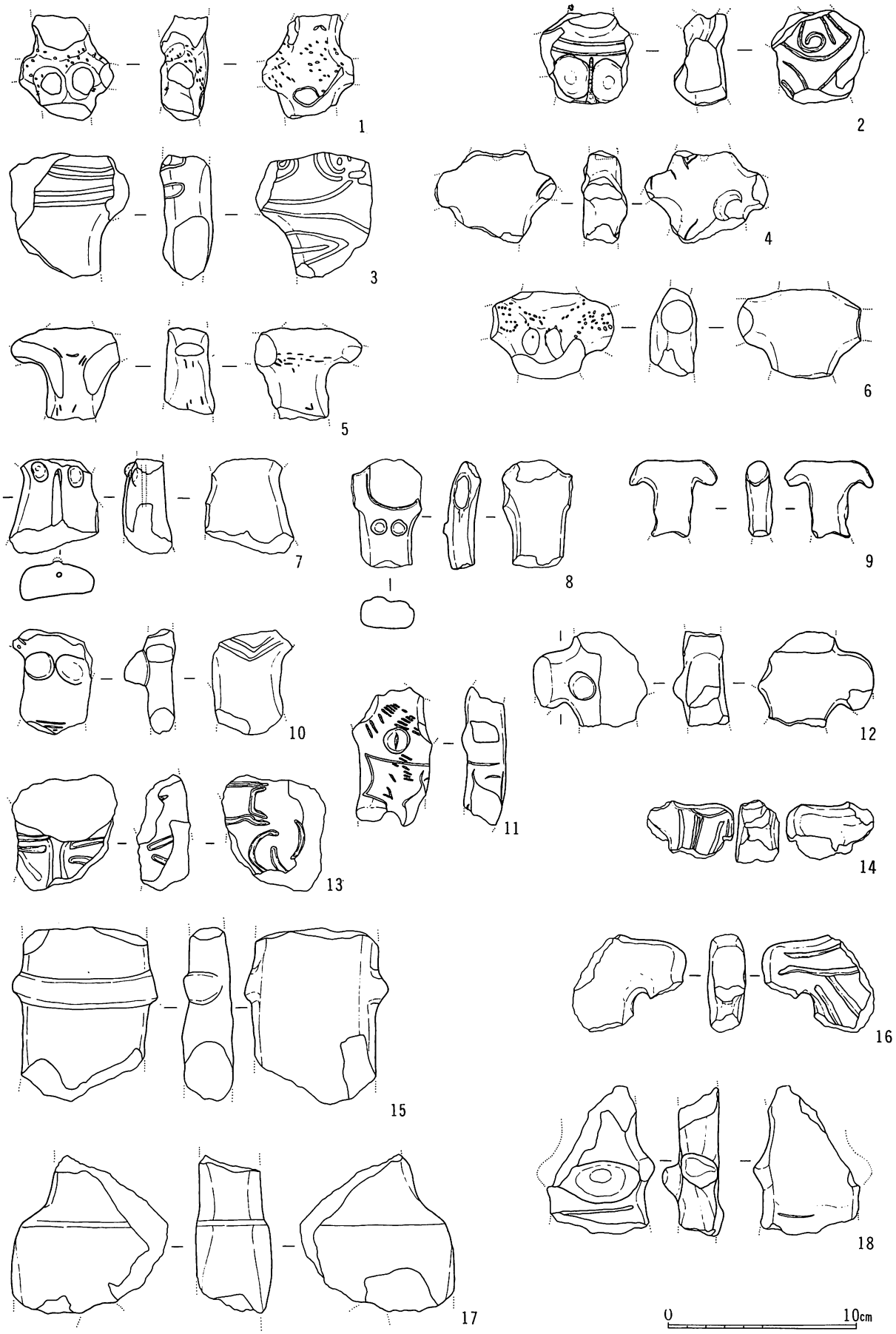
第99図　土偶実測図①（1／3）



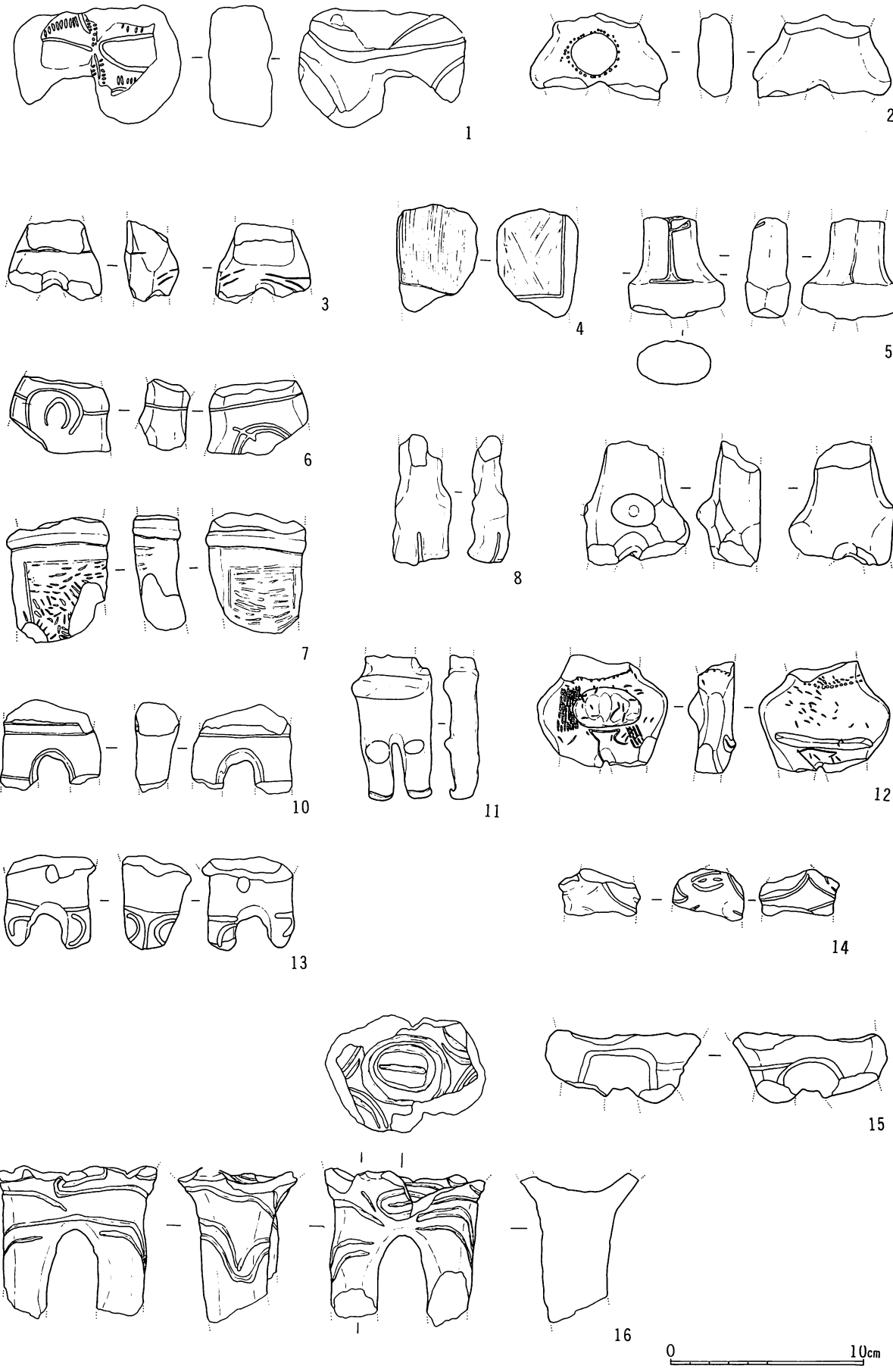
第100図　土偶実測図②（１／３）



第101図　土偶実測図③（1／3）



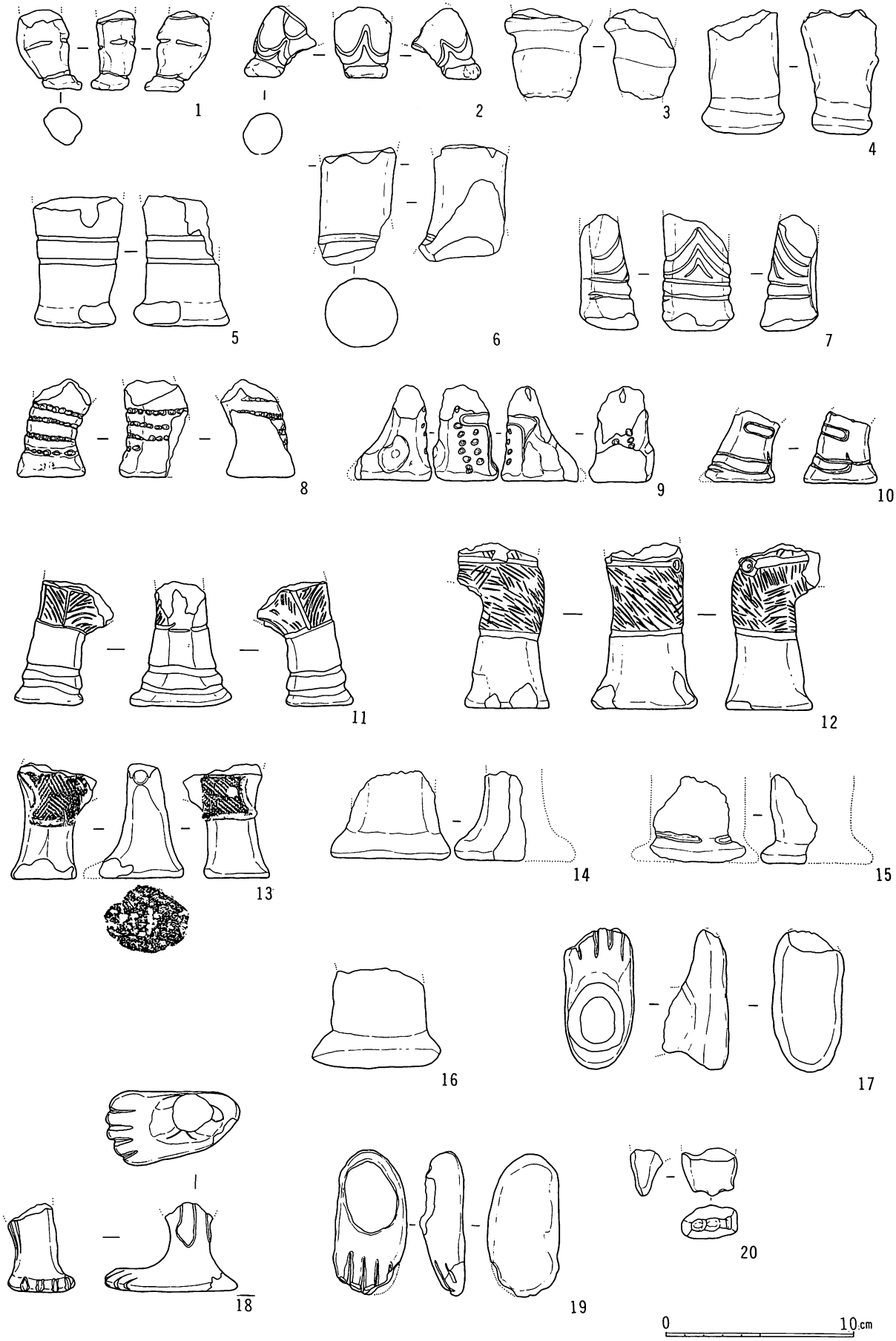
第102図　土偶実測図④（1／3）



第103図　土偶実測図⑤（1／3）

第104図　土偶実測図⑥（1／3）

第105図　土偶実測図⑦（1／3）



第106図　土偶実測図⑧（1／3）

第107図　土版実測図（１／３）

して「眉から鼻にかけてＴ字状をなす」ものの多くは後期中葉を中心とした時期のものであろう。第106図11～13も同様の時期の脚部である。第104図４・７・10には東北地方の後期後葉の土器に共通する文様が認められる。

第99図４・11、第102図11、第103図４・７、第105図10等は衣装の表現された土偶。また、黥面を表現したと思われるものに、第101図５・６・８・９・11・18等がある。同４・13・15・17・20・24では耳飾りが装着されているが、２・５・６・14・18・25のように耳朶に孔が見られるものの、耳飾りが着けられていないものもある。なお、16は顔面が剝がされたかのようであり、25も顎の部分しか残っていない。いずれも剝離部分は粘土の接合箇所のようである。24は両面に顔がある。

第103図16は上面が皿状に窪み、その部分にも文様がある。土偶ではないのかもしれないが、ここでは組み合わせ土偶の一部と考えた。15も同様である。

第104図21は肩から腕にかけての部位であるが、肘の部分に顔が表現されている。第105図、106図には手および足の部分を示したが、一部不明のものもある。

土偶の出土地点については、表18のみるとおり、各住居やグリッド全体から発見されているが、特に第1号配石とその前面にあたるD－6区からの出土量が多い。これらの箇所からは土器や石器等も多く出土している。全体的に、土偶についても、他の土器等の遺物とともに出土する傾向が強い。

(2) 土版（第107図）（表2）

土版および類似品11点が出土した。第107図1～3・5は楕円ないし円形を呈したもので、特に1～3は顔面が表現されている。2は小型の完形品で、土版とするには不適切かもしれない。試掘の際に出土したもの。B－8区に該当する地点である。3では表裏ともに赤彩の痕跡がある。4・6は長方形状のものであるが、4では抉り込みがみられる。同様の抉りは7にも認められる。この7では裏面に突出部分があったようであるが、剝離している。6は4分の一ほどの破片と思われるもので、渦巻き文や、三叉文の連続したような文様が彫刻的に描き出されている。裏面は剝落しているが、コーナー付近と側面に穴がみられる。8は中央の孔が貫通しており、沈線と合わせて玉抱き三叉文をなしている。9～11は無文の半欠品である。

(3) 土製円盤（第108図）（第109図）（表3）

土器片を利用した円盤状の土製品は111点出土した。最小は直径2.4㎝で重さ5ｇ（第108図2・4等）、最大は直径6.5㎝を越え、重さ50ｇ前後（第109図37・38）のものがある。多くは3～5㎝、重量10～30ｇである。時期のわかる破片が利用されているものもある。第108図30は堀内1式、第109図14は羽状沈線の土器、第108図21・22・24・26・28・29、第109図13・16・17は晩期後半氷Ⅰ式土器である。なお、第108図20は中央に焼成前の孔が貫通している。

(4) 耳飾り（第110図～第116図）（表4）（表18）

小破片も含め560点が出土している。267点について図示した。文様の施された完形に近いものはほとんど載せたが、小破片は割愛し、無文のものについては選択して図示した。

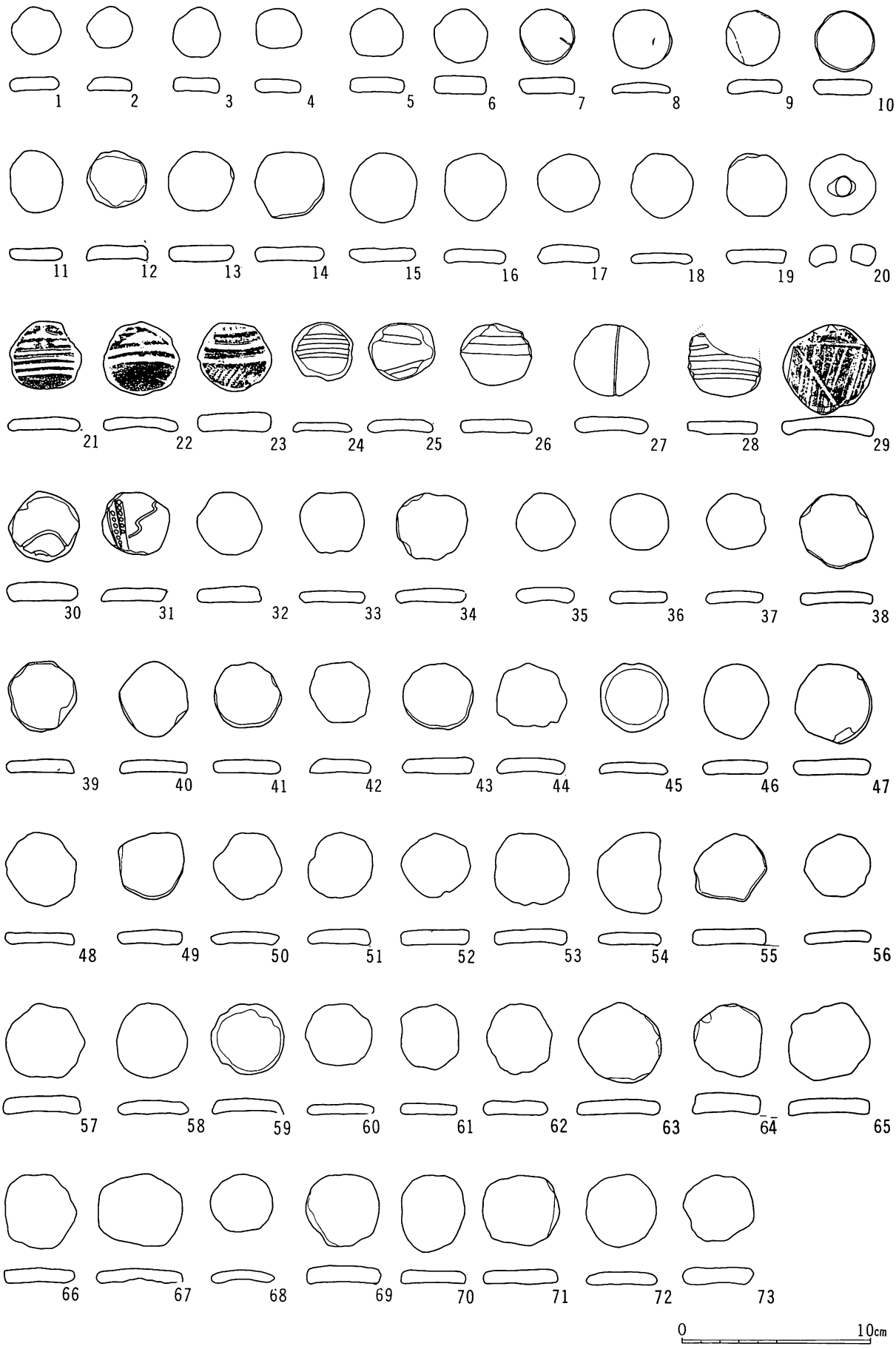
耳飾りのタイプは、多くのバラェティに富んでいるが、大別して耳栓型と滑車型とに区分けすることができる。量的には滑車形が圧倒的に多く、第113図13・14等に代表される耳栓形は少ない。

図版組みに当たっては、有文と無文、透し等も含め中央部が貫通するものとしないもの、との組み合せから分類した。第110図および第111図は中央部が貫通する有文のものである。直径1㎝未満のもの（第110図1）から8㎝以上の大型のもの（第111図11・16等）まであるが、2～3㎝のグループと3～5㎝のグループとに集中する傾向がある。第110図34や43は彫刻的な精巧な作りである。第111図7～15は腕輪状の形で、特に9・10は第1号配石の石棺状遺構中から出土したものである。

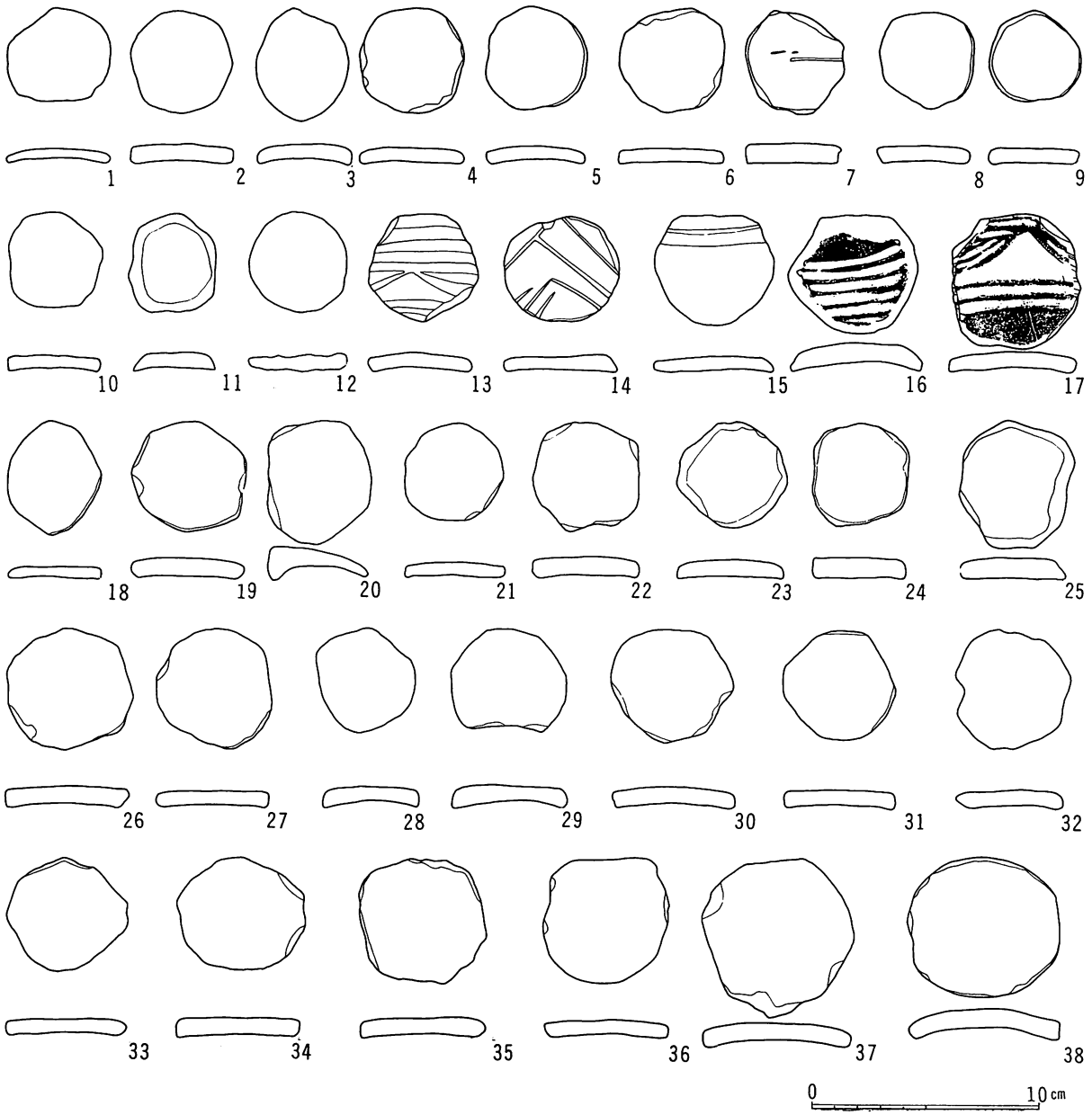
第112図および第113図1～19は貫通孔のない有文耳飾り。滑車形、耳栓形、および両者の中間タイプともいえる「臼」形（第113図7～12・15～19等）もみられる。最小1㎝（第112図1）、最大7㎝以上（第112図41、第113図4・6）であるが、やはり2～4㎝が中心である。第112図22・23、33・34、42・43、第113図7・8等にみるように類似したものも多い。

第113図20～27、第114図は貫通した無文のもの。第113図20・22が耳栓状のほかは滑車形であるが、第114図33～41は特徴的な形状である。また、第113図23～27はリング状であるが、他は中央部に小孔が貫通するものが多い。

第115図・第116図は貫通孔のない無文のものである。ほとんど滑車形であるが、厚く「臼」状をなす第116図15～28のような例もみられる。29は中央部が膨らんでおり、耳飾りとするには問題かもしれない。第115



第108図　土製円盤実測図①（1／3）



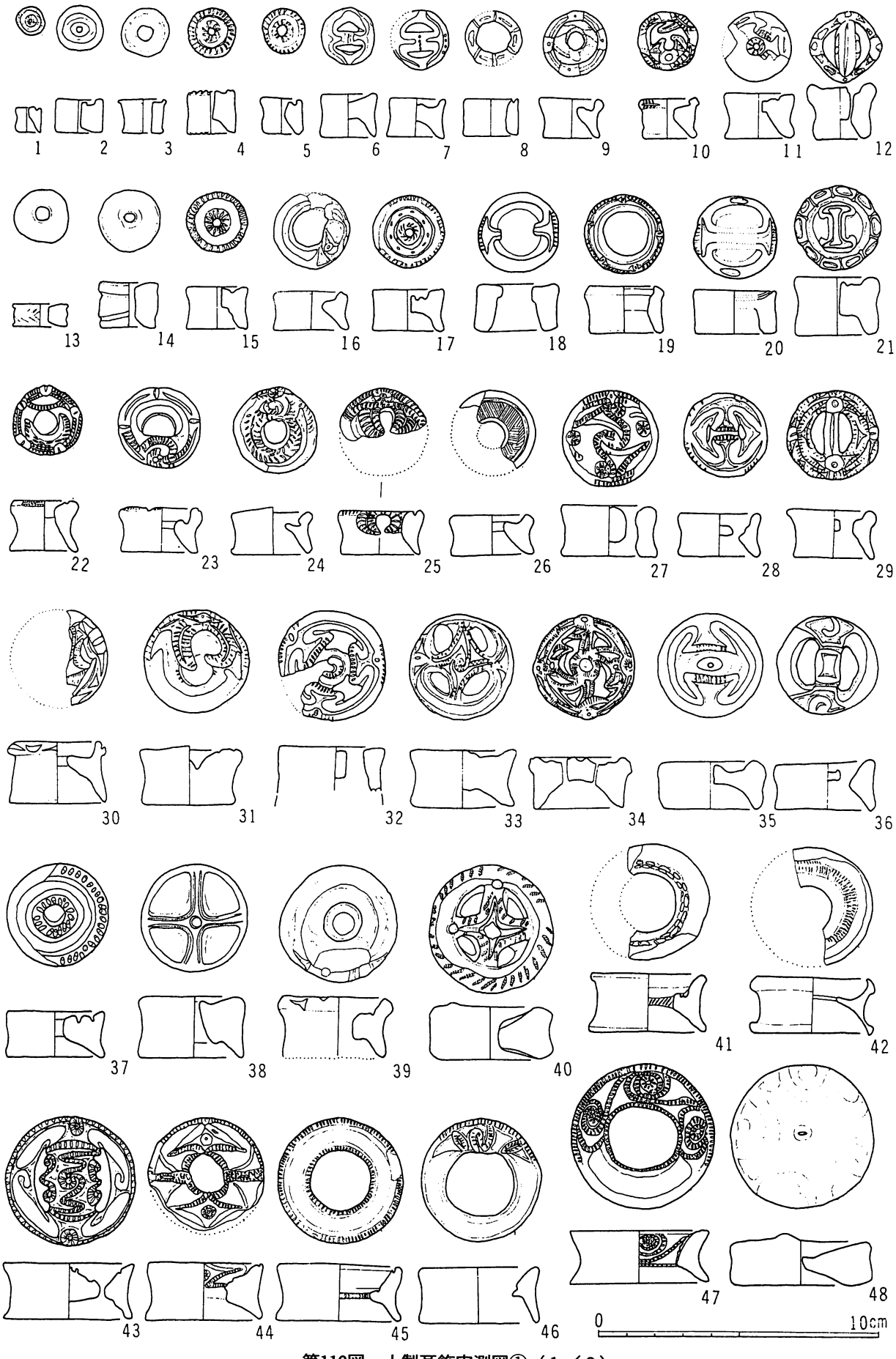
第109図　土製円盤実測図②（１／３）

図１・２は直径１㎝以下の小型品。最大は第116図14の7.8㎝。

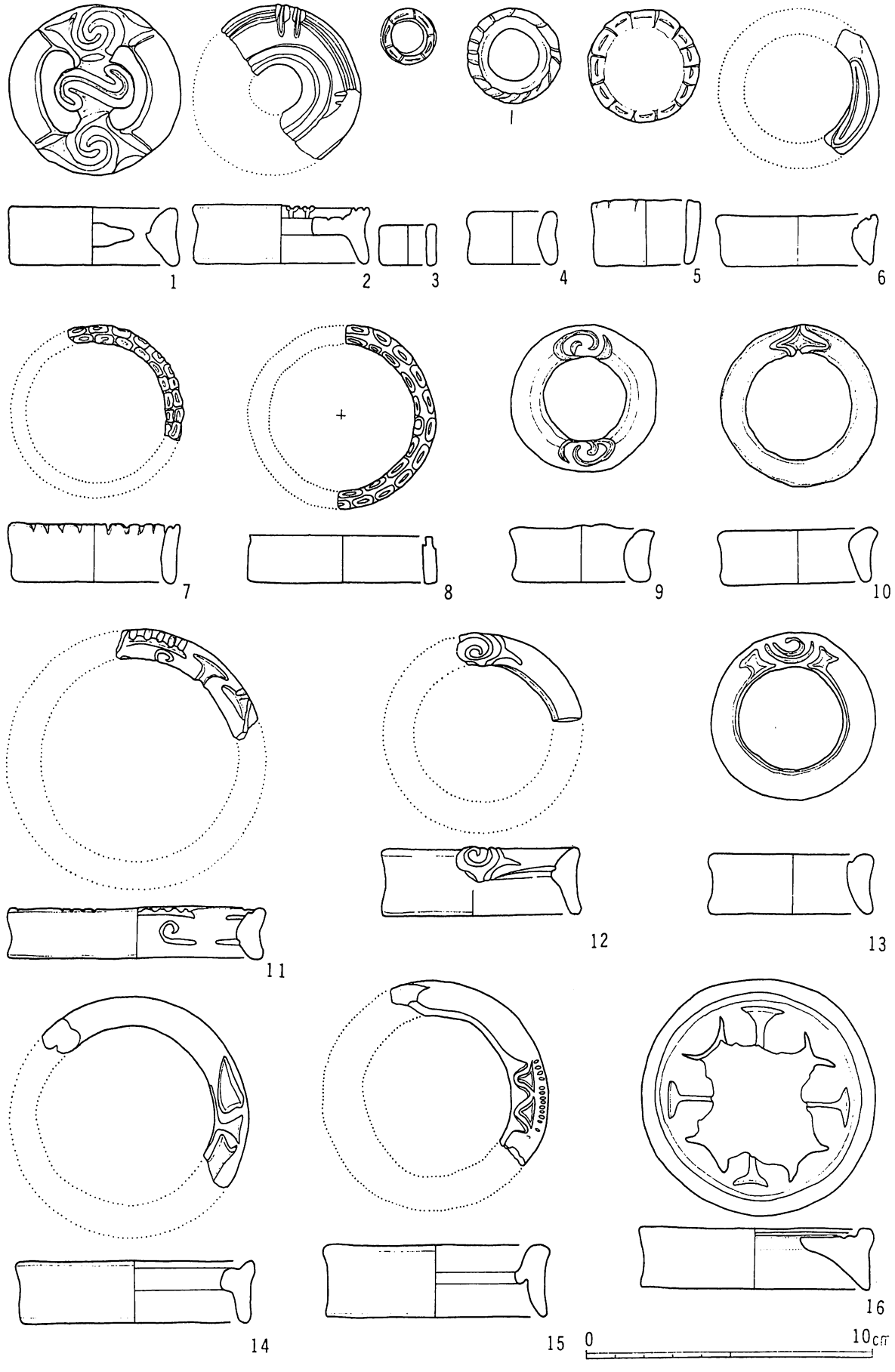
なお、560点についての出土地区については、表18に纏めてある。住居については、特に第20号・30号・38号からの出土が多い。第20号・38号ともに石囲み炉が発見されたにすぎないが、その周囲から出土したものである。第１号配石からは土偶や石鏃が多く出土しているが、耳飾りについても91点が発見されており、他を圧倒している。各グリッドからもまんべんなく出土しているが、特にＤ－６区からは71点出土している。この地区は第１号配石の前面にあたり、土器を始めとして土偶・石鏃・石斧等遺物の多い場所である。耳飾りの全体的な出土状態については、第１号配石の石棺状遺構から２個が出土した他は、土器等の遺物とともに出土したものである。

(5)　その他の土製品（第117図）（表５）

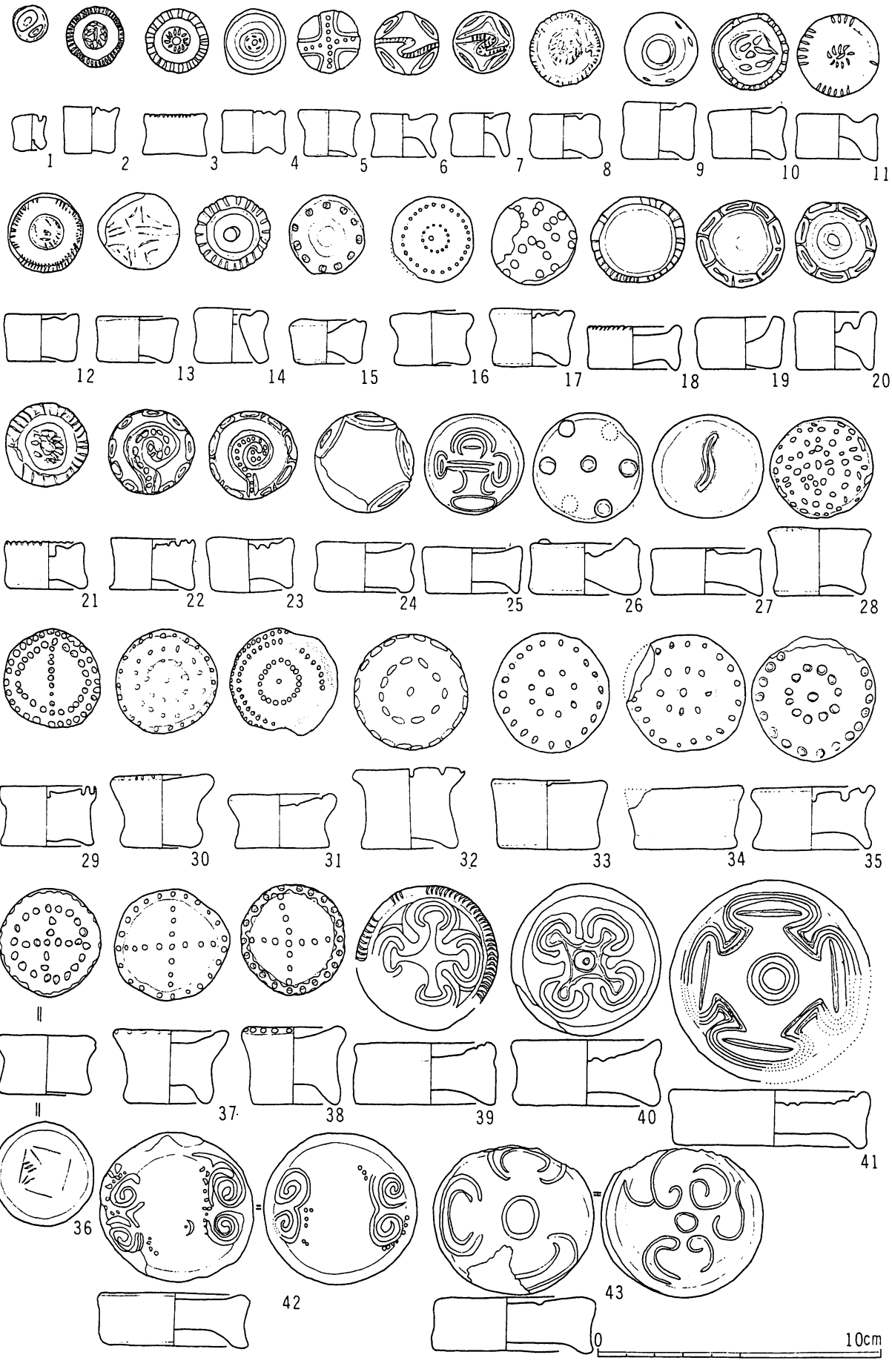
第117図１～４は土製の勾玉。５～８は玉製品。いずれも孔が貫通している。９～11はスタンプ状土製品。11は無文であるが、表面が剝離したものと思われる。12は円盤状の土製品。片面に刺突による孔が２個一対



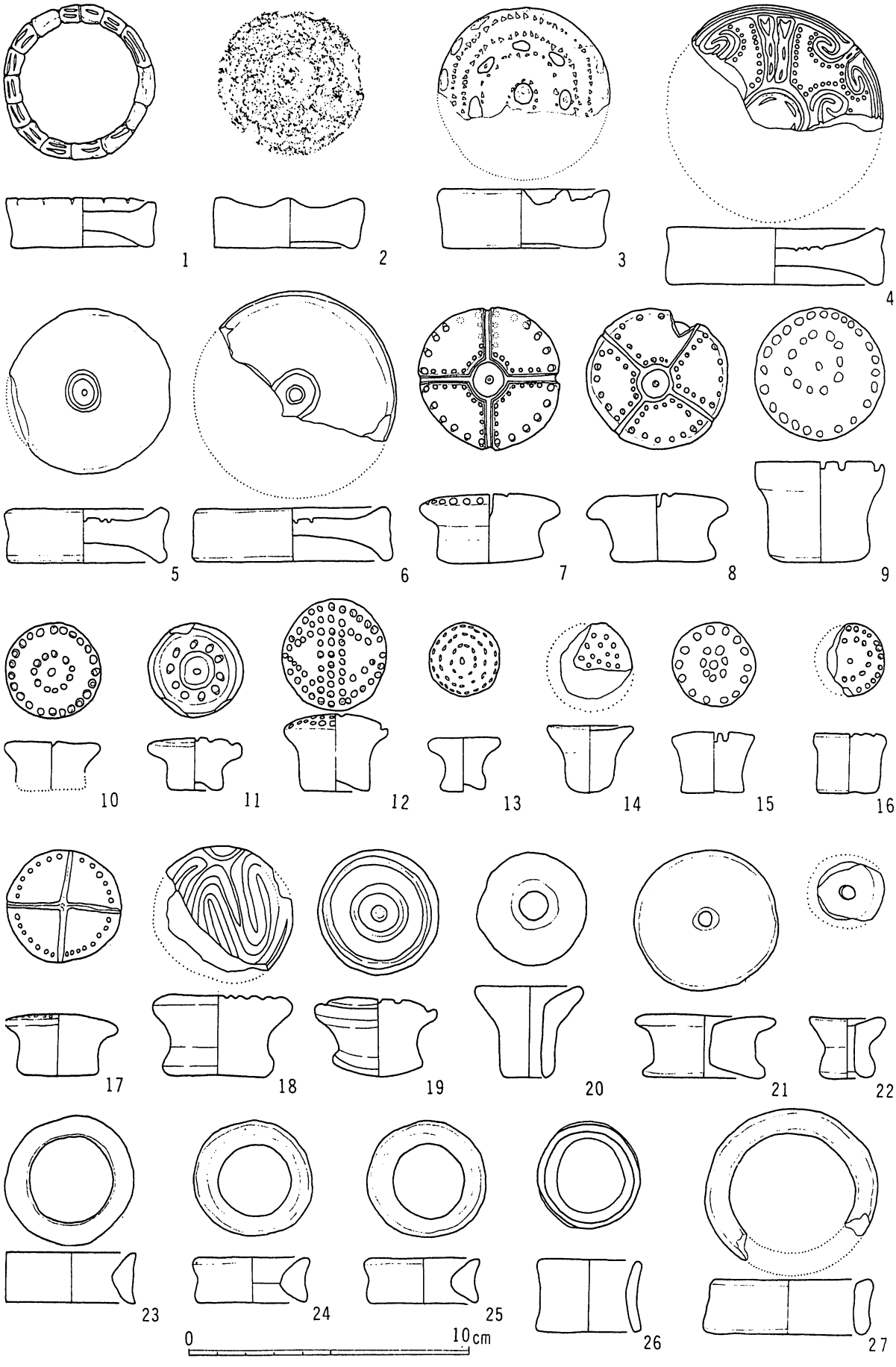
第110図　土製耳飾実測図①（1／2）



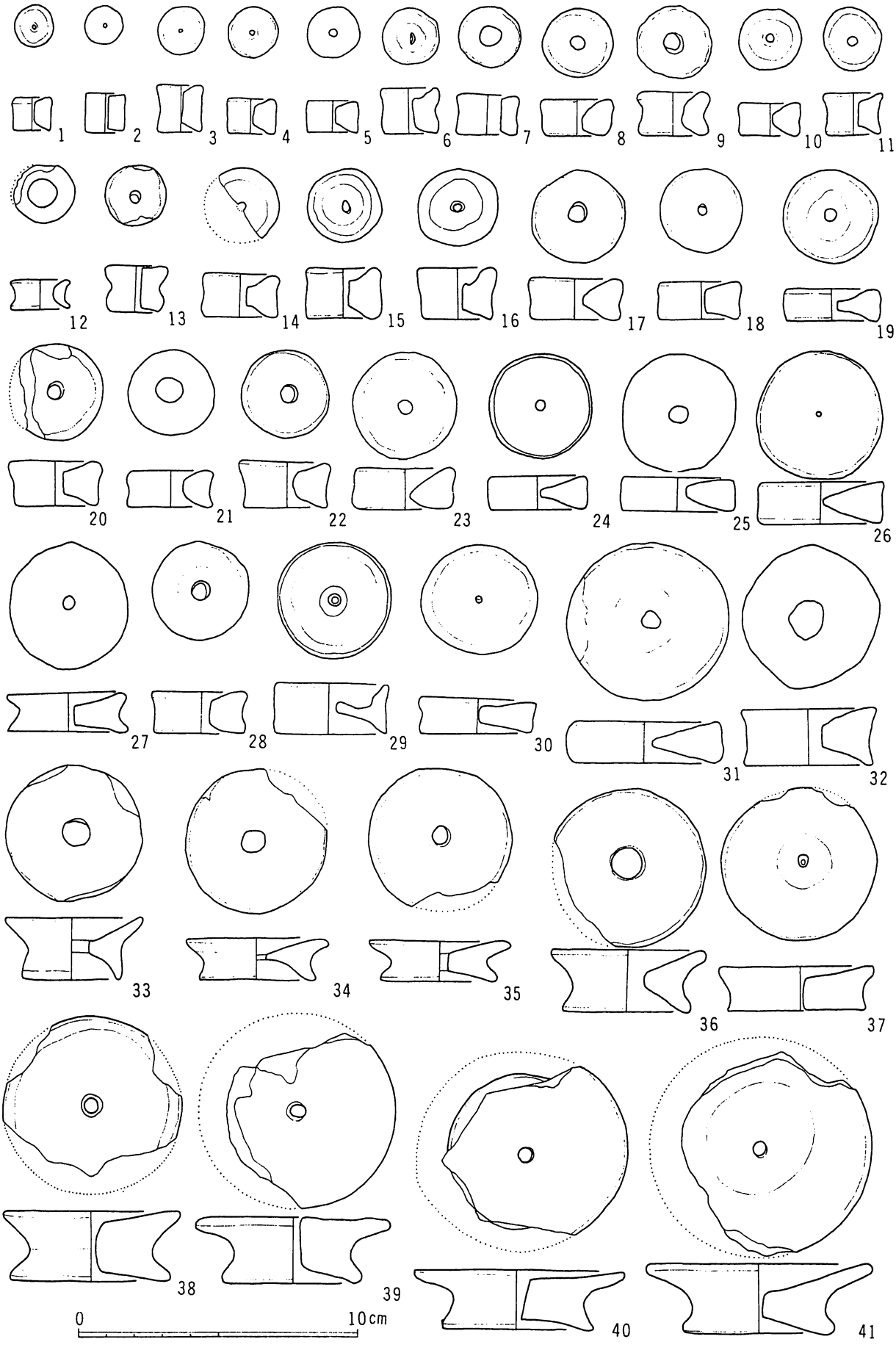
第111図　土製耳飾実測図②（1／2）



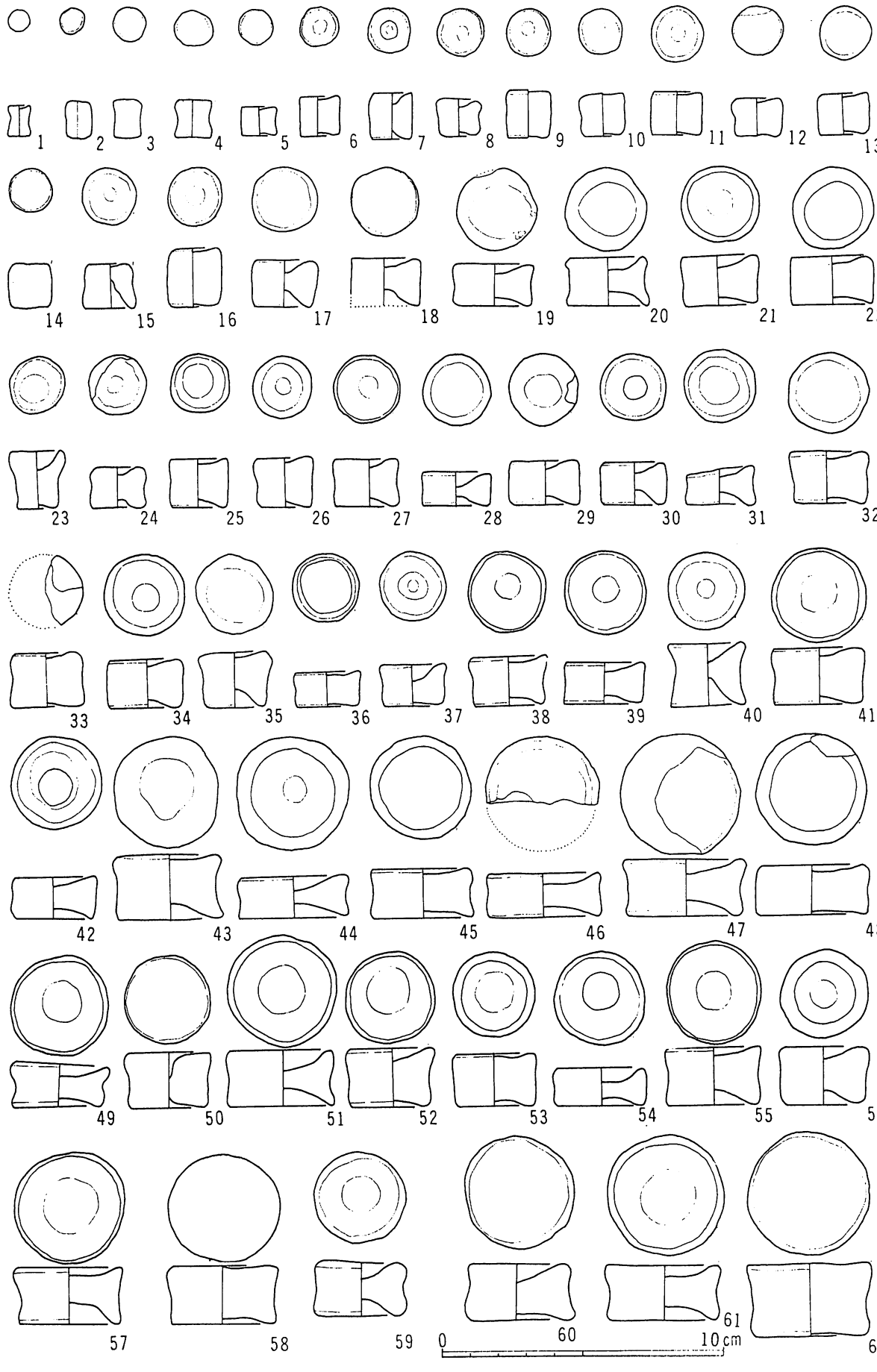
第112図　土製耳飾実測図③（1／2）



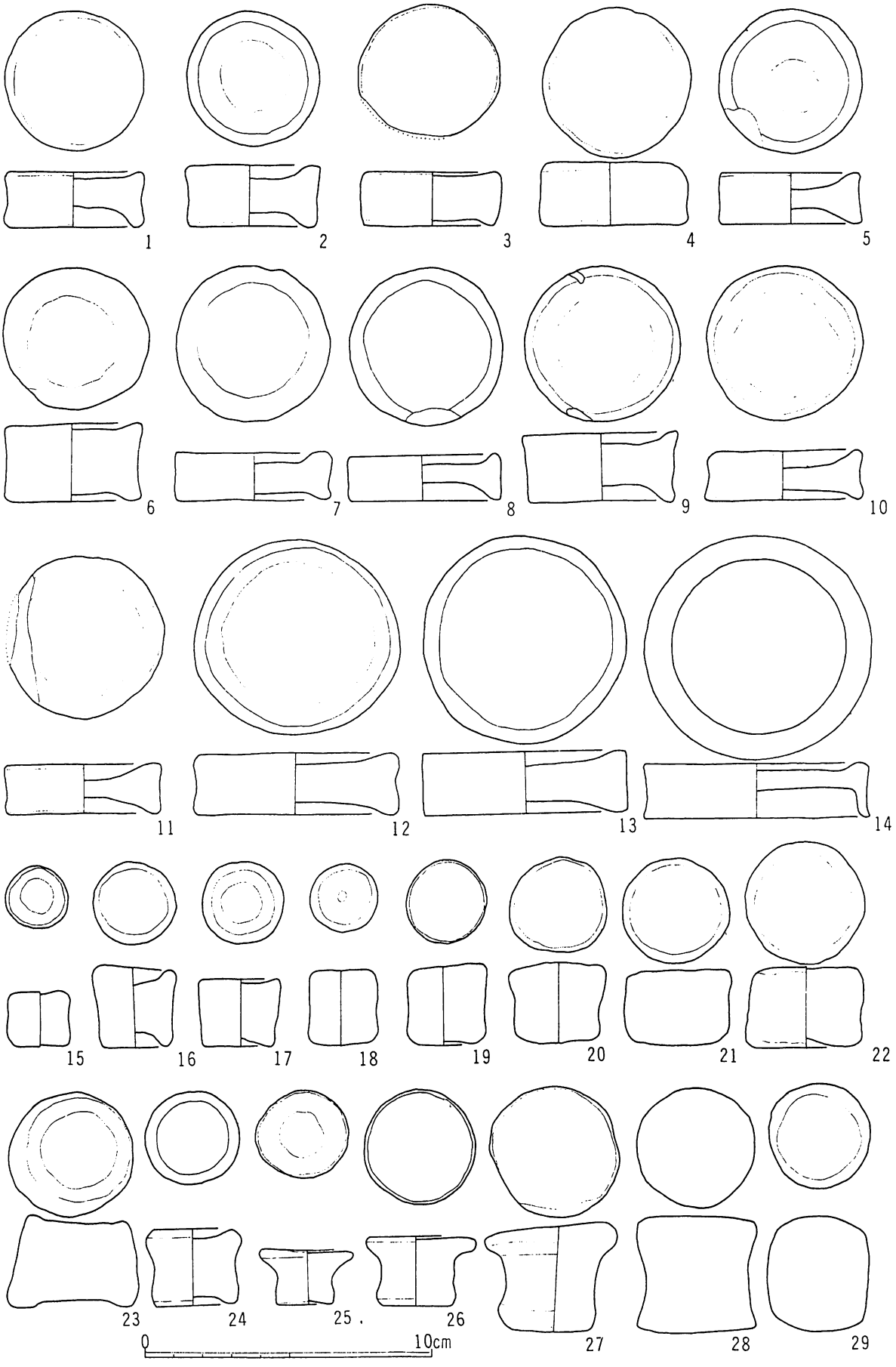
第113図　土製耳飾実測図④（1／2）



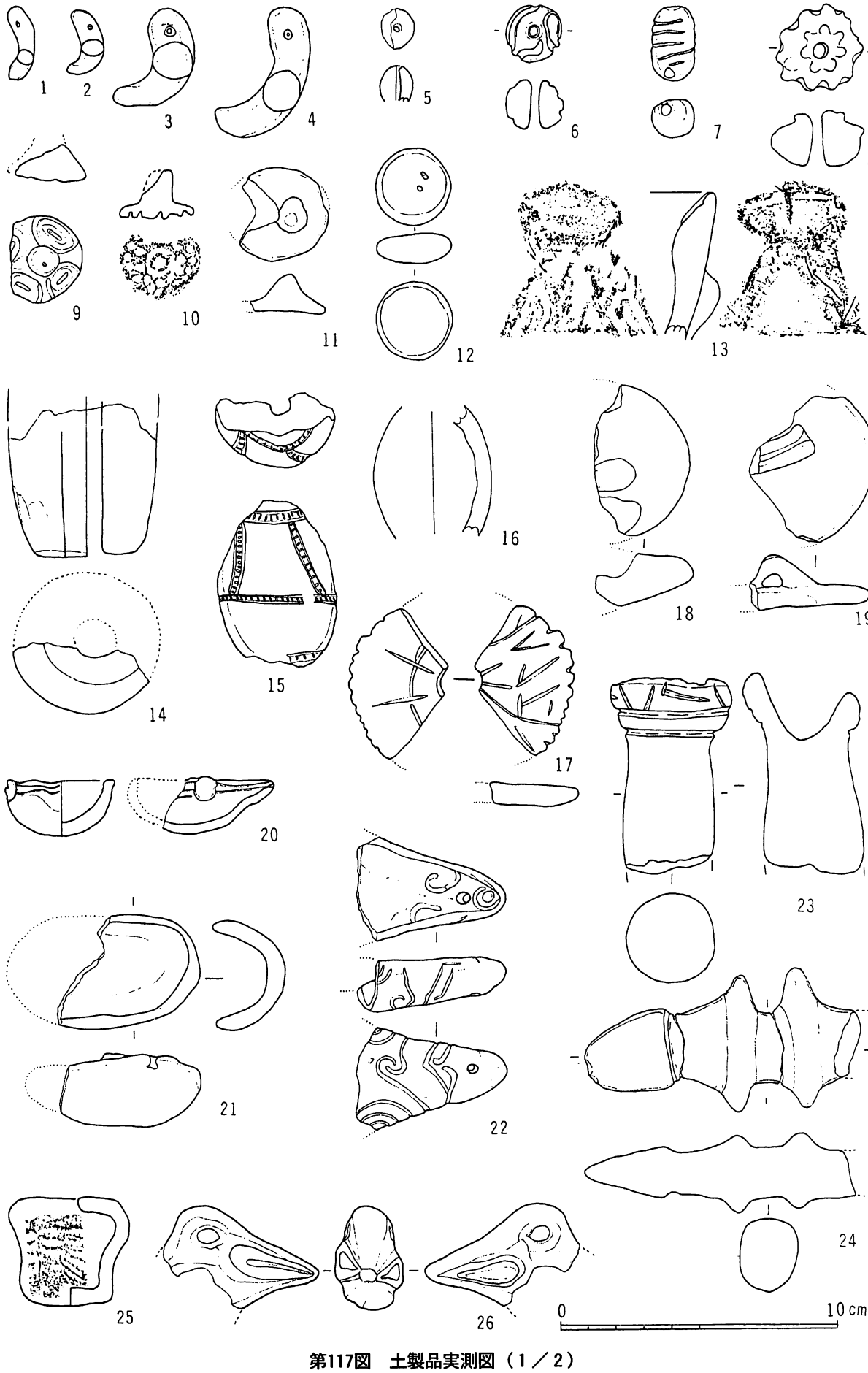
第114図　土製耳飾実測図⑤（1／2）



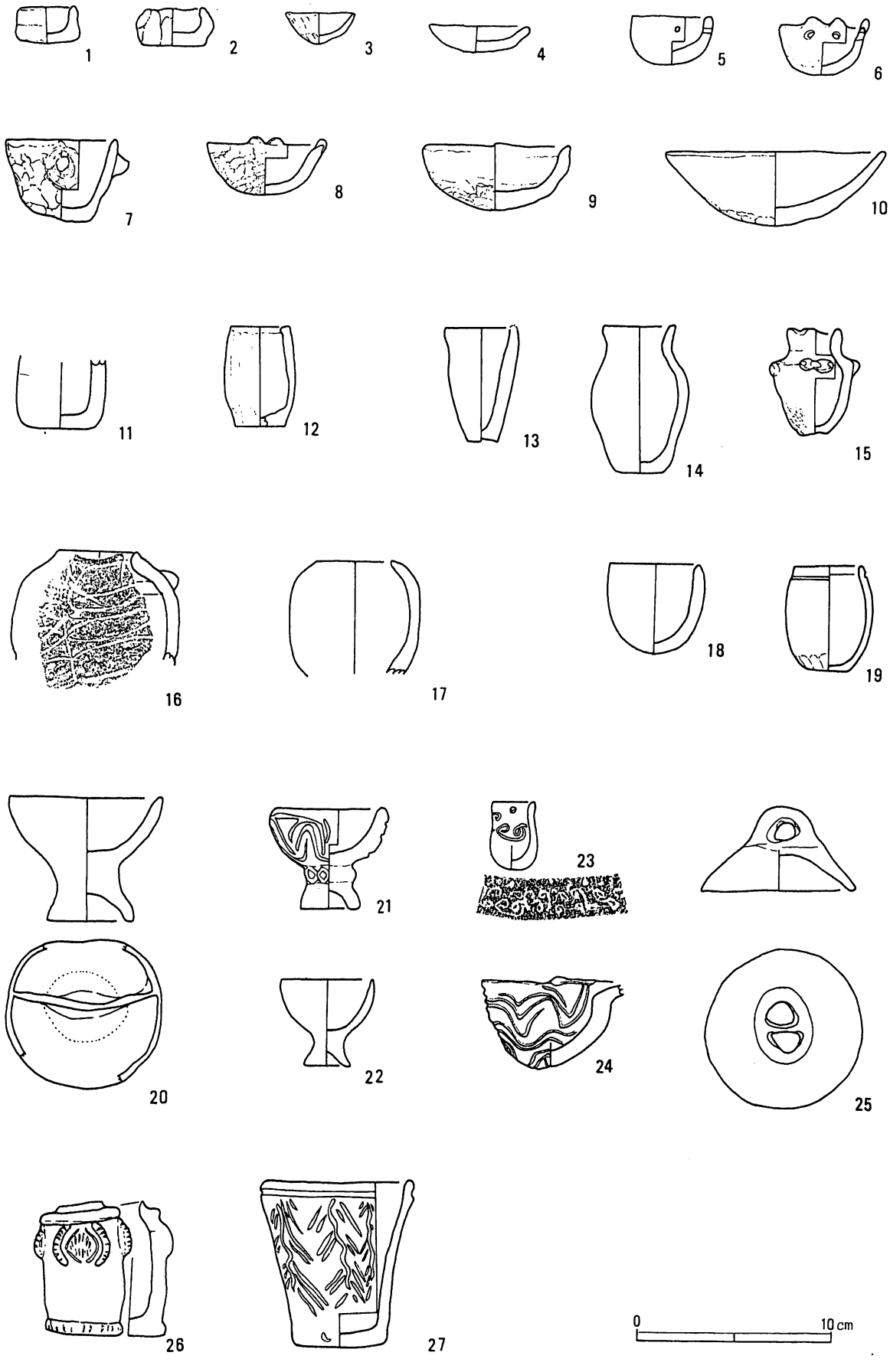
第115図　土製耳飾実測図⑥（1／2）



第116図　土製耳飾実測図⑦（1／2）



第117図　土製品実測図（1／2）



第118図　ミニチュア土器実測図（１／３）

みられるが、貫通はしていない。13は波状口縁深鉢形土器の波頂部の破片。内側に顔面が表現されている。後期後半の土器である。14～16は錘状の土製品。14・15は中央に孔が貫通する。この孔から、棒状の芯に粘土を張り付けて成形したことが考えられるが、16では手捏ねにより作られたもので、内部が空洞になっている。15は沈線と刺突により、施文されている。17は有孔円盤。中心部に孔が貫通し、縁には刻目が連続する。両面にはヘラ状の工具により沈線が描かれている。黒褐色を呈する。18は円盤であるが、片面中央に細長い窪みがある。その反対側の中央部はやや盛り上がり気味で、つまみ状をなすのかもしれない。小破片のためよく分からないが、蓋の可能性もある。19は蓋。上につまみが付けられ、内面はやや凹状をなす。20～22は匙状の土製品と思われるもの。20にはつまみ状の基部があるが、21は破損のため不明。22は基部の破片。先端に孔が貫通して、内外面に入り組み文等の沈線が施されている。23は第2号配石西側から出土した「石棒」状の土製品である。直径3㎝余りの棒状の先端が膨らみ、沈線により文様が刻まれている。この先端部の内部は、深く窪んでいる。破損しているため、全体の形状は不明。表面は良く磨かれている。黒褐色を呈する。24は独鈷石状の土製品。片方の先端が欠損。3カ所から出土した破片が接合したものである。淡い褐色を呈する。25は「笛」とみなした土製品。上部に「うけ口状」の孔があり、内部は空洞。手捏ねで成形されている。体部には縄文が施されている。黒褐色。26は土器の把手破片。

(6) ミニチュア土器（第118図）（表6）

1～6は超小型の手捏ね土器。5は1孔、6は2孔が貫通している。7には小さな把手状のつまみがある。8～10は皿状の器形である。11～15は細長く深い器形の土器。13は二次焼成を受けたらしく、赤化している。14・15は壷形をなすが、特に15は肩が張った器形で、波状口縁をなしている。16・17は無頸壷の破片。19は器面が磨かれ、整った器形の小型土器である。20～22は台付土器。20は内部が別れている。手捏ねで作られたもので、外面には指頭痕が顕著である。23は超小型の土器。24は片口の付いた特殊な土器。沈線による文様がみられる。25は本来第117図に図示すべき「蓋」である。26は口縁部の小さい壷形土器。隆帯と沈線とで装飾される。27は中期終末期の小型土器である。

第８節　石　　器

⑴　打製石斧（第119図～第123図）（表７）（表18）（表19）

表19から分かるように、遺跡全体からは400点を数える打製石斧が出土した。形態から、次のように分類できる。

Ⅰ類　短冊形（第119図・第120図）

Ⅱ類　分銅形　①大型（15㎝以上・第122図３～８）

②中小型（15㎝未満・第122図１・２、第123図１～９）

Ⅲ類　撥型（第121　図）

Ⅳ類　丸形（第123図10～12）

各タイプごとの点数は、Ⅰ類　232、Ⅱ類①　14、Ⅱ類②　94、Ⅲ類　56、Ⅳ類　４、である。短冊形が全体の58％と圧倒的に多く、次いで分銅形の27％であり、撥形は14％にすぎない。大きさからみると分銅形の場合、15㎝を越す大型のものが14点と１割強認められる。特に第122図８のように24㎝近い大型もみられが、これはまさに「石鏃」とでもいうような形態である。他のタイプにも大小が認められ、短冊形では第120図９、第119図13・14が20㎝前後を測り、撥形では第121図12が23.5㎝と大型である。第123図10～12を丸形とし打製石斧に分類したが、機能的には検討が必要である。

出土地点については表18にまとめてあるが、住居では第６号・13号から13点、第20号から16点、第30号から20点出土しているが、全体には出土数にバラつきがある。但し、遺構出土の場合、ほとんどが覆土中からのものである。また、配石では第１号からの出土が目立っており、グリッドでも第１号配石前面のＤ－６区に多い。

⑵　磨製石斧（第124図～第126図）（表８）（表18）（表19）

表19にまとめたように１５２点出土。形態から、以下のように分類できる。

Ⅰ類　乳棒状（第125図５～１２、第126図）

Ⅱ類　定角式　①中・大型（8.1㎝以上・第124図21～31、第125図１～４）

②小型（４～８㎝・第124図３～20）

③超小型（４㎝未満、第124図１・２）

各タイプごとの点数は、Ⅰ類　71、Ⅱ類①　52、Ⅱ類②　27、Ⅱ類③　２、である。但し第124図20・21はその他に分類すべきであろうが、ここでは定角式に含めてある。いずれにしても、乳棒状と定角式とは同数に近い数値である。定角式では中・大型が65％を占め、その中には20㎝前後と思われる大型の破片（第125図１・２）もみられる。４㎝以下の超小型品は少ない。

出土状況については、第124図22・23が石剣とともに出土した以外は、特に他の石器や土器の出土状況とかわらない。22は第５号配石から、石剣（第140図３）の「枕」になったような状態で出土したものである（第80図）。また、23も第31号住居から同様な状態で石剣（第140図６）とともに発見されている。出土地点についてはやはり第１号配石およびＤ－６区に多く、またＣ－13区、Ｄ－11区、Ｅ－13区等の北側部分にも多い傾向が窺われる（表18）。

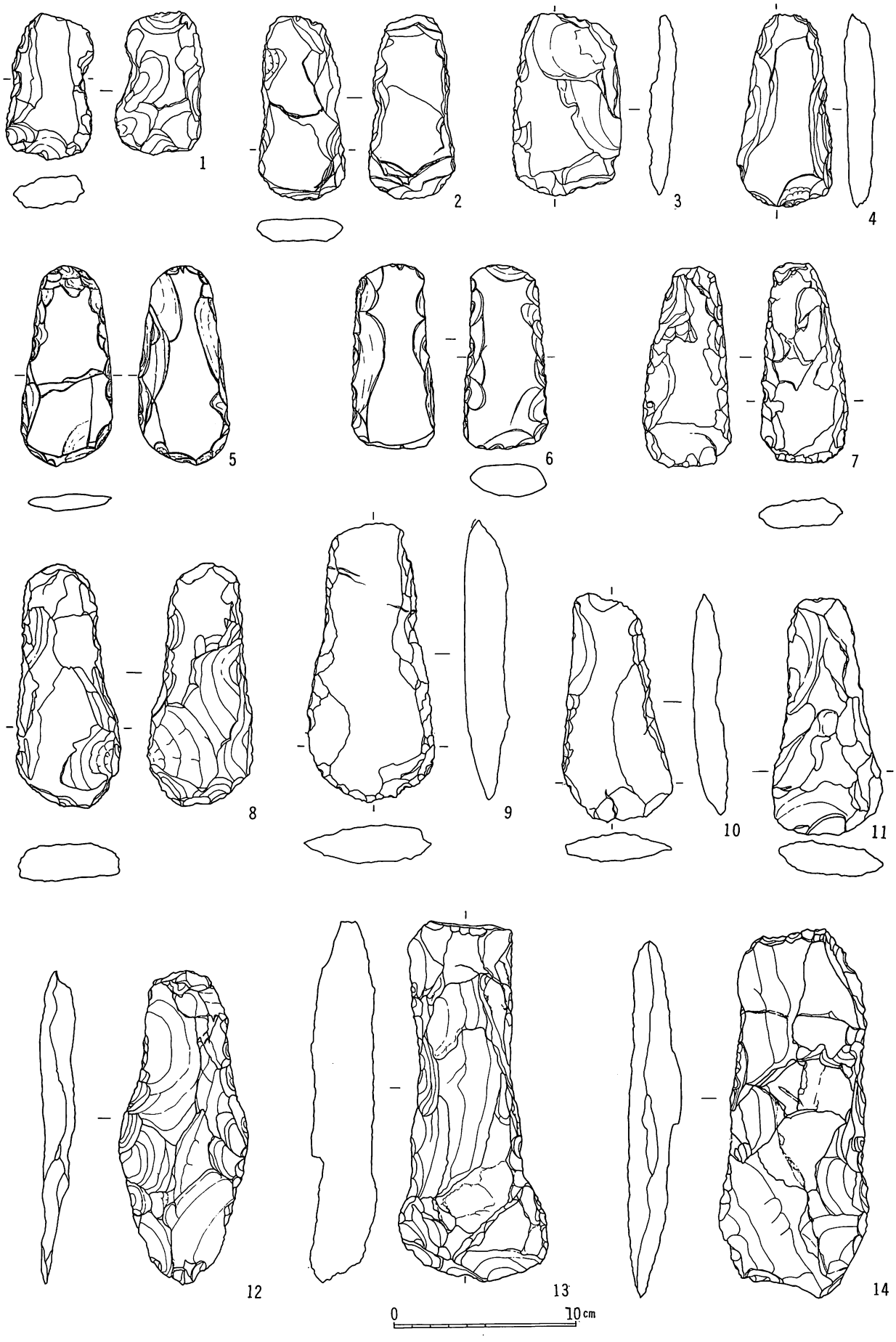
⑶　磨石（第127図～第131図）（表９）（表18）（表20）

遺跡全体から448点が出土。形態から以下のように分類した。

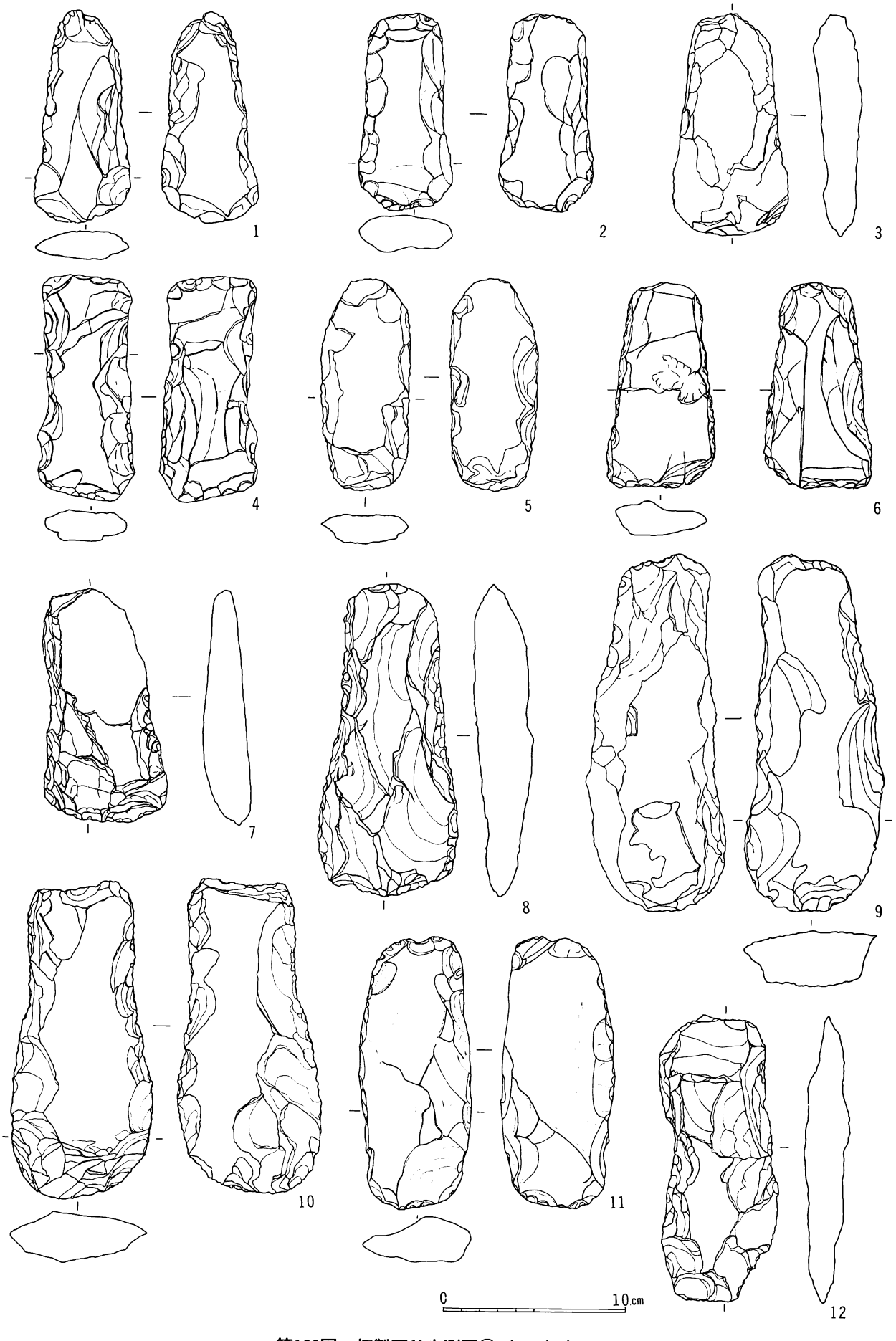
Ⅰ類　長方形ないし隅円方形　①凹みがあるもの（第127図１～３）

②敲打痕があるもの（第127図４・７）

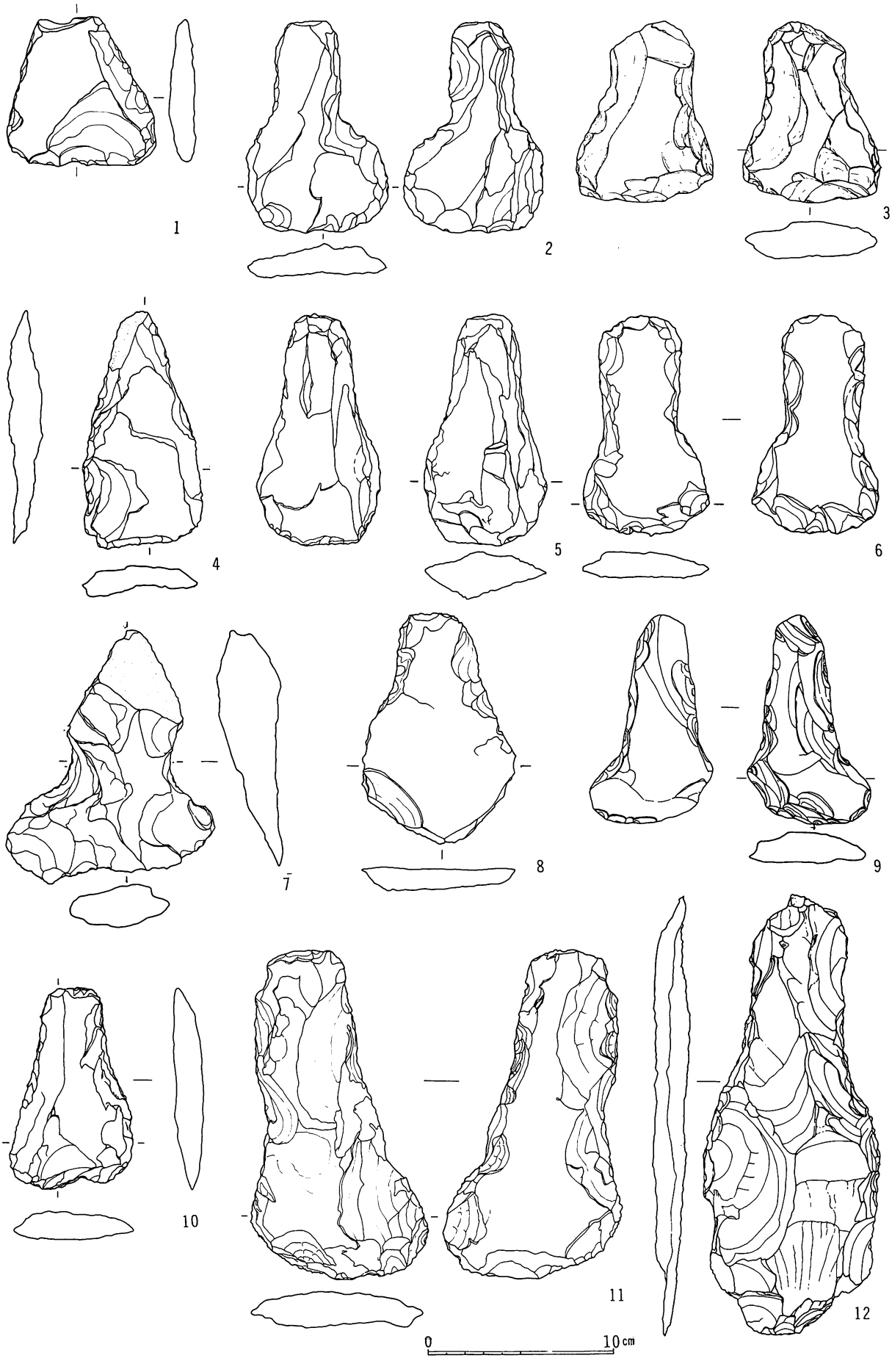
③磨滅痕があるもの（第127図５・６・８・９）



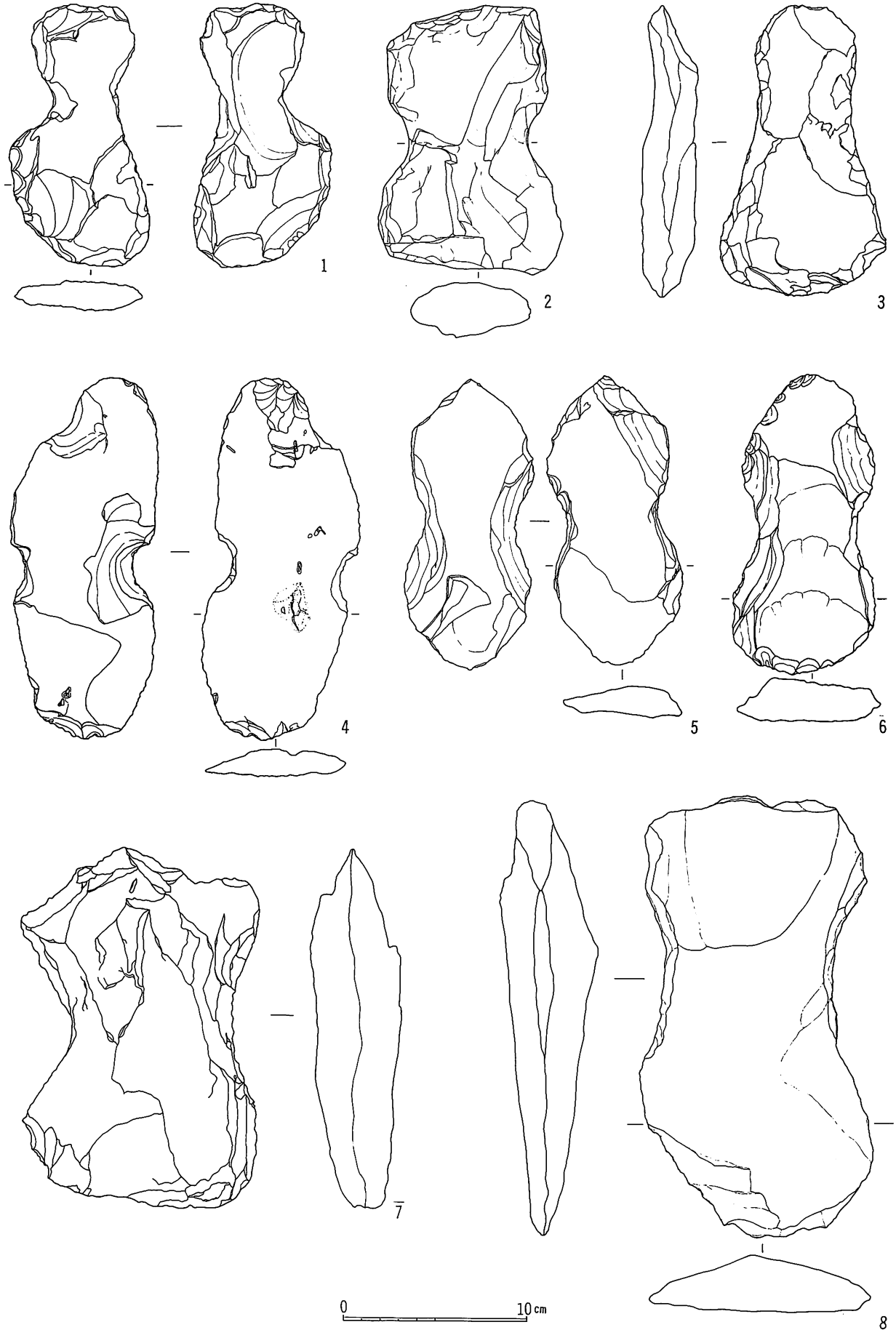
第119図　打製石斧実測図①（1／3）



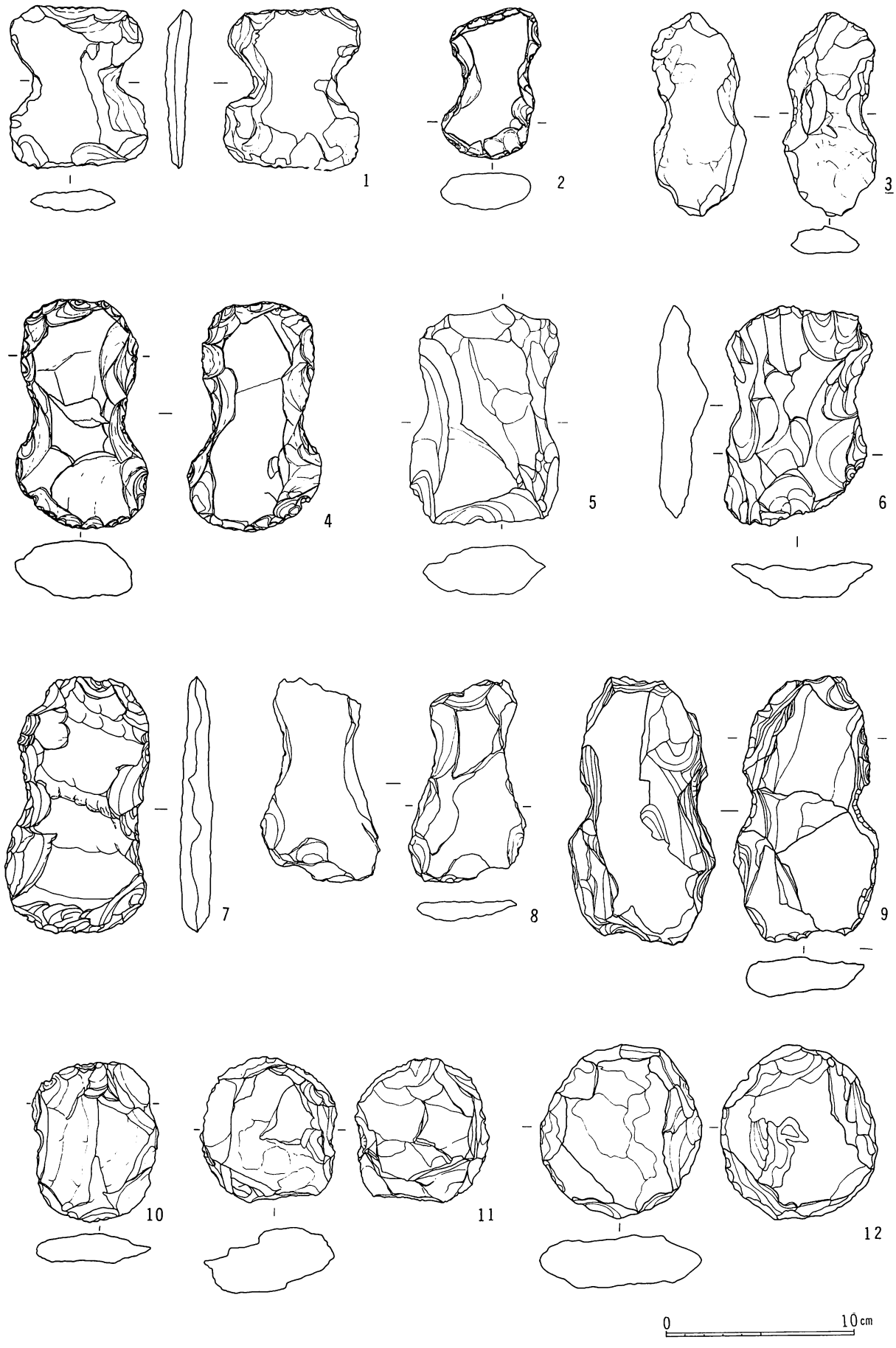
第120図　打製石斧実測図②（1／3）



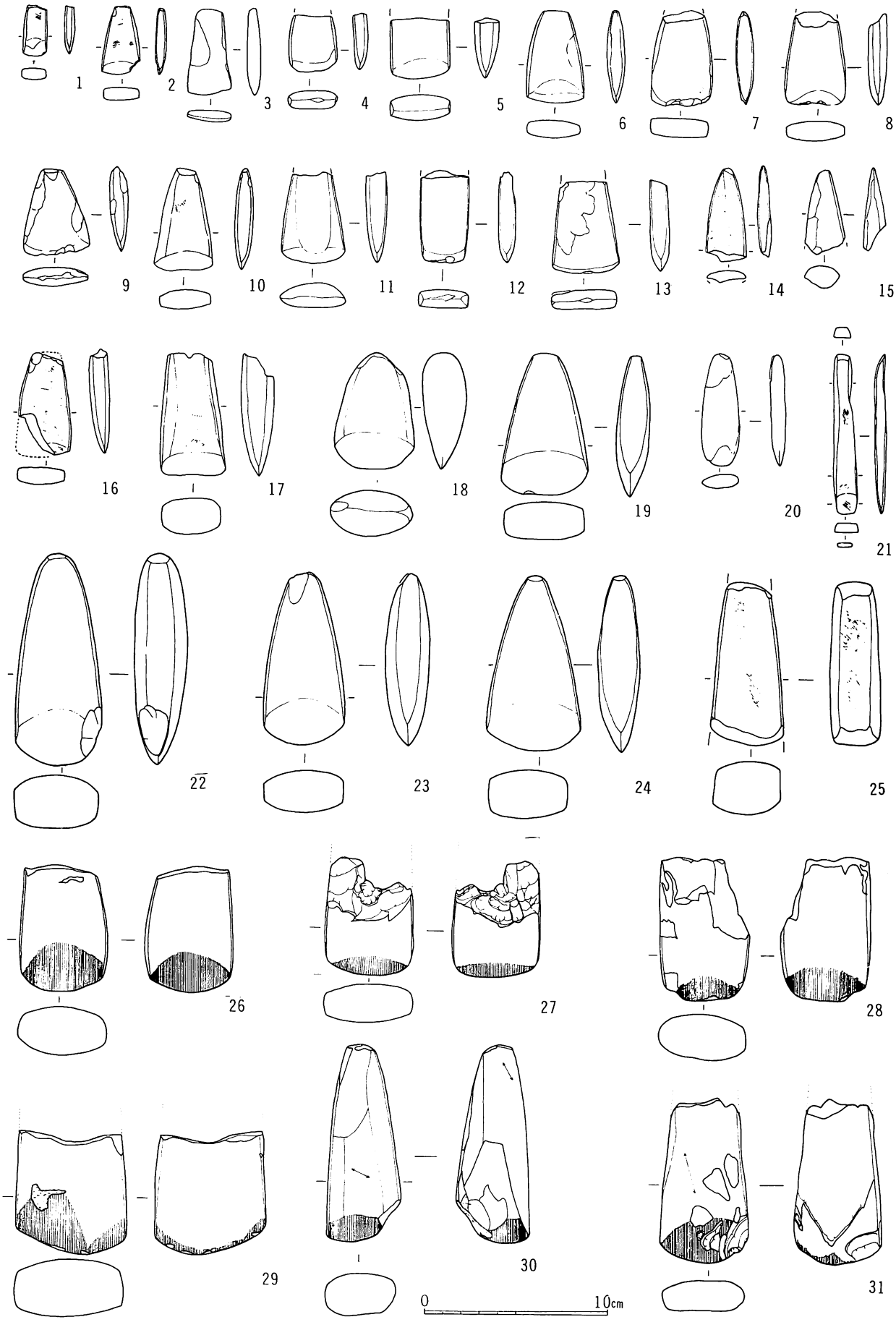
第121図　打製石斧実測図③（1／3）



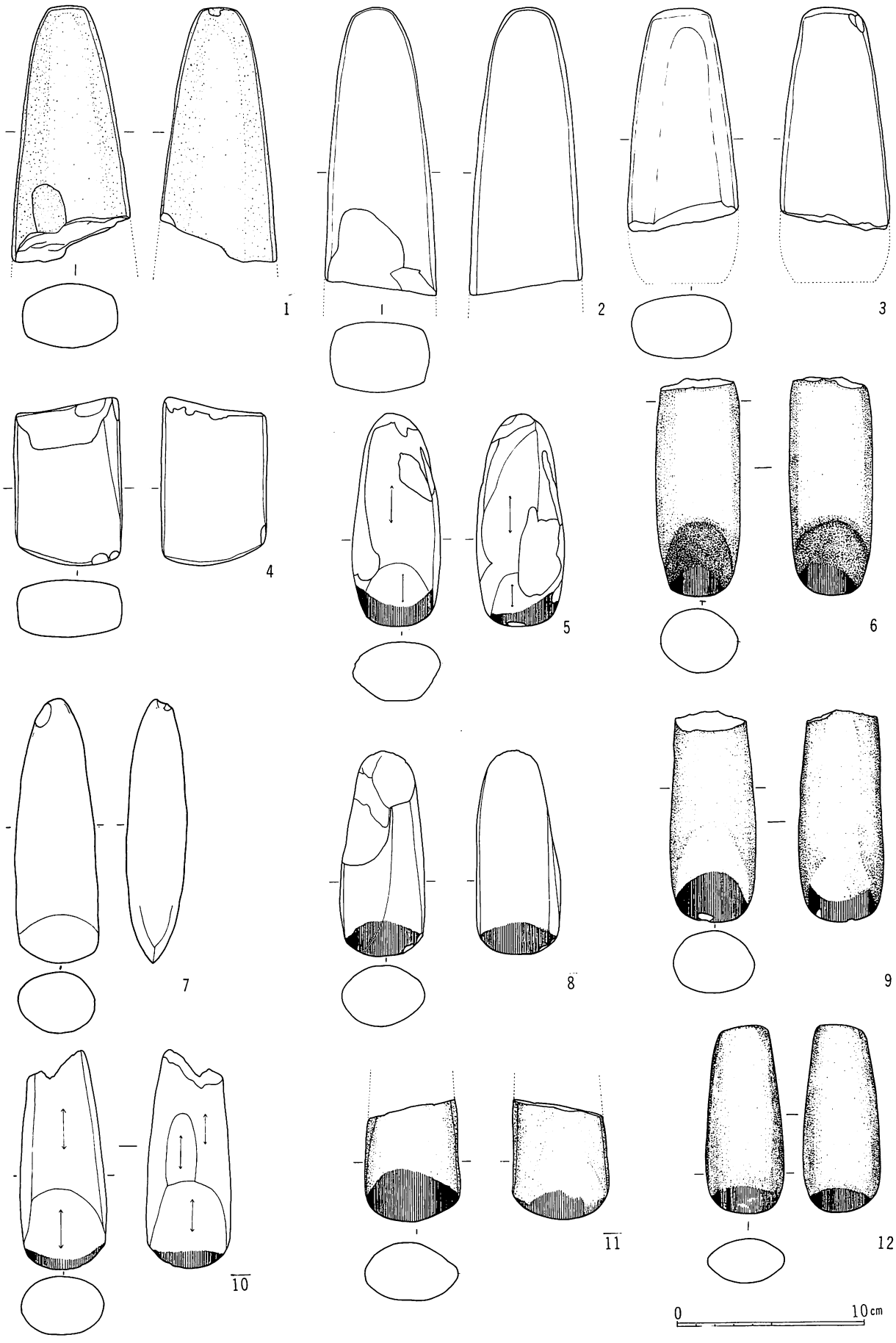
第122図　打製石斧実測図④（1／3）



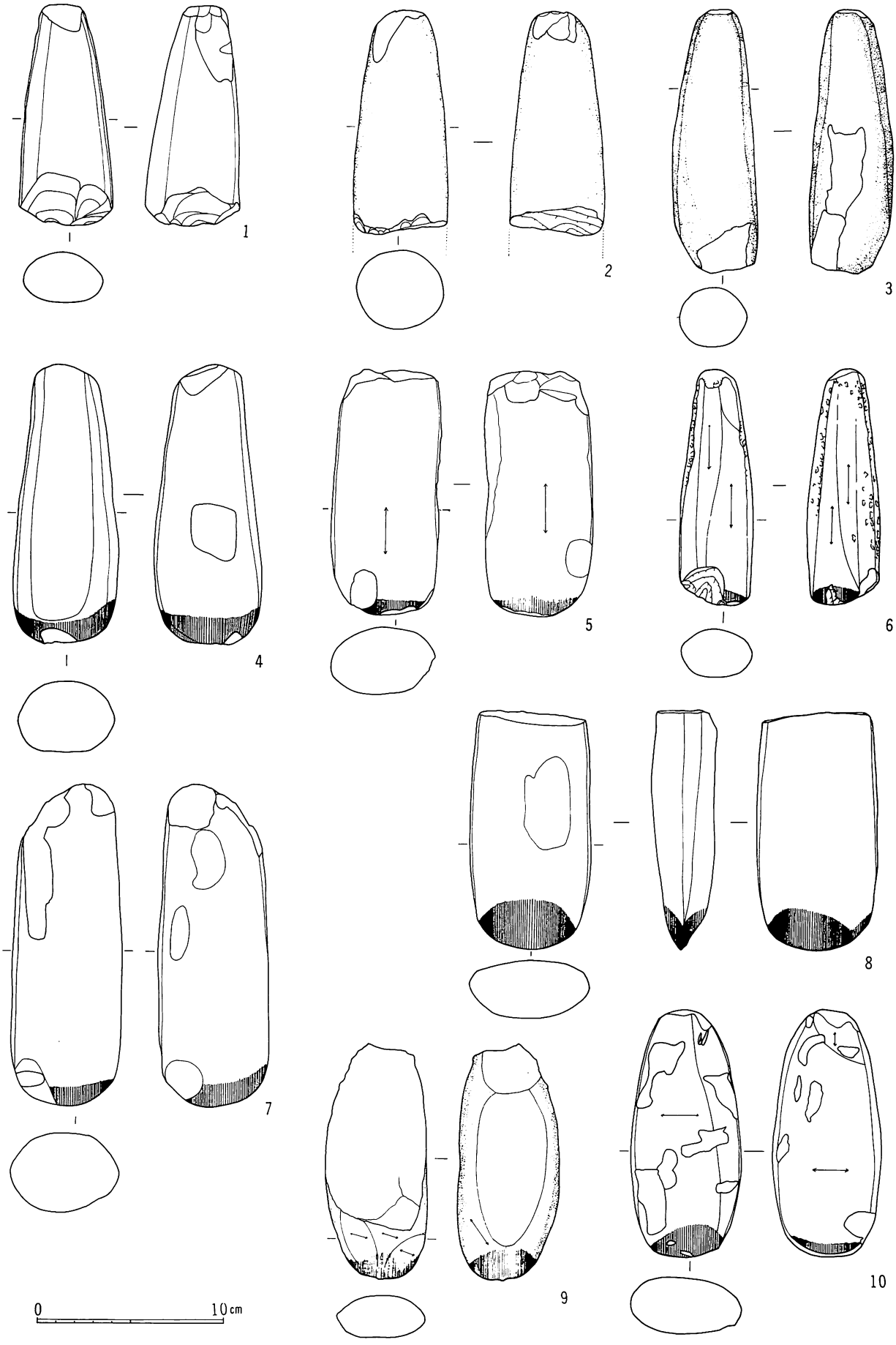
第123図　打製石斧実測図⑤（1／3）



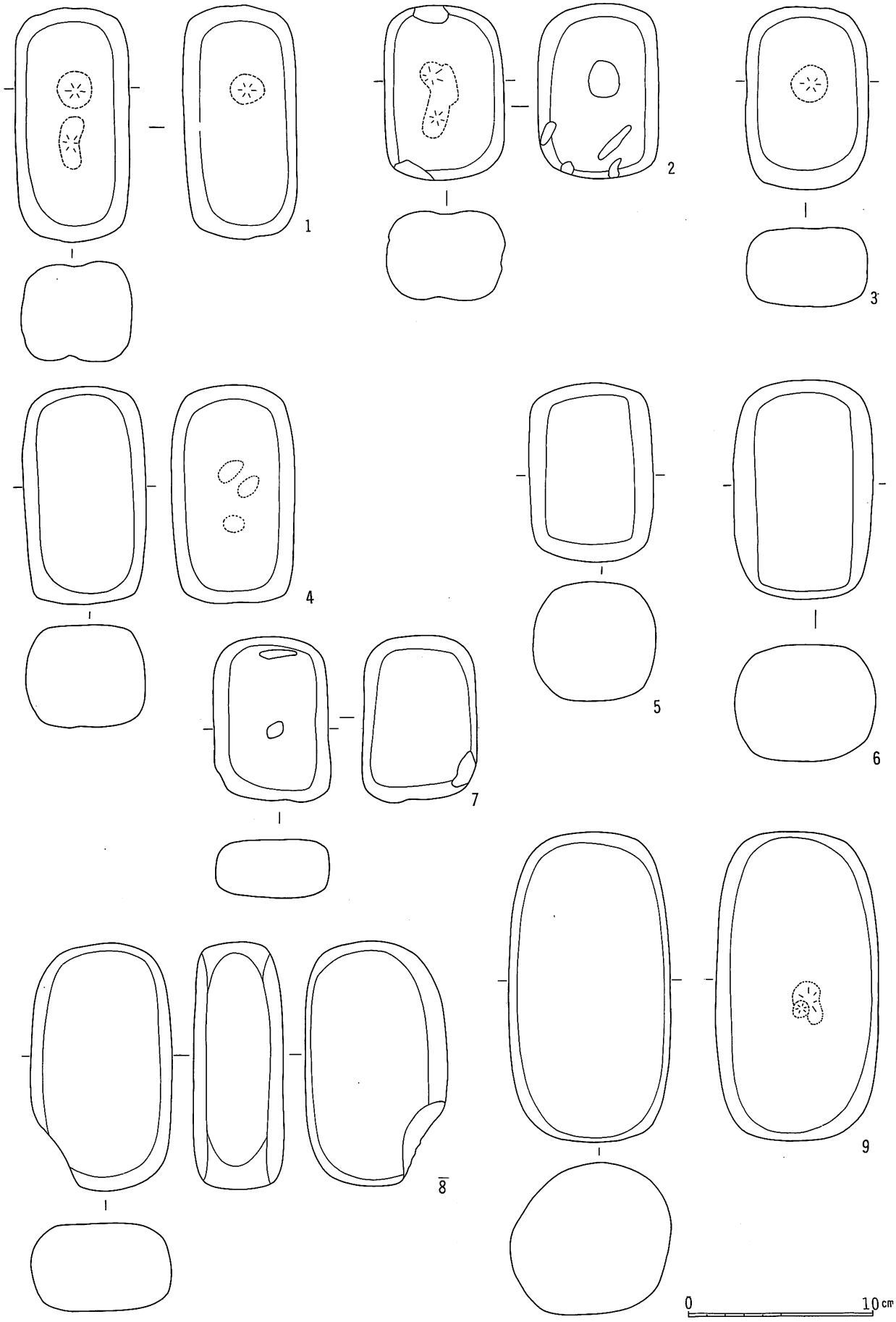
第124図　磨製石斧実測図①（1／3）



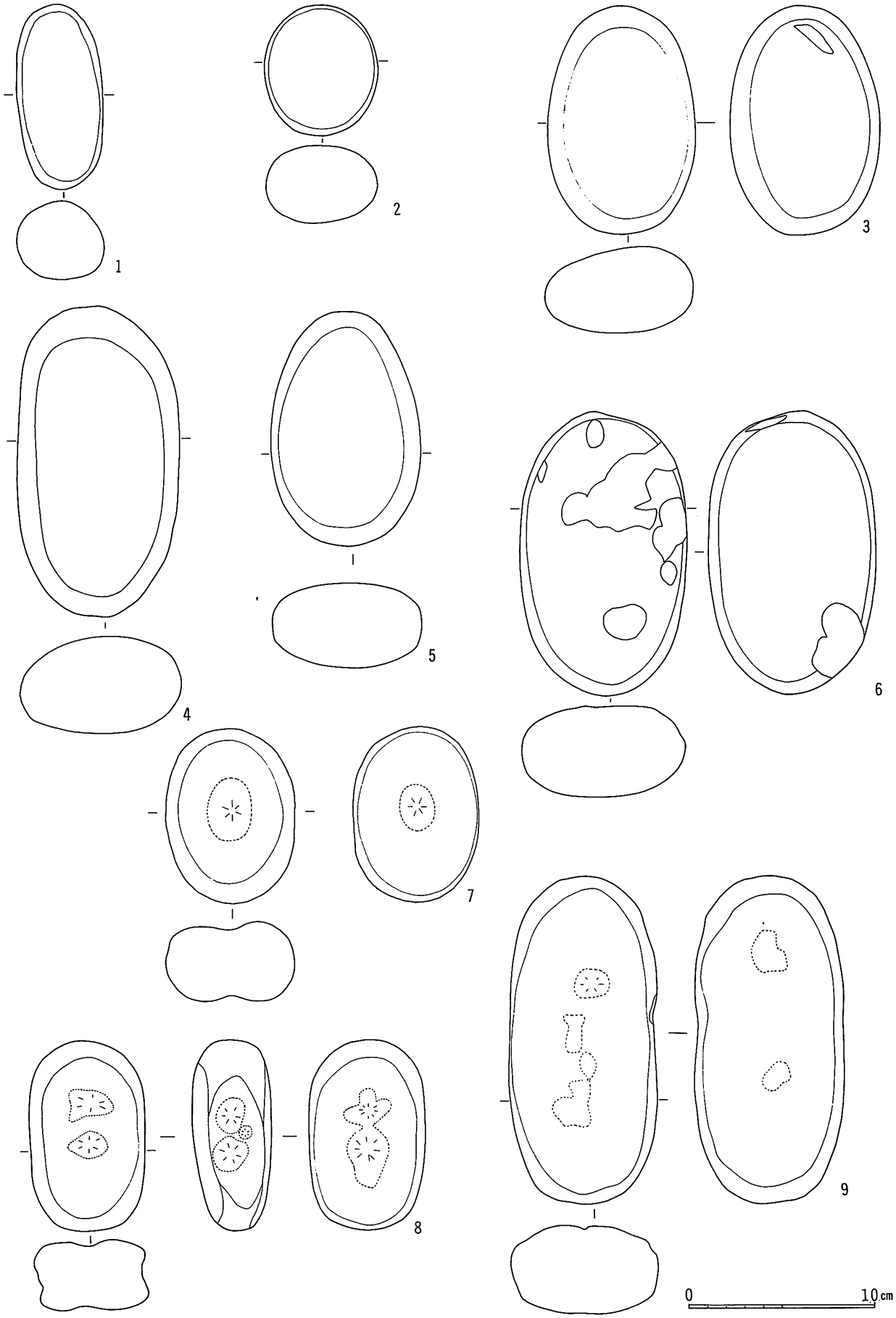
第125図　磨製石斧実測図②（1／3）



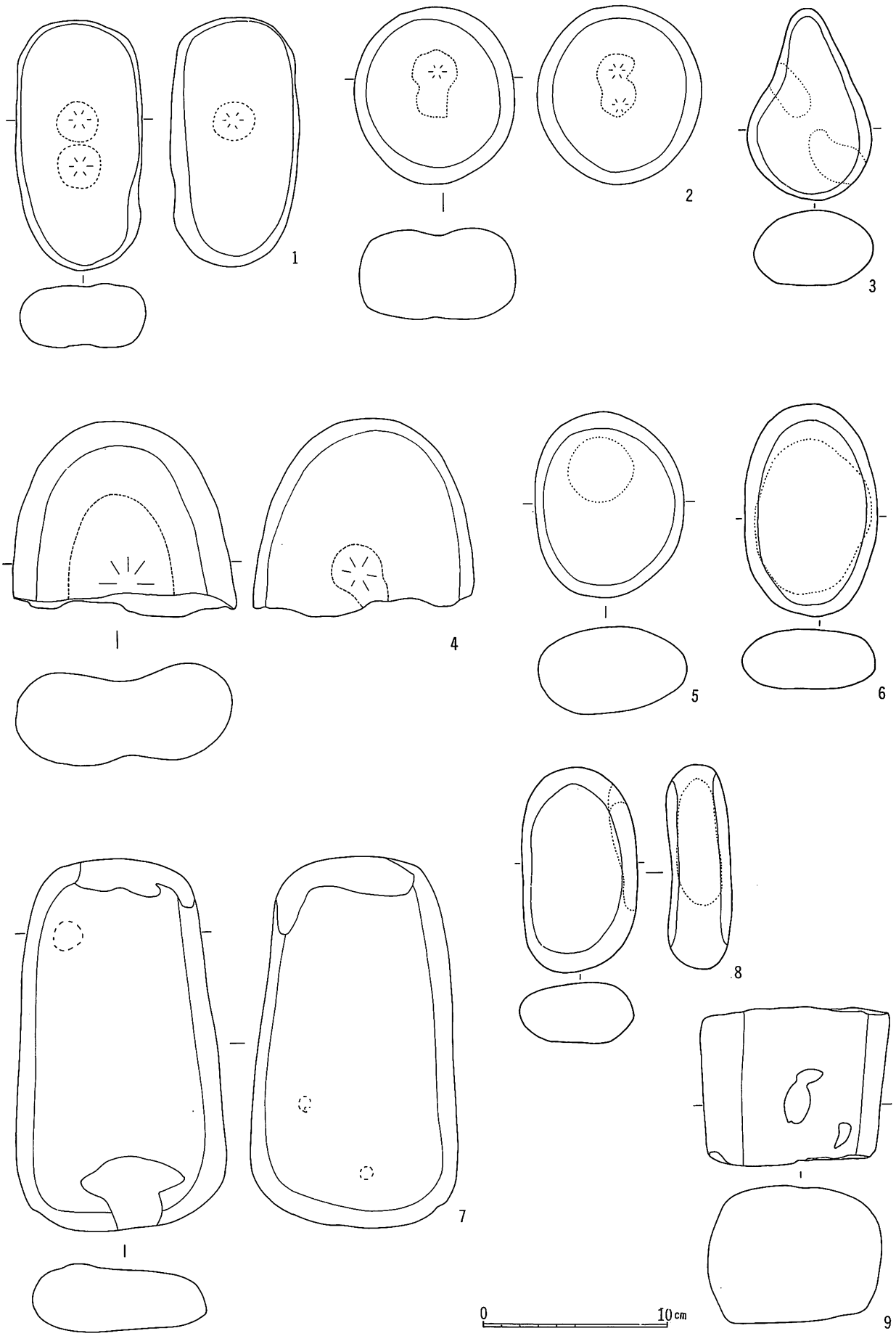
第126図　磨製石斧実測図③（1／3）



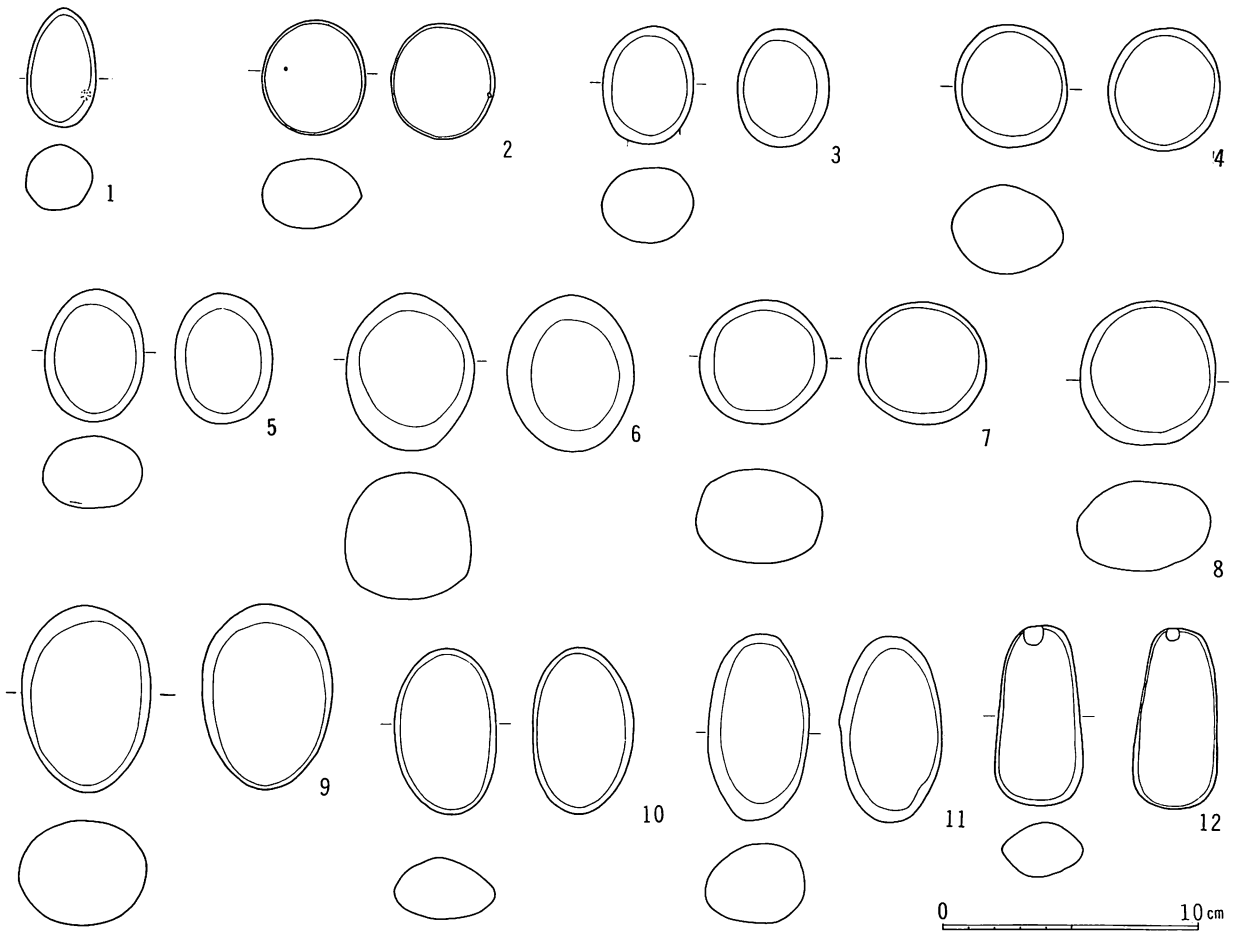
第127図　磨石実測図①（1／3）



第128図　磨石実測図②（1／3）



第129図　磨石実測図③（1／3）



第130図　磨石実測図④（1／3）

II類　楕円形ないし円形　　①凹み（第128図7～9、第129図1・2・4）
②敲打（第128図3・6）
③磨滅（第128図1・2・4・5、第129図3・5～8）

III類　小丸石　（第130図）

IV類　その他　（第131図）

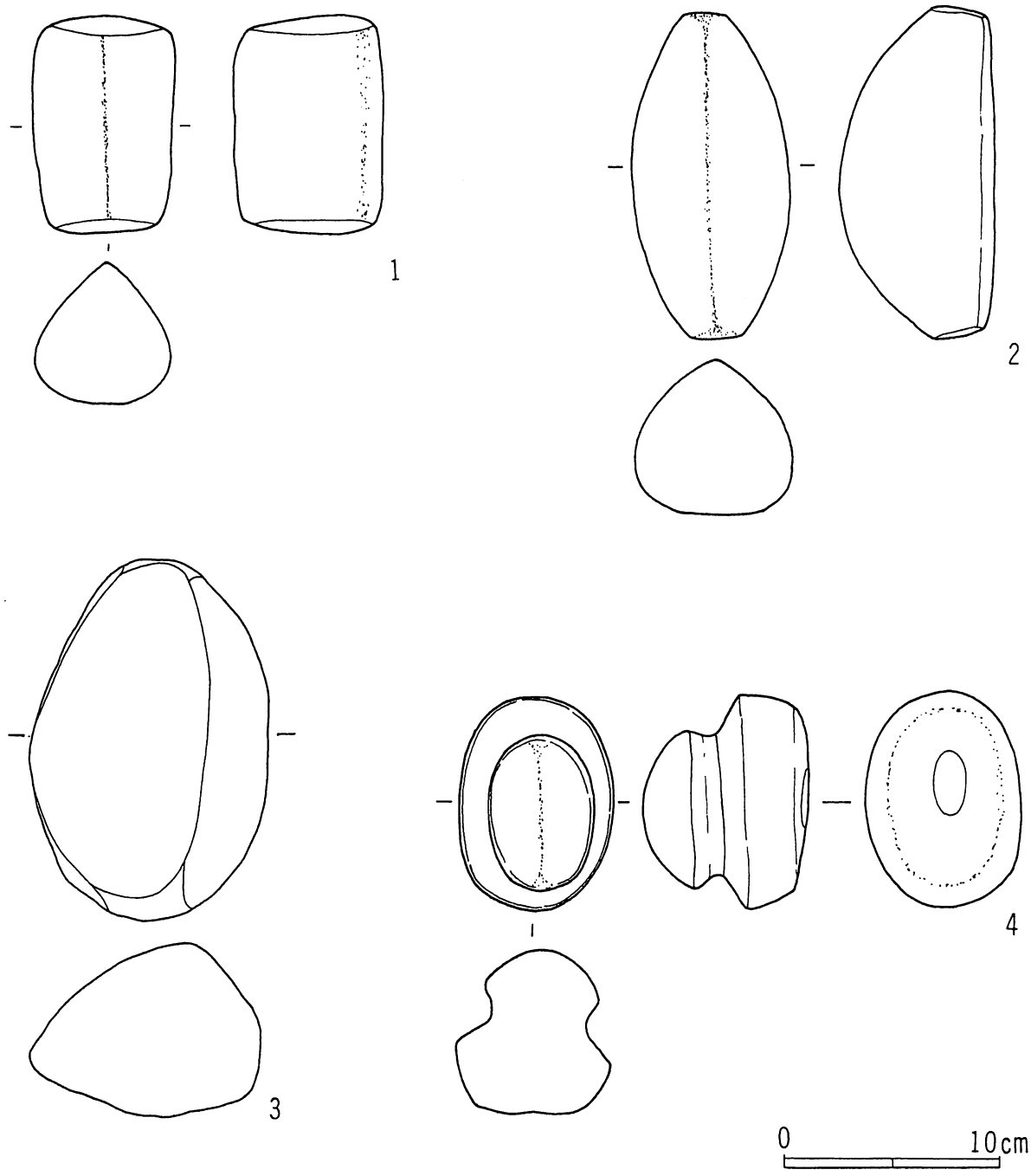
V類　転用　（第129図9）

この分類について、特に②敲打痕③磨滅に関しては必ずしも明確に区分けできたわけではない。一応分類を試みたものである。各タイプの数量については、I類57点、II類328点、III類50点、IV類8点、V類4点であった（表20）。圧倒的にII類が多く、磨石全体の74%にも達している。このII類における使用痕からの分類では、①凹みのあるものが177点で54%に近く、②敲打痕43点（13%）、③磨滅痕108点（33%）という比率である。このような傾向はI類にも共通している。これらの数量については、表20のとおりである。

II類③に分類した、第129図3・5・6・8の4点には、赤彩が付着していた。実測図中の破線で囲んだ部分である。顔料を擦り潰したものと考えられる。また、7は石皿状の石器であるが、これ自体も磨石として用いられれたものであろう。9は石棒の転用品。

IV類に分類した第131図の4点は、いわゆる「石冠」状の形態である。ここでは磨石として分類したが、1の石質はデイサイトであり、他に比べてやや異質である。

出土地点については、第27号住居21点、第30号住居18点、第1号配石38点、第4号配石15点が多い箇所である。いずれも、ほとんどが覆土中からの出土である。なお、第4号配石のあるD－12区からも24点が出土しており、発掘区北側からの出土が多い。

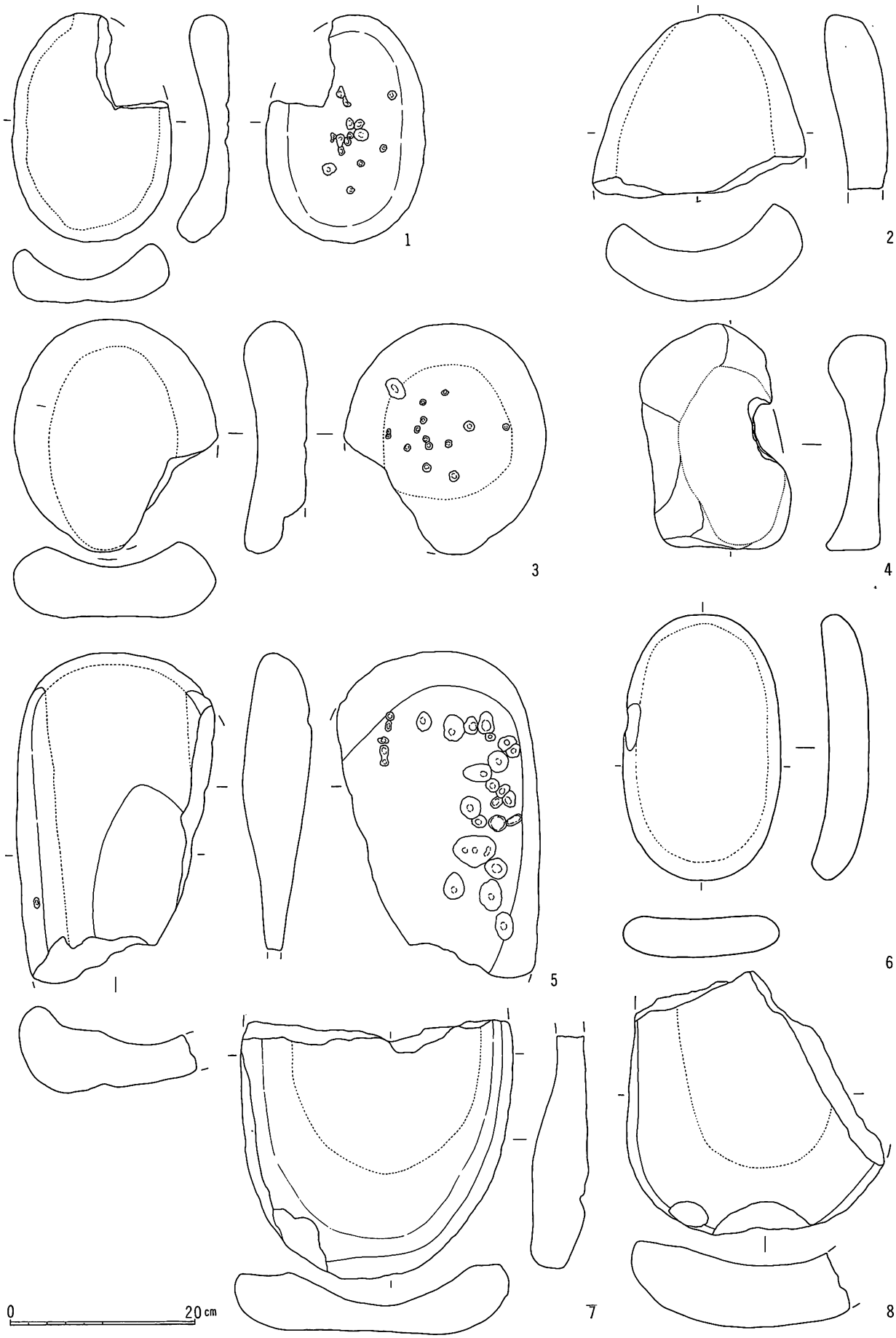


第131図　磨石実測図⑤（1／3）

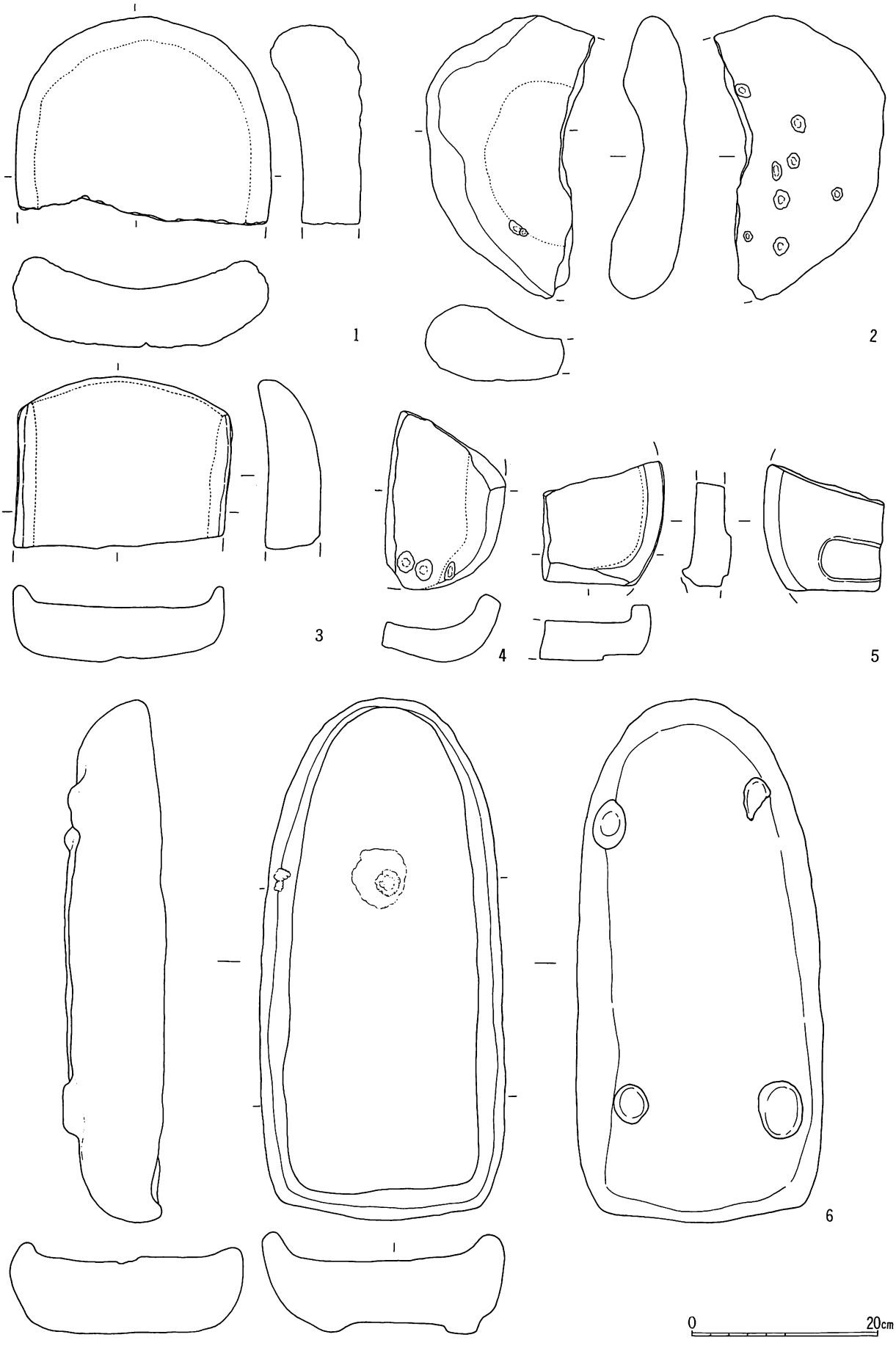
(4) 石皿（第132図・第133図）（表10）（表18）

遺跡全体から37点が出土した。ほとんど破片であるが、第132図6、第133図6のような完形もみられる。第133図6は発掘品ではなく、水田の畦畔に用いられていたもので、かつて掘り出されたものとのことである。これが出土した地点は、第1号配石付近に該当している。ほかにも1点、この石皿に類似したものが掘り出されたとのことである。舟形をした脚付きの石皿で、磨面に一部窪みがある。同図5も小破片ながら脚部が認められ、同じタイプの石皿と思われる。また、3・4も同様のものかもしれない。

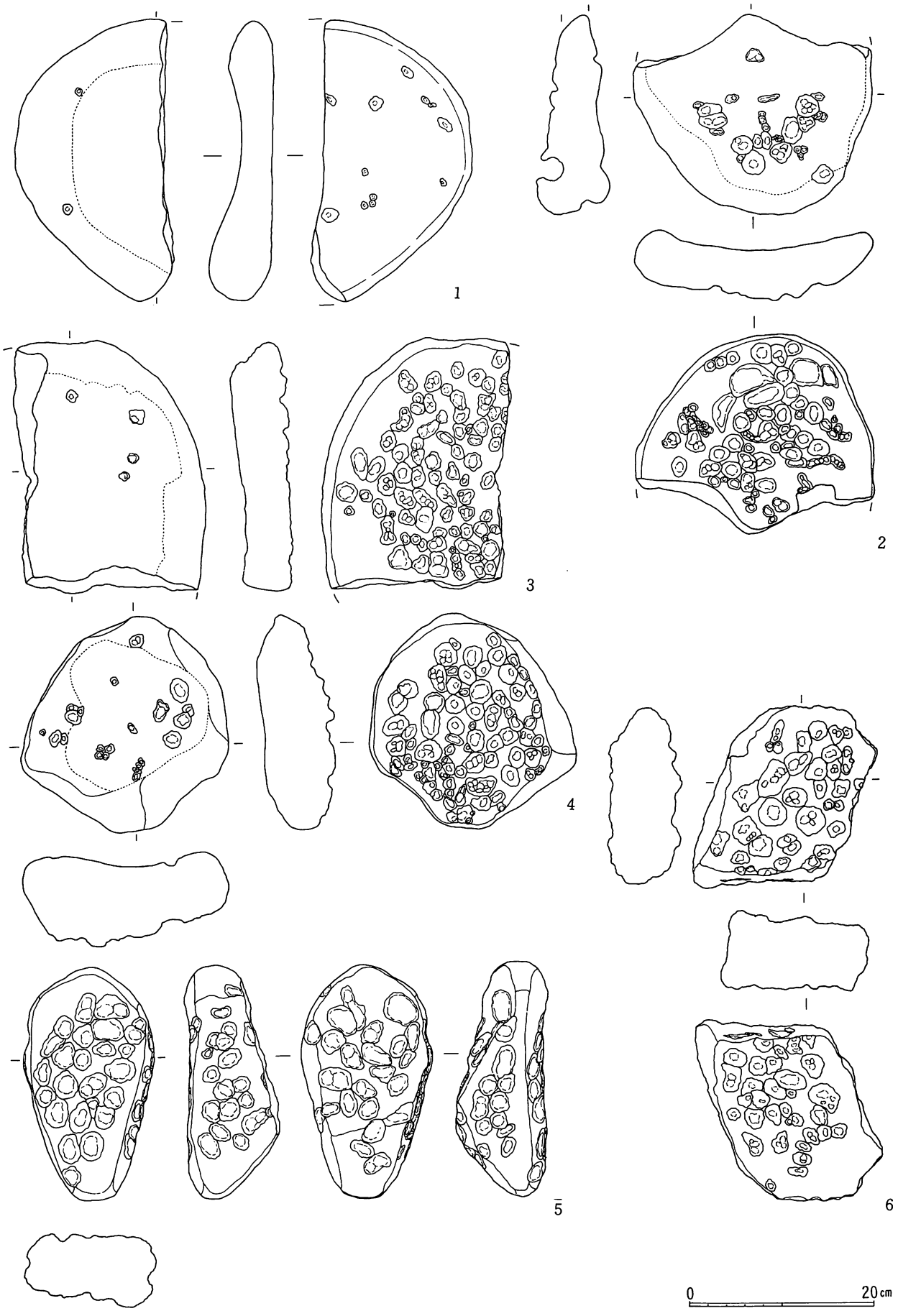
裏面に凹みがあるもの（第132図1・3・5）、両面に凹みがあり（第134図1）、さらに多くの凹みが密



第132図　石皿実測図①（1／6）



第133図　石皿実測図②（1／6）



第134図　石皿・多孔石等実測図（1／6）

集するもの（第134図２・３・４・６）等がみられる。第134図５は石皿ではなく、いわゆる「蜂の巣石」である。

第４号配石から４点、第22号から３点出土しているが、全体にまばらな出土状況である。

(5) 石錘（第135図１～８）（表11）

８点が出土した。１・４は切り目石錘で、溝が全周する。ただ４は溝が浅く、細かい数条が認められる。一部に赤彩が残っている。２・３・６は長軸上の両端に切り込みがつけられている。７・８は石剣を利用したもので、短軸方向に切り込みが入っている。

(6) 軽石製品・他（第135図９～11）（表11）

３点みられる。いずれも隅円長方形をした偏平なもので、上部中央に孔が貫通している。10はスコリアからつくられている。９・11は欠損品。角閃石デイサイト製である。

(7) 砥石（第136図）（表12）（表18）

破片も含め、遺跡全体から79点が出土。磨滅の状況からいくつかに分類できる。

Ⅰ類　偏平で全体に磨滅しているもの（１～11）
Ⅱ類　研磨面が浅く窪むもの（12～17）
Ⅲ類　研磨面に溝が走るもの（21～28）
Ⅳ類　全体に磨かれて特定の形状をなすもの（18～20）

Ⅰ類では、１・３のような小型と、11のような大型とがみられる。Ⅱ類では12のように全体幅広く窪むものと、13のような溝状に窪むものとがある。Ⅲ類では、溝１条から数条がある。28は大型品。石質は多くが砂岩である。Ⅳ類では、18は各面が磨滅しており整った形状。19・20は側面に擦り込み状の磨滅痕が認められる。

出土地点については、特にきわだった特徴は認められないが、第１号配石とその前面および調査区の北側にやや多い傾向がみられる。

(8) 石鏃（第137図）（表13）（表18）（表19）

1931点が出土した。いくつかの形態があり、次のように分類し、それぞれの数量をあげてみた。

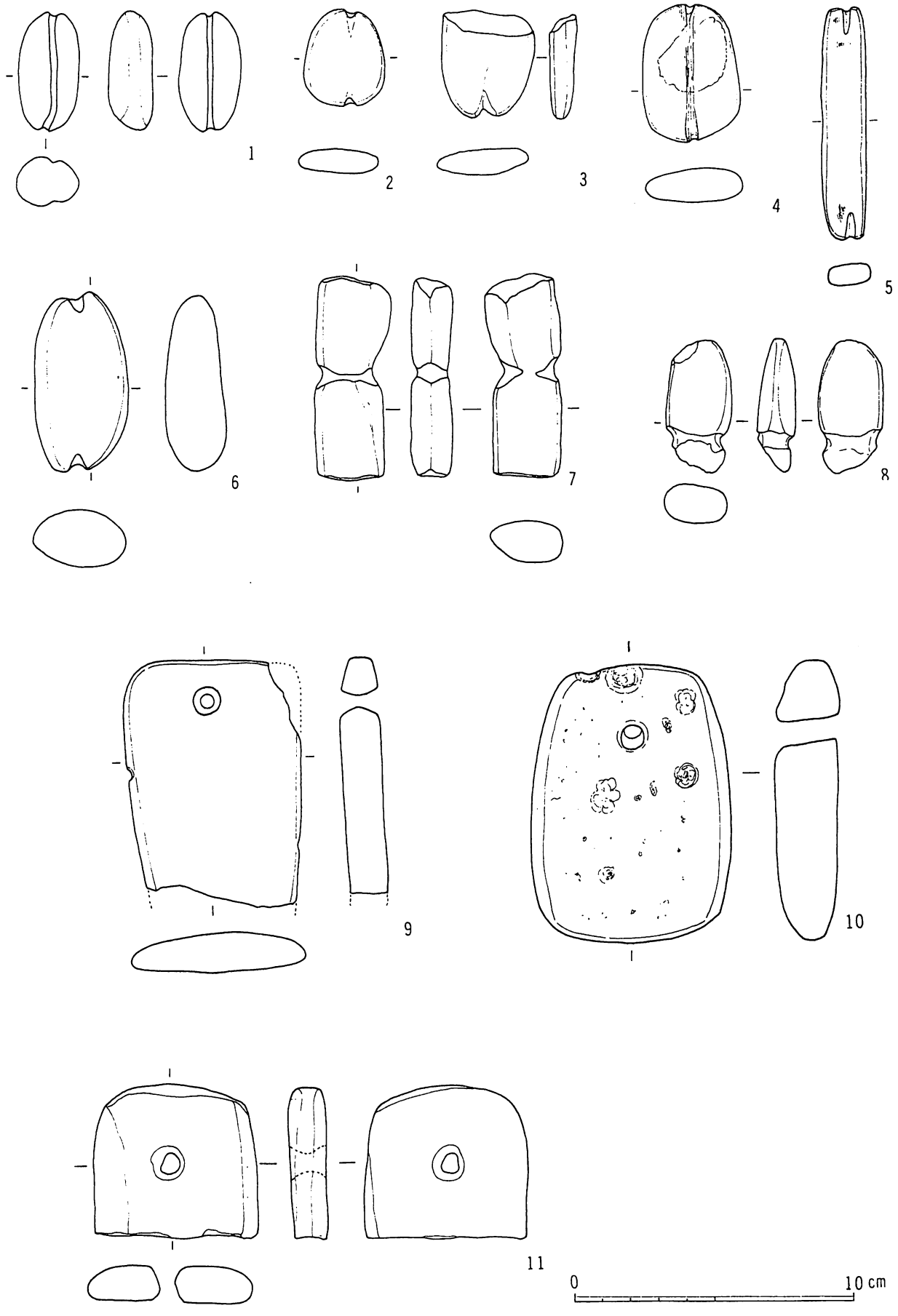
Ⅰ類	無茎（第137図１～18）	853点	Ⅱ類	平形（19～25）	92点
Ⅲ類	有茎（26～38）	347点	Ⅳ類	柳葉形（39～44）	22点
Ⅴ類	槍形（45～50）	28点	Ⅵ類	大型（51・52）	15点
Ⅶ類	未成品	344点	Ⅷ類	破損品	230点

Ⅰ類の無茎については、脚部の状態や側面の角度等にバラエティがあるが、一括して分類した。Ⅱ類の平形とは基部が直線的で、三角形を基本とするもの。24や25のような側面がくびれたり長いものも含めた。Ⅲ類有茎にも翼の形状にいくつもの種類があるが、これも一括した。Ⅳ類・Ⅴ類については類似したものもあるが、Ⅴ類は細身のものが多い。

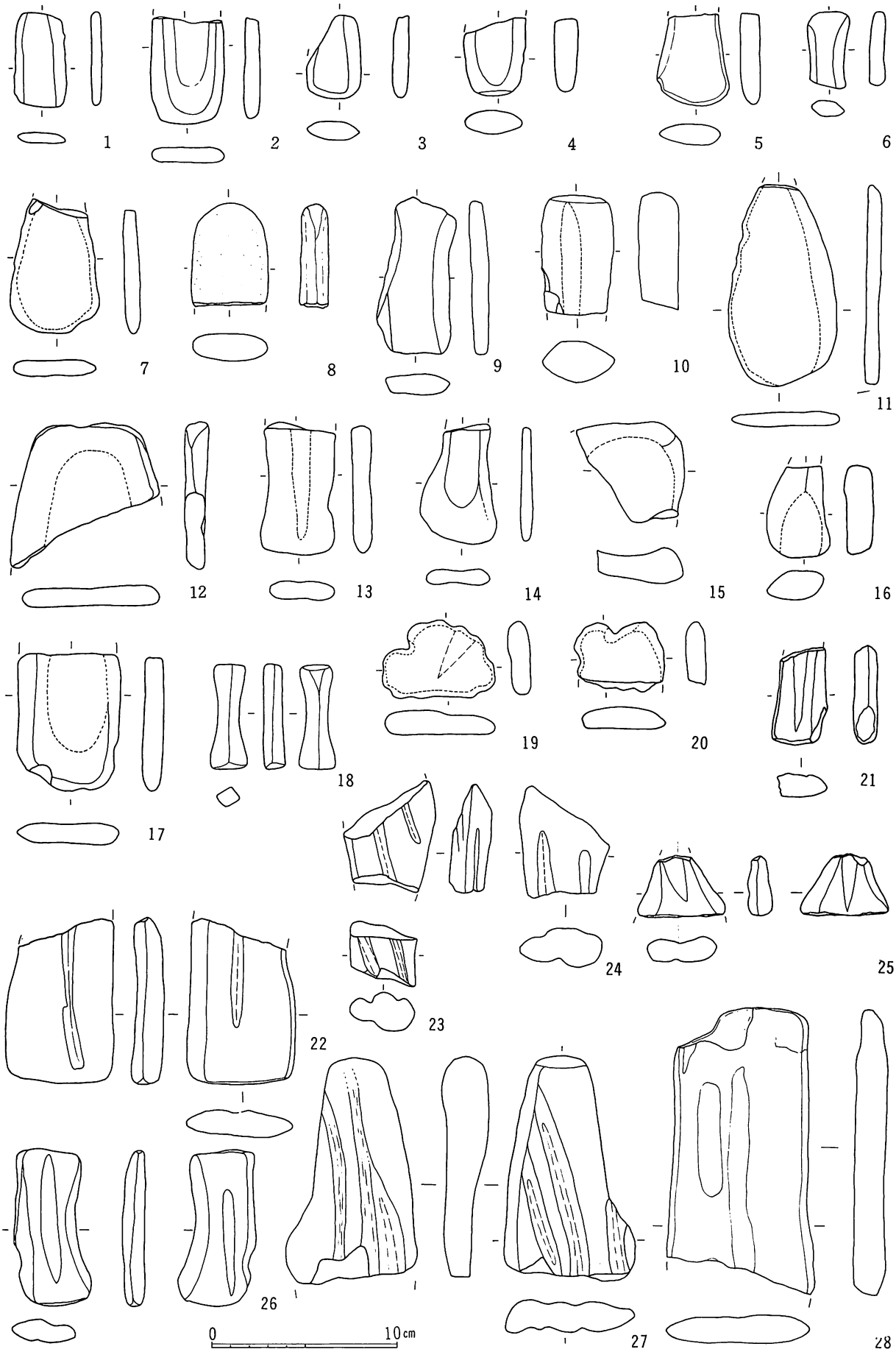
数量については、未成品・破損品あわせて30％近くあるが、無茎鏃が最も多く、次いで有茎であり、槍形・柳葉形・大型等は少ない。石質は黒耀石が全体の80％を越しており、チャートが15％余り、他に玉髄や頁岩等が若干用いられている。

出土地点については、表18のとおり遺跡全体に出土しているが、特に第１号配石から322点と多く出土している。さらにその前面にあたるＤ－６から109点が出土しているのを始めとし、第１号配石の周囲から多く出土する傾向がある。住居では第17号・18号からの出土が多い。

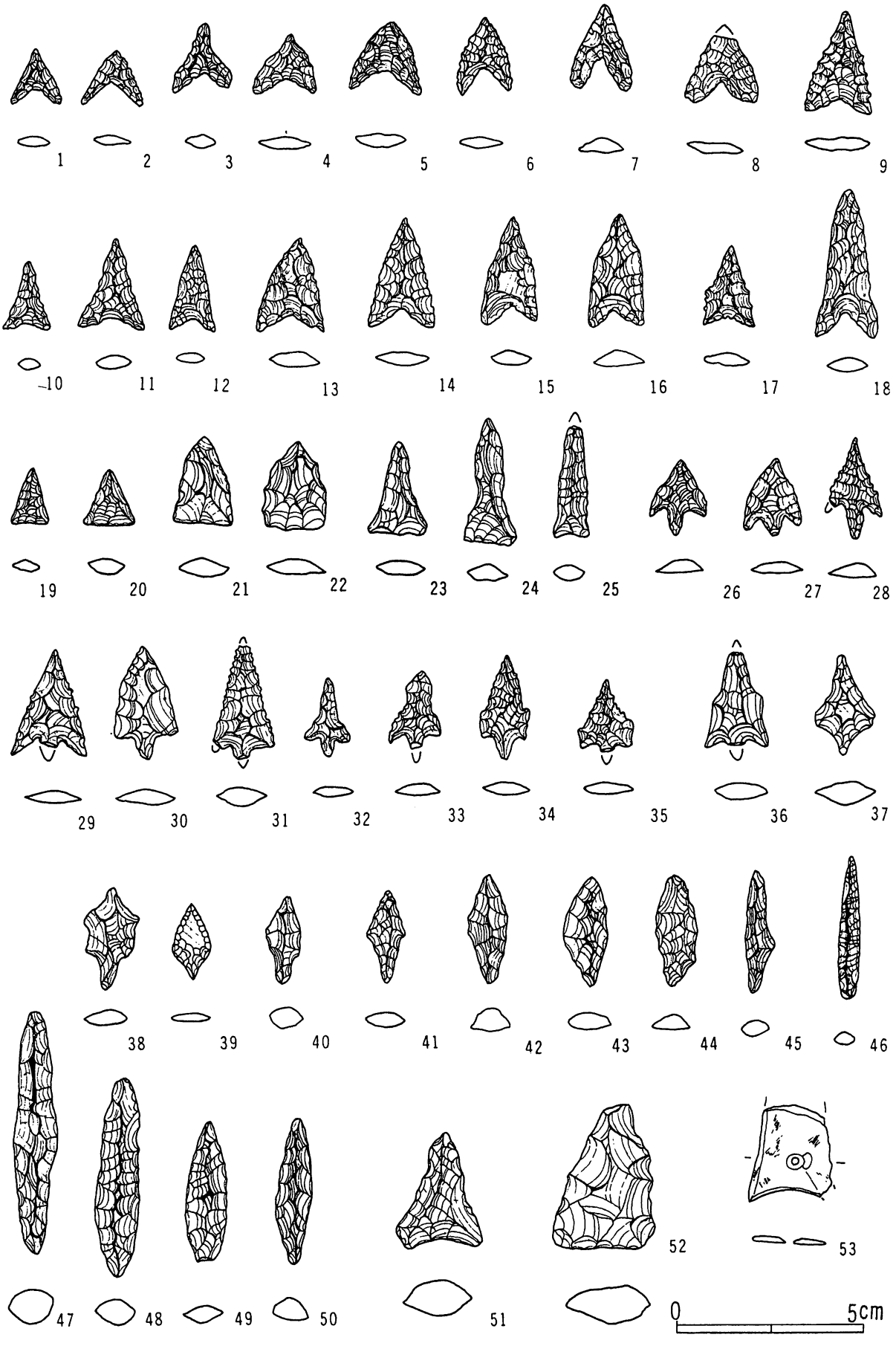
なお、第137図53は磨製石鏃である。



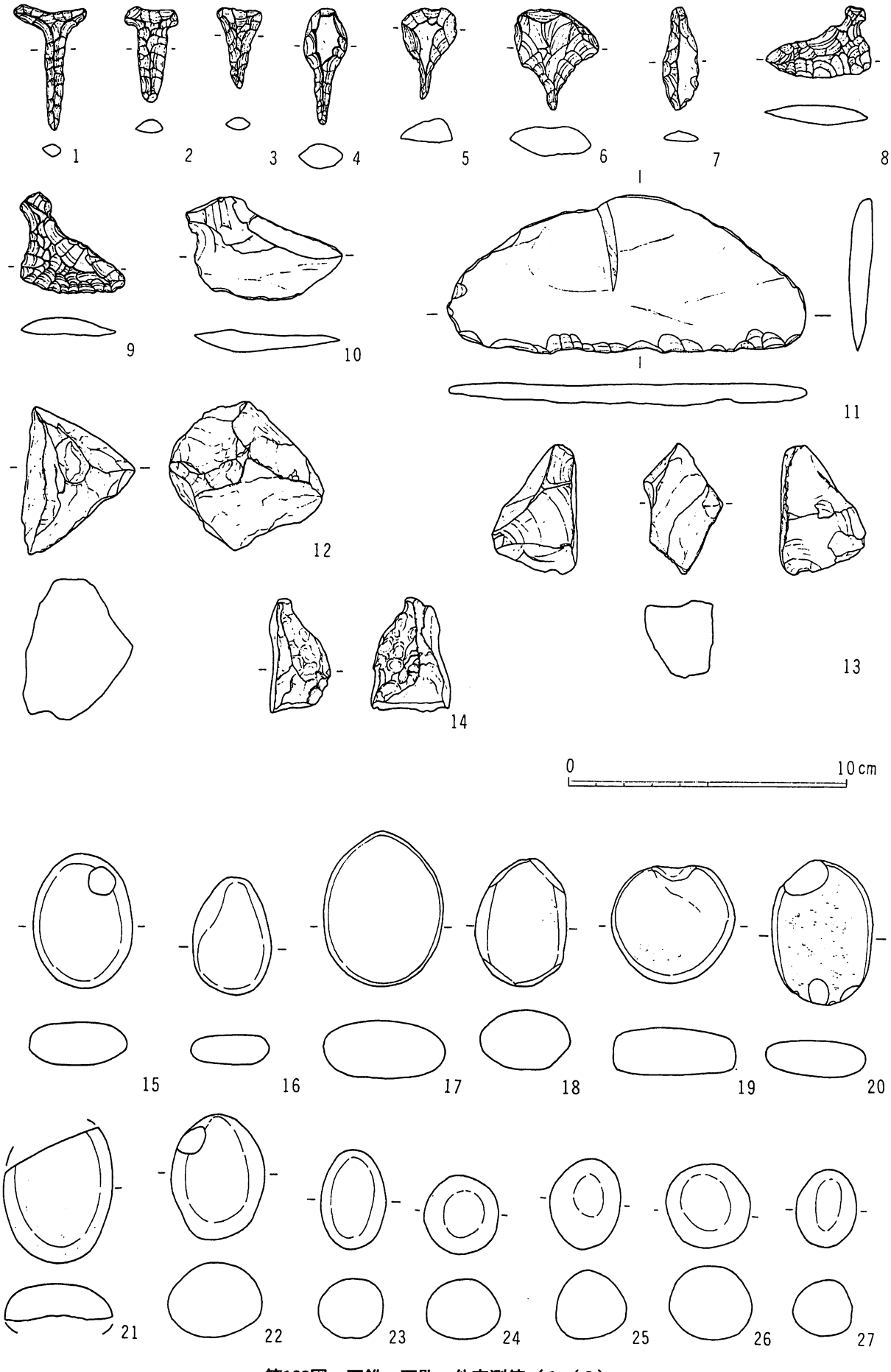
第135図　石錘・軽石製品実測図（１／２）



第136図　砥石実測図（1／3）



第137図　石鏃実測図（1／1.5）



第138図　石錐・石匙・他実測値（1／2）

(9) 石錐（第138図）（表14）

51点出土。石質はチャート24、黒耀石21、頁岩３、シルト岩３。石鏃の場合、黒耀石が圧倒的に多かったのに対して、石錐ではチャートの比率が高い。第138図１・２は「つまみ部」（頭部）が横長である。３は三角形状を呈する。４～６にかけては、つまみが丸味を帯び、６は錐部に対して極端につまみが大きい。出土地点については第１号配石から８点が出土しているが、全体にまばらである。

(10) 石匙・スクレーパー（第138図）（表14）

いわゆる石匙については10点がある。縦形は第138図７の１点だけで、他は横形である。石質についてはチャート製が５、黒耀石４、シルト岩１である。

他にスクレーパーが13点程出土している。これについては第Ⅴ章で検討されている。

(11) 横歯形石器（第138図11）

Ｅ－８－２区から出土した半月状の石器。刃部には細かい剝離が加えられている。片面には自然面を残す。石質は砂岩である。

(12) その他の石器（第138図）（表14）

第138図15～20は表面が磨かれた偏平な丸石。15～17は特に光沢がある。さらに17および19の側面には敲打痕が著しく認められる。18は長軸方向の両側面に敲打痕がある。20の側面にも一部敲打痕がみられるが、表裏面には細かい擦痕が無数に走っている。これらは磨き石として用いられたものであろうか。石質はいずれも堅いものである。21も楕円形の磨滅のある石であるが、石質は凝灰岩でザラつきがある。

22～27は表面がやや磨滅する小石。いわゆる「石弾」であろうか。いずれも輝石安山岩。

12～14は石核状の原石。赤色をしたガラス質の石である。表面の一部が火熱を受けたように変色・変質しており、特に14ではその部分に小さな円形の窪みが数箇所認められる。この変色した部分は、ガラス質のような状況ではなく、爪により赤い粉状に掻き取れる。このような粉末が赤色顔料として用いられた可能性がある。14にみられる小さな窪みは、棒状の工具により粉末が削り取られた痕跡なのかもしれない。

第９節　石製品

(1) 垂飾品（第139図）（表15）

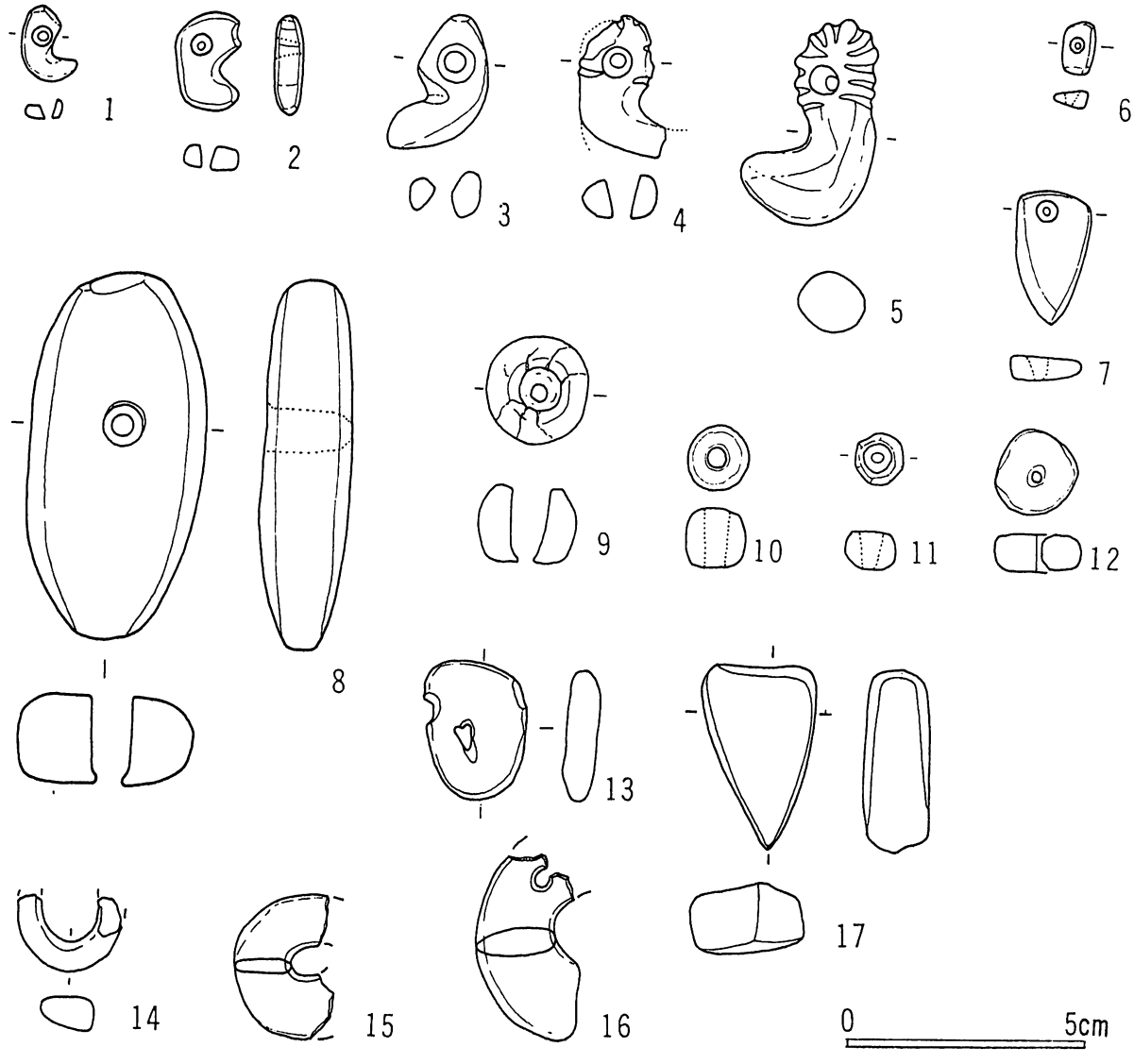
１・２・４・５は硬玉製の勾玉。特に５は頭部に刻みによる装飾がみられる。３も勾玉であるが、石質は玉髄である。４の頭部には刻みがある。６は長方形をした小型の垂飾品。７は三角形状をした薄い製品である。いずれも硬玉。８は硬玉製大珠。孔は管切りにより貫通したことがわかる。第31号住居址の西外側に当たるＣ－13－１区から出土したもの。９～11は丸玉。いずれも硬玉製である。12はデイサイト製の小円盤。装飾品であるかは疑問。13は不整円形をした小石。中央に孔がみられるが自然孔である。これも装飾品かどうかは不明。未製品かもしれない。17は表面がよく磨かれ光沢があるが、未製品であろう。蛇紋岩の原石を切断し、磨いたものであろう。14は指輪状の製品である。16は玦状耳飾りの半欠品。15もその可能性がある半欠品である。

(2) 石剣・石棒（第140図～第144図）（表16）（表18）（表20）

石剣・石棒類は破片も含め133点が出土している。小破片が多く、厳密に区分することは困難であるが、ここでは可能なものについて断面形状から次のように分類した。

Ⅰ類　楕円ないし菱形で両刃状の側面をなすもの（27点）

Ⅱ類　楔形ないし三角形状で片刃のもの（11点）



第139図　垂飾品・他実測図（1／1.5）

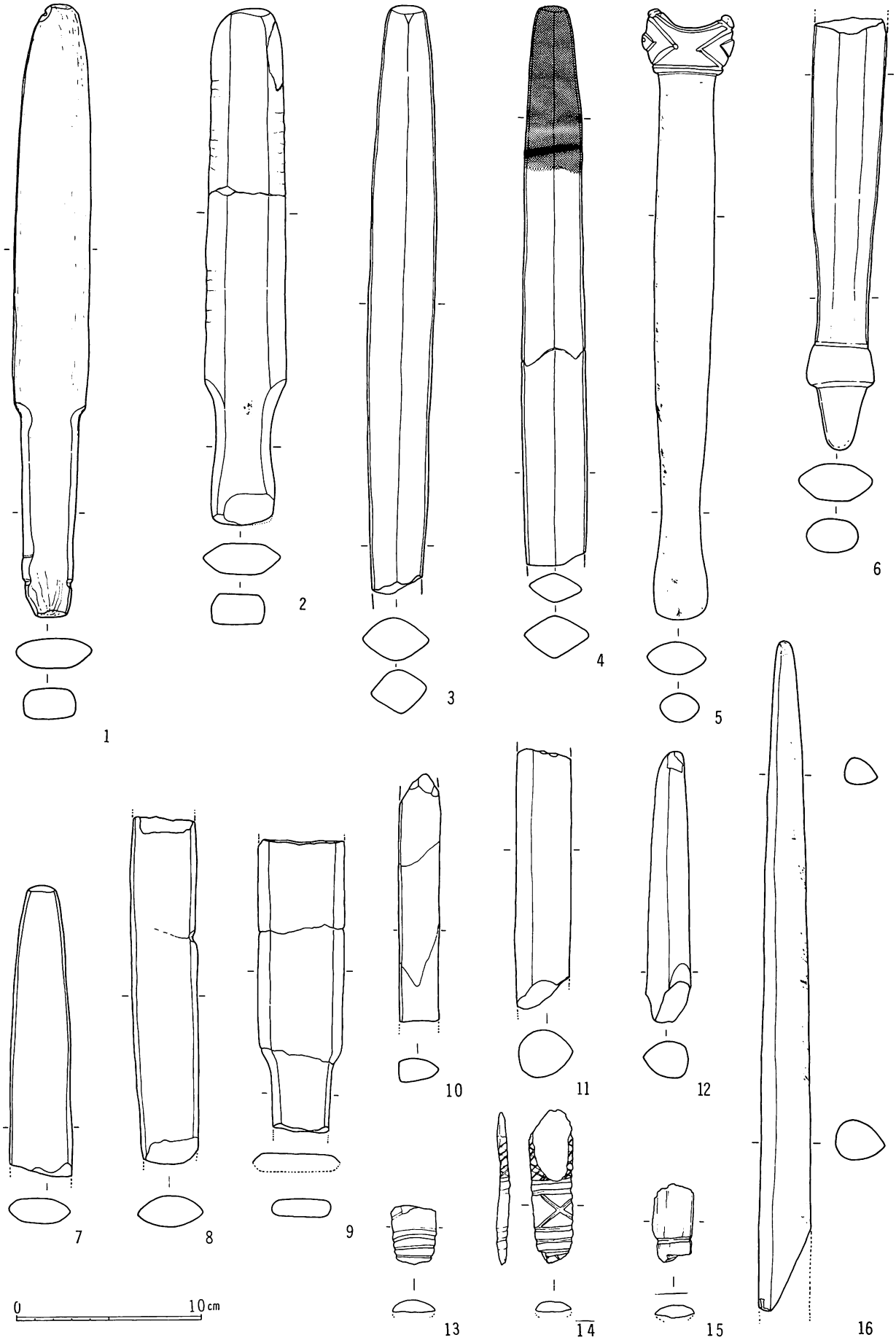
Ⅲ類　円形ないし楕円形のもの

①太さ5㎝未満の中・小型（58点）

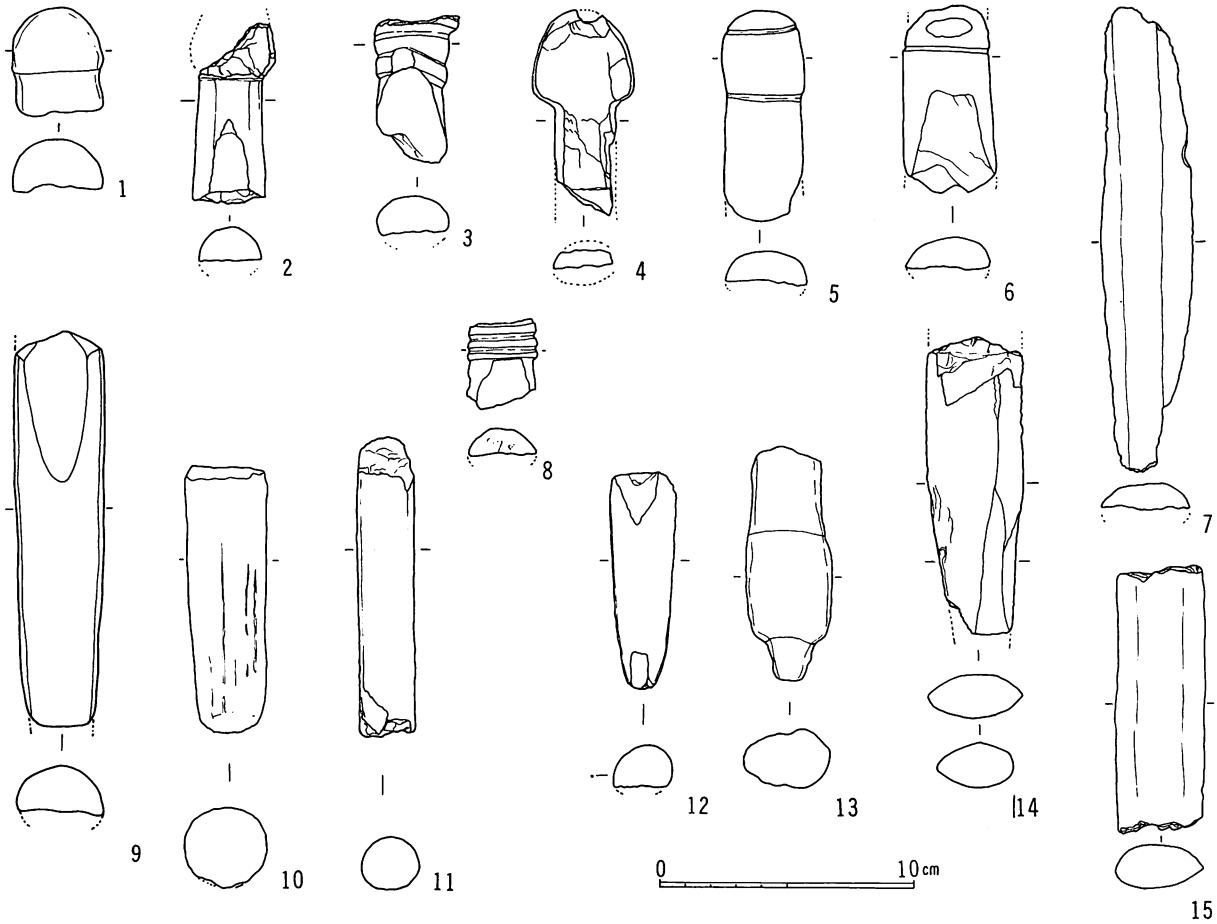
②太さ5㎝以上の大型　　（24点）

Ⅳ類　小破片のため分類のできないもの（13点）

Ⅰ類　「石剣」と称されるタイプ。第140図1～9・13～15、第141図7・14・15等がこれに当たる。第140図1は第29号住居址のほぼ床面から出土した完形品である。全体に偏平であるが、基部は柄の如く握りやすく作られている。基部の端近くの側面に刻み状の抉りが認められる。2・3は第5号配石から出土した（第80図）もの。2は完形品で、1と同じく柄のあるタイプであるが、「刃部」はより鋭い。3は身の部分に稜がつき、断面は整った菱形をなす。第124図22の磨製石斧を枕にした状態で出土。4は第10号住居と第17号住居のそれぞれの覆土から出土した破片が接合したものである。3に類似した形態で、先端と思われる部分が黒く変色している。5は第28号住居付近の北側（E－11－3区）から出土した完形品。全体によく磨かれ、刻みにより頭部に装飾の施されたもの。6は基部を中心とした破片。第31号住居址の床上から出土し



第140図　石剣・石棒実測図①（1／3）



第141図　石剣・石棒実測図②（1／3）

たもので、3と同じく磨製石斧（第124図23）とともに発見された。他は破片であるが、8・9・第141図7・14は火を受けたらしく赤化している。第140図9は柄から身にいたる部分の3片から成る接合破片で、中央の1片がD－5区、両側の2片がE－8区から出土したもの。13～15は基部の破片で、線刻が施されている。第141図14は柄部の破片。

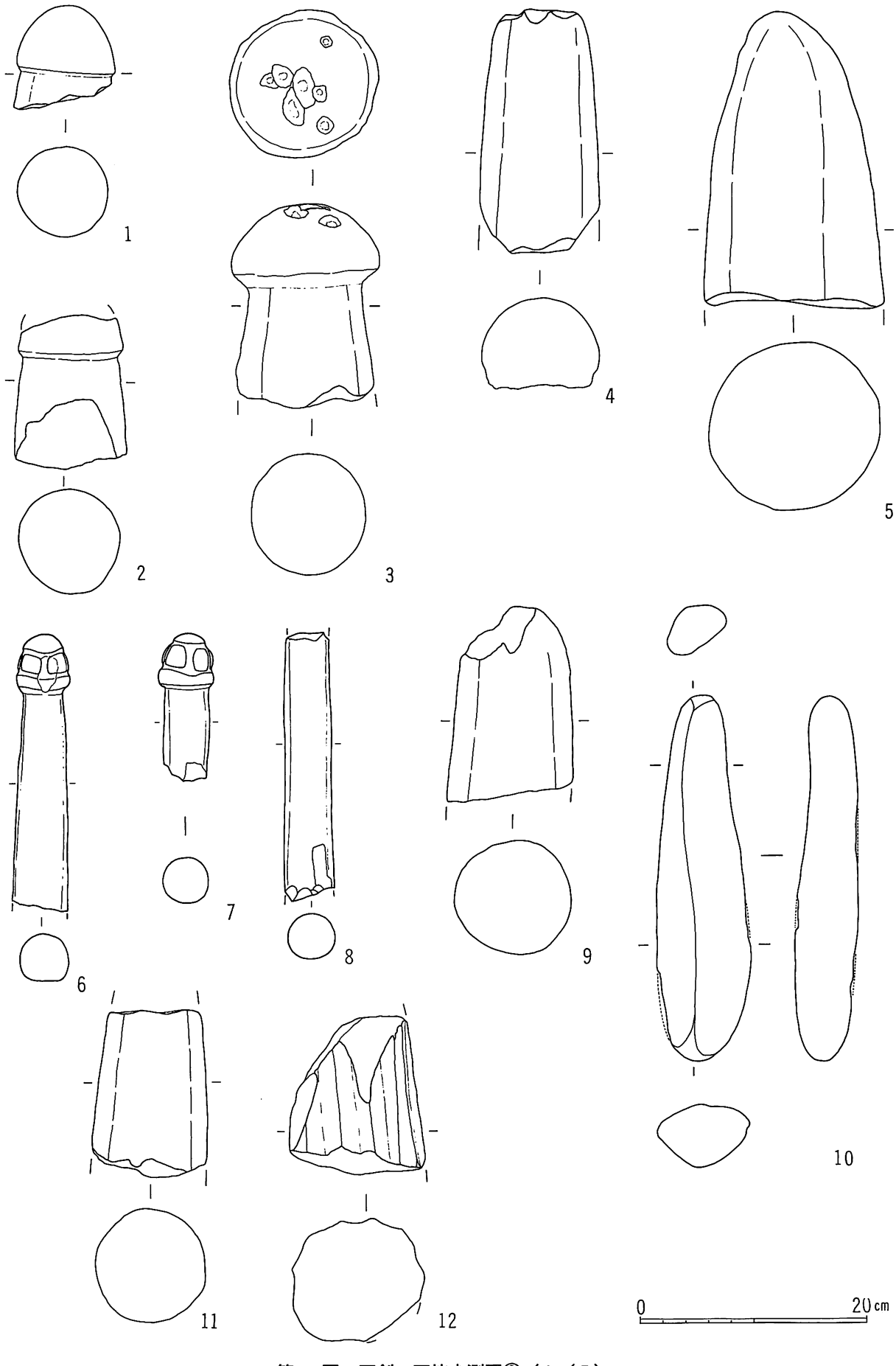
II類　「石刀」タイプのもの。第140図10～12・16が該当する。いずれも破片であるが、16は残存状況がよい。先端は鋭く尖り、片刃である。12も先端部の破片。

III類　「石棒」タイプを含めてみた。

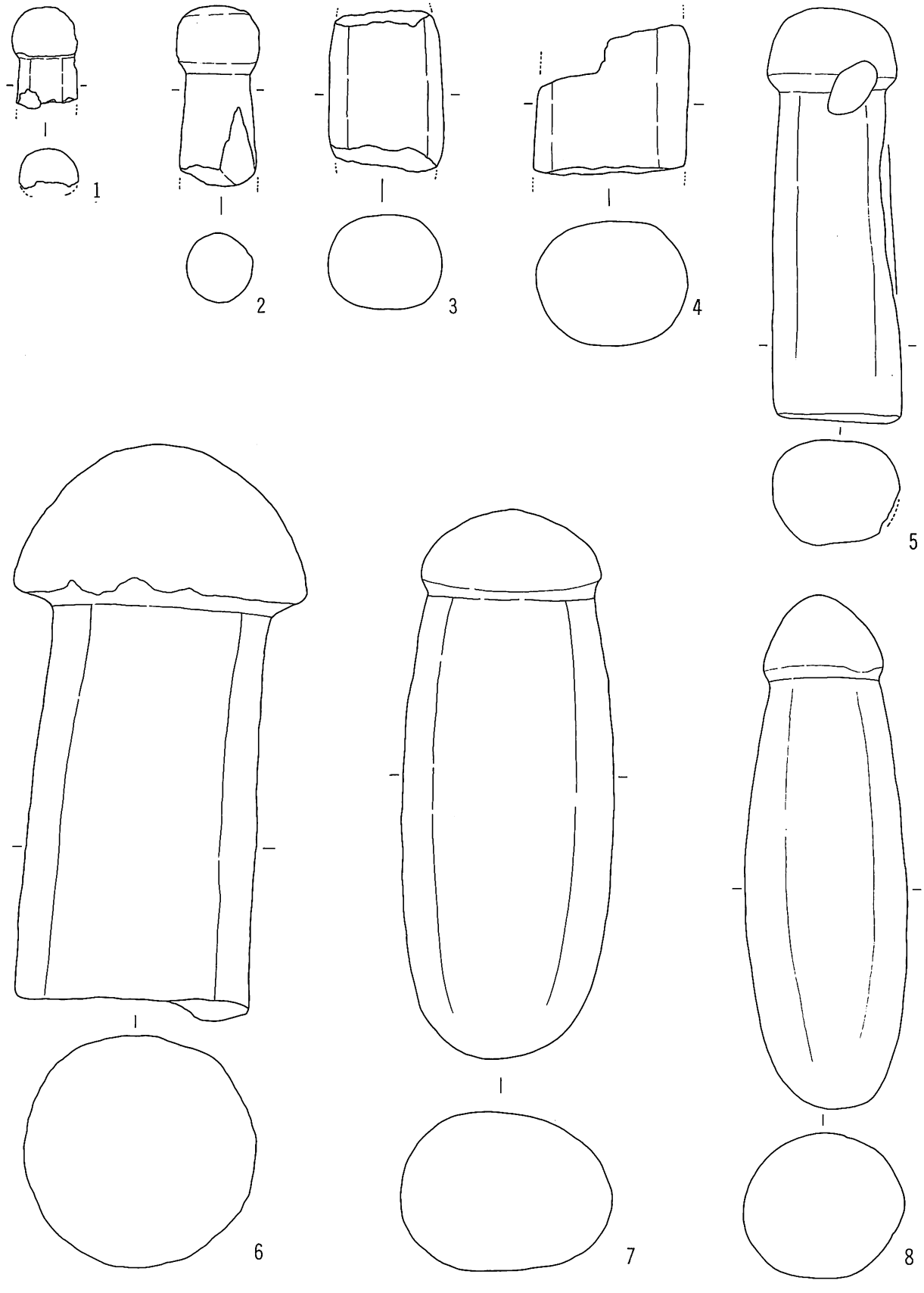
①第141図1～6・8～13、第142図6～8。断面形状に、円形のものと楕円形のものとがみられる。1～6は頭部の破片。12・13は基部破片。2・3・11は火を受け赤化している。第142図6・7の頭部には彫刻がなされている。

②第142図1～5・9～12、第143図、第144図。多くが頭部を有するのに対して、第142図5のような無頭は少ない。1～3は頭部を中心とした破片で、3の頭部には凹みがいくつかみられる。2は第1号集石から独鈷石等とともに出土した。4・9は頭部か基部かは不明。12は側面が溝状に窪んでおり、砥石に利用されたものと思われる。10は棒状の自然石であるが、部分的に磨かれており、石棒とみなしたもの。

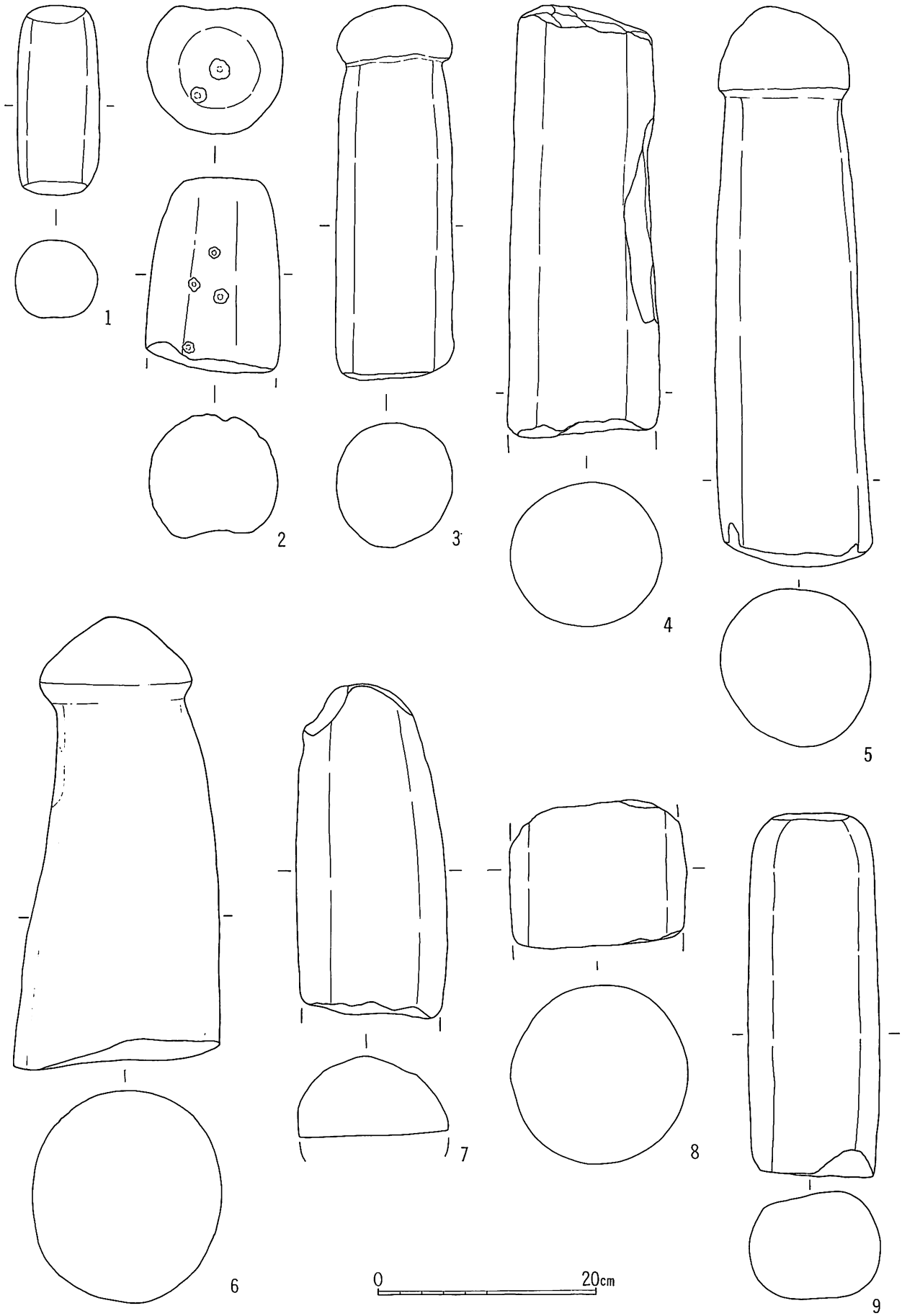
第143図1～7は第1号配石出土である。1・2はやや小型の石棒で、特に2は3ブロックの円形石組②から出土したもの。6は円形石組①から出土した石棒で（図版20－2）、基部が欠損しているが現存長49.5㎝余り、頭部の最大径25㎝を越える大型のものである。5は3ブロック出土の完形品。7は2ブロックから出土した完形品で、やや偏平な形状であるが、長さ47㎝の大型石棒である。8は第1号配石の前面にあたるD－6－1区から出土した完形の石棒。



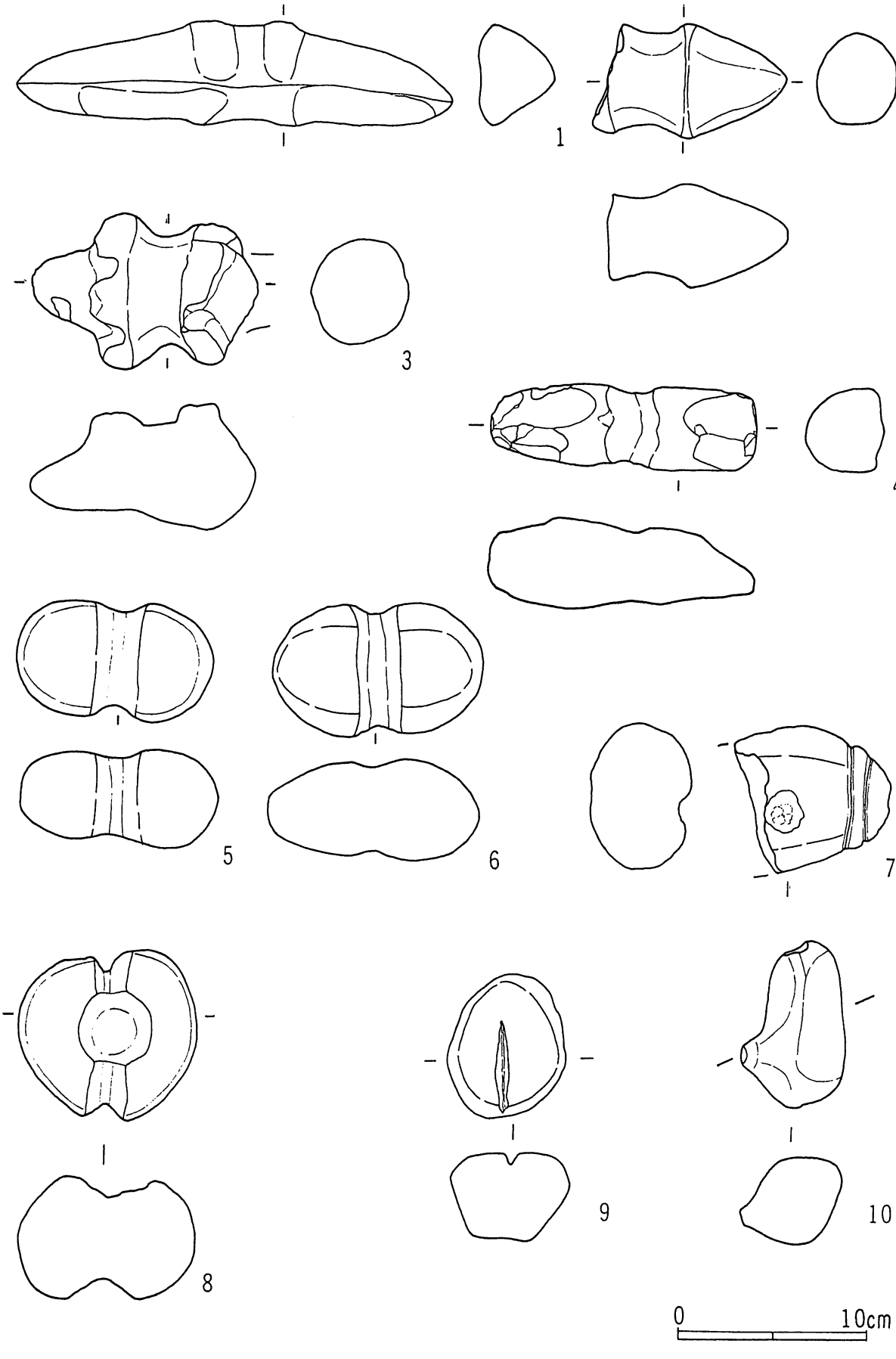
第142図　石剣・石棒実測図③（1／5）



第143図　石剣・石棒実測図④（1／5）



第144図　石剣・石棒実測図⑤（1／5）



第145図　石製品実測図（1／3）

第144図１～５は第２号配石出土のもの。これについては第２節配石遺構の項で記載したとおりである。

６～８は第４号配石出土。６は基部を欠くが、40㎝を越える大型品。９は第12号石組出土で、おそらく頭部を欠いたものであろう。

以上について、全体的には小型の石棒・石剣が多い傾向が窺われるが、Ⅲ類②のうちでは特に大型のものは遺構を構成する一つの要素ともなっているようである。時期的には第１号住居址出土の１点が中期後半のものである他は、全て後期・晩期の所産とみなされる。また、遺構により種類に多寡が認められる場合もある。例えば、第２号・４号配石ではⅢ類②に限られるのに対して、第５号配石ではⅠ類主体で、Ⅲ類②は出土していない。また、第１号配石ではⅢ類①が圧倒的に多く、またⅢ類②もそれに次いで多いがⅠ類Ⅱ類は非常に少ない。住居址については、Ⅲ類①が少ない傾向にある。

遺存状態については、完形およびそれに近いものは全て実測図に載せてあるが、全形のわかるものに比べて破片が圧倒的に多く、そのうち火を受けているものも20片余り確認できた。通常では破損しにくいものであるが、破片が多いことから意図的に「壊され」、そのうちのいくつかは「焼かれた」ものとみることができよう。

⑶ 独鈷石・他（第145図）（表17）

１は第14号住居址を取り巻く石列中から出土した完形品。反りはあまり強くなく、両端は尖り気味。２は第１号集石から石棒や土器の把手等とともに出土した半欠品。３は第２号配石出土。４は石棒を利用した独鈷石状の石製品である。中央部や両端は打ち欠きにより整形されている。

５・６は磨石状の石器であるが中央が窪み、独鈷石状の形をなしている。但し、両端は丸味を呈し、中央部の窪みもやや磨滅していることから、紐等を巻き付けて用いた可能性がある。７は破損品であるが、先端に彫刻がなされている。特殊な石製品である。また、側面に窪みがあり、凹石として再利用されたことが考えられる。８も特徴的な製品である。両面が窪み、それを繋ぐかのように溝状の堀込みがめぐっている。９は第１号集石から２の独鈷石や第142図２の石棒等とともに出土した石製品。表面に溝が擦り切られている。「女性」を表現したものであろうか。10は磨石状の製品である。表面は相当磨滅しており、一部に突出した箇所がみられる。

表2　土偶・土版一覧表

図	番号	分類	出土地点	備考	図	番号	分類	出土地点	備考
99	1	1，2	表採			6	2	27号住居	赤彩
	2	1，2	G—9	赤彩		7	2	37号住居	
	3	1，2	1号配石	C—7		8	2	E—12	
	4	2，4	G—7			9	2，3	C—13	
	5	2，3，4	C—8			10	2	D—3	
	6	2，4	D—12	赤彩		11	2	27号住居	
	7	2，3，4	1号配石	E—7		12	2，3	E—13	
	8	1，2，3	1号配石	C—7		13	2	E—12	
	9	2，3，4	6号住居			14	2	20号住居	
	10	1，2，3，4	1号配石	E—7他		15	2	D—11	
	11	2，4	表採			16	2，3	1号配石	C—7
100	1	2，3，4	11号住居			17	2	表採	
	2	1，2，4	29号住居	赤彩		18	2	14号住居	
	3	2	B—6		103	1	2	E—3	
	4	2	C—12			2	2	5号配石	下部
	5	2	E—4			3	2	27号住居	
	6	2	E—5			4	2	F—8	
	7	2	B—4			5	2	D—8	
	8	2	1号配石	D—7		6	2	29号住居	
	9	2	20号住居			7	2	6号住居	
	10	2	8号住居			8	2，4	1号配石	F—7
	11	2	29号住居			9	2	1号配石	D—7
	12	2	1号配石	C—7		10	4	D—13	
101	1	1	1号配石	F—7		11	2，4	C—12	
	2	1	G—7			12	2	D—6	
	3	1	1号配石（D—7）	赤彩		13	4	D—6	
	4	1	E—4			14	2	D—4	
	5	1	1号配石（C—7）	赤彩		15	2	E—13	
	6	1	C—4			16	4	20号住居	
	7	1	F—10		104	1	3	F—8	赤彩
	8	1	26号住居	赤彩		2	3	1号配石	C—7
	9	1	1号配石	C—7		3	3	E—5	1部赤彩
	10	1	1号配石	D—7		4	3	D—13	
	11	1	1号配石（C—7）	赤彩		5	3	F—9	
	12	1	F—10			6	3	1号配石	D—7
	13	1	29号住居	赤彩		7	3	D—4	
	14	1	30号B住居	赤彩		8	3	26号住居	
	15	1	1号配石（D—7）	赤彩		9	3	24号住居	
	16	1	E—11			10	3	24号住居	赤彩
	17	1	E—5			11	3	C—12	
	18	1	D—10			12	3	5号配石	
	19	1	1号配石	D—7		13	3	D—11	
	20	1	1号配石	C—7		14	3	F—10	
	21	1	試掘			15	3	1号配石（D—7）	赤彩
	22	1	6号住居			16	3	E—12	
	23	1	8号住居	赤彩		17	3	D—5	
	24	1	1号配石	C—7		18	3	E—6	
	25	1	F—11	赤彩		19	3	1号配石	C—7
102	1	2	G—7			20	3	5号配石	
	2	2	D—3			21	3	表採	
	3	2	7号住居			22	3	14号住居	
	4	2	29号住居		105	1	3	15号石組	
	5	2	6号住居			2	3	6号住居	

図	番号	分類	出土地点	備考	図	番号	分類	出土地点	備考
105	3	3	F—11		106	3	4	D—12	
	4	3	C—3			4	4	D—11	
	5	3	18号住居			5	4	1号配石	石棺
	6	3	F—8			6	4	5号配石	下部
	7	3	D—12			7	4	1号配石	F—7
	8	3	6号住居			8	4	22号住居	
	9	4	D—11			9	4	表採	
	10	4	30号B住居			10	4	1号配石	D—7
	11	4	1号配石	B—7		11	4	E—13	
	12	4	38号住居			12	4	4号住居	
	13	4	E—4			13	4	1号配石	(F—7)
	14	4	C—11			14	4	30号A住居	
	15	4	D—6			15	4	12号住居	
	16	4	1号配石	C—7		16	4	E—11	
	17	4	F—11			17	4	F—9	
	18	4	1号配石	E—7		18	4	5号配石	下部
	19	4	1号配石	F—7		19	4	D—7	
	20	4	1号配石	B—7		20	4	D—6	
	21	4	26号住居		107	1	土版	F—10—2	
	22	4	F—12			2	〃	試掘	
	23	4	6号住居			3	〃	C—10—1	赤彩
	24	4	8号住居			4	〃	D—13	
	25	4	D—6			5	〃	C—8—2	
	26	4	D—9			6	〃	28号住居	
	27	4	E—8			7	〃	27号住居	
	28	4	38号住居			8	〃	G—9—1	
	29	4	5号住居			9	〃	D—11—3	
106	1	4	D—4			10	〃	D—8—3	
	2	4	D—6			11	〃	E—8	

表3　土製円盤一覧表

図	番号	重量(g)	出土地点	備考	図	番号	重量(g)	出土地点	備考
108	1	5	D—11—2		108	20	12	1号配石	F—7
	2	5	E—12—1			21	12	E—11—1	
	3	7	E—3			22	13	F—11—3	
	4	5	E—3			23	17	B—13—2	
	5	7	17号住居			24	6	25号住居	
	6	10	E—3			25	10	E—6—4	
	7	9	C—3			26	11	B—6—3	
	8	7	C—10—1			27	16	C—8—1	
	9	7	表採	C—14—1		28	9	E—9—1	
	10	10	17号住居			29	22	C—12—2	
	11	9	D—12—4			30	17	E—12—3	
	12	9	D—11—1			31	11	1号配石	B—7
	13	12	D—11—1			32	12	F—11—2	
	14	13	D—10—2			33	10	C—8	
	15	13	2号配石			34	12	D—11—2	
	16	11	D—11—2			35	9	E—13—4	
	17	12	13号住居			36	8	C—13—4	
	18	8	E—13—4			37	8	17号住居	
	19	10	E—11—1			38	11	D—6—3	

図	番号	重量（g）	出土地点	備考	図	番号	重量（g）	出土地点	備考
108	39	12	F—11—3		109	3	15	D—12—1	
	40	12	27号住居			4	19	D—11—4	
	41	12	A—2—2	試掘		5	16	E—13—4	
	42	10	D—11—1			6	19	D—11—2	
	43	14	26号住居			7	22	C—10—1	
	44	13	B—13—2	試掘		8	16	D—11—3	
	45	10	5号配石			9	16	D—6—3	
	46	12	D—11—4			10	15	D—12—1	
	47	17	C—9			11	15	B—1—1	試掘
	48	12	E—11—1			12	16	F—12—4	
	49	12	D—12—1			13	20	D—11—3	
	50	10	C—10—1			14	19	1号配石	C—7—4
	51	11	C—10—2			15	23	E—10—3	
	52	12	C—14—1			16	30	C—10—1	
	53	15	E—3			17	35	C—12—3	
	54	14	D—12—1			18	12	D—11—4	
	55	15	D—12—1			19	24	E—10—1	
	56	10	E—11—1			20	27	15号住居	
	57	17	C—10—1			21	18	D—13—2	
	58	12	D—11—4			22	23	D—11—2	
	59	11	D—12—1			23	20	D—11—4	
	60	9	5号配石			24	23	C—3	
	61	9	D—6—3			25	33	E—10—2	
	62	12	C—8—3			26	30	D—11—4	
	63	17	E—5—3			27	26	B—1—1	試掘
	64	19	D—12—2			28	17	D—11—3	
	65	19	D—12—1			29	26	D—12—1	
	66	16	C—10—1			30	24	D—10—1	
	67	15	D—11—1			31	22	E—10—1	
	68	8	D—11—4			32	23	E—11—2	
	69	18	E—3			33	23	D—11—4	
	70	14	E—11—1			34	30	D—11—1	
	71	16	D—10—3			35	35	D—12—4	
	72	12	C—8			36	30	D—11—2	
	73	15	C—10—1			37	55	E—8	
109	1	14	C—14—1			38	49	D—11—3	
	2	20	E—11—1						

表4　土製耳飾一覧表

図	番号	遺存	出土地点	備考	図	番号	遺存	出土地点	備考
110	1	完形	C—12		110	13	〃	1号配石	C—7
	2	〃	1号配石	E—7		14	〃	1号配石	
	3	〃	G—9			15	〃	D—6	赤彩
	4	〃	1号配石	C—7		16	〃	1号配石	C—7
	5	〃	D—6			17	〃	G—8	
	6	〃	1号配石	E—7		18	〃	D—6	
	7	〃	11号住居			19	〃	F—10	
	8	〃	D—6			20	一部欠	D—6	
	9	〃	1号配石	D—7		21	完形	G—8	
	10	〃	1号配石	D—7		22	〃	F—10	
	11	〃	1号配石	D—7		23	〃	17号住居	
	12	〃	E—12			24	〃	D—6	

図	番号	遺存	出土地点	備考	図	番号	遺存	出土地点	備考
110	25	半分欠	D—6		112	14	〃	30号B住居	
	26	〃	表採			15	〃	1号配石	D—7
	27	完形	C—13	赤彩		16	〃	G—9	
	28	〃	1号配石			17	〃	18号住居	
	29	〃	14号住居			18	〃	24号住居	
	30	半分欠	G—7			19	〃	1号配石	E—7
	31	完形	28号住居			20	〃	1号配石	C—7
	32	一部欠	29号住居			21	〃	1号配石	E—7
	33	〃	E—12			22	〃	B—8	
	34	〃	D—6			23	〃	G—8	
	35	〃	E—11			24	〃	G—7	
	36	〃	1号配石			25	完形	14号住居	
	37	〃	E—4	赤彩		26	〃	E—10	
	38	〃	G—7			27	〃	1号配石	D—7
	39	〃	D—8			28	〃	5号石組	
	40	〃	1号配石	D—7		29	〃	表採	
	41	半分欠	C—8			30	〃	F—12	
	42	〃	1号配石	C—7		31	〃	E—10	
	43	完形	1号配石	C—7		32	〃	20号住居	
	44	一部欠	F—8	赤彩		33	〃	D—6	
	45	完形	C—13	赤彩		34	一部欠	D—6	
	46	〃	F—10			35	完形	21号住居	
	47	〃	4号配石			36	〃	D—12	
	48	〃	36号住居	下部		37	〃	1号配石	E—7
111	1	完形	G—7	赤彩		38	〃	1号配石	E—7
	2	半分欠	D—6			39	〃	D—5	
	3	完形	赤彩			40	〃	1号配石	C—7
	4	〃	G—7			41	一部欠	1号配石	C—7
	5	〃	38号住居			42	完形	1号配石	C—7
	6	2/3欠	2号石組			43	一部欠	30号A住居	
	7	2/3欠	F—10		113	1	完形	F—10	
	8	半分欠	38号住居			2	〃	D—6	
	9	完形	1号配石	石棺		3	半分欠	1号配石	C—7
	10	〃	1号配石	石棺		4	2/3欠	1号配石	D—7
	11	3/4欠	1号配石	C—7		5	一部欠	7号住居	
	12	3/4欠	20号住居			6	2/3欠	30号B住居	
	13	完形	G—7	赤彩		7	完形	F—8	
	14	半分欠	G—7			8	〃	5号配石	下部
	15	〃	G—7			9	〃	F—8	
	16	一部欠	G—9			10	〃	6号住居	
112	1	完形	30号A住居			11	〃	G—7	
	2	〃	D—6			12	〃	C—8	
	3	〃	D—6			13	〃	4号配石	
	4	〃	D—12			14	一部欠	G—8	
	5	〃	D—11			15	完形	E—13	
	6	〃	G—9			16	一部欠	B—3	
	7	〃	G—9			17	完形	5号配石	
	8	〃	D—6			18	一部欠	F—11	
	9	〃	表採			19	完形	D—6	
	10	〃	D—6			20	〃	22号住居	
	11	〃	17号住居			21	〃	E—11	
	12	〃	D—6			22	一部欠	D—11	
	13	〃	24号住居			23	完形	5号配石	

図	番号	遺存	出土地点	備考	図	番号	遺存	出土地点	備考
113	24	完形	G—8		115	9	〃	1号配石	D—7
	25	〃	G—8			10	〃	E—5	
	26	〃	29号住居			11	〃	1号配石	C—7
	27	一部欠	1号配石	F—7		12	〃	30号A住居	
114	1	完形	5号住居			13	〃	1号配石	C—7
	2	〃	E—5			14	〃	E—5	
	3	〃	1号配石	D—7		15	〃	D—6	
	4	〃	C—6			16	〃	C—8	
	5	〃	20号住居			17	〃	D—13	
	6	〃	F—8			18	〃	20号住居	
	7	〃	F—11	赤彩		19	〃	38号住居	下部
	8	〃	F—12			20	〃	1号配石	F—7
	9	〃	E—10			21	〃	8号住居	
	10	〃	5号配石			22	〃	38号住居	下部
	11	〃	D—6			23	〃	B—7	
	12	一部欠	11号住居			24	〃	1号配石	E—7
	13	〃	E—3			25	〃	1号配石	C—7
	14	半分欠	D—5			26	〃	1号配石	C—7
	15	完形	C—13			27	〃	1号配石	D—7
	16	〃	5号配石			28	〃	31号住居	
	17	〃	E—11			29	〃	1号配石	D—7
	18	〃	1号配石	C—7		30	〃	D—6	
	19	〃	F—11			31	〃	D—11	
	20	一部欠	E—10			32	〃	1号配石	D—7
	21	完形	29号住居			33	2/3欠	27号住居	
	22	〃	7号住居			34	完形	6号住居	
	23	〃	G—9			35	〃	6号住居	
	24	〃	24号住居			36	〃	1号配石	D—7
	25	〃	D—12			37	〃	G—7	
	26	〃	20号住居			38	〃	D—6	
	27	〃	31号住居			39	〃	1号配石	C—7
	28	〃	1号配石	C—7		40	〃	F—12	
	29	〃	F—8			41	〃	G—9	
	30	〃	24号住居			42	〃	20号住居	
	31	〃	B—3			43	〃	8号住居	
	32	〃	8号住居			44	〃	18号住居	
	33	〃	C—13			45	〃	20号住居	
	34	一部欠	E—8			46	半分欠	25号住居	
	35	一部欠	E—8			47	一部欠	28号住居	
	36	〃	F—12			48	完形	25号住居	
	37	〃	C—10			49	〃	5号住居	
	38	〃	C—12			50	〃	6号住居	
	39	〃	14号住居			51	〃	9号住居	
	40	〃	1号配石	F—7		52	〃	10号住居	
	41	〃	5号配石			53	〃	20号住居	
115	1	完形	5号住居			54	〃	20号住居	
	2	〃	D—11			55	〃	25号住居	
	3	〃	G—8			56	〃	30号B住居	
	4	〃	B—8			57	〃	23号住居	
	5	〃	7号住居			58	〃	30号B住居	
	6	〃	17号住居			59	〃	4号配石	
	7	〃	10号石組			60	〃	8号住居	
	8	〃	4号配石			61	〃	1号配石	C—7

図	番号	遺存	出土地点	備考	図	番号	遺存	出土地点	備考
115	62	完形	1号配石	C－7	116	15	完形	E—12	
116	1	〃	E－5			16	〃	14号住居	
	2	〃	1号配石	C－7		17	〃	8号石組	
	3	一部欠	24号住居			18	〃	C—12	
	4	完形	F—10			19	〃	D－6	
	5	〃	29号住居			20	〃	G－7	
	6	〃	B－8			21	〃	4号配石	
	7	〃	表採			22	〃	B－6	
	8	〃	11号住居			23	〃	28号住居	下部
	9	〃	C—13			24	〃	5号配石	
	10	〃	38号住居			25	〃	1号配石	C－7
	11	一部欠	G－8			26	〃	28号住居	
	12	完形	17号住居			27	〃	1号配石	E－7
	13	〃	38号住居			28	〃	9号住居	
	14	〃	24号住居			29	〃	30号B住居	

表5　土製品一覧表

図	番号	遺存	種類	出土地点	備考	図	番号	遺存	種類	出土地点	備考
117	1	完形	勾玉	C－8－3		117	14	欠	錘形製品	1号配石	C－7－2
	2	〃	〃	C－8			15	〃	〃	〃	C－7
	3	〃	〃	18号住居			16	〃	〃	D－6	
	4	〃	〃	1号配石	C－7		17	〃	有孔円盤	D—11—4	
	5	一部欠	玉	5，6号住居間	D－5		18	半欠	蓋	1号配石	D—7
	6	完形	〃	C－6			19	欠	〃	〃	C－7－4
	7	〃	〃	E—12			20	〃	匙	G－9	
	8	〃	〃	E－5			21	〃	〃	27号住居	
	9	一部欠	スタンプ状製品	E—13—2			22	〃	〃	C—13—4	
	10	〃	〃	F－9			23	〃	石棒形製品	2号配石	
	11	〃	〃	1号配石	C－7－4		24	一部欠	独鈷石状製品	26号住居	E-11-2,D-11-4
	12	完	円盤	26号住居			25	完	土笛	23号住居	
	13	一部	顔面把手	30号B住居			26	欠	把手	D－6－3	

表6　ミニチュア土器一覧表

図	番号	遺存	種類	出土地点	備考	図	番号	遺存	種類	出土地点	備考
118	1	完形		F－8		118	15	一部欠		D—11—4	
	2	〃		31号住居			16	欠		E－7－4	
	3	〃		23号住居			17	〃		D—11—4	
	4	〃		表採			18	完形		30号B住居	
	5	〃		E—11—2			19	〃		D—11	
	6	〃		E—10—3			20	一部欠	台付	27号住居	
	7	〃		1号配石	B－7		21	〃	〃	D－6	
	8	〃		E—10—2			22	完形	〃	27号住居	
	9	一部欠		6号住居			23	〃		26号住居	
	10	完形		19号住居			24	一部欠	片口	表採	
	11	半欠		23号住居			25	完形	蓋	D—10—4	
	12	一部欠		38号住居下			26	〃		30号B住居	
	13	完形		E—11			27	〃		1号配石	G－7
	14	一部欠		D—13							

表7　打製石斧一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
119	1	I	完形	78.6	泥岩	E—12—2	
	2	〃	〃	96.1	砂岩	D—8	
	3	〃	〃	97.6	〃	C—12—1	
	4	〃	〃	102.9	ホルンフェルス	D—11—1	
	5	〃	〃	78.0	砂岩	D—10	
	6	〃	〃	112.5	ホルンフェルス	38号住居下部	
	7	〃	〃	134.7	緑色凝灰岩	5号配石下部	
	8	〃	〃	180.2	砂岩	F—8—2	
	9	〃	〃	290.3	〃	30号B住居	
	10	〃	〃	135.8	〃	17号住居下部	
	11	〃	〃	183.9	〃	20号住居	
	12	〃	〃	245.5	〃	30号A住居	
	13	〃	〃	552.0	〃	30号A住居	
	14	〃	〃	476.2	〃	13号住居	
120	1	〃	〃	124.3	〃	E—12—2	
	2	〃	〃	185.3	緑色凝灰角礫岩	1号配石	E—7—3
	3	〃	〃	224.3	砂岩	30号B住居	
	4	〃	〃	132.3	〃	30号B住居	
	5	〃	〃	120.8	〃	G—7—4	
	6	〃	〃	151.1	砂質粘板岩	D—11—2	
	7	〃	〃	190.0	砂岩	30号B住居	
	8	〃	〃	449.9	砂岩	30号B住居	
	9	〃	〃	622.3	〃	E—11—3	
	10	〃	〃	460.0	〃	F—11—3	
	11	〃	〃	235.2	細礫岩	E—11—3	
	12	〃	〃	261.8	砂岩	30号A住居	
121	1	III	一部欠	(87.1)	砂質粘板岩	F—11—1	
	2	〃	完形	159.4	砂岩	D—6—2	
	3	〃	〃	166.7	〃	1号配石	B—7—1
	4	〃	〃	146.2	〃	D—8—4	
	5	〃	〃	242.1	〃	13号住居	
	6	〃	〃	148.6	〃	30号A住居	
	7	〃	一部欠	(293.3)	〃	C—13—3	
	8	〃	完形	165.1	泥岩	F—20—1	
	9	〃	〃	133.0	砂岩	D—6—2	
	10	〃	〃	126.6	砂質粘板岩	30号B住居	
	11	〃	〃	453.3	砂岩	7号住居	
	12	〃	〃	436.0	砂質粘板岩	30号A住居	
122	1	II②	完形	160.5	凝灰岩	F—8—2	
	2	〃	〃	494.8	粘板岩	20号住居	
	3	II①	〃	432.8	砂岩	表採	
	4	〃	〃	285.9	〃	25号住居	
	5	〃	〃	180.3	砂質粘板岩	37号住居	
	6	〃	〃	345.0	砂岩	F—12	
	7	〃	〃	1,333.7	ホルンフェルス	E—3	
	8	〃	〃	1,462.2	砂岩	15号住居	
123	1	II②	〃	106.6	〃	D—10—4	
	2	〃	〃	62.3	砂質粘板岩	C—13—2	
	3	〃	〃	88.9	砂岩	20号住居	
	4	〃	〃	216.8	〃	30号A住居	
	5	〃	〃	289.9	〃	E—6—1	
	6	〃	〃	242.0	泥質ホルンフェルス	6号住居	
	7	〃	〃	229.5	砂岩	30号A住居	
	8	〃	一部欠	(99.1)	粘板岩	E—8	

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
123	9	II②	完形	218.9	千枚岩	38号住居下部	
	10	Ⅳ	〃	121.7	砂岩	29号住居	
	11	〃	〃	186.3	〃	6号住居周辺	
	12	〃	〃	215.5	砂岩粘板岩	D—9	

表8　磨製石斧一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
124	1	II③	一部欠	(9.0)	蛇紋岩類	1号配石	
	2	〃	完形	10.3	〃	E—11—4	
	3	II②	〃	10.8	〃	表採	
	4	〃	半欠	(13.6)	〃	29号住居	
	5	〃	半欠	(25.5)	緑色岩	5号住居周辺	
	6	〃	完形	29.1	蛇紋岩類	D—8—3	
	7	〃	一部欠	(31.0)	〃	E—13	
	8	〃	一部欠	(28.8)	〃	D—6—2	
	9	〃	完形	22.2	〃	D—11—2	
	10	〃	〃	27.8	〃	1号配石	C—7—3
	11	〃	一部欠	(31.0)	〃	1号配石	F—7—3
	12	〃	〃	(24.0)	凝灰岩？	F—10	
	13	〃	〃	(33.2)	蛇紋岩類	C—12—2	
	14	〃	〃	(10.2)	粘板岩	17号住居	
	15	〃	〃	(11.0)	〃	31号住居	
	16	〃	〃	(30.5)	〃	29号住居	
	17	〃	〃	(76.2)	蛇紋岩類	D—10—3	
	18	〃	完形	92.3	緑色岩	E—13—2	
	19	〃	〃	10.8	蛇紋岩類	14号住居	
	20	〃	〃	14.5	凝灰岩	8号住居	
	21	II①	〃	12.6	頁岩	F—12—4	
	22	〃	〃	246.8	玄武岩	5号配石	
	23	〃	〃	144.4	ドレライト	31号住居	
	24	〃	〃	186.7	玄武岩	6号住居	
	25	〃	欠	(186.3)	蛇紋岩類	1号配石	C—7—3
	26	〃	半分欠	(168.5)	ドレライト	28号住居下部	
	27	〃	半分欠	(83.9)	緑色岩	1号配石	C—7—4
	28	〃	半分欠	(171.6)	緑色凝灰岩	C—8—2	
	29	〃	半分欠	(230.3)	ドレライト	C—12—1	
	30	〃	一部欠	(157.6)	蛇紋岩類	E—13	
	31	〃	一部欠	(135.1)	緑色凝灰岩	1号配石	E—7—3
125	1	〃	欠	(451.8)	閃緑岩	E—8—1	
	2	〃	欠	(612.1)	〃	F—11—2	
	3	〃	欠	(426.3)	〃	F—9—1	
	4	〃	欠	(308.8)	〃	F—12—4	
	5	I	完形	270.2	蛇紋岩類	表採	
	6	〃	欠	(360.5)	緑色岩	1号配石	E—7—3
	7	〃	完形	348.8	〃	1号配石	F—7—3，4
	8	〃	欠	(205.6)	〃	D—11—3	
	9	〃	〃	(295.0)	〃	F—10—4	
	10	〃	〃	(281.8)	〃	表採	
	11	〃	〃	(180.2)	〃	37号住居	
	12	〃	一部欠	(213.9)	〃	F—4—3	
126	1	〃	欠	(251.3)	緑色岩	1号配石	

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
126	2	I	欠	(460.2)	緑色岩	1号集石	
	3	〃	一部欠	(347.2)	〃	30号A住居	
	4	〃	完形	509.9	〃	F—12—4	
	5	〃	一部欠	(503.4)	〃	C—9	
	6	〃	〃	(218.2)	〃	13号住居	
	7	〃	〃	(782.8)	〃	20号住居	
	8	〃	欠	(466.1)	玢岩	〃	
	9	〃	一部欠	(198.8)	緑色岩	26号住周辺	
	10	〃	完形	423.0	蛇紋岩類	18号住居	

表9　磨石一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
127	1	I①	完形	704.3	輝石安山岩	D—10	
	2	〃	〃	505.8	〃	18号住居	
	3	〃	〃	572.4	〃	31号住居	
	4	I②	〃	719.9	〃	13号住居	
	5	I③	〃	652.1	〃	30号A住居	
	6	〃	〃	1,006.8	〃	30号A住居	
	7	I②	〃	330.0	砂岩	表採	
	8	I③	一部欠	(719.5)	安山岩	6号住居	
	9	〃	完形	2,108.9	輝石安山岩	19号住居	
128	1	II③	完形	280.0	〃	E—8—1	
	2	〃	〃	240.0	〃	25号住居	
	3	II②	〃	699.4	ホルンフェルス	E—11—2	
	4	II③	〃	1,123.2	輝石安山岩	13号住居	
	5	II③	〃	652.1	〃	D—11—2	
	6	II②	〃	1,066.2	〃	F—11—3	
	7	II①	〃	393.1	〃	1号配石	E—7—1
	8	〃	〃	373.6	〃	4号配石	
	9	〃	〃	838.3	〃	30号B住居	
129	1	II①	〃	658.0	〃	F—11—1	
	2	〃	〃	560.0	〃	F—8—2	
	3	II③	〃	278.2	〃	30号A住居	赤彩
	4	II①	半分欠	(939.0)	〃	C—12—1	
	5	II③	完形	518.2	〃	4号配石	赤彩
	6	〃	〃	371.8	〃	D—10—3	赤彩
	7	〃	〃	1,519.5	閃緑岩？	表採	
	8	〃	〃	327.7	輝石安山岩	表採	赤彩
	9	V	欠	(1,049.5)	〃	D—12	石棒
130	1	III	完形	41.6	〃	1号配石	C—7—1
	2	〃	〃	71.6	〃	1号配石	C—7—4
	3	〃	〃	30.7	〃	4号配石	
	4	〃	〃	100.6	安山岩	25号住居	
	5	〃	〃	71.2	輝石安山岩	4号配石	
	6	〃	〃	184.6	〃	4号配石	
	7	〃	〃	131.2	〃	5号配石	
	8	〃	〃	96.0	〃	D—6—2	
	9	〃	〃	237.2	〃	D—12—2	
	10	〃	〃	86.1	〃	F—11—4	
	11	〃	〃	112.6	〃	E—12—4	
	12	〃	〃	74.1	〃	D—11—2	

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
131	1	Ⅳ	完形	600.6	（変質）デイサイト	F—12—4	
	2	〃	〃	874.0	輝石安山岩	29号住居	（柱穴）
	3	〃	〃	1,396.9	〃	4号住居	
	4	〃	〃	555.0	輝石安山岩	D—11—2	

表10　石皿・他一覧表

図	番号	遺存	石質	出土地点	備考
132	1	一部欠	輝石安山岩	22号住居	
	2	半分欠	〃	8号住居	
	3	一部欠	〃	E—11—2	
	4	〃	〃	22号住居	
	5	半分欠	〃	17号住居	
	6	完形	〃	30号A住居	
	7	半分欠	〃	17号住居	
	8	〃	角閃石デイサイト	3号配石	
133	1	〃	輝石安山岩	F—12	
	2	〃	〃	4号配石	
	3	〃	〃	表採	
	4	欠	〃	26号住居下部	
	5	〃	安山岩	D—8—1	脚付
	6	完形	輝石安山岩	表採	〃
134	1	半分欠	〃	D—3	
	2	〃	〃	4号配石	
	3	欠	角閃石デイサイト	22号住居	
	4	一部欠	輝石安山岩	30号A住居	
	5	完形	〃	D—10—3	
	6	欠	角閃石デイサイト	4号住居	

表11　石錘・軽石製品一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
135	1	石錘	完形	21.7	砂岩	1号配石	B—7—3
	2	〃	〃	19.2	粘板岩	D—12	
	3	〃	半分欠	(17.5)	〃	D—11—4	
	4	〃	完形	29.9	〃	C—9	赤彩
	5	〃	〃	21.0	〃	B—8	
	6	〃	〃	69.3	緑色片岩	E—12—1	
	7	〃	半分欠	(45.9)	粘板岩	E—10	石剣
	8	〃	〃	(20.1)	粘板岩	E—12—4	〃
	9	浮子？	一部欠	(84.8)	角閃石デイサイト	1号配石	C—7
	10	〃	完形	55.7	スコリア	F—11	
	11	〃	半分欠	(37.6)	角閃石デイサイト	E—5	

表12　砥石一覧表

図	番号	分類	遺存	石質	出土地点	備考
136	1	I	完形	砂岩	F—12—1	
	2	〃	半分欠	〃	14号住居	1部赤彩
	3	〃	一部欠	〃	29号住居	
	4	〃	半分欠	ホルンフェルス	19号住居	
	5	〃	〃	砂岩	5号配石	
	6	〃	〃	〃	1号配石	B—7—1
	7	〃	一部欠	〃	1号配石	D—7
	8	〃	半分欠	〃	F—11—2	
	9	〃	一部欠	〃	31号住居下部	
	10	〃	〃	〃	D—11—1	
	11	〃	〃	〃	F—12—4	
	12	II	半分欠	〃	F—11—2	
	13	〃	一部欠	〃	C—12—1	
	14	〃	〃	〃	F—11—2	
	15	〃	欠	輝石安山岩	C—8	
	16	〃	一部欠	砂岩	D—12—1	
	17	〃	半分欠	〃	1号配石	C—7
	18	IV	完形	〃	29号住居下部	
	19	〃	〃	〃	C—13	
	20	〃	半分欠	〃	31号住居	
	21	III	〃	〃	29号住居	
	22	〃	〃	〃	1号配石	
	23	〃	欠	〃	D—4—3	
	24	〃	〃	〃	D—6—4	
	25	〃	〃	〃	E—10—3	
	26	〃	完形	〃	試掘	
	27	〃	一部欠	〃	D—12—4	
	28	〃	〃	〃	5号住居	

表13　石鏃一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
137	1	I	完形	0.2	黒曜石	F—9—1	
	2	〃	〃	0.2	〃	1号配石	E—7
	3	〃	〃	0.5	チャート	5号配石	
	4	〃	〃	0.5	黒曜石	17号住居	
	5	〃	〃	0.8	〃	1号配石	D—7—4
	6	〃	〃	0.6	チャート	D—6	
	7	〃	〃	0.7	黒曜石	1号配石	F—7—4
	8	〃	一部欠	(0.8)	〃	B—8	
	9	〃	完形	1.3	〃	D—8—3	
	10	〃	〃	0.4	チャート	F—9—3	
	11	〃	〃	0.8	〃	G—6—3	
	12	〃	〃	0.5	黒曜石	6号住居	
	13	〃	〃	1.0	〃	1号住居	
	14	〃	〃	1.3	チャート	1号配石	C—7—1
	15	〃	〃	1.3	黒曜石	F—11—4	
	16	〃	〃	1.6	〃	F—9—1	
	17	〃	〃	0.6	〃	表採	
	18	〃	〃	2.2	チャート	C—9—3	
	19	II	〃	0.2	黒曜石	D—4	
	20	〃	〃	0.5	〃	G—4—1	
	21	〃	〃	1.4	〃	F—10—4	
	22	〃	〃	1.5	チャート	D—12—1	
	23	〃	〃	1.0	黒曜石	16号住居	
	24	〃	〃	1.2	〃	1号配石	C—7—4
	25	〃	一部欠	(1.0)	チャート	F—10	
	26	III	完形	0.6	黒曜石	D—12—4	
	27	〃	〃	0.8	〃	17号住居	
	28	〃	一部欠	(0.6)	〃	E—11—3	
	29	〃	〃	(1.3)	チャート	D—8—1	
	30	〃	完形	1.4	黒曜石	C—9	
	31	〃	一部欠	(1.9)	チャート	F—9—2	
	32	〃	完形	0.2	黒曜石	F—6—4	
	33	〃	一部欠	(0.6)	〃	D—12—2	
	34	〃	〃	(0.9)	〃	16号住居	
	35	〃	〃	(0.6)	〃	29号住居	
	36	〃	〃	(1.5)	〃	C—10—1	
	37	〃	完形	1.9	チャート	E—11—3	
	38	〃	〃	1.0	黒曜石	18号住居	
	39	IV	〃	0.3	〃	4号住居	
	40	〃	〃	1.0	チャート	C—8—1	
	41	〃	〃	0.8	〃	D—12—4	
	42	〃	〃	1.5	〃	28号住居	
	43	〃	〃	1.4	黒曜石	C—10—1	
	44	〃	〃	1.1	〃	D—10	
	45	V	〃	0.7	〃	C—12—3	
	46	〃	〃	0.7	チャート	1号配石	D—7—4
	47	〃	〃	5.8	頁岩	28号住居	
	48	〃	〃	5.8	チャート	E—8—1	
	49	〃	〃	1.9	〃	14号住居	
	50	〃	〃	2.3	黒曜石	C—13—2	
	51	VI	〃	5.0	チャート	F—8—1	
	52	〃	〃	10.5	〃	F—4—2	
	53	磨製鏃	欠	(2.0)	凝灰岩	1号配石	C—7

表14　石錐・石匙・他一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
138	1	石錐	完形	2.4	シルト岩	1号配石	C—7—4
	2	〃	〃	2.4	チャート	D—11—1	
	3	〃	〃	1.6	〃	1号配石	C—7—4
	4	〃	〃	5.0	シルト岩	D—10—3	
	5	〃	〃	3.3	黒曜石	D—12—2	
	6	〃	〃	9.9	チャート	G—8—4	
	7	石匙	〃	1.8	黒曜石	D—4—4	
	8	〃	〃	4.6	チャート	11号住居	
	9	〃	〃	6.1	〃	D—6	
	10	〃	〃	12.5	〃	1号配石	C—7—4
	11	横歯形	〃	85.9	砂岩	E—8—2	
	12	原石		89.0	碧玉		
	13	〃		28.8	〃	F—11—3	
	14	〃		19.9	〃	G—9—1	
	15	みがき石	完形	37.0	砂岩	1号配石	D—7—4
	16	〃	〃	18.2	珪質岩	F—11—4	
	17	〃	〃	71.7	花崗岩類	E—11	
	18	〃	〃	45.4	チャート	25号住居	
	19	〃	〃	43.3	砂岩	5号配石（BC）	
	20	〃	一部欠	(38.1)	粘板岩	20号住居	
	21	〃	〃	(30.3)	凝灰岩	E—4—4	
	22	石弾	完形	43.8	輝石安山岩	C—3	
	23	〃	〃	23.1	〃	F—10—1	
	24	〃	〃	20.4	〃	D—8—1	
	25	〃	〃	25.7	〃	B—11—2	
	26	〃	〃	27.8	〃	D—6—1	
	27	〃	〃	16.5	〃	D—6—1	

表15　垂飾品等一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
139	1	勾玉	完形	1.1	硬玉	1号配石	B—7
	2	〃	〃	2.8	〃	D—6—4	
	3	〃	〃	6.8	玉髄	C—12	
	4	〃	一部欠	(7.1)	硬玉	D—6—4	
	5	〃	完形	18.4	硬玉	14号住居	
	6	玉	〃	0.6	〃	C—12	
	7	〃	〃	3.8	〃	D—6—3	
	8	大珠	〃	111.7	〃	C—13—1	
	9	丸玉	〃	12.3	〃	30号A住居	
	10	〃	〃	4.1	〃	E—4—1	
	11	〃	〃	1.4	〃	F—6	
	12	玉	〃	1.2	デイサイト	31号住居	
	13	未製品	〃	6.7	凝灰岩	F—12	
	14	玉	半分欠	(3.7)	滑石	C—6	
	15	玦状耳飾	半分欠	(3.6)	粘板岩	1号配石	
	16	〃	欠	(8.8)	滑石	F—11—4	
	17	未製品	完形	18.8	塩基性岩	D—11	

表16　石剣・石棒等一覧表

図	番号	分類	遺存	石質	出土地点	備考
140	1	I	完形	緑色片岩	29号住居	
	2	〃	〃	〃	5号配石	
	3	〃	一部欠	〃	5号配石	
	4	〃	〃	〃	10，17号住居	一部黒色
	5	〃	完形	〃	28号住居外	E—11
	6	〃	半欠	〃	31号住居	
	7	〃	欠	点紋緑色片岩	F—12	
	8	〃	〃	緑色片岩	31号住居下部	
	9	〃	〃	点紋緑色片岩	D—5，E—8	接合
	10	II	〃	点紋粘板岩	1号配石	C—7
	11	〃	〃	緑色片岩	31号住居	
	12	〃	〃	〃	F—8	
	13	I	〃	〃	D—11—1	
	14	〃	〃	粘板岩	D—11—1	
	15	〃	〃	緑色片岩	D—12—2	
	16	II	〃	粘板岩	D—13	
141	1	III①	〃	片岩	6号住居周辺	
	2	〃	〃	粘板岩	30号A住居	
	3	〃	〃	〃	1号配石	E—7
	4	〃	〃	〃	試掘	
	5	〃	〃	凝灰岩	1号配石	C—7
	6	〃	〃	緑色片岩	D—10	
	7	I	〃	粘板岩	5号配石下部	
	8	III①	〃	〃	1号配石	C—7—4
	9	〃	〃	砂質粘板岩	22号住居	
	10	〃	〃	点紋片岩	1号配石	D—7
	11	〃	〃	粘板岩	E—11—2	
	12	〃	〃	片岩	1号配石	B—7
	13	〃	〃	〃	表採	
	14	I	〃	粘板岩	D—11—3	
	15	〃	〃	緑色片岩	1号配石	C—7
142	1	III②	〃	角閃石デイサイト	C—8	
	2	〃	〃	〃	1号集石	
	3	〃	〃	輝石安山岩	D—12—2	
	4	〃	〃	〃	1号住居	
	5	〃	〃	変質安山岩	G—9—1	
	6	III①	一部欠	緑色片岩	1号配石	B—7
	7	〃	欠	〃	D—4—1	
	8	〃	欠	粘板岩	1号配石	F—7—2
	9	III②	欠	角閃石デイサイト	21号住居	
	10	〃	完形	緑色凝灰岩	14号住居	
	11	〃	欠	〃	B—3	
	12	〃	〃	デイサイト	D—13	砥石
143	1	〃	欠	点紋緑色片岩	1号配石	C—7—1
	2	〃	〃	緑色凝灰岩	〃	D—7—4
	3	〃	〃	輝石安山岩	〃	
	4	〃	〃	〃	〃	
	5	〃	完形	変質安山岩	〃	
	6	〃	一部欠	輝石安山岩	〃	D—7—1
	7	〃	完形	〃	〃	E—7—1
	8	〃	〃	緑色片岩	D—6—1	
144	1	〃	完形	輝石安山岩	2号配石	磨石
	2	〃	欠	デイサイト	〃	

図	番号	分類	遺存	石質	出土地点	備考
144	3	Ⅲ②	完形	輝石安山岩	2号配石	
	4	〃	欠	〃	〃	
	5	〃	完形	〃	〃	
	6	〃	一部欠	〃	4号配石	
	7	〃	欠	細礫岩	〃	
	8	〃	〃	輝石安山岩	〃	
	9	〃	〃	〃	12号石組	

表17　石製品一覧表

図	番号	分類	遺存	重量（g）	石質	出土地点	備考
145	1	独鈷石	完形	612.4	砂岩	14号住居	
	2	〃	半分欠	(367.7)	輝石安山岩	1号集石	
	3	〃	半分欠	(542.8)	〃	2号配石	
	4	〃	一部欠	(369.3)	粘板岩	F—10—1	
	5		完形	413.0	輝石安山岩	C—13—1	
	6		〃	597.9	〃	C—12—1，2	
	7		半分欠	(362.2)	〃	E—8—4	
	8		完形	430.0	〃	5号配石	
	9		〃	277.7	〃	1号集石	
	10		〃	195.4	〃	1号配石	C—7

表18　遺物出土地点一覧表

	土偶	耳飾	土製品		石鏃	多孔石	石錐	打斧	磨斧	石皿	磨石	石剣・石棒	砥石	みがき石	石弾	その他
			円盤	土版												
住居																
1					1					1		1				
2					2			1			9					
3		1			5				1		1					
4	1				6	1	1			1	2					
5	1	3			9		1	1	2		1		1			
6	8	7			10			13	2		1	2				
7	2	4			10		1	2								
8	3	2			18				1	1	5					
9		1														
10		1						3			3	1				
11	1	2			14		1	1			6					石匙1
12	1															
13	1	3	1		5			13	1		4					
14	2	5			6			4	1		6	1	1			
15	1	1	1		1				1							
16					8			1								
17	1	4	3		27			3	1	2	3	1				
18	1	8			34		1	4	3		7	2	1			
19		1			3				2		7		1			
20	4	16			19		1	16	4		3	2		1		
21		1			7		1	2			3	2				
22	1	1			8			3	1	3	5	1				
23		1			17		1									
24	2	8			3						1					
25		6	1		19			2			4			1		石匙1
26	4	5	1		11			5	3	1	9					
27	3	1	1	1	13			20	1		21	2	1			
28	1	9		1	12				2		7	1				
29	6	6			21			1	1		2	2	2			
30	4	13			3			20	1	2	18	2				
31		7						1	1		7	3	2			
32								2	1		6					
33																
34		2														
35		1														
36																
37	1				2			1	2		2					
38	2	18						2	1							
39								1	1							
配石																
1	41	91	6		322		8	46	17	1	38	22	8	1		石匙4 磨製鏃1 石製耳飾1
2	3	1	1								1	4				独鈷石1
3					9					2	1					
4	2	15						4	1	4	15	3				
5	4	7	2		11	1		7	2	1	7	4	1	1		

	土偶	耳飾	土製品		石鏃	多孔石	石錐	打斧	磨斧	石皿	磨石	石剣・石棒	砥石	みがき石	石弾	その他
			円盤	土版												
石組2		2														
5		2														
8		1														
10		3														
11					1											
12										1		1				
13		1														
16								1				1				
土坑																
5	1	1														
集石																
1								1	1		4	1				
グリット																
B3					9		1					1				
4	1				4							1	1			
5		1														
6	1	4	1		6				1							
7																
8	1	9			14											
9																
10																
11																
12																
13																
C3	1		2		12			1	1				1		2	
4	1	2			5				1							
5					1											
6		3			41			3								
7																
8	2	6	4	1	81		2	5	3		7	2	1			石匙1
9	1	1	1		10			1	1		2	1	1			
10	2	2	8	1	40		1	6			8		3			
11	1				2			1								
12	5	10	2		26		1	4	2		4	3	4	1		
13	3	2	1		6		2	10	6	2	11	4	2			
D3	2	1			9		1	4	2	2	11		2			
4	7				38	1		1				3	1			石匙1
5	4	8			12			4				2	1		1	
6	13	71	3		109		3	15	8		4	4	5		2	石匙1
7																
8	1	8		1	33			8	2	1	8		1		1	
9	1				10			1								

	土偶	耳飾	土製品		石鏃	多孔石	石錐	打斧	磨斧	石皿	磨石	石剣・石棒	砥石	みがき石	石弾	その他
			円盤	土版												
D10	1	3	3		36	2	4	7	3	1	12	3	1			
11	6	5	23	1	66		3	16	11		9	9	4	1		
12	3	11	11		41		1	15	5		24	4	3			
13	3	1	1	1	14		1		2		3	2				
E3	1	2	5		8			7	1		1		2			
4	6	1			39			1	1			1	5	1		
5	7	12	1		36		1	3	1			2				
6	1	3	1		36			3	1							
7																
8	2	5	1	1	59			8	2		17	3	4			横歯形1
9		1	1		7			1								
10	2	8	4		22		1	3	1	1	2	2	1			
11	4	4	7		47			9	3	2	11	2	2	1		
12	4	5	2		34	1	3	11	6		8	1	2			石錘2
13	7	1	3		14		1	6	8		14	2	1			
F3					9			1								
4					5				1		2					
5																
6					13											
7																
8	4	9			45		1	11	3		3	1	1			
9	2	2			49		1	4	2		1	3				
10	5	7		1	19		2	5	5	1	2	1	2		1	独鈷石1
11	4	17	3		59		1	18	3		16	4	5	1		軽石1
12	3	7	1		15			9	3	2	7	2	2			
13					1		1									
G3																
4	1				2											
5																
6		2			10			1	1							
7	5	25			18		1	9	1		2	1				
8	1	12			10		1	3			3		2			
9	4	13		1	38			1			3	4				
10																
11																
12																
13																
試掘	2		5	1								1				
表採	6	14			74	5	1	13	6	6	44	5	1		1	
合計	233	560	111	11	1,931	11	51	400	152	37	448	133	79	9	8	

表19　石器分類表①

	石鏃									打製石斧						磨製石斧				
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計	I	II		III	IV	計	I	II			計
											①	②					①	②	③	
住居																				
1			1						1											
2			1					1	2					1	1					
3	2	1	1				1		5								1			1
4	1		1	2			1	1	6											
5	7	2							9			1			1		1	1		2
6	5	1	2				2		10	4	1	8			13	1	1			2
7	5		1				2	2	10			1	1		2					
8	6		7				3	2	18									1		1
9																				
10										1		2			3					
11	9		3				2		14	1					1					
12																				
13	1		2				1	1	5	8		2	3		13	1				1
14	3	2	1	1					6	3		1			4			1		1
15								1	1		1				1					
16	2	1	2	1			2		8	1					1					
17	8	1	13		1		4	1	27	3					3			1		1
18	16		5				9	4	34	3	1				4	2		1		3
19	1						2		3							1	1			2
20	8		1			1	5	4	19	8	1	5	2		16	2	1	1		4
21	6						1		7	1		1			2		1			1
22	4		1		1			2	8			1	2		3			1		1
23	10	2	4					1	17											
24	1		1				1		3											
25	13		5	1					19		1	1			2					
26		1	6				3	1	11	4		1			5	2	1			3
27	9		3				1		13	5	1	1	3		10		1			1
28	3	1	1	2	1		3	1	12								2			2
29	4		11				6		21	1					1			1		1
30	2		1						3	11		4	5		20	1				1
31												1			1			1		1
32										2					2	1				1
33																				
34																				
35																				
36																				
37							1	1	2	1					1	2				2
38										2					2		1			1
39												1			1		1			1
配石																				
1	148	18	41	1	3	3	63	45	322	30		11	5		46	8	5	3	1	17
2																				
3	2		4					3	9											

	石鏃									打製石斧						磨製石斧				
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計	I	II		III	IV	計	I	II			計
											①	②					①	②	③	
4										3		1			4			1		1
5	3		2			1	2	3	11	7					7	2				2
集石1										1					1	1				1
石組11							1		1											
16										1					1					
グリット																				
B3	4		4		1				9											
4	3						1		4											
5																				
6	2		2					2	6								1			1
7																				
8	8	1	2			1	1	1	14											
9																				
10																				
11																				
12																				
13																				
C3	5	1	1					5	12	1					1			1		1
4	3		1					1	5									1		1
5		1							1											
6	20	2	10	1			4	4	41	2		1			3					
7																				
8	36	6	16	1		1	13	8	81	2		3			5	1	2			3
9	2	2	3		1			2	10				1		1	1				1
10	13		14	3	2		6	2	40	3		2	1		6					
11	1	1							2	1					1					
12	8	2	6		2	1	4	3	26	3			1		4		1	1		2
13	3		1		1			1	6	7		2	1		10	3	3			6
D3	6				1		2		9	3		1			4	1	1			2
4	23	3	1				7	4	38	1					1					
5	5		3		1		3		12	2		2			4					
6	54	5	9	1		1	19	20	109	6		4	4	1	15	5	2	1		8
7																				
8	15	1	6		1		7	3	33	5		1	2		8		2			2
9	3		4		1		1	1	10					1	1					
10	17	1	4	1			10	3	36	6		1			7	2		1		3
11	22		27	3	2	1	7	4	66	11		3	2		16	6	4	1		11
12	10	3	14	2			11	1	41	9		3	3		15	2	2	1		5
13	7		2		2		2	1	14								2			2
E3	3	1	2				1	1	8	3	2		2		7	1				1
4	22	2	3			1	4	7	39	1					1			1		1

	石鏃									打製石斧						磨製石斧				
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計	I	II		III	IV	計	I	II			計
											①	②					①	②	③	
5	19	2	4				6	5	36	2		1			3		1			1
6	19	1	4				8	4	36	2		1			3	1				1
7																				
8	31	3	9		1		9	6	59	5		2	1		8	1	1			2
9	2	1	1					3	7			1			1					
10	8	3	3	1	2		4	1	22	3					3	1				1
11	15	2	12				13	5	47	5		1	3		9	1		1	1	3
12	13	1	9				5	6	34	5		3	3		11	2	4			6
13	3	1	3				5	2	14	3	1		2		6	5	1	2		8
F3	3					1	3	2	9				1		1					
4	2						1	2	5							1				1
5																				
6	8		1		1		1	2	13											
7																				
8	25	3	2			1	10	4	45	5	1	2	3		11	3				3
9	23	3	10				10	3	49	3		1			4		2			2
10	8	1	2	2		1	4	1	19	1	1	1	2		5	2	2	1		5
11	16	2	12				19	10	59	9		7	2		18	2	1			3
12	7	2			1		3	2	15	5	1	3			9	1	1	1		3
13			1						1											
G3																				
4		1					1		2											
5																				
6	6							4	10		1				1		1			1
7	8	1					6	3	18	6		2		1	9	1				1
8	7	1					2		10	3					3					
9	21	1	3				9	4	38	1					1					
10																				
11																				
12																				
13																				
表採	35	2	16		1	1	6	13	74	7	2	3	1		13	4	1	1		6
合計	853	92	347	22	28	15	344	230	1,931	232	14	94	56	4	400	71	52	27	2	152

表20　石器分類表②

	磨石										石剣・石棒類					
	Ⅰ類			Ⅱ類			Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	計	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類		不明	計
	①	②	③	①	②	③							①	②		
住　居																
1														1		1
2			2	2	1	3			1	9						
3	1									1						
4	1					1				2						
5				1						1						
6			1							1			2			2
7																
8			1	3	1					5						
9																
10						3				3	1					1
11				3		3				6						
12																
13	1			1		2				4						
14		1			1	3	1			6				1		1
15																
16																
17				1		1	1			3	1					1
18	1		1	3		2				7		1	1			2
19	1			3	2	1				7						
20	1			1		1				3			1		1	2
21				2		1				3			1	1		2
22				3		2				5			1			1
23																
24			1							1						
25				1		2	1			4						
26	1			7	1					9						
27		1	2	7	4	7				21			2			2
28	1			5			1			7			1			1
29				1				1		2	2					2
30	3	1	1	4	2	4	2	1		18			2			2
31	1			3	1	2				7	2	1				3
32			1	2	1	1	1			6						
33																
34																
35																
36																
37					1	1				2						
38																
39																
配石1	4		1	18	3	7	5			38	1	1	12	7	1	22
2				1						1				4		4

	磨石										石剣・石棒類					
	I類			II類			III類	IV類	V類	計	I類	II類	III類		不明	計
	①	②	③	①	②	③							①	②		
3	1									1						
4			1	6	1	3	4			15				3		3
5		1		4			1	1		7	3		1			4
集石1				1		3				4				1		1
石組12														1		1
16													1			1
グリッド																
B3													1			1
4													1			1
5																
6																
7																
8																
9																
10																
11																
12																
13																
C3																
4																
5																
6																
7																
8				3	1	3				7			1	1		2
9				1		1				2					1	1
10	1		1	2		4				8						
11																
12						1	1	1	1	4			1		2	3
13	1			3	3	2	1	1		11	2		2			4
D3	2			4	1	1	3			11						
4													3			3
5											1	1				2
6				2			2			4		1	2	1		4
7																
8			1	4		3				8						
9																
10	2			5		5				12			3			3
11				4	3		1	1		9	6		2		1	9

	磨石										石剣・石棒類					
	I類			II類			III類	IV類	V類	計	I類	II類	III類		不明	計
	①	②	③	①	②	③							①	②		
12		1		10	4	2	5	1	1	24		1	1	1	1	4
13		1		1	1					3		1		1		2
E3				1						1						
4													1			1
5															2	2
6																
7																
8			1	8	1	5	2			17	2		1			3
9																
10					1		1			2	1		1			2
11	2		1	4	3	1				11			2			2
12				3		3	2			8	1					1
13				2	2	4	6			14	1		1			2
F3																
4	1			1						2						
5																
6																
7																
8				1			2			3		1				1
9	1									1		1	1		1	3
10				2						2			1			1
11	4			3		5	4			16		2	2			4
12	1			2	2	1		1		7	1				1	2
13																
G3																
4																
5																
6																
7				1		1				2			1			1
8				3						3						
9				2		1				3			1	1	2	4
10																
11																
12																
13																
表採	1		3	22	3	12	2		1	44	2		3			5
試掘													1			1
合計	33	6	18	177	43	108	50	8	4	448	27	11	58	24	13	133

第Ⅳ章　金生遺跡出土石器の使用痕分析

1．はじめに
2．各石器に見られる使用痕
3．ま と め

東北大学助手　梶　原　　洋

1．はじめに

使用痕研究の詳細については、幾つかの論考が発表されているのでここでは省略する（例えば梶原、阿子島1981）。近年の研究動向は、阿子島（1989）、山田（1986a,b）、岡崎（1989）らによって発表されているが、使用痕研究に対する幾つかの問題点も指摘されている。まず第一に、堆積後の表面変化による疑似使用痕形成である（例えばBasemanl986，Levi—SaIa1986）。第二には、使用痕、特に光沢の分類が被加工物と対応する違いがあるか、またそれを訓練によって識別できるかどうか（Newcomer，Grace，Unger—Hamilton 1986）、第三には、使用痕の記述の客観化と量的な数値で現す技術の開発である（Grace 1989）。このうち第一と第三については、技術的な問題なので、適切な方法を用いれば解決は可能である。第二の問題は、個人のパターン認識能力といわゆる科学における論証の問題とも重なる、かなり困難な要素を含んでいる。しかしかつて何度も述べたように何らかの判断のための根拠を持たない使用痕分析は無意味であり、その点過去の作業との関連が保証されないという問題はあるにしろ、実験による対比資料の作成とそれに基づいた分析は、最善の方法である。また光沢と被加工物の対応の問題だが、L．H．KEELEYを初めとする欧米の研究者では、1対1の対応を考えている。しかし、我々の研究では、当初から光沢それ自体を分類し、その組み合わせが被加工物とどのように対応するかという観点から研究を進めており、その結果光沢タイプの組み合わせが、被加工物に大体、対応するという結論に達している。また光沢の識別については、個々の研究者の習熟度合いも問題にするべきであり、この点については、対応が無いと否定するよりもまず実験を自ら行い、検証する必要がある。今まで経験したこともない顕微鏡下の風景を解読するためには、まず経験を増やすことなのである。これまでの東北大学の使用痕研究チームの経験では、実験の石器の光沢のタイプと操作方法の認識については問題がほとんど無かった。むしろ問題は、堆積後の表面変化による光沢の汚染にあると考えられる。

2．各石器に見られる使用痕

今回扱った資料は全部で、13点である。材質はさまざまだが、チャートが多い。いずれもスクレイパーあるいは二次加工ある剝片と呼ばれるもので、いわゆる定形的な石器ではない。その中で使用痕の観察できたものは7点である。残りの6点は、いわゆる同定不能の光沢に覆われているもの2点、堆積後の表面変化と考えられるもの4点である。ここでは使用痕の観察できたものについて順次観察結果を説明すると共に同定不能の光沢や堆積後の表面変化についても載せたい。

①（第146図上）　背面右側のほぼ直線状をなす部分に縁辺に直行する線状痕と、Ｅ1，Ｅ2の光沢が見られる。使用の程度はそれほどでもないが、皮の掻き取りに使われたと推定できる。

②（第146図下）　背面腹面の縁辺部に沿って平行する線状痕とＥ1，Ｅ2の光沢が見られる。皮あるいは肉の切断に使用されたと推定される。

③（第147図上）　腹面縁辺部にＦ1，Ｅ1の光沢と、縁辺に直行線状痕が見られる。しかし掻き取りの痕跡にしては、やや中まで見られることから削るように使われたと推定できる。光沢が弱いため、被加工物の推定は保留する。

④（第147図下）　腹面縁辺部に直行する線状痕と、Ｅ1を主とする光沢が見られる。皮の掻き取りに使用されたものと推定される。

⑤（第148図上）背面腹面の二次加工を施された縁辺部にほぼ平行した線状痕とＥ1を主とし、Ｆ1が混じ

る光沢がみられる。皮あるいは肉の切断に使用されたと推定できる。

⑥（第148図下）　背面二次加工部分が帯状に光る。この部分の光沢はかなり強いが既知の光沢タイプにうまく合致しない。ただこの光沢が、腹面では、二次加工に切られているためただの堆積後の自然変化とも考えられない。今の所は不明光沢としておきたい。縁辺部にはこれと別にＥ１，Ｆ１で線状痕が直行する部分があり、この部分は、皮の掻き取りと推定される。

⑦（第149図上）　この石器の場合、腹面右側辺に明瞭な使用痕が見られる。線状痕は縁辺に並走し、光沢はＥ２である。かなり硬い皮か肉の切断に使用されたと推定できる。下辺にも使用痕が見られるが、刃部再生のためか弱い。

次に極めて特徴的ではあるが、同定できない使用痕を取り上げてみたい。

⑧（第149図下）　背腹両面のかなり中まで、肉眼でも確認できる光沢が見られる。しかしこの光沢は、いわゆる草などを切ったときに出るタイプＡではない。もっと平板で黒曜石の表面に類似する。表面に見られる線状痕は、縁辺に平行するものが多いが、平滑面を剝ぎ取ったように走り、光沢形成後に付いたように見られる。また運動の方向を示す光沢面の凹凸（彗星状のくぼみ）も見られない。この光沢の成因については不明であるが、前述の線状痕の様子から必ずしも堆積後の表面変化を被った結果とも断定できない。

⑨（第150図上）　肉眼で確認できるほど全体に摩滅している。しかし拡大するといわゆるタイプＡではなく、石による研磨痕にむしろ近い。意図的研磨、使用による摩滅、堆積中の自然による摩滅などの理由が考えられるが、ここでは何れとも断定し難い。

⑩、⑪、⑫、⑬の４点に見られる光沢は（第150図下、151図）、全面に同じように広がり、縁辺も内部も均質な光り方をすることから、いわゆるSOIL SHEENと呼ばれる堆積後の表面変化によるものと考えられる。この状態では、たとえ本来の使用に由来する光沢があったとしても観察できない。

３．ま と め

以上から、使用痕の分析可能な７点中３点が皮の掻き取り、３点が皮あるいは肉の切断、１点が不明被加工物の削りに使われたと推定できる。点数が少ないため、有意差があると断定は困難だが、皮の掻き取りに用いられた石器の刃部は弧状を呈しており、切断に用いられた石器は直線的でかつ尖端部を持つ傾向が見られる。二次加工の程度はさまざまだが、このような石器がいわゆるＬ．Ｒ．ＢＩＮＦＯＲＤの言う「便宜的な」石器に属し（Binford1973）、必要に応じて使われ、鈍くなると刃部再生を受けたという可能性を示唆するものである。かつて筆者が分析した「石匙」でもほとんど加工のない状態から使い始められ、次第に二次加工が加わって、現在のような姿になっていることが明らかにされている（梶原　1982）。このような石器の使用過程での形態変化をDIBBLEはREDUCTIONと呼んで、ヨーロッパのムステリアンの石器に対する型式学的分析を批判したが（Dibble 1987）、一定の形を指向する（必要とする）石器を除いて、通常の使用に供する石器の多くは、このようであったと考えたい。この場合、石器形態は目的ではなく、あくまで結果として存在したことを考慮して型式学的分析を進める必要がある。

阿子島　香　1989　「石器の使用痕研究」　考古学ライブラリー　56　ニュー・サイエンス社

岡崎里見　1989　「石器使用痕ポリッシュ研究の疑問」　季刊考古学第29号　52―56

梶原　洋・阿子島　香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究　―ポリッシュを中心とした機能推定の試み―」　考古学雑誌第67巻第１号　１―36

梶原　洋　1982　「石匙の使用痕分析―仙台市三神峯遺跡出土資料を使って―」　考古学雑誌第68巻第２号　43―81

山田　しょう　1986ａ　「使用痕光沢の形成過程」　考古学と自然科学　第19号　101―123

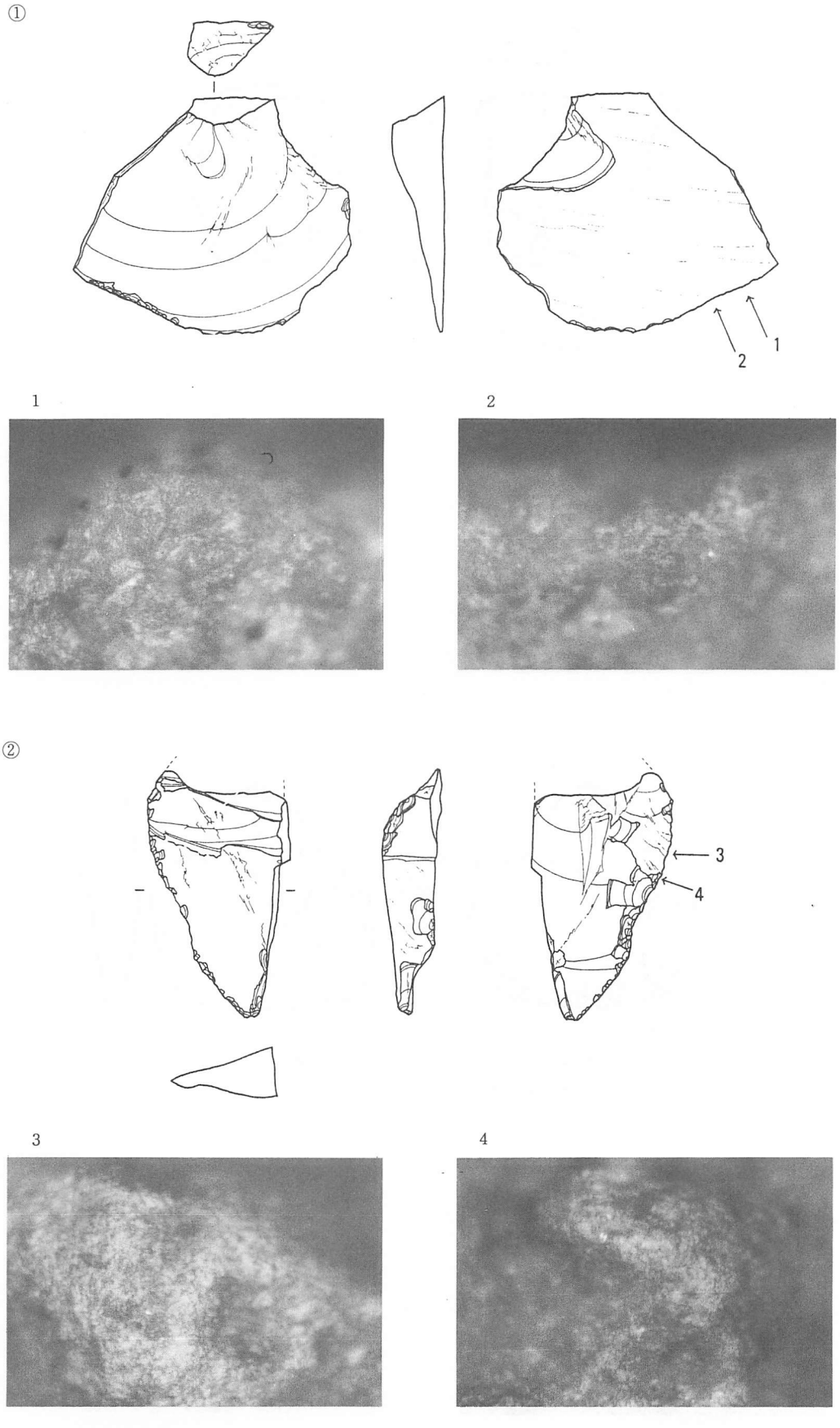
山田　しょう　1986ｂ　「使用痕研究の現状と針路」　歴史第67輯　72―94

Baseman,R. 1986 Natural Alterations of Stone Artefact Materials. Early Man News 9／10／11. 103－109

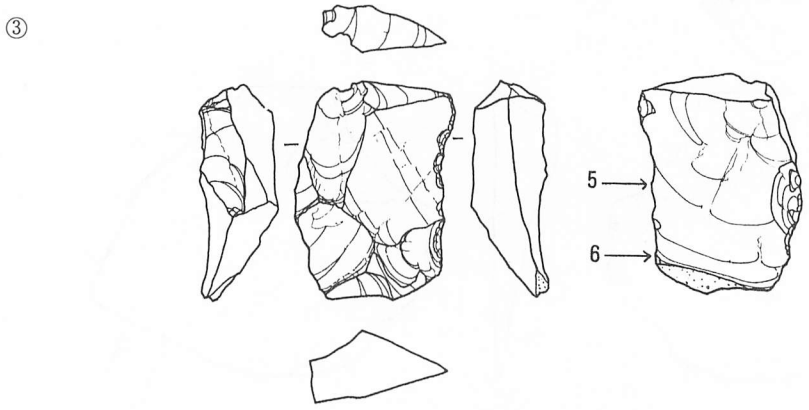
Binford, L. R. 1973 Interassemblage Variability : The Mousterian and the 'Functional Argument'. The Explanation of Culture Change : Models in Prehistory, Ed. by C. Renfrew. 227−254.
Dibble, H. L. 1987 The Interpretation of Middle Paleolithic Scraper Morphology. American Antiquity vol. 52 No. 1. 109−117.
Grace, R. 1989 Interpreting the Function of Stone Tools, The Quantification and Computerisation of Microwear Analysis. BAR International Series 474.
Levi−Sala, I. 1986 Experimental Replication of Post−Depositional Surface Modifications of Flint. Early Man News 9／10／11. 103−110.
Newcomer, M. H., Grace, R. and Unger−Hamilton, R. 1986 Investigating Microwear polishes with Blind Tests. Journal of Archaeological Science. 13, 203−217.

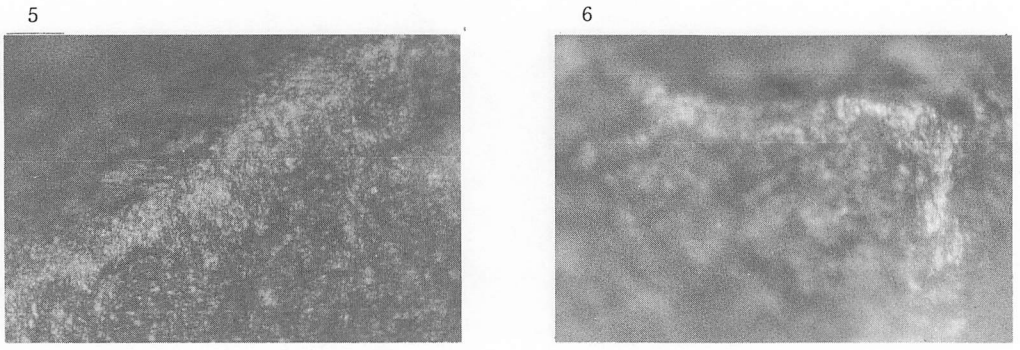
表21 石器一覧表

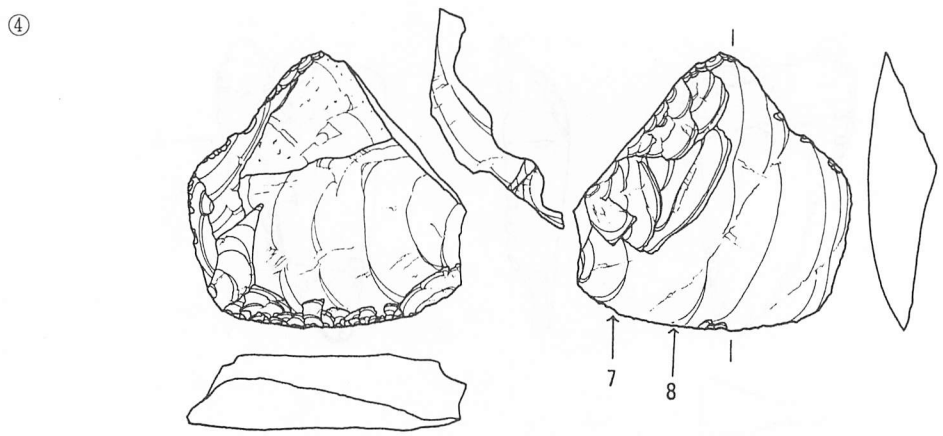
番号	図番号	石質	出土地点
①	第146図上	頁岩	F−8−1
②	下	頁岩	F−8−2
③	第147図上	玉髄	F−9−2
④	下	珪質頁岩	C−8
⑤	第148図上	黒色緻密安山岩	D−11−4
⑥	下	碧玉	C−12−4
⑦	第149図上	頁岩	D−7
⑧	下	頁岩	F−12−4
⑨	第150図上	砂質粘板岩	G−9−1
⑩	下	チャート	C−13−2
⑪	第151図上	チャート	D−8
⑫	中	珪質頁岩	D−10
⑬	下	チャート	18号住居

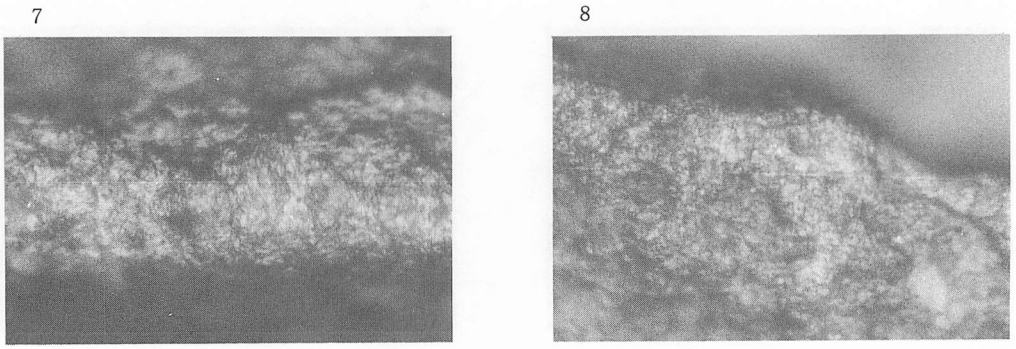


第146図　石器使用痕(1)（実測図１／1.5）



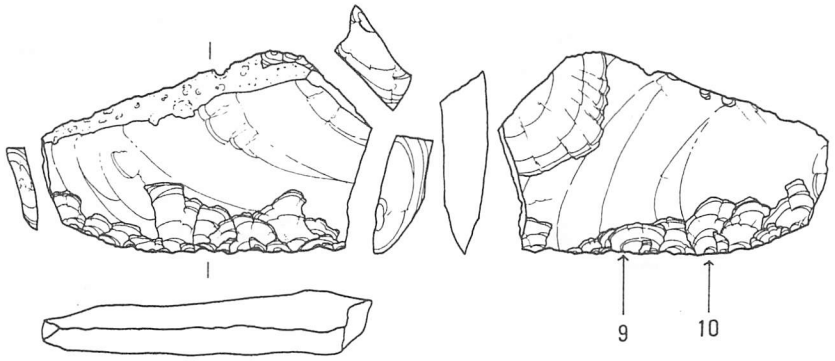




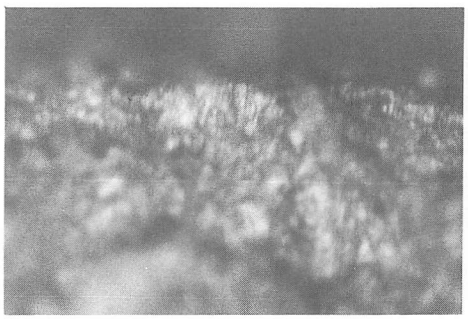


第147図　石器使用痕(2)（実測図１／1.5）

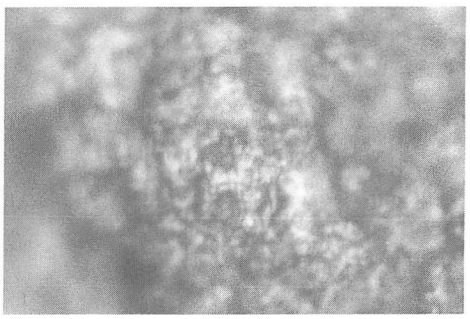
⑤



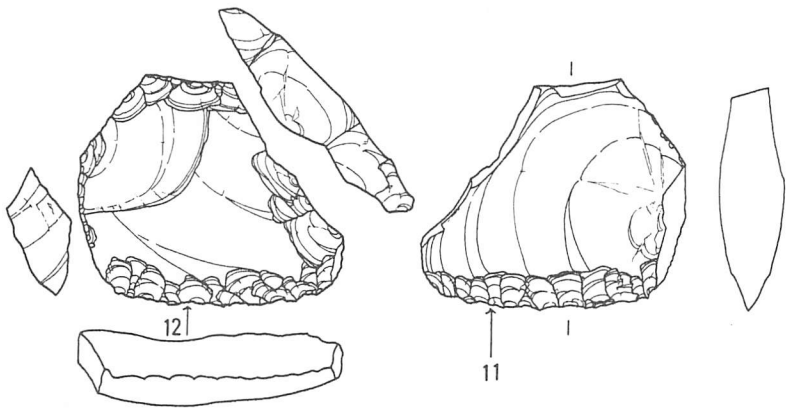
9



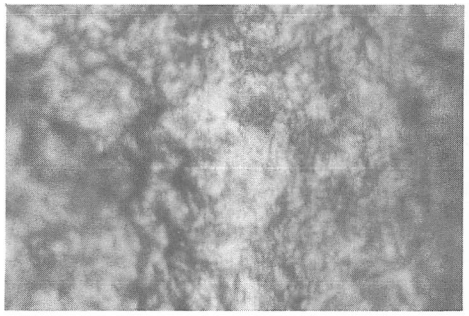
10



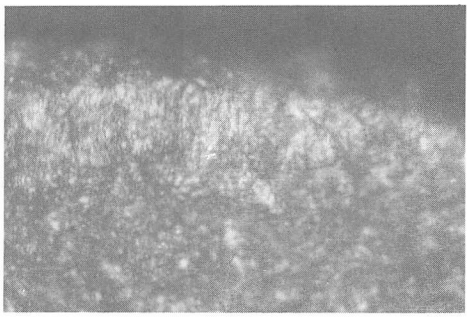
⑥



11

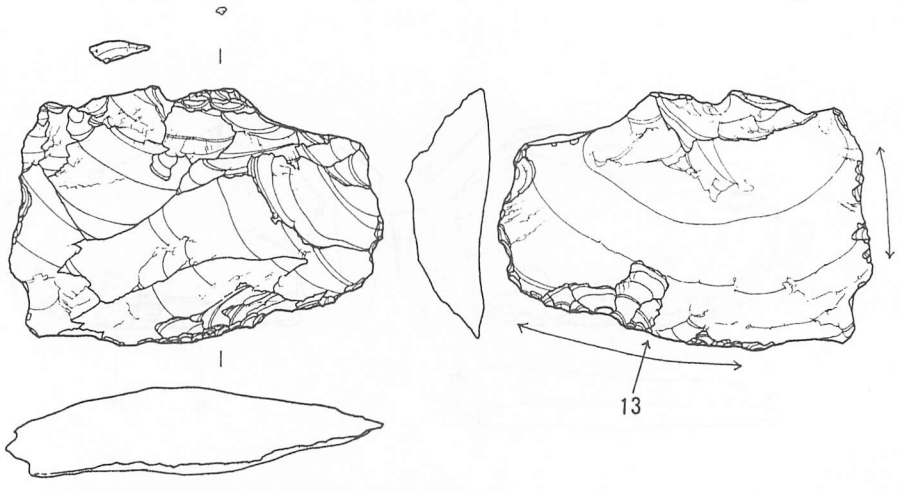


12

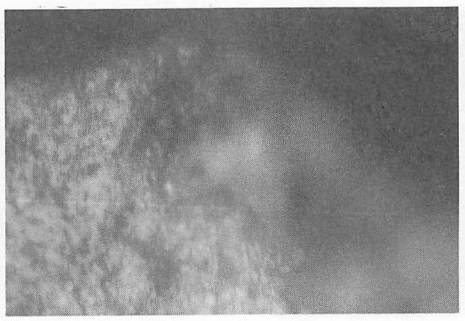


第148図　石器使用痕(3)（実測図１／1.5）

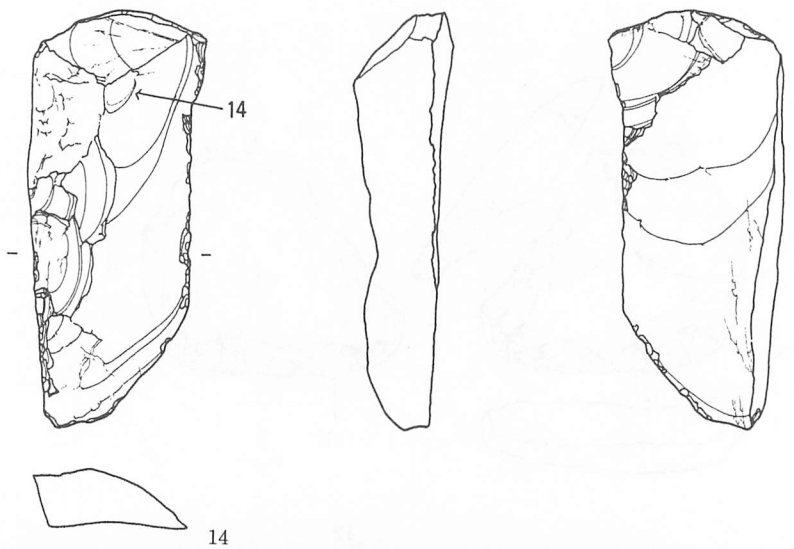
⑦



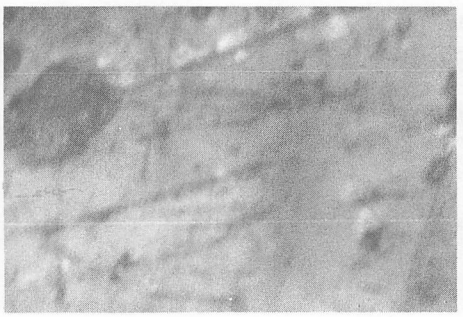
13



⑧

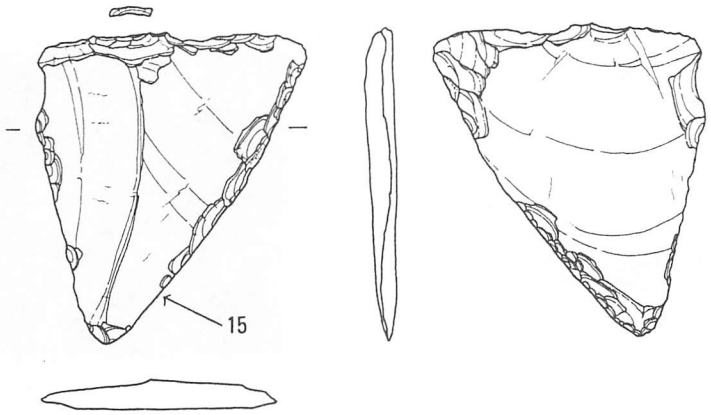


14

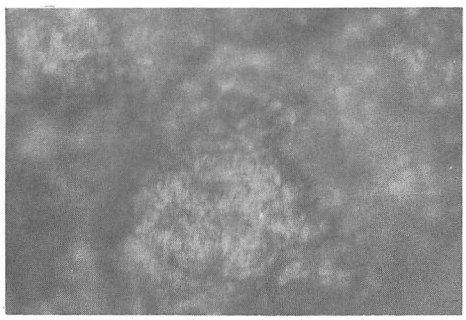


第149図　石器使用痕(4)（実測図１／1.5）

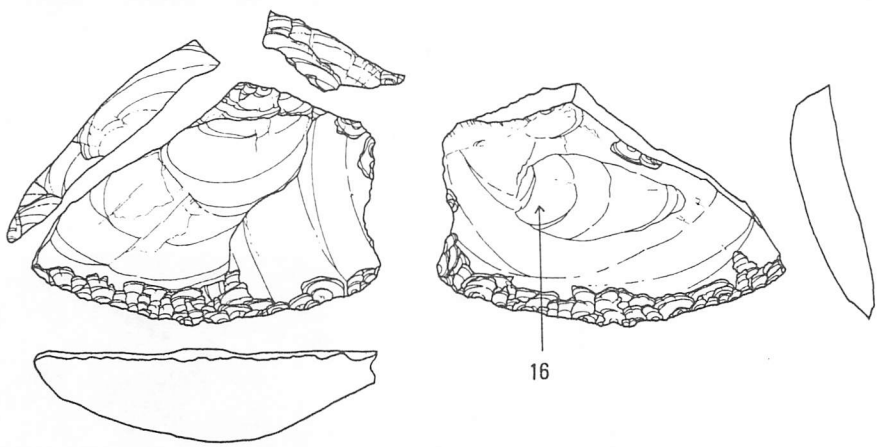
⑨



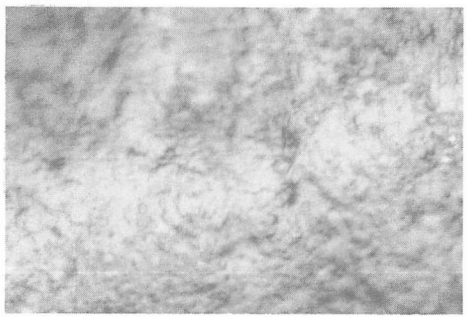
15



⑩

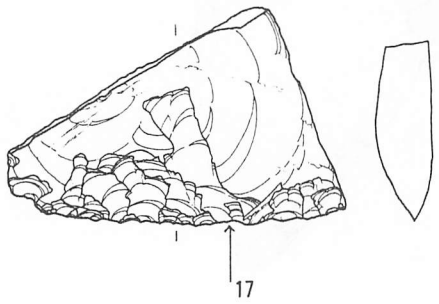


16

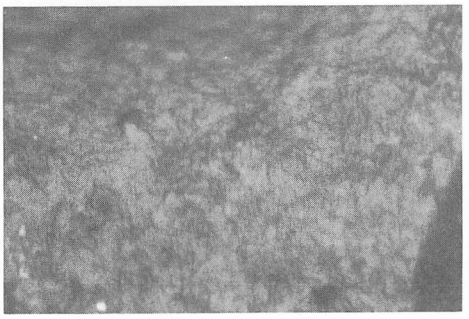


第150図　石器使用痕(5)（実測図１／1.5）

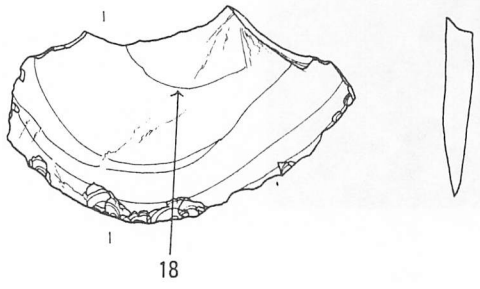
⑪



17

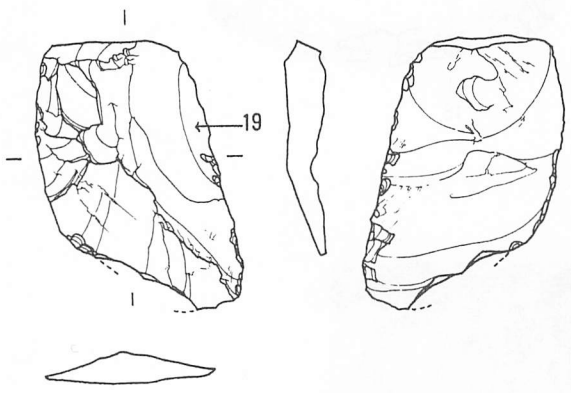


⑫



18

⑬



19

第151図　石器使用痕(6)（実測図１／1.5）

第Ⅴ章　金生遺跡石材の岩質とその産地の推定

山梨大学教授　西　宮　克　彦

1．はじめに

本遺跡は八ケ岳火山の南側の火山山麓面にあり、海抜770m～800m前後、北巨摩郡大泉村谷戸に位置する。

この遺跡が発掘調査されたところ、敷石住居、配石・組石・立石などの石材が多量に検出され、同層序から土偶・耳飾・玉類・石剣などの祭祀遺物も出土した。

そこで、これら石材の岩質と、その石材がどの付近のものであったのかを推定するため、本遺跡周辺の野外地質調査と室内実験を実施し、その上かなり大胆な推論を加えつつ、一応これらの結論を得たので、ここに報告する次第である。

2．石材の岩質

環状列石・環状積石・積石・組石・敷石・立石等に利用されたとみられる石材の岩質は以下の如くである。

岩石名	備考
A）　複輝石安山岩類	1）石材の約90％が本岩片である。 2）５種類に分類が可能。 3）環状列石・積石・組石・敷石などに多い。
B）　安山岩質凝灰角礫岩	1）多少風化を受けている。 2）比較的積石に多くみられる。
C）　ホルンフェルス	1）住居地に比較的多い。 2）極めて硬質である。
D）　粘板岩 E）　頁　岩 F）　硬砂岩	1）石剣石材原料とみられる。 2）これらの岩質からできている石器はみだされない。 （筆者がみた範囲内では）
G）花崗岩類	1）立石に比較的多い。 2）含・花崗閃緑岩、石英閃緑岩 3）付図に存在位置を示す。
H）　片麻岩類	1）立石及び組石に比較的多くみられる。 2）流理構造がみられる。 3）付図に存在位置を示す。
I）　黒曜石 J）　赤色黒曜石 K）　淡青灰色珪質シルトストン L）　チャート M）　石英（水晶）	1）石器材料とみられる。 2）一般的な黒曜石が量的に多い。 —（採集位置は以下の如くである）— 3）E－8－4、E－8－1、11号住居址が黒曜石 4）C－17－3が赤色黒曜石 5）E－7－1が石英（水晶） 6）31号住居址が珪質シルトストン 7）４号住居址がチャート
N）　その他	
玄武岩質安山岩	1）環状積石中に各１ケづつあり 2）26号住居址が前者、E—5—2が後者
輝緑凝灰岩、輝緑岩	1）石剣等の石材原料とみられる 2）各１ケづつがみられる

さらに、A）の複輝石安山岩類を細分類すると次のような特徴がある。

① 多孔質・黒色・ガラス質複輝石安山岩

（斑晶鉱物を多いものから順次示すと
斜長石＞普通輝石＞紫蘇輝石＞磁鉄鉱
石基鉱物を多いものから少ないものえと示すと
斜長石＞ガラス＞普通輝石＞シソ輝石＞磁鉄鉱＞燐灰石などからなる。）
図に代表的な本岩の位置を示す。また、図以外より採集した資料番号は次の如くである。
3号配石、7号住居址、5号住居址、4号配石、D—10—3
② 輝石の粗粒斑晶（5㎜前後）が特に目立つ、暗灰色・緻密カンラン石複輝石安山岩
（斑晶鉱物としては
斜長石＞普通輝石≒紫蘇輝石＞磁鉱鉱
石基鉱物としては
斜長石＞磁鉄鉱＞シソ輝石＞普通輝石＞ガラス＞カンラン石＞燐灰石など）
図に代表的な本岩の位置を示す。また図以外より採集した資料番号は次の如くである。
D—10—3、6号住居址、29号住居址、
以上の2種類が遺構中の石質として量的に最も多く、両者の量比は多少後者の方が高いとみられる。
③ 板状節理の発達がみられる（鉄平石状）、暗灰色・角閃石複輝石安山岩
（斑晶鉱物としては
斜長石＞普通輝石＞シソ輝石＞角閃石
石基鉱物としては
斜長石＞普通輝石＞シソ輝石＞磁鉄鉱など）
図に代表的な本岩の位置を示す。また図以外より採集した資料番号は次の如くであるが、本岩分布は散在せずに、ほぼ同一遺構内にあることが特徴である。
D—13—2
④ 赤褐暗色・多孔質・複輝石安山岩
（斑晶鉱物としては
斜長石＞普通輝石≒シソ輝石＞磁鉄鉱
石基鉱物としては
斜長石＞シソ輝石≒普通輝石＞ガラス＞磁鉄鉱など）
図に代表的な本岩の位置を示す。また図以外より採集した資料番号は次の如くである。
D—10—3、D—13—1
⑤ 暗灰色・緻密・角閃石複輝石安山岩
（斑晶鉱物としては
斜長石＞普通輝石＞シソ輝石＞角閃石
石基鉱物としては
斜長石＞普通輝石＞シソ輝石＞ガラス＞磁鉄鉱など）
図に代表的な本岩の位置を示す。また図以外より採集した資料番号は次の如くである。
5号住居址
B）の安山岩質凝灰角礫岩について
比較的固結度は低く、岩片は10㎝～15㎝大のものが多く、多孔質で黒色、ガラス質の複輝石安山岩礫を含むことが多い。
図に代表的な本岩の位置を示す。また、図以外より採集した資料番号は次の如くである。
E—10—2
C）のホルンフェルスについて
本岩は、黒色で細粒緻密な変成岩であり、変成鉱物としては黒雲母・斜長石・石英などが比較的多い。

図に代表的な本岩の位置を示す。また図以外より採集した資料番号は次の如くである。

5号住居址

D）・E）・F）の岩類について

これらの堆積岩は、我が国の四万十累層群を構成する主要な岩類であるが、本地内には全く露出しない。後述するように、どこかから運搬されて来たものであり、石剣石材として、また、7号住居址・30号住居址・26号住居址より採集された。

G）の花崗岩類とH）の片麻岩類

これらの深成岩および変成岩類は、本地域内には全く露出しない。したがって後述するように、どこからか運搬されて来たものであり、図に示した立石の1は、流理構造をもつ貫入片麻岩であり、石組みの1及び2は花崗閃緑岩及び石英閃緑岩である。

なお、4号配石に石英閃緑岩、25号住居址に片麻岩の小岩片、B－4－4に黒雲母花崗岩の小岩片が採集できた。

貫入片麻岩について

貫入とは地下深部にある岩奨が、すでにある火成岩体や堆積層などを横切り、或は其らの境界面に沿って侵入することをいい、これによって形成された片麻岩を貫入または注入片麻岩（Injection—gneiss）という。

立石1は本遺物中最も貴重なものとして資料小片を頂戴することが出来なかったので、鏡下の観察はできなかった。

したがって肉眼的観察のみの結果であるが、本片麻岩の特徴は次の如くである。

肉眼的に、細粒・灰白色であり、石英・斜長石・カリ長石、黒雲母が認められ、さらにごく少量の角閃石も含まれる。

このうち黒雲母と角閃石との有色鉱物と、石英・斜長石・カリ長石との無色鉱物とが、互層し、縞状を呈し線構造が多少認められることが特徴である。

花崗閃緑岩及び石英閃緑岩について

石組みの1及び2もまた本遺物中特に貴重なものとして、資料小片として頂戴することが出来なかったので、鏡下の観察はできなかった。

したがって肉眼的観察のみの結果を以下に示す。

肉眼的に前者は中粒の優白質岩で、斜長石・カリ長石・石英・黒雲母および少量の角閃石が含まれる。

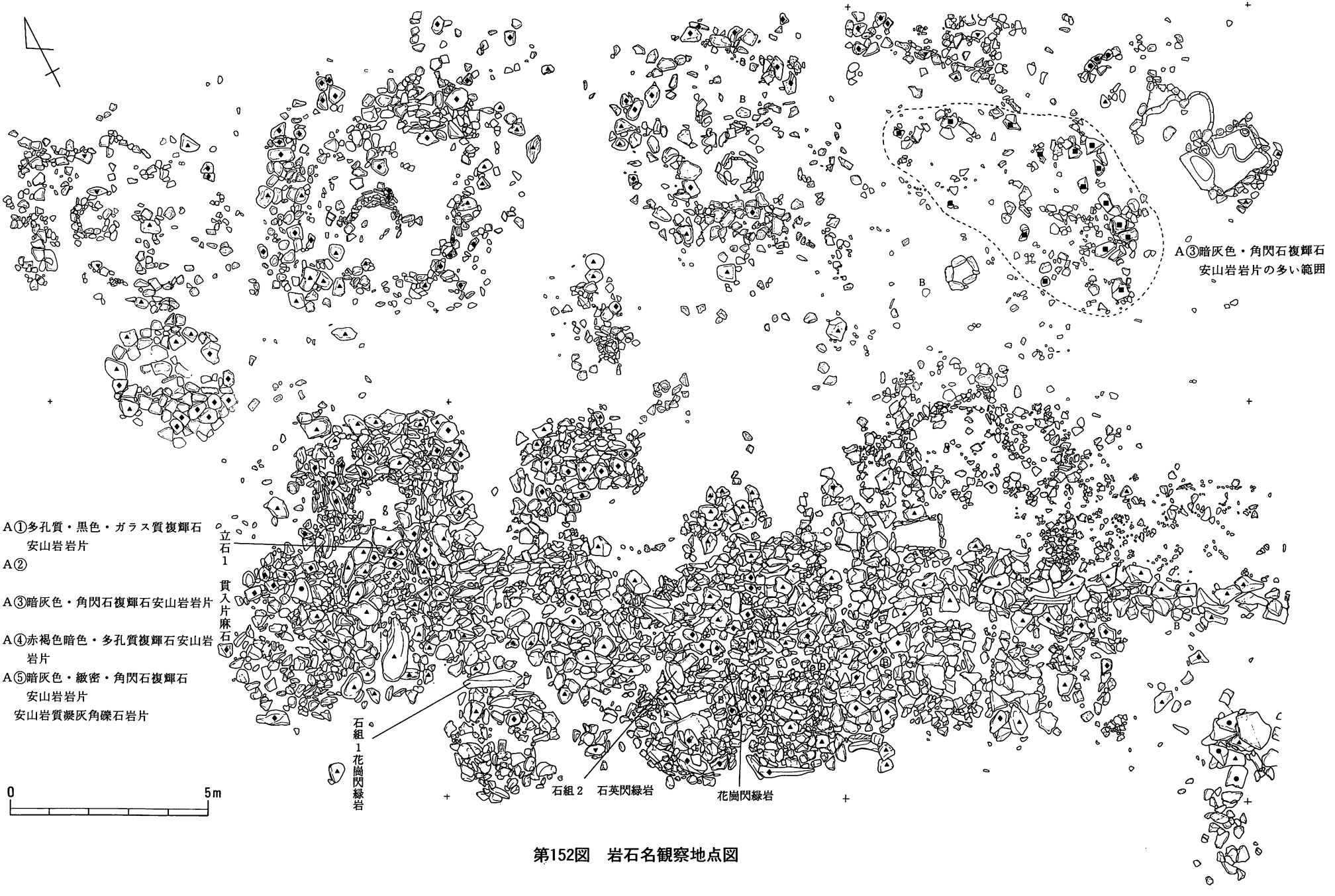
一方、後者は暗灰色中粒～細粒で、カリ長石はみられないのに対し、斜長石・石英・角閃石ならびに輝石が少量認められた。

以上が、本遺構中特に重要な石材の岩質観察結果である。

3．遺跡石材の産地の推定

八ケ岳火山体・八ケ岳火砕岩台地・釜無川河床礫の調査ならびに従来標本として採集した山梨県内の岩石類と、本遺構内から出土した岩石類とを比較検討した結果、金生遺跡の石材産地を下記の如く推定することが可能である。

出土岩石名	原石の推定産地
① 多孔質・黒色・ガラス質複輝石安山岩岩片	（八ケ岳）権現岳溶岩の砕屑堆積物
② 暗灰色・緻密カンラン石複輝石安山岩岩片	（　〃　）編笠山溶岩の砕屑堆積物
③ 暗灰色・角閃石複輝石安山岩岩片	（　〃　）川俣川溶岩の砕屑堆積物
④ 赤褐暗色・多孔質複輝石安山岩岩片	（　〃　）赤岳溶岩の砕屑堆積物
⑤ 暗灰色・緻密・角閃石複輝石安山岩岩片	（　〃　）立場谷溶岩の砕屑堆積物
Ⓑ 安山岩質凝灰角礫岩岩片	（八ケ岳）権現岳凝灰角礫岩の砕屑堆積物
Ⓒ ホルンフェルス	釜無川河床礫（下蔦木集落西方の釜無川右岸のホルンフェルスによく類似する）



第152図　岩石名観察地点図

Ⓓ	粘板岩	釜無川河床礫（西側四万十統の堆積岩）
Ⓔ	頁　岩	釜無川河床礫（　〃　）
Ⓕ	硬砂岩	釜無川河床礫（　〃　）
Ⓖ	花崗閃緑岩	釜無川河床礫（鳳凰山系の花崗岩類）
	石英閃緑岩	釜無川河床礫（　〃　）
Ⓗ	貫入片麻岩	釜無川河床礫（鳳凰山閃雲花崗岩周辺相の片麻岩）
Ⓘ	黒曜石	長野県和田峠産？
Ⓙ	赤色黒曜石	〃　？
Ⓚ	淡青灰色珪質シルトストン	釜無川河床礫（西側山地の四万十統の堆積岩に類似）
Ⓛ	チャート	釜無川河床礫（四万十統のチャートに類似）
Ⓜ	石　英（水晶）	産地が多いので不明（産出資料１つ）
	その他	
Ⓝ	玄武岩質安山岩（１つ）	（八ケ岳）産と考えられるが、産出資料１つのため不明
	玢　岩　（１つ）	（八ケ岳）中岳産と考えられるが、産出資料１つのため不明
	輝緑凝灰岩　（１つ）	釜無川河床礫（西側山地の西万十統の輝緑凝灰岩に類似）
	輝緑岩　（１つ）	釜無川河床礫（西側山地の四万十統の輝緑岩に類似）

以上が産出岩類の原産地の推定である。なお、これら岩類を含有するローム層等に含まれる花粉分析等を実施すると、当時の環境（自然ならびに生活）等も明確化することを付記して報告にかえる次第である。

第Ⅵ章　金生遺跡出土の獣骨

早稲田大学考古学研究室　金　子　浩　昌

1．はじめに

イノシシ焼骨の発見

金生遺跡の一つA遺跡と呼称された地域で多量の獣骨の出土したと云う知らせを受けたのは、この地域の発掘調査も最終の段階に至っていた昭和53年11月25日のことであった。資料の確認と今後の対応のために牛沢百合子君が現地に向ったのはその直後である。そして、それらが大部分イノシシのものであること、しかもそのすべてが強い火で焼かれているものであったと云うことが確認された。しかも、それらが若い個体のもので、かつ下顎骨のみという特定の部位を集めたものであることも牛沢君によって直ちに確認されていたのである。

このような骨の在り方は、筆者らがこれまで、日本の各地でみて来た骨の様相とは大変異なるものであった。またもちろん山梨県下でこれに類した骨の検出はこれまでにかつてなく、調査関係者の間でも少なからぬ驚きの気持をもって注目されたのである。

資料の整理作業

資料はすべて牛沢君によって東京にもたらされ、その洗い、分類整理が進められることになった。しかし、その作業はかなり時間を要するものであった。それはその大部分がごく若い個体のイノシシの下顎骨であり、普通の状態でも骨が丈夫でない上に、強い火を受けたためにひび割れ、破損し易くなっていたからである。そのため破損した標本が多くなっていたのも止む得ぬことであった。特に歯の破損がひどかった。エナメル質の部分が火に弱く、殆んどくずれ去っていた。しかし、歯槽中にのこるもの（未萌出歯）、歯根はのこるので、埋没時の歯の有無を確認するために、こうした部分の保存に気をつけねばならなかった。

若獣の下顎骨に比べると数の上では少なかったが大型の成獣下顎骨もあり、それらは接合補修する作業にかなりの時間を要した。なお、おくれて、同遺跡の別の地点で出土した鹿角その他がさらに送付され、この遺跡の獣骨が単純なものでないことが判明することになった。またこうした鹿角がある程度の大きさまで修復出来たのも他に類例の少ないことであった。

関係資料の探査

本資料の検出後、山梨県下の同様な焼骨の出土例については特に注意して、機会ある毎にこれを調査してきたが、その規模と内容において金生遺跡の場合と同じ性格のものはまだ知られていない。山梨県以外の例についても注意しているが、各地で様々な類例が知られて来ており、一部金生例に共通する在り方も知られているが、やはりその規模においても金生のは比較にならぬ数である。今回の報告に当っても、こうした点がなお充分ではないが、これは今後の資料の探査に待つより外はない。

謝　辞

今回の報告に当り、この貴重な資料を調査する機会を与えられた山梨県教育庁文化課の新津　健氏に対しては心からの御礼を申上げる次第である。また本資料のX線写真の撮影に当ってお世話になった国立歴史民族学博物館の西本豊弘氏、その他の写真の撮影に協力していただいた東京大学遺跡調査室の武藤康弘氏、資料の補修や計量に協力していただいた品川区遺跡遺跡調査会の井上雅孝氏の諸氏に対しても厚く御礼を申しのべたい。

本報告の構成

標本の記載に先立ち、これらを出土した遺構、埋存の状況等についてふれておきたい。これらの諸点は、別にある発掘調査編においてもふれられるはずであるが、特に骨の遺存の状況もふくめて、本項においてものべておきたい。その後で、個々の標本について記述するつもりである。

2．遺跡における焼骨の保存状況

本遺跡での獣骨の出土は、A地点8号土壙中において最も多量に出土したが、他に一般の包含層、住居址中においても検出している。それらを地点別にのべる。

1．8号土壙中の焼獣骨

この土壙は径138㎝、深さ60㎝の円形のもので、内部には焼土が堆積し、特に底面の近くは焼土が多かった。そして、この底面近くに骨は集中するように堆積していたことが認められているが、焼土中に全く埋没するというのではなく、焼土と黒土混りの土層内に埋存し、焼骨によってはその髄腔内に黒色土が充満する状態をみることができた。焼骨の形成がこの土壙中で行われたとしても、それには、種々の条件が加わり、幾度にもわたり、間をおいて行われたことが推測される。

はじめにも記したように本遺構の検出が発掘の最終段階時でのことであったのと、多量の出土であったために、その取り上げに充分に対応出来なかったことを聞いている。整理に当ってもこのような点を考慮して、遺物をみていく必要があろう。なお、埋存するイノシシの下顎骨は、埋存後土壙内が流入する土砂で埋まり、撹乱を受けることはなかったと思われる。それは各下顎骨が焼かれた直後の状況で保存されていると考えられたからである。例えば、脱落し易くなっている歯槽中の歯根部分、末萌出の犬歯などがのこされていることが多く、若し、これらの顎骨が焼けたあとでひどく原位置を動いたとすれば、到底こうした状況を保つことはなかったと思われるからである。従って、現在みる破損はむしろ発掘時点での衝撃によるものではないかと思っている。

2．石組及び住居址中の焼骨

土壙を除いて、それ以外にも焼骨はひろく散布していた。ただし、その一つ一つの骨の大きさや量は僅かなもので、その種を判定できる標本も極めて限られた。それらの大部分が断片的な骨であったからである。包含層のはもちろん石組内の骨も原初の位置にあったものであるかどうかは疑問のように思われる。

3．第30号B住居址覆土中検出の焼骨

この住居址内より得た焼骨は特別であった。それは上述した諸地点出土の焼骨に比べて、その全量がはるかに多く、また大型の骨角がのこされていたからである。これらの焼骨は床面上10㎝程の位置にあり、黒色土中に埋存した。出土状況は一カ所に集中するというよりも散在的であったというのが調査者による観察であるが、採集されている骨角には明らかに同一個体と思われるものがあり、それらのものはある程度まとまっていたのではないかということが予想される。そのことを考えて、この住居址で出土した鹿角については特に念入な修復の作業を行ったが、それを完成させるまでには至らなかった。これらの骨角が焼かれた原位置にあるわけではないから、すでに早く失われた部分もあったと思われる。しかし、いずれにしても、この住居址内の焼骨は異状に多く、何らかの特別な意義があったと考えざるを得ないのである。

検出された獣類種名表

脊椎動物門　*Phylum VERTEBRATE*
- 哺乳綱　*Class Mammalia*
  - 食肉目　*Order Carnivora*
    - クマ科　*Family Ursidae*
      - ツキノワグマ　*Selenarctos thibetanus*
  - 偶蹄目　*Order Aritiodactyla*
    - イノシシ科　*Family Suidae*
      - イノシシ　*Sus scrofa*

シカ科　　*Family Cervidae*

ニホンジカ　　*Cervus nippon*

ウシ科　　*Family Bovidae*

ニホンカモシカ　　*Capricormis crispus*

本遺跡で検出された獣骨は上記の4種である。今それらの記載に当って、獣骨の顕著な出土をみた、三つの地点、つまり8号土壙、石組及び一般包含層、30号住居址内のそれぞれに分けて標本の在り方、形質の概要を記述していきたいと思う。

3．獣類の焼骨

1．8号土壙の獣骨

イノシシ　*Sus scrofa*

8号土壙からは最も多くのイノシシの骨を出土している。そして、その大部分は下顎骨であったが、本遺跡のイノシシの特徴は年令別の構成が明瞭にみられる点であって、大量の当才の個体と、それよりも数の少ない2～3才以上の個体の下顎骨であった。以下、これらの標本を年令グループに分けて説明する。

A．当才の下顎骨群

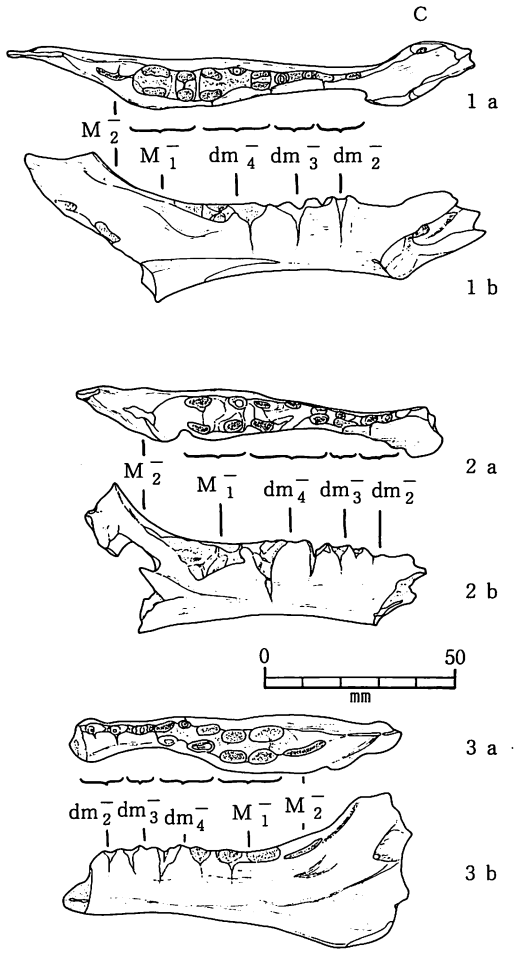
当才の下顎骨は全標本の83%を占めるもので、その出土量は最も多かった。しかし、標本自体は破損するものが多く、骨体を良くのこす標本はごく一部であった。これは、若い個体の場合は、骨質が充分に骨化せず、骨壁も薄いために、強い火を受けるとその損傷はひどく、ひび割れ、変形し、その破損を著しくするからである。特に歯牙の部分の損傷はひどく、年令の唯一の決め手になる歯の欠損は個体毎の微妙な違いを見出すことを不可能にした。そのために、歯の萌出状況、大きさがその目安となり、それを歯槽の形態から判断した。

この顎骨群は、乳歯dm_4までと、永久歯M_1までが萌出し、M_2は未萌出、ただし、M_2の歯槽をおおう骨に幅5～6㎜位までのき裂が生ずる位の段階までのものである。

標　本

下顎骨の左右が連合（左右の顎骨関節は骨化接合する）する状態にある標本が最も多いが、これには、a）連合部分のみの標本。b）骨体がある程度のこる標本（dm_4の歯槽のあたりで折れる）。c）左右が分離している標本。これは稀で、犬歯歯槽部近域で折れるものが多い。上記a）に接合するものなのであろう。d）骨体と枝骨部分をのこす標本でこれは極く稀である。e）下顎骨、枝骨部分のみの破片。関節突起、筋突起などが破片となって検出されている。

以上a）とc）、あるいはe）には同一個体のものがあるはずであるが、それらの接合関係を見る作業は充分に行われていない。標本が小さいことと、犬歯歯槽部の破損であるために、殆んど原型を失なっていると考えられるからである。



第153図　イノシシ下顎骨歯槽による歯の位置と名称

これらの下顎骨は犬歯の歯槽部分が調べられないので雌雄不明。但し、雌の可能性が大きい。
Cは乳犬歯、dm 乳歯、Mは臼歯
M_2は歯槽部に幅の狭い切れ目が出来た程度である。

以下ａ）～ｅ）について若干の説明を追記する。

ａ）左右下顎骨の連合部であるので骨質も丈夫で、よくのこるのであろう。ただし、その最先端（i_1歯槽の上縁）までのこる標本は稀で、多くの標本はその部分を欠く。その割れ口は新しい面をみせていることが多いので、埋没時にはさらに骨体がつづいたものであったと考えられる。

ｂ）骨体がdm_4位までのこる標本。左右がほぼ同程度にのこる例は稀で、左右いずれか一方がdm_4～M_2位までのこり、片側は犬歯部位で折れている標本が多い。その場合の割れ口には、新しいのと古いのがあり、埋存時にすでに左右のいずれかが、分離していた下顎骨もあったはずである。おそらく、強い力のために割れたものなのであろう。

ｃ）ほとんどdm_4のみの部分の小片と、M_1・M_2の歯槽ののこる標本など、大・小様々であるが、M_2の歯槽までのこる標本は少ない。おそらくこれは下顎枝の破損する際に、この部分に近接するM_2の歯槽部が破損し、原形を留めなくなっていることによるのであろう。

ｄ）下顎枝までのこす標本であるから、これはほぼ完存に近いものになるはずであるが、実際は左・右の揃うもの、連合部から連続してのこる標本はない。ただし、これについても修復の作業の進展によって接合資料の出来る可能性はある。

ｅ）下顎枝部の標本であるが、その折損部は大部分が下顎骨、筋、関節の突起部に近い部分である。これはその部分が薄い板状を呈しているために、折れ易くなっているからであろう。

これらの標本は、すべて同じ程度に火を受けており、灰白色に変色し、骨体に亀裂を生じていた。亀裂は歯槽上面から骨体の軸に直交するように生じているのが典型で、この亀裂は骨体を分断するように骨体の中央近くまでのび、かなりはっきりとしたＶ状のひび割をつくる。おそらくこのひび割れが元で、下顎骨体が幾つかに分断されるのであろう。この骨体に対する縦方向のひびに対して、骨体に付して横位のひび割れもはいる。このひび割れは普通短かく切れ々にはいるが、かなり長い場合もあって、骨体に長い裂け目が生じたり、それによって骨体が縦長に分断するようなことも生じている。これらのひび割れが下顎骨を小さく割るような結果になったのである。

歯　槽

下顎骨には乳切歯から乳犬歯、乳臼歯、永久歯M_1、M_2までの歯槽が認められ、埋没する犬歯の他に、歯根を歯槽内にのこす例は少なくない。埋没時には、どの下顎骨にも歯が残っていたと思われる。このうち、犬歯については雌雄の判定に役立ち、乳臼歯、永久歯の区別によって、年令を推測する。

臼歯のうち、dm_4（第４乳臼歯）は他の乳臼歯と異なって、前後に各２、その中間の頬側中央に１、計５本あくので他と区別することができる。M_1はそれより前の乳歯と比べて一段と大きく、歯根は４本である。

dm_4の次がM_1で４本の歯根、その次がM_2である。M_2は完存する場合は、歯槽の開口なく、幅の狭い亀裂が見えるだけである。中に未萌出の臼歯がある。しかし、この部分で破損する標本が多いが、開口しない歯槽の形を部分的にも観取することができる。

雌雄の区別

雌雄の区別は未萌出の犬歯と犬歯歯槽の大きさ、形状等を観察あるいはＸ線を使って調べた。犬歯自体については、永久歯で未萌出歯が歯槽内にあるのを直接観察することのできた標本もあり、歯が脱落している場合には歯槽の大きさや形状で確認できた。こうして多くの標本の雌雄が確認されている。これができなかったのは、犬歯部分が失われた標本のみである。

イノシシの場合、雌雄の永久歯の犬歯はその大きさで大差があり、未萌出のごく小さい歯があっても、その差は明瞭である。不幸中の幸いなことであったが、本標本はその殆んどが破損部をもつもので、特に犬歯付近の破損が多く、そこから犬歯の歯槽を観察できた。

雄の犬歯歯槽の幅は8.0～9.0㎜が観察され、歯槽の下縁は下顎骨の骨壁すれすれのところまでひろがる。

従って、犬歯歯槽を直接観察できなくても、顎骨の髄腔を通してこうした形を観察することができる。また、雄の下顎骨はこうした大型の犬歯歯槽をもつので、全体に体高が高くなる特徴をもつ。

雌の犬歯は4.0～5.0㎜の歯槽幅で、かつこの程度の生育（M_1萌出時）であると全高8.8㎜位である。これは雄の20.0㎜になるのと比べて半分である。従って、犬歯歯槽と下顎骨との間には歯髄腔が大きく開く、これもよく観察できる部分である。このように犬歯の小さいことから、下骨骨体は雄に比べて細目である。

集　　計

かなり破損の激しかった下顎骨標本から、その個数を算えるために、それらを下顎骨の部位別にすべて表中に示した。標本は左右の下顎骨が連合部で合わさった状態にあるものが多かったので、それを中心に調べ、さらに左右分離し、かつ近心端（吻端）をのこすものをそれに加えた。

♂獣下顎骨集計

dm_4M_1＜M_2＞*までの歯牙萌出で近心端をもつ標本：39＋5**

*：＜　＞は未萌出
**：やや成育の良い個体（萌出時は同じ）

左右分離している標本で、いずれか多い側　10（右）

計　54

♀獣下顎骨集計

dm_4M_1＜M_2＞までの歯牙萌出で近心端をもつ標本：49

左右分離している標本で、いずれか多い側：12

計　61

雄獣54、雌獣61、計115個体である。

B．１才以上の下顎骨

既述した当才もしくは１才までの下顎骨を除くと、他は２～３才以上のものになる。歯冠部が欠損しているので詳細は不明であるが、どの顎骨もM_3まで完全萌出していることは歯槽形成の状況からみても明らかである。M_3の完全に萌出するのが３才以上とされているから、これらの標本はそれ以上の個体とみることは可能であろう。

大型の下顎骨がよくのこされ、下顎枝の破損を除けば、ほぼ全体がのこるという標本もあり、また左右の顎骨が、それぞれM_2あるいはM_3の位置までのこる標本もある。現在は下顎枝が破損するが、これらはおそらく完存する形で埋存していたのであろう。このような状況は先にのべた当才イノシシの場合と同様ではなかったかと思う。ただ、大型の標本の方が逆に破損し易い状態となっていたことも考えられる。

雄　　獣

雄獣の下顎骨の方が修復される標本が多かったようである。骨が大きいのでやり易いこともあったと思う。しかし、下顎連合部などで接合できずに残されている標本がいくつもあり、それらが犬歯の歯槽部から折れているところをみると、その部分の弱かったことがわかる。おそらく犬歯歯槽内に歯は当初から無かったのであろう。

成獣個体下顎骨においても歯牙は歯根を除いて全く形を留めてはいなかった。しかし、歯根の残欠は歯槽内に認めたので、おそらく歯は当初すべてあったことは確かである。切歯及び臼歯についてはそうした状況であるが、犬歯は歯槽内に残欠する部分が全くないことからみて、当初から無かったものと思われる。つまり、犬歯は抜きとられていたのである。このことは大変興味深いことであって、犬歯が道具の素材として価値高いものであることを承知していた故に、それを早くに抜きとることをしているわけである。なお、下顎骨体も骨髄食のために打ち割るということを貝塚の資料にみるが、本遺跡の場合には標本の破損が人為的か自然かを確かめることが難しく、骨髄食のための骨体の破損は明らかにし得なかった。

雌　獣

雄の下顎骨とほぼ同じ保存の状況と云える。下顎骨の連合部をのこして、P_4～M_1あたりで折れている標本が多いが、別にある骨体部の標本と接合修復できた例は何故か殆んど無かった。骨がややきゃしゃであるために、骨の破損率が高かったのではないかと考えている。

歯牙は歯根をのこしてすべて失われているが、犬歯は歯槽部が破損していない限り歯槽内にその残欠がみられた。つまり雌の犬歯は雄とは違って抜かれることが無かったとみてよいであろう。

集　計

永久歯を萌出した標本も、左右の下顎骨の骨化した近心端をのこすものと、その部分がこわれた骨体部のみをのこすものの二つに大別できる。これらの標本が若し焼けることがなければ、標本の接合や大きさ、歯牙咬耗などによって、詳しく個体関係をみることも出来たのであるが、金生遺跡の場合には、それがほとんど出来ない状態、あるいは危険を伴うと考えたので、左右の連合状態にある標本のみに限って数を算えることにした。

♂の下顎骨連合部をのこす標本　14

♀　　〃　　9

計　　23

結局、この土壙内にあった下顎骨の個数、つまり左右を揃えるものとして本来埋存していたと考えられる数は、当才のもの115、３才以上の個体23、総計138個体である。

２．各グリッド、住居（30号を除く）、配石遺構出土の焼獣骨

ａ）各グリッド出土

すべて破片となっているもので、鹿角を除いてその部位を確認できた骨は少なかった。

イノシシ

当才位の下顎骨連合部１，D—12—１

これは既述したピット内出土の若獣下顎骨と同じ程度の成育のものである。上述した土壙内のイノシシの下顎骨特に当才個体の多いことは特筆されたが、なお一部はピット以外にもあったことを本資料は示している。

成獣雄の下顎骨１，D—10

下顎骨の連合部と一部骨体、関節突起、下顎角部があり、もともと一個の下顎骨があった可能性もある。

以上の他に断片的であるが肢骨の一部が出土しており、骨の焼かれることが上述した土壙以外の場所でもあったことを推測させるのである。

ツキノワグマ

Selenarctos　thibetanus

左大腿骨遠位端部

唯一つのクマの骨である。おそらく成獣の個体であろう。

カモシカ

Capricornis　crispus

左尺骨片　D—10—２

近位部分の小片である。断片的であるので、他の部位で確認できればと思い、極力その検出に当ったが、他にカモシカの骨を得ていない。

ニホンジカ

Cervus nippon

角片は多く検出している。これは他の骨と区別し易いからである。全体としてシカの骨がどの程度含まれていたかを推測するのはかなり難しいことだと思われる。

b）配石・石組内の焼骨

断片的なイノシシ、シカの多いなかで、2号石組のシカの中足骨は遠位部の破片であるが骨としての残りは最も良い。

c）住居内での焼骨（30号以外）

焼骨の出土は散在的である。しかし、17号住居でツキノワグマを得ている。

3．30号住居址内の獣骨

一つの住居址内から大量の出土量をみたが、それらの大部分は鹿角であった。この鹿角片の修復に当ったが破損が著しく、思うように進めることができなかった。特に角幹部の破損が著しく、修復が困難であった。第一尖から角幹にのびる形を復原したが、大部分は片面のみのものである。これに接合できなかったが、鹿角分岐部の破片2個と角坐部分があるが、これが同一角であろうと思われる。この角の第一尖の基部現存径32.24×21.67mm、焼けて縮小していることを考えると、かなり大きな角である。角坐の下に角坐骨があるので、これは捕獲した個体のものである。

鹿角は他に、枝の部分の破片が5～6点あり、おそらく上述の角とは別の角があったと考えている。それも枝角の太さからかなり大きい角であったと思われる。なお、ここからは、鹿角以外にシカの距骨片一点が出土している。

4．ヒトの焼骨

ヒトの焼けた骨が1号配石の石棺状石組中より一括して出土している。しかし、その量はごく極られたもので、一部があるにすぎない。また、この場所で焼かれたわけではない。こうした骨の選別、搬入はどのように行われたのであろうか。

検出部位

頭　　骨

前頭骨、左右の頭頂骨の三つの大片があったが、接合できる。別図版に示したように冠状縫合と矢状縫合の接する部分で、前頭骨は右半分の一部がのこり、左右の頭頂骨は、頭頂に近い部分をのこすのみである。前頭、頭頂の各骨は強い火を受けてひび割れ、亀裂がはいり、たわむ。別の場所で焼かれたはずであるから、この三つの骨は意識的に持って来たものであろう。

四 肢 骨

橈　　骨

左右が確認されたが、いずれも骨体部分をのこすのみのものであり、かつ、その亀裂、破損は著しかった。骨片は大部分接合したが、なお接合できない骨片がのこった。ただし、それらの破片も同一の個体の骨片とみてよいであろう。

寛骨片・坐骨

寛骨臼の一部と坐骨をほぼのこす。これにも破片が若干あるが、これに近い部位のものである。

大腿骨片

骨体の後面部分のみである。多少変形するが、橈骨程ではない。筋肉粗面と大腿骨稜がよく発達する。縄

文人の形質をもつ骨である。

一括して採集された人骨はほぼ以上のものであって、他に骨片と称するものは殆んど無い。

5．収　束

以上金生遺跡の幾つかの遺構、地点で出土した焼骨について、それぞれの遺構・地点毎に説明してきた。それらは各節内において、動物種の内容、量差等について詳しくのべておいた。それらを今要約すると以下のようになる。

1．8号土壙中の焼獣骨

最も多量に出土したもので、その在り方もまた特徴的であった。

①イノシシの下顎骨の総数は断片は別にして176個に達した。それらを個体数とすると138個体となる。そのうち115個は永久歯M_1の萌出する段階のもので、当才、その死亡推定季節は秋である。これには雄・雌ともに含まれた。

その他の下顎骨はM_3が萌出した段階のみのものであって、3才以上、これにも雄・雌の両性のものが含まれた。

これらの下顎骨に穿孔その他の特別の加工はみられず、おそらくすべて完全な形で当初はあったのではないかと思われる。ただし、既にのべたが、成獣雄の犬歯のみはすべて抜去されていたと思われる。雌の犬歯はそのままである。

②特定の骨を選んで一定場所で焼くか、あるいは焼かれた骨を埋納する例は、縄文あるいはそれ以降を通じて知られていない。本例は真に特殊な例である。しかし、こうした例は今後必ずや他にも検出されることと思われ、その際には、本回不確であった埋納の状況のより完全な把握に務めなければならないであろう。

③焼骨の意義

動物の捕獲を記念して、その一部を保存、保持する習俗は、古今、世界に共通する。イノシシの場合、その大型の犬歯、下顎骨はそれをするのに最も容易である。しかし、普通そうした骨や歯は大切に扱われ、傷つけることをいみきらう。それは、その動物を傷つき痛めることにつながるからである。まして、火中に入れたり、落したりすることはさけられるべきことであったと思う。

それが、火中で焼かれるということは、動物に対する信仰と火に対する信仰とが相い合体し、さらに次限を高めた縄文人の世界観なり宇宙観を、火と積石という祭壇によって演出しようとした意図があったからなのであろう。従って、今日知られる狩猟民社会のそれとはかなり異なる様相があったのではなかろうか。これが日本列島の特殊な自然環境の中で育ったものなのであろう。

火が縄文人の中でどのような意義をもつものであったか知り難いが、これを若し自然の中でみるとすると火は一切を焼きつくすと同時に、そこから新たな木々の芽生える新生の大地の始まりをもたらすものでもある。そして、イノシシは、シカよりも多くの仔を育くむ、豊かさの象徴ではなかったかと思う。特に当才獣はその数も多く、捕獲する機会も多かったに違いない。そして稀に捕れる大型成獣も含めて、その豊かなることを願うとき、火とイノシシは容易に結びつき、祈りの場で欠せないものとなったのであろう。

石組・住居内の焼獣骨

①石組・住居内の焼獣骨は上述の土壙のものと異なり、イノシシとシカの四肢骨と頭骨を主とするものであった。そして、下顎骨は若獣（当才）と成獣が各1点あったに留まった。

若し、この石組・住居内の焼獣骨が上述のピットのものと同時期とすれば、下顎骨の大部分はそのピット内で処理され、他の部位が別の場所で処理されたことになる。その別の場所がここであったのかも知れない。

②ここでは、イノシシとシカの全身骨が対象となっていて、先にのべた歯牙の場合とはまた意味合いが変

ることが予想される。つまり、ここではイノシシ、シカその他の獣も含めた獣全体に対する呪術的な焼骨の行為があったことになる。この場合の焼骨は金生遺跡に限らず縄文遺跡において広くみられるもので、特に中部地方以東に知られることは各地の報告にみる通りである。おそらくこの場合にも、基本的には先にのべた獣を育む森林と、それを育てる大地の新生を司る火の役割が呪術的な行為の元で一体化していった過程を、この焼骨は示すのではないかと思われる。前者イノシシの下顎骨を扱うのが主の場であるとすれば、その他の場合は副の場であることになろう。

③クマとカモシカについて

クマとカモシカの焼骨が僅かであるが出土した。このことはこの地域の狩猟の対象にクマとカモシカの確かな例を加え得たことで意義があったと思っている。焼骨中からクマやカモシカを検出できる例は決して多くない。特に平地部の例では殆んどみることができない。しかし、八ケ岳の山々をのぞむこの地域であれば、クマやカモシカの捕獲されることはあったはずである。ただ、それにしてはあまりに僅かな断片的な破片である。この点については、特にクマにみる骨の扱い方が注意される。それはクマの四肢骨が指趾骨に至るまで種々の加工が行われ、交易の品として平野帯に運ばれているのである。平野部の遺跡で知られるクマの犬歯穿孔品や骨の加工品との関係でみなければならないであろう。

④焼人骨の検出

焼けた骨の中で注目されるのは人骨の焼けた部位があったことである。その数は極めて少ないのであるが、頭蓋、骨盤、下肢と骨の揃っているところをみると同一個体の可能性があると考えられるのである。ただ、一個体にしては余りに骨が少ない。骨の焼かれた場所が別にあって、そこから骨の一部が選ばれここに埋められたのであろう。人は頭蓋と四肢が一つの組合せとなって埋納されている点、イノシシその他の獣骨とは異なる。人の場合は、あくまで一個の人間が考えられていたと思われる。しかし、究極的には豊かな自然の中の生物として動物たちと同じ役割を荷負うものであったのであろう。

参考文献　（紙幅の都合で1980年以後のものに限った）

宮崎重雄：群馬県桐生市千網谷戸遺跡星野昭司宅内１号住居跡の獣骨『千網谷戸遺跡調査報告　1973』1980
金子浩昌：第三次調査出土の獣骨について、田部井功編『後谷遺跡』桶川市文化財調査報告書第14集、1982
金子浩昌：動物遺存体『なすな原遺跡第１地区』1984
新津　健：縄文時代後晩期における焼けた獣骨について『日本史の黎明』六興出版、1985
金子浩昌：正網遺跡出土の獣骨と骨の加工品、鈴木加津子・鈴木正博・荒井幹夫『正網遺跡―荒川右岸における縄文式後晩期遺跡の研究―、所収、富士見市遺跡調査会研究紀要、No.５、1989

表22　イノシシ下顎骨の数量表１（dm_4M_1の萌出段階）一部、前半等は歯槽の保存状況

右・左 / 歯式 / 雌・雄 標本番号	R											L										
	$\frac{I_1}{i_1}$	$\frac{I_2}{i_2}$	$\frac{I_3}{i_3}$	$\frac{C}{c}$	$\frac{P_1}{dm_1}$	$\frac{P_2}{dm_2}$	$\frac{P_3}{dm_3}$	$\frac{P_4}{dm_4}$	M_1	M_2	M_3	$\frac{I_1}{i_1}$	$\frac{I_2}{i_2}$	$\frac{I_3}{i_3}$	$\frac{C}{c}$	$\frac{P_1}{dm_1}$	$\frac{P_2}{dm_2}$	$\frac{P_3}{dm_3}$	$\frac{P_4}{dm_4}$	M_1	M_2	M_3
♂01	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂02	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂03	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂04	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂05	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂06	(i_1	（一部のみ）		c)								(i_1	～		c)							
♂07	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂08	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂09	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂010	(i_1	～		c)								(i_1	～		c	dm_1)						
♂011	(i_1	～		c	dm_1)							(i_1	～		c	dm_1)						
♂012	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂013	(i_1	～		c)								(i_1	～		c				dm_4)			
♂014	(i_1	～		c	dm_1)							(i_1	～		c)							
♂015	(i_1	～		c				dm_4)				(i_1	～		c)							
♂016	(i_1	～		c)								(i_1	～		c			dm_3)				
♂017	(i_1	～		c)								(i_1	～		c		dm_2)					
♂018	(i_1	～		c	dm_2)							(i_1	～		c)							
♂019	(i_1	～		c				dm_4 M_1)				(i_1	～		c)							
♂020	(i_1	～		c			dm_3)					(i_1	～		c)							
♂021	(i_1	～		c			一部 dm_4)					(i_1	～		c)							
♂022	(i_1	～		c)								(i_1	～		c				dm_4)前半			
♂023	(i_1	～		c			前半 dm_4)					(i_1	～		c)							
♂024	(i_1	～		c			前半 dm_4)					(i_1	～		c)							
♂025	(i_1	～		c			一部 dm_4 M_1)					(i_1	～		c)							
♂026	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
♂027	(i_1	～		c)								(i_1	～		c					M_1	M_2)	一部
♂028	(i_1	～		c			一部 dm_4)					(i_1	～		c				dm_4) 一部			
♂029	(i_1	～		c				一部 (M_1 M_2)				(i_1	～		c)							
♂030	(i_1	～		c			一部 dm_4)					(i_1	～		c				dm_4) 一部			
♂031	(i_1	～		c				一部 (M_1 M_2)				(i_1	～		c)							
♂032	(i_1	i_2		c)								(i_1	i_2		)							
♂033	(i_1	～		c)								(i_1	～		c)							
やや大♂01	(i_1	～		c)								(i_1									～	M_2)
やや大♂02	(i_1	～		c		dm_2)						(i_1	～		c)							
やや大♂03	(i_1)											(i_1	～		c)							
やや大♂04	(i_1	～		c)								(i_1	～		)							
やや大♂05	(i_1	～		c)								(i_1	～		c		dm_2 ～		dm_4)			
別♂01	(i_1	～		c		dm_2)						(i_1	～		c		dm_2)					
別♂02	(i_1	～		c		～	中 dm_4)					(i_1	～		c)							
別♂03	(i_1	～		c	～		前 dm_4)					(i_1	～		c)							
別♂04	(i_1	～		c)								(i_1	～		c		dm_2)					
別♂05	(i_1	～		c)								(i_1	～		c		dm_2)					
別♂06	(i_1	～		c			前 dm_3)					(i_1	～		c					M_1)前		
計	44c（ＲＬをもつmd）																					

（初・前・中・後・完：最終の歯の歯槽部の現存状況で、初は最も近心に近い部分、以下前半・中間・後半部・完存）

右・左 / 歯式 / 雌・雄 標本番号	R											L										
	I_1 i_1	I_2 i_2	I_3 i_3	C c	P_1 dm_1	P_2 dm_2	P_3 dm_3	P_4 dm_4	M_1	M_2	M_3	I_1 i_1	I_2 i_2	I_3 i_3	C c	P_1 dm_1	P_2 dm_2	P_3 dm_3	P_4 dm_4	M_1	M_2	M_3
♂001						(dm_2 未			～		M_2)											
♂002							(dm_3 dm_4)															
♂003					(c		～		dm_4)													
♂004						(dm_2		～		M_1)												
♂005						(dm_2			～		M_2)											
♂006							(dm_3 ～			M_1)												
♂007																	(dm_2		～	M_1 初)		
♂008																	(dm_2 ～			dm_4 初)		
♂009																	(dm_2		～	M_1)		
♂0010															(c			～			M_2)	
♂0011						(dm_2			～		M_2)											
♂0012					(c			～		M_2 初)												
♂0013															(c			～		M_1初)		
♂0014															(c			～		M_1初)		
♂0015															(c		～		dm_4 中間)			
♂0016																(dm_2 ～			dm_4)			
♂0017															(c		～		dm_4 中)			
♂0018															(c		～		dm_4)			
♂0019																(dm_2			～		M_2)	
やや大♂001					(c			～		M_1)												
やや大♂002							(dm_3		～	M_2完)												
やや大♂003																	(dm_2 ～			dm_4)		
計				3c											6c							
♂0001	(i_1	～		c		～				M_2)		(i_1)										
♂0002	(i_1	～		c		～		dm_4)中														
♂0003	(i_1	～		c		～		dm_4初)														
♂0004				c								(i_1	～		c		～		dm_4 中)			
やや大♂0001												(i	～		c	～	dm_2)					
別♂0001	(i_1	～		c		～		dm_4中)														
別♂0002	(i_1	～		c		～		dm_4)前														
別♂0003												(i_1	～		c	～	dm_2)					
別♂0004												(i_1	～		c	～	dm_2)					
別♂0005	(i_1	～		c		～		dm_4)前														
計				7c																		
♀01	(i_1	～		c ～	dm_2) 前							(i	～		c		～		dm_4)後部			
♀02	(i_1	～		c		～		dm_4 M_1) 初				(i	～		c)							
♀03	(i_1	～		c		～		dm_4 M_1) 前				(i_1	～		c	～	dm_2)					
♀04	(i_1	～		c		～		dm_4 M_1) 前				(i_1	～		c	～		dm_3)				
♀05	(i_1	～		c		～		dm_4)中				(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀06	(i_1	～		c		～		dm_4)				(i_1	～		c)							
♀07	(i_1	～		c ～		dm_3)						(i_1	～		c)							
♀08	(i_1	～		c		～		dm_4 M_1)				(i_1	～		c			dm_3)				
♀09	(i_1	～		c		～		dm_4)前				(i_1	i_2)									

右・左 / 歯式 / 雌・雄 標本番号	R											L										
	$\frac{I_1}{i_1}$	$\frac{I_2}{i_2}$	$\frac{I_3}{i_3}$	$\frac{C}{c}$	$\frac{P_1}{dm_1}$	$\frac{P_2}{dm_2}$	$\frac{P_3}{dm_3}$	$\frac{P_4}{dm_4}$	M_1	M_2	M_3	$\frac{I_1}{i_1}$	$\frac{I_2}{i_2}$	$\frac{I_3}{i_3}$	$\frac{C}{c}$	$\frac{P_1}{dm_1}$	$\frac{P_2}{dm_2}$	$\frac{P_3}{dm_3}$	$\frac{P_4}{dm_4}$	M_1	M_2	M_3
♀010	(i_1	～		c		～		dm_4)初				(i_1	～		c		dm_2)					
♀011	(i_1	～	i_3	c)								(i	～		c	～		dm_3)				
♀012	(i_1	～		c		～		dm_4	M_1)			(i_1	～		c				dm_4)			
♀013	(i_1	～		c	～	dm_2	dm_3)					(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀014	(i_1	～		c		～		dm_4)				(i_1	～		c)							
♀015	(i_1	～		c		～	dm_3)					(i_1	～		c		～			M_1) 初		
♀016	(i_1	～		c		～	dm_3)					(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
やや大♀017	(i_1	～		c				dm_4) 前				(i_1	～		c		～		dm_4	M_1) 前		
♀018	(i_1	～		c)								(i_1	～		c		dm_2)					
♀019	(i_1	～		c)								(i_1	～		c				dm_4	M_1) 前端		
♀020	(i_1	～		c		～		dm_4	M_1) 中			(i_1	i_2	～	c)							
♀021	(i_1	～		c)								(i_1	～		c		～		dm_4	M_1) 前端		
♀022	(i_1	～		c		～		dm_4)中				(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀023	(i_1	～		c		～		dm_4)中				(i_1	～		c)							
♀024	(i_1	～		c	～	dm_3)									(c)							
♀025	(i_1	～		c	～	dm_2)						(i_1	～		c			dm_3)				
♀026	(i_1	～		c)								(i_1	～		c			dm_3)				
♀027	(i_1	～		c				(dm_4)中				(i_1	～		c				dm_4) 中			
♀028	(i_1	～		c				(dm_4)中				(i_1	i_2	～	c)							
♀029	(i_1	～		c				(dm_4)中				(i_1	～		c				dm_4	M_1)		
♀030	(i_1	～		c				(dm_4)初				(i_1)										
計				30c					6M_1											5$dm_3$7dm_4 5M_1		
♀0001	(i_1	～		c	～	dm_2)																
♀0002	(i_1	～		c		～		dm_4	～	M_2)	完											
♀0003	(i_1	～		c	～		dm_3)	(一 部L $i_{1.2}$)														
♀0004	(i_1	～		c		～		dm_4)中														
♀0005	(i_1	～		c	～		dm_3)															
♀0006	(i_1	～		c		～		dm_4)														
♀0007	(i_1	～		c		～		dm_4)中														
♀0008	(i_1	～		c		～		dm_4)初														
♀0009	(i_1	～		c		～		dm_4)後														
♀00010	(i_1	～		c		～		dm_4)前														
♀00011	(i_1	～		c		～		dm_4)中														
♀00012	(i_1	～		c		～		dm_4)前														
♀00013												(i_1	～		c		～		dm_4) 前			
やや大♀00014												(i_1	～		c		～			M_1) 前		
♀00015												(i_1	～		c		～			M_1) 前		
♀00016				(c)											(c		～		dm_4) 中			
♀00017												(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀00018												(i_1	～		c		～			M_1) 中		
♀00019												(i_1	～		c		～			M_1) 前		
♀00020												(i_1	～		c		～		dm_4) 後			
♀00021												(i_1	～		c	～	dm_2)					
♀00022												(i_1	～		c			～			M_2)	

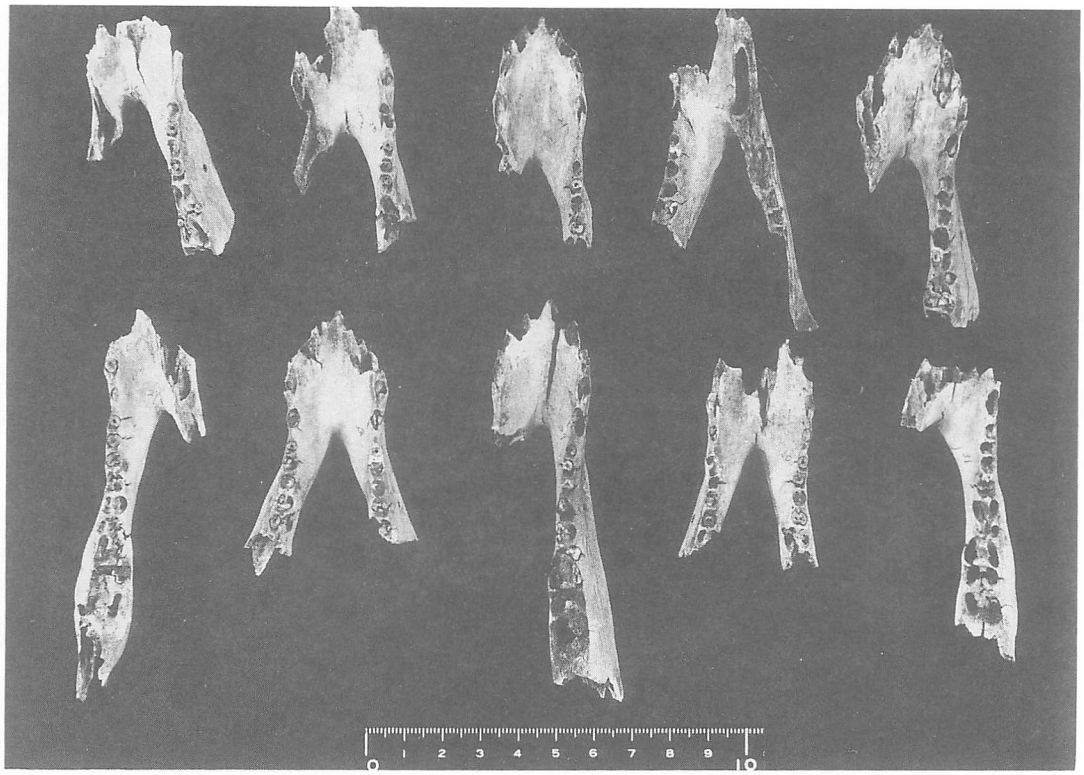
右・左 / 歯式 / 雌・雄 標本番号	R											L										
	$\frac{I_1}{i_1}$	$\frac{I_2}{i_2}$	$\frac{I_3}{i_3}$	$\frac{C}{c}$	$\frac{P_1}{dm_1}$	$\frac{P_2}{dm_2}$	$\frac{P_3}{dm_3}$	$\frac{P_4}{dm_4}$	M_1	M_2	M_3	$\frac{I_1}{i_1}$	$\frac{I_2}{i_2}$	$\frac{I_3}{i_3}$	$\frac{C}{c}$	$\frac{P_1}{dm_1}$	$\frac{P_2}{dm_2}$	$\frac{P_3}{dm_3}$	$\frac{P_4}{dm_4}$	M_1	M_2	M_3
やや大♀00023												(i_1	～		c		～			M_1)		
♀00024												(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀00025												(i_1	～		c		～		dm_4) 前			
♀00026												(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀00027												(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀00028												(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀00029												(i_1	～		c		～	dm_3	dm_4)初			
♀00030												(i_1	～		c		～		dm_4) 中			
♀00031												(i_1	～		c		～			M_1) 前		
別♀0001	(i_1	～		c		dm_2	～)															
別♀0002	(i_1	～		c		dm_2	～)															
計	14c					8dm_4						19c					11dm_4 6M_1					

イノシシ下顎骨の数量表 2 （M_3の萌出段階） ad：成獣、未欠：歯槽遠心部欠、未：同遠心部のみをのこす。

右・左 / 歯式 / 雌・雄 標本番号	R											L										
	I_1	I_2	I_3	C	P_1	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3	I_1	I_2	I_3	C	P_1	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3
♂ ad 01	(I_1	～		C								I_1	～		C)							
♂ ad 02	(I_1	～		C								I_1	～		C)							
♂ ad 03	(I_1	～		C								I_1	～		C)							
大型♂ ad 04	(I_1	～		C								I_1	～		C)							
♂ ad 05	(I_1	～		C		P_2			～		M_3)前	(I_1	～		C		P_2			～		M_3)
♂ ad 06	(I_1	～		C							M_3)中	(I_1	～		C			～				M_3)
♂ ad 07	(I_1	～		C								(I_1	～		C			～				M_3)
♂ ad 08	(I_1			C		～					M_3)	(			C							M_3)
♂ ad 09	(I_1			C.							M_3)未欠	(I_1			C		～				M_2)	
♂ ad 001				C							M_3)中											
♂ ad 002				(C	～	P_2)																
♂ ad 003				(C)																		
やや小♂ ad 004				(C		～		P_4)														
♂ ad 005															(C)							
♂ ad 006															(C			～			M_2)	
♂ ad 007																	(P_2		～		M_2)	
♂ ad 008															(C	～	P_2)					
♂ ad 009				(C	～		P_3)															
♂ ad 0010				(		P_2	P_3)															
計				14C											12C							
♀ ad 01	(I_1			C			P_3					(I_1			C				P_4)			
♀ ad 02	(I_1			C			P_3					(I_1	～		C			～				M_3)
♀ ad 03	(I_1	～		C		～			M_1)			(I_1			C		～			M_1)		
♀ ad 04	(I_1			C								(I_1	～		C			～				M_3)
♀ ad 05	(I_1			C								(I_1	～		C			～				M_3)
♀ ad 001	(I_1			C					M_1)													
♀ ad 002												(I_1	～		C					M_1)		
♀ ad 003				(C					M_1)													
♀ ad 004												(						P_3	～			M_3)
♀ ad 005								(P_4	M_1	～	M_3)											
♀ ad 006							(P_3	～	M_1)													
計				01～05：5C} 001～006：4M_1} 9					4 M_1													
♂ ♀ ? 001								(P_4		～	M_3)											
♂ ♀ ? 002									(M_1	～	M_3)											
♂ ♀ ? 003																						
♂ ♀ ? 004											M_3未											
♂ ♀ ? 005											M_3未											
♂ ♀ ? 006																					M_2	M_3)
♂ ♀ ? 007																						M_3)
♂ ♀ ? 008																						M_3)
♂ ♀ ? 009																						M_3)
♂ ♀ ? 0010																	(P_2	P_3)				
♂ ♀ ? 0011																				(M_1	M_2)	
♂ ♀ ? 0012																						M_3)
計											2M_3未											5 M_3

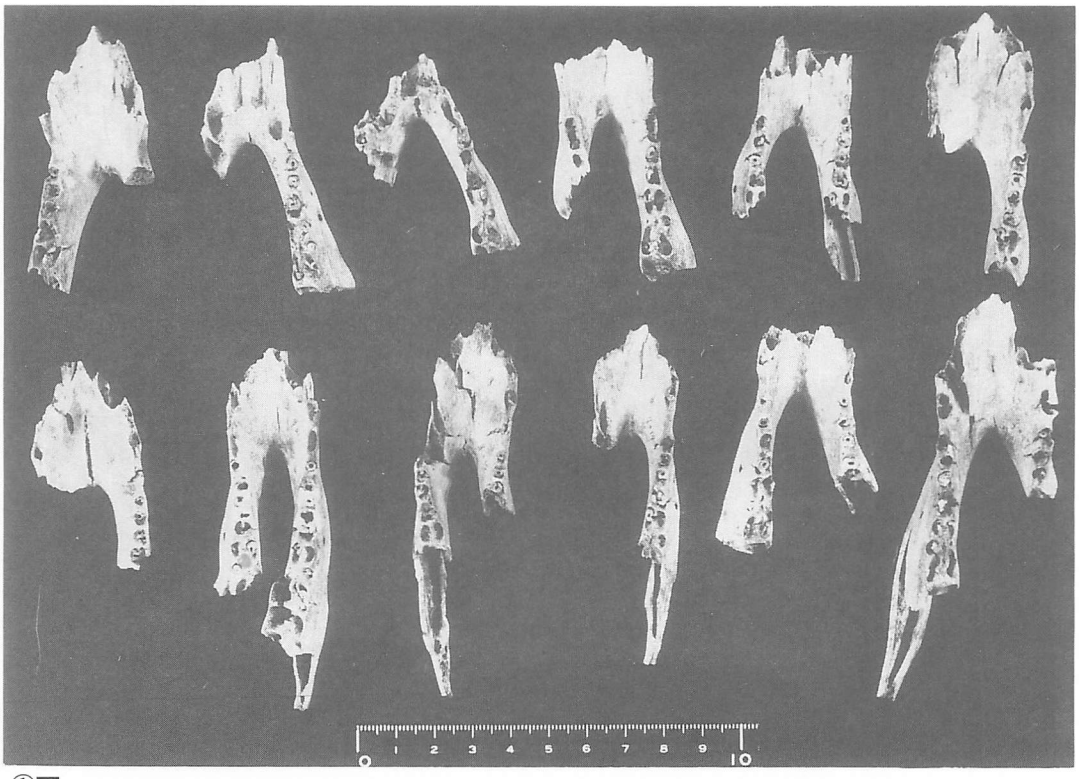
表23　グリッド・住居址などから出土した焼骨の重量表

出土地点	鹿角（g）	その他（g）	出土地点	鹿角（g）	その他（g）
11号住居	1.2		D－6－3		1.8
16号住居	2.9	4.6（イノシシ）	D－7－2	1.9	
18号住炉	1.5		D－10		0.8
20号住居		29.6	D－10－1		3.4
21号住居	0.9		D－10－2	17.1	26.4
25号住居	2.9	17.6	D－12－1	10.4	27.5
26住下部	2.1	8.8	D－12－2		2.7
27号住居		1.4	D－13－1	4.2	
28号住居		1.6	E－4－2		0.7
30号A住居		3.1	E－7－3		3.9
30号B住居	549.8		E－8－1	1.9	13.0
38号住居	6.8		E－8－2	5.4	
5号配石	8.1		E－12－3		5.2
5号配石A	10.1		F－8－1	1.9	2.4
16号石組	後頭顆 2.4	9.9	F－8－4		3.8
C－6－2	0.9	4.0	F－9－1		2.7
C－7	1.1		F－10－3	7.9	
C－7－4	1.2	2.9	G－7－4		2.3
C－8－2	1.2		G－8－4		0.6
C－12－2		8.3	G－9－1		2.8



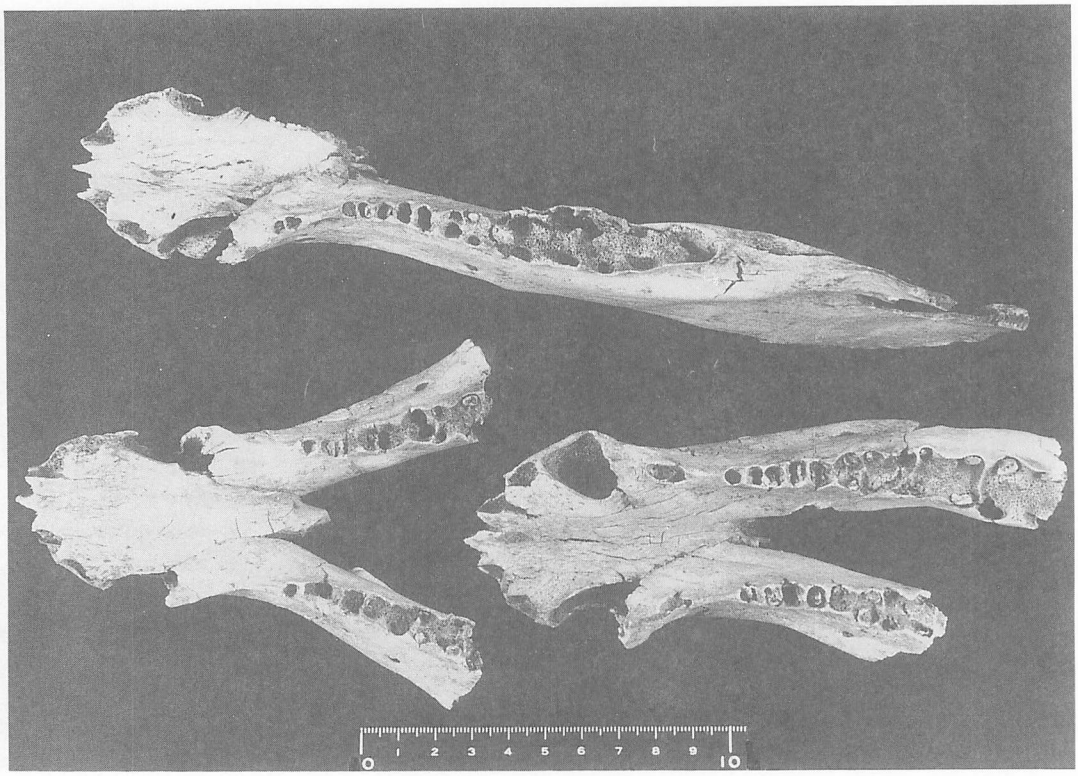
①上

雄　イノシシ下顎骨　咬合面
（dm_4・M_1萌出段階）



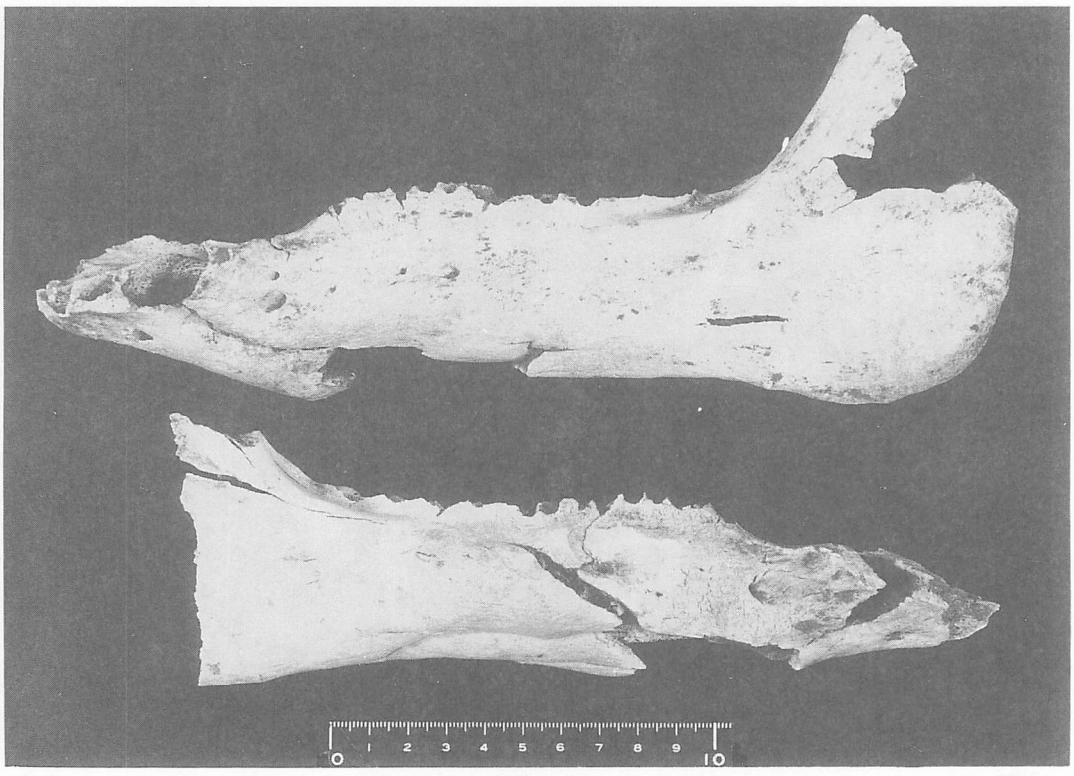
①下

雌　イノシシ下顎骨　咬合面
（dm_4・M_1萌出段階）



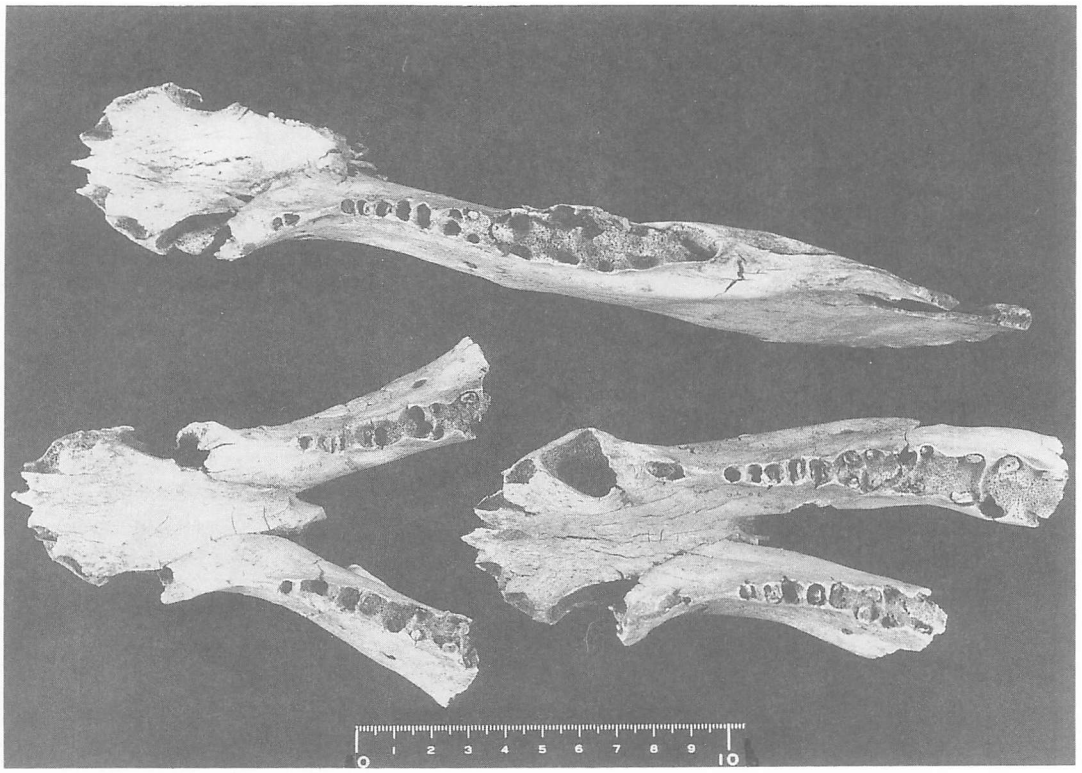
②上

雄　イノシシ下顎骨　咬合面
（M_3の萌出段階）



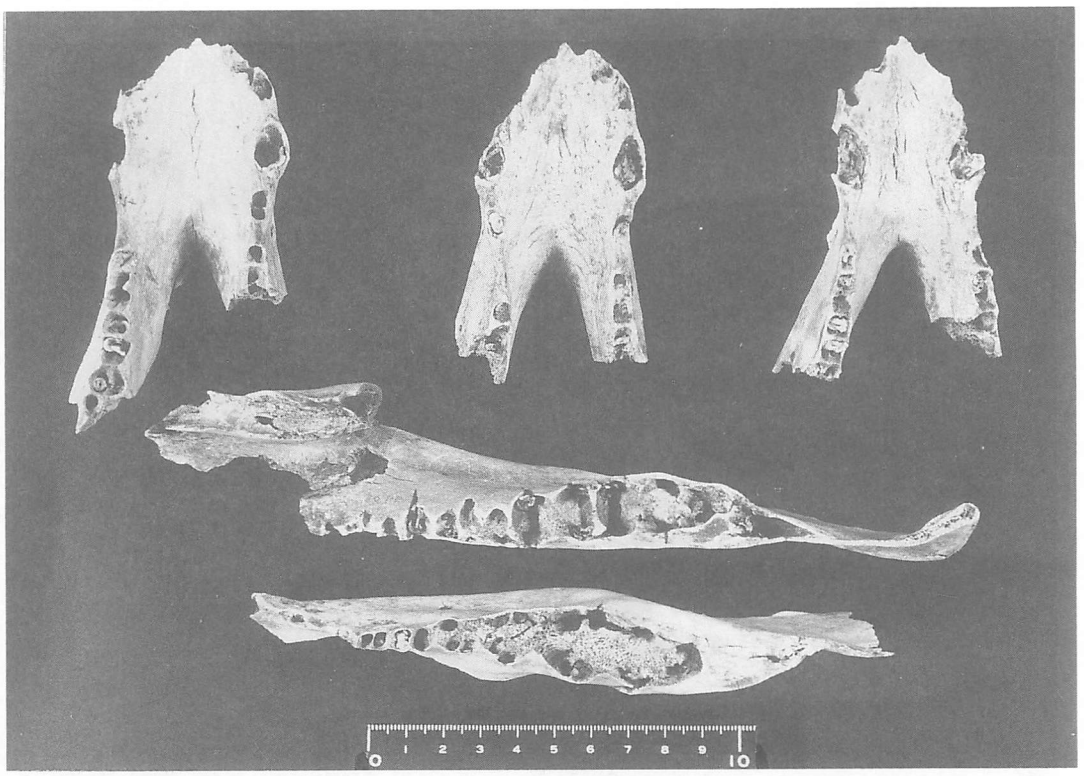
②下

雄　イノシシ下顎骨　側面、上写真とは別標本
（M_3の萌出段階）



③上

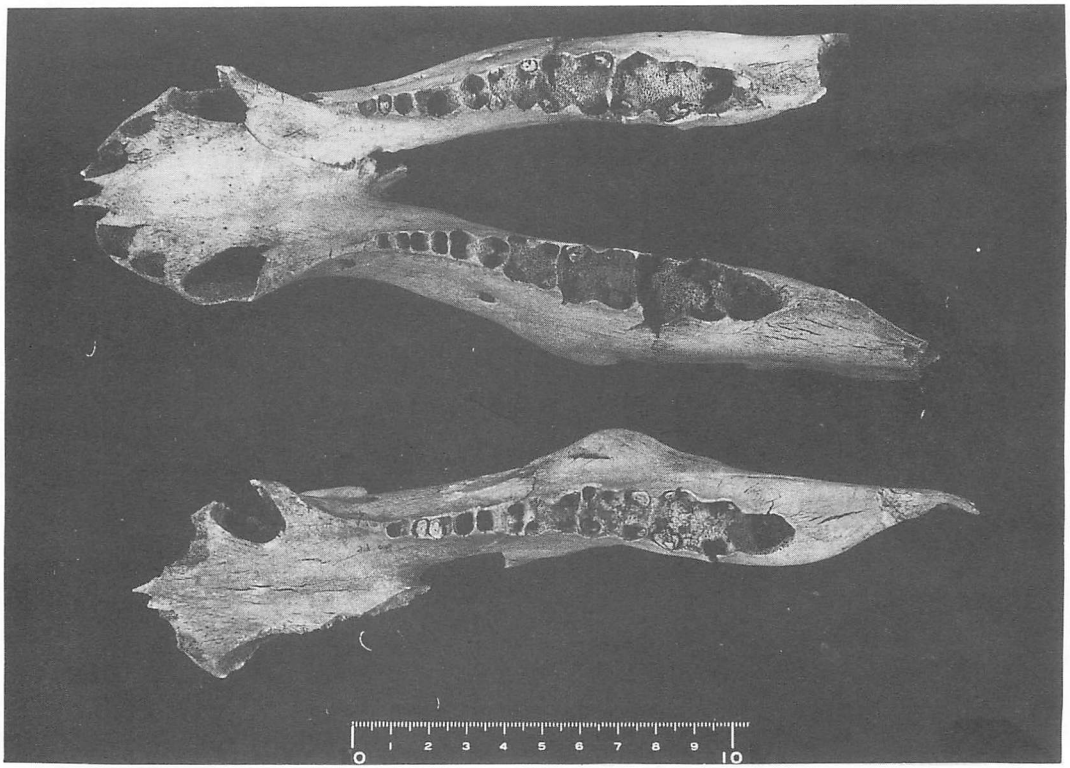
雌　イノシシ下顎骨　咬合面
（M_3の萌出段階）



③下

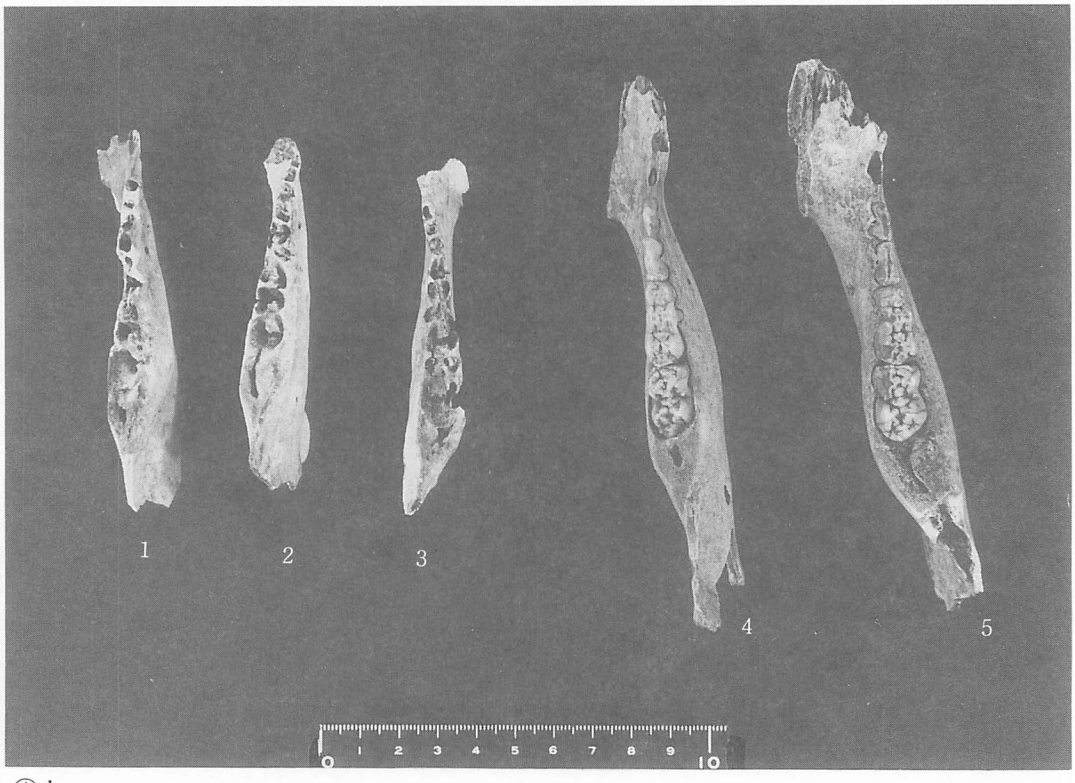
雌　イノシシ下顎骨の咬合面と側面
（M_3の萌出段階）

P 239　③上　差しかえ



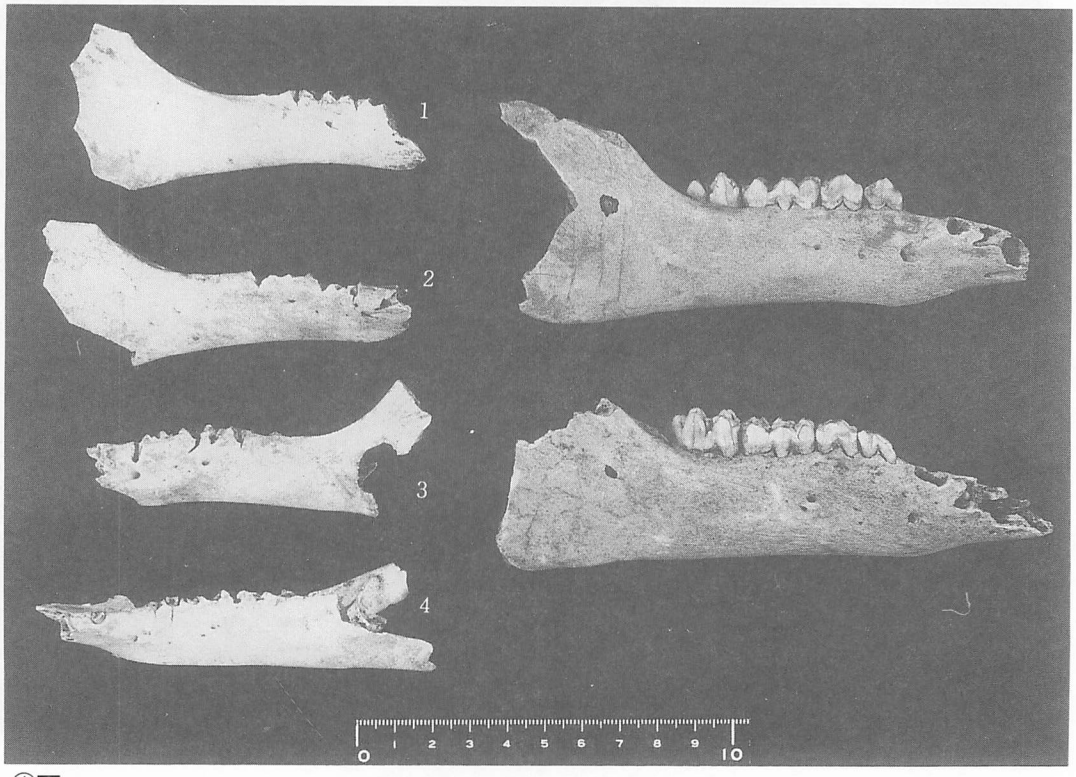
③上

雄　イノシシ下顎骨　咬合面
（M_3の萌出段階）



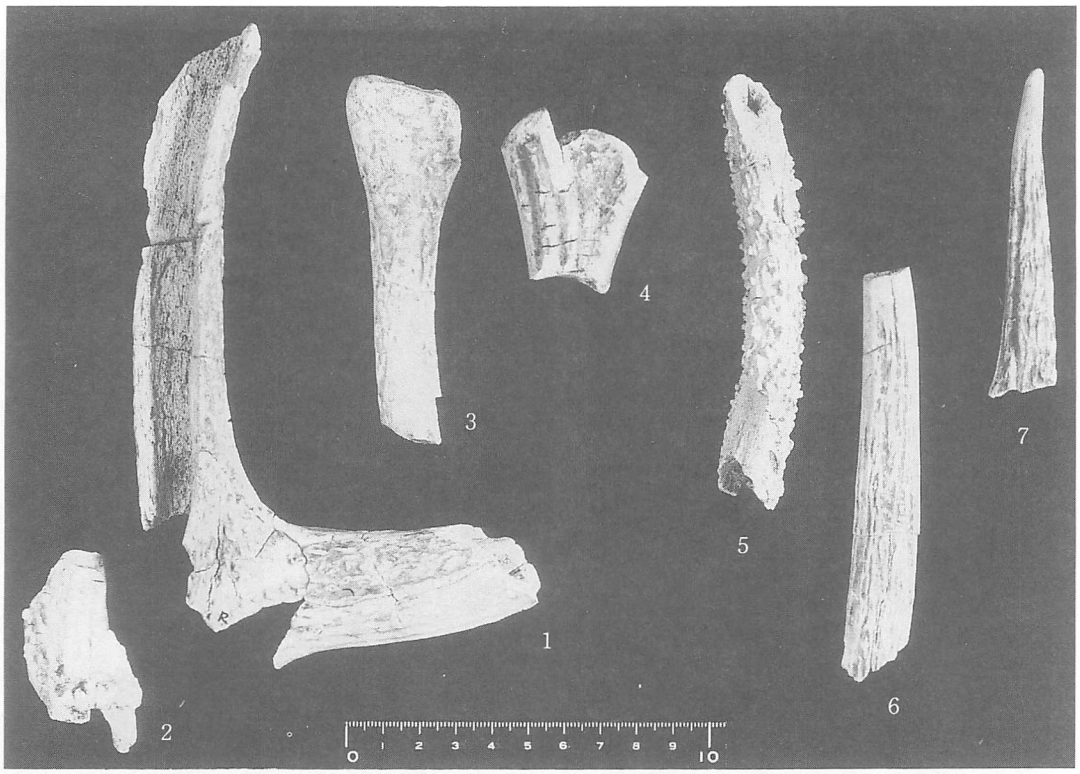
④上

貝塚出土イノシシ下顎骨との比較
1～3　金生遺跡の焼けた下顎骨（1・2・右、3左）
4、5　東北地方貝塚（岩手県花泉町貝鳥貝塚・後期）のイノシシ（右側）
同じ歯牙萌出段階のもの、金生遺跡のものも貝塚出土イノシシとほぼ同じ大きさであったと思われる。

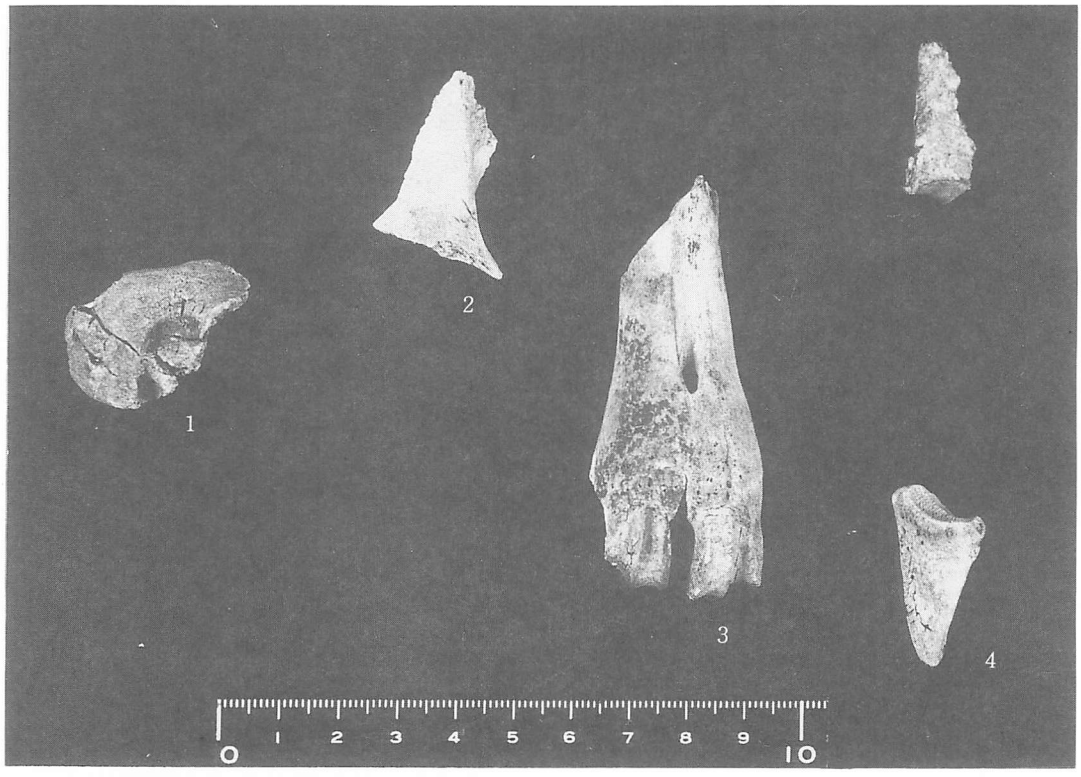


④下

貝塚産イノシシ下顎骨との比較（上と同じ）
1～4 金生遺跡（1・2；右、3・4；左）

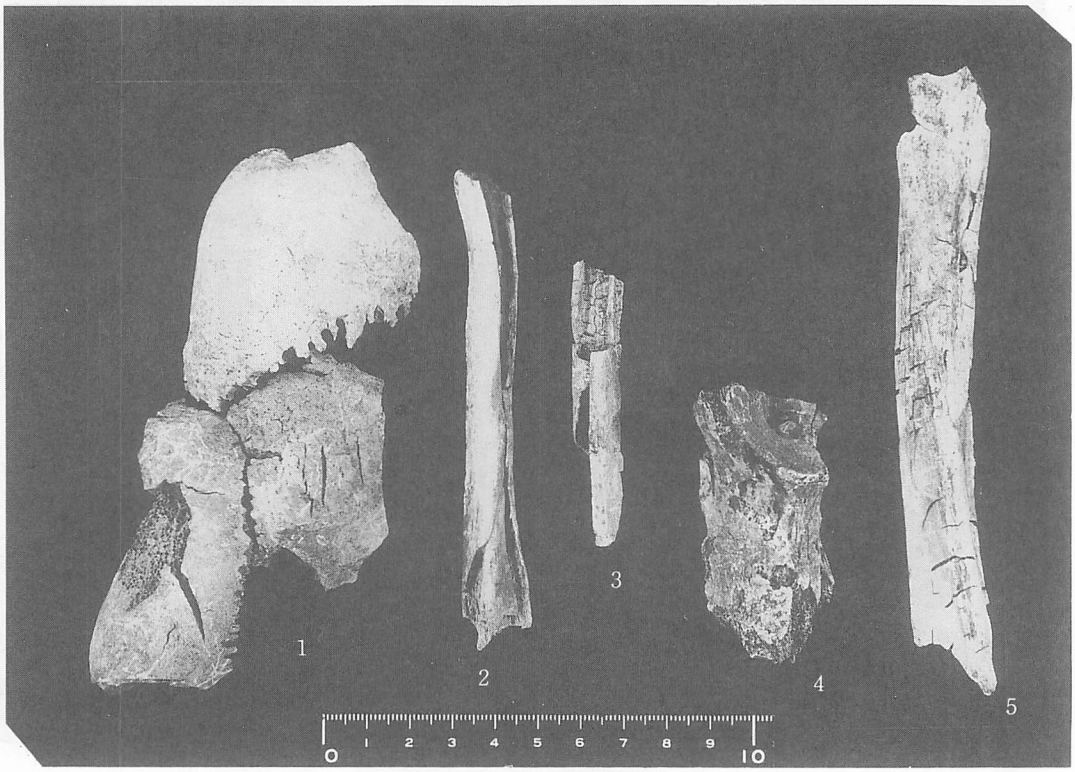


⑤上
住居址出土鹿角
1．第一尖と角幹　2．同じ角の角坐部　3．4同じ角の分岐部　5～7．別の角の枝部



⑤下

1．ツキノワグマ　大腿骨遠位端
2．ニホンジカ左前頭骨片（雌）
3．　同　中足骨遠位部
4．　同　末節骨
5．ニホンカモシカ尺骨近位部



⑥　出土の焼けた人骨片

1．前頭骨片（上）、頭頂骨の左・右（接合する）
2．橈骨骨体部
3．　　同
4．坐骨部分
5．大腿骨骨体の後面

第Ⅶ章　遺物・遺構の検討

第１節　土器の検討

本遺跡から出土した土器については、第Ⅲ章で第１群から第11群まで分類したとおりである。ここでは遺跡の中心をなしている第３群から第11群までの後・晩期の土器のうち幾つかについて検討を加えてみる。

(1)　第３群土器

１類　称名寺式土器

今回の調査での出土量は少ない。沈線区画内に刺突が連続するものや磨消し縄文の施された破片（38住下・第62図16）が出土した程度である。

２類　堀之内式土器

第12号・32・36号の３軒の住居が発見されている。このうち第32号と36号とからは堀之内２式の深鉢形土器（3202・3601）が出土している。ほかにグリッド内からも土器が出土しており、第89図２・３等は堀之内１式である。但し、土器のセットが把握できる資料はない。

(2)　第４群土器（第154図）

１類　加曽利Ｂ１式土器を一括したが、第37号住居址に良好な資料がみられる。精製の深鉢形土器（１～３）、粗製の深鉢形土器（４）、鉢形土器（５）、注口土器（６）である。

２類　第23号住居址出土の土器である。但し破片が主体であり、器形の明確なものは浅鉢形土器（９）だけである。他に遺構出土の良好な資料はないが、Ｅ－３区出土の浅鉢形土器（10）やＣ－１２区・Ｇ－９区出土の深鉢形土器（７・８）が該当する。これらは加曽利Ｂ２式の古段階である。

３類　加曽利Ｂ２式新段階に位置づけたい土器。第４号住居址からは多くの破片や完形に近い個体が出土している。深鉢形土器では、頸部のくびれる口縁部平坦なもの（11・12・13・18）、波状口縁のもの（14・17）等があり、11を除き斜沈線ないし羽状沈線が施されている。他に粗製深鉢形土器（第９図0407）があり、さらに浅鉢形土器（第10図20）が加わる。さらにこの時期の資料としては、Ｅ－４区出土の深鉢形土器15・19、浅鉢形土器16がある。15はくびれの無い器形。17・19はより後出の可能性もある。

４類　加曽利Ｂ３式土器については地域差があり不明な点が多く、金生遺跡でもこの型式については十分に把握できなかった。但し、第４群３類土器から第５群土器への変遷を考えると、その間に１型式を考えるべきであろう。本遺跡の北東２㎞に位置している姥神遺跡[①]には加曽利Ｂ式土器の良好な資料をみることができる。報告者の櫛原氏はこのうち第３群第10類を中心とした土器について加曽利Ｂ３式と把らえられている。本遺跡では出土量は多くないが20～22が該当しようか。22についてはより後出の可能性もある。また20については百瀬長秀氏が加曽利Ｂ３式としたものである[②]。

(3)　第５群土器（第155図）

本遺跡後期後半を構成する多彩な土器群である。便宜上９類に分類したが、これら相互関係の把握には困難なものがある。第５号～７号住居址、第１号配石等に纏まった資料がある。

１類　羽状沈線の施された平口縁深鉢形土器の一群で、施文の種類から３種に分類できる。

（ａ）第155図１～４のような縄文の施されたもの。全形のわかるものはないが、１ではおよその形状が推測できる。短いがやや「く」の字形に屈折した口縁部で、体部はくびれている。口唇部には直線的なもの（２・３）と丸みを帯びたもの（１・４）とがある。口縁部文様帯には縄文帯が走り、体部には羽状沈線が施されているが、どちらかといえば沈線は細く鋭い。

（b）口縁部文様帯に沈線が横走するもの。第155図5・6に代表される。器形は（a）に類似するが口縁部文様帯には縄文は施されず、平行沈線が横走するだけである。体部の羽状沈線は概して太く粗い。屈折部に横長の瘤が貼り付くものもある。

（c）口縁部文様帯に沈線に加え刻目が連続する。7・8ではさらに三日月状の貼り付け文がある。

これらの編年上の位置付けについてであるが、従来（a）種については曽谷式・高井東式併行（奈良・百瀬[3]）、（b）種については曽谷式（櫛原[4]）、安行1式併行（奈良[5]）、安行1・2式併行（百瀬[6]）という把え方がある。

さて本遺跡の場合、前型式からの系統を考えた時、4群3類から直接5群1類ないし2類に続くには無理があることは前述したとおりである。4群3類は沈線を主体としていると同時に、口縁部が「く」の字形に屈折する器形の深鉢形土器はみられない。やはり文様・器形ともに4群4類を想定し、5群1類a種の深鉢形土器は加曽利B3式に源を求めることになろう。但し、本遺跡ではこの土器は少なく、それも第7号住居址から5群1類に混入して出土している程度であり、この間の展開を把握することは困難である。ところで、5群1類成立にあたっては東海・近畿系とした5群6類土器の存在を無視することはできない。この6類については後述するが、ここでは特に元住吉山1・2式との関連が考えられる土器（25・26）（27～33）に注意したい。これらの段階に「く」の字形口縁をした、しかも縄文帯を持った深鉢形土器が伴っているからである。従って、5群1類成立の背景にはこれら東海・近畿系の土器が大きく関わっていたと考えられるのである。こうしてみると、5群1類a種についてはこれまで考えられてきたとおり「曽谷式」併行とすることは可能である。同時に、屈折部に横長の瘤状の張り付け文がみられる個体もあり、後期後半前葉の土器とすることができる。但し、本遺跡第7号住居址では4群4類も含めこれらの土器が混在しており、ここでは加曽利B3式新段階から曽谷式併行期に位置付けておきたい。この1群をここでは、金生後期後葉I期としておく。

次に1類b種についてはどうであろうか。器形については1類a種に共通するとともに、第5号住居・7号住居から混在して出土しており、この点からは時期的な差は顕著ではない。しかし、細部については、羽状沈線が短く太い傾向がみられ、また口縁部文様帯の平行沈線も太い。この点に時間差をみることは可能である。さて、ここでも東海・近畿系の土器に注目してみたい。特に6類b種とした27～33の土器である。これらは凹線状の沈線が横走する「く」の字形口縁の深鉢形土器であるが、1類b種の口縁部文様帯にみられる平行沈線の初源を、これらの凹線状沈線に求めることはできないであろうか。4類b種は元住吉山2式との脈絡が考えられるものであり、そうした場合1類b種は曽谷式から安行1式に併行することになろうか。さらに1類a種との関係からすると、b種はa種よりも後出のものと考えられ、ここでは安行1式併行に近いものかもしれない。c種については、b種と同様としておく。これらを金生後期後葉II期としておきたい。

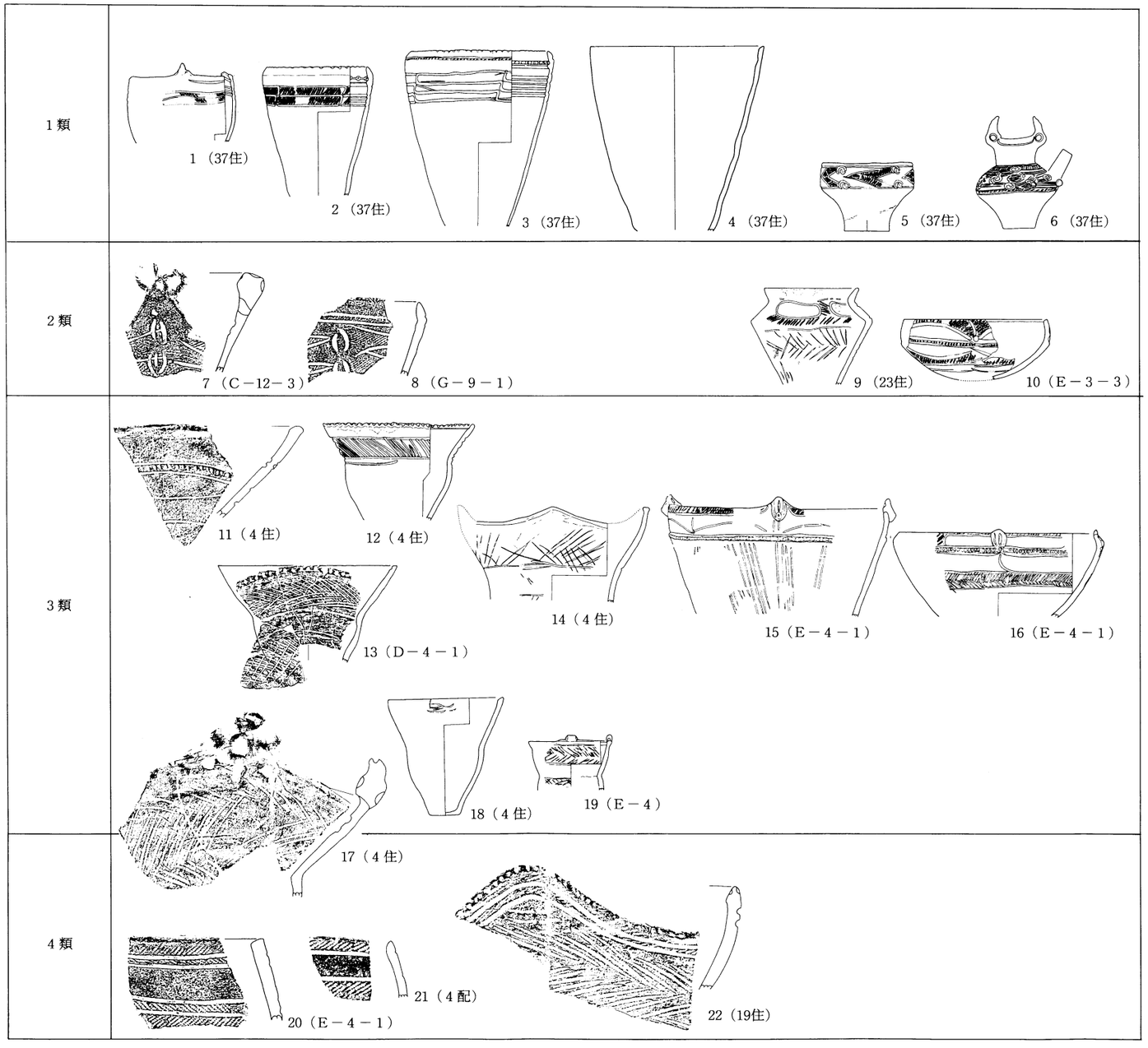
2類　口縁部文様帯に沈線や弧状沈線が施されるもの。縄文はみられない。沈線の状況で3種に区分できる。

（a）9では浅い沈線が横走している。「く」の字形口縁部で、屈折部は明瞭かつその部分に横長のコブが付けられている。

（b）10・11のように、平行沈線の末端が曲りやや弧状をなす。11では沈線間に円形押圧文が付けられている。「く」の字形口縁がややくずれ気味の器形をなす。10のように屈折しない器形もみられる。

（c）12～15等にみる背中合わせあるいは向き合った弧状文の施される土器。「く」の字形口縁はほとんどなくなり、14・15のようなやや内湾気味のものや、12のような直線的な形状をなす。但し、13のようなくびれる器形もある。

これらの時期については、b種のような末端が曲がる平行沈線はすでに1類a種（3・4）からみられるものである。但し、「く」の字形口縁はかなりくずれ、口縁部文様帯としての部位に明確さが乏しくなり、1類a種より後出であることは明らかである。また、沈線間につけられた円形押圧文は東海西部地方や北陸



第154図　第4群土器（実測図1／8、拓本1／4）

方面の凹線文土器にみられる貝殻圧痕を彷彿させる。凹線文土器については、類似したものが6類に分類してあるが、特に34は宮滝式との関連が想定される土器であり、その併行関係が考えられるところである。

一方c種については、b種からの系統は当然であるが、加えて東北方面との繋がりが窺われるものである。5類土器の49・54にみる連続弧線文や弧線連結文である。これらの土器は「コブ」付き土器の一群で、特に54には掘り起しコブと連続刻目が同時に施文され、加えて安行2式に通ずるような円形コブも張り付けられている。従って2類c種を安行2式に併行する後期後半終末に位置付けておくことにする。このb種から次の6群1類に繋がっていくことは、これまでも指摘されてきたところである。b種については、c種よりいくぶん先行する可能性もあり、ここでは安行1式から2式併行としておきたい。以上の2類b・cについて金生後期後葉Ⅲ期としておく。

a種は器形の上からも1類b種と類似した時期と思われる。第6号住居からは9の土器に加え4類a種や5類土器、7類土器が出土しており（第13図）、安行1式併行期のヴァラエティを想定することができる。

なお、図示したものでは体部に羽状沈線は認められないが、これが6群1種に展開するとしたら、羽状沈線の存在は十分に考えられよう。

3類　縄文が施される土器。

16は波状口縁の深鉢形土器。口唇部がやや肥厚し刻目が連続する。体部には曲線的な磨消し縄文が施されている。17は浅鉢形土器であろうか。口縁部に縄文が施され、その上に沈線が平行に走る。三日月状の瘤が付けられている。口唇の状況などは1類a種に似る。曽谷式に比定できる土器である。

4類　安行系の土器

（a）18～20は隆起帯縄文の土器。18・19は波状口縁の深鉢形土器であろう。20は平口縁。21は粗製深鉢形土器と思われる。安行1式土器。

（b）22～24は波状口縁の深鉢形土器。ブタ鼻状の瘤が張り付けられている。安行2式土器。

5類　東北系の土器を一括したが、これらは「コブ」付土器と称される一群の土器である。いくつかのタイプが認められ、時期的にも幅があろう。

コブの状況により、三日月状（47）、縦長、円形（49）、掘り起こし状（48）等がみられ、他に刺突文（50）、刻目（51）、入り組み文と円形コブ（52）、刻目・入り組み縄文帯・円形コブ等の組み合わせ（53）や、先に述べたような連結弧線文土器（54・55）もある。55は浅鉢形土器。46のような弧線連結文も本類に含めておく。これらの時期については、三日月コブはやや古い時期に多用され、掘り起こしや刻目は「コブ」付土器の中でも新しい段階と言われている⑦。先に述べたように54は後期終末期としておく。

6類　東海西部・近畿方面系の土器。いくつかの特徴から3種に分類できる。

（a）25・26は疑似縄文のつけられた注口土器と思われる破片。元住吉山1式土器と思われ、4群4類土器の位置付けにおいても注意すべき土器である。

（b）「く」の字形あるいはそれに近い形状の深鉢形土器で、口縁部文様帯に凹線が3条ほどめぐっている。体部には概ね羽状沈線が施されている。凹線間や屈折部に列点状に刻目が連続するもの（29～31）や、縦方向あるいは山形に隆帯が貼付けられるもの（27・31）がある。三重県馬場遺跡や森添遺跡の土器に類似したものがあり、元住吉山2式土器に比定されるものであろう。なお、凹線のかわりに沈線（32）や縄文帯（33）のものもあるが、これらも凹線文の影響を受けたものとみなされる。

（c）34は浅い凹線が4条めぐるもので、器形はb種に共通している。体部および内面には条痕がみられる。宮滝式と脈絡のある土器と思われる⑧。

7類　沈線を持つ波状口縁の深鉢形土器を一括した。

（a）発達した波状口縁の土器。35～39がある。36・37は特に発達した波状で、37の波頂部には容器状の突起がつく。35には縄文が施される。波状に沿って隆帯が走り、口縁部は内外ともに肥厚している。隆帯の外面には沈線が、口縁と平行に走っている。39では刻目が連続し、波状部に羽状沈線がみられる。

（b）41にみる三角形状の波状口縁。a種程発達していないが、波頂部にその痕跡が残り、口縁に沿う隆帯もやや退化する。口縁部内面の肥厚は著しい。波谷部には貼り付け文があり、波状部には稲妻状の羽状沈線が施される。

（c）40のように三角形状の波状口縁で、凹線状の太い沈線が走る。波頂部から下に円形の貼付け文が3個つけられている。口唇は内側に肥厚する。

（d）44が該当する。波状の程度がややゆるくなり、口縁に沿った隆帯の幅が狭く、隆帯内の沈線も1条である。波谷部には円形の瘤が付けられ、体部には羽状沈線が疎らに施されている。口縁内側は肥厚。

（e）42・43である。小さい三角形状の口縁部。波状と平行に沈線が3条走っており、波頂部から下方に押圧ないし刻目の連続する隆線が付けられている。この沈線や隆線が付けられる部位は体部と段がつき、口縁部文様帯をなしている。口縁内側はやや肥厚。

（f）45にみるように波状はゆるくなり、口縁に沿った隆帯も狭くなる。d種に後続するものと思われる。

以上の土器については、a種→b種→d種→f種という変遷をみることができ、同時にa種→c種→e種という展開も考えることができる。これらの時期については大略ながらa種をⅠ期、b・c種をⅡ期、d・e種をⅢ期としておきたい。f種については、後期終末から晩期初頭の可能性がある。e種についても晩期（6群1類土器）に繋がる土器と思われるものである。

8類　第90図19・20・22の磨消し縄文の施された壷形土器を一括した。20は無頸壷。22には弧線文が連続する。

9類　有刻隆帯のめぐる土器を一括した。58・59では口縁部に、57では口縁の下方に、押圧の連続する隆帯がつけられている。60・61は短いが「く」の字形に屈折する口縁を有し、屈折部に隆帯がめぐっている。61は浅鉢形土器で、清水天王山遺跡下層b類土器に類似したものがあり、また次ぎに検討する6群1類土器につながる文様帯を有していることから、6群に位置付けるものかもしれない。しかし「く」の字形口縁や口唇に肥厚がみられることから、ここでは2類c種と同じ時期として後期終末に位置づけておきたい。

以上のように、本土器群は多方面に亘る要素から構成されており、その展開には複雑なものがある。従って、これらの時期を正確に把握することはなかなか困難であるが、これまで見たとおり各類における併行関係をつかもうとしたのが第155図であるが、ここでは一応3期に区分し、各類の土器を当てはめてもたものである。始めにのべたように、紙面の都合からグリッド出土土器の破片については割愛したため、検討材料としては不十分である。これらも含めたうえで、周辺地域の資料比較を行ないながら組み立てていく必要があろう。

(4) 第6群土器

晩期前半に位置づけられる土器で、本遺跡の主体をなす。多方面にわたっており、時期的にも晩期初頭から中葉まで含んでいる。便宜上10類に分類し、それらの特徴や編年上の位置づけについて検討する。

1類　清水天王山式土器を一括したが、器形および文様の特徴から6種に分類した。代表的なものを第156図にまとめてみた。

（a）平口縁の深鉢形土器。沈線により施文されるが、文様により4種に分類できる。

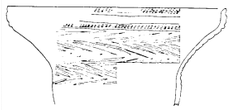
①口縁部文様帯を中心に弧状沈線がみられるが、その一端が蕨手状になるもの。あるいは巴状の入り組み

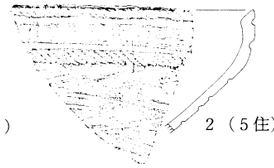
I期

II期

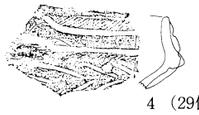
III期

（1類a）

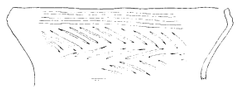

1（F－10－3）

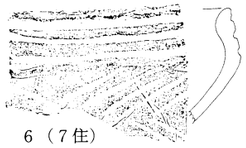

2（5住）

3（29住）


4（29住）

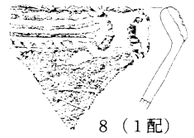
（1類b）


5（5配）


6（7住）

（1類c）

7（E－4）


8（1配）

（2類a）

9（6住）

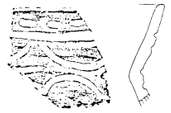
（2類b）

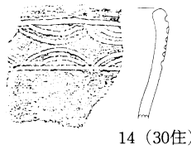
10（1配）

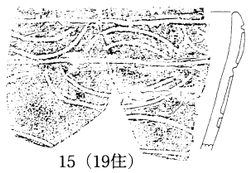
11（1配）

（2類c）

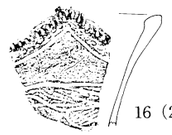
12（1配）


13（1配）


14（30住）


15（19住）

（3類）

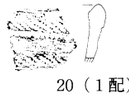

16（26住）

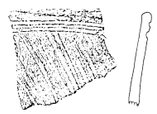
17（5住）

（4類a）

18（1配）

19（E－4－1）

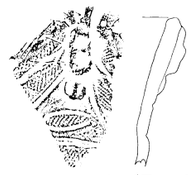

20（1配）


21（7配）

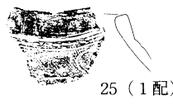
（4類b）

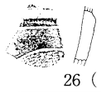
22（22住）

23（22住）


24（E－13－2）

（6類a）

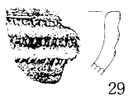

25（1配）


26（1配）

（6類b）

27（38住）

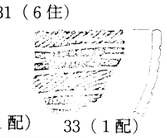
28（1配）


29（1配）

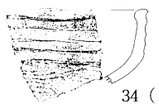
30（1配）

31（6住）

32（1配）

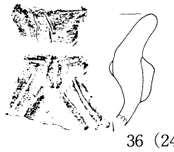

33（1配）

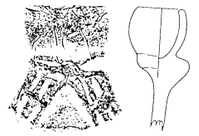
（6類c）

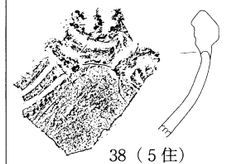

34（5住）

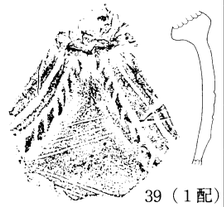
（7類a）

35（7住）


36（24住）


37（5住）

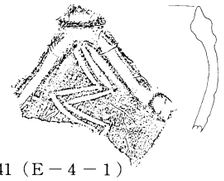

38（5住）


39（1配）

（7類c）

40（1配）

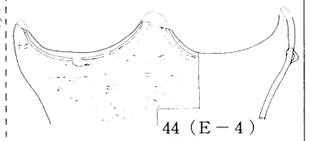
（7類b）


41（E－4－1）

（7類e）

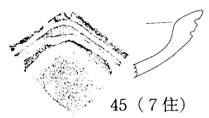
42（1配）

（7類d）


44（E－4）

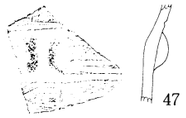
43（1配）

（7類f）


45（7住）

（5類）

46（8住）

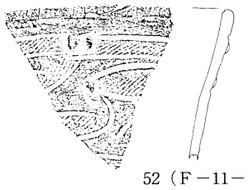

47（20住）

48（38住）

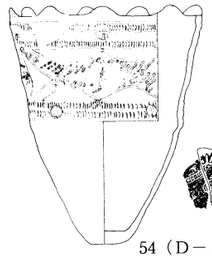
49（D－3）

50（27住）

51（5住）


52（F－11－3）

53（1配）


54（D－6－2）

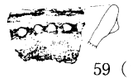
55（F－11－2）

56（F－11－3）

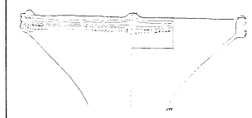
（9類）

57（7住）

58（7住）


59（7住）

60（1配）


61（C－6－3）

第155図　第5群土器（実測図1／8、拓本1／4）

文の施されるもの（第156図１・２）

②弧状沈線は長い平行沈線となり、末端が入り組む（３）

③平行沈線の末端が三叉状となり、入り組む（４）

④三叉状文が３段以上連結し、間に刺突文がつけられる（５）

②③では体部に羽状沈線が施されている。

（ｂ）平口縁の深鉢形土器で口縁が隆帯状に肥厚する。

①（６）のように、口縁は肥厚し瘤状の突起がつけられ、平行沈線が走る。肥厚部下端には刻目がめぐる。体部には末端が入り組み、以下に羽状沈線がみられる。５群９類とした第155図61の口縁部に類似し、そのつながりが想定される。

②口縁部には刻目のある縦長瘤が２個一対でみられる。体部には三叉状文が連続する（７）。

（ｃ）平口縁で突起を持ち、有刻の隆帯がめぐる深鉢形土器。

①体部に巴状沈線ないし末端が入り組む沈線が施されるもので（８）がある。

②突起は小さく、体部には三叉状の入り組み文がみられる（９）。

（ｄ）波状口縁で隆帯がつけられないもの。（10）があるが、弧状沈線の末端が入り組んでいる。波頂部直下には横長の瘤がつけられ、胴部には連続弧文が残る。

（ｅ）波状口縁で有刻の隆帯がある深鉢形土器。

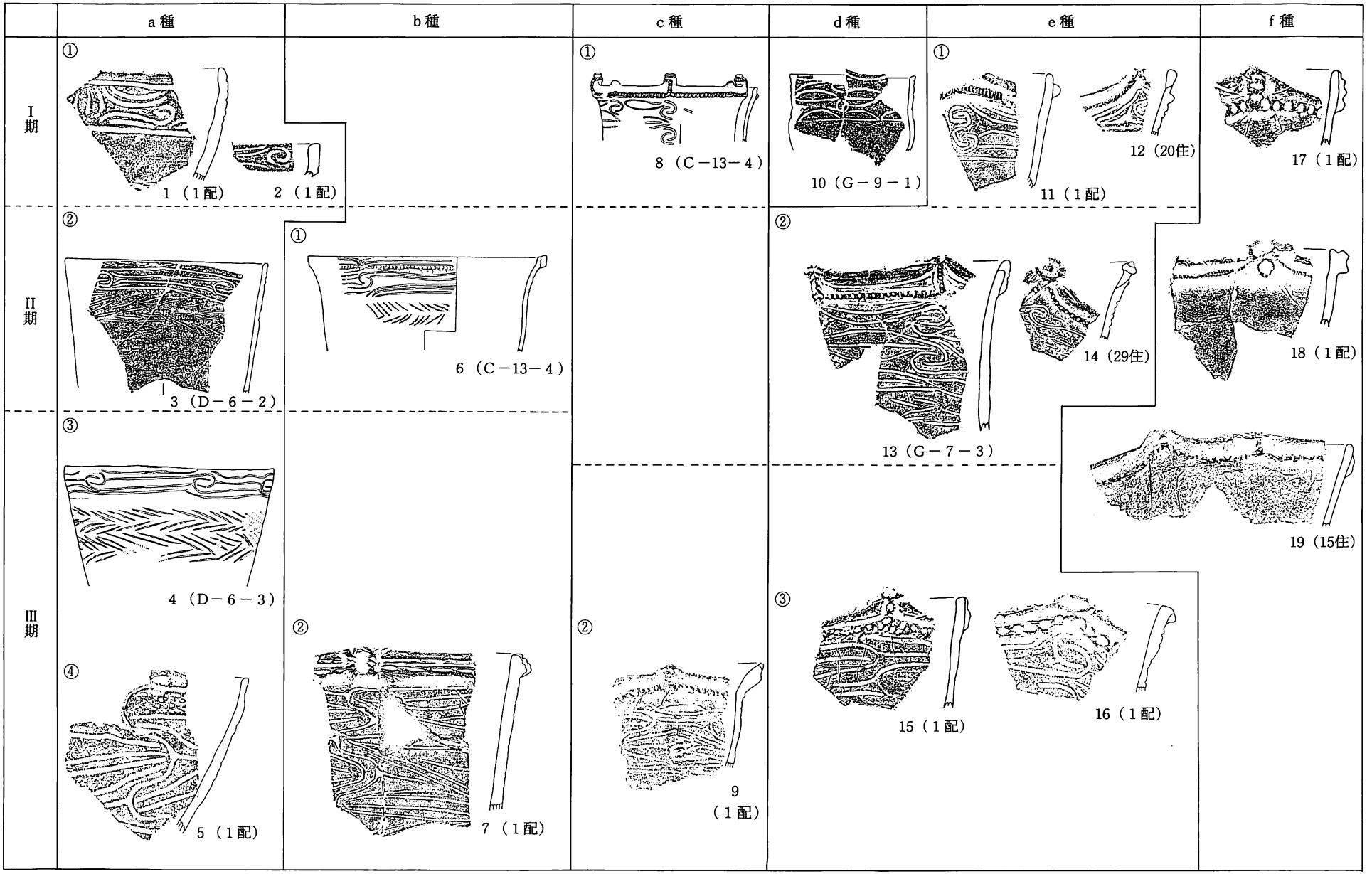
①巴状沈線（11）あるいは玉抱き風の三叉文（12）がみられるもの。

②入り組み沈線が施されるもので、（13）のように波頂部から短い隆帯が下降し、横走する隆帯に合流するものと、（14）のような波状に沿って隆帯がめぐるものとの２種類が認められる。

③体部に連続三叉状文（15）あるいは入り組み三叉文（16）が施されており、②と同様に凸帯の状況に２種類がある。

（ｆ）有刻隆帯の無文深鉢形土器を一括した。平口縁状で突起のつくもの（18）、波状口縁で、隆帯が水平にめぐるもの（17）と波状に沿ってうねるもの（19）等がある。

これらは清水天王山式土器とされる一群の土器であるが、これについては小野正文氏[9]・奈良泰史氏[10]等によりその実態についての把握が試みられている。この土器の展開について小野氏は４段階、奈良氏は３段階にとらえており、系譜や分類区分に見解の相違があるものの、時期的には晩期前葉に位置付けられる土器群である。両氏の成果を参考に、本遺跡の土器の展開を考えてみたのが第156図である。ａ種とした平口縁の深鉢形土器の展開が最も把握しやすい。①種とした１には２本１単位の弧状文がつけられているが、これは第５群２類ｃとした第155図14や第19号住居址出土の第32図20に類似するもので、ここからの繋がりが想定されるものである。あるいは５群２類土器を６群に含めねばならないのかもしれないが、これについては、すでに検討したように、他の土器群との関わりからここでは後期に含めておきたい。従って「く」の字形口縁の影響が薄れ、弧状沈線の末端に変化が生じた時点から６群１類としておく。以下②種～④種へと展開していくと思われるが、②種（３）と③種（４）とについては、第１号配石南面の土器集中地点にて接近して出土したもので、出土位置のレヴェル差はほとんどなかった。また付近から第92図39の壷形土器が出土しているが、これは３・４より12～18㎝下位から出土したものである。この壷形土器には玉抱三叉文が施されており、三叉文間に末端の入り組んだ沈線がみられる、大洞Ｂ式ないし安行３ａ式併行の土器である。３・４とのレヴェル差を重視するならば、１段階古く位置づけられる土器であり、①種の土器群に伴うものとみたい。②種については、第31号住居址の土器が参考になる。ここでは炉中から②種に分類できる土器（第49図3101）が出土したが、同じ住居から（3102）の鍵の手文土器が出土している。同様に第30号Ｂ住居からも②種と鍵の手文土器が伴出している。鍵の手文土器については大洞ＢＣ式からＣ1式に位置付けられている。第21号住居にも鍵の手文土器（2104）があるが、同時に入り組み沈線と列点や縄文が施された皿形土器（2101）が出土している。2101の入り組み沈線や弧状文は清水天王山式の特徴に共通するとともに、刺突文からは安行３ｂ式との繋がりが考えられる。従って、以上の共伴する土器群は大洞ＢＣないし安行３ｂ式併行の一群と



第156図　第6群・1類土器（実測図1／8、拓本1／4）

されよう。③種については、ここでとりあげた第156図４は②種と同時期の可能性があるが、文様の展開上は後出のものとみられる。このような三叉状入り組み文については羊歯状文からの展開も考えられ、ここでは大洞ＢＣ式の新段階の影響を考えておきたい。④種については明確な共伴関係が無いので正確さにかける。しかし、三叉状入り組み文間につけられた列点文からは安行３ｃ式とのつながりを想定できる。いずれにしても、他種との関係もありここでは③④まとめてⅢ期としておく。ａ種については以上のような展開を考えてみた。

ｂ種については資料が少ないが、第156図６には入り組み文風の沈線がつけられており、ａ種②に類するものである。７には連続三叉文がつけられているが、口縁は肥厚し沈線と列点がみられる。第８号住居からは東海地方の元刈谷式に類似した土器（第17図18）が出土しているが、この７の口縁もそれとの関係があろうか。ｃ種８は巴状沈線があることからⅠ期としたが、このような縦二段の巴状沈線は安行３ｂ式にも認められており、Ⅱ期に含めるべきであろうか。ｅ種11についても同様である。ｅ種については、隆帯のつきかたに２種類あるが、11や13のような器形については、５群土器７類ｅ（第155図42・43）からの展開が想定されよう。この７類ｅは問題のある土器だが、口縁部の肥厚の状況から後期末に位置付けておいたものである。体部の沈線の様相からａ種同様の展開が考えられる。とくに②の14には列点がつけられており、注意したい。ｆ種については時期的な展開はよく分からないが、17についてはｅ種11・13と同様の系統と思われる。また、５群９類の中でも後期末葉とした第155図60・61については、口縁部文様帯が６群の第156図６・８・13・17等の有刻隆線につながるものかもしれず、本群に含めることも考えたが、５群の項でみたように後期末としたものである。

６群１類土器については以上のような展開が想定されるが、編年上は小野氏や奈良氏が検討したように、安行３ａないし大洞Ｂ式併行から安行３ｃないし大洞Ｃ１式併行に位置づけられるものであろう。文様の展開や系統については両氏と異なる点もあるが、ここでは第156図のようにⅠ期からⅢ期への展開を考えてみた。

２類

安行３ａ式、大洞Ｂ式土器等の晩期初頭の土器を一括した。各種の三叉文が発達しており、玉抱三叉文のつけられた壷（第92図37～39）、皿（第49図2801）や独立した三叉文の深鉢形土器（第64図3901）、壷（第92図36）、皿（第66図H0102）等がある。H0105もこの類であろう。

３類

大洞ＢＣ式を中心とした土器。第５号配石の壷形土器（第81図H0501）があるが、同じ遺構から出土した皿形土器（H0503、H0502）、浅鉢形土器（H0505）も同時期としておきたい。H0503は古い様相の残る土器である。小型の深鉢形土器（第16図1302）や浅鉢形土器（1601）も本類であろう。

４類

大洞Ｃ1式土器と思われるもの。いずれも破片であるが、第21号住居にややまとまった資料がある。第37図33～40で、皿・壷・注口土器等の器種がある。39・40には曲線的な磨消し縄文とともに、鍵の手状の沈線が認められ、６類土器とのかかわりにおいて注意される土器である。第22号住居第38図12、第25号住居第43図９もこの類であろう。第１号配石にも認められる（第67図30・31）。

５類

安行３ｂ・３ｃ式土器を本類としたが、明確なものは少ない。第25号住居出土の第43図13・14は安行３ｂ式に伴うものであろう。また、第21号住居の第30図2101は１類につながる沈線の施された浅鉢形土器であるが、本類と脈絡の考えられる土器である。

一方、第11号住居第20図15、第30号住居の第55図17～19、第25号住居の第43図15～18、第39号住居の第67図７、第１号配石第70図28、第５号配石第82図10、第８号石組第86図25、第93図56等については、都留市中谷遺跡[11]に若干の類例をみるものの出土例は多くなく詳細は不明ながら、ここでは安行３ｃ式に併行したものと考え、本類に含めておく。器種については、深鉢形土器および短頸の壷が認められる。

６類

「鍵の手文」土器を一括した。「鍵」の入り方で大きく４種に分類できる。

ａ種　完全な鍵ではなく、曲線を描くもの。第18号住居第30図1803、第21号住居第37図26、第27号住居第46図40等がある。1803は壷形土器で、鍵の手文の両脇には三叉文がみられる。

ｂ種　鍵が入り組まないもの。第14号住居第16図1401のようにクランク状の沈線が、横方向に連続している。第８号住居第17図７もこれに類する。いずれも深鉢形土器であろう。

ｃ種　鍵の下端が下に延びず、雷文状になるもの。第30号Ｂ住居第54図30Ｂ03は浅鉢形土器である。これは丸味をもった「雷文」状の文様であるが、第８号住居第17図４、21号住居第37図25もこの種に含めておいた。

ｄ種　入り組み鍵の手文を一括したが、ヴァラエティに富んでいる。第91図29・31、第18号住居第31図30、第21号住居第37図23、第28号住居第51図５等は単純な入り組み文である。第１号配石第69図19には二段に亘り施文されている。浅鉢形土器が多いが、壷や深鉢形土器もみられる。第４号配石第75図39の鍵は単純ながら複線で描かれている。なお、鍵の手については右傾するものが多いが、第91図29のように左傾もみられる。

第21号住居第30図2104のように、鍵の手間に短線が加えられるものがある。この2104の短線は１本であるが、第31号住居出土の台付土器とみられる第49図3102では、短線２本である。また、鍵の手が２本施される第91図30のような例もある。さらに第11号住居第20図19には、入り組まない鍵も同時につけられている。

第28号住居第51図６のように、鍵の上部が上位に走る沈線と接続するようなものも認められる。

鍵の手文土器については、永峯光一氏によりその系譜や編年的位置付けがなされており[12]、大洞ＢＣ式からＣ１式の時期に比定されている。金生遺跡では、第31号住居や第30号Ｂ住居にて６群１類土器との共伴がある。また、第18号住居は大洞ＢＣ式を中心とした住居とみなされるが、鍵の手文土器も出土している。第８号や第11号にも同様の傾向がみられる。

一方、第22号住居からは大洞ＢＣ式土器も出土しているが、大洞Ｃ１式とみられる破片も多く、鍵の手文土器と共伴する可能性がある。なお、本遺跡における鍵の手文の種類については、ｄ種とした入り組んだものが多い傾向にある。

鍵の手文が施される器種については、深鉢形土器・浅鉢形土器・壷形土器・台付土器等があるが、大型の深鉢形土器では口縁部直下、小型の深鉢形土器では肩部に施文されている。浅鉢形土器では口縁部、壷形土器では口縁部ないし肩部である。

７類

北陸系の土器を本類とした。第91図33は胴部がやや張った深鉢形土器で、文様の中心をなす「ｙ」字状の入り組み弧線文は、北陸地方の中屋式[13]に特徴的なものである。第30号住居第55図９にもこのような沈線が施されている。なお、第18号住居出土の第31図33～35、第31号住居第55図27は弧線入り組み文と三叉文とが施される土器で、これについても、御経塚式とのつながりがあるのかもしれない。

８類

東海西部の影響を受けたと思われる土器であるが、明確なものは少ない。第８号住居出土の第17図18には、元刈谷式土器との脈絡が感じられる。

9類

晩期前半期とみなされる条痕文土器を本類とした。第14号住居の第24図24、第16号住居出土の第28図1602、第31号住居第55図32・33等がある。なお、6類土器のうち大型の深鉢形土器1401等の胴部にも条痕がつけられている。

10類

その他の縄文等が施された土器を一括した。第30号B住居第54図30B05は結節の羽状縄文の施された深鉢形土器。第1号配石第67図29は全面縄文の深鉢形土器であろう。第92図40は口縁部に縄文帯がめぐる浅鉢形土器である。また、第8号住居第17図20は網目状撚糸文が施された深鉢形土器である。

(5) 第7群土器

晩期後半に位置づけられる土器である。第6群ほど多くはないがいくつかの系統があり、時期的にも中葉から晩期終末まで含んでいる。ここでは5類に分類してみた。

1類

大洞C2式土器ないし類似の土器を分類した。第2号配石にいくつかの資料があるが、浅鉢形土器第73図H0210を代表とする。壷形土器H0220にも工字文に通ずる沈線が施されていることから大洞C2式併行の土器と思われる。また壷形土器H0212の頸部には、H0220と同様の突起がつけられており、本類に含めておく。

第29号住居出土の第49図2905には、佐野遺跡の「粗大な工字文」[19]につながると思われる工字文がめぐっている。第51図23と共に本類に入ろう。なお第28号住居第51図11の浅鉢形土器にも、口縁部に工字文がつけられている。北陸方面では晩期前葉に工字文風の文様がみられるようであるが、この22については本類に含めておく。

また、第30号住居出土の第55図22は工字文から発生したものと思われる。さらに第25号住居出土の第43図21については類例をみない土器であるが、工字文を遡源とし第55図22等を経て展開したものではなかろうか。但し、時期的にはより後出の可能性があり、問題が残る土器である。

2類（第157図）

浮線網状文系の土器を一括した。器種には深鉢・浅鉢（皿）・壷・甕等があり、文様も浮線網状文を中心としながらも、削り出し手法による隆線や、深鉢形土器胴部にみる条痕文など多彩かつ複雑な様相を示している。ここではいくつかの様相を概観する。

（a）工字文の形態が認められるもので、量は少ないが第157図1の椀形土器、2の小型壷がある。なお、第43図22・23は工字文の土器である。

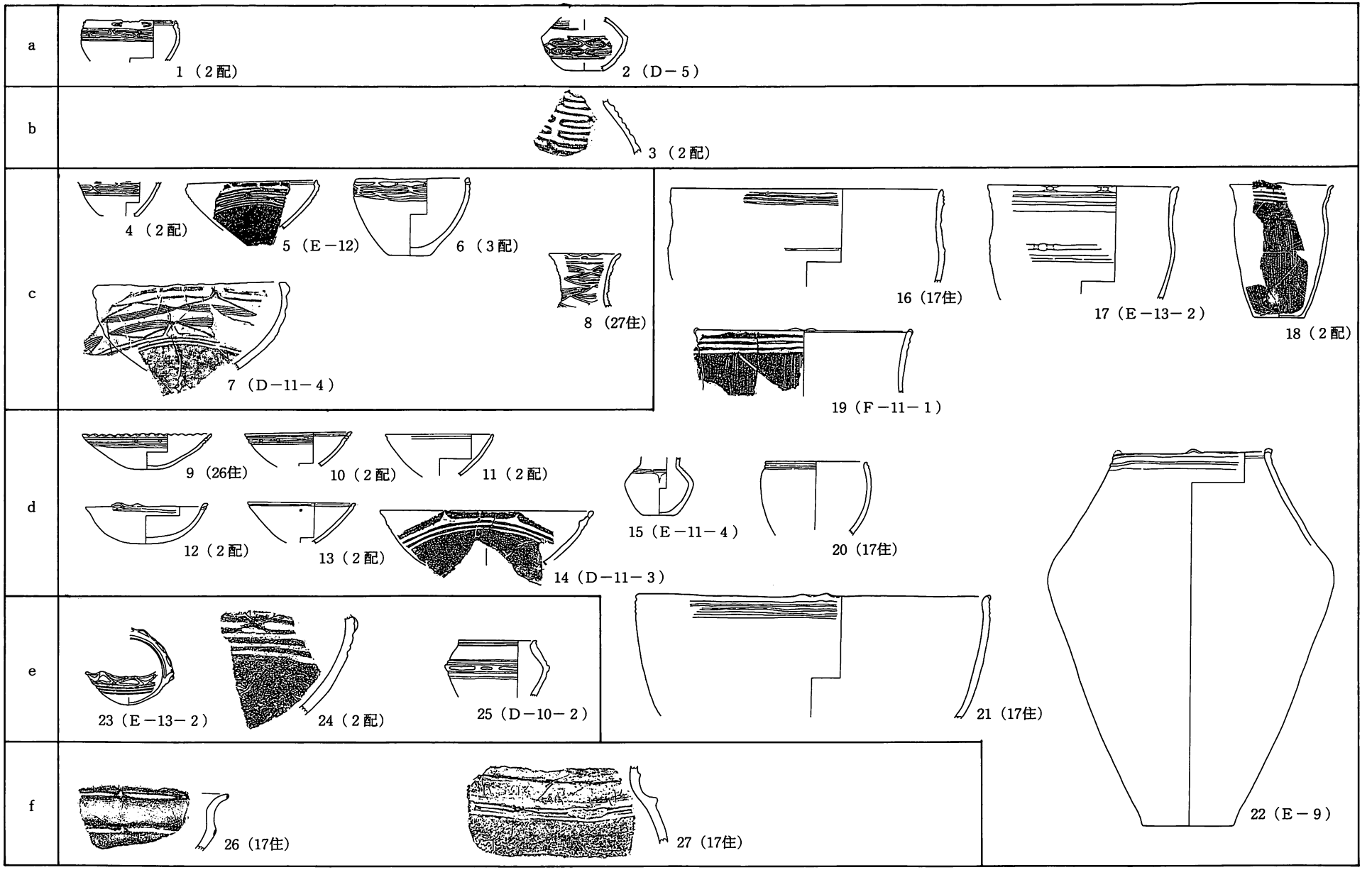
（b）流水文風の変形工字文の施されるもの。3は壷形土器の肩部破片と思われるものである。

（c）網目状の浮線で装飾された土器。浅鉢形土器では4～7等が器形のわかるものである。5や6は基本的な網状文であるが、7は発展的な感がある。小破片ながら第1号配石第69図31、第26号住居第46図21～23、第2号配石第75図8、第17号住居第31図4、第29号住居第51図27・28等がある。壷形土器には8があるが、深鉢形土器ではこの種の文様は認められないようである。

（d）削り出しによる平行隆線、ないし削り取ることにより沈線が表現されている土器。この隆線と沈線とは区別すべきものかもしれないが、厳然たる区分が困難なものもある。施文効果は同様かもしれず、ここでは一括して取り扱う。浅鉢・深鉢・甕・壷等の器種がある。

器形のわかる浅鉢形土器には、9～14がある。破片では第17号住居第31図10、第26号住居第46図18～20、第29号住居第51図24～26、第2号配石第75図3・4・7、第3号配石19・20、第4号配石42等がある。

深鉢形土器にはいくつかの特徴的な器形が認められる。



第157図　第7群・2類土器（実測図1／8、拓本1／4）

①肩部に稜がつき、口縁が外反するもの。16～18、および第17号住居出土第31図２・３・５・７、第75図５、第３号配石21・22等がある。18には胴部に条痕と稲妻状沈線がつけられている。

②胴部の稜の存在は不明ながら、口縁部が外反する器形。19が該当するが、これは胴部に条痕と稲妻状沈線が走るものであろう。

③口縁部が内湾するもの。20、21がある。

壷形土器では15がある。また、22は甕形土器とでも称する土器で、全器形のわかるものである。

（ｅ）基本的にはｄ種と同じであるが、さらに眼鏡状の隆帯から変化したとみられる隆帯がめぐるもの。浅鉢形土器では23・24、第51図29、深鉢形土器では25がある。23は口縁部に、他では胴部につけられている。

（ｆ）平行する浮線文の幅が狭いもの、ないし隆線内に沈線が加えられるもの。26は浅鉢形土器、27は壷形土器であろう。

浮線網状文については、大洞Ａ式からＡ′式に併行する晩期後葉に位置づけられているが、この特徴についてはヴァラエテイに富んでおり、細分化された編年上の位置づけが検討されているところでもある。金生遺跡出土のこれらの土器については概ね氷Ｉ式[15]の範疇でとらえられると思われるが、細かい点では氷遺跡の土器とは異なる部分も多い。例えば浅鉢形土器では口縁が外反し肩が張った器形のものはそれほど顕著ではなく、浮線文自体も異なっている。また、浮線文ではなく（ｄ）種とした平行隆線により施文される浅鉢形土器も多い。深鉢形土器では（ｄ）種の文様が多いが、擦痕状の条線がつけられたものは顕著ではない。破片資料が主体であることにも起因しようが、器形にも若干の相違が認められる。

これらの多様性については今後の検討課題であるが、本遺跡の浮線網状文系の土器についてもいくつかの特徴が認められている。これらの時間差についてここで検討する余裕はないが、（ａ）種については工字文の現況をとどめていると思われ、比較的古い段階に位置づけられよう。また、（ｆ）種については、隆線が変化していく段階のものと思われ、特に26については新しい段階に位置づけられようか。（ｃ）種と（ｄ）種については、深めの浅鉢に（ｃ）種が多く、深鉢と皿状の浅鉢に（ｄ）種が多い傾向が窺われ、同時期のセットとも考えられる。しかし第17号住居出土土器をみた場合（ｃ）種が少ない反面、（ｄ）種を主体に（ｆ）種が若干伴い、さらに樫王式とみられる７群４類土器も認められることから、（ｄ）種と（ｃ）種とに時間差を求めることも考えねばならない。いずれにしても第17号住居については、浮線網状文の新しい段階に位置付けておきたい。

３類

東海西部・西日本系と思われる土器を一括した。多くが第２号配石出土であるが、他に遺構外からも少量出土している。深鉢、浅鉢、壷等の器種がある。

深鉢形土器は第74図H0224を代表とするが、第93図51もこれに類似する。胴部から口縁部にかけて「く」の字形に屈折する器形。屈折部には沈線がめぐる。浅鉢形土器では第74図H0227、H0228、第92図48、49がある。これらは愛知県馬見塚遺跡Ｆ地点[16]の出土品に類似しており、H0227は皿形土器Ａに、H0228および48は浅鉢形土器Ⅱ群Ａに、29は同じくⅡ群Ｄにそれぞれ共通した器形である。壷形土器では、第73図H0213～0216がある。H0213を除き黒ないし黒褐色を呈し、よく磨かれた小型の壷である。器形の上からはこれらも馬見塚Ｆ地点の壷形土器Ｂ－ａに類似している。但し、馬見塚例では口縁部に凸帯がめぐるのに対して、これらには認められない。H0214では口縁に沈線がめぐるが、この直下がやや膨らむ感があり、凸帯が意識されたのであろうか。H0216の口縁は肥厚している。

以上のように馬見塚Ｆ地点の土器の中に、本類に共通する器形をみることができる。しかし馬見塚Ｆ地点では口縁に凸帯がめぐる土器が主体を占めているようであるが、本遺跡では顕著ではなく、沈線による表現もみられるところである。いずれにしても、本類の土器には東海地方西部の色彩が強く認められ、さらにはH0216等にみるような、西日本方面で盛行する夜臼式土器との脈絡が推測される様相を窺うことができる。

これらの時期については、馬見塚F地点では大洞C２式に比定できる土器が伴出している。金生遺跡第２号配石では晩期前半や浮線網状文系の土器がみられるが、同時に大洞C２式併行の浅鉢形土器も出土している。後述するがこの第２号配石は晩期後半に機能した遺構であり、その開始は大洞C２式期に求められるものである。従って本類土器についても、大洞C2式期を上限とし、浮線網状文系でも第73図H0201、H0202等の段階を下限としておくが、西日本との関係をも考慮すると大洞C２式期に近く位置付けるのが妥当であろう。

４類

条痕文土器。これも５類同様に東海西部とのかかわりの強い土器であるが、特に条痕文の施されたものを本類とした。壷よび深鉢等の器種がある。

壷形土器では、第17号住居出土の第31図16がある。押圧凸帯のめぐる口縁部破片で、東海西部の樫王式に比定されよう。

深鉢形土器では同じ第17号住居第31図15・17がある。特に15には波状沈線が縦方向に走っているが、これは第93図54、第46図26にみる稲妻状沈線につながるものであろう。なお、このような沈線を伴う条痕については、２類ｄ種としたH0232や第93図55等の深鉢形土器にも共通していることから、浮線網状文系土器との共伴関係がとらえられる。そのほか小破片ながら、第75図11・12や第46図27・28などがある。なお、第43図32には凸帯が認められるが、おそらく深鉢形土器の破片であろう。

５類

晩期後半に属すと思われる無文土器を本類とした。第17号住居址および第２号配石出土土器が該当しよう。壷形土器では第31図20、第73図H0213・H0217・H0218がある。深鉢形土器では第28図1702、第31図21～23、第74図H0231等がある。特に深鉢では口縁部に刻目や押圧が連続したり、折り返し状のものも認められる。

(6) 第８群土器

台付土器を一括した。器形のわかるものは非常に少なく、配石遺構から出土したH0108・H0510くらいのものである。他は頸部ないし脚部の破片であるが、多くが台付浅鉢と思われる。特徴が少なく時期不明が多いが、後期後葉では第66図H0111、晩期前半ではH0110、晩期後半では第93図64がある。第49図3102も脚部の破片であるが、これは文様上の特徴から第６群６類に含めておいた。多くが頸部に刻目や押圧のある隆帯がめぐっている（第30図1806、第49図3104、第66図H0108・0109・0112、第93図58～60・62）。他に刻目の付かない隆帯（第93図61・63）や、張り付け文のもの（第93図65）等もみられる。

(7) 第９群土器

体部は無文で、口縁部に刻目あるいは押圧が連続する隆線文ないしこれに類する文様のつけられた深鉢形土器を本群とした。第６群１類に伴うものは省く。第94図72は口縁からやや下がった箇所に隆線がめぐる。第４群に伴うものであろう。同図73～75は共伴する土器からみて第５群に伴うものとみられる。大型の深鉢形土器第54図30Ｂ10、第66図H0114には類似した小突起がつく。H0116は隆線がめぐるものではないが、ヒッジの角のような隆帯文がついている。これらは晩期前半の土器であろう。第93図53は口縁に刻目と小突起がみられるもので、器形から晩期後半とみなされるものである。

(8) 第10群土器

無文の土器を一括した。後期前半から晩期後半までこの種の土器は多く、壷・浅鉢・深鉢等があるが、特に無文の深鉢形土器の量は非常に多い。器種により分類した。

1類　壷形土器

（a）　胴部が球形で口縁が直立気味に立ち上がる器形。30A01、30B04がある。2503も含まれようか。

（b）　胴部が屈折し、口縁が外反する器形。2802、第94図66がある。

（c）　胴部が著しく偏球形をするもので、第94図67がある。

（d）　甕形とでも称すべき、無頸の壷。第94図68がある。

これらはいずれも晩期の土器であろう。

2類　浅鉢形土器

（a）　浅い器形で、口縁まで直線的に立ち上がるもの。0803、2002、2501、2601、30A04、3107等がある。

（b）　口縁が内湾し、深めの器形。2401、2704、2901、2902、第94図71が該当する。

（c）　口縁部が屈折する器形。2109、30B11、第94図69、70。

3類　深鉢形土器

（a）　胴部から口縁部まで斜直して立ち上がる器形。1404、2107、2110、2804、第95図79等がある。また、3106は細かい波状口縁、0804、3903、30B09、第95図77等には小突起が認められる。

（b）　口縁部が内湾する器形。2106、2108、2111、2204、2508、30A07、3902等がある。2108、2204では輪積痕が著しい。

（c）　口縁部が屈折する器形。2507、2807、2808は大型の土器。他に30A06・10・12、H0104、第94図76等がある。

第2節　遺構の検討

(1) 住居について

①時期（第158図）

発見された41軒の住居址については第3章で報告したが、これらの時期についてまとめてみると以下のとおりである。

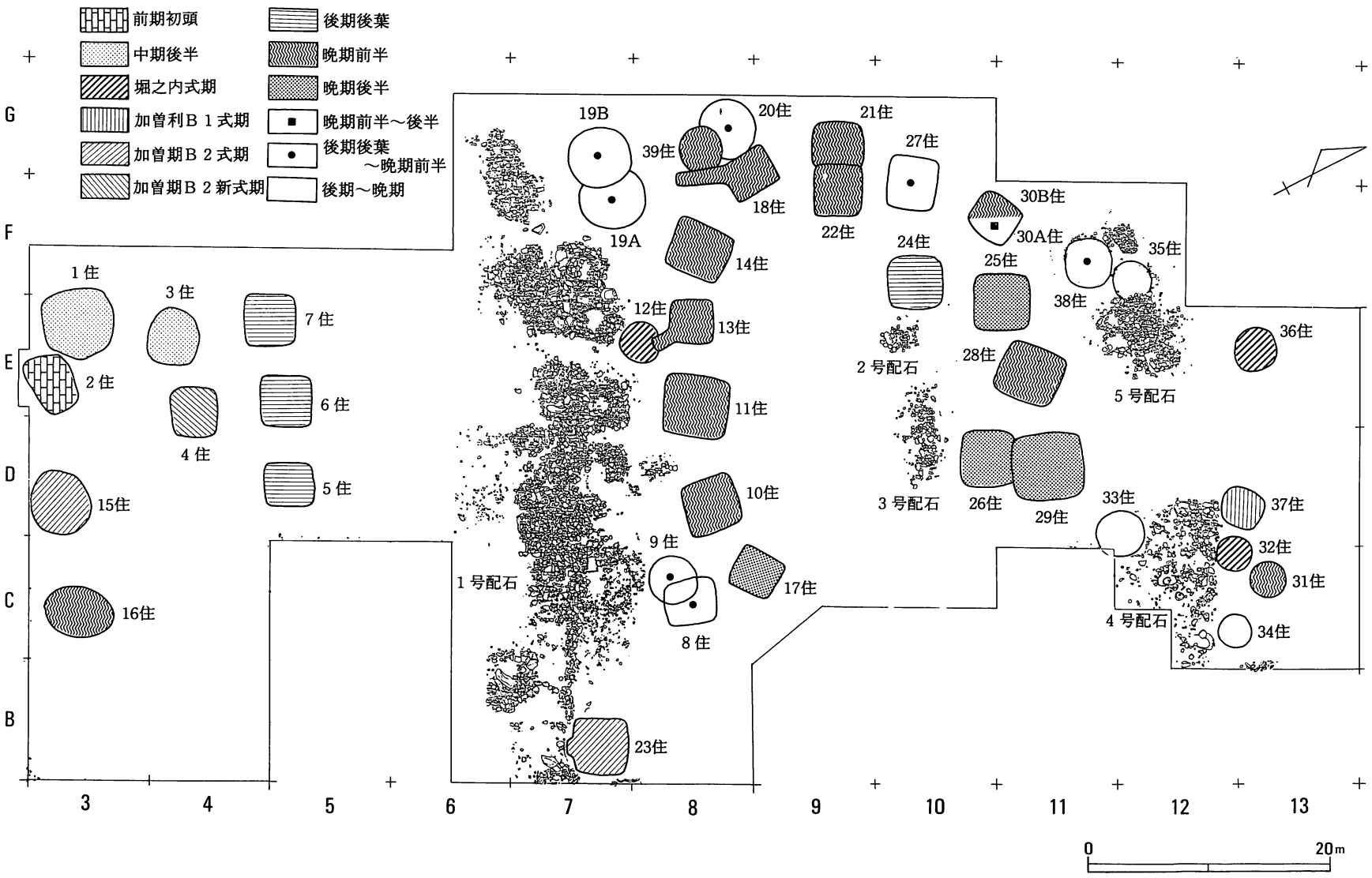
1群土器の時期（前期初頭）　1軒（2号）
2群土器の時期（中期後半）　2軒（1号・3号）
3群2類土器の時期（堀之内式期）　3軒（12号・32号・36号）
4群1類土器の時期（加曽利B1式期）　1軒（37号）
4群2類土器の時期（加曽利B2式期）　2軒（15号・23号）
4群3類土器の時期（加曽利B2新式期）　1軒（4号）
5群土器の時期（後期後葉）　4軒（5号・6号・7号・24号）
6群土器の時期（晩期前半）　12軒（10号・11号・13号・14号・16号・18号・21号・22号・28号・30号B・31号・39号）
7群土器の時期（晩期後半）　4軒（17号・25号・26号・29号）
後期後半から晩期前半　7軒（8号・9号・19A号・19B号・20号・27号・38号）
晩期前半～後半　1軒（30号A）
不明（後期～晩期）　3軒（33～35号）

このように、前期や中期の遺構も発見されているが、主体はやはり後期・晩期である。その中でも、数値の上からは後期後半頃から住居数が増加し始め、晩期前半にピークを迎え、後半期にいたるという展開をみることができる。但し、土器型式からみた住居の同時性についてはさらに少ない軒数となることは確かであろう。4軒ある後期後葉の時期についても土器の構成は微妙に異なっているし、また晩期前半とした12軒の住居についても大洞系、中部・東海系、関東系、北陸系の各型式の組み合わせからなる土器群から構成されている。この点、より細分された時期の住居数の検討も望まれようが、ここではある程度の時間幅の中でとらえるにとどめておきたい。

②形態

住居形態は時期により異なっており、特に後期から晩期にかけてはいくつかの画期が認められる。まず、敷石住居については、第12号と第32号に限られているが、これらの住居は堀之内式期とみられるものである。加曽利B式期以降は炉の周囲に敷石がなされるものの、床全体に石が敷かれることはない。しかし、後期後葉になると「石囲み」住居とでも称すべき形態の住居が出現する。第5～7号住居である。このようなタイプは晩期をとおして見ることができる。第11号住居などはこの典型であろう。さらに敷石された出入り口部をもつ第18号のような住居があるが、このような施設の痕跡は第13号にも認められている。「石囲み」住居は方形を基調としているが、第18号は長方形で、その南コーナーから張り出し部が延びているものである。これらの後期・晩期の住居は竪穴ではなく、平地式の壁立ち構造と推測される。炉は石囲い炉であるが、黒色土中に床が設けられていることから柱穴の状況については不明である。但し、保存区域外の住居については床面下を剝がしたところ、概ね石列の内側に柱穴が配列していることが確認できた。

このような住居の出現は本遺跡では後期後葉であるが、4群3類の時期である第4号住居にその遡源を見ることができる。第4号住居は明らかに竪穴ではあるが、周囲に石がめぐる傾向が認めるからである。なお金生遺跡の東南3.5kmにある高根町青木遺跡[17]からは後期中葉～後葉に位置付けられる同形態の住居が調査されており、また都留市尾咲原遺跡[18]の晩期前半の住居に石囲み施設が認められる。但し、尾咲原例は竪穴住居である。いずれにしても山梨方面では、後期後半を画期とし平地式とみられる石囲みの住居が出現すること



第158図　時期別住居分布図（1／500）

になる。

入り口構造の分かるものとしては、先に述べた第18号や第13号のような張り出し部のあるものだけである。これらは住居の南側コーナーに設けられており、この方向に入り口があったことになる。南側を意識して他の住居をみると、例えば第10号や第11号では住居の南辺に偏った箇所に炉が設置されていることがわかり、この方面に出入り口が設けられていたことが推測される。後期の第５号住居でもこの傾向が窺われるが、同じ並びにある第７号では、南隅に埋甕が認められた。入り口との関係を想定すべきであろうか。

⑵ 配石遺構の性格

①１号配石（第159図）

第３章で報告したとおり、本配石遺構は尾根を横断するかのように長さ60m以上に延びて形成されている。これについては４ブロックから構成されているものと考えたが、それぞれのブロックはさらに複数の遺構群から構成されている。但し、第３章でも述べたようにこの遺構は保存が決定したことから下部の調査を行なっていないため、詳細な要素については不明な点がある。これについては、遺跡の整備事業が開始されていることから、今後の調査に期待したい。以下、調査時点で把握できた配石の構成要素についてふれてみたい。

（１ブロック）

配石の表面を調査したにすぎず、下部の状況については不明。但し石の配列からみて、少なくとも長方形を呈する２基の石棺状石組（Ｓ01・Ｓ02）の存在が推測される。Ｓ01には南北方向に並んだ偏平な大石が認められるが、これは石棺の蓋ではなかろうか。Ｓ02は東西に長軸のある遺構と思われ、さらにその周囲に円形状に配石されているものであろう。

（２ブロック）

配石の中央に大きめの石が東西に並んでおり、その南北に種々な配石が認められる。まず石棺状石組には焼人骨が出土したＳ03がある。これは組み合わせ式石棺状の遺構であるが、この周囲はさらに円形状に石が積まれている。このＳ03の東に接して、小さいながらＳ04がある。配石南半部については完全に石を剝がしていないが、配列状況や石の落ち込み具合からＳ05～07の所在が推定できる。特にＳ06内の上部からは石棒（第143図７）が横倒しで発見されている。また西に接しては長い石が倒れており、本来は立石であった可能性がある。

一方、本ブロックの北東部分には、中央に空間部をもち一辺３ｍ程度で石が方形状に並べられた施設が発見されている（Ｈ01）。このような遺構を「方形石組」と称した。

以上のような複数の施設、特に石棺状石組の集合したものを中心に構成された配石遺構であろう。

（３ブロック）

長さ25m以上あるブロックで、４ブロックにも継続している。さらに小ブロックに区分されるのかもしれないが、配石下部の調査が終了していないことから詳細は不明。２ブロックと同様に、配石の中央部を大きめの石が東西に貫いており、この両側では施設の状況に違いがある。

石棺状石組は５基確認できるが、Ｓ08～10までは北側、Ｓ11・12の２基は南側に位置する。Ｓ08と10とは長軸が東西にある。Ｓ09は小型の石組で、一部に蓋とみられる平石が残っている。またＳ08は敷石されており、石棒と丸石が伴っている。なおＳ08の周囲には石が取り巻いてあり、これをＨ03とした。南側にはＳ11・12の２基がある。いずれも南北に長軸のある長円形状のもので、Ｓ08や10とは異なっている。Ｓ11は蓋石とみられる平石が階段状に並んでいるものであるが、高根町石堂遺跡[19]の例からも石棺状の施設とみられるものである。

円形石組については、南側の先端部に４基が並んでいるが、このうちＥ01には大型石棒が、Ｅ02には小型

の石棒が伴っている。また、E02～04の3基には平石が敷かれている。これらの円形石組の付近には立石があり、特にE01～03では顕著である。

方形石組については3基とみなした。H02は整った形状で、南側前面には敷石部が認められる。H03は、一部石が認められないが本来は方形にめぐっていたものと思われる。またS08と一体になっていたのかもしれない。H04はだいぶ乱れていると共に、東側部分の石は小さめである。

他にも立石・丸石・石棒がみられ、これらの複数の施設から構成されていたことがわかる。なお方形石組を基準にすると、H02～04をそれぞれの纏まりとし、それに各種の施設・遺構遺物がともなった3単位程度の小ブロックの想定も可能であろう。

（4ブロック）

3ブロックに続く東側部分である。この箇所は尾根の最高所部分にあたることから、撹乱が激しく、残存状況は悪い。3ブロックでみられた、配石中央部を東西に走る石列を中心に検出できた程度である。いわば第1号配石の「背骨」とでもいうべき、基礎の石列に該当するものであろう。他に、南側に張り出して石積があり、この中央には地山の石とみられる大石がある。立石とみなしておく。

以上のようにこの第1号配石は、各種の石組や施設の複合から構成されているが、その中心となるのは「墓」とみられる石棺状石組であろう。円形石組についても同様の機能を求めることは可能である。方形石組の用途についてはよくわからないが、これ自体は墓ではなく、全体を包括するような機能を果たしていたものではなかろうか。なお、石棺状石組についても単に墓として済ますには問題が残る。S03からは焼けた人骨片が出土していることは示唆的である。しかも僅かな破片ではあるが、頭骨・四肢骨それに骨盤といった全身にかかわる部位が揃っていることは興味深い。一種の墓域であることは確かであろうが、単なる埋葬地に止まらず、特定の墓を中心として、その葬送に関わる儀礼、さらにはより発展した祭祀の行われた場であったと考えたい。なお各ブロック間の関係、石棺状石組の形態や方向、円形石組と石棺状石組の機能差、方形石組の役割といった課題も残されている。

集落内全体からみても、同時期の墓とみられる施設には第5号配石があり、時期不詳ながら単独の石組遺構も発見されており、これらとの関係も問題である。さらに住居群との関係も考えねばならない。第1号配石からは多くの土器が出土しているが、これらからすると晩期前葉を中心としながらも後期後葉に始まり、晩期前半期に機能した施設とみることができる。後期後葉の住居は第1号配石の南側、晩期前半の住居は北側にそれぞれ並ぶ傾向にある。つまり、後期と晩期とでは居住の場が入れ代わっていることになる。但し、配石遺構の前面（南側）であるD－6区を中心に土器捨て場のような箇所があり、ここからは後期後葉から晩期前葉にかけての土器が多く出土している。この配石南面が祭りにかかわる「広場」として機能していたことが窺われよう。なお、2ブロックと3ブロックとの間は石がなく空間部になっているが、この部分に通路を求めることはできないであろうか。

ところで、金生遺跡からの展望はすこぶる良好で、南に富士山・北に八ヶ岳・西に南アルプス・北東に秩父山塊の主峰である金峰山をそれぞれ望むことができる。このような立地環境が、配石の形成に影響を及ぼしたことも考える必要があろう。

②2号配石

この配石はきわめて特徴的な遺構である。丸石や平石等から形成される配石自体も特異な形態であるとともに、出土遺物も実に多彩である。大型の石棒4本や独鈷石等の石製品、大型の中空土偶といった全体的には祭祀性の強いものが発見されている。また土器の量も多く、壺・浅鉢・皿・深鉢等の器種が認められる。但し、完形品は非常に少なく、小型の壺形土器2点H0124、H0218程度のものである。これらの土器からみて、この遺構の時期は晩期後半に位置付けられるが、特に大洞C2式の時期から浮線網状文の時期（氷Ⅰ式）

に機能したものと考えられる。なお、後期のものとみられる注口土器H0211や晩期前半とみなされる瓢形土器H0221など古い時期の遺物もみられるが、これは遺構の性格に基づくものであろう。第1号集石では独鈷石とともに中期土器の把手が集められていたし、調布市下布田遺跡[20]の石棒を伴った特殊遺構にも類例がみられるとおりである。

さてこの配石の機能であるが、これについては以前に「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」と称して報告した際、検討を加えたことがある[21]。そこでは祭祀性の強い遺物の出土が多いことから「役割を終えた祭器を納めることに目的の一つを持った、極めて祭祀性の高い施設」とした。その後配石遺構の検討を行なうにつれ、墓の一種として構築された配石遺構でも、引き続き祭祀の場として機能していた可能性も考えらるようになった。町田市田端遺跡[22]の配石でも指摘されるとともに、金生遺跡第1号配石でもかような傾向が窺われたところでもある。このような観点から第2号配石をみると、当初は墓として構築されたものが、それ以降も祭祀に関わる施設として機能していたことは十分に考えられるところであろう。その祭祀の一つに、以前想定した用途も含まれるものと考えられ、また下布田例の石棒を対象にした祭礼跡という見方も考慮する必要があろう。

いずれにしても、第2号配石については現状保存されることとなったため、下部の状況についての調査は行なっていない。今後の調査研究に期待したいところである。

なお、中空土偶については以前検討したとおり、東北地方遮光器土偶の流れの中から生み出されたものであり、時期的には大洞C2式を上限とした頃に位置付けておきたい。

③第5号配石

塊状になった配石であるが、石棺墓とみられる施設の集合体とおもわれる遺構である。検出面で3基、下部から3基合計6基の施設が確認できた。時期的には晩期前半に位置づけられ、第1号配石とオーヴァーラップする時期にある。しかし第1号配石とは異なり、石棒・立石・丸石といった遺物や施設はみられず、また時期的にも限られているが、第1号配石ではみられなかった完形ないし完形にちかい石剣が出土している。

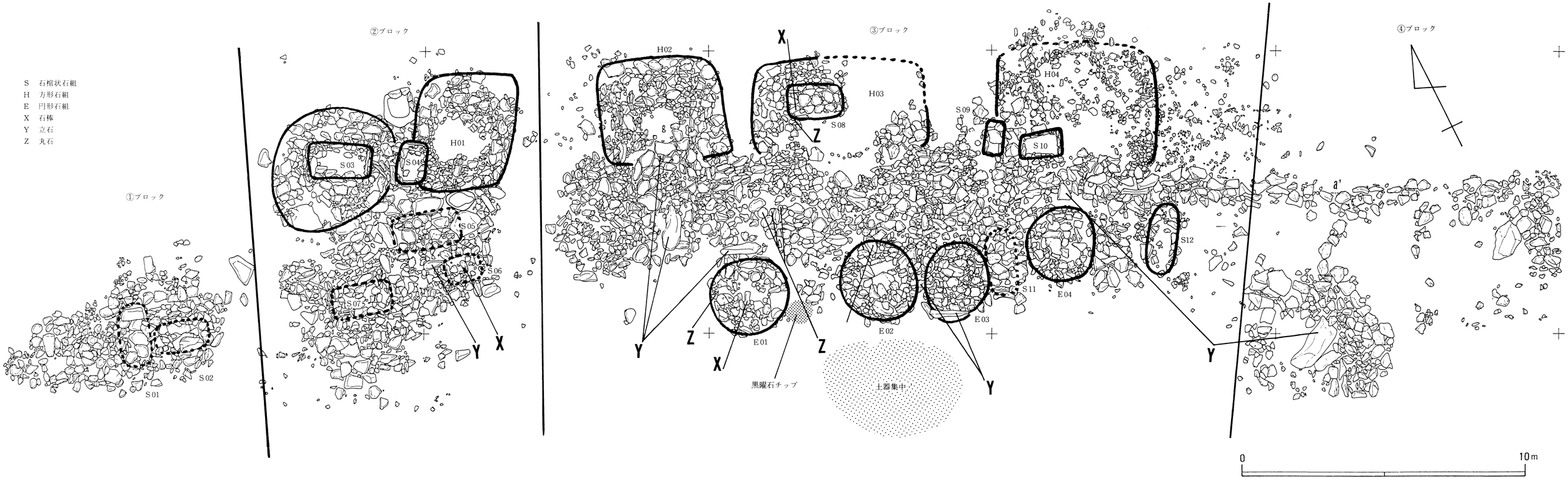
このことから、第1号配石が祭祀性の高い特殊な墓域として継続機能していたのに対して、この第5号配石はより純粋な墓としての機能を果たした施設とすることができようか。時期的にも限られているものである。但し、ここでも葬送儀礼あるいはそこから発展した祭祀が行われたことは確かであろう。出土した石剣や壷形土器・皿形土器は副葬品であるとともに儀礼に用いられた遺物と思われるのである。

なお、第5号配石の石棺墓は、形態上第1号配石に比べてあまり整ったものとはいえない。第1号では側石が揃ったり、底面に敷石されたものや蓋石のあるものがみられるが、第5号ではやや乱雑で、敷石や蓋石のあるものは確認されなかった。これらの点にも両者の違いをみることができる。なお石棺墓については、高根町青木遺跡[23]に　良好な資料がある。ここからは後期中葉加曽利B式期とみなされる石棺墓17基が発見されている。このうち8基と6基がそれぞれ石棺墓群としてまとまっている。これらは概して長軸1.2～1.8mの長円形を呈し、石の積み方も規則的で、半数に石蓋が認められている。一体に、中部地方から関東の山寄りの地域には後期中葉頃に石棺墓が盛行する。形態的にいくつかの種類があるとともに、第1号や第5号といった配石が、青木遺跡の石棺等からどのように展開していくのか、今後の課題でもある。

配石遺構としては、ほかに第3号と第4号とがある。第3号は石が平坦に敷かれたもので、第1号や第5号とは異なったものであろう。第4号は全体に石が散乱しており、その性格はよくわからない。石棺状の空間部も若干認められたり、付近に石棺状石組がみられたりすることから第5号に類似した可能性もある。但し、大型石棒や丸石を伴っていることから、より祭祀的な遺構かもしれない。

(3) 石組遺構

石組遺構は15基発見されているが、これらは石棺状を呈しており、墓に関する施設とみなされるものである。大きさは様々であり最大が第12号の270×120㎝、最小が第13号の88×46㎝で、形状は長円形あるいは隅



第159図　第１号配石の構成（１／100）

円方形が主体である。但し、底面に敷石されている第９号と第16号は卵形のような形状である。多くは石が乱れており本来の形態が崩れているが、第２号～第４号等からみて墓壙の縁に石が一段に並べられたものが多いようである。しかし第16号では側石がめぐっており、いわゆる石棺としての状態を保っている。第９号も同様な形態であろう。これらの主軸方向は一定ではない。時期についても、正確に判断できる遺物が少なく断定できないが、僅かな土器片からみて概ね次のとおりである。

後期　　６号・７号・９号・12号・14号
後期～晩期　１号・２号・３号・10号・11号
晩期前半　４号・５号・15号・16号
不明　　13号

以上のように、後期からこのような施設が構築されているが、細かい時期については不明である。但し、出土した土器片からみると、遅くとも加曽利ＢⅠ式期には出現することが窺われる。一方、第16号を始めとして晩期の遺構もみられるが、第５号配石の項でも述べたように、第１号配石や第５号配石を構成する石棺状施設とこれらの石組遺構がどのような関係にあったのかは一つの課題である。

なおこれらの遺構は、発掘区の北側に集中する傾向が認められ、特に第４号配石の周辺に多いようである。

(4)　集落の変遷

金生集落の始期は前期初頭である。この時期の住居は１軒だけであるが、遺構外からもこの時期の土器が少量ながら出土していることから、付近にさらに若干の遺構が存在する可能性はある。

次ぎに中期後半の住居が２軒ある。また、第１号配石２ブロック北側に、一部石が抜かれているもののこの時期の炉とみられる遺構が発見されている。但し、この時期の住居数もそれほど多くはなく、大規模な集落が形成されていた痕跡は認められない。

後期になると徐々に遺構数が増えはじめ、晩期へと展開していく。まず堀之内２式期の住居は第12号・32号・36号の３軒が認められる。配列はまばらで特に規則制は認められない。但し、第６号土壙・７号土壙から堀之内式期の土器が出土しているほか、グリッドの11・12列にこの時期の土器が多くみられることから、発掘区の北側を中心にこの時期の遺構が集中する可能性はある。

加曽利Ｂ式期になると発掘区全体に遺構が広がる傾向がみうけられるが、細かい時期でみるとまばらな配置である。まず加曽利Ｂ１式の住居は第37号１軒だけであり、しかも堀之内２式期の住居や土壙がまとまっている発掘区北側に位置しており、堀之内式期からの継続性を見ることができる。加曽利Ｂ２式期では第15号と第23号の２軒が認められる。これらは発掘区の中央から南側にかけて位置しており、これまでの居住域とは異なった展開にある。次ぎの加曽利Ｂ２新式期にも、この居住区は受け継がれており、１軒ながら第４号住居として発見されている。なお、発掘区北側の12・13列には加曽利Ｂ式期に属すと思われる石棺状の石組遺構や土壙がみられる。また、第４号配石のある地区を中心にこの時期の土器も目立って出土していることから、配石の一部もこの時期に形成され始めた可能性はある。少なくとも石棺状の石組はこの時期に出現すると思われる。

後期後葉期の住居は４軒発見されたが、このうちの３軒並んだ第５号～７号は時期的に近いもので、占地も加曽利Ｂ２新式期に準じている。この時期に第１号配石が形成されだしたものと思われ、同時に住居群と配石の間に広がる空間部には土器の廃棄が開始されたとみられる。この土器群は配石の祭祀にかかわったものとおもわれ、「居住域」・「広場」・「配石」といった要素から集落が構成されていたことが考えられる。なお、詳細な時期不明ながら後期後半から晩期前半とみられる住居が、他に７軒ほどあり、このうち後期後葉の住居も数軒は存在したものとみられる。これらは配石の北側に位置していることから、集落全体としては配石遺構の南北両側に住居群が位置するという形態を窺うことができる。そのなかでも特に第５号～７号の３軒は時期的にも接近しており、一つのまとまりとして把らえられよう。なおこの時期は、石囲い住居の確立、配石の形成といった点から、金生集落における一つの画期をなすものと思われる。

晩期前半の住居は12軒みられる。ほかに詳細不明ながら後期後半から晩期前半とされるものが７軒あり、このうちにも晩期前半期の住居が何軒かは含まれるものと思われる。これらの住居は第16号を除き、発掘区の北側半分に集中しているが、第１号配石の北側に孤を描いて配列する傾向にある。特に第１号配石はこの時期に最も発達したものとみられるが、ほかに第５号配石や第４号配石の一部、さらには石組遺構も同時に機能していたものと考えられる。また、第１号配石の南面は後期後半に続き土器が溜められており、これにかかわる広場として機能していたことがわかる。ここから南に離れて第16号が１軒だけ検出されている。この住居は他と異なり周囲に石が用いられておらず、また、炉も明確ではなく性格の違う遺構かもしれない。いずれにしても、金生集落が最も発達したのがこの晩期前半期であったことは確かであろう。そしてこの集落は基本的には、南から、（第16号住居）－「広場」－「墓＋祭祀」（第１号配石）－「居住域」（住居群＋広場）－「墓域」（第５号配石・石組遺構）という構造でとらえられよう。

ところでこれら住居の同時性については、前半期という時間幅でとらえたため多くの住居数となっている。切り合いや土器型式に基づいて検討すれば、より同時性に近い数値がとらえられるであろうが、やはり限界はある。但し、第１号配石の北側に平行して並ぶ第10号から第18号は時期的にちかいものと考えられる。第21・22号はやや新しいかもしれない。

晩期後半になると集落は縮小し、住居数も５軒となる。これらの遺構は発掘区の北側中央部にまとまっているが、特に第２号配石と第３号配石を中心に展開している。遺構外のこの時期の土器についても、グリッド９～11列からの出土が多く、居住空間が限られてきたことが窺われる。５軒の住居については、第25号と第29号は後半期前葉にまで遡りうるが、第17号はより新しい時期の可能性がある。また、第２号配石は前項でも検討したように後半期前葉から後葉まで機能していたものと思われる。一方第１号配石については、第７群土器が若干出土するものの、この時期には機能していなかったものと思われる。

以上のような集落の展開をつかむことができたが、後期中葉から拡大し始め、後期後半から晩期前半に最大限に発達し、その後縮小しながらも晩期終末まで続いた金生集落も新しい時代の流れの中で、その役割を終えていったのである。

(5) 金生遺跡の位置付け

金生遺跡は、途中いくぶんの空白はあるものの、後期から晩期まである程度継続して営まれた集落であり、この地域における拠点的な集落であったとみなされる。それは土偶や土製耳飾り、それに石棒類といった特殊遺物の出土量からも推測されるところであるが、同時に第１号配石や第２号配石といった特徴的な遺構に基づいたものとも思われる。特に第１号配石を構成する厖大な量の石は、たとえそれが１時期に形成されたものではないにしても、その運搬や構築には相当の労力が必要とされたであろう。これらの石については第Ⅴ章で西宮教授により観察されているとおり、大部分がこの八ヶ岳山麓にて産出するものながら、立石に用いられた大型品の中には釜無川方面に求めねばならないものも存するのである。数軒の金生集落だけでこのような施設を必要とし、また構築し得たかは疑問である。それとともに、この配石の機能も問題となるところである。前項でもこの点にふれたが、単なる埋葬の場ではなく、特定の埋葬とそれにかかわる葬送儀礼、さらにはそこから派生した幾つかの祭祀が行われた場と考えてみたのである。むしろ通常の埋葬については集落の北側に展開する第４号や第５号配石、さらには石組遺構がその役割を果たした可能性もあろう。こうしてみた時、第１号配石は、この地域にひろがる複数の集落にかかわった施設であり、それが金生集落の拠点性を意味するものなのかもしれない。ちなみに、この地域の後期から晩期にかけての大規模かつ継続性の高い遺跡には、学史的にも著名な長坂町長坂上条遺跡[20]（第３図15）を始めとして、同町夫婦石遺跡（同14）、高根町石堂遺跡（同17）、時期的には限られるが青木遺跡（同16）がある。金生遺跡とこれらの遺跡との距離は３～４㎞であるが、仮にこれらの遺跡が同時に存在したとして、直径４～５㎞をひとつの領域としてそれぞれの拠点集落があったとみることもできよう。このような拠点集落のひとつに金生集落をあてることもできるのではなかろうか。

土偶の出土量については、発掘調査の行なわれたこの周辺遺跡（第3図参照）と比較することにより、その特殊性が理解できる。豆生田第三遺跡[25]が2個（調査面積3,500㎡）、別当遺跡[26]0（同5,000㎡）、姥神遺跡[27]14個（同2,500㎡）、青木遺跡20個（3,500㎡）、石堂遺跡38個（同5,000㎡）、長坂上条遺跡12個（同1,000㎡）であるのに対して金生遺跡からは233個（5,000㎡）が出土している。100㎡あたりの出土率をみると、金生遺跡4.6個であるのに長坂上条遺跡1.2個、石堂遺跡0.8個、青木遺跡0.57個、姥神遺跡0.32個、豆生田遺跡0.005個となる。このような土偶の多さもまた、金生集落の拠点性につながっているのかもしれない。

焼けた獣骨片が多いのもこの遺跡の特徴であるが、一般に後・晩期の遺跡で特に内陸部に位置する遺跡からはこのような遺物が顕著にみられる[28]。特に金生遺跡からはイノシシ下顎骨が大量に出土しているが、これについては第Ⅵ章で金子浩昌氏により詳細な検討が加えられている。動物飼育の問題にまで波及する資料であるが、少なくとも動物にかかわる儀礼の存在が指摘されるところである。

以上のような各種の「祭り」が金生集落で行なわれていたわけであり、八ヶ岳南麓における金生集落の位置づけの一端がこのような点にあったと考えられる。

最後に、遺跡の立地についてふれておく。従来八ヶ岳南麓には中期の遺跡は多くあるものの、後・晩期の遺跡は非常に少ないといわれていた。それが金生遺跡の調査後相次いで知られるようになったが、これは水田の区画整理ともいうべき圃場整備事業に伴う発掘調査の結果であった。このことは、水田下に後晩期の遺跡がまだ多く埋没している可能性を示すとともに、後晩期の遺跡が、水田として開発されやすい低位の場に立地していることを意味しよう。金生遺跡の場合、尾根上に立地しているが、この尾根は谷との比高差の少ないもので、西側の谷に緩やかに落ち込んだ地勢にある。この谷面も水田として利用されているが、ここは冬場でも水が浸みだすような湿地であった。後晩期遺跡の立地が低位にあったり、遺跡の一部に低湿地をとりこんだりする傾向がみられることについては、以前検討を加えたことがある[29]。八ヶ岳南麓地域では、長坂上条遺跡・石堂遺跡・青木遺跡等も例外ではない。このような低位指向が生産上の要因に基づくものとも思われるが、この点については定かでない。今後の調査研究に期待するところは大きいが、少なくともこの時期の集落にとって、水辺を生活の一部へ取り込む必要性がより増大したことは確かであろう。

なお生産にかかわる問題として、出土した剝片石器の使用痕について梶原洋先生に分析を依頼したが、この成果については第Ⅳ章にまとめられている。植物の切断等にかかわる成果を期待したが、ここでは皮あるいは肉に関連したものと分析されている。いずれにしても、当時の生活を探る重要な手懸りが得られた訳であり、今後に残された課題も大きいといえよう。

以上、金生遺跡の発掘調査により厖大な資料が提供されたが、同時に多くの問題も提起された。本書ではこれらの資料について報告するとともに、そこから派生するいくつかの問題点について、整理を行なってみた。しかし、厖大な資料についてこれらを全て報告することができず、また解決せねばならない問題点も多く残された。今回記載できなかった資料については機会を改め報告したいと考えるとともに、問題点については今後の調査研究の課題としたい。

注

1　櫛原功一『姥神遺跡』大泉村教育委員会　1987
2　百瀬長秀「羽状沈線文をもつ土器の系統と展開」『長野県考古学会誌』49号　1984
3　奈良泰史『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会　1981
　百瀬「注2論文」
4　注1に同じ
5　注3奈良に同じ
6　注2に同じ
7　森幸彦『三貫地貝塚』福島県立博物館　1988
8　度会町教育委員会奥義次氏、御村精治氏ご教示。

9　小野正文「再び清水天王山式土器について」『山梨考古学論集』Ⅰ　山梨県考古学協会　1986
10　奈良泰史「清水天王山式土器形成の様相」『山梨考古学論集』II　山梨県考古学協会　1989
11　奈良泰史「中谷遺跡」『都留市史』資料編　地史・考古　1986
12　樋口昇一編『佐野』長野県考古学会研究報告書3　長野県考古学会　1967
13　南久和「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観』4　1989
14　注12に同じ
15　永峯光一「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9　1969
16　澄田正一・大参義一・岩野見司「馬見塚遺跡」新編『一宮市史』資料編一　縄文時代　1970
17　雨宮正樹・山下孝司・櫛原功一「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』2　1988
18　奈良泰史「尾咲原遺跡」『都留市史』資料編　地史・考古　1986
19　雨宮正樹「山梨県石堂Ｂ遺跡」日本考古学年報38　1987
20　川崎義雄・能登健「調布市下布田遺跡の特殊遺構」『考古学ジャーナル』34　1969
21　新津　健「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1983
22　浅川利一・戸田哲也・笹村省三『東京都町田市田端遺跡調査概報』第一次　1969
23　注17に同じ
24　大山柏・竹下次作・井出佐重「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13－3　1941
25　櫛原功一『豆生田第3遺跡』大泉村教育委員会他　1986
26　小田澤佳之・桜井真貴『深草遺跡・別当十三塚遺跡・別当遺跡・糀屋敷遺跡』長坂町教育委員会　1987
27　注1に同じ
28　新津　健「縄文時代後晩期における焼けた獣骨について」『日本史の黎明』　1985
29　〃　「八ヶ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21－2　1984

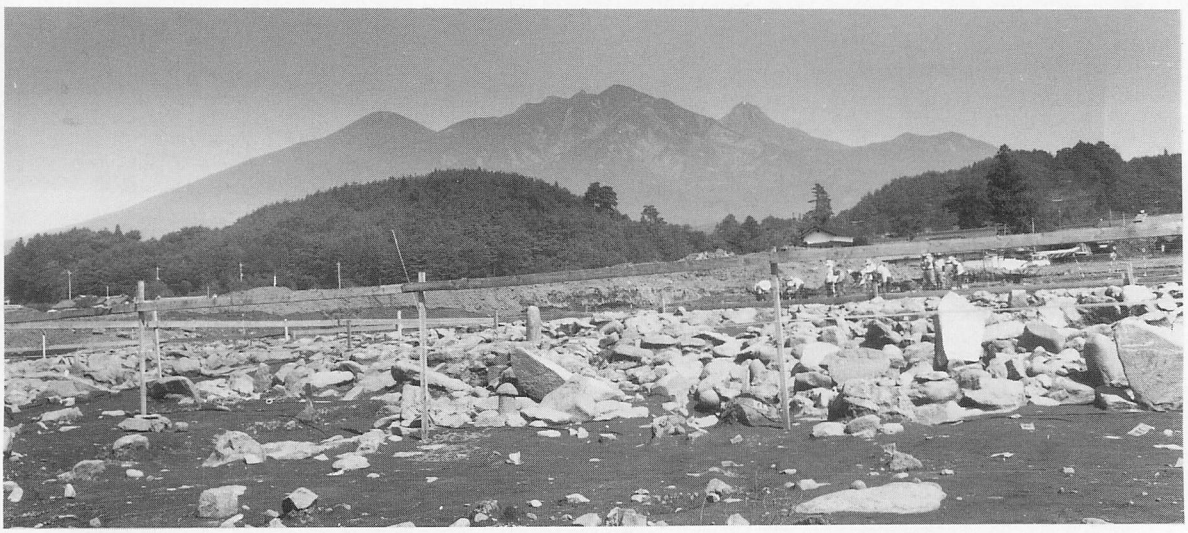
図　　版

図版1　遺跡上空写真

図版 2

1　遺跡遠景

2　発掘前の遺跡



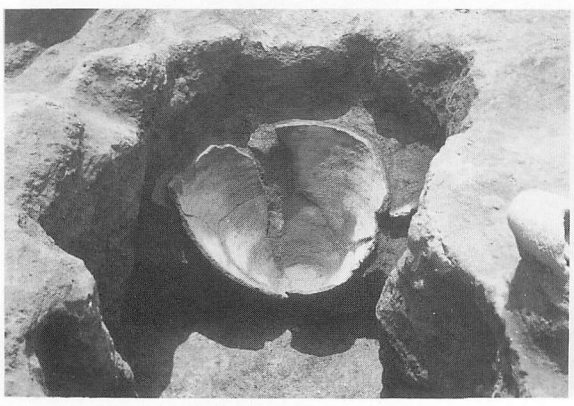
3　発掘中の遺跡

図版 3

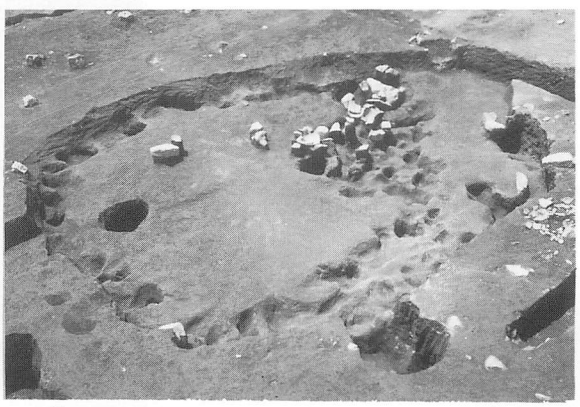
1　第 1 号～第 4 号住居址

2　第 1 号住居址

4　第 2 号住居址



3　第 1 号住居址埋設土器



5　第 5 号住居址

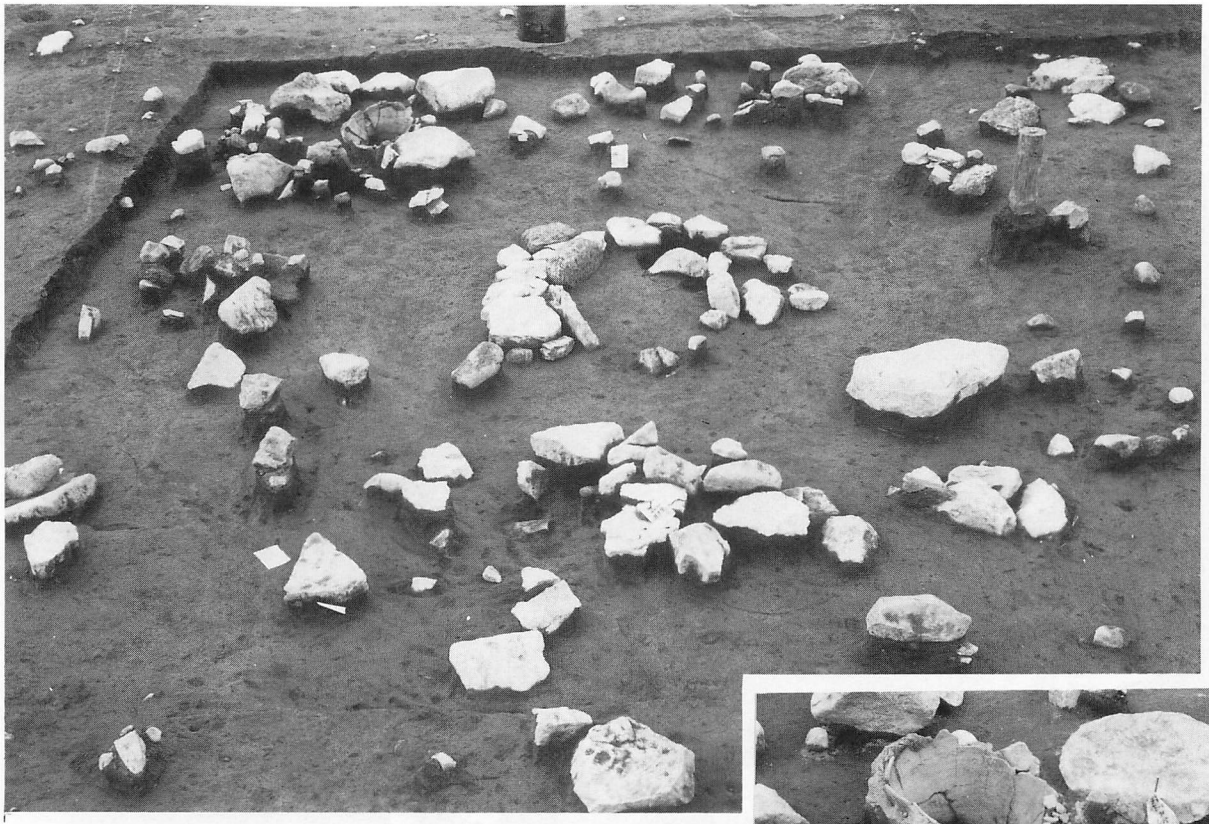
図版 4

1　第 4 号住居址

2　第 5 号～第 7 号住居址

3　第 6 号住居址

1　第5号住居址

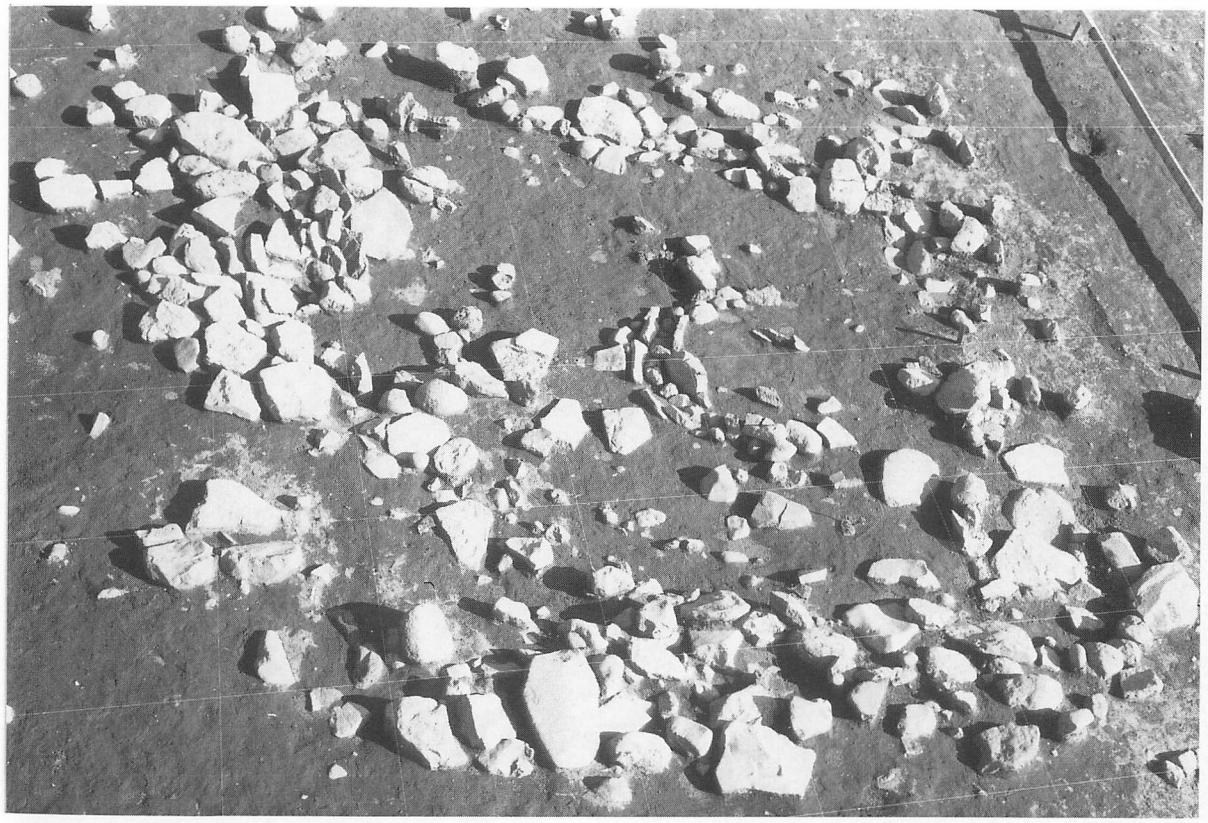


2　第7号住居址

図版6

1　第8号・9号住居址

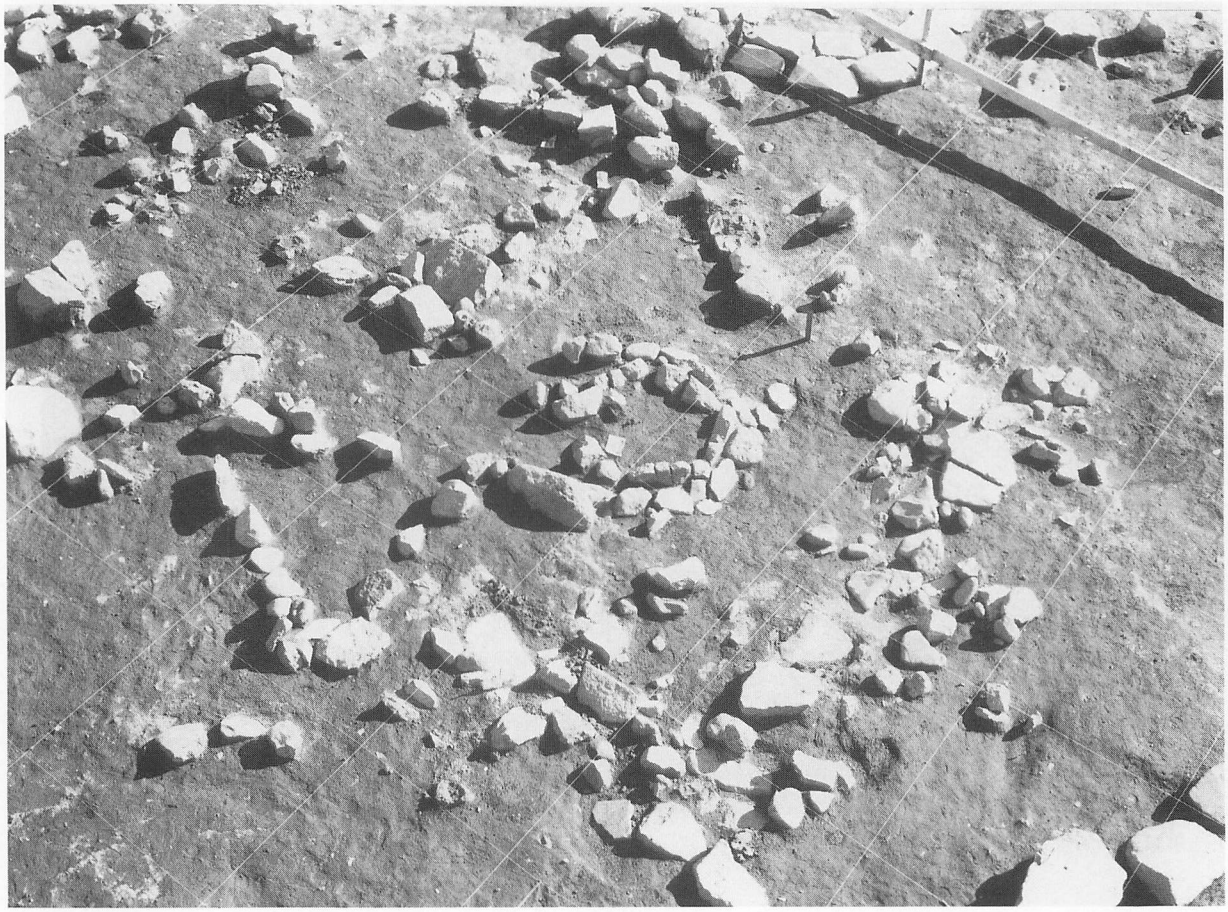
2　第10号住居址



1　第11号住居址

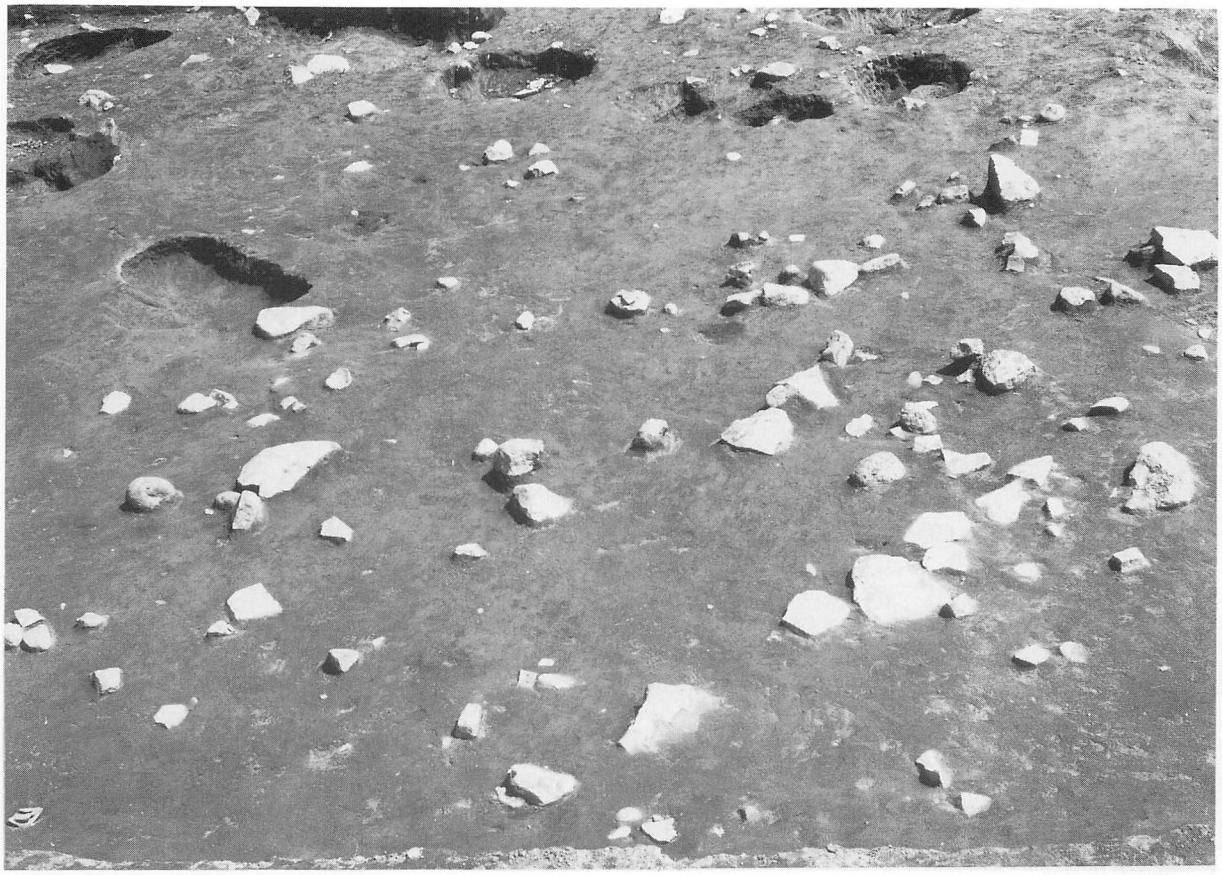
2　第12号住居址

図版 8

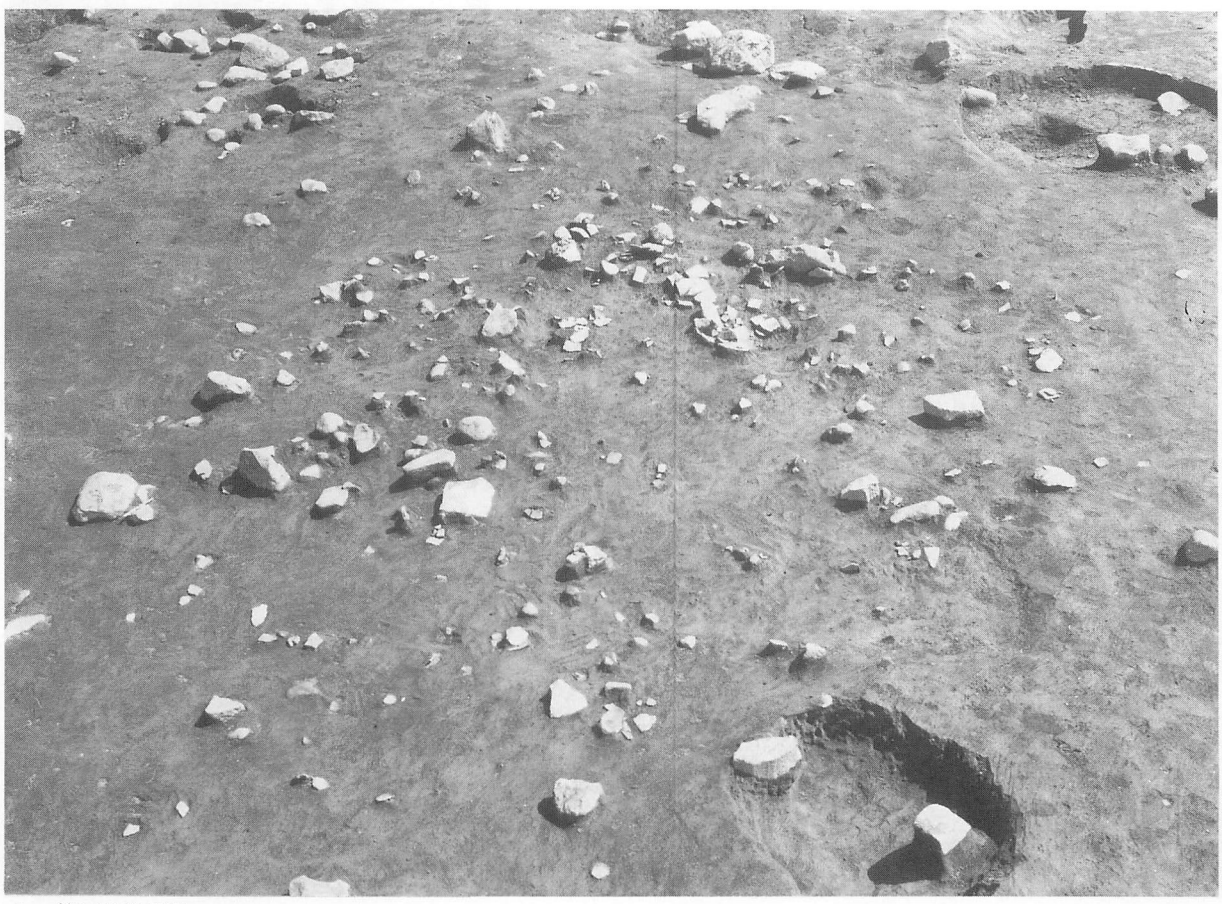


1　第13号住居址

2　第14号住居址

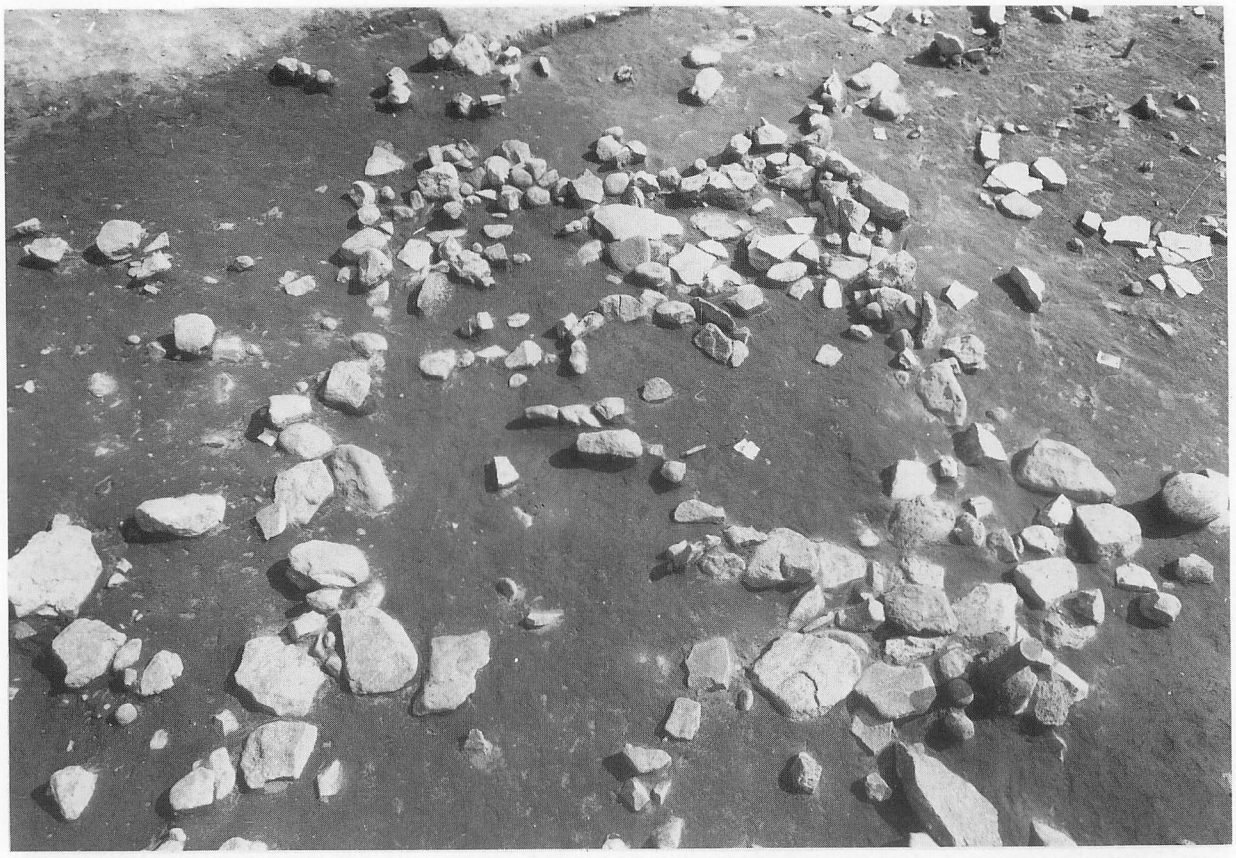


1　第15号住居址

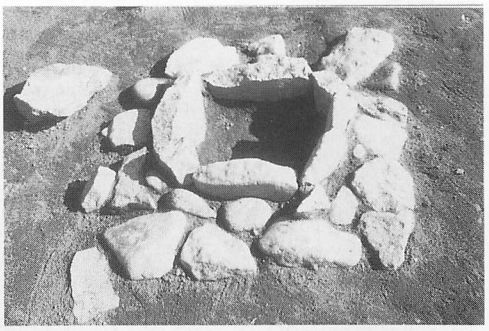


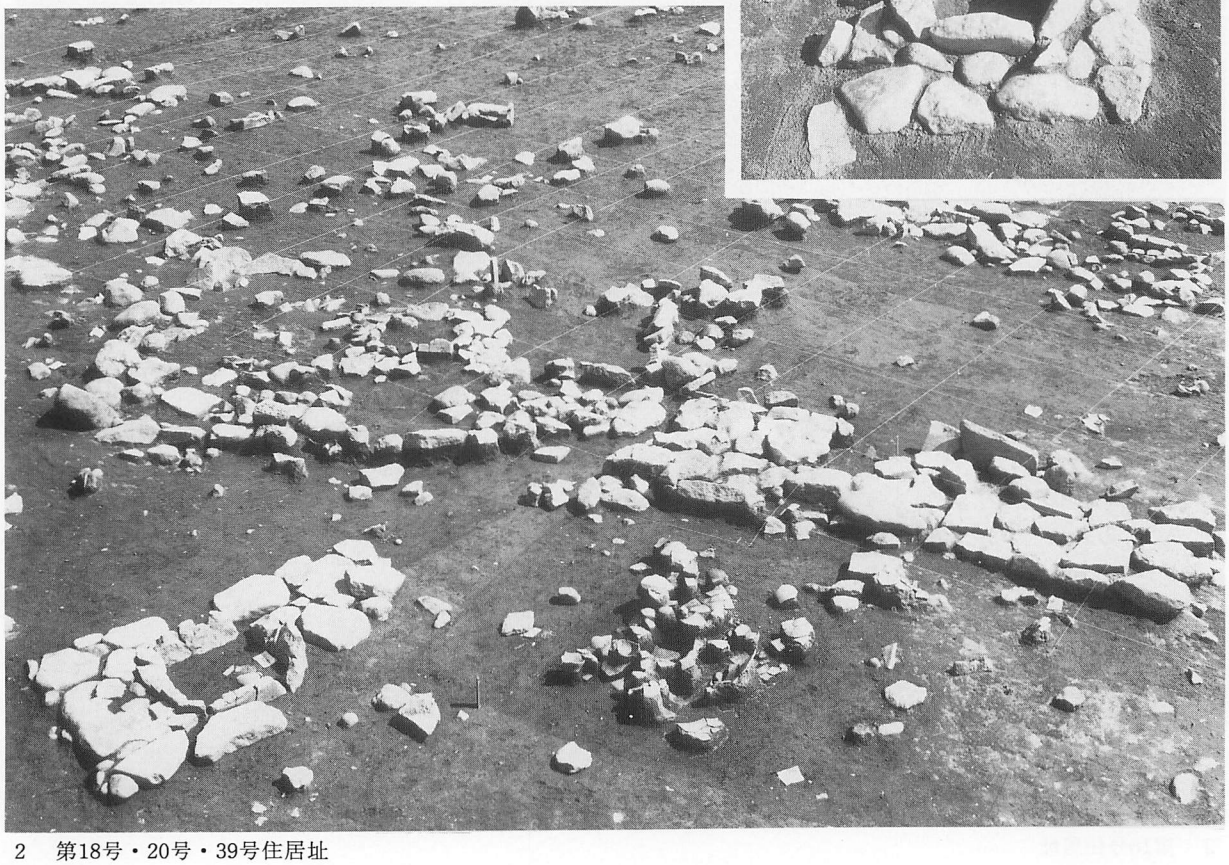
2　第16号住居址

図版10

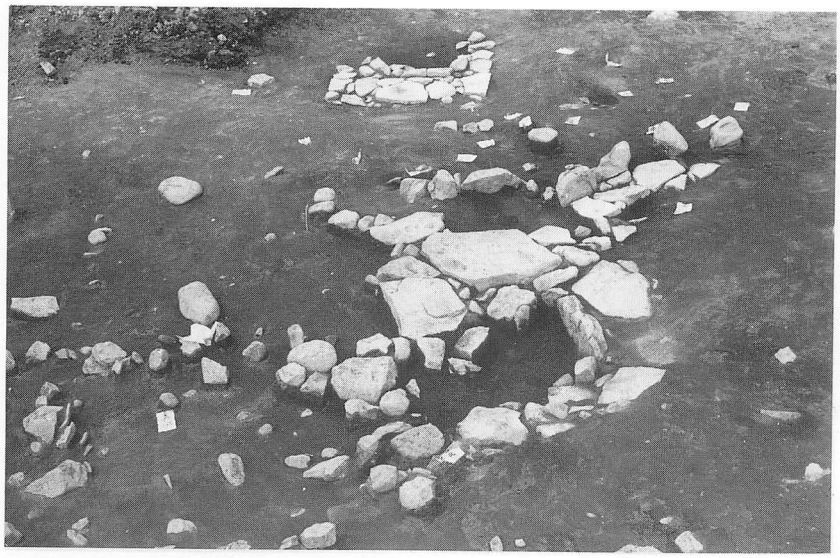


1　第17号住居址



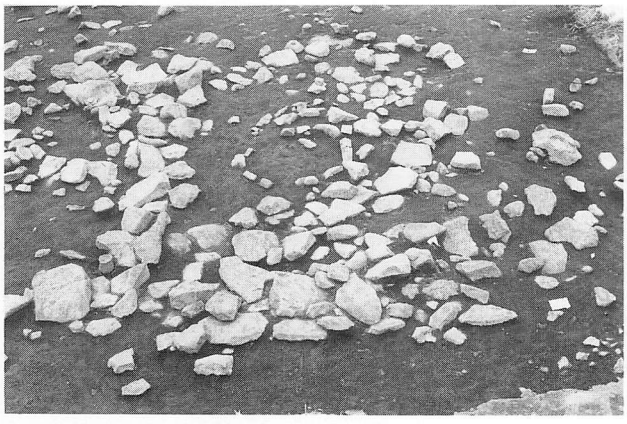


2　第18号・20号・39号住居址



1　第19号住居址

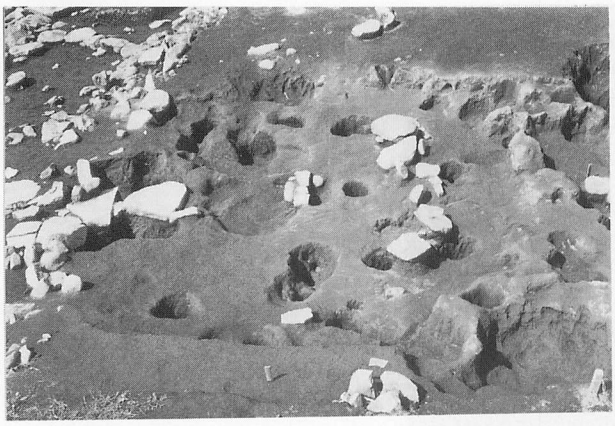
2　第21号・22号住居址



3　第21号住居址

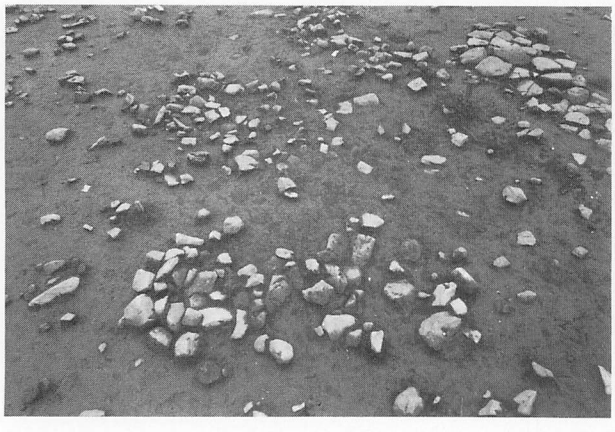
4　第22号住居址

図版12



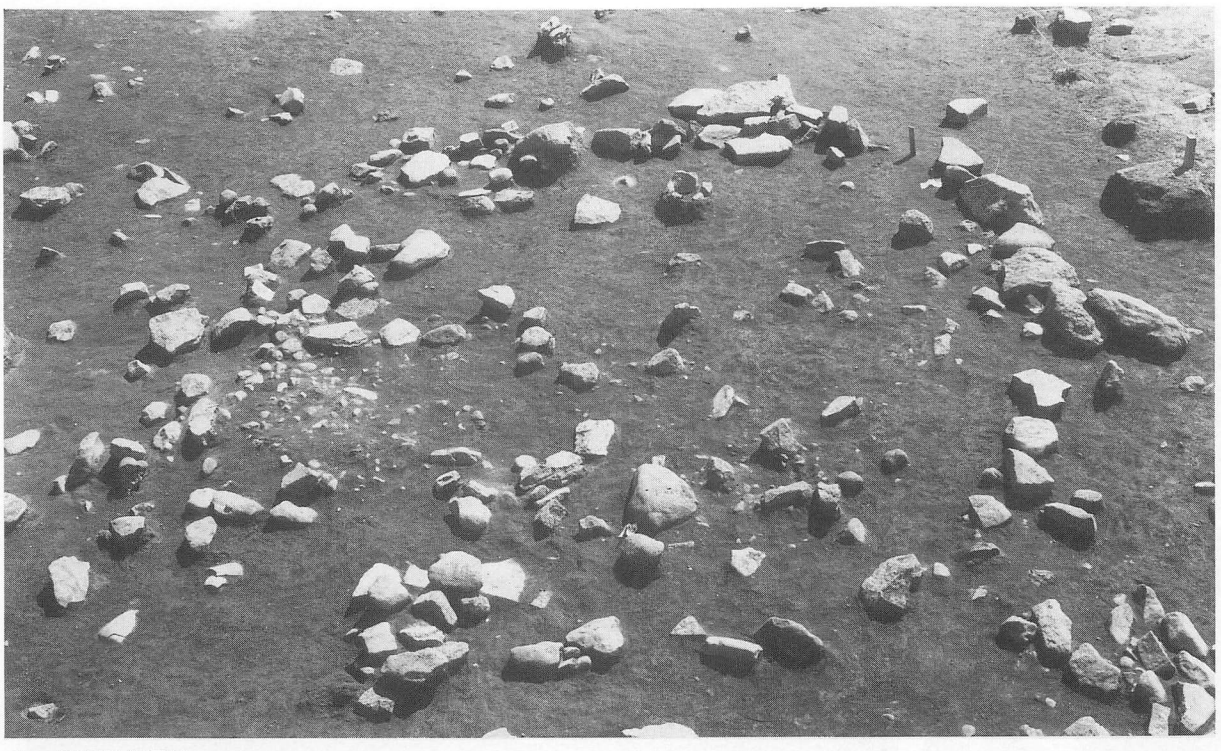
1　第23号住居址

2　第25号住居址



3　第25号住居址上層

1　第26号住居址



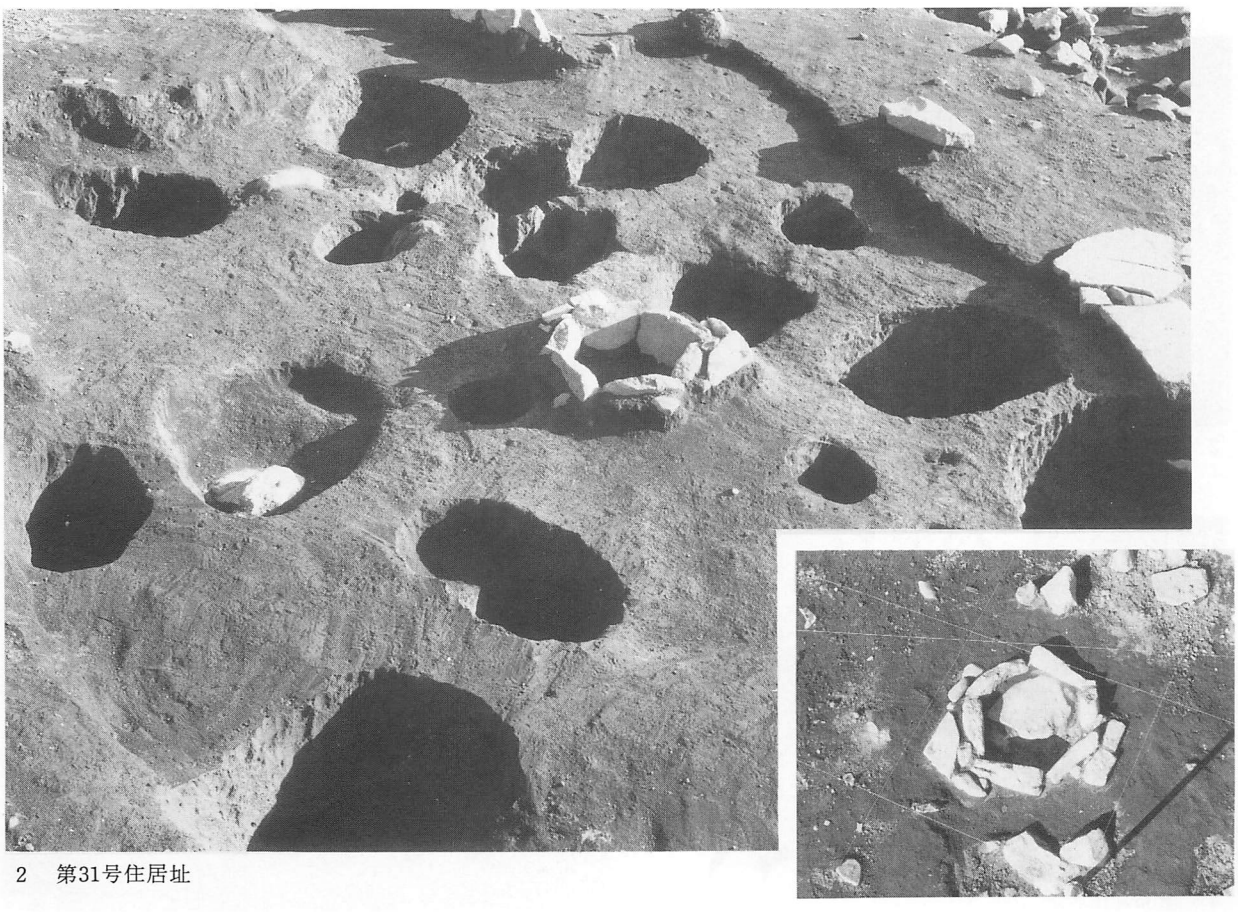
2　第27号住居址

図版14

1　第28号住居址

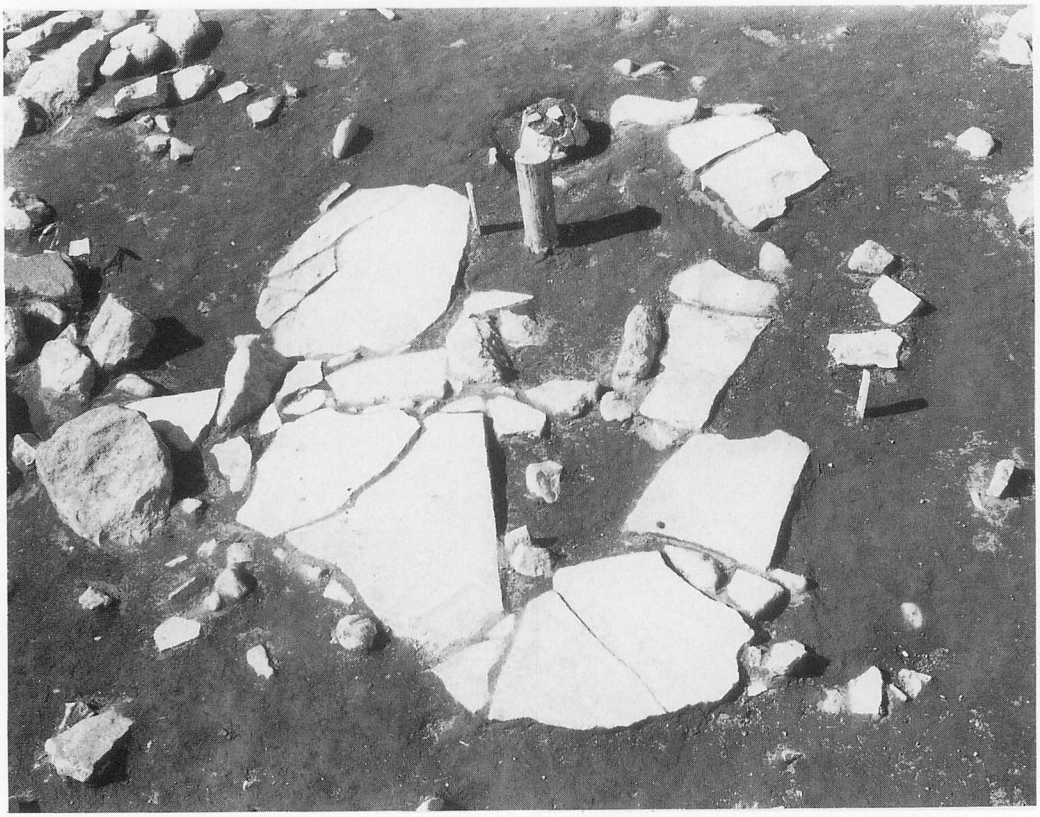
2　第29号住居址

1　第30号住居址

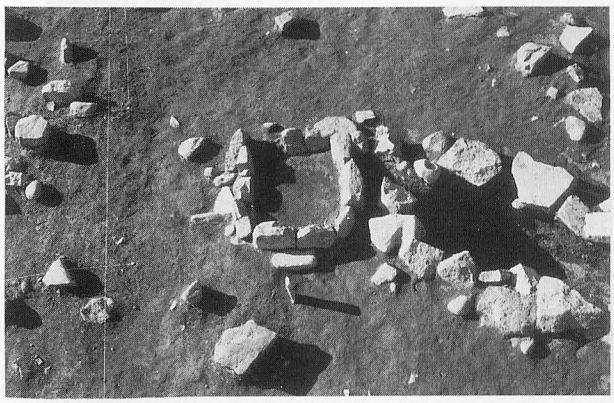


2　第31号住居址

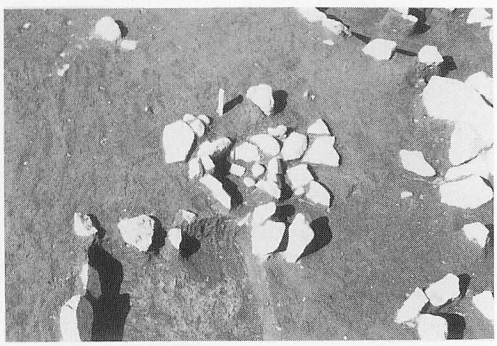
図版16



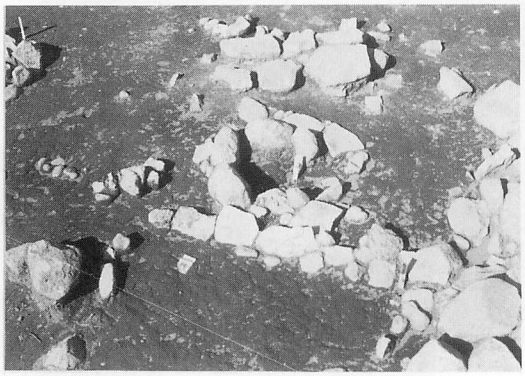
1　第32号住居址



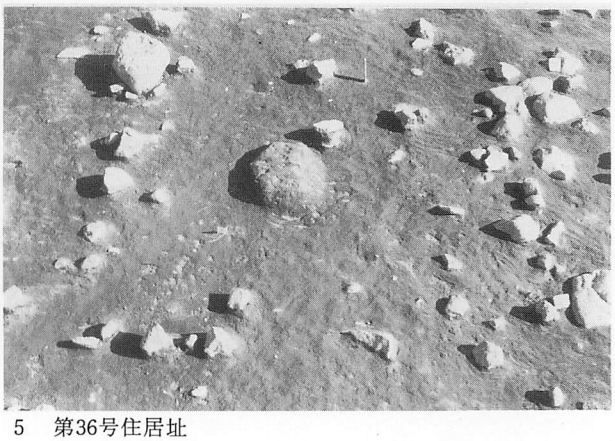
2　第33号住居址



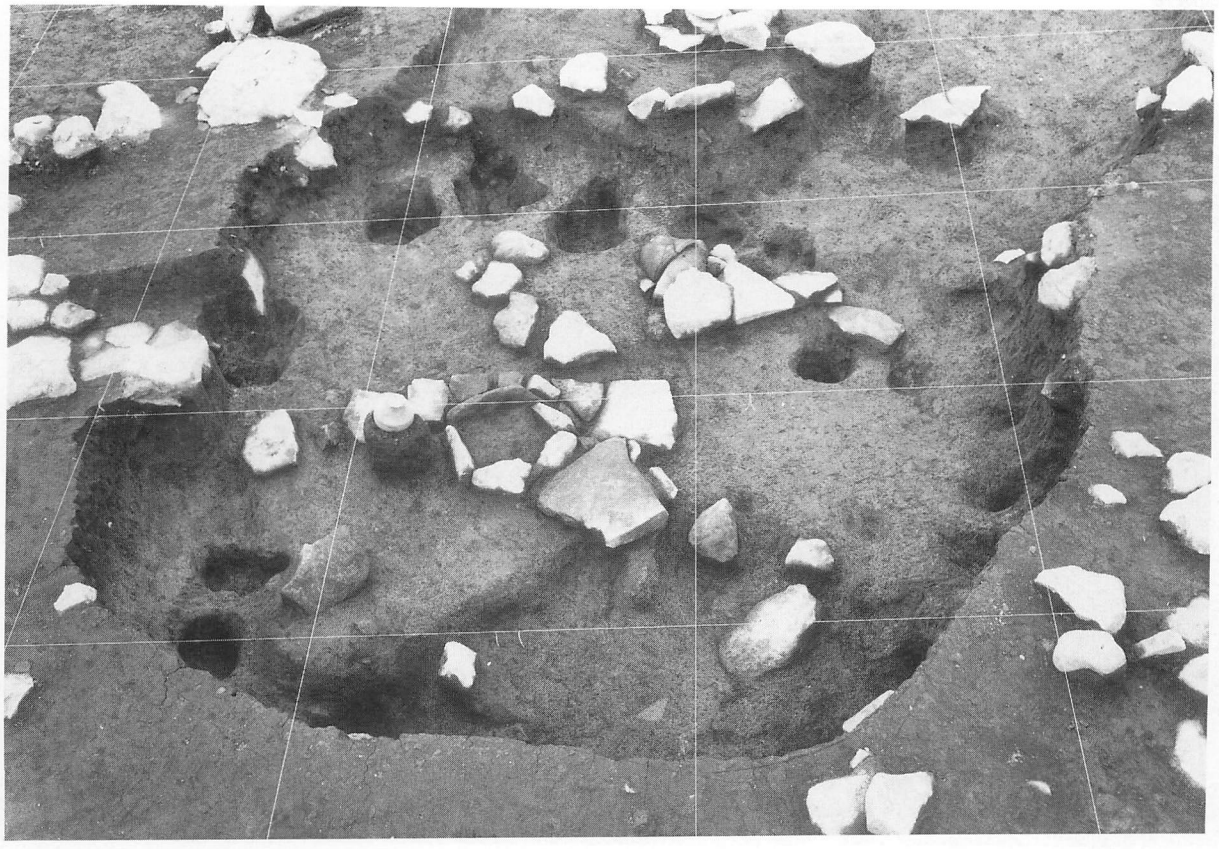
3　第34号住居址



4　第35号住居址



5　第36号住居址



1　第37号住居址

2　第37号住居址炉

3　第37号住居址土器出土状態

4　第38号住居址下部

5　第38号住居址炉

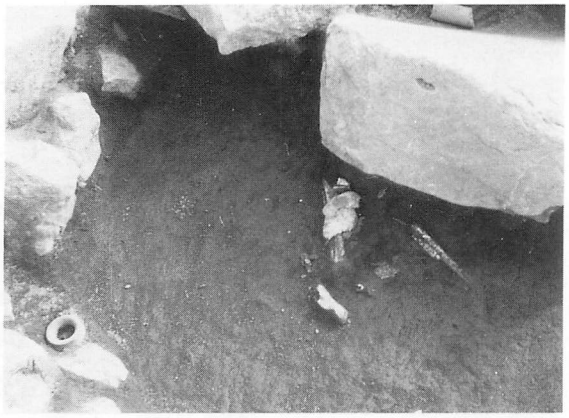
図版18

1　第１号配石全景

2　第１号配石①ブロック

3　第１号配石②ブロック

1　第１号配石②ブロック（石棺状遺構）

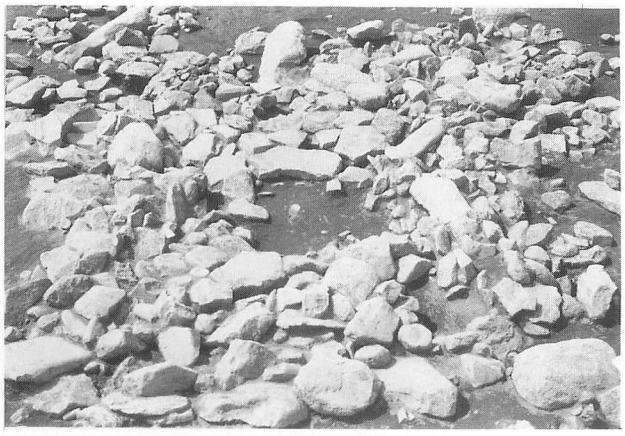


2　石棺状遺構内の人骨と耳飾り

3　第１号配石②ブロック（部分）

4　第１号配石②ブロック（部分）

5　第１号配石③ブロック全景

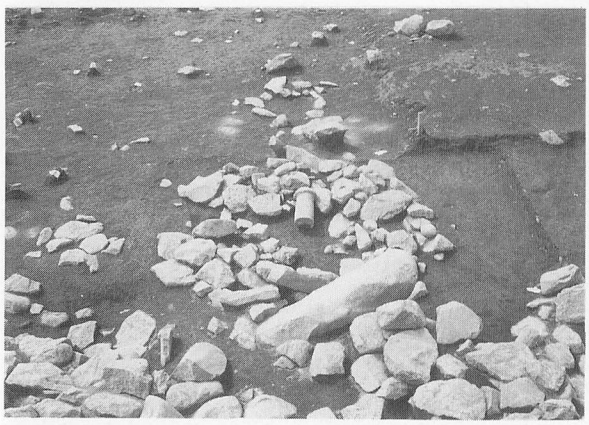


6　第１号配石③ブロック（部分）

7　第１号配石③ブロック（部分）

図版20

1　第１号配石③ブロック



2　第１号配石③ブロック（円形石組と石棒）

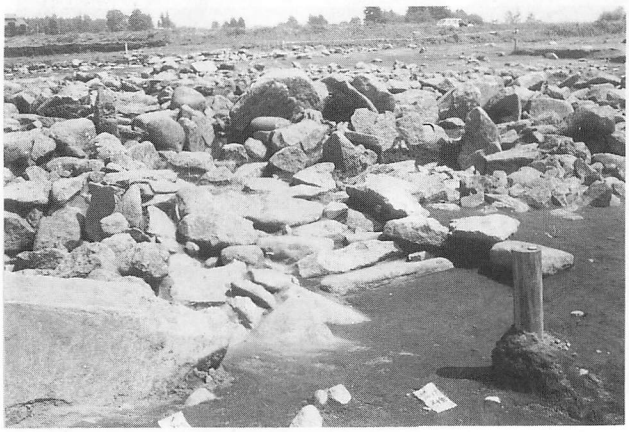
3　第１号配石③ブロック（円形石組）

4　第１号配石③ブロック（石棺状遺構）

5　第１号配石③ブロック（石棺状遺構）

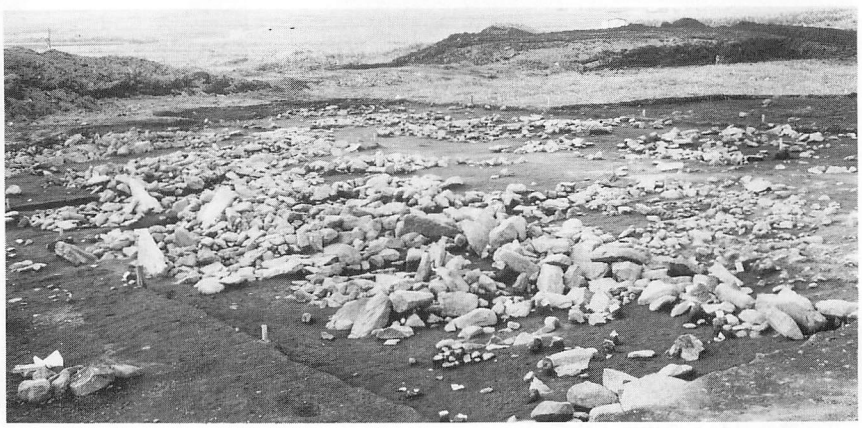
1　第１号配石③ブロック（部分）

4　第１号配石③ブロック前面の土器



2　第１号配石③ブロック（石棺状遺構）

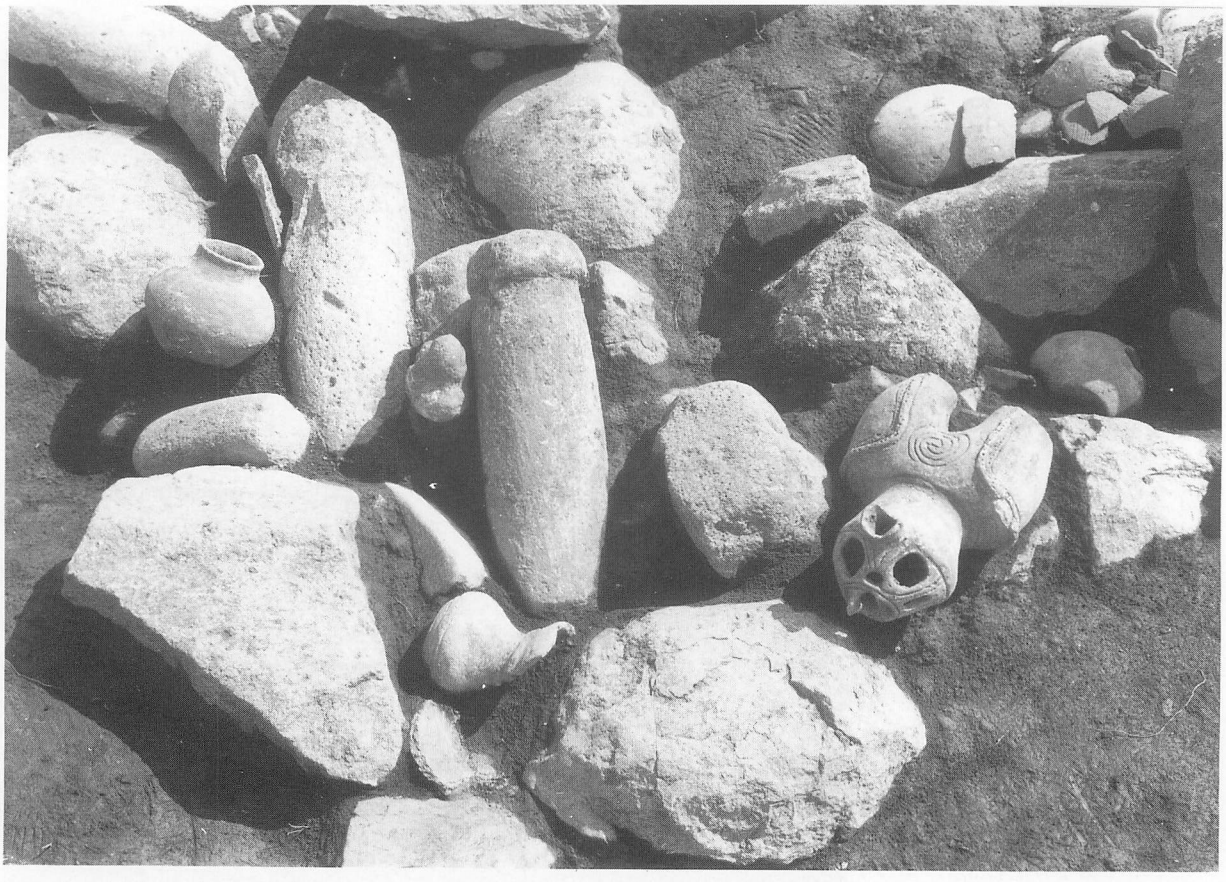
3　第１号配石③ブロック（丸石・他）



5　第１号配石③④ブロック

図版22

1　第２号配石全景

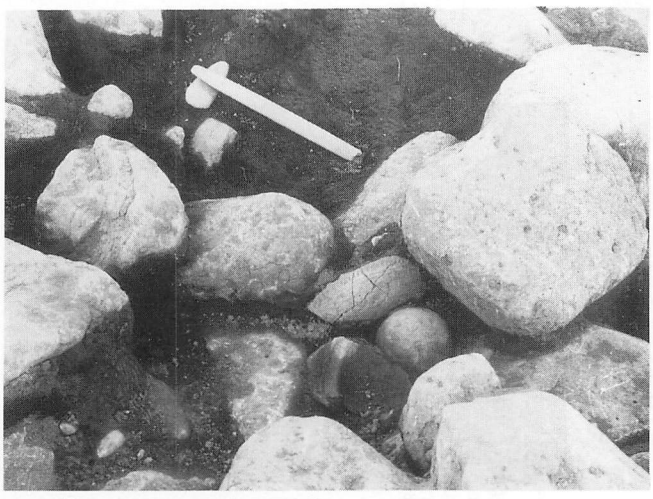


2　第２号配石遺物出土状態

1　第3号配石

2　第4号配石

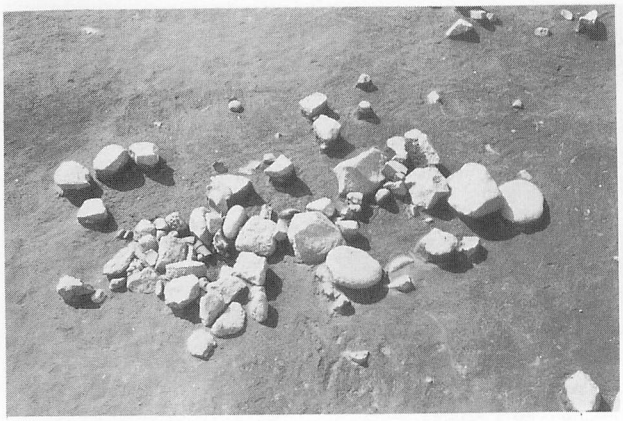
3　第5号配石全景



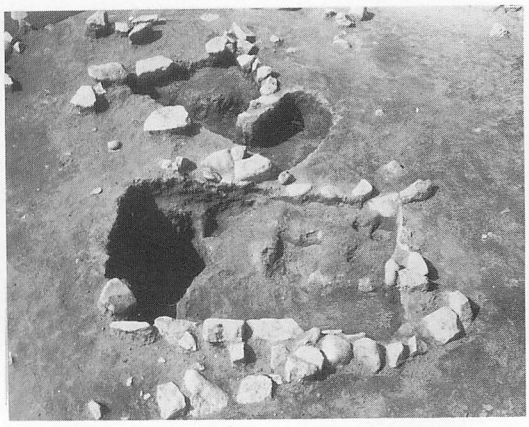
4　第5号配石の土器・石剣等

5　第5号配石(部分)

図版24



1　第1号集石



2　第1号・2号石組

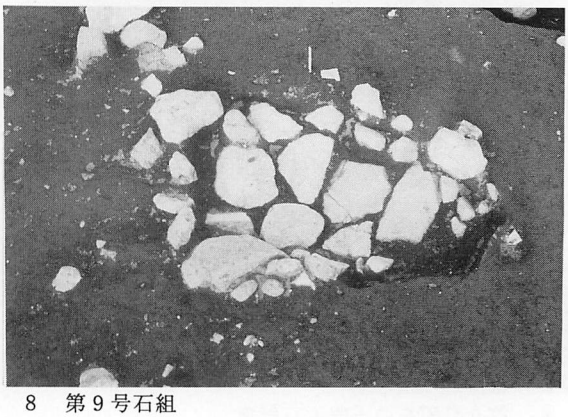
3　第3号石組

4　第4号石組

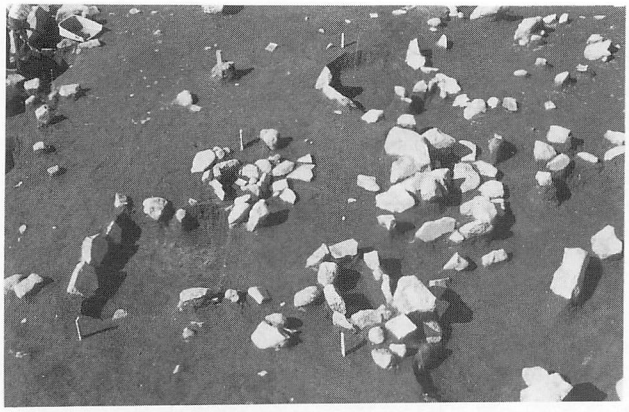
5　第5号石組

6　第6号石組

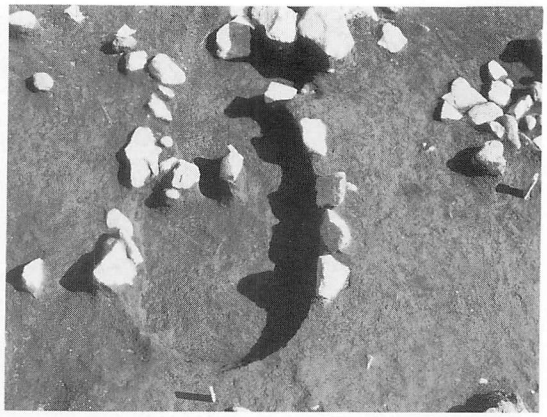
7　第7号石組



8　第9号石組

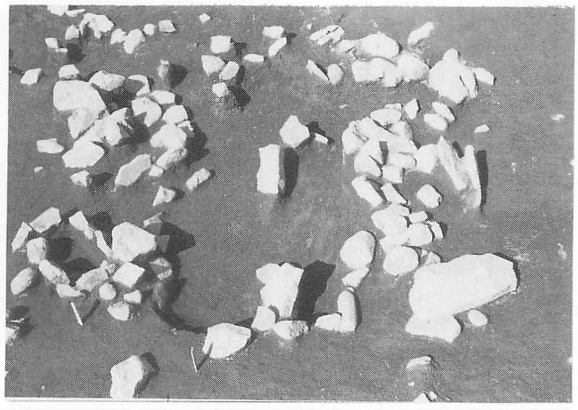


1　第10号～第13号石組

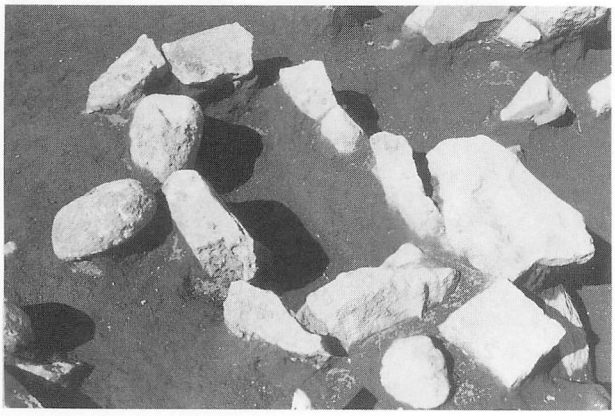


2　第10号石組

3　第11号石組



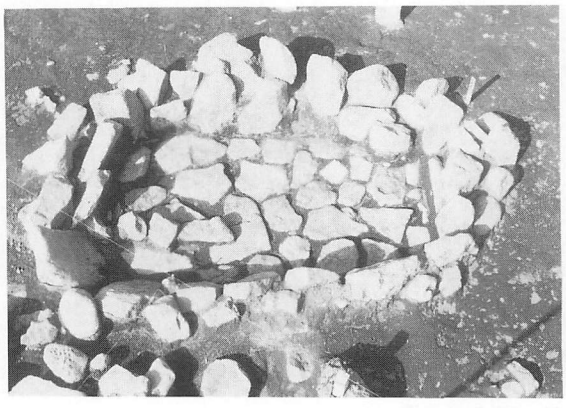
4　第12号石組



5　第13号石組

6　第14号石組

7　第15号石組



8　第16号石組

図版26

1　第16号石組・第５号配石付近

2　第１号土壙

3　第２号土壙

4　第８号土壙

5　第８号土壙遺物出土状況

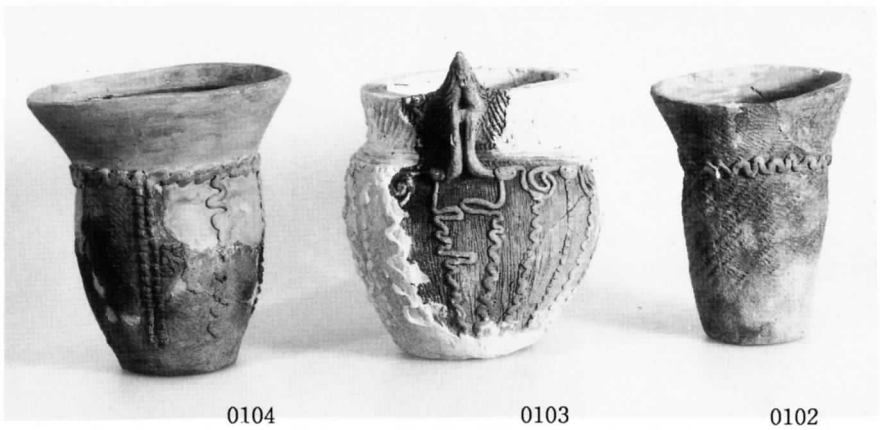
1　発掘中の第１号配石

2　実測風景

3　埋戻し中の遺跡

4　埋戻し終了

図版28



0104　0103　0102

0301

0302

0303

0405

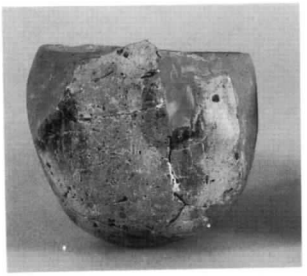
0701

0401

住居址出土土器(1)

1201

2508



2704

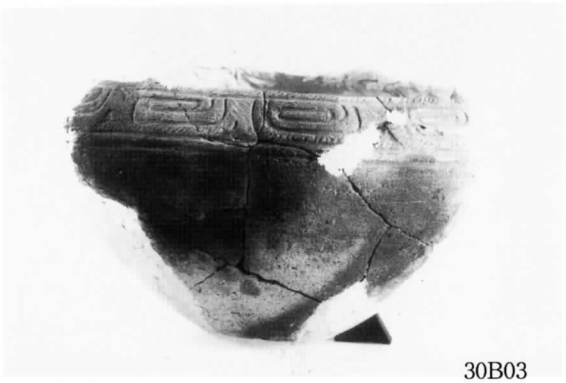
2501

2901

2602

30A03

30A07



30B03

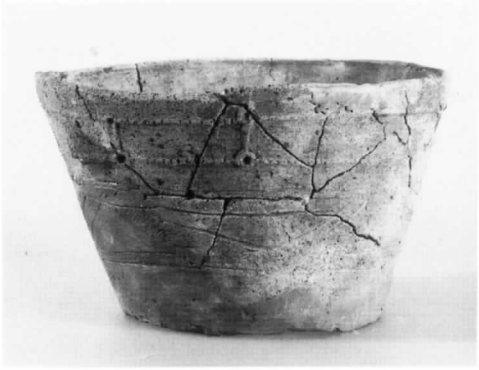
30B10

住居址出土土器(2)

図版30

1．ミニチュア土器

2．ミニチュア土器



3201

3901

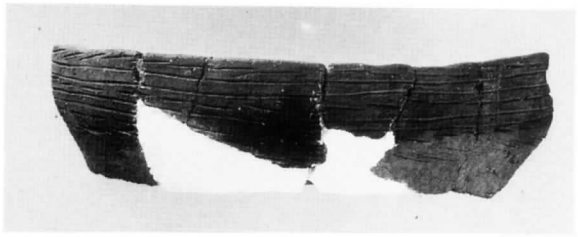
3706

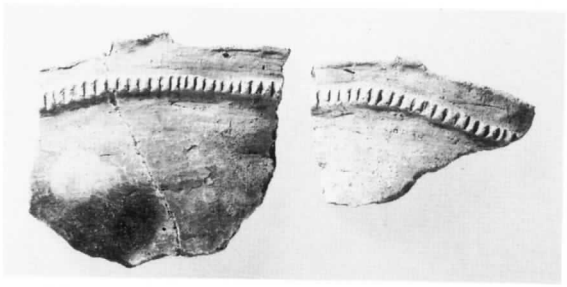
3705

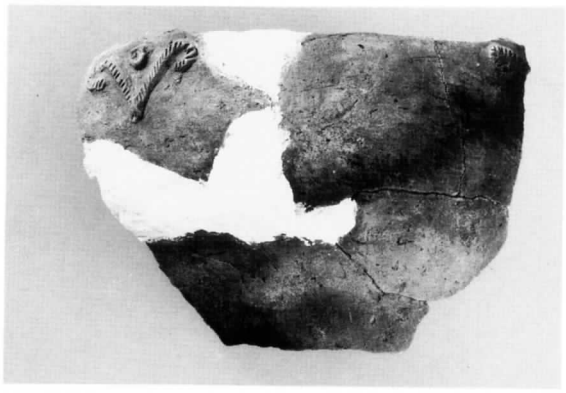
3707

3703

住居址・グリッド出土土器

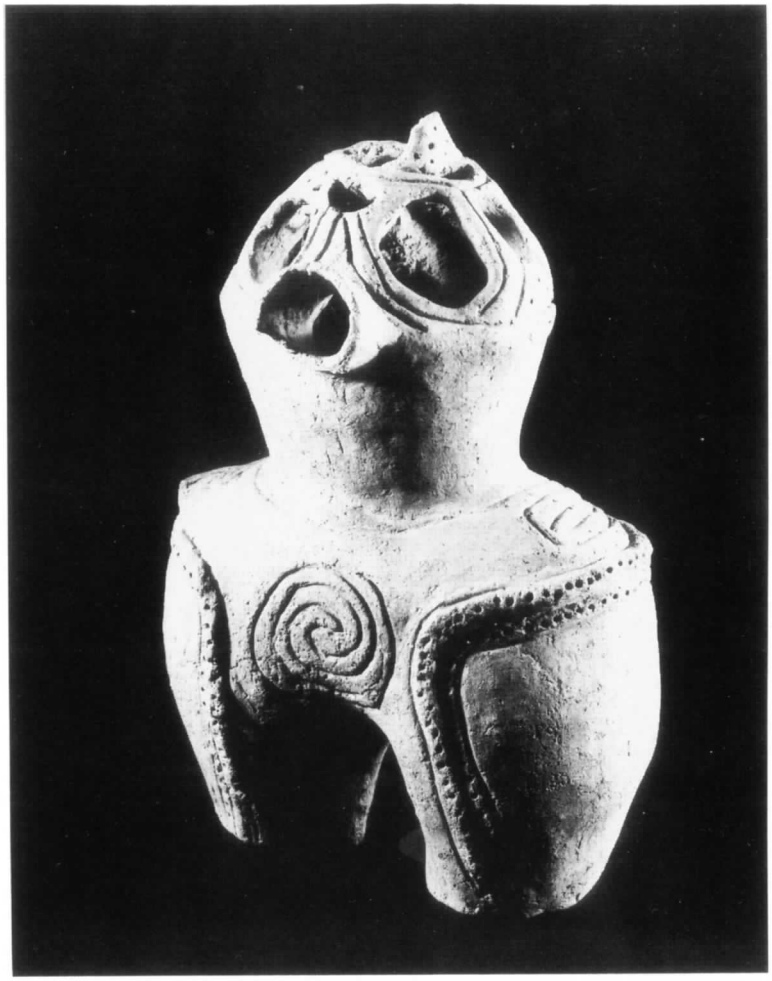


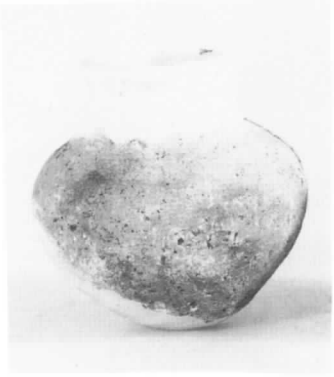




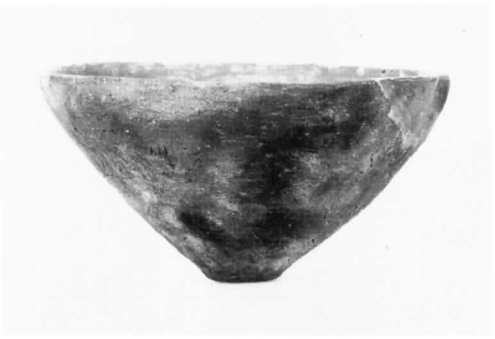
第１号配石出土土器

図版32





第２号配石出土遺物



第２号配石出土土器

図版34

1

2

3

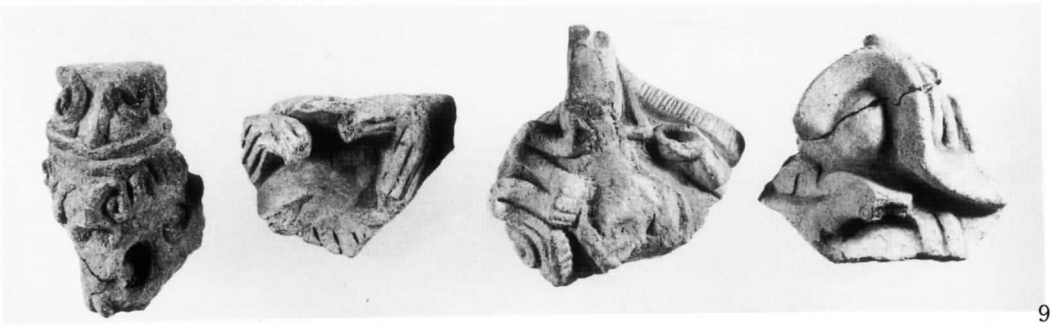
4

5

6

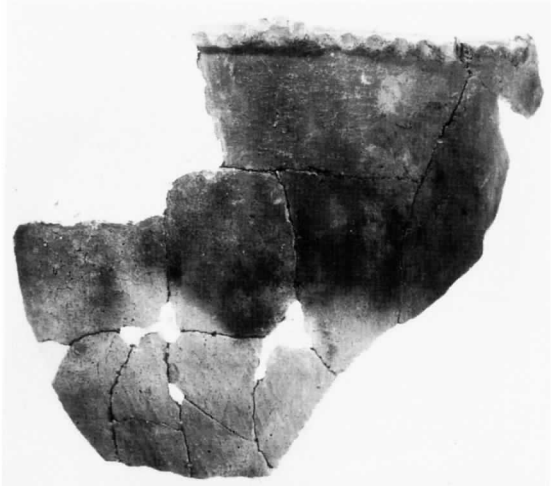
7

8



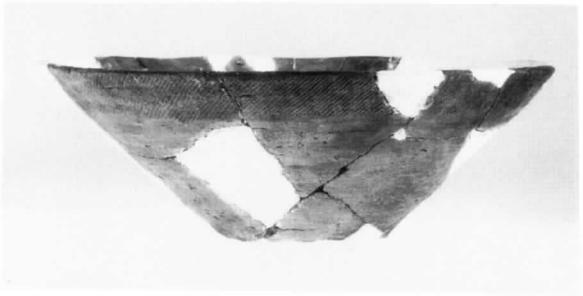
9

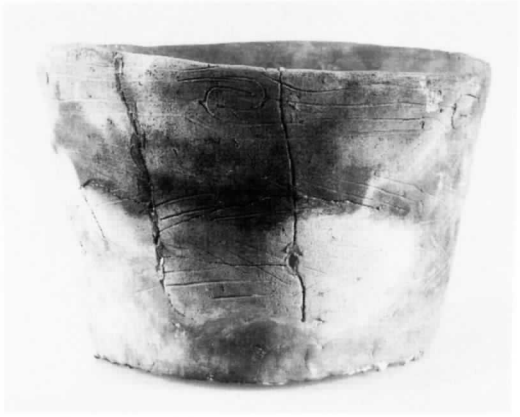
第３号配石(1)　第５号配石（２～６）　第15号石組(7)　第16号石組(8)
第１号集石(9)



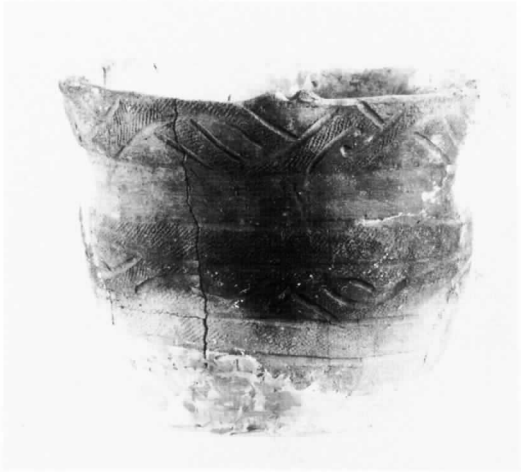
グリッド出土土器(1)

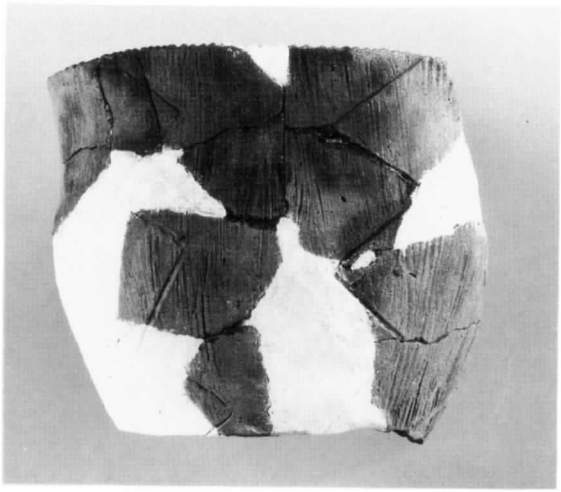
図版36





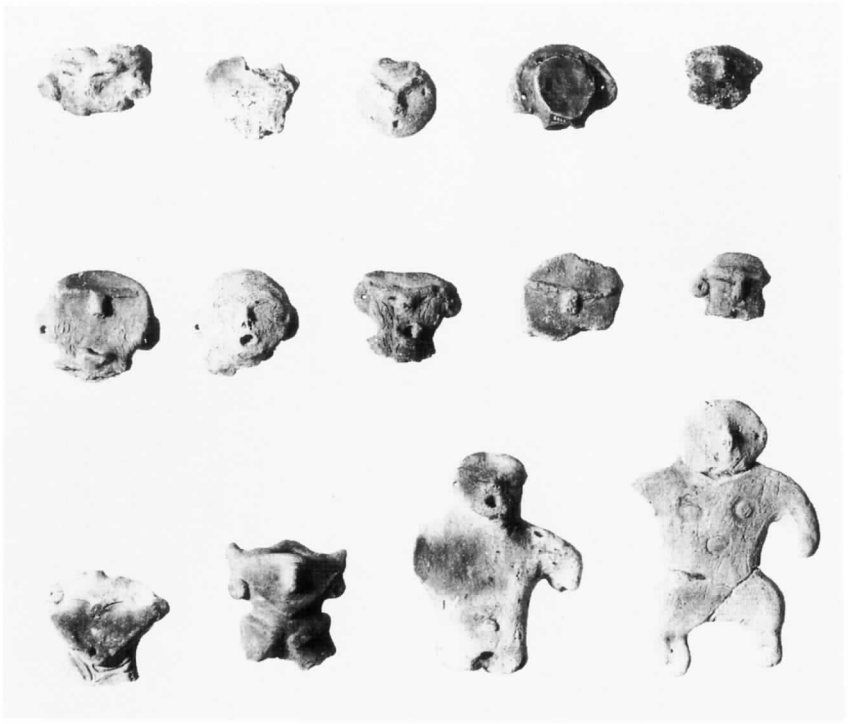
グリッド出土土器(2)





グリッド出土土器(3)

図版38

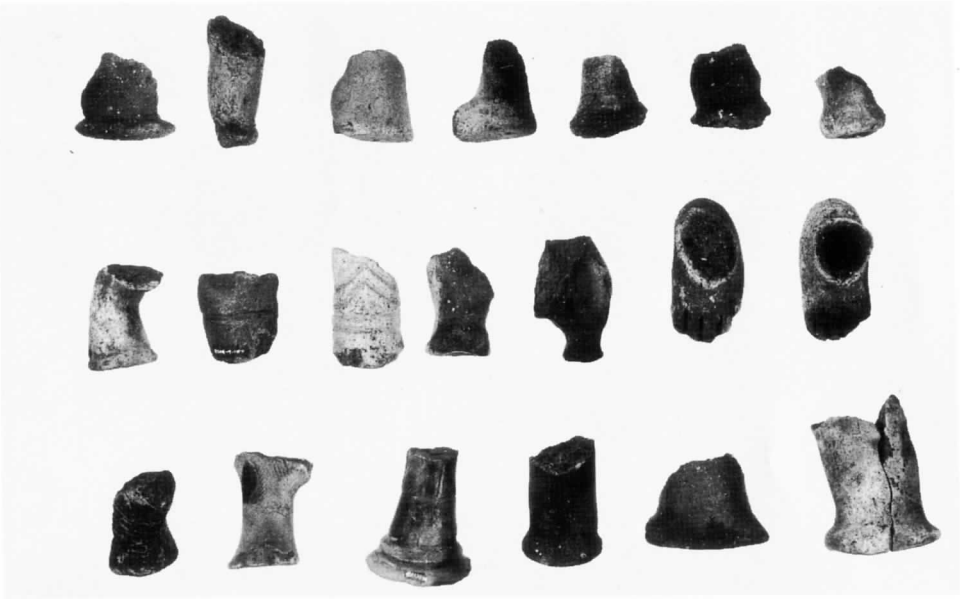


土偶(1)

土偶(2)

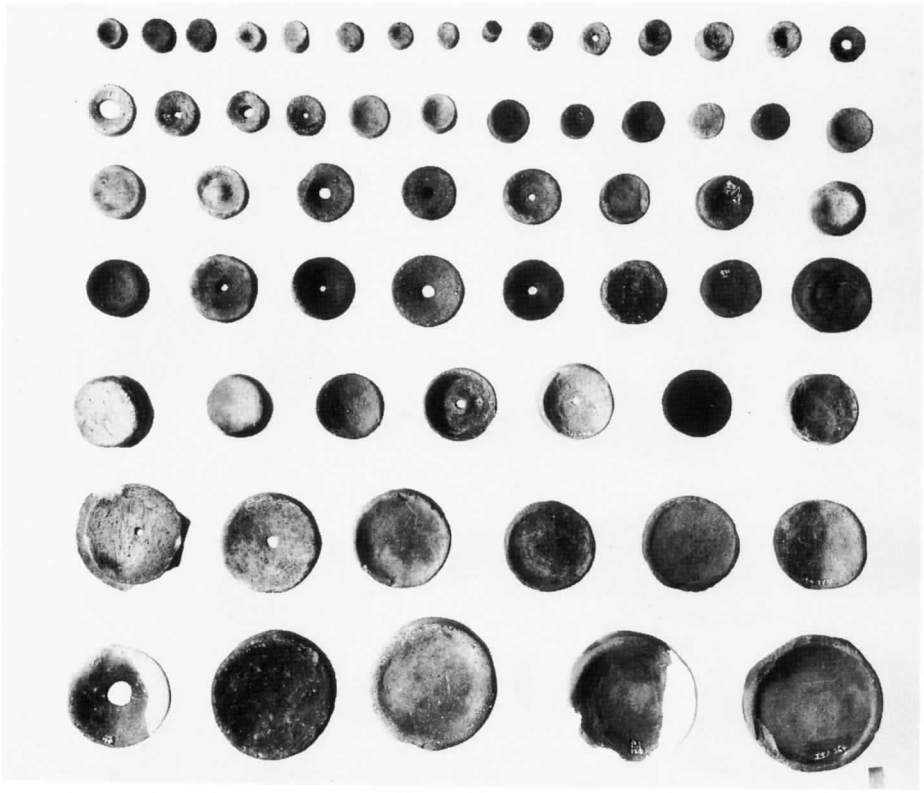
図版40

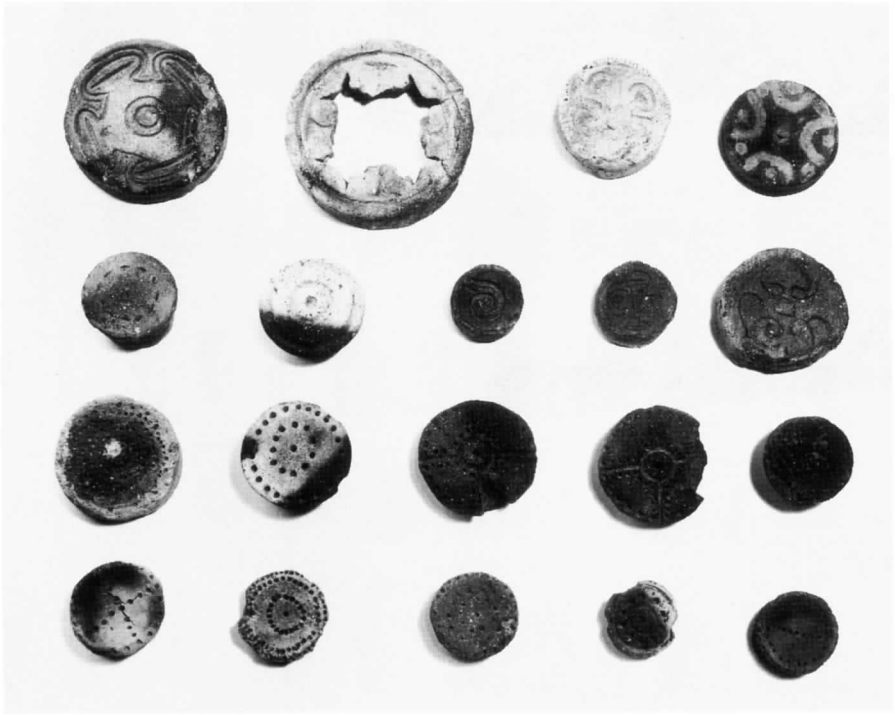
土偶(3)



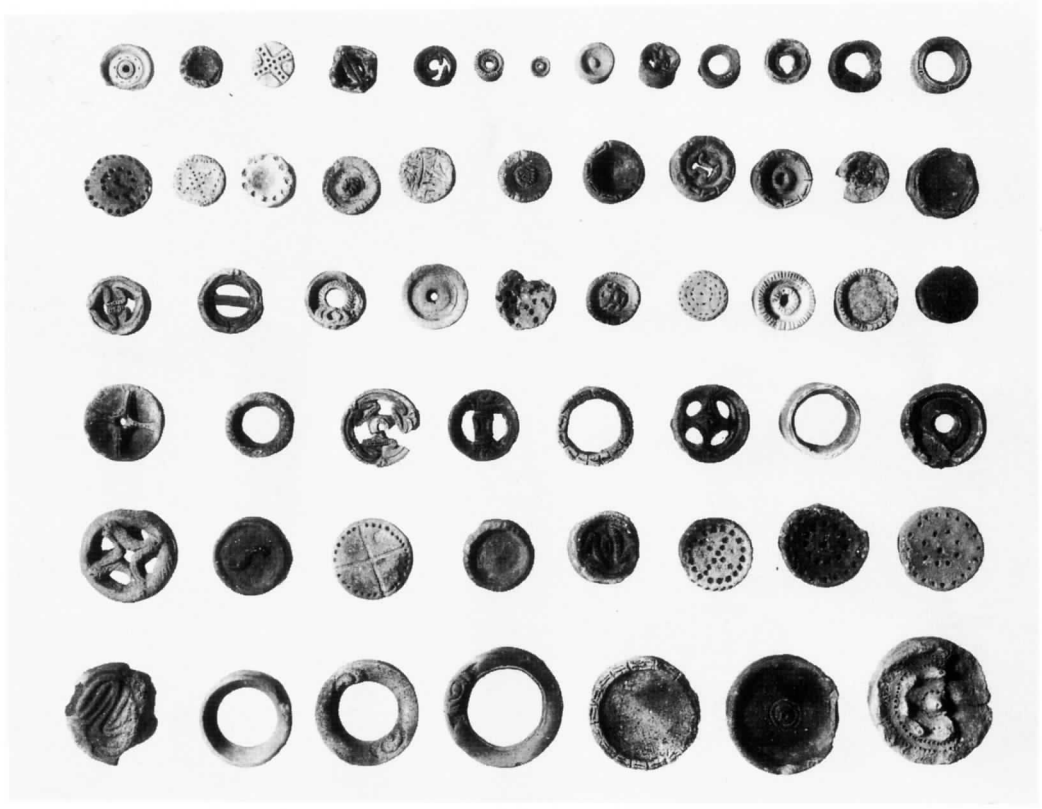
土偶(4)

図版42



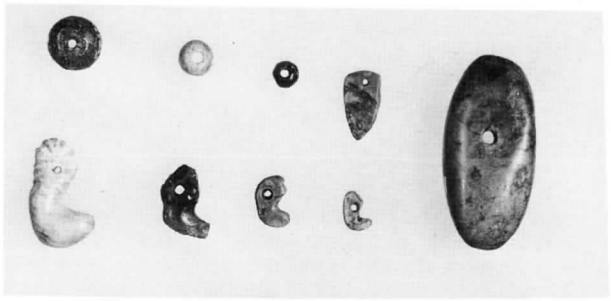


土製耳飾(1)

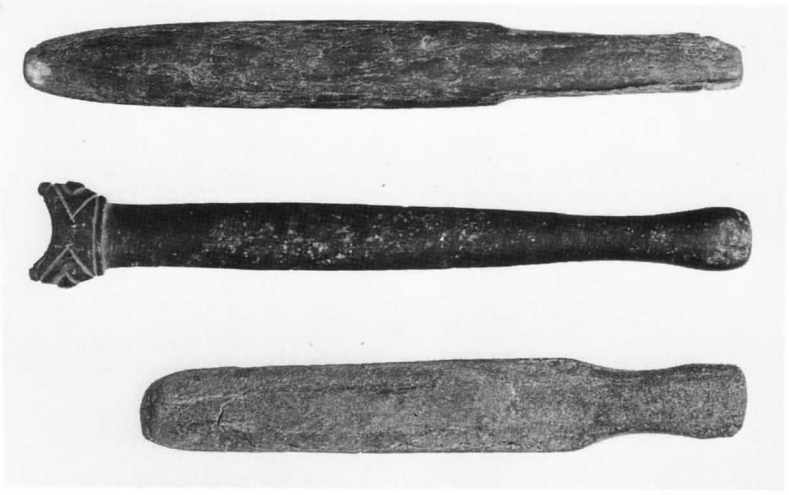


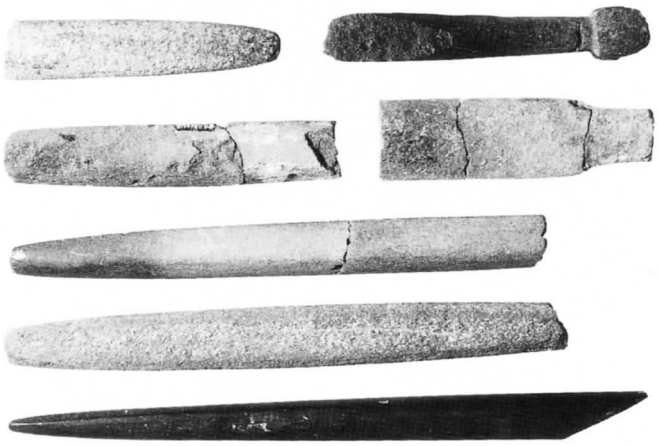
土製耳飾(2)、土製品

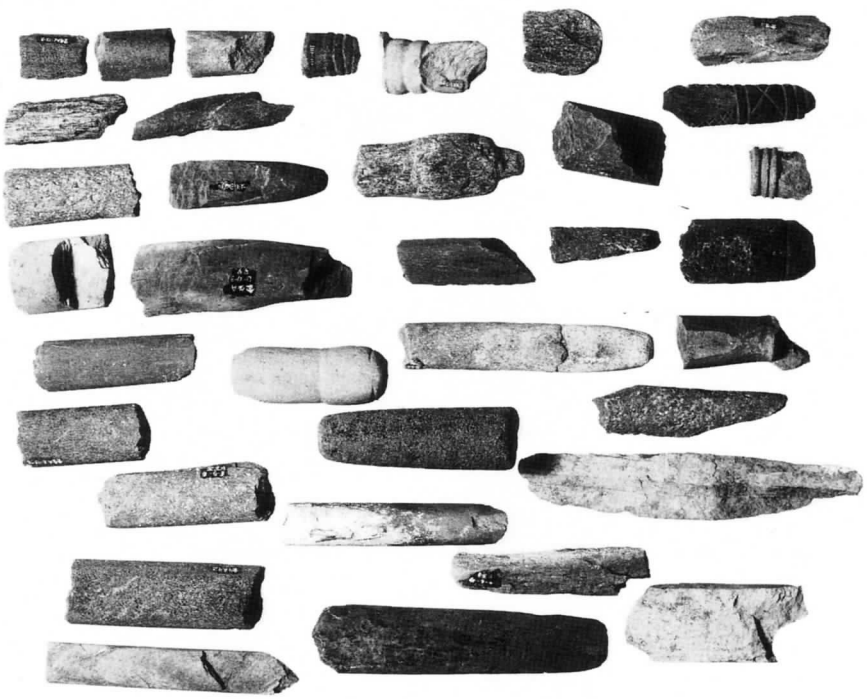
図版44



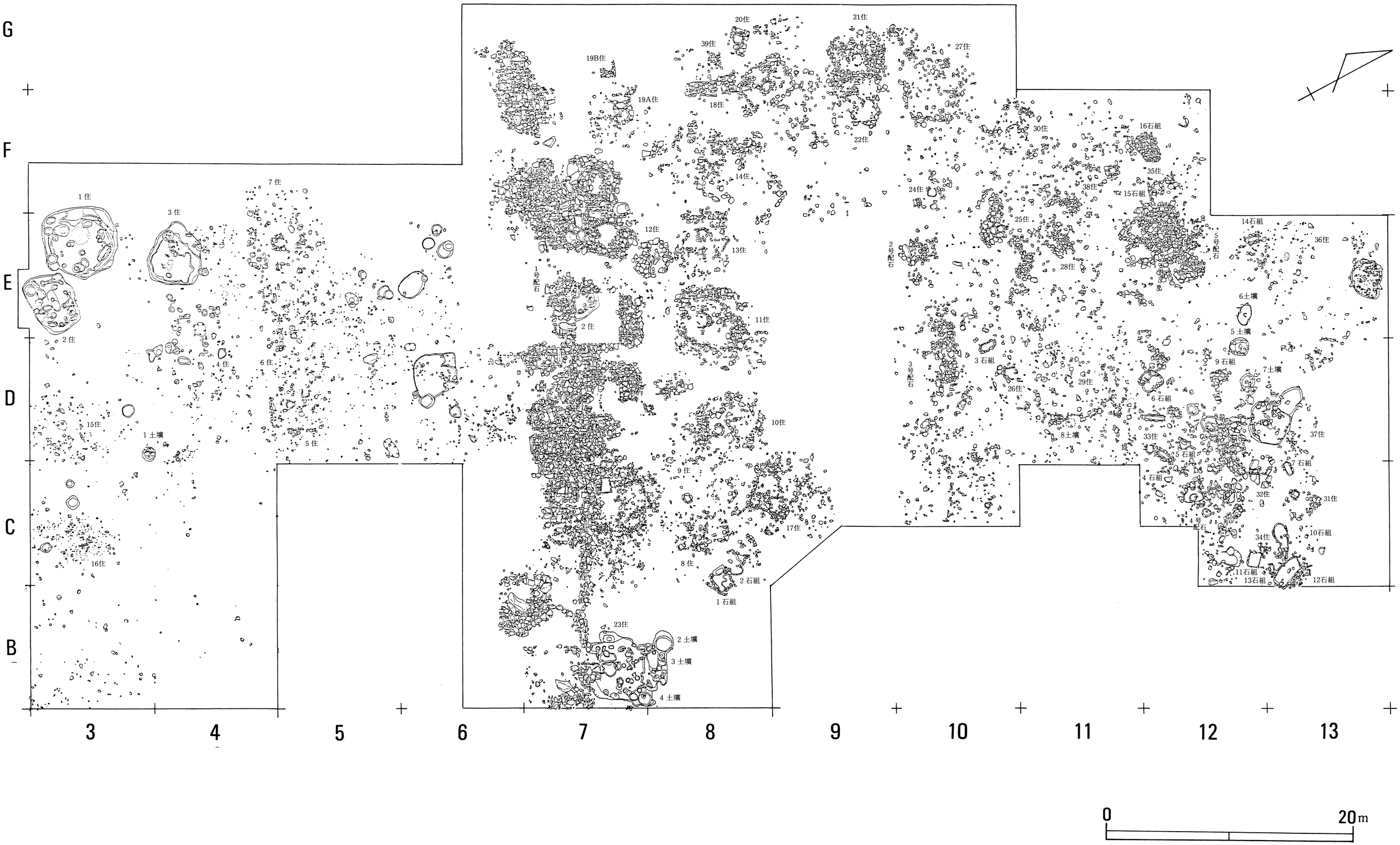
石製品(1)







石製品(2)

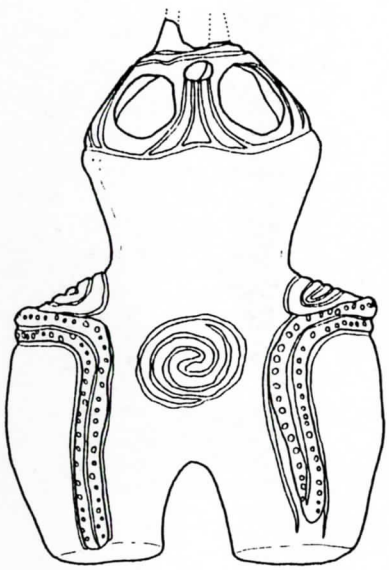


付図　金生遺跡遺構配置図（1/200）

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第41集

1989年３月25日　印　　刷
1989年３月30日　発　　行

金生（きんせい）遺跡II（縄文時代編）

発　行　山梨県教育委員会

印　刷　株式会社　少國民社